〔ぶっ‐かき（名）ぶっかきたるもの、「氷の―」。

ふつか‐きう［二日灸］（名）陰暦にて、月の二日と八日とは灸によき日なりとて、灸をすうること。

ブッ‐かく［佛閣］（名）テラ。佛堂。（堂宇、伽藍）。

〔ぶっ‐か・く（かきくくけけ）（他、か四）たゝきくだく。

（ふつ‐がく［佛學］（名）「フランス」國の語學。

ブツ‐がく［佛學］（名）佛教の學問。

〔ぶっ‐かけ（名）ぶっかけること。又、ぶっかけたるもの。

〔ぶっ‐か・ける（けけけくるくれけよ）（他、か下二）そゝぎかく。

（ふ‐つがふ［不都合］（名）㊀都合のわるきこと。㊁ふらち。ふとゞき。

ブッ‐かふ‐さう［佛甲草］（名）【植】「いはれんげ」の一名。

〔ふつか‐よひ［二日醉］（名）「ふつかゑひ」の訛。

〔ぶつか・る（らりるるれれ）［打當］（自、ら四）うちあたる。

ふつか‐ゑひ［二日醉］（名）酒の醉が翌日までも醉けざること。（宿醉）。

ブツ‐がん［佛龕］（名）佛像をいれおく厨子。

（ふっ‐き［富貴］（名）「ふうき」の音便。―まめ［富貴豆］（名）蠶豆の皮を去り、砂糖を加へて柔かく煮たるもの。

ふ‐づき［文月］（名）（「ふみづき」の略）陰暦七月の異稱。

（ぶつ‐ぎ［物議］（名）世上の評議。世間の取沙汰。（世評）。

ブツ‐き［佛器］（名）佛事用の器具。

ブッ‐きやう［佛經］（名）佛教の經文。

〔ぶっ‐きら‐ぼう［打切棒］（名）かざりなきこと。世辭愛敬のなきこと。（質朴）。

〔ぶっ‐きり［打切］（名）㊀ぶっきること。㊁「ぶっきりあめ」の略言。―あめ［打切飴］（名）七八分に切りたる堅飴。

〔ぶっ‐き・る（らりるるれれ）［打切］（他、ら四）たゝききる。

〔ぶっ‐き・れる（れれれるれるれれれよ）［打切］（自、ら下二）きずつきさく。きれさく。

廿ふづ・く（かきくくけけ）［憑］（自、か四）「ふづくむ」に同じ。

ブッ‐く［佛供］（名）佛前に供するもの。

ブック［Book］（名）書籍。帳簿。冊子。綴本。

（ぶつ‐ぐ［物具］（名）だうぐ。器具。

ブツ‐ぐ［佛具］（名）佛事の用具。佛器。

〔ぶつ‐くさ（名、副）つぶやくさまにいふ語。

廿ふづく・む（まみむむめめ）［憑］（自、ま四）うらみいかる。いきどほる。（憤）。

〔ふっ‐くり（名、副）ふくやかなるさまにいふ語。

（ぶっ‐くわ［物化］（名）天年をへて死ぬること。

ブッ‐くわ［佛果］（名）成佛の果。「―を得」。

（ぶつ‐ぐわい［物外］（名）有形物の範圍外。

（ふっ‐くわ‐すゐそ［弗化水素］（名）【化】刺戟性の臭氣を有し甚だ揮發し易き無色の液體、水に溶け易く、「ガラス」・磁器等を侵蝕する性あり、鉛を侵すことなき故に鉛瓶に畜ふ。

廿ふ‐づくゑ［文机］（名）「ふみづくゑ」の略言。

ブッ‐け［佛家］（名）「ブッか」に同じ。

（ふっ‐げう［拂曉］（名）夜のひきあけ。あかつき。（昧爽）。

ブッ‐けう［佛教］（名）「インド」の「マカダ」國の人、釋迦牟尼（淨飯王の子悉達）を教祖とし、其人格に歸依し其說法を所依としたる一種の宗教、成佛得脫を旨とするもの、おもに「アジア」の東部に行はる、宗派多し。

〔ぶつ・ける（けけけるけるけれけよ）［打附］（他、か下二）なげあつ。なげつく。

（ぶっ‐けん［物件］（名）もの。「證據―」。

（ぶっ‐けん［物權］（名）【法】財產權の一、直接に物の上に行はれ一般に對抗し得る權利、即ち占有權・所有權・地上權・永小作權・地役權・留置權・先取特權・質權・抵當權等これなり。

（ふつ‐ど［佛語］（名）「フランス」國の語。

（ぶっ‐こ［物故］（名）死ぬること。死去。

ブツ‐ご［佛語］（名）佛教の語。

ブッ‐こう［佛工］（名）佛像・佛具などを作る人。

〔ぶっ‐こぬき（名）ぶっこぬくこと。

〔ぶっ‐こぬ・く（かきくくけけ）（他、か四）㊀間を飛ばす。㊁つゞけて爲す。㊂うち拔く。

〔ぶっ‐こみ（名）ぶっこむこと。又、其物。

〔ぶっ‐こ・む（まみむむめめ）［打込］（他、ま四）㊀なげこむ。㊁まぜこむ。㊂うちこむ。㊃佩（オ）ぶ。「腰に刀を―」。

ブツ‐ざ［佛座］（名）佛像を安置する臺。

ブッ‐さう［佛葬］（名）佛教の式によりて、死人を葬（ハウム）ること。

（ぶっ‐さう［物騷］（名）世上の穩（オダ）やかならざること。世間のものさわがしきこと。「―なる世」。

ブツ‐ざう［佛像］（名）佛の色身の模形。

ブッ‐さう‐げ［佛桑花］（名）【植】錦葵科に屬する木、葉は卵形にして尖り、花は大形にして紅色を呈す、もと琉球より渡りたるものなるが故に琉球むくげの名あり。（扶桑）。

ぶっ‐さき‐ばおり［打裂羽織］（名）「せざきばおり」に同じ。

〔ぶっ‐さ・く（かきくくけけ）［打裂］（他、か四）さく。やぶる。

（ぶっ‐さん［物產］（名）其土地より產出する物品。（產物）。

ブッ‐さん［佛參］（名）佛寺へ參詣すること。テラまゐり。

ブッ‐し［佛師］（名）佛像を刻み作る職人。（佛工）。

ブッ‐し［佛子］（名）【佛】受戒入道したるもの。

ブツ‐じ［佛事］（名）佛教の祭事。法事。法會。

ブツ‐じ［佛寺］（名）テラ。寺院。

ブッシェル［Bushel］（名）「イギリス」國の穀類の容量の單位、八「ガロン」に同じ、略號に Bu. を用ふ。

ブッ‐しき［佛式］（名）佛教の方式。

（ふっ‐しき［拂拭］（名）はらひのごふこと。

（ぶっ‐しつ［物質］（名）若干の空間を占有し吾人の感官によりて認識せらるゝもの。―たいしや［物質代謝］（名）【生】吾人が攝取したる食物を消化し又は分解し若しくは排泄して生活を營むこと。―てき［物質的］（形）物事の物質上の性狀を有するにいふ。精神的の對。―の ふめつそく［物質の不滅則］次條に同じ。―の ほぞん［物質の保存］宇宙間に存在する物質の全量は常に一定にして、如何なる變化をなすとも、新に生ずるものにあらざれば更に滅するものにもあらずといふ自然の大原則。

ブッ‐しや［佛者］（名）佛門に入りたるもの。

ブッ‐しやう［佛性］（名）【佛】（い）成佛し得る性質。佛の本性。「狗子有―」。（ろ）眞如の妙理。

ブッ‐しやう［佛餉］（名）佛に奉る米飯。

（ぶっ‐じやう［物情］（名）世上の人心。ひとびとのこゝろ。「―洶々」。

ブッ‐しやう‐しよ［佛掌薯］（名）【植】「つくねいも」に同じ。

（ぶつしやう‐たんぽ［物上擔保］（名）【法】有體物を以て債權の擔保となすもの。

（ぶつしやう‐れんがふ［物上聯合］（名）【法】二個以上の國家が、條約に基きて其憲法上の機關を共同とする關係。

ブッ‐しやう‐ゑ［佛生會］（名）灌佛會（クワンブツヱ）。

ブッ‐シヤリ［佛舍利］（名）佛陀の舍利骨。

ブッしゆ‐かん［佛手柑］（名）【植】「ブしゆかん」に同じ。

ブッ‐しよ［佛書］（名）佛門の書。佛典。

（ぶっ‐しよく［物色］（名）㊀物の色。㊁其容貌をあてとして所在不明の人を詮索すること。其人相がきによりて其人をさがすこと。

ブッ‐しん［佛神］（名）ほとけとかみと。

ブッ‐しん［佛心］（名）佛のこゝろ。―しゆう［佛心宗］（名）【佛】（自己の心に佛の心を傳ふる教よりいふ）禪家の一名。

（ぶっ‐せい［物性］（名）物質の性質。

（ふっ‐せき［沸石］（名）【鑛】長石の分解によりて生じたる鑛物、無色又は淡色にして美（ウツ）しき光澤を有す、多量の水を含み熱すれば沸騰す。

ブッ‐せつ［佛說］（名）佛の說（ト）きたる所。

（ふつ‐ぜん［怫然］（名、副）心氣のふさがるさまにいふ語。

ブツ‐ぜん［佛前］（名）佛のまへ。

（ふっ‐そ［弗素］（名）鹽素及臭素等に類似せる氣體元素、化學作用甚だ激烈なり、「カルシウム」と化合し螢石となりて多量に存在す。

ブッ‐そ［佛祖］（名）釋迦牟尼。佛陀。

ブツ‐ダ［佛陀］（名）【佛】（梵語 Buddha）理を究（ハキ）め性を盡し一切諸法を覺知し、覺行圓滿なるものの「ホトケ」。智者。覺者。

（ぶっ‐たい［物體］（名）㊀物質よりなる體形。㊁知覺精神なき有形物。

（ふっ‐たう［沸湯］（名）にえゆ。

ブツ‐だう［佛道］（名）佛の說きたる道。佛教。

ブツ‐だう［佛堂］（名）テラ。寺院。

〔ぶっ‐たくり［打手繰］（名）ぶったくること。

〔ぶっ‐たく・る（らりるるれれ）［打手繰］（他、ら四）無理に引き取る。

ブッ‐タフ［佛塔］（名）寺院の塔。

〔ぶっ‐たふ・す（さしすすせせ）［打倒］（他、さ四）うちたふす。

（ぶっ‐たふ・る（れれるるるるれれよ）［打倒］（自、ら下二）つよくたふる。

ブツ‐だん［佛壇］（名）佛像又は位牌を安置する壇。

ブッ‐ち［佛智］（名）佛の圓滿なる智慧。

〔ぶっ‐ちがひ［打違］（名）うちちがひ。

〔ぶっ‐ちやう‐づら（名）愛相のなき顏色。ふくれっつら。「差配が居催促する―」。（佛頂面）。

ふつ‐つか［不束］（名）㊀廿太くして丈夫なること。㊁廿太くして下品なること。㊂ぶしつけ。無骨。―もの［不束者］（名）ぶしつけもの。無調法もの。

〔ふっ‐つり（名、副）㊀切れ斷ゆるさまにいふ語。㊁斷念するさまにいふ語。㊂斷ち切るさまにいふ語。

〔ぶっ‐つり（名、副）前條に同じ。

（ふっ‐てい［拂底］（名）（底を拂（ハラ）ひても無き義）缺乏すること。殘りなきこと。

ブッ‐てき［佛敵］（名）佛法に仇をなすもの。

ブッ‐てん［佛天］（名）佛陀。

ブッ‐てん［佛典］（名）佛法の經文。

ブツ‐でん［佛殿］（名）佛を奉祀したる殿堂。

〔ふっ‐と（副）㊀ふっつりと。たえて。㊁突然に。ふと。㊂口をつぼめて急に息を吹くさまにいふ語。

ブッ‐と［佛徒］（名）佛法を奉ずるもの。

〔ぶっ‐と（副）放屁するさまなどにいふ語。

〔ぷっ‐と（副）前條に同じ。

（ふっ‐とう［沸騰］（名）㊀わきあがること。にえたつこと。㊁起り立つこと。さわぎたつこと。―さん［沸騰散］（名）炭酸曹達と酒石酸とを水に攪（マ）ぜたる飲料、泡立ちて沸騰するもの。―て

ん[沸騰點](名) 液體の沸騰する溫度、特に、水の沸騰する溫度(寒暖計の條を見よ)。

︹**ぶっ-さば-す**[打飛](他、さ四) ㊀なげとばす。㊁とばしやる。「車を—」。㊂損益にかゝはらず賣り拂ふ。

︵**ふ-づとめ**[不勤](名) よくつとめざること。つとめを怠ること。

艹**ぶつ-に**(副) 「ぶっと」に同じ。

艹**ふつ-の-みたま**[韴靈](名) 大和國山邊郡石上神社に祭りたる神劍。

︹**ぶっ-ぱらひ**[打拂](名) ぶっぱらふこと。

︹**ぶっ-ぱら-ふ**[打拂](他、は四) おひはらふ。おひかへす。

︵**ぶっ-ぴん**[物品](名) 品なもの。もの。——**くわいけい**[物品會計](名) 物品の出納事務。

︹**ふつ-ふつ**(名、副) 斷念するさまにいふ語。斷然。

︹**ぶつ-ぶつ**(名、副) ㊀ふづくみて不平をいふさまにいふ語。㊁物のつぶだつさまにいふ語。㊂多くならび生じたる粒の稱。

︵**ぶつ-ぶつ**[物物](名) ㊀ものともの。㊁もろもろのもの。——**かうくわん**[物物交換](名) 「ぶつぶつかうくわん」(貨物交換)に同じ。

ブッ-ぽふ[佛法](名) 佛教。佛道。——**ソウ**[佛法僧](名) ㊀佛と法と僧と、即ち三寶。㊁【動】鳴禽類に屬する鳥、形は鵲に似て稍や小さし、嘴・脚赤く羽毛は一體に濃綠色なり、熱帶地方に產し、稀に夏季に至り我國の深山に來り棲む、鳴聲佛法僧といふが如しとて此名あり。(三寶鳥)。

艹**ぶつ-ま**[太馬](名) 肥(コ)えふとりたる馬。

ブツ-ま[佛間](名) 佛像又は位牌をまつりおく室。

ブツ-みやう[佛名](名) ㊀佛の名號。㊁陰曆、十二月十九日より三日間行はれし公事、淸涼殿にて僧に經を讀ませ三世の諸佛の名號を唱(トナ)へしめられしこと。

ブツ-めつ[佛滅](名) 「ブッめつにち」の略言。——**にち**[佛滅日](名) 陰陽家にて、萬事に凶なりといふ大惡日、即ち正・七月の四・十・十六・二十二・二十八日、二・八月の三・九・十五・二十一・二十七日、三・九月の二・八・十四・二十・二十六日、四・十月の一・七・十三・十九・二十五日、五・十一月の六・十二・十八・二十四・三十日、六・十二月の五・十一・十七・二十三・二十九日をいふ。

ブツ-もん[佛門](名) ほとけのみち。

フツラウ-キ[佛狼機](名) 昔時、大砲の稱。

︹**ふつ-り**(名、副) 「ふっつり」に同じ。

︹**ぶつ-り**(名、副) ㊀「ぶっつり」に同じ。㊁粒の一つ生ずるさまにいふ語。

︵**ぶつ-り**[物理](名) ㊀もの、道理。もの、性質。㊁物理學の略言。——**てき-へんくわ**[物理的變化](名) 物理學的變化に同じ。

ふ-つりあひ[不釣合](名) 釣りあはざること。

︵**ぶつり-がく**[物理學](名) 物質の性質及「エネルギー」に就て研究する科學。(究理學、理學)。——**てき-へんくわ**[物理學的變化](名) 物質の實質には何等の變化を生ぜず、單に其狀態を變化するに止まる變化。——**へんくわ**[物理學變化](名) 前條に同じ。

ブツ-りき[佛力](名) 佛の通力。

︵**ぶつ-ろん**[物論](名) 「ぶつぎ」(物議)に同じ。

艹**ふ-づゑ**[文杖](名) ふみばさみの類。

ふで[筆](名) ㊀端末に墨汁又は顏料をつけて、文字又は圖畫をかく用具、從來我國にて用ひらるゝものは、羊又は狸などの毛を以て穗となし、これを竹の管に嵌(ハ)めたるもの。㊁筆を用ひて書くこと。又、筆を用ひて書きたるもの。㊂文字。文章。——**がたつ** 達者に文章をかく。——**をいれる** 添削する。なほす。——**をくだす**[下筆] 文字又は文章をかく。——**をくはふ**[加筆] かき加ふ。——**をとる**[執筆] 筆をとりて書く。文字・文章をかく。

ふで-あらひ[筆洗](名) 筆にふくませたる墨を洗ひおとす器。ひっせん。

︵**ふ-てい**[不逞](名) 行爲のよからぬこと。

︵**ふ-てい**[不貞](名) 夫に事ふるに忠貞ならざること。婦たる節を守らざること。

︵**ふ-てい**[不定](名) さだまらざること。——**が**[不定芽](名) 【植】芽の發生の場所が一定せずして不規則なるもの。——**けい**[不定形](名) ㊀形の一定せざるもの。結晶せざるもの。㊁【數】分母分子の共に0なる分數、$ax=b$ に於て a b 共に0なるとき、$x=\frac{0}{0}$ は不定形なり。——**こん**[不定根](名) 【植】根の發生する場所が莖部或は枝部等にして一定せざるもの。——**ふう**[不定風](名) 【地】方向及強さの一定せざる風。——**りう**[不定流](名) 【地】方向の一定せざる海流。

︵**ふ-ていさい**[不體裁](名) 體裁のよろしからざること。

ふで-いれ[筆入](名) ふでづゝ。

︵**ふ-てう**[不調](名) とゝのはざること。成立せざること。

︵**ぶ-てう-はふ**[不調法](名) ㊀行きとゞかぬこと。つたなきこと。㊁あやまち。疎忽。㊂飲まぬこと。

︵**ふ-てうわ**[不調和](名) 調和せぬこと。

ふで-がき[筆柹](名) 【植】柹の一種、果實は長さ二寸許にして、さき筆頭の如し。(牛心柹)。

ふで-かけ[筆懸](名) 筆をもたせ掛けて置く具、(筆架)。

ふで-がしら[筆頭](名) ㊀筆のさき。㊁列記する名前の第一。連名中の首座。ひっとう。

︵**ふ-てき**[不敵](名) 大膽にして物事におそれぬこと。眼中に敵なきこと。「大膽—」。

︹**ふ-でき**[不出來](名) 出來のよからぬこと。

︵**ふ-てきたう**[不適當](名) つりあはぬこと。又、あてはまらぬこと。

ふてき-もの[不敵者](名) 不敵なるもの。大膽なるもの。

ふ-てぎは[不手際](名) 手際のつたなきこと。

︹**ふて-くされ**[不貞腐](名) ㊀不平を起して命に從はざること。㊁不平のあまりにやけを起すこと。

艹**ふて-こと**[不敵事](名) 不敵なる事。

ふで-さき[筆先](名) ㊀筆のさき。㊁筆のあつかひ。「—て誤魔化す」。「筆句。

ふで-し[筆師](名) 筆をつくることを業とする人。

ふで-たて[筆立](名) ㊀筆を用ひて書きはじむること。㊁筆をさして立ておく具。(筆筒)。

ふで-づか[筆柄](名) 筆の軸。筆管。

ふで-づか[筆塚](名) 敗筆を地に埋(ウヅ)め其上に塚を築きて其功に報ゆるもの。(退筆塚)。

ふで-づかひ[筆遣](名) ㊀筆を使用すること。㊁書きたる文字の趣。筆蹟。(筆意。運筆)。

ふで-づつ[筆筒](名) ふでを入れおくための筒。

艹**ふで-つ-むし**[筆津蟲](名) 【動】「きりぎりす」の異稱。

︹**ふて-ね**[不敵寐](名) ふてくされになりて寐(ネ)ること。

ふで-の-あと[筆跡](名) 書きたる文字。

ふで-の-うみ[筆海](名) 硯の異稱。

︹**ふて-のみ**[不敵吞](名) ふてくされになりて酒を吞むこと。

ふで-ばうふう[筆防風](名) 【植】「いぶきばうふう」の一名。

︵**ふ-てふ**[譜牒](名) 系圖。

︵**ふ-てふ**[符牒](名) 「ふちやう」(符帳)に同じ。

ふで-まき[筆卷](名) 使用したる筆をまきつゝみてをさめおく小さきすだれ。

ふ-てまはし[不手廻](名) ㊀手まはしの出來にくきこと。㊁家政の不如意となること。

ふで-や[筆屋](名) 筆をつくり又は賣ることを業とする人、又は家。

︹**ふで-まめ**[筆忠實](名) 懶(モノウ)がらずして、屢、他人に文通し又は著作すること。

艹**ふで-ゆひ**[筆結](名) 筆をつくることを業とする人、又は家。

︹**ふ-てる**(自、た下二) ㊀不平を起して命に從はず。㊁不平にてやけをおこす。

ふで-わけ[筆別](名) 個々別々にわけて書き志るすこと。

︵**ふ-てん**[普天](名) 天の地上をおほふかぎり。「—の下」。

︵**ぶ-でん**[武傳](名) 昔時、武家の傳奏をつかさどりし公卿。

︵**ふ-でんき**[負電氣](名) 【理】陰電氣に同じ。

艹**ふ-と**[餢飳](名) 油にて煮(ニ)たる餅。(伏鬼)。

フト[浮圖、浮屠](名) ㊀(梵語 Buddha)佛陀に同じ。㊁僧侶。㊂寺又は塔。

︵**ふ-と**[不圖](副) ㊀はからず。おもひがけず。不意に。㊁たちまちに。ちよっとに。

ふと—[太](接頭) 或語に冠して、たふとき意を表する語。

ぶと[蟆子](名) 【動】雙翅類中蚊類に屬する昆蟲、形蚊に似て長さ一分許、全身黑色にして透明なる翅を有す、脛節は白色なり、よく人を螫(サ)す。

︹**ふとい-やつ**[太奴](名) 惡事をたくらむ奴(ヤツ)。又、ふらちなる奴。

︵**ふ-とう**[不等](名) ひとしからざること。

︵**ふ-どう**[不同](名) ㊀おなじからざること。ことなること。㊁そろはざること。ふぞろひ。

︵**ふ-どう**[不動](名) ㊀動かざること。うつらざること。「直立—」。㊁靜かにして外物に動ぜざること。正しくして精神の亂れざること。「寂然—」。㊂【佛】明王の一、顏色獰惡にして右手に降魔の劍を執り左手に縛の繩を持ち、背に火焰を負ふ像のもの、よく魑魅煩惱を降伏する威德ありといふ。(大聖威怒王)。

︵**ふ-どうい**[不同意](名) 同意せぬこと。意見をことにすること。不贊成。

︵**ふとう-がう**[不等號](名) 【數】二つの數が相等しからざることを表はすための符號、即ち > 及 < をいふ、$a>b$ は a が b より大なることを表はし、$a<b$ は a が b より小なることを表はす。

︵**ふ-どうさん**[不動產](名) 【法】土地及其定著物。動產の對。——**しちけん**[不動產質權] 【法】(名) 質權の條を見よ。

︵**ふとう-しき**[不等式](名) 【數】不等號を用ひて表はしたる式、例へば $a^2+b^2>2ab$ 又は $8^3<520$ の如し。

︵**ふとう-すゐそう**[不透水層](名) 【地】水を透(トホ)さゞる地層、即ち粘土の如きこれなり。

︵**ふどう-そん**[不動尊](名) 【佛】不動(三)に同じ。

︵**ふどう-ち**[不動智](名) 外物のために心動かされず明かにして正しき智識。

︵**ふ-とうにふ-せい**[不透入性](名) 【理】「ふかにふせい」(不可入性)に同じ。

(ふ-とうめい[不透明](名) 透明ならざること。すきとほらざること。

ふと-おり[太織](名) 粗末なる絹絲にて織りたる絹布。ふとり。ふとぎぬ。(紬)。――つむぎ[太織紬](名) ふとおりの紬。

廿ふと-ぎぬ[太絹](名) ふとおり。

(ふ-とく[婦德](名) 婦人たるものゝ德義。

(ふ-とく[不德](名) ㊀德にそむくこと。㊁德の足らざること。

(ぶ-とく[武德](名) 武道の德。又、武事の德。

(ふ-とくい[不得意](名) 得意ならざること。

(ふとく-えうりやう（ヨウリヨウ）[不得要領](名) 要領を得ざること。主旨のつらぬかざること。わからぬこと。

(ふ-とくぎ[不德義](名) 德義にたがふこと。

(ふ-とくさく[不得策](名) 利益にならぬこと。ためにならぬこと。

(ふ-とくてい[不特定](名) 特にそれと指定せざること。――ぶつ[不特定物](名) たゞ其種類・品等・數量等を擧げたるのみにて、特にそれと指定せざる物。

(ふ-とくしん[不得心](名) 得心せざること。氣にいらぬこと。

(ぶとく-でん[武德殿](名) 内裏の騎射・競馬などを天覽ありし御殿。

(ぶとく-もん[武德門](名) 内裏の十二門の一。

ふところ[懷](名) ㊀着合はせたる衣服の襟(ヱリ)と胸との間。㊁物の中に圍まれたる所。「山の―」。㊂おもひ。かんがへ。㊃内部。内幕。「敵の―に飛びこみて祕密を探る」。㊄かねまはり。所持金。

〔―あひ（イア）[懷合](名) ㊀おもふ次第。かんがへ。㊁かねまはりの都合。所持金の樣子。――がたな[懷刀](名) ㊀懷中に挾ふる小さき守刀、

㊁常に祕密の計畫にあづかる近臣などの稱。――がみ[懷紙](名) たゝうがみ。はながみ。くわいし。――ご[懷子](名) ㊀祕藏にする子。㊁懷にゐる子。――ぜに[懷錢](名) 懷中してある小使錢。――で[懷手](名) ㊀手を懷に差入るゝこと。㊁何事をもなさずしてゐること。(袖手)。

ふと-ざを[太棹](名) 義太夫節などに用ふる三味線、棹の普通のものより太きもの。

ふと-し（くしきけれ）[太](形、二) ㊀かこみ大いなり。かさ大いなり。㊁肥えたり。肉多し。「ふとく逞しき馬」。㊂大膽なり。横着なり。

ふど-し[褌](名) (踏通の約言)「ふんどし」に同じ。

廿ふと-しく（かきくけ）[太敷](他、か四) ㊀いかめしく設け建つ。㊁ゆたかにしろしめす。

廿ふと-しる（らりるれ）[太知](他、ら四) 前條(二)に同じ。

廿ふと-だすき[太襷](名) たすきの美稱。

廿ふと-たまぐし[太玉串](名) 玉串の美稱。

〔ふとっ-ちょ(名) よく肥えたる婦人。(東京地方の方言)。

〔ふとっ-ぱら[太腹](名) 度量の大なること。膽のふときこと。(東京地方の方言)。

ふ-とどき[不屆](名) ㊀物事の行き屆かざること。注意の足らぬこと。㊁道ならぬ事をなすこと。法にそむきたる行あること。

廿ふと-どの[文殿](名) 書籍を納れ置く所。ふみどの。文庫。

ふと-ばら[太腹](名) ㊀腹のふくれてある所。㊁ふとっぱら。

廿ふと-まち[太町](名) 次條に同じ。

廿ふと-まに[太占](名) 上古、鹿の肩骨を燒きて吉凶をうらなひしものといふ。

ふと-まへ（エマ）[太前](名) ひろまへ。おほまへ。

廿ふと-むぎ[太麥](名) 【植】「おほむぎ」に同じ。

ふと-もの[太物](名) 衣服にする布帛。たんもの。ごふく。――だな[太物店](名) たんものや。ごふくや。

ふと-もも[太股](名) 股の内部の脹(フク)らみたる處。(髀)。

ふと-やか[太](名) ふときこと。

ふと-り[太織](名) 「ふとおり」の約言。

〔ふと-り[太](名) ふとること。「―が早い」。

〔ふと-る（らりるれ）[太](自、ら四) ㊀肉肥えて太くなる。にくづく。㊁成長す。

ふと-ゐ[太藺](名) 【植】藺の一種、沼澤に叢生し、長さ丈餘に達す、夏の頃、褐色の花開く、席を編む料に供せらる。

(フートン[蒲團](名) (字の唐音) ㊀がまの葉にて編みたる圓座。㊁布帛の中に綿又は「パンヤ」などを入れて仕立て、坐し又は臥る下に敷くもの。「座―」。「敷―」。(布團)。㊂夜着又はふすまの稱にもいふ。

ふな[鮒](名) 【動】喉鰾類中鯉科に屬する魚、形は鯉に似、背部は淡黑色にして隆起すれども狹し、腹部は暗白色なり、體長大なるは二尺に達し、淡水に產す。

廿ふな[船](名) 「ふね」に同じ。

ぶな[橅](名) 【植】山毛櫸科に屬する喬木、葉は卵形にして尖り下面に多數の毛を有す、樹皮黑色なり、木材は種々の用に供せられ、果實もまた食用に供せらる。(山毛櫸)。

ふな-あし[船脚](名) ㊀船の進行。㊁船の底の水に入る程合。(吃水)。

ふな-あそび[船遊](名) 船に乘りて遊ぶこと。

廿ふな-あまり[船餘](名) 船の岸につきたるとき、反動にて岸より離るゝこと。

ふな-あらため[船改](名) 官より船のとりしらべをなすこと。

(ふ-ない[府內](名) 府のうち。府の區域內。

ふな-いうれい[船幽靈](名) 水死したるものゝ幽靈、夜間、海上にあらはるといふ。

ふな-いくさ[船軍](名) ㊀兵船の軍兵。水軍。㊁水上の戰爭。水戰。

ふな-いた[船板](名) 船中のあげいた。

ふな-いたべい[船板屏](名) 和船をこはしたる材にてつくりたる屏。

ふな-うた[船歌](名) 船頭のうたふ歌。(櫂歌、漁歌)。

ふな-おくり[船送](名) 船にのせておくること。

ふな-おろし[船卸](名) 新造の船を始めて水上に浮ぶること。(進水)。

ふな-がかり[船繫](名) 航行する船の泊(ト)りやすむこと。又、其泊る處。

廿ふな-がく[船樂](名) 船中にて奏する音樂。

ふな-かざり[船飾](名) ㊀船の裝飾。㊁出帆の用意。(艤裝)。

ふな-かた[船方](名) ふなのり。かこ。せんどう。

ふな-かんさつ[船鑑札](名) 船の鑑札。

ふな-ぎ[船木](名) 船をつくる用材。

ふな-ぎほひ（オイキ）[船競](名) 船をこぎはしらす競爭。

廿ふな-ぎみ[船君](名) 船中の主領。

ふな-ぐ[船具](名) 船に用ふる一切の器具。

ふな-ぐら[船藏](名) 水邊に設けおきて船を納れ置く舍。(船庫)。

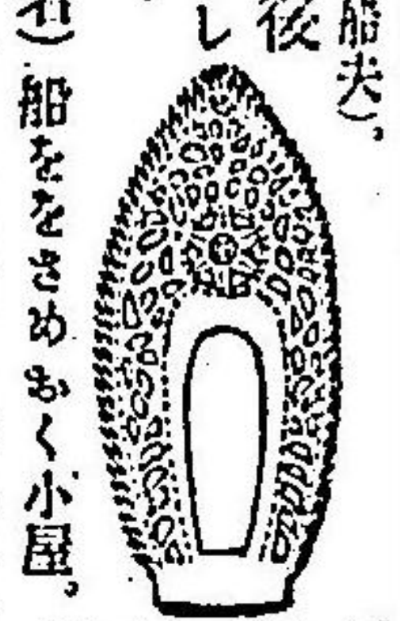
ふな-くらべ[船競](名) 「ふなきほひ」に同じ。

ふな-くわじ[船火事](名) 船中の火事。

ふな-げんくわ[船喧嘩](名) 船乘(ノリ)が他の船のりと、船にてなすけんくわ。

ふな-こ[船子](名) 船に乘込みて船をあやつるもの。船頭の部下。ふなびと。ふなのり。ふなかた。せんどう、かこ、水手、(船手、船夫)。

ふな-ごくわう（タウ）[船後光](名) 船を竪(タテ)にしたるが如きさまの後光。



〔ふなごくわう〕

ふな-ごや[船小屋](名) 船ををさめおく小屋。

ふな-じるし[船標](名) 船に立つる旗又はふきながしの類。

廿ふな-すゑ[船据](名) 船をすゑおく所。

ふな-せうえう（シヨウヨウ）[船逍遙](名) ふなあそび。

ふな-ぞこ[船底](名) ㊀船の底。㊁弓形の底。――まくら[船底枕](名) 底の弓形をなす枕。

ふな-だいく[船大工](名) 船をつくる大工。(船工、船匠)。

廿ふな-だち[發船](名) ふなで。

ふな-だな[船棚](名) 船の兩舷にわたしたる板、船子の踏(フ)みて漕ぎ又は棹さす所。せかい。

ふな-だま[船靈](名) 船中にて祭る船の守護神。(船神)。

ふな-だより[船便](名) ふねのたより。

ふな-ぢ[船路](名) 船の行きかよふ路。航路。

ふな-ちん[船賃](名) 船に乘り又は船を傭(ヤト)ふにはらふ賃錢。

ふな-つき[船着](名) 船のつきて泊(ト)る處。ふながゝり。みなと。ふなば。

ふな-づみ[船積](名) 船に荷物を積みこむこと。――かう（ウコ）[船積港](名) 船積したる港。

ふな-て[船手](名) ㊀ふないくさ。水軍。海軍。㊁船に關する事を取扱ふもの。㊂船のある方。

ふな-で[船出](名) 船の出發。でふね。出帆。

ふな-どこ[船床](名) 船中のとこ。

廿ふな-とどめ[船止](名) ふながゝり。ふなつき。

ふな-どひや（イド）[船問屋](名) 船の乘客又は荷物を取扱ふ問屋。

ふな-どまり[船泊](名) ふながゝり。

ふな-に[船荷](名) 船に積載して運送する荷物。船の荷物。――しようけん[船荷證券](名) 【法】傭船者又は荷送人の請求によりて、船長又は船舶所有者の委任を受けたる者が交付する物品運送契約の證券、規定に從ひて成作し、船舶の名稱、運送品其他必要の事項を記載するものにして、これと引換に其船荷の引渡を受く。――しようしよ[船荷證書](名) 前條に同じ。

ふな-のり[船乘](名) ㊀船に乘ること。㊁せんどう。舟子。

ふな-ば[船場](名) ふなつき。はとば。埠頭。船岸。

ふな-ばし[船橋](名) 船をならべ繫(ツナ)ぎて其上に板をわたしたる橋。浮橋。

ふな-ばしご[船梯子](名) 船に上下するために設けたる梯子。

ふな-ばた[船端](名) ふねの緣。ふなべり。(舷)。

ふな-ばら[白薇](名) 【植】(い)蘿藦科に屬する草、山野に生ず、莖圓し、葉は柿に似て稍や小さく、下面に灰色の毛有り、花は五瓣暗紫色にして繖狀花序をなす、莢を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、又、藥用に供せらる。(鹿苑草、鐵砲草)。(ろ)「すずさいこ」に同じ。

ふな-ばら[船腹](名) 船の腹部。

ふな-ばり[船梁](名) 船のうつばり。

ふな-びと[船人](名) ㊀船の中の人。㊁ふなこ。せんどう。

(ふ-なふ（ノウ）[不納](名) 納付せざること。をさめいれざること。――けっそんがく[不納缺損額](名) 不納のため缺損となりたる租税たか。

ふな-べり[船緣](名) ふなばた。(舷)。

ふなまど［船窓］（名）船のあかりまど。（舷窓）。

卄ふなまどひ（マドイ）［船惑］（名）船路に迷ふと。

ふなまはし（マワシ）［船廻］（名）船にのせてむくりとゞくると。（洄櫓）。

〜ふなまんぢゆう［船饅頭］（名）船中にかよひ來る淫賣婦。

ふなみち［船路］（名）ふなぢ。

ふなむし［船蟲］（名）【動】甲殼類中節甲類に屬する節足動物、河海の岸に生じ、好みて船底に着く、全體黒色にして長さ一二寸、脚多くよく疾走す。（海蛆）。

卄ふなもよひ（モヨイ）［船催］（名）船出の用意。

ふなもり［船守］（名）船の番人。

ふなやかた［船屋形］（名）船の屋形。（舫）。

ふなやど［船宿］（名）㊀船の運送を業とする家。㊁遊船を仕立つるを業となす家。

卄ふなやまひ（ヤマイ）［船病］（名）船に醉(エ)ひて病むと。

卄ふなやもひ（ヤモイ）［船病］（名）前條に同じ。

ふなゆ［淦］（名）（船湯の義）船中に漏れ入る水あか。

ふなゆさん［船遊山］（名）ふなあそび。

ふなよそひ（ヨソイ）［船裝］（名）出船の用意。ふなもよひ。（艤裝）。

卄ふなよどめ［船淀］（名）船をとゞこほらすと。

ふなわたし［船渡］（名）船にて往來の人又は物を渡す所。わたし。わたり。（渡頭）。

ふなわたり［船渡］（名）船にて渡る所。

ふなゑひ（エイ）［船醉］（名）船に乘り其ゆりうごくために心地あしくなると。船に醉(エ)ふと。

ふなをさ［船長］（名）ふなこの長。

（ぶなん［無難］（名）㊀難の無き事。無事。㊁むづかしからざると。「至道―、唯嫌揀擇」。

ふにあひ（アイ）［不似合］（名）似合はざると。似合はしからざると。

（ふにょい［不如意］（名）㊀こゝろの儘(マヽ)ならぬと。㊁暮し向のゆたかならざると。「身代―」。

（ふにん［補任］（名）職に補し官に任ずると。

（ふにん［赴任］（名）任地へ出向くと。

（ぶにん［無人］（名）人數の少なきと。人手の足らぬと。

（ふにんか［不認可］（名）認可せざると。認可とならざると。

（ふにんしやう（シヨウ）［不姙症］（名）婦人の姙娠せざる病氣。

（ふにんじやう（ジヨウ）［不人情］（名）人情なきと。人情にそむくと。

〜ふぬけ［腑拔］（名）（臓腑のなき義）とぼけ。まぬけ。

ふね［舟、船、艦］（名）㊀人又は物を載せて水上を渡る具、種類多し。㊁水又は他の液體を盛る箱形の器。「湯―」。（槽）。——にこくしてけんをもとむ［刻船求劍］（呂氏春秋に、船より劍を水中に墜(トオ)しゝかば、船に其墜ちたる所のしるしをつけ、船進みて處の轉ずるをも知らずして、船のしるしの下に劍を求めんとしたる寓言あるに出づ）時勢の推移を知らず舊事を固守するにいふ。——をこぐ　船をこぐさまに似たるより、居眠して體をぶらつかすにいふ。

（ふねい［不佞］（名）才智なきと。

（ふねい［不佞］（代）謙遜していふ自稱の代名詞。

（ふねう（ニヨウ）［富饒］（名）富みてゆたかなると。

ふねがひ（ガイ）［船貝］（名）【動】「あまをぶね」に同じ。

卄ふねぎらひ（ギライ）［船嫌］（名）往來船に乘るをきらふ人。

卄ふねのめ［船𦨞］（名）船板のすきまなどより水の漏れ入るを塞ぐもの。まいはだ。

（ぶねん［無念］（名）氣のつかずして殘念なると。

（ふのう［不能］（名）㊀才能のなきと。ちゑのとぼしきと。㊁行ふと能はざると。なすと能はざると。——はん［不能犯］（名）【法】不能なるとの確定せるを知らずして犯罪に着手すると、これを絶對的不能犯と相對的不能犯とに分つ、犯罪の目的物の全く存在せざる場合に於けるものを目的物に關する絶對的不能犯といひ、犯罪の目的物が存在すと信じ得べき場合に於けるものを目的物に關する相對的不能犯といひ、又、犯罪の手段の全く能力なき場合に於けるものを手段に關する絶對的不能犯といひ、犯罪の手段の能力あるも其使用を誤りたる場合に於けるものを手段に關する相對的不能犯といふ。

卄ふのかみ［府頭］（名）衞府の長官。

卄ふのやき［麩燒］（名）燒麩。

ふのり［布海苔］（名）【植】紅色藻類に屬する海藻、長さ二三寸、鹿角に似たる枝あり、水にて煮(ニ)て、糊(ノリ)となし又は髮洗の用に供す。（鹿角菜）。

（ふば［駙馬］（名）（支那の古昔、公主の夫たるものは駙馬都尉に補せられしよりいふ）貴人のむこ。

（ぶば［侮罵］（名）あなどりのゝしると。

（ふはい［腐敗］（名）㊀「バクテリア」が動植物質に作用して不快の臭味を有する物質を生じたると。くさると。㊁やぶれくづれて用をなさゞると。墮落して生氣なきと。「士氣―す」。

（ふはう（ホウ）［訃報］（名）死去のしらせ。（訃音）。

（ふばう（ボウ）［誣妄］（名）しひつくると。かまへいつはると。

（ふばう（ボウ）［誣謗］（名）しひいつはりてそしると。

（ふはく［布帛］（名）もめんものときぬものと。又、おりもの。

（ふはく［膚薄］（名）あさくうすきと。淺薄。「學問―」。

（ふはく［浮薄］（名）㊀かるがるしくして移氣の

多きと、㊁うはすべりにして人情のうすきと、㊂おも〳〵しからずして淺はかなると。

ふばこ［文箱］（名）（「ふみばこ」の略音）書狀を入れて往復する匣。ふみばこ。狀箱。

卄ふばさみ［文挾］（名）ふみばさみ。

（ふばつ［桴筏］（名）いかだ。

（ふばつ［不拔］（名）かたくしてぬけがたきと。くじけざると。「堅忍―」。

（ふはふ（ホウ）［不法］（名）【法】法にたがふと。道にはづれたると。——かうゐ（コー）［不法行爲］（名）【法】故意又は過失によりて他人の權利を侵害したる行爲。——かんきんざい［不法監禁罪］（名）【法】監禁罪に同じ。

〜ふはふは（フワフワ）（名、副）㊀浮きておちつく處なきさまにいふ語。㊁浮きあがりて柔かきさまにいふ語。

〜ふはり（フワリ）（名、副）前條に同じ。

ぶば・る［武張］（自、ら四）武勇のさまを示す。たけきさまをあらはす。

（ふび［不備］（名）㊀完備せざると。そなはらざると。㊁書簡文の末尾に書く語。

（ぶび［武備］（名）戰事の用意。いくさのそなへ。軍備。戰備。

（ふひつえう（ヒツヨウ）［不必要］（名）必要ならざると。なくても事のかけざると。

卄ふひと［史］（名）（文人の義）㊀上古のかばねの一。㊁記錄を職とする吏。事を記する官。

（ふひやう（ヒヨウ）［浮評］（名）うはさ。とりざた。

卄ふひやう（ヒヨウ）［風病］（名）かぜ。感冒。

（ふひよう［浮氷］（名）海上に浮遊する氷塊。

（ふびん［不便］（名）㊀便利よからぬと。ふべん。㊁憐むべきと。いとほしきと。（憫然）。

（ふびん［不敏］（名）㊀敏捷ならざると。㊁才智とばしきと。

（ふひんかう（コウ）［不品行］（名）品行のをさまらぬと。

（ぶふ［武夫］（名）ますらを。もののふ。

卄ふふき［蕗］（名）【植】「ふき」の古名。

ふぶき［吹雪］（名）㊀雪の烈(ハゲ)しき風に吹かれて亂れ降ると。風雪。㊁白髮まじりの亂髮。——づき［吹雪月］（名）陰曆五月の異稱。

（ふぶぎやう（ギヨウ）［賦奉行］（名）訴狀を引附衆に配付するを掌りし武家の職名。

（ふふく［不服］（名）㊀得心せざると。㊁服從せざると。

（ふふく［怖伏］（名）おそれしたがふと。又、おそれてひれふすと。

ぶぶ・く［雪吹］（自、か四）雨又は雪など烈風に吹かれて亂れ降る。

卄ふふどり［布穀鳥］（名）【動】「よぶこどり」に同じ。

卄ふふま・る［含］（自、ら四）ふくまる。

卄ふふ・む［含］（他、ま四）ふくむ。

（ふぶん［不文］（名）㊀文事に長ぜざると。㊁條文にあらはさゞると。——はふ（ホウ）［不文法］（名）文書を以て公布せられざる法律。——りつ［不文律］（名）前條に同じ。

（ぶぶん［部分］（名）物事の中の區別。ぶわけ。——りん［部分林］（名）國家又は公法人が私人と收益を分つ契約の森林。

（ふへい［不平］（名）不滿足に思ひて心の平らかならぬと。（不滿）。——か［不平家］（名）よく不平を唱ふる人。——たう（トウ）［不平黨］（名）不平なるくみ。——をならす　不平なる程をいひ立つ。

（ふへいきん［不平均］（名）平均ならざると。ひとしからざると。

（ふへう（ヒヨウ）［浮標］（名）海中の暗礁などを知らするがために浮かべたる目標。

（ふへう（ヒヨウ）［浮漂］（名）うきたゞよふと。——しよくぶつ［浮漂植物］（名）【植】水面にうかび根を水中に出して營養を取る植物、例へば、うきくさの類これなり。

（ふへき［斧劈］（名）畫にて、岩石などを畫くに、斧のけづりあとの如き筆痕を用ふるもの。

（ぶべつ［部別］（名）ぶわけ。

〜ふべつぴん［不別嬪］（名）女の容貌のよろしからざるもの。

（ふへん［普遍］（名）すべてのものに及ぶと。殘るくまなく行きわたると。あまねきと。

（ふへん［不變］（名）變ぜざると。かはらざると。

（ふべん［不辯］（名）辯舌の巧(タク)ならざると。

（ふべん［不便］（名）便利ならざると。勝手あしきと。自由のきかぬと。

（ぶへん［武邊］（名）武道の事。「―修行」。

（ぶべん［武弁］（名）さむらひ。武家。

（ふへんきかん［不變期間］（名）【法】民事訴訟にて、當事者の合意ありとも伸縮を許さゞる期間。

（ふへんしよく［不變色］（名）變色せざると。いろのかはらぬと。

（ふへんしんによ［不變眞如］（名）【佛】一切平等不生不滅にして變易なき眞如。眞如の實相。

（ふへんふたう（トウ）［不偏不黨］（名）かたよらぬと。かたおちなきと。中正を執(ト)ると。

（ふべんり［不便利］（名）便利ならざると。ふべん。

ふぼ［父母］（名）ちゝはゝ。——のくに［父母國］（名）自國。故國。祖國。

（ふぼく［浮木］（名）うきき。

卄ふほども・る［含籠］（自、ら四）中にふくまる。

(ふ-ぼん)[不犯](名) 僧侶が邪淫戒を犯(カオ)さゞること。「一生―」。

(ふ-ほんい)[不本意](名) 本意にそむくこと。心とたがふこと。

(ふ-ま)[不磨](名) 磨滅せざること。つぶれきえざること。「千古―の言」。

(ぶ-ま)[撫摩](名) なでさすること。

〔ぶま〕(名) 氣の利(キ)かぬこと。まぬけ。(東京地方の方言)。

(ふ-まう)ワ-モ **[誣罔]**(名) 志ひつくりていふこと。いつはりかまへてあざむくこと。

廿ふ-まき[文卷](名) 書籍の上のおほひ。(帙)。

ふま-ふウ フマ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）**[踏]**(他、は下二) 「ふむ」の延言。

ふまへ-どころエ-フマ **[踏所]**(名) ㊀足のふむ所。㊁たちば。立脚地。

(ふ-まん)[不滿](名) 物足らぬ心持。不足に思ふこと。(不平)。

(ふ-まんぞく)[不滿足](名) 前條に同じ。

ふみ[文](名) ㊀物事を書きしるしてあるもの。かきもの。書物。文書。㊁たまづさ。てがみ。㊂詩。

(ふ-み)[不味](名) あぢなきこと。うまからざること。

ふみ-あはせワセ-ーア **[文合]**(名) 文をつくるものが左右に分れ、判人をして、其つくりたる文を判ぜしめて優劣をあらそふこと。

廿ふみ-あはせワセ-ーア **[踏合]**(名) 古昔、死者などの如きを穢(ケガ)れたるものに行き合ひたること。ふみあひ。いきぶれ。(觸穢)。

廿ふみ-あひイ-ア **[踏合]**(名) 前條に同じ。

ふみ-あら・す（さしすすせせ）**[踏荒]**(他、さ四) 踏みてあらしさまにす。ふみ志だく。

ふみ-いし[踏石](名) 履脫(クツヌギ)の處に据ゑたる石。

ふみ-うす[踏臼](名) カラうす。

ふみ-おとし[蹈落](名) 漢詩にて、起句の普通韻を蹈むべきに蹈まざること。(冒韻)。

ふみ-かき[文書](名) ㊀ふみのかきやう。㊁ふみをかく人。

ふみ-がね[踏金](名) 雪駄の裏に打つ金具。

ふみ-きり[踏切](名) ㊀鐵道を横切る人道。㊁相撲(スマフ)にて足を土俵の外(ト)に踏み出すこと。

ふみ-ぐら[文庫](名) 書籍をおさめおく家。ふぐら。

ふみ-こ・む（まみむむめめ）**[踏込]**(自、ま四) ㊀足に力をこめて踏む。㊁足に力を入れて前へふみ出す。「一足ふみこみて」。㊂他人の屋内に突然に入り込む。

ふみ-さし[文挾](名) ふみばさみ。

ふみ-しだ・く（かきくくけけ）**[踏拉]**(他、か四) ふみてひしぐ。ふみにじる。

ふみ-し・む（めめむむるむれめよ）**[踏締]**(他、ま下二) ㊀確(シカ)と踏む。㊁踏みてかたくす。

〔ふみしめる〕(他) 前條の訛。

廿ふみ-た[札](名) (文板の義)ふだ。(簡)。

ふみ-だい[踏臺](名) ㊀高き所の物を取り又は高き所に上るなどのために、あがり踏む臺。あしつぎ。㊁或目的のため、一時利用せらるゝもの。

廿ふみ-たけ・ぶ（ばびぶぶべべ）**[踏哮]**(自、は四) 足ぶみしてさけぶ。

ふみ-だ・す（さしすすせせ）**[踏出]**(自、さ四) ㊀前へ進み行く。㊁發足す。㊂仕事にとりかゝる。

〔ふみ-た・てる〕（てててるてるてれてよ）**[踏立]**(他、た下一) 其ものをふみて足に立つ。「とげを―」。

〔ふみ-たふし〕オシ-ーク **[踏倒]**(名) ふみたふすこと。

〔ふみ-たふ・す〕オス-ーク（さしすすせせ）**[踏倒]**(他、さ四) 代金を拂はずして損耗をかく。費用を出さして償はず。

ふみ-だん[踏段](名) 梯子(ハシゴ)などの踏みてのぼる段。(階)。

ふみ-つぎ[踏繼](名) ふみだい。

ふみ-づき[文月](名) 陰暦七月の異稱。ふづき。

ふみ-つ・く（けけくくるくれけよ）**[踏附]**(他、か下二) ㊀はげしく踏みて押さふ。㊁ないがしろにす。なみす。

ふみ-づくゑ[文机](名) 書籍を載(ノ)せおく机。ふづくゑ。(書架)。

〔ふみつける〕(他) 「ふみつく」の訛。

廿ふみ-て[筆](名) ふで。ふんで。

ふみ-ど[踏所](名) 足のふむべき所。

廿ふみ-どの[文殿](名) ㊀ふどの。文庫。㊁校書殿。

ふみ-にじ・る（らりるるれれ）**[蹂躙]**(他、ら四) ふみつけて潰(ツブ)す。ふみつけて拉(ヒシ)ぐ。ふみあらす。

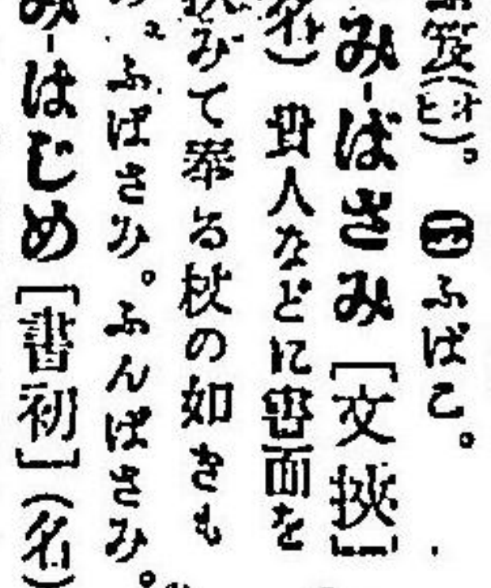
ふみ-ぬき[踏拔](名) 刺(トゲ)釘などを足に踏み込むこと。

ふみ-ぬ・く（かきくくけけ）**[踏拔]**(他、か四) 踏みて貫く。

廿ふみ-の-つかさ[書司](名) ㊀圖書寮。㊁古昔、後宮の文房具又は樂器などのありたる處。ふんのつかさ。

ふみ-ばこ[文箱](名) ㊀書物などを入れて負(オ)ふ笈(オヒ)。㊁ふばこ。

廿ふみ-ばさみ[文挾](名) 貴人などに書面を挾みて奉る杖の如きもの。ふばさみ。ふんばさみ。


[ふみばさみ]

ふみ-はじめ[書初](名) ㊀童子の初めて讀書を習ふこと。㊁新年に初めての讀書をなすこと。

ふみ-はだか・る（らりるるれれ）**[踏開]**(自、ら四) 足をひろげて立つ。

ふみ-はづし[踏外](名) ㊀ふみはづすこと。㊁鳥を捕ふる一種のわな。

ふみ-はづ・す（さしすすせせ）**[踏外]**(他、さ四) ㊀踏むべき箇所をあやまる。ふみどを失す。㊁失敗して地位を失す。

ふみ-は・る（らりるるれれ）**[踏張]**(自、ら四) ふみはだかる。

ふみ-びつ[文櫃](名) 書物ををさめおく櫃。

ふみ-びと[文人](名) 「ぶんじん」に同じ。

廿ふみ-ひらき-づき[文披月](名) 陰暦七月の異稱。

廿ふみ-ひろげ-づき[文擴月](名) 前條に同じ。

ふ-みもち[不身持](名) 身持のよからぬこと。品行のをさまらぬこと。放埒。

ふみ-や[文屋](名) ㊀廿ふんや。學問所。㊁本屋。

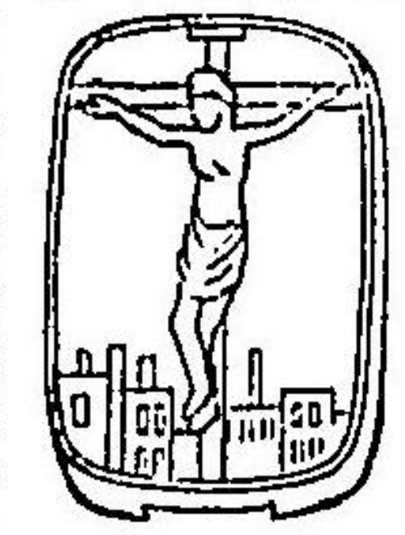
廿ふみ-よせ[踏寄](名) そこまめ。

廿ふみ-よみ[書讀](名) 書を讀む人。**―びと[書讀人]**(名) 前條に同じ。

ふみ-わ・く（けけくくるくれけよ）**[踏分]**(自、か下二) ふみてわけひらく。

〔ふみわける〕(他) 前條の訛。

ふみ-ゑ[踏繪](名) 六七寸許の銅板に「キリスト」の像を鐫(イ)たるもの、德川時代に、其人の切支丹宗の信者にあらざることを證するため、これを踏ましめしもの、長崎にては、正月四日以後、官吏これを市に出して諸人に蹈(フ)ませたり。


[ふみゑ]

(ぶ-みん)[撫民](名) 民をなで安んずること。民ををさむること。

(ふみん-しやう)ヨウ-ーシ **[不眠症]**(名) 眠られぬ病氣。

ふ・む（まみむむめめ）**[踏、履、踐]**(他、ま四) ㊀足の下に壓(オ)す。㊁足をあげて地におろす。(踏)。㊂ゆく。あゆむ。(步)。㊃實驗す。經過す。㊄履行す。おこなふ。㊅身を其上におく。自己の地位となす。「位を―」。㊆ためす。こゝろむ。「値を―」。㊇句末に韻字を用ふ。(押)。㊈〜つくのはずして、損害を及ぼす。

ふ-むき[不向](名) ㊀相應せざること。㊁好みに合はざること。

廿ふ-め・く（かきくくけけ）(他、か四) 蚊などぶん〳〵鳴く。

(ふ-めい)[不明](名) ㊀あきらかならざること。㊁才能の足らざること。㊂眼の志ひたること。(盲目)。

(ぶ-めい)[武名](名) 武勇のほまれ。

(ふ-めいすう)[不名數](名) [數]名數に對して、普通の數の稱。單位を添へざるよりいふ。

(ふ-めいよ)[不名譽](名) 名譽をけがすこと。あしき評判をとること。

(ふ-めいりやう)ョウ-リ **[不明瞭]**(名) あきらかならざること。はっきりせざること。

(ふ-もう)[不毛](名) 穀物の生ぜぬこと。**―のち[不毛地]**(名) 穀物の生ぜざる地。(赤地)。

(ふ-めんぼく)[不面目](名) 面目をけがすこと。

廿ふもだし[絆](名) ほだし。

ふもと[麓](名) 山のすそ。山のもと。

(ふ-もん)[不問](名) すておきてとはぬこと。

(ぶ-もん)[武門](名) 武士の家筋。武家。

(ぶ-もん)[部門](名) 區分したる部類。

廿ふ-や[文屋](名) 「ふみや」(一)に同じ。

(ふ-やう)ウ-ョ **[扶養]**(名) たすけやしなふこと。「―の義務」。

(ぶ-やう)ウ-ョ **[撫養]**(名) いつくしみやしなふこと。

(ふ-やうじやう)ウ-ジョウ-ョ **[不養生]**(名) 衛生の道にそむくこと。養生せぬこと。

ふや-か・す（さしすすせせ）**[潤]**(他、さ四) ふやくるやうにす。

ふや・く（けけくくるくれけよ）**[潤]**(自、か下二) 水にひたりて脹(フク)る。

(ぶ-やく)[夫役](名) 公事の勞働に人民を強制的に使用すること。えだち。

(ぶ-やく)[武役](名) 武家の用途の賦課、

ふや・す（さしすすせせ）**[殖]**(他、さ四) ふゆるやうにす。ふえしむ。

廿ふや-の-はかせ[文屋博士](名) 大學寮の博士。

ぶ-やまぶし[夫山伏](名) 山伏の夫役に出でたるものゝ稱。

ふゆ[冬](名) 秋の後春の前の三ヶ月、四季の中にて最も寒き季節。

ふ・ゆ（ええゆゆるゆれえよ）**[殖]**(自、や下二) 數增す。多くなる。

(ふ-ゆう)[富裕](名) とみてゆたかなること。

(ぶ-ゆう)[武勇](名) 武事に長じて勇氣に富めること。たけきこと。つよきこと。

(ふ-ゆうづう-ぶつ)[不融通物](名) [法]法律上、所有權の移轉すべからざる性質の物、即ち私權の目的となすことを得ざる物。

ふゆ-がまへマエ-ーガ **[冬構]**(名) 冬をこす用意。

ふゆ-がれ[冬枯](名) ㊀冬に草木の枯るゝこと。㊁冬のながめの寒く寂(サビ)しきこと。㊂〜冬にて顧客の少なきこと。

ふゆ-ぎ[冬木](名) ㊀冬がれの木。㊁ときはぎ。

ふゆ-ぎ[冬着](名) 冬に着る服。ふゆぎぬ。

ふゆ-ぎぬ[冬衣](名) ふゆぎ。

(ふ-ゆきとどき)[不行屆](名) 物事の行屆かぬこと。注意の足らぬこと。

ふゆ-くさ[冬草](名) 冬の草。**―の[冬草]**(枕) 「かる」に冠らする詞。

(ふ-ゆくわい)[不愉快](名) 愉快ならざること。おもしろからぬこと。

ふゆ-げ[冬毛](名) 冬の頃鳥獸に生ずる柔かき毛。(毳毛)。

ふゆ-こだち[冬木立](名) 冬の木立。

ふゆ-ごもり[冬籠](名) ふゆごもること。

ふゆ-ごも・る（らりるるれれ）**[冬籠]**(自、ら四) 冬日に家又

は巣に縮りゐる。

ふゆ-な[冬菜]（名）【植】「たうな」に同じ。

ふゆ-ばおり[冬羽織]（名）冬に着る袷（アハセ）又は綿入の羽織。

ふゆ-ぼたん[冬牡丹]（名）【植】牡丹の一種、冬季に花の咲くもの。

ふゆ-もの[冬物]（名）冬の着物。ふゆぎ。又、其布。「[illegible]「―藏出し」。

（ふ-よ）[付與]（名）さづけあたふること。

（ふ-よ）[賦與]（名）くばりあたふること。

（ふ-よ）[不豫]（名）帝王のいたづきあること。

ぶよ[蟆子]（名）【動】「ぶと」に同じ。（蚋）。

（ふ-よう）[不用]（名）もちひぬこと。ようなきこと。いらぬこと。

（ふ-よう）[芙蓉]（名）【植】（い）「はちす」に同じ。（ろ）錦葵科に屬する木、葉は心臟形にして掌狀に分裂す、花は大形にして長き花柄を有し紅色又は白色を呈す、樹皮より纖維を採取すべく、又、觀賞用として栽培せらる。もくふよう。

（ふ-よう）[附庸]（名）他の大國に屬して其命令を奉ずる小國、屬國。——こく[附庸國]（名）前條に同じ。

（ぶ-よう）[武勇]（名）「ぶゆう」に同じ。

（ぶ-ようい）[不用意]（名）用意せざること。支度なきこと。

（ふよう-かんゐ-りつ）[不容間位律＝Law of Excluded Middle]（名）【論】二個の矛盾せる概念の間には、第三者の介立するを容（ユル）さゞること、例へば「人性は善なるか惡なるか其一ならざるべからず」といへば、其間に「人性は善にもあらず惡にもあらず」といふの理は成立せざるが如し。

（ぶ-ようじん）[不用心]（名）用心のよからぬこと。（無用心）。

〔ぶよ-ぶよ（名、副）ふくれて柔かきさまにいふ語。

——ぶとり（名）肉のしまらずしてぶく〳〵と肥えたること。

フライ[Fry]（名）西洋料理にて、魚介などのあげもの。

（ぶ-らい）[無頼]（名）一定の職業なく、性行不法なること。又、其人。——かん[無頼漢]（名）無頼なるをのこ。ならずもの。——もの[無頼者]（名）前條に同じ。

（ふ-らう）[浮浪]（名）㊀さすらふこと。さまよふこと。流浪。㊁【法】一定の住居なく平常營生の産業なくして諸方に徘徊する者。——ざい[浮浪罪]（名）【法】浮浪に對して科する違警罪、三日以上十日以下の拘留、又は一圓以上一圓九十五錢以下の科料に處せらる。

（ふ-らう）[不老]（名）としよらざること。「―不死」。

（ふ-らう）[父老]（名）としよりたる男子。老人。

（ぶ-らう）[廡廊]（名）わたどの。わたりどの。

フラウンホーフェル-せん[―線＝Fraunhofer's line]（名）【理】太陽の光線を七色に分解して「スペクトル」に映ずる無數の暗線。

（ぶ-らく）[部落]（名）民家の一むれ。村里。

十ぶらく-でん[豐樂殿]（名）古昔、朝廷の宴會を行はれし御殿。

十ぶらく-ゐん[豐樂院]（名）前條に同じ。

プラグマチズム[Pragmatism]（名）眞僞の區別は人生の目的に適合せるか否かによりて定まるとなし、眞理は實際的效果を有するものたるべしといふ主義。

〔ぶら-さが・る（ら、り、る、る、れ、れ）（自、ら四）ぶらりと垂れさがる。

〔ぶら-さ・げる（げ、げ、げる、げる、げれ、げよ）（他、か下二）㊀釣りさぐ。㊁さげ持つ。

ブラシ[Brush]（名）西洋風のはけ。けはらひ。

ふら・す（さ、し、す、す、せ、せ）[下、降]（他、さ四）ふるやうにす。くだす。

ぶら・す（さ、し、す、す、せ、せ）[觸]（他、さ四）ふれひろむ。

プラス[Plus]（名）【數】加號。

フラスコ（名）（「ポルトガル」語 Frasco）西洋風の頸の長き硝子の德利。（瑠璃罎。玻璃壜）。

（ふ-らち）[不埒]（名）法に外（ハヅ）れたること、道にもとれること。ふとどき。（不法）。

プラチナ[Platina]（名）【化】「はくきん」（白金）に同じ。

プラチニ-えんくわすゐそさん[―鹽化水素酸＝Hydrochloroplatinic acid]（名）【化】白金を王水に溶解し、これを蒸發せしめて得る赤褐色の結晶。

〔ぶらつき（名）ぶらつくこと。

〔ふら-つ・く（か、き、く、く、け、け）（自、か四）ふら〳〵す。

〔ぶら-つ・く（か、き、く、く、け、け）（自、か四）ぶら〳〵す。

フラッシ（名）天鵞絨の一種、普通の天鵞絨より毛長く、質堅固にして上品なるもの。〔——てん（名）前條に同じ。

プラットホーム[Platform]（名）汽車に昇降する所。

十ふらば・ふ（バフ）（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）（自、は下二）さはる。あたる。

フラフ（名）（「オランダ」語 Vlag）旗。

〔ふら-ふら（名、副）㊀ゆくりなきさま又はそゞろなるさまにいふ語。㊁おちつかずしてゆり動くさまにいふ語。㊂逆上して足もと定かならず又は目まひの氣あるさまにいふ語。

〔ぶら-ぶら（名、副）㊀おちつかずしてゆり動くさまにいふ語。㊁あてどなく遊びあるくさまにいふ語。㊂定まれる職業なく遊びゐるさまにいふ語。㊃病氣の久しくなほらざるさまにいふ語。——やまひ（ヤマイ）（名）久しくなほらざる病氣。

〔ふらめ・く（か、き、く、く、け、け）（自、か四）ふら〳〵す。

〔ふら・れる（れ、れ、れる、れる、れれ、れよ）[振]（自、ら下一）遊女などによくあつかはれず。

〔ふらり（名、副）「ふらふら」（一）に同じ。——ふらり（名、副）「ふらふら」（二）（三）に同じ。

〔ぶらり（名、副）「ぶらぶら」に同じ。——ぶらり（名、副）「ぶらぶら」に同じ。

（ふ-らん）[腐爛]（名）くされたゞるゝこと。

フラン[法＝Franc]（名）「フランス」國の貨幣の單位、我國の二十一錢五厘にあたる。

〔ブラン（名）「ブランデイ」の略言。

ブランケット[Blanket]（名）羅紗又は敷物などになす廣くして厚き毛織物。「ケット」。毛布。

ぶらんと[鞦韆]（名）「しうせん」に同じ。〔——わうじやう（ヨウジヨウ）[鞦韆往生]（名）首をくゝりて死ぬること。くびくゝり。

ブランデイ[Brandy]（名）酒類中「アルコホル」分最も強きもの、普通葡萄酒より釀造し、林檎・桃・玉蜀黍等の果實の液汁よりも釀造す。——えんぜつ（名）酒氣に乘じてなす演說。

フランネル[Flannel]（名）舶來の毛織物、地薄く柔かし、羊の毛にて織る、略して「ネル」といふ。

（ふ-り）[膚理]（名）皮膚の文理。きめ。

（ふ-り）[不利]（名）利なきこと。

ふり[風]（名）㊀なり。すがた。㊁いつはりて其さまをなすこと。「知ぬ―」。

ふり[降]（名）雨、雪のふること。

ふり[振]（名）㊀ふりうごくこと。ふること。㊁用意なきこと。準備なきこと。㊂突然にものすること。㊃舞の仕方。㊄振子。「時計の―」。

十ふり[瓜]（名）【植】「うり」の古稱。

ぶり[鰤]（名）【動】硬鰭類中あぢ科に屬する魚、體は肥えて尾部は狹くすぼむ、背部淡青色にして腹部白し、體長大なるは二三尺餘に達す、西北海又は西南海等に多く産す。

〔ぶり[振]（接尾）㊀或語に添へて、其時日の經過する意を表する語。「五日―」。㊁或語に添へて、其程度の意を表する語。「久し―」。

ふり-あ・ぐ（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）[振上]（他、か下二）ふりて高く擧ぐ。「手を―」。

〔ふりあげる（他）前條の訛。

〔ふり-あひ（アイ）[振合]（名）他の樣子あひ。

〔ふり-あ・ふ（アウ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[振合]（自、は四）㊀袖などを互に振る。「袖―他生の緣」。㊁共々に同じ事をなす。

十ふり-い・づ（で、で、づ、づる、づれ、でよ）[振出]（他、た下二）㊀紅（ベニ）を水に振り出して染む。㊁聲をふりたつ。

十ふ-りう[風流]（名）「ふうりう」の約言。

ふり-うり[振賣]（名）物をになひ、聲立てゝ賣りあるくこと。

（ふ-りえき）[不利益]（名）利益にならぬこと。とくにならぬこと。

ふり-おこ・す（さ、し、す、す、せ、せ）[振起]（他、さ四）ふるひおこす。

（ふ-りかう）（コー）[不履行]（名）履行せざること。

ふり-か・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）[振掛]（他、か下二）㊀ちらしかく。まきかく。㊁たくしかく。かづく。

〔ふりかける（他）前條の訛。

ふり-かざ・す（さ、し、す、す、せ、せ）[振翳]（他、さ四）頂上に振りあぐ。

〔ふり-かた[振方]（名）もちあつかひ方。處置の仕方。「身の―」。

十ふり-がた・し（く、く、し、き、けれ）[舊難]（形、二）昔にかはらず。ふるびず。

十ふり-がた・し（く、く、し、き、けれ）（形、一）ひとゝほりならず。止みがたし。「ふりがたき心ばへ」。

ふり-がな[振假名]（名）漢字の傍にふる假名。（傍訓、傍記）。

ふり-かへ（カエ）[振替]（名）彼方のものを此方のものとなすこと。

ぶり-かへし（カエシ）[振返]（名）ぶりかへすこと。やみかへすこと。

ぶり-かへ・す（カエス）（さ、し、す、す、せ、せ）[振返]（自、さ四）一旦なほりたる病氣更におこる。

ふりかへ-ちよきん（カエチヨキン）[振替貯金]（名）郵便貯金の手續によりて、金錢の取引ある人の預金を帳簿上にて受拂をなし相互の貸借を完了せしむる制度、これが加入者となるには、基本預金として現金二拾圓を願書に添へ郵便局に貯金すべきものとす、郵便爲替貯金管理所にては、人別に預金の受拂をなすべき加入者名義の口座を設け置く、加入者ならざるものが加入者に對して送金をなす場合には、最寄の郵便局に於て其口座に宛て、金を拂へば、該郵便局はこれを管理所に報告し其加入者の口座の預金となる、又、加入者が加入者に對して金を支拂ふ場合には、其旨を管理所に請求すれば、其金額を兩者の口座の間に振替をなす、又、加入者が加入せざる者に送金する場合には、其旨を管理所に請求すれば、管理所は其口座より預金を拂出し先方に爲替を送付して、其指定したる郵便局より拂渡さしむるなり。——くちざ[振替貯金口座]（名）振替貯金の加入者名義の口座。（前條參照）。

ふり-かへ・る（カエル）（ら、り、る、る、れ、れ）[振返]（自、ら四）あとをふりむく。かへりみる。（回顧）。

ブリキ[鐵葉]（名）（「オランダ」語 Blik）錫の溶液中に浸して面に錫の薄き膜を附着せしめたる薄き鐵板。——ざいく[鐵葉細工]（名）鐵葉を使用せる細工。——や[鐵葉屋]（名）鐵葉細工をなす人又は家。——やね[鐵葉家根]（名）

鐵葉にて葺(フ)きたる家根。

卄**ふり-きら-す**（さしすすせせ）［降霧］（自、さ四）ふりてくもる。

ふり-き-る（らりるるれれ）［振切］（他、ら四）抑へられたるをふりはなす。

⌒**ふ-りくつ**［不理窟］（名）理窟ならぬこと。理にはづれたること。

卄**ふり-くら-す**（さしすすせせ）［降暮］（自、さ四）終日ふりつゞく。

卄**ふり-こ-す**（さしすすせせ）［振越］（他、さ四）後に垂れたる髮を前へ掻(カ)き上ぐ。

ふり-ごと［振事］（名）まひ。をどり。

ふり-こ-む（まみむむめめ）［降込］（自、ま四）降りて中にはいる。

〰**ふり-こ-める**（めめむむるるれれよ）［降籠］（他、ま下二）雨など降りて外出せしめず。

卄**ふり-さ-く**（けけくくるるれれけよ）［振放］（他、か下二）遥かに仰ぐ。

卄**ふりさけ-あふ-ぐ**（がぎぐぐげげ）［振放仰］（他、か四）次條に同じ。

卄**ふりさけ-み-る**（みみみるるみれみよ）［振放見］（他、ま上一）遥かに上を仰ぎ見る。眺(ナガ)めあぐ。

ふり-しき-る（らりるるれれ）［降頻］（自、ら四）さかんに降る。しきりに降る。

ふり-し-く（かきくくけけ）［降敷］（自、か四）㊀しきりに降る。ふりしきる。（降頻）。㊁一面にわたりて降る。

ふり-し-む（めめむむるるれれよ）［降締］（自、ま下二）絶えず降る。

卄**ふり-す**（せしすするすれせよ）［舊］（自、さ變）ふるくなる。

ふり-す-つ（てててつつるつれてよ）［振捨］（他、た下二）振り離して捨て行く。

〰**ふりすてる**（他）「ふりすつ」の訛。

プリズム［Prism］（名）【理】透明體の三角柱、光線一の側面より入り他の側面へ出て、分散す、分光器に用ひらる。

ふり-そで［振袖］（名）袖の長くして腋の下を縫はざるもの、昔時は男女元服以前の服なりき。（長袖衣）。

ふり-そぼ-つ（たちつつてて）［降濡］（自、た四）雨ふりていたくぬる。

⌒**ぶり-だいり**［部理代理］（名）事件の一部分の代理。――**にん**［部理代理人］（名）部理代理をなす人。

ふり-だし［振出］（名）㊀振りて物を出すこと。㊁中に物を入れ細き穴より振りて出す器物。㊂爲替又は手形の發行。㊃布の袋に入れ、熱湯の中にて其藥氣を出だす藥劑。（泡藥、湯藥）。㊄道中雙六又は飛雙六にて、采のふりはじめに石を置く場所。――**きよく**［振出局］（名）爲替を發したる郵便局。――**ぐすり**［振出藥］（名）振出(四)に同じ。――**にん**［振出人］（名）爲替又は手形を發行したる人。

ふり-だ-す（さしすすせせ）［振出］（他、さ四）㊀振りて物を出す。㊁ふることを始む。㊂振出藥を湯の中にて振りて藥氣を出す。㊃爲替又は手形を發行す。

ふり-だ-す（さしすすせせ）［降出］（自、さ四）ふりはじむ。

ふり-た-つ（てててつつるつれてよ）［振立］（他、た下二）振りておこす。「頭を――」。

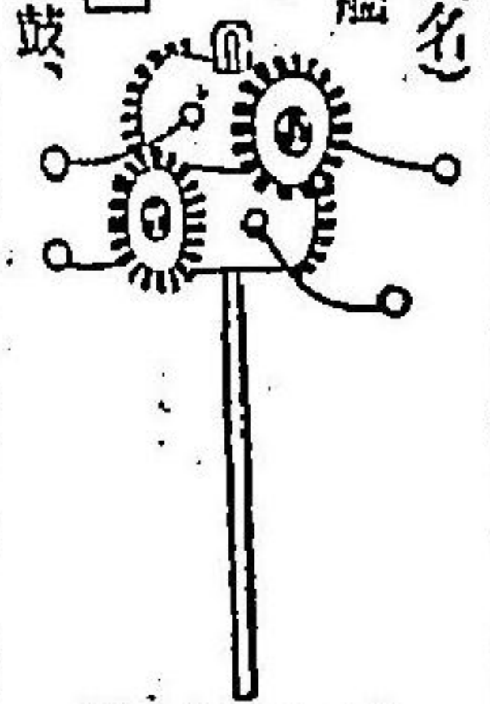
〰**ふりたてる**（他）前條の訛。

ブリッキ［鐵葉］（名）「ブリキ」に同じ。

ふり-つけ［振附］（名）新作の踊の振をつくること。又、其人。

ブリッヂ［Bridge］（名）㊀はし。橋梁。㊁船艦の甲板上に設けたる橋梁。

ふり-つゞみ［振鼓］（名）振りて鳴らす鼓、周圍に小さき球のつきたる絲をつけ柄を設く、柄を手に持ちてこれを振れば、絲端の球は自ら鼓面を打ちて鳴る。（鼗）。



［ふりつづみ］

⌒**ふりつ-もんじ**［不立文字］（名）【佛】「ふりふもんじ」に同じ。

ふり-づんばい［振飄］（名）「づんばい」に同じ。

卄**ふり-で**［振手］（名）紅を水にて振り出だして、染むること。

ふり-どけい［振時計］（名）振子の振動によりて針の動く仕掛の時計。

ふり-ぬ-く（かきくくけけ）［振拔］（他、か四）ふりはなす。

ふり-はた［振旗］（名）旗を打ちふること。

ふり-はな-す（さしすすせせ）［振離］（他、さ四）㊀振りて離れしむ。㊁ふりすつ。

ふり-はな-つ（たちつつてて）［振放］（他、た四）前條に同じ。

卄**ふり-は-ふ**（へへふふるふれへよ）［振延］（他、は下二）延(ハ)へ振る。「袖――」。

卄**ふり-は-ふ**（へへふふるふれへよ）［振延］（自、は下二）わざ〳〵なす。ことさらなす。

卄**ふり-はへ**［振延］（副）わざ〳〵。ことさら。――**て**［振延］（副）前條に同じ。

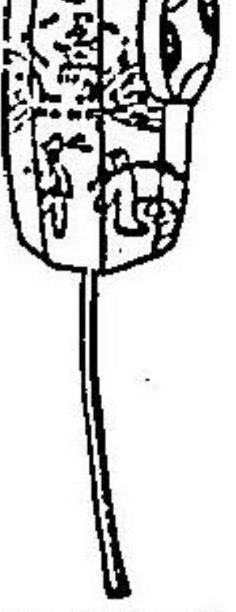
卄**ふり-ふ-く**（かきくくけけ）［降風吹］（自、か四）雨又は雪ふりて風はげしく吹く。

⌒**ふりふ-もんじ**［不立文字］（名）【佛】道意は以心傳心にして、文字言句の中にあらずといふこと。（禪家にていふ語）。

ふり-ふり［振振］（副）ふりながら。ふりつゝ。

〰**ぶり-ぶり**（名、副）㊀脹れて彈力あるさまにいふ語。㊁いたくいきどほりたるさまにいふ語。

ぶり-ぶり［振振］（名）子供の玩弄物、形槌に似、頭部は長さ五寸餘柄の長さ四寸許、竹を以て作る、高砂(タカサゴ)の翁と姥との圖を彩色にて描(カ)き、紐(ヒモ)をつけて振る、昔時、邪を除くために年始に用ひしもの。――**ぎっちやう**［振振毬杖］（名）前條に同じ。



［ぶりぶり］

ふり-ほど-く（かきくくけけ）［振解］（他、か四）ふりて解きはなす。

ふり-む-く（かきくくけけ）［振向］（自、か四）他の方へ向く。回顧す。

ふり-む-く（けけくくるるれれけよ）［振向］（他、か下二）㊀他の方へ向かしむ。㊁くばりあつ。

〰**ふりむける**（他）「ふりむく」の訛。

⌒**ふ-りやう**［不良］（名）善良ならざること。よからぬこと。「――少年」。

⌒**ふ-りやうけん**［不量見］（名）よからぬ量見。

⌒**ふ-りやうだうたい**［不良導體］（名）【理】「ふだうたい」（不導體）に同じ。

⌒**ぶ-りやく**［武略］（名）戰鬪上の謀略。軍事上の才能。

⌒**ふ-りよ**［俘虜］（名）とりこ。とらはれ。

⌒**ふ-りよ**［不慮］（名）おもひがけなきこと。（不意）。

⌒**ぶ-りよ**［無慮］（副）「むりよ」に同じ。

⌒**ふ-りよく**［浮力］（名）【理】流體中にある物體が周圍の流體より押し上げらるゝ力、其物體と等體積の其流體の重さに同じ。

⌒**ぶ-りよく**［武力］（名）㊀たけき力。㊁兵力。

ふり-わ-く（けけくくるるれれけよ）［振分］（他、か下二）折半す。分配す。わかつ。

ふり-わけ［振分］（名）㊀振りわくること。兩分すること。㊁前と後とに分けてかつぐこと。㊂「ふりわけがみ」の略言。――**がみ**［振分髮］（名）男女の小兒の髮、左右へ分けさばきたるまゝ後に垂るゝもの。――**にもつ**［振分荷物］（名）振分にしたる荷物。

⌒**ふ-りん**［不倫］（名）人倫に外(ハヅ)れたること。

フリント-ガラス［――硝子＝Flint glass］（名）主として鉛及「カリウム」の珪酸鹽より成る「ガラス」。

卄**ふる**［振］（名）斧の柄。（柯）。

ふる［舊］（名）ふるき物事。「――言」。（古）。

ふ-る（らりるるれれ）［降］（自、ら四）㊀空より落ち來る。「雪が――」。㊁數多く飛び來る。

卄**ふ-る**（らりるるれれ）［觸］（自、ら四）さはる。あたる。

ふ-る（れれるるるるれれよ）［觸］（自、ら下二）㊀あたる。さはる。㊁さかふ。そむく。「法に――」。㊂感ず。うつる。「壁氣の――る所」。㊃よる。關す。「事にふれて」。

ふ-る（れれるるるるれれよ）［觸］（他、ら下二）一般に告ぐ。あまねく知らす。

ふ-る（らりるるれれ）［震］（自、ら四）ゆり動く。ゆらめく。「なゐ――」。（振）。

ふ-る（らりるるれれ）［振］（他、ら四）㊀一端を取りて他の一端をゆり動かす。㊁ゆり動かす。ゆらめかす。「體を――」。㊂撒らしまく。まき散らす。（撒）。㊃配分す。くばる。「假名を――」。（配）。㊄爲替又は手形を發行す。㊅卄移し寫る。㊆嫌ひて相手にせず。（男女間の情にいふ）。㊇うしなふ。すつ。「財産を棒に――」。

ふ-る（れれるるるるれれよ）［狂］（他、ら下二）くるふ。かたよる。

ふ-る（りりるるるるれれよ）［舊］（自、ら上二）年を經(フ)。ふるくなる。

ふる――［舊、古、故］（接頭）或語に冠して、ふるき意を表する語。「――木」。「――著」。「――狸」。

〰**ぶ-る**（らりるるれれ）（自、ら四）自慢す。てらふ。きどる。――**ぶる**（らりるるれれ）（接尾）體言に接して、これを動詞となし、其さまを裝ふ意を添ふる語。「勿體――」。「學者――」。

ふる-あと［舊跡］（名）ふるきあと。きうせき。

ふる-いへ［古家］（名）ふるびたる家。

ふる-うた［古歌］（名）古人のうた。こか。

ふる-え［舊枝］（名）ふるきえだ。

卄**ふる-おきな**［舊翁］（名）經驗を積みたる老人。（耆舊）。

ふる-かね［古鐵］（名）金屬の器具の用ひふるしたるもの。――**かひ**［古鐵買］（名）古鐵類をかふことを業とするもの。

ふる-かは［古河］（名）ふるくより流るゝ河。――**にみづたえず** 年來つゞきて富豪なりし家は、零落すとも、尚は他に比して資産あるにいふ。

〰**ふる-がほ**［故顔］（名）ふるくより其仲間にある人。ふるかぶ。故參。

ふる-き［黑貂］（名）【動】肉食類に屬する獸、朝鮮又は遼東等に產す、形は貂(テン)に似、毛黑く、皮を裘(カハゴロモ)として貴ぶ。

ふる-ぎ［古着］（名）着ふるしたる衣。（故衣）。

卄**ふるき-かぜ**［古風］（名）むかしのふう。

ふる-きず［古創］（名）㊀以前に受けたる疵。㊁以前に感染したる瘡毒。㊂以前に犯したる罪惡。

〰**ふる-ぎつね**［古狐］（名）㊀多く年を經(ヘ)たる狐。㊁久しく經驗を積みたる狡猾なる人。㊂其處に久しくつめゐるものをあざけりていふ語。

ふる-ぎぬ［故衣］（名）ふるぎ。

ふるぎ-や［古着屋］（名）古着の商賣をする人又は家。

ふる-く［故］（副）むかしより。久しく。

ふる-くさ［古草］（名）去年の草。

〰**ふる-くさ-し**（く、し、き、けれ）［古臭］（形、二）ふるびて興なし。珍しからず。

ふる-ごと［古事］（名）むかしの事。ふるき事。（故事）。

卄**ふる-こもち**［古子持］（名）老女の子持。

ふる-ごろも［古衣］（名）ふるぎぬ。

卄**ふる-ごゑ**［古聲］（名）むかしながらの聲。

ふる-ざけ［古酒］（名）去年かもしたる酒。

ふる-さと［古里］（名）㊀むかし或物事のありし

地。（古跡）。㊁自分の生れたるもとの住地。故郷。㊂以前にかつて住みたる土地。――**びと**［古里人］（名）自分の故郷の人。

ふる・し［舊、古、故］（形、二）㊀久しき以前なり。むかしなり。㊁久しく年月を經（へ）たり。ひさし。㊂新しきさまかはりたり。ふるびたり。㊃もとよりありて珍（メヅ）しからず。

〔**ふる-しき**［風呂敷］（名）「ふろしき」の訛。

ふる-す［故巣］（名）㊀もとの巣。㊁もと居たる處。

ふる・す［舊］（他、さ四）㊀使用してふるくす。㊁忘れ捨つ。わする。

卄**ふる-ずらう**［古受領］（名）年老いたる國の守。

ふる-だうぐ［古道具］（名）用ひふるしたる道具。ふるき道具。（骨董）。――**や**［古道具屋］（名）古道具をあきなふ人又は家。（骨董商、骨董店）。

〔**ふる-だぬき**［古狸］（名）㊀年老いたるたぬき。㊁「ふるぎつね」（二）（三）に同じ。

ふる-ち［古血］（名）汚穢したる血。わろき血。瘀血。

ふる-づか［古塚］（名）ふるきつか。

ふる-つはもの［古兵］（名）多く經驗を積める老年の武者。

ふる-て［古手］（名）㊀着舊るしたる衣。ふるぎ。㊁用ひふるしたる調度。ふるだうぐ。㊂ふるくよりある手段。「――な事して後悔すな」。

ふる-デラ［古寺］（名）ふるくしてあれたる寺。

ふる-とし［舊年］（名）過去の年。去年。（昨年）。

ふる-とり［隹］（名）漢字の旁の名、即ち雉・雄等の右方にある隹の字の稱。

ふる-ね［古根］（名）ふるき根。（宿根）。

ふる-ばた［古畑］（名）久しく荒れたる畑。

ふるひ［震］（名）㊀ふるふこと。「體に――が出る」。㊁

おこり。わらはやみ。

ふるひ［篩］（名）振りて入れたる粉末などの細粗を淮（ヨ）し分くる具、わげ物の底に目なりに編みたる物を張れるもの。（簏、簁、簛）。

ふるび［古色］（名）ふるびたる色。

ふるひ-ごゑ［震聲］（名）わなゝきふるひながら出す聲。

ふるひ-た・つ［奮起］（自、た四）精神をおこりふるふ。

ふるひ-つ・く［振着］（自、か四）㊀わなゝき震ふ。㊁愛惜御し難くいだきつく。㊂憤怒御し難くむしやぶりつく。

卄**ふる-びと**［故人］（名）㊀としより。老人。㊁むかしなじみ。舊友。

〔**ふる-びる**［舊］（自）「ふるぶ」の訛。

ふる・ふ［震、振］（自、は四）㊀ゆるぎ動く。ゆらめく。㊁わなゝく。をのゝく。（戰慄、顫）。㊂ひゞく。とゞろく。㊃おそる。おどろく。㊄瘧（オコリ）の熱おこる。

ふる・ふ［振、奮］（自、は四）㊀さかんになる。おこる。㊁はげみたつ。いさみ立つ。㊂いきどほる。激す。

ふる・ふ［振、奮］（他、は四）㊀ふり動かす。ふる。「刀を――」。㊁さかんにす。おこす。㊂はげます。いさます。㊃はたく。はらふ。

ふる・ふ［篩］（他、は四）篩（フルヒ）に入れて、物のあらきとこまかきとを分く。

ふる・ぶ［舊］（自、は上二）㊀ふるくなる。㊁新しきさまうす。

ふる-ふで［故筆］（名）つかひふるしたる筆。

ふるふる［震震］（副）をのゝきながら。わなゝきながら。（戰戰）。

〔**ぶる-ぶる**（名、副）㊀ふるひうごくさまにいふ語。㊁おそれちゞむさまにいふ語。

ふる-ぶる・し［舊舊］（形、二）いとふるし。

ふる-ほぐ［故反古］（名）ふるびたる反古紙。

〔**ふる-ぼ・ける**（自、か下一）ふるびてきたなくなる。

ふる-ほん［古本］（名）用ひふるしたる書物。ふるき本。（故册）。――**や**［古本屋］（名）古本をあきなふ人又は家。

ふる-まひ［振舞］（名）㊀しわざ。おこなひ。みもち。行爲。擧動。㊁もてなし。饗應。馳走。――**ざけ**［振舞酒］（名）酒を備へ置きて、見知らぬ人にも隨意に飲ましむるもの。――**みづ**［振舞水］（名）冷水を備へ置きて、往來の人などに飲ますもの、暑中道路などに設く。

ふるま・ふ［振舞］（自、は四）行ふ。なす。はたらく。

ふるま・ふ［振舞］（他、は四）馳走す。もてなす。

ふる-みち［古道］（名）むかしのみち。（故道）。

卄**ふる-め**［古女］（名）一旦人の妻となりたる女。

ふる-めか・し（形、二）ふるくさし。めづらしからず。

ふる-め・く［舊］（自、か四）ふるびたるやうになる。ふるぶ。

ふる-もの［古物］（名）ふるびたるもの。

ふる-や［古屋］（名）ふるいへ。

ふる-ゆき-の［降雪］（枕）「志ろし」（白）又は「け」（消）に冠らする詞。

（**ぶ-るゐ**［部類］（名）種類によりたる區別。ぶわけ。

ふれ［觸］（名）官府などより普（アマネ）く世にふれ告

ぐること。（告示、傳示）。

ブレーキ［Brake］（名）車の歯止。

卄**ふれ-あそび**［觸遊］（名）たはむれ。遊戲。

（**ふ-れい**［不例］（名）いたつき。やまひ。（貴人にいふ）。

（**ふ-れい**［府令］（名）府知事が官制上一般の委任若しくは法律命令の特別の委任による職權内に於て、其管轄區域内に發する行政命令。

（**ふ-れい**［布令］（名）命令の布達。又、其命令。ふれ。

（**ぶ-れい**［無禮］（名）禮儀を失ふこと。ぶしつけ。失敬。――**かう**［無禮講］（名）上下の差別なく相互の禮儀を撤して催す酒宴。

（**ふ-れう**［不了］（名）㊀をはらざること。㊁はっきりわからぬこと。

（**ぶ-れう**［無聊］（名）㊀たのみなきこと。こゝろさびしきこと。㊁つれづれ。たいくつ。（徒然）。

（**ふ-れう-けん**［不料簡］（名）よからぬ料簡。

ふれ-がき［觸書］（名）ふれの文書。

ふれ-がしら［觸頭］（名）昔時、觸書を傳へし武家の役名。

ふれ-した［觸下］（名）觸頭の配下。

ふれ-ながし［觸流］（名）ふれを傳ふること。

卄**ふれ-ば・す**［觸］（他、さ四）ふればふやうにす。ふれ志む。

卄**ふれ-ば・ふ**［觸］（自、は四）ふる。さはる。

（**ふ-れふ**［不獵］（名）獵の獲物のすくなきこと。

ふれ-まは・る［觸廻］（自、ら四）㊀ふれを傳へありく。㊁方々へ吹聽す。

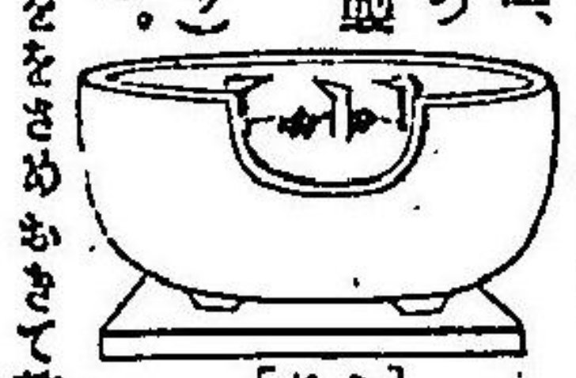
フレミングのきそく［――の規則＝Fleming's law］【理】導線を磁場にて動かすときに生ずる電流の方向と磁力線の方向及導線の運動の方向との關係を示す規則、右手の大指・示指及中指を互に直角に向はしめ、大指を導線の運動の方向とし、示指を磁力線の方向とせば、中指は導線に生ずる電流の方向なり。又、磁場に於ける導線に電流を通ずるとき、導線の運動の方向に關して同樣なる規則あり、左手の大指・示指及中指を互に直角に向はしめ、示指を磁力線の方向とし中指を電流の方向とせば、大指は導線の運動の方向なり。

（**ふ-れん**［不廉］（名）ねだんのやすからざること。高價。

（**ふ-れん**［賦斂］（名）わりあてゝとりたつること。

（**ふ-ろ**［風爐］（名）茶湯に用ふる爐、爐の一方より風を入るゝやうにつくり、持ち運びの出來るもの、其製種々あり。

（**ふ-ろ**［風呂］（名）㊀浴湯を沸（ワ）かす槽。ゆぶね。（浴槽）。㊁ゆどの。風呂場。㊂湯屋。風呂屋。㊃漆器ををさめおきて乾かす匣。



［ふろ］

〔**プロ**（名）《Prostituteの略》女郎。娼妓。

（**ふ-ろく**［不祿］（名）《秩祿ををへざる義》士分の死去にいふ語。

（**ふ-ろく**［附錄］（名）㊀主たる文書に附屬せる記錄。㊁新聞又は雜誌に附加せる紙面又は册子。㊂すべて主たるものに附屬してあるもの。

ふろ-しき［風呂敷］（名）《風呂場にて浴客の衣類を包みし布より起る》㊀物を包むに用ふる方形の布。ふるしき。（包袱）。㊁物事を大げさにつくりいふこと。はらをふくこと。大言。――**づきん**［風呂敷頭巾］（名）風呂敷を直ちに頭巾とせるもの、寶政・天明の頃流行せり。――**づつみ**［風呂敷包］（名）風呂敷に物をつゝみたるもの。〔――**をひろげる**　はらをふく。大言す。

フロック-コート［Frock coat］（名）洋服の上衣

の一種、普通黒羅紗にて仕立て、膝（ヒザ）のあたりまであるもの。

プロテスタント［Protestant］（名）「志んけう」（新教）に同じ。

ふろ-ば［風呂場］（名）風呂を設けたる室。浴室。湯殿。

フロフキ［胡蘿蔔］（名）《字の唐音》蕪・大根等を湯にて煮、其熱（アツ）き間に、味噌を塗りて食ふもの。

ふろ-や［風呂屋］（名）風呂をわかし、錢を受けて衆人に入浴せしむる家。ゆや。洗湯。

（**ふろん-ざい**［不論罪］（名）【法】所爲又は意思に關して特別の事情の存するにより、其行爲を犯罪として論ぜざること、現今にては法令の命じ又は許したる行爲（例へば醫師が治療のため病人の手足を截斷するが如き類）、幼者・知覺精神の喪失者・瘖啞者の所爲、不可抗力による所爲及正當防衞に出でたる所爲は不論罪とせり。

（**ふ-わ**［附和］（名）理由もなく、他人の說に賛成すること。「雷同――」。

（**ふ-わ**［不和］（名）仲わるきこと。仲たがひ。

（**ふ-わく**［不惑］（名）《論語に出づ》年齡四十歲の稱。

ふ-わけ［腑分］（名）身體をときひらくこと。（解剖）。

ぶ-わけ［部分］（名）部の區別。わりあて。

ふ-わたり［不渡］（名）㊀わたるべきもの、わたらざること。もらふべきもの、もらへざること。㊁手形の所持人が、其手形に對して支拂を受け得ざること。――**てがた**［不渡手形］（名）不渡となりたる手形。

（**ぶ-ゐ**［無爲］（名）㊀事をなさゞること。はたらかざること。㊁自然にまかせて人爲をつとめざること。――**のくわ**［無爲化］（名）君王の德化あまねくして、諸種の設備を要せずに、自然に天下のよく

治まること。
フヰフヰげう[回回教](名)（「フヰフヰ」は「ウイグルス」(Uigurus)の轉訛「ウイグルス」人種此宗教を信じ支那に趨きしよりいふ）「マホメット」教に同じ。
(ぶ-ゐん[部員](名) 其部に屬する人。
(ぶ-ゑい[武衛](名) 兵衛府の唐名。
(ふ-ゑつ[斧鉞](名) をの。まさかり。
(ふ-ゑん[赴援](名) おもむきたすくること。たすけにゆくこと。
(ふ-ゑん[扶援](名) 側(ソバ)より力をそふること。
(ぶ-ゑんりよ[無遠慮](名) いみはゞからざること。遠慮せざること。
(ふん[糞](名) 動物が肛門より排出する食物の殘滓。くそ。
(ふん[分](名) ㊀一度の六十分の一。㊁一時の六十分の一。㊂一寸又は一匁の十分の一。
(ぶん[文](名) ㊀あや。もやう。㊁いろ。つや。㊂かざり。裝飾。㊃ふし。てうし。㊄もじ。文字。㊅ことば。語句。㊆語句を連ねて思想を表するもの、特に詩に對して、語句に制限なく句末に韻をふまざるもの。文章。「詩—」。㊇學藝。ふみの道。㊈禮法。敎育。「修—」。㊉學藝に長じたること。ふみの道に明かなること。(十一)みやびやか。しとやか。(十二)[文法]主語と說明語とを有し完全なる意志を表はす言語の集合。 —をぞくす[屬ㇾ文] 文章をつゞる。 —をまはす[舞ㇾ文] 巧(タク)に文章をつゞりて、隨意にいひなす。
(ぶん[分](名) ㊀わかち。區別。㊁わりつけ。わりまへ。㊂みぶん。分限。㊃しな。等差。㊄ほど。程度。㊅みち。人倫。「—を正しくす」。㊆うけもち。つとめ。㊇うまれつき。性質。㊈因緣。運命。
(ぶん-あん[文案](名) 文書の草稿。

(ぶん-い[文意](名) 文章のわけ。文章の意味。
(ふん-うん[紛紜](名) ㊀いりみだるゝこと。いりまじること。㊁もつれ。ごた〳〵。
(ぶん-うん[文運](名) 世の中の學藝の趨勢。「—隆盛」。
(ふん-えん[噴煙](名) ふき出すけぶり。
(ぶん-が[文雅](名) ㊀文事上のみやびやかなる道。(風流)。㊁みやびやか。しとやか。
(ふん-がい[憤慨](名) なげきいきどほること。
(ぶん-かい[分解](名) ㊀一の體形をなせるものを個々にときわくること。わくること。㊁[化]一種の物質が二種以上の物質となること。
(ぶん-かい[文界](名) 文章をつくるものゝ社會。
(ぶん-かい[分開](名) わかれひらくこと。又、わかちひらくこと。
(ふん-かう[紛更](名) かきみだしてあらためかふること。
(ぶん-かう[分校](名) 或一部の生徒を敎授するため、他に分設したる學校の稱。
(ぶん-がう[文豪](名) 多くの人にすぐれて詩歌又は文章の巧(タク)なるもの。
(ぶん-かく[文格](名) 文章のさだめ。
(ぶん-がく[文學](名) ㊀ふみの道。學藝。㊁哲學・論理・言語・修辭・歷史・敎育・宗敎等の諸種の學問の總稱。「—部」。「—科」。㊂詩歌・文章・小說・劇等に關する學問の特稱。 —かい[文學界](名) 文學の範圍。又、文學者の社會。 —しや[文學者](名) 文學を修むる人。又、文學に長じたる人。
(ぶん-かつ[分割](名) わかちさくこと。さくこと。
(ふん-がふ[吻合](名) ぴつたりと合(ア)ふこと。
(ぶん-かん[分監](名) 或一部の囚徒を拘禁するため、他に分設したる監獄。
(ふん-き[奮起](名) ふるひたつこと。はげみたつこと。

(ふん-き[噴氣](名) 瓦斯をふき出すこと。又、ふきでる瓦斯。
(ふん-き[焚毀](名) 火をかけてやくこと。又、火にかゝりてやくること。
(ふん-ぎ[紛議](名) もつれたる議論。
(ぶん-き[分岐](名) わかるゝこと。
(ふん-きう[紛糾](名) 物事のもつれてをさまらざること。
(ぶん-きう[文久](名) 「ぶんきうせん」の略言。 —せん[文久錢](名) 德川幕府が文久三年に鑄(イ)たる錢、面に文久永寳の字ありて背に波文あり、もと一枚四文に相當せしが、今は一厘五毛に通用す。
(ふん-き-こう[噴氣口](名) [地]火山活動の餘勢により、水蒸氣又は他の瓦斯の噴出する口。
(ぶん-き-てん[分岐點](名) 物事のわかるゝ所。わかれめ。
(ぶん-きよく[分局](名) 或方面の事務を取扱はするため他に分設したる所。
(ぶん-きよく-でんりう[分極電流](名) [理]電池內にて溶解して生ずる瓦斯が、極板に附着して生ずる逆の電流。
〰(ふん-ぎり[踏切](名) ふんぎること。
〰(ふん-ぎ-る[踏切](他、ら四) しひて行ふ。思ひきってなす。
ぶん-きん-の-たかしまだ[文金高島田](名) 根の最も高くして派手(ハデ)やかなる高島田、年若き令孃などの結(ユ)ふもの。
(ぶん-きん-ふう[文金風](名) 髮の結方、油にてかため毛筋のわかれめなきやうに結(ユ)ふもの。
(ぶん-ぐ[文具](名) 「ぶんばうぐ」(文房具)に同じ。

(ふん-くわ[噴火](名) 火山の、熔岩又は水蒸氣若しくは火山灰等をふき出すこと。
(ふん-くわ[焚火](名) 火をたくこと。又、たく火。
(ふん-くわ[粉華](名) かざりつくろひてはなやかなること。又、其もの。
(ぶん-くわ[文華](名) ㊀あや。つや。かざり。㊁文明の光華。
(ぶん-くわ[文化](名) 世の中のひらけすゝむこと。
(ぶん-くわ[分化](名) わかれて化成すること。又、わかれて進化すること。
(ぶん-くわ[分課](名) 業務の受持をつくること。又、わかれたる業務の受持。
(ぶん-くわ[分科](名) 科業をわかつこと。又、わかれたる科業。
(ぶん-くわい[文會](名) よりあつまりて文章などをつくりあふ會。
(ぶん-ぐわい[分外](名) ㊀分限のほか。㊁ことのほか。「—に渇し」。
(ぶん-くわう-き[分光器](名) [理]光の分散を檢する器械、周圍に目盛したる圓板あり、其中央に「プリズム」を載(ノ)せ、一端に「レンズ」を置き其焦點距離なる他の一端に細隙を有する圓筒を置き、又其圓筒と同一水平面上に望遠鏡を置く、圓筒の細隙より入り來れる光線が、「レンズ」を出でゝ平行となり「プリズム」に入りて分散したるものを、望遠鏡にて望むなり。
(ふん-くわ-きやうさう[焚火競爭](名) 同質同量の石炭を互に汽罐の側に積み置き、早く火力を起して最高度の蒸氣力を發生せしむる競爭、軍艦と軍艦との間などに於て行はるゝもの。
(ふん-くわ-こう[噴火口](名) [地]火山の地中より熔岩又は水蒸氣若しくは火山灰などを噴出する口。

(ふん-くわ-ざん[噴火山](名) 噴火する山。火山。
(ぶん-くわつ[分轄](名) 分けて管轄すること。
(ぶん-くわん[分管](名) 分けて管轄すること。
(ぶん-くわん[文官](名) 武官以外の官職及官吏の總稱。 —かうとうしけん[文官高等試驗](名) 合格者に高等文官たることを得る資格を付與する試驗。 —ふつうしけん[文官普通試驗](名) 合格者に判任文官たることを得る資格を附與する試驗。
(ぶん-くん[文勳](名) ㊀學問上のいさを。㊁軍務以外の政務上のいさを。
(ぶん-け[分家](名) 家族の一部が其籍を脫して、別に一家を立つること。又、其立てたる家。
(ふん-けい[刎頸](名) くびをはねらるゝこと。首をきらるゝこと。 —の-まじはり[刎頸交](名) 首をきらるゝともかはらざるまじはり。決してかはることなきまじはり。
(ぶん-げい[文藝](名) ㊀學問。學藝。㊁思想化したる美的現象を表現するもの、即ち詩歌・文章・劇・小說・繪畫・彫刻等をいふ。 —ふくこう[文藝復興＝Renaissance](名) 「ヨーロッパ」闇黑時代の末期即ち十四世紀より十五世紀に亙りて、「ギリシヤ」及「ローマ」の古文藝の復興せしこと、「イタリア」に始まりて次第に蔓延せり。
(ぶん-けう[文教](名) 文事のをしへ。
(ぶん-けう-ぢやう[分教場](名) 或一部の生徒を教授するため、分設したる教場。
(ふん-げき[奮擊](名) 力をふるひて敵をうつこと。
(ふん-げき[奮激](名) ふるひたつこと。はげみたつこと。

(ふん-げき[憤激](名) はげしくいきどほること。
(ぶん-げふ[分業](名) ㊀手を分けて業をなすこと。㊁[經]個々の勞力に從事して生產事業を形成すること、分って技術的分業・職業的分業・場所的分業となす、技術的分業とは、工場に於て勞力者が特殊なる分擔をなして生產事業を形成するの類をいひ、職業的分業とは、甲は農業を營み乙は商業を營み丙は工業を營みて生產事業を形成する類をいひ、場所的分業とは、甲國又は甲地は盛に商業を營み乙國又は乙地は盛に農業を營み丙國又は丙地は盛に工業を營みて生產事業を形成するの類をいふ。
(ぶん-けん[文獻](名) ㊀のり。制度。㊁いにしへの制度文物を知るべき書物。
(ぶん-けん[分遣](名) 分派しつかはすこと。
(ぶん-けん[分見](名) 山野の遠近高低の測量。「—繪圖」。(分圖)。
(ぶん-けん[聞見](名) みきゝすること。けんぶん。
(ぶん-げん[分限](名) ㊀かぎり。ほど。㊁一身の地位。みのほど。身分。
(ぶん-こ[文庫](名) ㊀書籍を納めおく庫。ふみぐら。圖書館。㊁書籍などを納(イ)るゝ手箱。㊂雜品を入るゝ箱。
(ぶん-ご[文語](名) 詩歌・文章などに用ふる雅語。「文章語」。口語の對。
(ふん-こう[紛訌](名) うちわのもめ。ごた〳〵。
ぶんご-うめ[豐後梅](名) [植]梅の一種、花の小形淡紅色にして重瓣なるもの、實の大なるを以て賞せらる([illegible]梅)。
(ぶん-こく[分國](名) 分けて領する國。
(ふん-こつ-さいしん[粉骨碎身](名) （骨を粉にし身を碎(クダ)く義）力のあらん限り骨を折ること。からだのつゞくだけ力を盡くすこと。

ふん-こみ[踏籠](名) 裾の綫の狹き野袴。

ふん-こ・む（ま・み・む・む・め・め）[踏込](自、ま四)「ふみこむ」に同じ。

(**ふん-こん**[忿恨](名) いきどほり。うらみ。

(**ぶん-ざ**[分座](名) 座をわかつこと。

(**ふん-さい**[粉碎](名) ㊀粉の如く微塵（みぢん）に打ち碎（くだ）くこと。㊁はげしく打ち碎くこと。

(**ぶん-さい**[文才](名) 文學の才。又、文章の才。

(**ぶん-さい**[文采](名) あや。つや。もやう。かざり。いろどり。

(**ぶん-ざい**[文材](名) 文章の材料。

(**ぶん-ざい**[分際](名)「ぶんげん」(分限)に同じ。

(**ふん-さう**（ソウ）[紛爭](名) あらそひ。もめ。

(**ぶん-さう**（ソウ）[文藻](名) ㊀あや。もやう。㊁詩文の才。

(**ふん-さく**[紛錯](名) いりまじること。もつれまじること。

(**ふん-ざつ**[紛雜](名) 前條に同じ。

(**ぶん-さん**[分散](名) ㊀わかれ〴〵になること。㊁破產。倒產。㊂【理】光の「プリズム」を通過するとき、其屈折率に應じて屈折すること、日光の「プリズム」を通過するときは七色に分散し、其主なる色は赤・橙・黄・綠・靑・藍・紫の七色なり。

(**ぶん-し**[分詞＝Participle](名)【文法】動詞體の形容詞、「踊り車」の「踊り」の類。

(**ぶん-し**[文詩](名) 文と詩と。

(**ぶん-し**[文思](名) 文章上の思想。

(**ぶん-し**[文詞](名) ㊀詞句をつらねて篇章をなしたるもの。㊁文章のことば。

(**ぶん-し**[文士](名) 文筆に從事する人。

(**ぶん-し**[分子](名) ㊀【理】物理學上の假定說にして、物質を細分するとき、其本性を失はずして達し得べき極限の微粒。㊁轉じて、一團體を形成する各個人の稱。㊂【數】分數又は分數式の橫線上にある數又は整式。

(**ぶん-じ**[文事](名) 文學上又は學問上の事。

(**ぶん-じ**[文辭](名)「ぶんし」(文詞)に同じ。

(**ぶん-しう**[文繡](名) ぬひとり。ぬひ。

(**ぶん-し-げき**[文士劇](名) 文士の役者となりてなす演劇。

(**ぶん-し-しき**[分子式](名)【化】物體及其分子量を表示する符號、例へば水の分子式はH_2Oなるが如し。

(**ぶん-し-せつ**[分子說](名)【理】物體は極小なる微粒即ち分子の集合より成るといふ假說。

(**ふん-しつ**[紛失](名) 物の紛（まぎ）れてなくなること。

(**ぶん-しつ**[文質](名) あやとなかみと。外觀と實質と。「―彬々」。

(**ぶんじ-ひしよくわん**[文事祕書官](名) 文事祕書官長の下に屬し、其命を受けて職務を行ふもの。―**ちやう**（チヨウ）[文事祕書官長](名) 天皇の旨を奉じ、文事に關する內廷の文書を管理する勅任官。

(**ぶん-しふ**（シウ）[文集](名) 文章を集めたる書。「白氏―」。

(**ぶん-しふ**（シウ）[文集](名) 前條に同じ。

(**ぶん-しや**[分舍](名) 分設したる舍。

(**ぶん-しや**[分社](名) 本社に附屬して本社外の地に設けたる社。

(**ぶん-しやう**（シヨウ）[分掌](名) 分かちつかさどること。

(**ぶん-しやう**（シヨウ）[文相](名) 文部大臣の稱。

(**ぶん-しやう**（シヨウ）[文章](名) ㊀あや。もやう。かざり。㊁詞句を連ねつゞりて思想を表現するもの。特に詩に對して、句數に制限なく句末に押韻せざるもの。―**ご**[文章語](名)「ぶんご」(文語)に同じ。

(**ぶん-じやう**（ジヨウ）[文情](名) 文章の風情（ふぜい）。

(**ぶん-じやく**[文弱](名) 徒に文事にのみ耽（ふけ）り、尚武の風おとろへて懦弱となること。

(**ぶん-しゆ**[分手](名) わかるゝこと。離別。訣別。

(**ぶん-しゆ**[分守](名) わかち守ること。

(**ふん-しゆつ**[噴出](名) ふきだすこと。又、ふきでること。―**がん**[噴出岩](名)【鑛】火成岩の異稱。―**こう**[噴出口](名) ものを噴出する口。

(**ぶん-しよ**[文書](名) かきもの。もんじよ。ふみ。

(**ぶん-しよ**[分署](名) ㊀分設せられたる役所。㊁分設せられたる警察署。

(**ふん-しよく**[粉飾](名) ㊀けしやうすること。㊁うはべをかざること。

(**ぶん-しよく**[分食](名) 一部分の日食又は月食の稱。

(**ぶん-しよく**[分職](名) 職務を分つこと。

(**ぶん-しよく**[文飾](名) ㊀文句のかざり。㊁いろどり。かざり。あや。

(**ぶん-し-りやう**（リヨウ）[分子量](名)【化】氣體の水素に對する比重の稱。

(**ぶん-し-りよく**[分子力](名)【理】分子間に存する凝聚力・粘着力等分子の有する力の稱。

(**ふん-じん**[奮進](名) 勢はげしくすゝむこと。

(**ふん-じん**[奮迅](名) ふるひたちて勢はげしくすゝむこと。「獅子―の勢」。

(**ぶん-しん**[分身](名) ㊀一身の二つ以上に分かるゝこと。㊁子を生むこと。

(**ぶん-しん**[文身](名) 身體にほりものをすること。

(**ぶん-じん**[文人](名) 文雅の道に心を寄する人。詩歌・書畫などに志す人。―**ぐわ**[文人畫](名) 筆意をむねとし風韻を尚ぶ疎畫、多くは墨繪なるもの。

ふん-す（せ・し・す・する・すれ・せよ）[扮](自、さ變) やつす。よそほふ。よそふ。

‡**ふん-ず**（ぜ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ）[封](他、さ變)「ふうず」に同じ。

(**ぶん-すう**[分數](名)【數】一數が他の數にて割り切れざるとき、其割る形のまゝのものゝ稱、aがbにて割り切れざるときは、$\frac{a}{b}$を分數といふ。―**しき**[分數式](名)【數】整式にあらざる有理式の稱。

(**ふん-すゐ**[噴水](名) ふき出づる水。ふきあげ。ふきみづ。―**き**[噴水器](名) 水を高くふきあがらするために裝置したる器。

(**ぶんすゐ-かい**[分水界](名)【地】二つの河流の流域の境界。

(**ぶんすゐ-さんみやく**[分水山脈](名) 分水界にある山脈。

(**ぶんすゐ-せん**[分水線](名)【地】分水界に同じ。

(**ぶんすゐ-れい**[分水嶺](名) 分水山脈に同じ。

(**ぶん-せい**[分性](名)【理】物質の細かに分ち得べき性質。

(**ぶん-せい**[文勢](名) 文句のいきほひ。文章のいきほひ。

(**ふん-せう**（シヨウ）[焚燒](名) やくこと。又、やけること。

(**ふん-ぜう**（ジヨウ）[紛擾](名) ㊀みだれさわぐこと。みだるゝこと。㊁ごた〴〵。もめ。

(**ぶん-せき**[分析](名) ㊀【化】物體を構成する諸元素に分解すること。㊁すべて複合によりて構成せられたる物事を、各個の根元にわかちとくこと。―**だんてい**[分析斷定](名)【論】主辭の中に含まれたる概念を賓辭となしたる斷定。

(**ぶん-せき**[文石](名) 瑪瑙の一名。

(**ふん-せん**[奮戰](名) 力をふるってたゝかふこと。

(**ふん-ぜん**[憤然](名、副) 怒り激したるさまにいふ語。

(**ぶん-せん**[文錢](名) 寬永錢の一、背に文の字あり、寬永年中、京都の方廣寺の大佛を毀（こぼ）ちて鑄（い）たるもの。

(**ぶん-せん**[文選](名) 活版所にて、活版の組立に必要なる活字をあつめならぶるもの。

ブンゼン-でんち[―電池＝Bunsen's cell](名)【理】磁器に稀硫酸を入れ、これに水銀を塗りたるの圓筒狀亞鉛板を入れ、更に炭素棒と強硝酸とを入れたる素燒の陶器を亞鉛板の內部に入れたる電池、炭素棒は陽極にして亞鉛板は陰極なり。

ブンゼン-とう[―燈＝Bunsen's lamp](名)【理】一種の瓦斯燈、瓦斯の發生する管の下端に開閉し得る橫孔あり、其孔を開くときは、空氣の流入をよくし、瓦斯の燃燒を盛にして強く熱する用をなす。

(**ぶん-そ**[分疏](名) ㊀個條を分けてのぶること。㊁まうしわけをなすこと。

(**ぶん-そく**[文則](名) 文章の規定。

〜**ぶんぞり-かへ・る**（ら・り・る・る・れ・れ）(自、ら四) 次條に同じ。

〜**ふん-ぞ・る**（ら・り・る・る・れ・れ）[踏反](自、ら四) 足を前に伸ばしてうしろへ反（そ）る。

‡**ふん-だ**[札](名) ふみた。ふだ。(簡、牌)。

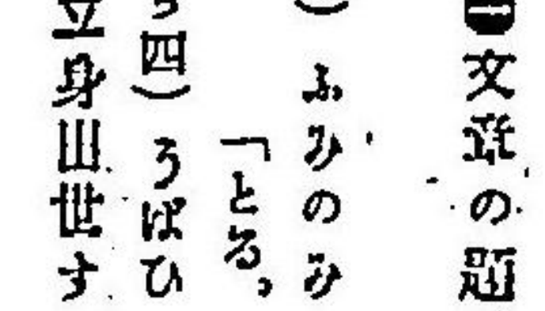
(**ふん-たい**[粉黛](名) ㊀おしろいとまゆずみと。㊁けしやう。おつくり。

(**ぶん-たい**[文體](名) 文章の體裁。

(**ぶん-たい**[分體](名)【動】母體が分裂して二個の子體となること。

(**ぶん-たい**[分隊](名) 小隊の四分の一。

(**ぶん-だい**[文臺](名) 書籍・短册などを載（の）するに用ふる小さき机。(短几)。



[ぶんだい]

(**ぶん-だい**[文題](名) ㊀文章の題目。㊁作文の題。

(**ぶん-だう**（ドウ）[文道](名) ふみのみち。學問。武道の對。

〜**ふん-だく・る**（ら・り・る・る・れ・れ）(他、ら四) うばひとる。

(**ぶん-たつ**[聞達](名) 立身出世すること。はえあらはるゝこと。

(**ぶん-たん**[分擔](名) 物事を分けて負擔すること。

(**ぶん-だん**[文談](名) ㊀文章上のはなし。㊁手紙にての相談。

(**ぶん-だん**[文壇](名) 文學者の社會。「―の驍將」。

(**ぶん-だん**[分段](名) 物事の段落。きれ。―**しやうじ**[分段生死](名)【佛】壽命の長短、

〜**ふんだん-に**[不斷](副) たくさんに。たんと。

(**ぶん-ち**[分地](名) 土地を分くること。又、分けたる土地。

(**ぶん-ち**[聞知](名) きゝしること。

(**ぶん-ぢ**[文治](名) 法令によりて政務を處理すること。文道をもって治むること。武斷の對。―**は**[文治派](名) 文治を主義とする流派。武斷派の對。

(**ぶん-ちやう**（チヨウ）[蚊帳](名) かや。

(**ぶん-ぢやう**（ジヨウ）[文場](名)「ぶんだん」(文壇)に同じ。

(**ぶん-ちゆう**[文中](名) 文句の中。

(**ぶん-ちん**[文鎭](名) 紙などの飜（ひるがへ）り散らざるやうにおくおもし。(書鎭)。

(**ふん-ぢん**[紛塵](名) 煩はしき俗事。

(**ぶん-つう**[文通](名) 手紙のおとづれ。音信。

〜**ふん-づ・ける**（け・け・ける・ける・けれ・けよ）[踏附](他、下一) ふみておさへつく。

〜**ふん-づまり**［糞詰］(名) 糞のとゞこほりて通ぜぬこと。

卄**ふんで**［筆］(名)「ふで」に同じ。

⌒**ぶん-てい**［文體］(名)「ぶんたい」に同じ。

⌒**ぶん-てう**（チヨウ）［文鳥］(名)【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形うそに似、頰白く喉黑し、背・腹は紅を帶ぶ。

⌒**ぶん-てん**［分店］(名)「してん」(支店)に同じ。

⌒**ぶん-てん**［分點］(名)【天】太陽の赤道を通過する點、其北に向ひて通過する點を春分點といひ、南に向ひて通過する點を秋分點といふ、何れも晝夜平分の時なり。

⌒**ぶん-てん**［文典］(名) 文法・語法を說きたる書。

フント［Funt］(名)「ロシア」國の重量の單位、〇・四一瓩にして、我國の百九匁三分弱に當る。

⌒**ふん-ど**［憤怒］(名) いきどほり。いかり。(忿怒)。

⌒**ふん-ど**［糞土］(名) ㊀くされたる土。㊁役にたゝぬもの。ねうちなきもの。

⌒**ぶん-と**［聞睹］(名) みきゝすること。ぶんけん。

⌒**ふん-とう**［噴騰］(名) 水などのふきあがること。

⌒**ふん-とう**［奮鬪］(名) ㊀力をふるひて敵人とたゝかふこと。——**しゆぎ**［奮鬪主義］(名) つとめはげみて、如何なる困難にも打ちかち如何なる危險をも冒して向上進步を企圖する主義。——**てきせいくわつ**［奮鬪的生活］(名) 奮鬪主義を履行する生活。

⌒**ふん-どう**［分銅］(名) ㊀秤(ハカリ)のおもり、楕圓形にして左右に缺形のくびれあるもの又は圓筒狀にして上部にくびれあるもの若しくは錘狀をなすもの等種々あり。㊁紋所の名、楕圓形にして左右に缺形のくびれあるさまを描(ヱガ)きたるもの。

⌒**ぶん-どう**［文豆］(名)【植】(い)「やへなり」に同じ。(ろ)「ゑんどう」に同じ。

⌒**ぶん-とく**［文德］(名) ㊀なさけぶかき德。㊁學問の德。

ふん-どし［犢鼻褌］(名) 男子の陰部を蔽(オホ)ふ布。ふどし。——**かつぎ**［犢鼻褌擔］(名) ㊀相撲取の最下級のもの、關取の犢鼻褌を肩にかけて從ひ行くよりいふ。㊁轉じて、すべて其部內の最下級のものをいふ。——**をしめてかかる** 充分の決心をして着手す。覺悟をきめてとりかゝる。

ぶん-どり［分捕］(名) ぶんどること。又、ぶんどりたるもの。——**ひん**［分捕品］(名) ぶんどりたる品。——**もの**［分捕物］(名) 前條に同じ。

ぶん-ど・る（らりるるれれ）［分捕］(他、ら四) ㊀戰場にて敵の物を奪ひ取る。㊁轉じて、他人のものを強ひて取る。

〜**ふん-どん**［分銅］(名)「ふんどう」に同じ。

〜**ぶん-ながし**［打流］(名) ぶんながすこと。

〜**ぶん-なが・す**（さしすすせせ）［打流］(他、さ四) ㊀つゞけて行ふ。㊁ろつゞけす。

〜**ぶん-なぐ・る**（らりるるれれ）［打擲］(他、ら四) うつ。たゝく。

⌒**ぶん-にん**［分任］(名) 任務をわかつこと。

⌒**ふん-ぬ**［憤怒］(名)「ふんど」に同じ。(忿怒)。

⌒**ふん-ぬん**［紛紜］(名)「ふんうん」の音便。

卄**ふん-のつかさ**［書司］(名)「ふみのつかさ」に同じ。

⌒**ぶん-ぱ**［分派］(名) えだは。えだ。わかれ。

⌒**ぶん-ぱい**［分配］(名) ㊀くばりわかつこと。わけくばること。㊁【經】協力して生產事業に從事したる各個人の間に、其生產をわかつこと。

⌒**ぶん-ばう**（ボウ）［分房］(名) 區分したるへや。

⌒**ぶん-ばう**（ボウ）［文房］(名) 讀書する室。書齋。——**ぐ**［文房具］(名) 書齋に必用の具、机・筆・紙・硯・墨の類。

⌒**ぶん-ぱく**［分箔］(名) 養蠶にて、蠶兒を數多の箔又は筵にわけくばること。

卄**ふん-ばさみ**［文挾］(名)「ふみばさみ」に同じ。

⌒**ふん-ぱつ**［奮發］(名) ㊀精神を奮ひおこすこと。ふるひたつこと。㊁おもひきって買ふこと。

⌒**ぶん-ぱふ**（ポウ）［文法］(名) ㊀文章の法則、ことばの規則。㊁「ごがく」(語學)(二)に同じ。

〜**ふん-ばり**［踏張］(名) ㊀ふんばること。㊁わるずれしたること。又、其もの、「——女郎」。

〜**ふん-ば・る**（らりるるれれ）［踏張］(自、ら四) ㊀足に力をこめて踏み開く。㊁いひはりて屈せず。

⌒**ふん-ぱん**［噴飯］(名) 可笑(ヲカ)しさに堪へずしてふきだすこと。

⌒**ぶん-ぱん**［文範］(名) 文章のてほん。

⌒**ぶん-ぴ**［分泌］(名) 體內の液汁を體外へ出だすこと。「汗を——す」。——**えき**［分泌液］(名) 分泌する液汁、例へば、唾液・胃液の如きこれなり。

⌒**ぶん-ぴつ**［文筆］(名) 文辭をかくこと、「——の才」。

⌒**ぶん-ぴつ**［分筆］(名) ふでわけ。

⌒**ぶん-ぶ**［文武］(名) ㊀仁慈と勇武と。㊁文道と武道と。「——兩道」。

⌒**ぶん-ぷ**［吩咐］(名) ㊀ふくこと、はくこと。㊁いひつくること。いひふくむること。

⌒**ぶん-ぷ**［分付］(名) わけわたすこと。

⌒**ぶん-ぷ**［分賦］(名) わけくばること。わりつくること。

⌒**ぶん-ぷ**［分布］(名) ㊀わかれしくこと、又、わかちしくこと。㊁わかれて處々にあること、又、わけて處々におくこと。

ぶんぶく-ちやがま［文福茶釜］(名)（上野國館林の茂林寺の僧守鶴の持てりしといふ釜の名に出づ）【動】海膽類に屬する棘皮動物、海中に產す、體は心臟形をなして介殼は薄く、前端の腹面に口を開く、棘は長し。

⌒**ぶん-ぶつ**［文物］(名) 文化に關するもの。

⌒**ふん-ぷん**［紛紛］(名、副) 入りまじりて亂れたるさまにいふ語。「落花——」。

⌒**ふん-ぷん**［芬芬］(名、副) 香のはげしきさまにいふ語。「香氣——」。

〜**ぶん-ぶん**(名、副) はげしく空を切りて唸(ナウ)る聲などにいふ語。㊁「ふんぷん」(芬々)に同じ。㊂いたくはらだちてあら／＼しきさまにいふ語。

⌒**ぶん-べい**［分袂］(名)（たもとを分つ意）わかるゝこと。訣別。

⌒**ふん-べう**（ビヨウ）［分秒］(名) 次條に同じ。

⌒**ぶん-べう**（ビヨウ）［分秒］(名) 分と秒と、即ち、極めてわづかの時間。

⌒**ふん-ぺき**［粉壁］(名) しらかべ。

⌒**ふん-べつ**［分別］(名) かんがへ。わきまへ。思案。辨別。——**ざかり**［分別盛］(名) 經驗足り知識多く最も事理のよくわかる年頃。——**らし**（しく、しき、しけれ）［分別］(形、二) 如何にも分別あるらし。

⌒**ぶん-べつ**［分別］(名) 種類をわくること。區別をつくること。——**じようりう**［分別蒸溜］(名)【化】沸騰點の異なる物體の混合物を熱して、其沸騰點の低きものより順次に蒸溜して分離せしむること。

⌒**ぶん-べん**［分辨］(名) 區別をつくること。

⌒**ぶん-べん**［分娩］(名) 子を生むこと。出產。

⌒**ふん-ぼ**［墳墓］(名) はか。つか。

⌒**ぶん-ぼ**［分母］(名)【數】分數又は分數式の橫線下にある數又整式。

⌒**ぶん-ぼく**［文墨］(名) 文と畫と、即ち詩文・書畫などのわざ。「——の業」。

⌒**ぶん-ぼてう**（チヨウ）［蚊母鳥］(名)【動】「かすひどり」に同じ。

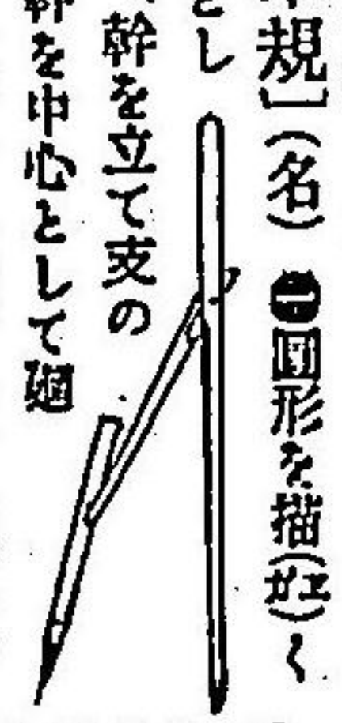
ふんぼ-の-ち［墳墓地］(名) ㊀はかどころ。はかば。㊁祖先の墳墓ある所、即ち故鄉。

⌒**ふん-ぼん**［粉本］(名) 畫の下書き。

⌒**ぶん-まい**［分米］(名) 子弟などに祿米を分くること。

⌒**ふん-まつ**［粉末］(名) こな。こ。

ぶん-まはし（ワシ）［筆規］(名) ㊀圓形を描(ヱガ)く具、直き竹片を幹とし幹に支(エダ)を裝置す、幹を立て支の端に筆などをつけ幹を中心として廻轉すれば、筆はこれに從ひて圓形を描く、幹のずらざるため其端に針をつく。㊁まはり舞臺。



［しはまんぶ］

〜**ふん-ま・へる**（マエル）〔へ、へ、へる、へる、へれ、へよ〕(他、は下一)「ふまへる」に同じ。

⌒**ふん-まん**［忿懣］(名) いきどほりもだゆること。いかりなやむこと。

⌒**ふん-みやう**（ミヨウ）［分明］(名) 次條に同じ。

⌒**ぶん-みやう**（ミヨウ）［分明］(名) あきらかなること。はっきりせること。明白。

⌒**ぶん-みやく**［文脈］(名) 文章のすぢ。

⌒**ぶん-みやく**［分脈］(名) わかれたる脈。

⌒**ふん-むき**［噴霧器］(名) 霧をふき出さする器械。きりふき。

⌒**ぶん-めい**［文明］(名) 人智開け進みて百般の事物とゝのひ備はりて野蠻的狀態に遠ざかれる現象。世の中の開けたること。——**かいくわ**［文明開化］(名)「ぶんめい」(文明)に同じ。——**し**［文明史］(名) 文明の發達變遷の歷史。

⌒**ぶん-めい**［文名］(名) 文章に達したりとの評判。

⌒**ぶん-めん**［文面］(名) 文章又は手紙の上に記せる趣意。

卄**ふん-や**［文屋］(名) 學問所。

⌒**ぶん-や**［分野］(名) ㊀境涯。境遇。「瓜島の——を見よ」。㊁支那の古昔、其全土を天の二十八宿に配當して區別したる稱。

⌒**ぶん-や**［文野］(名) 文明と野蠻。

ぶんや-ぶし［文彌節］(名) 淨瑠璃節の一流、元祿年中、岡本文彌の始めたるもの。

⌒**ふん-ゆう**［奮勇］(名) 勇氣をふるひおこすこと。ふるひいさむこと。

⌒**ぶん-よ**［分與］(名) わかちあたふること。

⌒**ぶん-らい**［蚊雷］(名) 多くの蚊の集まりたる聲の高く聞ゆること。

⌒**ふん-らん**［紛亂］(名) まぎれみだるゝこと、いりみだるゝこと。(混亂)。

⌒**ぶん-らん**［紊亂］(名) みだるゝこと。又、みだすこと。

⌒**ぶん-り**［文理］(名) ㊀すぢめ。きめ。あや。㊁文章のすぢ。

⌒**ぶん-り**［分離］(名) わかれはなるゝこと。又、わけはなすこと。——**たう**（トウ）［分離島］(名)【地】もと大陸の一部たりしものが、地盤陷落のために、分離して島となりしもの、我日本國の如きこれなり。

⌒**ぶん-りう**［分流］(名) ㊀わかれながるゝこと、又、其川。えだがは。㊁えだ。わかれ。

⌒**ぶん-りつ**［分立］(名) 別に立て設くること。又、わかれて存在すること。

⌒**ぶん-りやう**（リヨウ）［分量］(名) ㊀目方(メカタ)のたか。かさ。㊁區分の度。ほど。

⌒**ぶん-りやく**［文略］(名) 文句をはぶくこと。

⌒**ぶん-りよく**［分力］(名)【理】一つの力が他の或數個の力の合力なるとき此數個の力の初めの力に

對する稱。

(**ぶん-りん**[文林](名) ㊀文學者のなかま。㊁詩歌・文章を多くあつめたるもの。

(**ぶん-るゐ**[分類](名) 種類によりて區別を設くること。

(**ぶん-れい**[奮勵](名) ふるひはげむこと。

(**ぶん-れい**[文例](名) 文章の書方の例。

(**ぶん-れつ**[分裂](名) わかれさくること。われさくること。

(**ぶん-れつ**[分列](名) わかれならぶこと。又、わかれならばすこと。 **—しき**[分列式](名) 觀兵式にて、隊形を分列して貴顯の前を通過する時、規定の敬禮をなして通過し其觀閲に供すること。

(**ぶん-わ**[文話](名) 文章に關する談話。

(**ぶん-ゐ**[文位](名) 勳位に對して普通の位の稱。

(**ぶん-ゐ-き**[雰圍氣](名) 地球又は他の天體を圍繞する氣、即ち空氣。

(**ぶん-ゐん**[分韻](名) 詩會などにて、豫め各人の使用する韻を定めおきて詩を作ること。

(**ふん-ゑん**[憤怨](名) いきどほりうらむること。

(**ぶん-ゑん**[文苑](名) 「ぶんりん」(文林)に同じ。

へ　べ　ぺ

へ 喉音H即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を通ずれば發する音と、母音「エ」との綴音。

べ 「へ」の濁音、すべて「へ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、古來「へ」の濁音となしゝは誤なり。

ぺ 脣的破裂音P即ち兩脣を閉ぢて破裂せしむる音と、母音「エ」との綴音、古來「へ」の半濁音となしゝは誤なり。

卄**へ**[戸](名) 人家。「一主」。

卄**へ**[綜](名) いとかけ。かさり。

卄**へ**[瓮](名) かめ。もたひ。「齋—」。

卄**へ**[竈](名) かまど。

へ[舳](名) 船の頭。へさき。

へ[屁](名) 腸胃中の瓦斯の肛門より洩るゝもの。 **—とも おもはぬ** 輕んじて眼中に置かず。

へ[邊](名) はた。ほとり。

へ（ェ）[方](助) 方向を示すに用ふる語。「前—行く」。

—へ（ェ）[重](接尾) かさなり。かさ。「七—八—」。

—へ（ェ）[方](接尾) 其方。其むき。かた。「ゆく—」。

—べ[方](接尾) 前條に同じ。「あと—」「上—」。

—べ[邊](接尾) はた。ほとり。「海—」。

—べ[部](接尾) くみ。むね。とも。「忌—」「下—」。

ページ[頁=Page](名) 書籍・帳簿などの紙の片面。 **—すう**[頁數](名) 頁を追ひて記るしたる數。ちやうづけ。 **—ずり**[頁摺](名) 活版にて、棒摺に組みたるものを移して一定の框(ワク)に入れ、頁に摺り得るやうに組みたるもの。

ベースボール[Baseball](名) 一種の遊戲、九人づゝ二組に分れ、交はる〴〵一は守手となり一は攻手となりて行ふもの、正方形の線路の各隅に、第一・第二・第三の四壘(ベース)を設け、第四壘を打球場とし、攻手のもの交はる〴〵これに立ち、其背後に受球者立つ、他の三個の壘には、守手のもの一人づゝ立つ、投球者は線路の對角線の交叉點に[illegible]攻手は投球者より投ぐる球を打ち、線路に從つて第一・第二・第三と敵壘を踏ひて通過し第四壘に復せんとし、守手はこれを妨げて通過せしめざらんとす、攻手は打ちたる球の地に落ちざる間に守手の手に入るか、若しくは地に落つるとき敵壘に趨く迄に其壘の守手の手に入れば通過することを得ず、攻手首尾よく球を打ち悉く敵壘を踏ひて通過したるときは勝の一點となり、若し通過し得ざるときは敗の一點となる、敗の三點を取るときは攻守交代してこれを行ふ、斯くて九回に及び、最後に點數を計算して勝敗を決す。

ペーパー[Paper](名) ㊀洋紙。㊁商品に貼附する紙、商標又は繪などを摺りたるもの。㊂硝子の粉を糊づけとしたる紙、金屬を研くに用ふ。

へ-あが-る（らりるるれれ）[歷上](自、ら四) 下より順をへてのぼる。なりいづ。

(**へい**[塀](名) ㊀かき。かこひ。㊁板塀の特稱。

(**へい**[兵](名) ㊀武器。戰具。㊁軍勢。軍士。㊂軍事。戰事。㊃たゝかひ。戰爭。

(**へい**[弊](名) ㊀つひえ。害惡。「—害」。㊁やぶれ。敗殘。㊂くるしみ。

(**へい**[幣](名) ㊀ぬさ。にぎて。㊁つかひもの。みつぎもの。「—を厚うしてこれを招く」。

(**へい**[丙](名) 十干の一、ひのえ。

〜**へい**(感) 應答の聲、はい。

(**へい—**[弊](接頭) 自家の物事に冠して、謙遜の意を表はす語。「—屋」「—國」「—店」。

〜**べい**[可](助) 「べし」の音便。「逃る—」「よかん—」。

(**へい-あひ**（アイ）[嬖愛](名) 特別にかはゆがること。

(**へい-あん**[平安](名) 無事にしておだやかなること。

[illegible]

桓武天皇が平安(京都)に遷都したまひしより、鎌倉時代まで前後四百餘年間の稱。

(**へい-い**[平夷](名) ㊀高低なきこと。たひらなること。㊁おだやかなること。やすらかなること。

(**へい-い**[平易](名) むづかしからざること。たやすきこと。やさしきこと。

(**へい-い**[秉彝](名) つねの道により從ひて行ふこと。

(**へい-い**[兵衣](名) ㊀戰時の衣服。㊁兵士の衣服。

(**へい-い**[敝衣](名) やぶれたるころも。

(**へい-いう**[併有](名) あはせもつこと。あはせとること。

(**へい-いう**[怲憂](名) うれひ。しんぱい。

(**へい-いふ**（ユウ）[弊邑](名) ㊀自分のむら。㊁自分の食邑。

(**へい-えい**[兵營](名) 兵士のたむろする營所。 **—ち**[兵營地](名) 兵營の所在地。

(**へい-えき**[兵役](名) 國民の義務として、兵士となり軍隊に編入せられ軍事に服すること、 **—めんぢよ**[兵役免除](名) 廢疾又は不具の者に對して兵役を免除すること。

(**へい-か**[兵家](名) ㊀戰事にたづさはる人。㊁兵法を修むる人。

(**へい-か**[弊家](名) 自分の家の謙稱。

(**へい-か**[陛下](名) 天皇及太皇太后・皇太后・皇后を呼び奉る尊稱。

(**べい-か**[米價](名) 米のねだん。

(**へい-がい**[弊害](名) あしきこと。

(**へい-かう**（コウ）[平高](名) 底深く小さき土器。

(**へい-かう**（コウ）[閉校](名) 學校の授業を休止すること。

(**へい-かう**（コウ）[閉梗](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。

(**へい-かう**（コウ）[嬖幸](名) お氣にいり。

(**へい-かう**（コウ）[並行](名) 相ならびて行くこと、又、ならび行はるゝこと。

(**へい-かう**（コウ）[平行](名) 【數】二つの直線が同一平面にありて、これを何程延長すとも出會はざること。又、一つの線を何程延長すとも、一つの平面と出會はざること。又、二つの平面がこれを何程延長すとも相會せざること。 **—しへんけい**[平行四邊形](名) 【數】二雙の相對する邊の互に平行せる四邊形。 **—せん**[平行線](名) 【數】平行直線に同じ。 **—ちよくせん**[平行直線](名) 【數】互に平行せる直線。 **—ぶんりよく**[平行分力](名) 【理】力の方向が或直線或は平面と平行なるもの。 **—へいめん**[平行平面](名) 【數】互に平行せる平面。 **—みやく**[平行脈](名) 【植】葉脈の平行せるもの、禾本科に屬する植物の葉脈の如きこれなり。 **—めん**[平行面](名) 【數】平行平面に同じ。 **—ろくめんたい**[平行六面體](名) 【數】相對する面がそれ〴〵平行せる六面體。

(**へい-かく**[平角](名) 【數】二つの邊が頂點の兩側にありて同一の直線上にある角。

(**へい-かく**[兵革](名) ㊀兵器と甲冑と。㊁戰爭。たゝかひ。

(**へい-がく**[兵額](名) 兵士の數。

(**へい-がく**[兵學](名) 軍事の學問。軍學。

(**へい-がく-かう**（ガツコウ）[兵學校](名) ㊀陸軍又は海軍の將校を養成する學校。㊁海軍兵學校の略稱。

(**へい-かく-きん**[閉殼筋](名) 【動】軟體動物中瓣鰓類に屬するものゝ其介殼を閉づるための筋、即ち貝の肉柱。

(**へい-かふ**（コウ）[兵甲](名) ㊀武器と甲冑と。㊁武器を携へ甲冑を着するもの、兵士。

(**へい-がふ**（コウ）[併合](名) あはすること。一つにすること。

(**へい-かん**[平杆](名) 器械體操に用ふる器械、左右各二本づゝの柱を樹(タ)て、横に二本の棒をわたしたるもの。

(**へい-かん**[兵艦](名) いくさぶね。兵船。

(**へい-かん**[病間](名) 「びやうかん」に同じ。

(**へい-き**[兵器](名) いくさだうぐ。武器。

(**へい-き**[兵機](名) たゝかひの機會。

(**へい-き**[併起](名) ならびおこること。

(**へい-き**[平氣](名) ㊀心氣をおちつけておだやかにすること。又、おちつきておだやかなる心氣。「虛心—」。㊁頓着せぬこと。臆せざること。感ぜざること。

〜**—の-へいざ**[平氣平三](名) 少しも頓着せざること。毫も臆せざること。

(**へい-きよ**[閉居](名) 家にこもりをること。籠居。

(**へい-きよ**[並居](名) ならびてすまふこと。

(**へい-きよ**[屏居](名) しりぞきてこもりゐること。

(**へい-きよ**[屏去](名) しりぞけさること。

(**へい-きやう**（キヨウ）[弊鄕](名) 自分の鄕里の謙稱。

(**へい-きん**[平均](名) ㊀不同なきこと。ひとしきこと。㊁不同なきやうにすること。ならすこと。㊂【數】種々の同種の量の中間の値を有する量の稱。又、相加平均の稱。 **—じ**[平均時](名) 【天】平均正午を基點として算する平均太陽時、時計は平均太陽の運動によりて調整するものにして、平均時を表示す。 **—しやうご**（シヨウ）[平均正午](名) 【天】平均太陽が子午線を經過する時刻。 **—すう**[平均數](名) 相加平均の數、種々の數の中間の値を有する數。 **—てん**[平均點](名) 各科の點數の總和を科目數にて除したる數。

(へいきん-たいやう（ヨウ）[平均太陽](名)【天】太陽と共に春分點を出て不變の速さにて赤道上を運動し、再び太陽と共に春分點に會するものとする假想的太陽。——じ[平均太陽時](名)【天】平均太陽の時角によりて算する時間。——じつ[平均太陽日](名)【天】太陽日の一年間の平均、即ち二十四時間。

(へい-ぐ[兵具](名) いくさだうぐ。武具。

(へい-ぐわ[兵戈](名) ㊀はものとほこと。又、いくさだうぐ。干戈。㊁たゝかひ。戰爭。

(へい-くわ[兵火](名) 戰爭のためにおこる火災。(兵燹)。

(へい-くわ[瓶花](名) はないけのいけばな。

(へい-ぐわ[平臥](名) ㊀横にねること。㊁病みて床につくこと。

(へい-くわい[閉會](名) 會を止むること。——しき[閉會式](名) 無事の閉會を祝して行ふ儀式。

(へい-くわつ[平滑](名) たひらかにしてすべすべすること。

(へい-くわつ[平濶](名) たひらかにしてひろきこと。

(へい-けい[炳炯](名) あきらかなること。ひかること。

(へい-げい[埤堄](名) 篩眼を設けある城の上の垣。

(へい-げい[睥睨](名) ㊀にらむこと。㊁ながしめに見ること。㊂うかゞふこと。

へいけ-がに[平家蟹](名)【動】蟹の一種。西海に生ず。脚細く長短不同にして、甲殼は人面の狀をなす。古昔、西海に投死したる平家の一族の怨魂の化せるものといひ傳へたるより此名あり。(鬼面蟹)。

(へい-げき[兵戟](名) ㊀「へいくわ」(兵戈)に同じ。㊁はこを持ちて宮殿の階下を衛るもの。

(へい-けん[平絹](名) 段(ケ)のなき絹布。ひらぎぬ。

(へい-けん[兵權](名) ㊀兵馬の權力。㊁軍隊又は艦隊を指揮する職權。

(へい-けん[柄權](名) 隨意に處理する威力。いきほひ。

(へい-げん[平原](名) 平坦なるひろき土地。

へい-げん-の-とくいう[平原督郵](名) 惡しき酒の稱。

(へい-こ[兵庫](名) 兵器などをさめおくくら。武庫。

(へい-こ[鼙鼓](名) 戰陣の合圖に用ふる太鼓。

(へい-こ[兵鼓](名) 戰場に用ふるつゞみ。

(へい-こ[閉戸](名) ㊀戸をとざすこと。㊁とぢこもり居ること。

(へい-ご[屏語](名) 人をさりぞけてひそかに語ること。

(へい-ご[兵語](名) 軍事上の用語。

(へい-こう[閉口](名) ㊀口をとぢて答へぬこと。㊁こまること。へこむこと。㊂屈從すること。したがふこと。

(へい-こく[弊國](名) 自分の國の謙稱。

(へい-ごく[狴獄](名) ひとや。らうや。

(べい-こく[米穀](名) こめ。こくもつ。——とりひきじよ[米穀取引所](名) 米相場師が米穀の取引をなす所。

(へいこ-せんせい[閉戸先生](名) 家内にとぢこもりて外出せざる人。

(へい-さ[閉鎖](名) とざすこと。とづること。

(へい-さ[平沙](名) 平かなる沙原。

(へい-ざ[平坐](名) やすらかにすわること。安坐。

(へい-さう（ソウ）[兵曹](名) 海軍の下士官。——ちやう（チヨウ）[兵曹長](名) 海軍の准士官。

(へい-ざう（ゾウ）[閉藏](名) ㊀とざしをさむること。㊁ひそみかくるゝこと。

(へいさ-き[閉鎖機](名) 砲に彈藥を裝塡したる後にとざす器。

ヘイサラバサラ[鮓荅](名)（オランダ語 Pedra(石) Bezoar(獸)の訛）牛馬などの腹中に生ずる石塊、淡黑色にして下劑に供せらる。

(へい-し[兵士](名) 身を軍隊に委ねて將校に附屬し、戰爭に出づる職分のもの、いくさびと。つはもの。

(へい-し[平士](名) ひらざむらひ。

(へい-し[斃死](名) たふれ死ぬること。

卄(へい-し[瓶子](名) 德利の古稱。

(へい-じ[兵事](名) 軍隊に關する事柄。又、戰爭に關する事柄。

(へい-じ[平時](名) ㊀平和なるとき。おだやかなるとき。㊁つねの時。ひごろ。

(へいしき-たいさう（ソウ）[兵式體操](名) 軍隊なる歩兵操練を教育上に應用したる體操。

(へい-じつ[平日](名) ㊀つねの日。㊁ふだん。平生。

(へい-しふ（シュウ）[弊習](名) よろしからざるならはし。

(へい-しや[弊舍](名) ㊀やぶれたるいへ。あばらや。㊁自分の家の謙稱。

(へい-しや[兵舍](名) 兵士のやどるいへ。

(へい-しや[兵車](名) 戰爭用のくるま。

(へい-しや[平沙](名) 「へいさ」に同じ。

(へい-しやう（ショウ）[屏障](名) ㊀ふさぎ。へだて。㊁びやうぶ、ついたてなどの稱。

(へい-じやう（ジョウ）[平常](名) つね。ふだん。ひごろ。

(べい-しやう（ショウ）[米商](名) 米のあきなひ。

(へいしや-とうえい-はふ（ホウ）[平射投影法](名)【地】視點を地球表面上に置きて地球を見たりとする地圖の製作法。

(へい-しゆ[併取](名) あはせとること。

(べい-じゆ[米壽](名) 八十八歲の賀のいはひ、米の字を分くれば八十八となるより名づく。

(へい-じゆう[兵戎](名) ㊀つはもの。兵器、軍備、兵士。㊁たゝかひ。戰爭。

卄べい-じゆう[陪從](名) 祭祀を行ふ地下の樂人。

(へい-しゆつ[平出](名) 文中に敬ふべき字のあるとき、次の行に上げてかくこと。

(へい-しゆつ[併出](名) ならびいづること。

(へい-じゆつ[兵術](名) 戰爭の術。

(へい-じゆん[平準](名) ㊀たひらかなること。ひとしきこと。㊁みづもり。水準。——てん[平準點](名) 物事の平準を得る個所。

(へい-しよ[兵書](名) 兵學の書。

(へい-じよ[平叙](名) いろつやをつけずにのぶること。

(へい-しよう[併稱](名) あはせてとなふること。

(へい-しよく[兵食](名) 兵士の食糧。

(へい-しん[嬖臣](名) お氣に入りの臣下。

(へい-しん[平心](名) たひらかなる心。わだかまりなき心。

(へい-しん[平信](名) つねのたより。無事のおとづれ。

(へい-じん[兵刃](名) やいば。しらは。——をまじふ[交兵刃](名) きりあふ。きりむすぶ。

(へい-じん[嬖人](名) お氣に入りの人。

(へいしん-ていとう[平身低頭](名) ひれふしてかしらをさぐること。

へい-す（せ、し、す、する、すれ、せよ）[聘](他、さ變) ㊀禮物をもって訪ふ。おとづる。㊁禮儀を具へて迎ふ。むかふ。㊂納徴(ナフチ)を致して娶る。めとる。

(へい-すゐ[瓶水](名) かめの水。

(へい-すゐ[平水](名) 川などのつねの水かさ。

(へい-すゐ[萍水](名) ㊀うきくさと水と。㊁互に流浪するもの。——あひあふ[萍水相逢] 互に流浪せるものが、偶然他鄕にてであふにいふ。

(へい-せい[平靜](名) おちつきてしづかなること。おだやかなること。

(へい-せい[弊政](名) 弊害多きまつりごと。(秕政)。

(へい-せい[兵勢](名) 兵隊のいきほひ。

(へい-せい[兵制](名) 兵備の制度。

(へい-ぜい[平生](名) なみ〳〵のとき。ふだんのとき。ふだん。

(へい-せう（ショウ）[聘招](名) 禮儀を具へてむかへまねくこと。

(へい-せき[兵籍](名) ㊀軍人たる身分。㊁軍人たる身分に關する事項を登記する帳簿。

(へい-せふ（ショウ）[嬖妾](名) お氣に入りのめかけ。

(へい-せん[兵燹](名) 「へいくわ」(兵火)に同じ。

(へい-せん[兵船](名) いくさぶね。軍艦。

(へい-ぜん[炳然](名、副) あきらかなるさまにいふ語。

(へい-そ[平素](名) ㊀ふだん。つね。(平生、平常)。㊁むかしより。もとより。

(へい-そ[斃鼠](名) たふれて死せるねずみ。

(へい-そく[幣束](名) ごへい。にぎて。ぬさ。

(へい-そく[屏息](名) ㊀息をなるたけあらくせざること。㊁おそれはゞかりてちゞこまること。

(へい-そく[閉塞](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。——せん[閉塞船](名) 敵艦の出擊又は侵入を妨ぐるため、水中に沈めて港口を閉塞する船。——たい[閉塞隊](名) 船を沈めて敵の港口を閉塞するために派遣せらるゝ部隊。

(へい-ぞく[弊俗](名) よからぬならはし。

(へい-そつ[兵卒](名) ㊀身分低きいくさ人。軍人。㊁陸軍にて、下士以下の兵の稱。

(へい-そん[弊村](名) 自分のむらの謙稱。

(へい-たい[兵隊](名) ㊀軍兵の一隊。㊁ぐんそつ。兵士。

(へい-たいやう（ヨウ）[平太陽](名)【天】平均太陽に同じ。——じつ[平太陽日](名)【天】平均太陽日に同じ。

(へい-だう（ドウ）[兵道](名) 兵事のみち。兵法。

(へい-たく[弊宅](名) 自分のうちの謙稱。

(へい-たん[平旦](名) よあけ。黎明。

(へい-たん[平坦](名) 土地の平らなること。

(へい-たん[兵端](名) 戰爭のいと口。(戰端)。

卄べい-だん[餅餤](名) 古代の食物、蔬菜及鴨鵝の卵を裹(ツヽ)みて方形に切りたる餅。

(へいたん-せん[兵站線](名) 戰地にある軍隊と兵站部との聯絡線。

(へいたん-ぶ[兵站部](名) ㊀戰地にある軍隊の後方にありて、軍需の輸送又は收容を取扱ふ所。㊁すべて國庫を支出する所の稱。

(へい-ち[平地](名) たひらなる地。ひらち。

(へい-ぢ[平治](名) たひらかにをさまること。又、たひらかにをさむること。

(へい-ちつ[閉窒](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。

へい-ぢう-もん[屏中門](名) 表門と母屋との間にある門。(屏重門、中門)。

(へい-ぢやう（ジョウ）[平定](名) たひらぎ定まること。又、たひらげ定むること。

(へい-ぢやう（ジョウ）[兵仗](名) ㊀武器。兵器。㊁武器を携ふる隨身。

(へい-ぢやう（ジョウ）[閉場](名) 會場を閉づること。會を休止すること。——しき[閉場式](名) 閉場のいはひに擧行する儀式。

(へい-ぢよ[屏除](名) さりぞけのぞくこと。

(へい-ちよう[聘徵](名) 禮を厚くしてめし出すこと。
(へい-てい[兵丁](名) 兵役に服する壯丁。
(へい-てい[平定](名)「へいぢやう」に同じ。
(へい-てい[閉廷](名) 裁判廷をとづること。裁判又は審理を休止すること。
(へい-てん[閉店](名) みせをとづること。あきなひをやむること。
(へい-てん[弊店](名) 自分の店の謙稱。
(べい-てん[米點](名) 樹木又は山谷などを點を打つて描(ヱガ)きあらはすこと、夏日の山水などに多く用ひらる。
(へいてん-せん[兵站線](名)「へいたんせん」に同じ。
(へいてん-ぶ[兵站部](名)「へいたんぶ」に同じ。
(へい-とう[弊竇](名) あしきこと。つひえ。
(へい-どう[平等](名)「びやうどう」に同じ。
(へい-とん[兵屯](名) 兵士のたむろ。
(へい-どん[幷呑](名) 一つに取り入るゝこと。あはせ取ること。
(べいなう-くわ[米囊花](名)【植】「けし」に同じ。
(べい-なふ[米納](名) 米を租稅に納(オサ)むること。金納の對。
(へい-にん[平人](名) 位なきたゞの人。ひらびと。なみのひと。
(へい-ねい[嬖佞](名) おきに入りのねぢけびと。
(へい-ねん[平年](名) 閏なき年、即ち三百六十五日なる年。
(へい-ば[兵馬](名) ㊀兵器と軍馬と。㊁たゝかひ。戰爭。㊂軍備。軍隊。
(へい-はい[弊憊](名) くるしみつかるゝこと。
(へい-はう[弊邦](名) 自分の國の謙稱。

(へい-はう[平方](名)【數】(い)自乘の稱。(ろ)正方形の面積の稱。——けい[平方形](名)【數】「せいはうけい」(正方形)に同じ。——こん[平方根](名)【數】甲數を自乘して乙數を得たるとき、甲數を乙數に對していふ稱。
(べい-はう[米苞](名) こめだはら。米俵。
(へい-はく[幣帛](名) ㊀ぬさ。にぎて。㊁進物の帛。禮物の帛。㊂轉じて、進物又は禮物の稱。
(べい-ばく[米麥](名) ㊀こめとむぎと。㊁轉じて、穀類。
(へい-はつ[併發](名) ㊀ならびておこること。㊁ならべてはなつこと。
へいば-の-けん[兵馬權](名) 全國の軍隊を統轄する權力。
(へい-はふ[兵法](名) 軍隊は又戰爭に關する諸種の方法。ひやうほふ。
(へい-はん[平反](名) 再び訴訟をとりしらべて冤枉なからしむること。
(へい-ばん[平板](名) ㊀種を蒔くため地をならす農具。㊁詩文などの變化に乏しく趣味なきこと。
(へい-ばん[平盤](名) たひらなる盤面。
(べい-はん[米飯](名) こめのめし。
(へい-び[兵備](名) 軍事上の準備。
(へい-ふ[斃仆](名) たふれ死ぬること。
(へい-ぶ[平蕪](名) 雜草の生ひしげれる平野。
(へい-ふう[屛風](名) びやうぶ。
(へい-ふう[弊風](名) 惡しき風俗。
(へい-ふく[平服](名) ㊀平常著(キ)る衣服。ふだんぎ。禮服の對。㊁常人の著(キ)る衣服。制服の對。
(へい-ふく[平伏](名) ひれふすこと。
(へい-ふく[平復](名) 身體のつねにかへること。病氣のなほること。平癒。

(へい-ぶつ[幣物](名) おくりもの。禮物。(聘物)。
(へい-ぶん[平分](名) ㊀平均にわくること。ひとしくわくること。㊁平均にわかるゝこと、ひとしくわかるゝこと。「晝夜—」。——せん[平分線](名) もの、平分せらるゝ線。
(べい-ふん[米粉](名) こめのこ。
(へい-へい[聘幣](名) おくりもの。禮物。
(へい-へい[平平](名、副) ㊀平凡にして取るに足らざるさまにいふ語。㊁たひらかなるさまにいふ語。——たんたん[平平坦坦](名、副) 前條(二)に同じ。——ぼんぼん[平平凡凡](名、副) 前々條(一)に同じ。
(ぺい-ぺい(名) 地位低く又は伎倆つたなきものをあざけりていふ語。「—役者」「—相撲」。
(へい-へん[平扁](名) ひらたきこと。
(へい-ほ[弊舖](名) 自分のみせの謙稱。
(へい-ぼ[兵簿](名) 兵士の名簿。
(へい-ほう[兵鋒](名) ㊀はもの、きつさき。㊁進み來る軍隊のいきほひ。
(へい-ぼん[平凡](名) つねなみにて少しも勝(スグ)れたる所無きこと。又、其もの。
(へい-まん[屛幔](名) 幕の類。
(へい-みやく[平脈](名) つねの脈搏。
(へい-みん[平民](名) ㊀官位なきなみの人民。㊁族籍上士族の次に位するもの、されど權利・義務乃至待遇に關しては士族に異ならず。㊂貴族以外の人民の總稱。——しゆぎ[平民主義](名) 位階族籍を重んぜず貴賤上下の差別なく平等にこれを取扱ひて萬事の手輕なる主義。
(へい-めい[平明](名) 夜のひきあけ。よあけがた。
(へい-めん[平面](名) ㊀平かなる表面。㊁【數】表面の一、其上に何れの二點を取るとも、これを結びつくる直線が、常に其表面上にあるもの。——かく[平面角](名)【數】角の稱、角をなす二直線は必ず一平面上にあるを以て立體角に對していふ。——きかがく[平面幾何學](名)【數】平面上に畫きたる圖形に就きて研究する幾何學。——けい[平面形](名)【數】線を以て圍みたる平面の一部分。——さんかくはふ[平面三角法](名)【數】三角法の一科、平面上三角形にのみ適用し得る三角法。——たいしよう[平面對稱](名)【數】「めんたいしよう」(面對稱)に同じ。——づけい[平面圖形](名)【數】平面形に同じ。——び[平面美](名) 繪畫などの美。

(へい-もく[蔽目](名) 目をおほひふさぐこと。
(へい-もく[閉目](名) ㊀目をとぢふさぐこと。㊁死去すること。
(へい-もつ[幣物](名)「へいぶつ」に同じ。
(へい-もん[閉門](名) 德川時代の士族の閏刑、蟄居よりは輕く逼塞(ヒツソク)よりは重し、百日ばかりのあひだ門を閉ぢ、奴僕の出入をも許さゞりしもの。
(へい-もん[聘問](名) 幣物をたづさへて訪問すること。
(へい-や[平野](名) 平地なる野原。たひら。
(へい-やく[兵厄](名) 戰爭のわざはひ。
(へい-ゆ[平癒](名) 病氣のなほること。全快。
(へい-よう[併用](名) あはせ用ふること。
(へい-よう[閉壅](名) とぢふさぐこと。又、とぢふさがること。
(へい-ら[薜蘿](名) つたかづら。ふぢかづら。
(へい-らい[平禮](名)「さむらひゑぼし」の異稱。
(へい-らん[兵亂](名) いくさおこりてみだるゝこと。

写

(べい-りふ[米粒](名) ㊀こめつぶ。㊁ちひさきこと。
(へい-りやく[兵略](名) 軍事上の智略。
(へい-りよく[兵力](名) 軍隊のちから。
(べい-りん[米廩](名) こめぐら。
(へい-れい[聘禮](名) ㊀人を呼び迎ふるための禮物。㊁婚姻の約束のしるしの禮物。ゆひなふ。
(へい-れつ[並列](名) ならぶこと。又、ならばすこと。
(へい-ろ[弊廬](名) 自分の家の謙稱。
(へい-ろう[閉籠](名) とぢこもり。
(へい-わ[平話](名) 普通のはなし。俗談。
(へい-わ[平和](名) ㊀平かに治まること。波風たゝぬこと。おだやかなること。㊁すなほにしておだやかなること。「性質—」。——だんぱん[平和談判](名) 平和條約を締結するための談判。——でうやく[平和條約](名) 交戰國間に其交戰を止めて、平和に復することを目的として締結する條約。
(へい-ゐ[兵威](名) 軍隊の威力又は威光。
(へい-ゐん[兵員](名) 兵士のかず。
(へい-ゑん[平遠](名) 平地にして遠く打開けたるながめ。「山水—」。
(へい-をく[弊屋](名) 自分のいへの謙稱。
(へい-をん[平穩](名) たひらかにしておだやかなること。やすらか。
(へう[雹](名)「ひよう」に同じ。
(へう[豹](名)【動】食肉類中猫科に屬する獸、「アジア」大陸及「アフリカ」などに產す、形虎に似て稍や小さし、背部は赤黃色にして環狀の斑紋あり、腹部は白色にして、走行極めて迅速なり、性兇暴にして他の獸を捕食す。

(へう[瓢](名) ひさご。へうたん。
(へう[表](名) ㊀君王又は官府に奉る文書。「出師の—」。㊁物事の要を摘み順を追ひ列記して見易からしめたるもの、多く縱橫の線內に記入す。「年—」。㊂うへ。おもて。㊃そと。外面。㊄うはぎ。外衣。㊅しるし。標識。㊆のり。模範。㊇ひかげはしら。晷。
(へう[標](名) ㊀しるし。めじるし。㊁まと。㊂はしら。
(へう[俵](名) たはら。
(—へう[俵](接尾) たはらに入れたる物を數ふる語。「炭一—」。
(べう[廟](名) ㊀おたまや。みたまや。㊁やしろ。ほこら。㊂ごてん。朝廷。「—堂の君子」。
(べう[眇](名) すがめ。
(べう[秒](名) 角度の一分及時間の一分の六十分の一。
卄べう[可](助動)「べく」の音便。
(へう-い[表衣](名) うはぎ。
(べう-う[廟宇](名) ㊀おたまや又はやしろののき。㊁おたまや又はやしろ。
(べう-えい[苗裔](名) 末々のちすぢ。子孫。(後胤)。
(へう-えう[飄搖](名) ひるがへりうごくこと。又、ひるがへしうごかすこと。
(へう-かう[剽狡](名) あら〳〵しくずるきこと。又、すばやくわるがしこきこと。
(へう-がう[表號](名) しるし。めじるし。(標號)。
(へう-かく[嫖客](名) うかれを。
(へう-かん[剽悍](名) すばやくたけきこと。あら〳〵しくたけきこと。
(へう-き[表記](名) ㊀表面にしるすこと。㊁しるしかくこと。あらはしかくこと。「價格—」。
(へう-き[標記](名) しるしとしたる符號。

⌒へうき（ヒヨウ）［標旗］（名）しるしばた。

⌒へうぎ（ヒヨウ）［嫖妓］（名）うかれめ。

⌒べうぎ（ビヨウ）［廟議］（名）廟堂の評議。

〰へうきん（ヒヨウ）［剽輕］（名）氣輕くして突飛なること。——もの［剽輕者］（名）へうきんなる性行の人。

⌒べうきん（ビヨウ）［描金］（名）金粉の蒔繪。

⌒へうぐ（ヒヨウ）［表具］（名）紙又は布帛などを糊にて貼（ハ）りて細工すること。又、其細工のさま。表裝。——し［表具師］（名）表具を業とする人。——や［表具屋］（名）表具を業とする人又は家。

⌒べうぐわ（ビヨウ）［描畫］（名）ゑがくこと。

⌒へうぐう（ヒヨウ）［漂寓］（名）さすらひてとまること。

〰へうげ（ヒヨウ）［剽輕］（名）へうげること。おどけ。ふざけ。

⌒へうけい（ヒヨウ）［表掲］（名）あらはしかゝぐること。

⌒へうけい（ヒヨウ）［剽輕］（名）㊀あさはかにしてかろ〲しきこと。㊁すばやきこと。身輕（ミガル）なること。

⌒へうけつ（ヒヨウ）［表決］（名）各議員が議案に對して、可否の意見を發表すること。

〰へうげる（ヒヨウ）［剽輕（げ・げ・げる・げる・げれ・げよ）］（自、か下一）氣輕にしておどける。ふざける。

⌒へうげん（ヒヨウ）［表現］（名）あらはすこと。しめすこと。

⌒べうこつ（ビヨウ）［秒忽］（名）極めてすくなき量。

⌒へうさう（ヒヨウソウ）［表裝］（名）「へうぐ」（表具）に同じ。（裝潢）。

⌒べうさく（ビヨウ）［廟策］（名）廟堂のはかりごと。

⌒へうさつ（ヒヨウ）［表札］（名）戸口などに掲（カ）げて戸主の姓名を記せる札。（門榜）。

⌒べうさん（ビヨウ）［廟算］（名）「べうさく」（廟策）に同じ。

⌒へうし（ヒヨウ）［表紙］（名）書籍の表面につくる厚き紙・革又は「クロース」等にて製す。（書皮）。

⌒へうし（ヒヨウ）［標紙］（名）しるしのかみ。

⌒へうし（ヒヨウ）［票子］（名）きって。てがた。

⌒へうじ（ヒヨウ）［表示］（名）外部に表白すること。あらはししめすこと。

⌒べうし（ビヨウ）［廟祀］（名）みたまやにまつること。又、やしろにまつること。

⌒へうしき（ヒヨウ）［標識］（名）しるし。めじるし。

⌒へうしき（ヒヨウ）［表式］（名）表示する一定のかた。

⌒へうしき（ヒヨウ）［縹色］（名）はなだいろ。

⌒へうしつ（ヒヨウ）［漂失］（名）流にたゞよひてなくなること。ながれうすること。

⌒へうしつ（ヒヨウ）［剽疾］（名）すばやきこと。てばやきこと。

⌒べうしや（ビヨウ）［廟社］（名）やしろ。ほこら。

⌒べうしや（ビヨウ）［描寫］（名）ゑがきうつすこと。

⌒へうしやう（ヒヨウシヨウ）［標章］（名）しるしとなす記號。しるし。

⌒へうしやう（ヒヨウシヨウ）［表彰］（名）あらはしてあきらかにすること。世にいちじるしきやうにすること。

⌒へうしやう（ヒヨウシヨウ）［表象］（名）㊀［心］意識中の過去の印象の再びあらはれ出づるもの。㊁「しやうちよう」（象徴）に同じ。——しゆぎ［表象主義］（名）「しやうちようしゆぎ」（象徴主義）に同じ。

⌒へうじやう（ヒヨウジヨウ）［表情］（名）心中の情を外貌にあらはし出すこと。——りよく［表情力］（名）表情するちから。

⌒べうしゆく（ビヨウ）［廟祝］（名）しんくわん。かんぬし。

⌒へうじゆん（ヒヨウ）［標準］（名）㊀めあて。めじるし。㊁のり。かた。——がく［標準學］（名）「きはんがく」（規範學）に同じ。——ご［標準語］（名）一國内の標準たるべき言語、我國にては、教育ある東京市民の語。——じ［標準時］（名）［地］交通上便利のため、一定の地點に於ける地方時を基礎として、これを一定の區域内に於ける時の標準となすもの。

⌒べうしよ（ビヨウ）［廟所］（名）おたまや。

⌒へうしよく（ヒヨウ）［縹色］（名）「へうしき」に同じ。

⌒べうしよく（ビヨウ）［廟食］（名）廟にまつらるゝこと。

へうすりは（ヒヨウ）［豹摺羽］（名）豹の毛皮の如き斑文ある矢の羽。

⌒へうせい（ヒヨウ）［表旌］（名）善德あるものをあらはして掲げ示すこと。

⌒へうせき（ヒヨウ）［標石］（名）㊀めじるしの石。㊁道しるべのために立てたる石。

⌒へうせき（ヒヨウ）［漂積］（名）たゞよひてよりつもること。

⌒へうせつ（ヒヨウ）［剽竊］（名）他人の說又は文句などをぬすみ取ること。

⌒へうぜん（ヒヨウ）［飄然］（名、副）㊀還（タヾヨ）ひて定まらぬさまにいふ語。㊁何氣なく立ち去るさま又は出で來るさまにいふ語。

⌒べうぜん（ビヨウ）［渺然］（名、副）㊀ひろくして目のとゞかぬさまにいふ語。㊁物のかずに足らぬ分際のさまにいふ語。

⌒へうそ（ヒヨウ）［瘭疽］（名）指又は手掌の病氣、創傷に汚物のはひるによりて生ず、痛み甚だしく膿（ウミ）をもちて次第にはびこるもの。

⌒へうぞく（ヒヨウ）［剽賊］（名）おひはぎ。

⌒へうだい（ヒヨウ）［表題、標題］（名）㊀書物の表記の名目。㊁演說又は話の題目。

⌒へうたう（ヒヨウトウ）［剽盜］（名）おひはぎ。

⌒へうたう（ヒヨウトウ）［漂蕩］（名）たゞよひうごくこと。

⌒べうだう（ビヨウドウ）［廟堂］（名）天下の大政の出づる所。朝廷。

⌒へうだつ（ヒヨウ）［剽奪］（名）はぎうばふこと。

⌒へうたん（ヒヨウ）［瓢箪］（名）㊀［植］葫蘆科に屬する植物、纏繞莖を有し、花は白色にして雄花は長き莖或商を有す、果實は上下膨大して圓形をなし中部にくびれをなす。（葫蘆）。㊁葫蘆の成熟せる果實のなかごを去り、酒などを入るゝ器となしたるもの。——からこま 道理上あり得られざる事即ちうそにいふ。——になまづ ずる〱脫けてとらへ所のなきさまにいふ。

⌒へうちやく（ヒヨウ）［漂着］（名）漂流して岸に着くこと。

⌒へうちゆう（ヒヨウ）［標註］（名）書物の欄外に註を入れたるもの、東洋にては上欄に、西洋にては下欄に加ふ。

⌒へうちゆう（ヒヨウ）［標柱］（名）しるしのはしら。

⌒へうてう（ヒヨウチヨウ）［漂鳥］（名）［動］食物を求めて居所を轉ずる鳥、即ちきつゝきの類。

⌒へうてき（ヒヨウ）［標的］（名）めじるし。まと。めど。（表的）。

⌒へうでき（ヒヨウ）［漂溺］（名）たゞよひおぼるゝこと。

⌒へうてん（ヒヨウ）［標點］（名）めじるしのぼち。又、めじるしの個所。

⌒へうど（ヒヨウ）［表土］（名）「かうど」（耕土）に同じ。

⌒へうとう（ヒヨウ）［標燈］（名）めじるしの燈火。

⌒へうどう（ヒヨウ）［漂動］（名）たゞよひうごくこと。

⌒へうはい（ヒヨウ）［標牌］（名）かけふだ。かんばん。

⌒へうはい（ヒヨウ）［票牌］（名）きって。ふだ。

⌒へうはい（ヒヨウ）［褾褙］（名）へうぐ。へうさう。

⌒へうばい（ヒヨウ）［標梅］（名）（詩經に出づ）よめいりの時の過ぎたること。

⌒へうばう（ヒヨウボウ）［標榜］（名）㊀かんばん。かけふだ。㊁かゝげあらはすこと。

⌒べうばう（ビヨウボウ）［渺茫］（名、副）かぎりなくひろきさまにいふ語。（渺渺）。

⌒へうはく（ヒヨウ）［漂泊］（名）㊀ながれたゞよふこと。（漂流）。㊁さすらひあるくこと。

⌒へうはく（ヒヨウ）［表白］（名）あらはしまうすこと。あらはしのぶること。

⌒へうはく（ヒヨウ）［漂白］（名）さらして白くすること。——ふん［漂白粉］（名）［化］消石灰に鹽素を通じて製したる白色の粉末、一種の臭氣を有し、木綿其他植物の纖維を漂白するに用ひらる。

⌒べうばく（ビヨウ）［渺邈］（名、副）「べうばう」に同じ。

⌒へうひ（ヒヨウ）［表皮］（名）㊀外部の皮。㊁動物の皮膚の內外二層ある外層の稱。

⌒へうび（ヒヨウ）［豹尾］（名）陰陽家にて祭る八將神の一、其方に向ひて畜類を求め又は大小便するなどを忌む。

⌒べうび（ビヨウ）［渺瀰］（名）はるかにつゞきわたること。

⌒へうふ（ヒヨウ）［漂浮］（名）たゞよひうかぶこと。

⌒へうふう（ヒヨウ）［飈風］（名）はやて。

⌒へうへう（ヒヨウヒヨウ）［飄飄］（名、副）㊀ひるがへるさまにいふ語。㊁あしもとのたしかならざるさまにいふ語。——らうらう（ロウロウ）［飄飄踉踉］（名、副）ひよろ〱。

⌒へうべう（ヒヨウビヨウ）［縹渺］（名、副）㊀かすかにしてとりとめがたきさまにいふ語。㊁次條に同じ。

⌒べうべう（ビヨウビヨウ）［渺渺］（名、副）ひろ〲として涯（カギリ）なきさまにいふ語。

⌒へうへん（ヒヨウ）［豹變］（名）（易經に出づ）心又は行の急にかはること。

⌒へうぼ（ヒヨウ）［漂母］（名）せんたくする老女。

⌒べうぼ（ビヨウ）［廟謨］（名）廟堂のはかりごと。

⌒へうぼく（ヒヨウ）［標木］（名）しるしの木。

⌒へうぼつ（ヒヨウ）［漂沒］（名）たゞよひしづむこと。

⌒へうほん（ヒヨウ）［標本］（名）みほん。かた。

⌒べうまん（ビヨウ）［渺漫］（名、副）とりとめなくひろきさまにいふ語。（淼漫）。

⌒へうめい（ヒヨウ）［表明］（名）あらはしてあきらかにすること。

⌒へうめん（ヒヨウ）［表面］（名）㊀おもて。うはべ。㊁［數］位置・長さ・幅ありて厚さなきもの。立體の境界。——ちやうりよく（チヨウ）［表面張力］（名）［理］液體の表面には恰も薄膜を貼（ハ）りたる如く、表面の大さを成るべく縮めんとする力作用す、此力を表面張力といふ。

⌒へうもく（ヒヨウ）［標目］（名）もくろく。へうだい。

⌒べうもく（ビヨウ）［眇目］（名）すがめ。

⌒へうもん（ヒヨウ）［豹文］（名）豹の毛皮の斑文。

⌒へうやう（ヒヨウヨウ）［漂漾］（名）たゞよふこと。

⌒へうやう（ヒヨウヨウ）［飄颺］（名）ひるがへりあがること。又、ひるがへしとばすこと。

⌒へうらく（ヒヨウ）［漂落］（名）おちぶるゝこと。れいらく。

⌒へうり（ヒヨウ）［表裏］（名）㊀おもてとうらと。うはべとうちと。㊁おもてとうらとの顚倒すること。㊂うはべとうちとの相違すること、「—の多い人」。㊃うらはら。反對。㊄ぐる。くみ。

⌒へうりう（ヒヨウ）［漂流］（名）たゞよひ流るゝこと。

⌒へうりやく（ヒヨウ）［剽略］（名）かすむること。うばふこと。

⌒へうれい（ヒヨウ）［漂零］（名）おちぶるゝこと。

〰べかいぬ［鼈甲犬］（名）頰の鼈甲（ベツカフ）色を帶びたる犬。

へがす（さ・し・す・す・せ・せ）［剝］（他、さ四）はがす。へぐ。（褫）。

べかり［有可］（助動）「べくあり」の約言。

へがる（れ・れ・る・るゝ・るれ・れよ）［剝］（自、ら下二）はがる。むける。

⌒へき［壁］（名）㊀かべ。かき。しきり。㊁［天］二十八宿の一、なまめ。

⌒へき[碧](名) ふかみどり。あを。
⌒へき[癖](名) くせ。やまひ。
⌒へき[躄](名) ゐざり。あしなへ。
⌒へき[僻](名) ㊀ひがみ。ねぢけ。よこしま。㊁かたはら。はとり。㊂ゐなか。へんぴ。
へぎ[折板](名) ㊀「へぎいた」の略言。㊁へぎ板のをしき。——いた[折板](名) 檜又は杉の材をへぎたる薄き板。
⌒べき[羃](名) ㊀ふきん。㊁づきん。㊂【數】等しき數のm個の相乘積を其數の第m羃といふ、一つの數の第一羃とは、其數の稱なり。
⌒へきいふ[僻邑](名) ㊀かたゐなか。ゐなか。㊁自分のむらの謙稱。
⌒へきえき[辟易](名) ㊀驚きすざりて路をひらくこと。㊁勢におさるゝこと。
⌒へきかい[碧海](名) あをうみ。
⌒へきかい[劈開](名) ㊀さきひらくこと。㊁【鑛】結晶せる面に並行してわれ易きこと。——めん[劈開面](名) 劈開する方面。
⌒へきかん[壁間](名) ㊀かべのあひだ。㊁かべのうへ。
⌒へききやう[僻鄕](名) 片田舍 へんぴ。
⌒へききやう[僻境](名) かたゐなかの土地。
⌒へききよ[僻居](名) ゐなかずまひ。
⌒へきぎよく[碧玉](名)【鑛】石英の一種、緻密不透明にして赤色若しくは褐色を帶ぶ、瑪瑙の美麗には及ばざれど、裝飾として用ひらる。
⌒へきくう[碧空](名) あをぞら。
⌒へきぐう[僻隅](名) かたすみ。すみ。
⌒へきぐわ[壁畫](名) ㊀壁にゑがかれたるゑ。㊁壁面にかけたる畫。
⌒へきけん[僻見](名) 正しからざる見解。邪說。

⌒へきげん[僻言](名) 理にもとりたる言。
⌒へきこ[壁虎](名)【動】「やもり」に同じ。
⌒へきざい[僻在](名) かたよりて存在すること。
⌒へきし[壁紙](名) 壁に貼(ハ)る紙。
⌒へきじ[僻事](名) ひがごと。
⌒へきしや[躄者](名) あしなへ。ゐざり。
⌒へきじや[僻邪](名) よこしま。ねじけ。ひがみ。
⌒へきしやう[壁牆](名) かべ。かき。
⌒へきじやう[壁上](名) かべのうへ。
⌒へきしゆ[僻陬](名) ゐなか。かたゐなか。
⌒へきしよ[壁書](名) ㊀布告などの張紙。㊁戰國時代の大小名などの家法。
〜⌒へきしよ[避暑](名)「ひしよ」の訛。
⌒へきしよく[碧色](名) ふかみどりのいろ。
へきす（せしすするすれせよ）[僻](自、さ變) ㊀ひがむ。㊁かたよる。
⌒べきすう[羃數](名)【數】等しき數の相乘積即ち羃。
⌒へきすゐ[碧水](名) 碧色をなす深き水。
⌒へきせう[碧霄](名) あをぞら。
⌒へきせつ[僻說](名) 理にたがひたる說。
⌒へきそん[僻村](名)「へきいふ」(僻邑)に同じ。
⌒へきたい[碧苔](名) ふかみどりのいろをなせるこけ。
⌒へきたん[碧潭](名) 碧色をなす深きふち。
⌒へきち[僻地](名) 片田舍。
⌒へきてん[碧天](名) あをぞら。
⌒へきでん[霹電](名) いなびかり。
⌒へきど[僻土](名) ゐなか。
⌒へきとう[劈頭](名) まつさき。はじめ。「―第一」。
⌒へきめい[辟命](名) 君王又は官府よりのめしだし。

⌒へきやうこう[辟陽侯](名) 貴婦人の密夫。まをとこ。
⌒へきらく[碧落](名) あをぞら。
へきりう[日置流](名) 弓術の一派、日置正次に始まる。
⌒へきれき[霹靂](名) ㊀いかづち。かみなり。雷鳴。㊁はげしく恐ろしき大音聲。「―一聲」。
⌒へきろう[僻陋](名) ㊀いやしきこと。㊁かたゐなか。
⌒へきろん[僻論](名) 中正ならざる議論。
⌒へきゑん[僻遠](名) かたよりて程とほきこと。
へぐ（がぎぐぐげげ）[剝](他、か四) はがす。むく。
ベグうるし[可漆](名)「シャム」國の「ペグウ」より產する上品なる漆。
ベクェレル-せん[—線＝Becquerel radiation](名)【理】「ウラニユム」「トリウム」等より射出する一種の輻射線。
へくそかづら[女青](名)【植】茜草科に屬する草、上昇莖にして臭氣ある液汁を有す、葉は卵形又は長楕圓形にして對生す、花は白色にして葉腋に生ず。(牛皮楝、細根莖、百部根)。
‡へぐひ[竈食](名) かまどにて炊(ク)きたるものを食すること、「よもつ—」。
‡へげ[變化](名)「へんげ」に同じ。
べケ(名)(不可の支那音の訛) 惡しきこと。よからぬこと。
〜へこ[褌](名) ふどし。ふんどし。(九州及中國地方の方言)。
〜へこ[兵兒](名) 十五歲以上二十五歲以下ぐらゐの靑年、わかもの。(薩摩地方の方言)。——おび[兵兒帶](名) 男子のしごきおび、もと薩摩の兵兒の用ひしよりいふ。(平胡帶)。——ぐみ[兵兒組](名) 靑年のくみ。
へご[杪欏](名)【植】杪欏科に屬する羊齒植物、琉球又は小笠原諸島などに產し、禾木狀をなす、觀賞用に供せられ、又、材は種々の用に供せらる。

〜へこたれ(名) ㊀よわきこと。ひるむこと。衰弱すること、又、其人。㊁人をのゝしりていふ語。
〜へこたれる（れれるるれれよ）(自、ら下二) 衰弱す。よわる。ひるむ。
〜へこみ[凹](名) へこむこと。又、へこむ所。
〜へこむ（まみむむめめ）[凹](自、ま四) ㊀くぼむ。おちこむ。㊁よわりくじく。おとろへよわる。降參す。
へさき[舳先](名) 船の先首。みよし。(艫、舳、船的、船首)。
へし[減](名) へすこと。すくなくすること。
べし（くしきけれ）[可](助動) ㊀推量の意を表する語。「雨降る—」。㊁命令の意を表する語。「學校に行く—」。㊂斷定の意を表する語。「賢者といふ—」。
へしあふ（はひふふへへ）[壓合](自、は四) 互におしあふ。
へしくち[壓口](名) 強ひて口を噤(ツグ)みてゐること。
‡べしげに[可氣](副) もっともらしく。うべうべしく。
へしこむ（まみむむめめ）[壓込](他、ま四) 押へて入れこむ。又、無理に入れこむ。
へしつく（けけくくくれけよ）[壓附](他、か下二) おさへつく。
へしみ[壓面](名) しやくみの假面。
へしをる（らりるるれれ）[壓折](他、ら四) 一氣に折る。
へす（さしすすせせ）[壓](他、さ四) 押しつけてへこます。押しつけてたわます。
へす（さしすすせせ）[減](他、さ四) 少なくす。へらす。
ペスト[Pest](名) 猛烈なる一種の傳染病、「ペストバチルス」のために發生す、「ペストバチルス」は血液に侵入して全身に蔓延し、淋巴腺及脾臟等も腫れあがりて潰爛を發す、全快するもの甚だ稀なり、患者の排泄物より傳染し、又、鼠は最もはげしく傳染の媒介をなす。(黑死病)。

へそ[臍](名)「ほぞ」に同じ。——でちやをわかす 可笑(カヲ)しさに堪へざるにいふ。
へそ[卷子](名) 績(ウ)みたる絲をながく綜(ナツ)ぎて球の如くまきたるもの。
〜べそ(名) 小兒の泣きかゝること。——をかく 小兒の泣きかゝるにいふ。
〜へそくり[臍繰](名)「へそくりがね」の略言。——がね[臍繰金](名) 婦人などが、私に貯へたる金。
へそちや[臍茶](名) 笑ふべきこと。
へそのを[臍緒](名)「ほぞのを」に同じ。
へた[端](名) はし。へり。はた。(邊)。
へた[蒂](名) 茄子又は瓜などの蒂。ほぞ。
へた[下手](名) ㊀巧(タク)みならざること。拙きこと。上手の對。(拙手)。㊁貧賤なる人。——をまごつく へたなる所業をなす。
〜べた[總](名、副) すべて。全體。「—金」。——いちめん[總一面](名、副) 表面の全體。
‡べたらう[別當](名)「べったう」に同じ。
〜べたがき[總書](名) べた一面に書きたること。
〜へたくそ(名) 下手をのゝしりていふ語。
へだたり[隔](名) へだたること。距離。
へだたる（らりるるれれ）[隔](自、ら四) ㊀離れてあり。遠くあり。㊁しきられてあり、さへぎられてあり。㊂時日立つ。年月過ぐ。
‡へだつ（たちつつてて）[隔](自、た四) 前條に同じ。
へだつ（てててつるつれてよ）[隔](他、た下二)(重(ヘ)を立つの義) ㊀間(アヒ)にものを置きて離つ。間のものを超(コ)えてなす。「川をへだてゝ望む」。㊁さへぎる。しきる。㊂近づけず。とほざく。

〜べたつく（かきくくけけ）(自、か四) べた〳〵す。
へだて[隔](名) ㊀さかひ。しきり。㊁したしくせざること。うちとけざること。——がほ[隔顏](名) したしくせざるやうなる顏つき。——がまし（しくしくしきしけれ）[隔](形、二) したしくせざるやうなり。——ごころ[隔心](名) したしくせざるこゝろ。うちとけざる心。かくしん。
〜べたぬり[總塗](名) べた一面に塗ること。
〜へたばる（らりるるれれ）(自、ら四) ㊀ひれふす。㊁すわる。㊂へこむ。よわる。
〜べたべた(名、副) ㊀ねばりつくさまにいふ語。㊁液氣をたっぷり含ませ又は塗るさまにいふ語。㊂なまめかしく寄りつくさまにいふ語。
へたりちぎ[下手律義](名) 馬鹿律義。
‡べち[別](名)「べつ」に同じ。「かみしも—のろくなどたまひわたして」。
‡べちぎ[別儀](名)「べつぎ」に同じ。
‡べちなふ[別納](名)(別の納殿の義) 母屋の外の雜舍。
‡べちなふしよ[別納所](名) 古昔、院に奉るものをいれおきたる所。
へちま[絲瓜](名) ㊀【植】葫蘆科に屬する植物、纏繞莖を有す、葉は大形にして掌狀に分裂し裂片は尖銳なり、花は五瓣黃色にして夏の頃開く、果實は圓く長く、嫩(ワカ)きときは食用に供せられ熟して後は其纖維種々の用に供せらる。㊁役に立たぬこと。「世の中は何の—と思へども」。——ざうり[絲瓜草履](名) 絲瓜の果實の纖維を重ねたる草履。——のみづ[絲瓜水](名) へちまの莖を切り

て出づる汁をたくはへたるもの。⌒――**やらう**（ロウ）[絲瓜野郎](名) 男子をのゝしりていふ語。

⌒**べちや·べちや**(名、副) 絶えずよくしやべるさまにいふ語。べら〱。ぺら〱。

(**べつ**[別](名) ㊀同じからざると。ことなると。㊁よそ。ほか。㊂わかち。たてわけ。㊃わかれ。いとまごひ。

(**べつ**[鼈](名) [動]「すっぽん」に同じ。「―人を食はんとして却て人に食はる」。

(**べつ·い**[別意](名) ㊀ほかのこゝろ。(他意)。㊁わかれのこゝろ。

(**べつ·い**[襪衣](名) たび。くつした。くつたび。

(**べつ·えん**[別宴](名) わかれのさかもり。(別筵)。

(**べっ·か**[別家](名) 「べっけ」に同じ。

(**べっ·かう**（コウ）[別項](名) ほかのくだり。

(**べつ·がう**（ゴウ）[別號](名) ほかのとなへ。

(**べっ·かく**[別格](名) きまりの格式の外。定格のほか。――**くわんぺいしや**[別格官幣社](名) 官幣社と國幣社との間にある格式の神社。國家に大功ありし人々を祀れるやしろ。――**に**[別格](副) ことさら。ことに。とりわけて。

⌒**べっかっこう**(名) ㊀あかんべ。あかめ。㊁烏帽子をかぶり、眼を圓くして舌を出したる面。

(**べっ·かふ**（コウ）[鼈甲](名) 玳瑁の甲を煮て製したるもの、櫛・笄などをつくる。――**さう**（ソウ）[鼈甲草](名) [植]「いちやくさう」に同じ。

(**べっ·き**[別記](名) 別にしるすと。又、別の記録。

ベッキ[番避背](名) 「ベンキ」に同じ。

(**べっ·ぎ**[別儀](名) 餘の儀。ほかのわけ。

(**べっ·ぎやう**（ギヨウ）[別行](名) ほかのくだり。

(**べっ·きよ**[別居](名) わかれて住居すると。

‡**へ·つくり**[綜作](名) 機の綜(ヘ)を整ふると。又、其女。

‡**へ·つくり**[贄造](名) 贄(ニ)を狩(カ)ると。又、其人。

(**べっ·くわ**[別火](名) 穢れを忌みて、別にきり又はおこしたる清淨なる火。べつび。

(**べっ·くわ**[別科](名) 本科の外に設けたる科。

(**べつ·ぐん**[別軍](名) ほかの軍隊。

(**べっ·け**[別家](名) 分家。

(**べつ·げふ**（ギヨウ）[別業](名) しもやしき。べっさう。

(**べっ·けん**[瞥見](名) ちらりと見ると。

(**べつ·げん**[別言](名) ほかのことば。

(**べっ·けんこん**[別乾坤](名) 別天地。

(**べっ·こ**[別戶](名) ㊀別家。㊁別居。

(**べつ·ご**[別後](名) わかれてのち。

(**べっ·こん**[別懇](名) 特別の懇意。(入魂)。

(**べっ·さい**[別才](名) 特殊の才能。

(**べっ·さう**（ソウ）[別莊](名) しもやしき。ひかへやしき。(別邸)。

(**べっ·さく**[別策](名) ほかのはかりごと。

(**べっ·さつ**[別冊](名) ほかの冊子。

(**べっ·し**[別紙](名) 本書に添へたる紙又は文書。

(**べっ·し**[蔑視](名) みさぐると。あなどると。ないがしろにすると。

(**べっ·し**[別使](名) ㊀ほかのつかひ。㊁わざびと。

(**べっ·じ**[別事](名) ほかの事。餘事。

(**べつ·じ**[別時](名) ㊀わかれのとき。㊁ほかのとき。

(**べっ·しう**[別愁](名) わかれのうれひ。

(**べっ·しつ**[別室](名) ほかのへや。

べっ·して[別](副) 別けて。とりわけて。ことに。

(**べっ·しはいたつ**[別使配達](名) ㊀わざびとを以て配達すると。㊁わざびとを以て配達せさする郵報の手續、其符號は和文にて「マツ」欧文にて「XP」なり。

(**べつ·しやう**（ジヨウ）[別狀](名) ことなるさま。

(**べっ·しゆ**[別手](名) 他の人の手。「―に出づるが如し」。

(**べっ·しゆ**[別種](名) ほかの種類。

(**べっ·しよ**[別墅](名) しもやしき。べっさう。

(**べつ·じん**[別人](名) ほかのひと。ことなる人。

(**べっ·せい**[別製](名) 特別の製造。

(**べっ·せかい**[別世界](名) ㊀地球外の世界。㊁全く他とことなりたる境遇。別天地。

(**べっ·せき**[別席](名) ほかの室。

(**べっ·たい**[別體](名) 體をことにすると。さまをことにすると。

(**べっ·たう**（トウ）[別當](名) ㊀昔時、特殊なる職の長官の稱、檢非違使・藏人所・淨和院・獎學院・御歌所等に置かれ、侍所・政所其他寺院などにもありき。(執事)。㊁現時、親王家の職員、稱奏の貴に任じ家務會計を總理し家令以下を監督するもの。㊂院廐の別當より轉じて、乘馬の口取の稱。馬丁。

(**べっ·たく**[別宅](名) 本宅の外に構へたる邸宅。

⌒**べったり**(名、副) ㊀平たくなるさまにいふ語。㊁ねばりつくさまにいふ語。

(**べつ·だん**[別段](名、副) つねとかはりてあるさまにいふ語。格別。「―かはった事はない」。

(**べつ·ぢよ**[別除](名) 別にとりのくると。――**けん**[別除權](名) [法]抵當權・質權其他の優先權を有する債權者が、其擔保物の代價につき、他の一般の債權者に關係なく、先づ支拂を請求し得る權利。

⌒**へっつひ**（ツイ）[竈](名) 「へつひ」に同じ。

(**べっ·て**[別手](名) 別のくみ。

(**べっ·てい**[別邸](名) べったく。べっさう。(別第)。

(**べつ·でう**（ジヨウ）[別條](名) ほかの事。ことなる事。

(**べつ·でん**[別殿](名) ほかに構へたるごてん。

(**べっ·てんち**[別天地](名) 他とことなりたるさまのところ。

(**べつ·どう·たい**[別働隊](名) 他の方面に向って活動する本隊のほかの部隊。

(**べっ·ぱ**[別派](名) 他の流派。

(**べっ·ぱい**[別杯](名) わかれの杯。(離盃)。

(**べつ·はいたつ**[別配達](名) ㊀特別の配達。㊁書留、又は價格表記の郵便物若しくは小包郵便物等を通常の配達時刻以外に特別に配達する手續。

(**べつ·ばう**（ボウ）[別房](名) ほかのへや。

(**べっ·ぱう**（ポウ）[別報](名) 別のしらせ。

(**べっ·ぱふ**（ポウ）[別法](名) ほかの方法。ことなるしかた。

べつ·ばら[別腹](名) 「べっぷく」に同じ。

‡**へ·つ·ひ**（ツイ）[竈](名) (竈(ヘ)之(ツ)火の甕)かまど。

べつ·び[別火](名) 「べっくわ」に同じ。

へっぴり·むし[氣蟲](名) [動]「へひりむし」に同じ。

(**べっ·ぴん**[別品](名) ㊀特別の品。いと好き品。㊁美人。美女。(別嬪)。㊂年わかき婦人の美稱。

(**べっ·ぷ**[別封](名) 次條に同じ。

(**べっ·ぷう**[別封](名) 添へたる封書。

(**べっ·ぷく**[別腹](名) ㊀はらちがひ。異腹。㊁わきばら。めかけばら。妾腹。

‡**へ·つ·べ**[邊方](名) ほとり。

(**べっ·ぺう**（ピヨウ）[別表](名) 別にそへたる表。

(**べつ·べつ**[別別](名、副) ㊀わかれ〱。ちり〱。㊁おの〱。それ〱。――**に**[別別](副) わかれ〱に。又、それ〱に。

べつ·ま[別間](名) ほかのま。ほかのへや。

(**べつ·みやう**（ミヨウ）[別名](名) 本名のほかにつけたることなる名。

べつ·むね[別棟](名) 家の棟を別にたつると、又、棟の別なる家。

‡**へ·つ·も**[邊藻](名) 海邊に生ずる藻。へつもは。

‡**へ·つ·もは**[邊藻葉](名) 前條に同じ。

(**べつ·やう**（ヨウ）[別樣](名) ことなるさま。

へつらひ（ヘツライ）[諂](名) へつらふと。こぶると。(諛)。

へつら·ふ（ヘツラウ）[諂](自、は四) したがふ。氣に入るやうにふるまふ。つゐしようす。おもねる。

(**べつ·り**[別離](名) ㊀はなるゝと。とほざかると。㊁わかれ。いとまごひ。――**の·なみだ**[別離淚](名) わかれを悲みて泣くなみだ。

‡**へつ·る**[折](他、ら四) 折り取りて減らす。

⌒**へづ·る**[剝](他、ら四) ㊀削り取る。㊁掠め取る。

(**べつ·るゐ**[別淚](名) わかれのなみだ。

(**べつ·ろ**[別路](名) ほかのみち。

(**べつ·ゐん**[別院](名) 別にかまへまうけたる寺院。

⌒**ぺてん**(名) いつはりだますと。「―をくらはす」。――**し**(名) よく人をいつはりだます人。

へ·ど[反吐、嘔吐](名) 一旦食したるものをはきもどすと。又、其もどしたるもの。

へな[粘土](名) 黑色にして粘氣ある水底の泥土、荒壁に塗るもの。

‡**へなたり**[甲香](名) 長螺の厴(フタ)を製して煉香に用ふるもの。(香螺)。

⌒**へなぶり**(名) 狂歌の一派、明治卅七八年の頃よりおこりたるもの。

‡**へ·なみ**[邊波](名) 海邊又は船縁に打ちよする波。

‡**へ·な·る**[隔](自、ら四) 「へだたる」に同じ。

‡**へ·な·る**[折](自、ら下二) へづられて減る。

へに[臙粉](名) 紅(ベニ)をおしろいに和したるもの、顏を粧ふに用ふ。

べに[紅](名) ㊀紅花(ベニバナ)の花瓣をしぼりて製煉せる紅色の顏料。(臙脂、胭脂、紅花)。㊁べにいろ。くれなゐ。

べに·いろ[紅色](名) くれなゐなるいろ。こうしよく。

べに·おしろい[紅粉](名) ㊀べにとおしろい。㊁べにをつけおしろいを塗りて化粧すると。

べに·がに[紅蟹](名) [動]「あさひがに」に同じ。

べに·かは（ワカ）[紅革](名) 紅色の革。

べにガラ[紅殼](名) [化]酸化第二鐵の稱。

べに·きらら[紅雲母](名) [鑛]淡紅色の雲母。

べに·くちば[紅朽葉](名) 紅色を帶びたる朽葉色。

べに·くりげ[紅栗毛](名) 馬の毛色、栗毛の赤みを帶びたるもの。

べに·こ[紅粉](名) たうべに。――**ぞめ**[紅粉染](名) 紅粉にて染めたる色又は物。

べに·ざけ[紅鮭](名) 肉のいと紅色なる鮭。

べに·さし·ゆび[紅差指](名) くすりゆび。なゝしおよび。(無名指)。

べに·ざら[紅皿](名) 紅を溶(ト)かす小皿。

べに·しぼり[紅絞](名) べにいろのしぼり。

べに·しやうが（シヨウガ）[紅生薑](名) 梅酢に漬けて赤くしたる生薑。

べに·すずめ[紅雀](名) [動]燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、雀よりは小形にして、全身赤く、處々に黑斑あり。

べに·ずゐしやう（ズイシヨウ）[紅水晶](名) [鑛]紅色を帶びたる水晶。

べに·ぞめ[紅染](名) 紅色に染めたるもの。

べに·たけ[紅茸](名)[植] 菌類の一、形初茸に似、

菌傘赤くして毒あり。(紅菌)。

べに-つけ-ゆび[紅附指](名) べにさしゆび。無名指。

べに-ばな[紅花](名)【植】菊科に屬する草、莖葉共に刺ありて薊(アザミ)に似、夏の頃紅黃色の花開く、花よりは紅を種子よりは油を採取し、嫩葉は食用に供せらる。クレのあゐ。クレなゐ。(紅藍花)。

べに-ひわ[紅鶸](名)【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形ひわより小さくして、頭部深紅色なり。

べに-ます[紅鱒](名) 肉色の深紅なる鱒。

べに-もめん[紅木綿](名) 紅色に染めたる木綿。

べに-りんご[紅林檎](名)【植】林檎の一種、舶來の種なり、果實は紅色にして我國在來のものより大形なり。あかりんご。カラなし。ない。

べに-ゑ[紅繪](名) 紅色一色にて採色したる繪、昔多く江戸にて刷り出したり。

べに-ゑ-うり[紅繪賣](名) 享保の頃、女郎・俳優の肖顏を刷りたる一枚摺の紅繪を賣りあるきしもの。

十十**へ-ぬし**[戸主](名) 一家の主人。やぬし。

へ-の-こ(名) ㊀陰囊中の核、即ち睾丸の稱。㊁誤りて、陰莖の稱。

〔**へばり-つ-く**〕(自、か四) ねばりつく。つきてはなれず。

へび[蛇](名)【動】(「へみ」の轉言)蛇類に屬する爬蟲の稱。ながむし。くちなは。(反鼻)。

へび-いちご[蛇苺](名)【植】薔薇科に屬する草、山野に自生す、葉は三個の小葉より成る、花は黃色にして、果は赤黃色なり食ふべからず。くちなはいちご。(蕁、地苺、地蘇)。

へび-がみ[蛇神](名) ㊀蛇の靈。㊁「へびがみつき」の略言。——**つき**[蛇神附](名) 蛇の靈にとりつかれたりといふ一種の精神病にかゝれる人。

へび-くち[蛇口](名) 紐(ヒモ)などの端を綰(ワガ)ねて環にせるもの。

へび-たけ[蛇茸](名)【植】菌類の一、形初茸に似、菌傘の下面に皺襞なし、有毒なり。(紅菰)。

へび-だま[蛇玉](名)【植】菌類の一、形松露に似て毒あり。

へび-つかひ[蛇遣](名) 蛇をさまざまに弄びて、見物人に錢を乞ふもの。

十十**へ-びと**[戸人](名) 家内の者。家族。

十十**へ-ひり**[放屁](名) 屁をひること。又、其人。

へ-ひり-むし[氣蟲](名) ㊀【動】鞘翅類に屬する昆蟲、長さ八分許、全身黃色にして翅に二個の黑色なる斑紋あり、危害に接するときは、黃色の臭氣ある瓦斯を發す。へっぴりむし。(行夜、氣蠜)。㊁よく放屁する人にいふ詞。

ペプシン[Pepsin](名)【化】胃液中にある酵母。

十十**へ-ふだ**[戸札](名) 戸籍。人別帳。

ペプトン[Peptone](名)【化】蛋白質の一種、水に溶(ト)け易く熱によりて凝結せず、又、動物質の膜をよく通過し得、食物中の蛋白質は胃液中の「ペプシン」及胃腺中の「ツリプシン」に遇ふときは「ペプトン」に變ず。

十十**へ-ふみた**[戸札](名) 「へふだ」に同じ。

〔**べべ**〕[衣服](名) きもの。(小兒の語)。

〔**べべ**〕(名) 「べべのこ」に同じ。——**の-こ**(名) 牛の子。こうし。(中國及九州地方の方言)。

〔**へべ-の-れけ**〕(名) 「へべれけ」に同じ。

十十**へへやか**(名) 空しく時日を經過するさま。

〔**へべれけ**〕(名) いたく酒に醉ふこと。

〔**へ-ぼ**〕(名) ㊀つたなきこと。下手。「—將棋」。㊁よくなきもの。好ましからぬもの。

〔**へま**〕(名) ㊀氣のきかぬこと。まぬけ。㊁物事のくひちがふこと。間のわるきこと。

へ-まき[榺](名) 綜の經(へ)を卷く具。

へ-まさ-る[經勝](自、ら四) 時日を經て次第にまさり行く。

十十**へみ**[蛇](名) 「へび」に同じ。

へみ[椐](名)【植】忍冬科に屬する木、樹皮は紫赤色にして皺あり、葉は楕圓形にして雄蕊は花冠より長し、赤色の果實を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。ごねず。やまてまり。へみのき。——**の-き**[椐木](名)【植】前條に同じ。

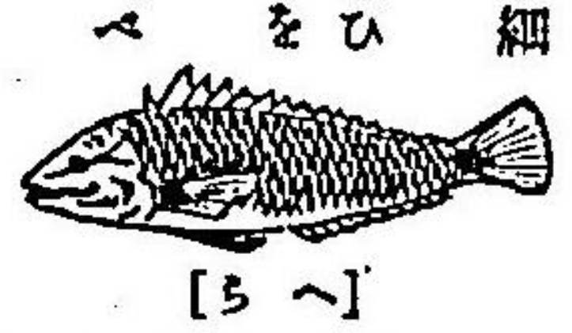
へ-めぐ-る[歷廻](名)(自、ら四) 旅行して諸處をめぐる。處々をめぐりあるく。(遊歷、遍歷)。

へ-や[部屋](名) ㊀一家の中に區別してある座敷。ま。ざしき。つぼね。室。㊁德川時代に、諸大名の江戸屋敷に、其屋敷のこもの又は人足などの詰め居たる所。——**がしら**[部屋頭](名) 德川時代に、諸大名の屋敷のこもの人足などの親方。——**ずみ**[部屋住](名) 嫡子のいまだ家督を相續せざる間の身分。又、二三男にして家督を相續し得ざる身分。〔——**もち**[部屋持](名) 娼妓の自己專用の部屋を有するもの。

へら[鏟](名) からすきの耳。べか。

へら[箆](名) 竹木象牙又は金屬にて細長く平たくつくりたるもの。

へら[遍羅](名)【動】硬鰭類中かんだひ科に屬する魚、體は側扁にして楕圓狀をなす、鱗(ウロコ)滑かにして光彩あり。


[へら]

〔**べら**〕(名) ㊀べらべらなるもの。㊁「べらさつ」の略言。

へら-さぎ[箆鷺](名)【動】渉禽類に屬する鳥、形鷺に似て、羽毛は暗灰色を帶び、嘴は平たくして箆の如し。

〔**べら-さつ**〕(名) 紙幣の稱。

へら-す[減](他、さ四) 少なくす。へす。はぶく。

〔**へらず-ぐち**〕[不減口](名) まけをしみのことば。又、役に立たぬことば。——**を-たたく** へらずぐちをいふ。

〔**へらず-もの**〕[不減物](名) 役に立たぬもの。

十十**べら-なり**(助動) 「可き樣なり」の如し。「はてはものうくなりぬ—」。

〔**べら-べら**〕(名、副) ㊀よどみなくしやべり立つるさまにいふ語。㊁うすく弱きさまにいふ語。

〔**ぺら-ぺら**〕(名、副) ㊀前條に同じ。㊁西洋の語を讀み又はしやべるさまにいふ語。

〔**べら-ぼう**〕[箆棒](名) おろか。ばか。たはけ。——**めえ**[箆棒奴](感) のゝしり又はさげすみなどするときにいふ感動詞。

〔**べらん-めえ**〕(感) 「べらぼうめえ」に同じ。(東京の方言)。

へり[緣](名) ㊀ふち。はし。(邊)。㊁疊の兩邊を包む布。「高麗—」。——**かは**[緣革](名) 物のへりをとる革。

ヘリオスタット[Heliostat](名)【理】太陽の光線を室内適宜の方向に送る平面鏡。

へり-くだ-る(自、ら四) 他をうやまひて自身を下に置く。自らつゝしみて敬意をつくす。みづから卑下す。

〔**へ-りくつ**〕[屁理窟](名) 役に立たぬ理窟。理にあはぬ議論。こりくつ。——**や**[屁理窟家](名) よく屁理窟をいふ人。

へり-とり[緣取](名) へりとること。又、へりとりたるもの。ふちとり。

へり-と-る[緣取](他、ら四) ふちをつく。

へり-ぬり[緣塗](名) へりを塗ること。又、へりを塗りたるもの。

ベリリウム[Beryllium](名)【化】延性を有し銀白色の光澤を有する稀有の金屬。

へ-る[謙](自、ら四) へりくだる。

へ-る[減](自、ら四) 少なくなる。とぼしくなる。める。

へ-る[綜](他、は下二) 機(ハタ)の經(タテ)絲を機にかけ得らるゝやうに整へつくる。

ベル[Bell](名) 電鈴、自轉車等につくる鈴(リン)の類。

ペルチエー-かうくわ[—効果=Peltier-effect](名)【理】二つの異種の金屬を接合して電流を通ずるときは、電流の方向により、其接合部の或は熱せられ或は冷却すると、例へば蒼鉛と「アンチモン」とを接合して、電流を蒼鉛より「アンチモン」へ通ずるときは、其接合部は冷却し、反對の方向に通ずるときは其接合部は熱するが如し。

ペルペチュアン(名) (「オランダ」語Perpetuaan) 昔時「オランダ」人の齎(モタラ)し來りたる一種の布帛。

ベルモット(名) (「スペイン」語 Vermouth の訛) 洋酒の一種、味醂に似て稍や苦味を有す。

ベレンス[洋青](名) 「ベロリン」に同じ。

へろ-へろ(名、副) 弱くしてしっかりせざるさまにいふ語。「—武士」。

〔**べろ**〕[舌](名) 「した」の異稱。

〔**べろ-べろ**〕(名、副) ㊀舌にて物をなむるさまにいふ語。㊁いたく醉ひくづれたるさまにいふ語。

〔**ぺろ-ぺろ**〕(名、副) ㊀前條に同じ。㊁難なく食ひ盡すさまにいふ語。

〔**べろべろ-の-かみ**〕[舌舌神](名) 小兒の遊戲、事をなせる人の判然せざる時、環坐して、紙捻の尖を折り曲げ、これを兩手の間に挾みてしばらくもみ廻して止め、其さきの指したる方をそれと定むると。

〔**べろり**〕(名、副) 舌を出すさまにいふ語。

〔**ぺろり**〕(名、副) ㊀前條に同じ。㊁ちよっとの間になめつくすさまにいふ語。

ベロリン(名) (「イギリス」語 Berlin blue の訛、「ドイツ」國伯林產の藍の意)濃き紺色の顏料。ベレンス。

へ-を[綜](名) (綜(へ)緒(ヲ)の意) あしを。——**づつ**[籆筒](名) へをまく筒。

〔**べろんこ**〕(名) 顏を洗ふこと。(小兒の語)。

(**へん**[邊](名) ㊀くにざかひ。さかひ。㊁かたゐなか。かたほとり。㊂そば。あたり。㊃かぎり。はて。㊄きし。ほとり。㊅【數】幾何學にて、多角形を圍める直線の限界たる部分の稱。代數學にて、等式の等號の左右にある式又は數の稱、其右にあるを右邊といひ左にあるを左邊といふ。

(**へん**[偏](名) ㊀えこ。かたおち。㊁かたつら。かたはう。㊂かたほとり。かたゐなか。㊃かたわれ。㊄漢字の左方のもの、即ち坂・梅などの土・木の字をいふ。

(**へん**[篇](名) ㊀首尾全く揃ひたる詩文。㊁一綴になりたる書物。㊂書物の一部分。「初—」。

(**へん**[返](名) たび。ど。回數。(遍)。

(**へん**[變](名) ㊀不時の出來事。椿事。㊁わざはひ。さいなん。㊂みだれ。さうどう。㊃ふしぎ。希有(ケウ)。㊄いぶかしきこと。うたがはしきこと。「—と思った」。㊅うつりかはり。轉化。「四時の—」。㊆はかりごと。權略。㊇すべて物事の通常にてあらざるといふ語。「—な人」。

〔(**べん**[辨](名) ㊀わかち。差別。㊁とりあつかひ。處置。(辦)。㊂わきまへ。識別。㊃古昔、太政官の官名、

左右各大・中・少あり、八省を分管し宮中の庶務を執りしもの。おほともひ。（辨官）、

（べん[辯]（名）㊀ことばづかひ。くちまへ。「能―」。「雄―」。㊁くちまへの巧(タクミ)なること。辯舌よきこと。㊂漢文にて、物事の是非眞僞を判別する文章の稱。「桐葉封弟―」。

（べん[瓣]（名）㊀【植】はなびら。花片。㊁瓜の中の實。なかご。㊂蜜柑などの中の個々に分れたる肉。㊃機械の兩室の間にありて、一方に動くときは兩室の交通をなさしめ反對に動けば、兩室の交通を絶つもの「ポンプ」・蒸氣機關等の器械の要部をなす。

（べん[便]（名）㊀かって。都合。㊁かってよきこと。都合よきこと。㊂うや〳〵しきに過ぐること。へつらふこと。㊃くつろぐこと。こゝろよきこと。㊄大小便の稱。

（べん[冕]（名）帝王のかむり。

ペン[洋筆‖Pen]（名）西洋の筆、鵝鳥の羽莖又は金屬にて製し、先を尖らせて、縱に割目をつくり、「インキ」を含ませて書くもの。

（へん-あい[偏愛]（名）かたより愛すること。

（へん-あん[偏安]（名）かたほとりに安んじてあること。

（べん-あん[便安]（名）くつろぎてやすらかなること。

（へん-い[變移]（名）かはりうつること。又、かへうつすこと。

（へん-い[變異]（名）「いへん」（異變）に同じ。

（へん-い[偏倚]（名）かたずむこと。かたよること。

（へん-い[偏意]（名）かたよりたる心。かたいぢ。

（へん-い[變意]（名）こゝろがはり。

（へん-い[邊夷]（名）邊陬のえびす。

（べん-い[便衣]（名）ふだんぎ。

（へん-いふ[邊邑]（名）かたゐなか。

（へん-うん[片雲]（名）斷片のくも。

（へん-えう[邊要]（名）國境の要害。

（へん-えき[變易]（名）かはること。又、かふること。

（べん-えき[便益]（名）かってよきこと。便利なること。

（へん-か[返歌]（名）人より贈られたる歌に答ふる歌。かへしうた。

（へん-かい[邊戒]（名）くにざかひの警戒。

（へん-かい[邊海]（名）㊀ちかまはりの海。㊁遠きところの海。㊂くにざかひの海。

（へん-かい[變改]（名）かへあらたむること。又、かはりあらたまること。

（べん-かい[辯解]（名）辯じ解くこと。いひひらき。いひわけ。（分疏）。

（へん-かう[變更]（名）「へんかい」（變改）に同じ。

（へん-かう[偏向]（名）かたよりむかふこと。

（へん-かう[偏好]（名）かたよりこのむこと。

（へん-かく[偏角]（名）【地】磁針の南北線が地球の南北線となす角。方位角。

（へん-かく[變革]（名）かはりあらたまること。又、かへあらたむること。（改革）。

（へん-かく[變格]（名）㊀正格以外の格。不規則の格。㊁【文法】動詞活用の中、從來規則的ならずと思はれたるもの、加行・左行・奈行・良行の四種あり。

（へん-かく[偏格]（名）漢詩の平起の格。

（へん-がく[扁額]（名）横に長き額面。よこがく。

（べん-がく[勉學]（名）學問をつとめをさむること。

ベンガラ（名）㊀（「インド」國の地名に出づ）「ベニガラ」に同じ。㊁「ベニガラじま」の略言。――じま（名）經(タテ)は絹にして、緯(ヨコ)は木綿なる織物、もと「オランダ」人のもたらしゝもの。

（へん-かん[篇簡]（名）書冊。文書。

（へん-かん[片簡]（名）ちょっとしたかきもの。

（へん-かん[返簡]（名）返事のてがみ。

（へん-き[騙欺]（名）かたりあざむくこと。

（べん-き[便器]（名）大小便をするうつは。

（べん-き[抃喜]（名）手をうってよろこぶこと。よろこびたつこと。

ペンキ[番瀝青]（名）（「オランダ」語 Pik の訛）㊀船舶などに塗る瀝青(チャン)「ペッキ」。㊁唐土に桐油又は亞麻仁油等の乾性油を混和して煉りたるもの、木材・鐵器等の腐蝕を防ぐため其面に塗抹す。（油漆）。――ぬり（名）「ペンキ」を塗りたるもの。又「ペンキ」屋。――や[番瀝青屋]（名）「ペンキ」を塗抹することを業とする人又は家。

（べん-ぎ[便宜]（名）たよりよろしきこと。都合よきこと。

（へん-きふ[褊急]（名）むねせまく性急なること。

（へん-きやう[邊境]（名）くにざかひ。

（へん-きやう[偏境]（名）かたゐなか。

（べん-きやう[勉強]（名）つとめはげむこと。出精すること。

（へん-きやく[返却]（名）借りたる物を返へすこと。もどすこと。

（へん-きよく[騙局]（名）かたり。たぶらかし。

（へん-きよく[偏曲]（名）㊀かたよりまがること。㊁かたいぢ。ぢわんこ。

（へん-きん[返金]（名）借りたる金をかへすこと。

（べん-きん[辨金]（名）金の融通をつくること。

（へん-ぐう[片隅]（名）かたすみ。

（へん-ぐう[邊隅]（名）かたほとり。かたゐなか。

（へん-くつ[偏屈]（名）性質の普通とちがひてかたよりくねること。かたくな。

（へん-くわ[變化]（名）㊀一の狀態より他の狀態に轉ずること。一の性質より他の性質に轉ずること。かはること。㊁【文法】動詞・形容詞及助動詞の語尾が形を變ずること。はたらき。活用。

（へん-くわう[偏光]（名）かたよりの光。（「かたより」の條を見よ）。

（へん-くわう-せい[變光星]（名）【天】光の強さの變化する星、種類多く、其變化が、長き週期のものもあれば短き週期のものもあり、又、不規則的變化のものもあれば、或は短時間に急に光輝を失ふものもあり、新星も即ち變光星の一に外ならず。

（へん-くわん[變換]（名）かふること。又、かはること。

（へん-くわん[返還]（名）かへすこと。もどすこと。

（へん-くわん[邊關]（名）くにざかひに設けたる關門。

（べん-くわん[辨官]（名）辨の條を見よ。

‡へん-ぐゑ[變化]（名）「へんげ」に同じ。「昔ありけむものゝ―めきて」。

（へん-ぐん[邊軍]（名）くにざかひを守る軍隊。

（へん-げ[變化]（名）ばけもの。妖怪。

（へん-けい[變形]（名）かたちを變ずること。又、變じたるかたち。

（へん-けい[邊警]（名）くにざかひの警戒又は警報。

（へん-けい[返景]（名）ゆふ日かげ。

（へん-けい[偏輕]（名）かろすぎること。

（へん-けい[偏傾]（名）かたむき。かたより。

（へん-けい[鞭刑]（名）むちうつ罰。たゝき。

（べん-けい[辨慶]（名）㊀竹筒に處々孔を穿ち、これに團扇又は臺所道具などを插すもの。㊁「べんけいじま」の略言。㊂とりまき。たいこもち。――がに[辨慶蟹]（名）【動】「やまがに」に同じ。――

さう[辨慶草]（名）【植】（い）景天科に屬する草、高さ二三尺許、莖は圓くして叢生す、葉は無柄にして鋸齒を有し叢生す、花は五瓣にして通常淡紅色又は紫色を呈し秋の頃開く。いきくさ。ちどめぐさ。（景天）。（ろ）「すずさいこ」の一名。――じま[辨慶縞]（名）石疊の模樣を濃淡縱横にせる縞。

（べん-けつ[便血]（名）大小便に血のまじりて出づること。

（へん-けふ[褊狹]（名）㊀せまきこと。ちひさきこと。㊁性急にして度量なきこと。寛容ならざること。

（へん-けん[偏見]（名）中正にはづれたる見解。

（へん-けん[邊見]（名）【佛】斷常の二邊を執して、中道を見ざること。

（へん-げん[偏言]（名）正しからざる言。

（へん-げん[片言]（名）かたこと。

（へん-げん[變現]（名）狀態を變じてあらはるゝこと。

（へん-げん[變幻]（名）忽ちあらはれ忽ち消ゆること。狀態の變化のすみやかなること。

（べん-けん[便娟]（名）しとやか。みやびやか。

（へん-こ[偏固]（名）かたくな。へんくつ。

（へん-こ[變故]（名）平常にあらざる事柄。又、さま〳〵の事柄。

（へん-ご[片語]（名）㊀かたこと。㊁ちょっとしたることば。

（べん-ご[辯護]（名）其人のためにいひひらきして助勢すること。其人の利益となることを主張してたすくること。

（べん-こう[辯口]（名）ものを言ふこと。しやべること。辯舌。

（べん-こう[便口]（名）すら〳〵とよくものをいふこと。

（へん-こく[偏國]（名）首都に遠き國。

（べん-ご-し[辯護士]（名）訴訟當事者の委任又は通常裁判所の命令により、通常裁判所に於て法律に規定せる業務を行ふもの。――くわい[辯護士會]（名）各地方裁判所毎に組織せらるゝ其所屬辯護士の團體、該地方裁判所檢事正の監督を受け其業務上に於ける規律を維持し兼て共同の利益を全うすることを目的とするもの、辯護士は之れに加入するにあらざれば開業することを能はず。

（べん-ご-にん[辯護人]（名）辯護士の俗稱。又、刑事被告人の辯護をなすものゝ總稱。

（へん-さ[偏佐]（名）一部分の職務のすけ。

（へん-さい[邊塞]（名）とほきくにざかひ。

（へん-さい[變災]（名）わざはひ。さいなん。

（へん-さい[返濟]（名）かりたるものをかへすこと。

（へん-ざい[遍在]（名）あまねく存在すること。

（へん-ざい[邊材]（名）【植】樹幹の新に生じたる年輪の白色を帶びて柔軟なる部分。しらた。

（べん-さい[辨濟]（名）【法】債務の履行。

（べん-さい[辯才]（名）辯舌のはたらき。くちまへの才能。

（べん-ざい-てん[辨財天]（名）【佛】吉祥天女の稱、我國にては七福神の一として祀る。

（べん-さい-るゐ[瓣鰓類]（名）【動】軟體動物の一、「雙殼類」に同じ、其體と體を包む二枚の外套膜との內に二つの瓣狀をなす鰓あり。

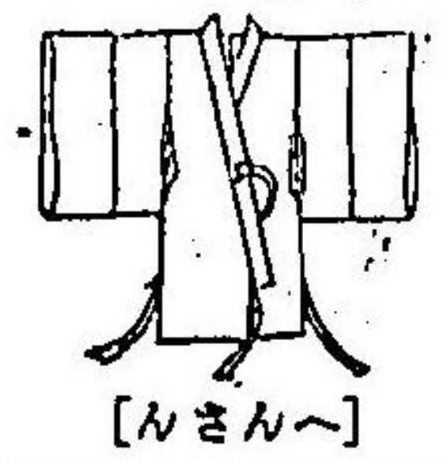
（へん-ざう[變造]（名）在來のものに加工して其かたちをかへつくること。

ペン-さき[洋筆先]（名）㊀「ペン」の端末、洋筆軸に插して用ふ。㊁ふでさき。「―て誤魔化したる金」。

（べん-さく[鞭策]（名）㊀むち。㊁むちうつこと。

（へん-さつ[返札]（名）返事の手紙。

(へん-さつ[編冊](名) とぢほん。
(へん-さん[編纂](名) 諸種の材料をあつめて、書籍の原稿をつくること。
(へん-さん[偏衫](名) 袈裟の下につくる長き襦袢の如きもの、天竺の服に、右の肩を脱ぐに象りたりといふ。


[へんさん]

(へん-し[片紙](名) ちよっとした紙ぎれ。
(へん-し[片思](名) かたおもひ。
(へん-し[變死](名) 災難にあひて死ぬること。又、自害して死ぬること。
(へん-し[偏師](名) 五十人の軍勢。
(へん-し[片志](名) いさゝかのこゝろざし。寸志。
(へん-し[返詞](名) 贈りたる詩歌に、こたへておくる詩歌。
(へん-じ[返辭](名) あいさつ。こたへ。かへりごと。へんたふ。(返答)。
(へん-じ[片時](名) かたとき。
(へん-じ[變事](名) 常ならざる事。かはりたる事。
(へん-じ[編次](名) あみてついづること。又、あみたるついで。
(べん-し[辯士](名) ㊀辯舌の巧（[illegible]）なる人。㊁演說する人。
(べん-じ[辨事](名) 事をとりはからふこと。又、其人。
(へん-しう[扁舟](名) 小舟。
(へん-しつ[變質](名) 性質を變ずること。
(べん-しつ[便室](名) ㊀くつろぎて休息する室。㊁便所。
(へん-しふ（ウーシ）[偏執](名) 僻見を固持すること。かたいぢ。へんくつ。
(へん-しふ（ウーシ）[編輯](名) 諸種の材料をあつめて文書をあみつゞること。(編纂)。――きよく[編輯局](名) 編輯の業務をとる所。――しや[編輯者](名) 編輯の業務に服する人。又、編輯の責任にあたる人。――しよ[編輯所](名)「へんしふきよく」に同じ。――にん[編輯人](名)「へんしふしや」に同じ。
(へん-しや[偏斜](名) かたよりてなゝめなること。
(へん-しや[編者](名) 文書を編纂する人。
(べん-しや[辯者](名) よくしやべる人。口前の達者なる人。(能辯家)。
(へん-しやう（シヨウ）[變象](名) 常ならざる現象。
(へん-しやう（シヨウ）[變症](名) 病狀の變ずること。
(へん-しやう（シヨウ）[返章](名)「へんしよ」(返書)に同じ。
(へん-しやう（シヨウ）[返償](名) かへしつぐのふこと。
(へん-じやう（シヨウ）[變狀](名) 常ならぬ狀態。
(へん-じやう（シヨウ）[返上](名) 返し奉ること。おかへしすること。「大政―」。
(べん-しやう（シヨウ）[辨償](名) ㊀つぐのひかへすこと。㊁【法】他人に代はりてつぐなふこと。
(へん-しゆ[變種](名) 同一種に屬して其形質の不同なるもの。かはりだね。
(へん-しゆ[騙取](名) かたりとること。あざむきとること。
(へん-しゆ[篇首](名) 篇章のはじめ。
(へん-しゆ[邊守](名) くにざかひのまもり。
(へん-しよ[邊處](名) かたゐなかにをること。又、かたゐなか。
(へん-しよ[返書](名) こたへの手紙。(返信)。
(へん-しよ[片書](名) ちよっとした文書。
(へん-しよ[貶書](名) そしりおとしめてかくこと。
(べん-じよ[便所](名) せついん。かはや。
(へん-しよう[泛稱](名) おほまねく指していふ稱。
(へん-しよう[變稱](名) 名稱を變ずること。又、かへたるとなへ。
(べん-しよう[辨證](名) 【哲】直覺若しくは經驗によらず、概念を分析して事理を研究すること。――はふ（ウーホ）[辨證法](名) 辨證の方法、近世の哲學史上に於て最も有名なるは、「カント」及「ヘーゲル」の辨證法とす。
(へん-しよく[變色](名) いろを變ずること。又、變じたる色。
(へん-しん[返信](名) こたへの音信。
(へん-しん[變心](名) こゝろがはり。
(へん-しん[變身](名) ㊀身のさまを變へてゐること。㊁變はりたる身。
(へん-しん[遍身](名) からだぢゆう。
(へん-しん[偏身](名) かたみ。半身。
(へん-しん[偏心](名) かたよりたるこゝろ。ねぢけたるこゝろ。
(へん-しん[偏信](名) かたより信ずること。
(へん-じん[偏人](名) 普通の人とことなりて、性質のかたよりたる人。一風かはれる人。かはりたる性質の人。(變人)。
(へん-しんれう（ヨーリ ウ）[返信料](名) 返信の電報をうつ料。――ぜんなふ（ーノウ）でんぱう（ーボウ）[返信料前納電報](名) 電報の發信者が發信の際に、返信料を前納し、先方より返信料なしに返信し得る手數のもの、其符號は和文にて「チツ」歐文にて「RP」なり。
へん-ずる（ぜじずずる、ずれぜよ）[變](自、さ變) かはる。あらたまる。
へん-ずる（ぜじずずる、ずれぜよ）[變](他、さ變) かふ。あらたむ。
べん-ずる（ぜじずずる、ずれぜよ）[辨](自、さ變) ㊀わかる。㊁すむ、㊂とゝのふ。

べん-ずる（ぜじずずる、ずれぜよ）[辨](他、さ變) ㊀區別す、わかつ。㊁區別す、わきまふ。處置す、とりはからふ。㊂力を致す。ものを具ふ。「多々ます〳〵―」。
べん-ずる（ぜじずずる、ずれぜよ）[辯](他、さ變) のぶ。とく。いふ。
ペンス[Pence](名)「ペンニー」の複數。
(へん-すう[變數](名) 【數】値の漸次變ずる數。
(へん-すゐ[邊陲](名) くにのはし。くにざかひ。
(へん-すゐ[邊帥](名) くにざかひを守る大將。
(へん-せい[編制](名) 個々のものをあつめて團體を組織すること。
(へん-せい[編成](名) あみつくること。
(へん-せい[偏性](名) かたよりたる性質。
(へん-せい[變生](名) うまれがはり。
(へん-せい[變成](名) かはりてなること。又、かへてつくること。――がん[變成岩](名) 【地】古き地層を構成する一種の岩石、水成岩の如く層をなせど、其成分は結晶質にして火成岩と異ならず。
(へん-せう（ヨーシ ウ）[褊小](名)「へんけふ」(褊狹)に同じ。
(へん-せう（ヨーシ ウ）[返照](名) いりひのかげ。
(べん-せき[鞭責](名) むちうちせむること。
(へん-せつ[變說](名) 在來の說をかふること。
(へん-せつ[變節](名) 節義をかふること。――かん[變節漢](名) 變節したるをとこ。
(べん-ぜつ[辯舌](名) ものいひ。辯口。
(へん-せん[變遷](名) うつりかはり。「世の―」。
(へん-せん[貶遷](名) 官職をおとして遠地へやること。
(へん-せん[蹁躚](名、副) まふさま又はよろめくさまにいふ語。
ベンゼン[Benzene](名) 【化】石炭「タール」の中より分離する揮發性の無色の液體。
(べん-そ[辯疏](名) いひわけ。
(へん-そう[返送](名) かへしおくること。
(へん-そく[變則](名) 規則にたがふもの、規則はづれ。
(へん-そく[邊側](名) ほとり、ふち、かたはら。
(べん-だ[鞭打](名) むちうつこと。
(へん-たい[變態](名) ㊀かたちをかふること、又、かはりたるかたち。(變體)。㊁【動】動物が卵子より發生して、一の完成せる狀態に到達するまで、時期によりて其狀態を變ずること、昆蟲が幼蟲より蛹となり更に蛹より成蟲となる類。
(へん-たい[變體](名) 普通の體とかはりたるもの。――がな[變體假名](名) 平假名の變體にして「し」を「志」と書くが如き類。
(へん-だい[篇題](名) 書物又は詞章の題目。
(べん-たい[冕帶](名) 冕の紐。
(へん-たう（ウート）[扁桃](名) 【植】「アメンドウ」に同じ。
(べん-たう（ウート）[辨當](名) 外にて食事するため、器物に飯・菜などを入れて携帶するもの。又、其器物。(行厨)。
(べん-だう（ウード）[便道](名) 勝手よき道。
〜べんたう-くわんり（ウート）[辨當官吏](名) 辨當を携帶して出勤する下級の官吏。こしべん。
(へんたう-せん（ウート）[扁桃腺](名) 人類の口腔の奥の兩側にある腺。――えん[扁桃腺炎](名) 扁桃腺が肥大して、咽喉の左右にぐり〳〵を生じはれあがる病氣。
(へんたう-そ（ウート）[扁桃素](名) 【化】「アメンドウ」核の中に存在せる結晶體、白色の光輝あり。
べんたう-ばこ（ウート）[辨當箱](名) 辨當の器物。
(へんたう-ゆ（ウート）[扁桃油](名) 扁桃より採取したる油。
(へん-たく[泛宅](名) 船の稱。
(へん-たく[貶謫](名) 官をしりぞけて遠地へやること。
(べん-たつ[鞭撻](名) ㊀むちうつこと。㊁はげますこと。
(へん-たふ（ツート）[返答](名) 呼ばれ又は問はれたるに應じて答ふること。いらへ。へんじ。あいさつ。こたへ。
(へん-たん[褊袒](名) 片はだぬぎ。
(へん-ち[邊地](名) かたゐなか。
(べん-ち[便地](名) 勝手よき土地。
(べん-ち[鞭笞](名) ㊀むち。㊁むちうつこと。
ベンチ[Bench](名) こしかけ。椅子。
〜(へん-ちきりん(名) いぶかしきこと。變なること。
(へん-ちく[貶逐](名) しりぞけおふこと。
ペン-ぢく[洋筆軸](名)「ペン」先を插して用ふるもの。
(へん-ちつ[篇帙](名) ふみづゝみ。又、冊子。
(へん-ぢゆう[偏重](名) かたよりておもきこと。
(へん-ちゆう-るゐ[扁蟲類](名) 【動】蠕形動物の一、體軀扁平にして楕圓形若しくは細長なり、濕地・水中などに棲し、又、他の動物に寄生するものも多し、かうがいひる・さなだむし等これに屬す。
(へん-ちよう[偏重](名)「へんぢゆう」に同じ。
(へん-つう[變通](名) 臨機應變のはかりごとあること、物事に應じよく變化してこれに通達すること。
(べん-つう[便通](名) 大小便の通ずること。
(べん-つう[便痛](名) 大便の通ずるとき痛みを感ずること。
へん-つき[偏突](名) 漢字の偏を隱し、つくりのみを出だして、其文字を當てあふ遊戲。
(へん-てう（ヨーチ ウ）[變調](名) 調子を變ずること、又、變

じたる頭字。

（へん-てこ（名） いぶかしきこと。變(ヘン)なること。——らい（名） 前條に同じ。——りん（名） 前々條に同じ。

（へん-てん［變轉］（名） かへうつすこと。又、かはりうつること。

（べん-てん［辨天］（名） ㊀［佛］辨財天。㊁美人。

（べん-でん［便殿］（名） 休息の御殿。

⌒べんてん-むすめ［辨天娘］（名） いと美しきむすめ。

（へん-ど［邊土］（名） かたゐなか。ゐなか。（邊鄙）。

（へん-とう［籩豆］（名） ㊀支那の古昔、祭事の供物を載せし器。㊁轉じて、禮儀。禮節。

（へん-どう［變動］（名） かはりうごくこと。又、かへうごかすこと。

（へん-どく［篇牘］（名） ふだ。又、かきもの。

（べん-どく［便毒］（名） 股のつけ根に發する瘡毒。よこね。

（へん-なふ［返納］（名） かへしをさむること。（返上）。

（べん-なん［辯難］（名） とき難ずること。いひあらそふこと。

ペンニー［Penny］（名） 「イギリス」國の貨幣の名、「シルリング」の十二分の一。

（べん-ねい［便佞］（名） 小才のきゝて心のねぢけたること。又、其人。

（へん-にふ［編入］（名） くみ入るゝこと。くみこむこと。

（へん-ねん-し［編年史］（名） 編年體の歷史。

（へん-ねん-たい［編年體］（名） 歷史の一體、年代の順序を追ひて事實を記するもの。

（へん-ぱ［偏頗］（名） えこひいき。かたもち。不公平。

（へん-ぱ［偏跛］（名） かたちんば。びっこ。

†へん-ばい［反閇］（名） 古昔、行幸の節、陰陽家が行幸先異變なきため、邪氣を閉ぢ正氣を迎ふるためとてなしたるわざ。

（へん-ぱい［返盃］（名） 差されたる盃を飲(ホ)して、差し返すこと。（酬盃）。

（へん-ばう［邊防］（名） 國境の防禦。

（へん-ばう［偏旁］（名） 漢字の偏とつくりと。

（へん-ばう［邊傍］（名） かたはら。

（へん-ぱう［變報］（名） 常事にあらざる報知。

（へん-ぱう［返報］（名） ㊀むくい。㊁仕かへし。——がへし［返報返］（名） 仕かへし。

（べん-ぱう［便房］（名） 休息のへや。

（べん-ぱう［辯妄］（名） 其物事の妄なるをのべとくこと。

（べん-ばく［辯駁］（名） 他の說をうつこと。いひあらそふこと。

（べん-ぱつ［辮髮］（名） 髮を交へくみて後に垂らしたるもの、現今支那人の頭髮の風。——ど［辮髮奴］（名） 支那人をあざけりていふ語。

（へん-ぱふ［變法］（名） 法制を變ずること。

（べん-ぱふ［便法］（名） 便利なる方法。

（へん-び［邊備］（名） くにざかひのそなへ。

（へん-び［篇尾］（名） 篇章のをはり。

（へん-ぴ［邊鄙］（名） かたゐなか。ゐなか。

（べん-ぴ［便祕］（名） 大便の祕結すること。

（へん-ぷ［返付］（名） かへしわたすこと。もどすこと。

（べん-ぶ［抃舞］（名） 手をうちてまひをどること。

（へん-ぷく［邊幅］（名） ㊀はし。へり。㊁みえ。うはべ。「——を修飾す」。

（へん-ぷく［蝙蝠］（名） 【動】「かうもり」に同じ。

（べん-ぷく［便服］（名） ふだんぎ。便衣。

（べん-ぷく［便腹］（名） 便々たるはら。

（へん-ぶつ［偏物］（名） 偏屈なる人物。偏人。

（へん-ぺい［扁平］（名） ひらたきこと。

（べん-ぺい［便嬖］（名） 小才のきゝたる御氣に入り。

（べん-ぺい［便閉］（名） 大小便の通じあしきこと。

（へん-ぺき［偏僻］（名） ㊀かたよること。ねぢくること。㊁くせ。

（へん-ぺき［返璧］（名） （たまをかへす義）他人の借物などをかへすこと。

（べん-べつ［辨別］（名） 差別すること。識別すること。わきまへ。

（へん-ぺん［翩翩］（名、副） ㊀飜(ヒルガヘ)るさまにいふ語。㊁輕々しきさまにいふ語。「——たる才子」。

（へん-ぺん［片片］（名、副） ㊀斷片の飜(ヒルガヘ)るさまにいふ語。㊁きれぎれになるさまにいふ語。

（べん-べん［便便］（名） ㊀無益に時間の過ぎ行くさまにいふ語。㊁腹のいたく肥滿せるさまにいふ語。「——たる腹、丁とたゝき」。

⌒ぺん-ぺん（名） 三味線の稱。（小兒の語）。——ぐさ（名） 【植】「なづな」の一名。

⌒べんべん-たらり（名、副） 便々として物事のきまりのつかざるさまにいふ語。

（へん-ぽん［翩翻］（名） 旗などのひるがへるさまにいふ語。

⌒へん-まう［偏盲］（名） かための見えざるもの。

（べん-まう［辯妄］（名） 「べんばう」に同じ。

（へん-みやう［變名］（名） 本名をかくして別にとなふる名。

（へん-みん［邊民］（名） くにざかひのたみ。ゐなかのたみ。

（へん-む-けいやく［片務契約］（名） 【法】一方のみが債務を負ふ契約、例へば贈與の如きこれなり。

（へん-めい［變名］（名） 「へんみやう」に同じ。

（べん-めい［辨明］（名） わけて明かにすること。

（べん-めい［辯明］（名） のべときて明かにすること。

（べん-めん［便面］（名） （面を遮るに便利なりとの義）團扇の異稱。

（べん-もう［便蒙］（名） 初學者にわかりやすき書物。

（へん-もく［篇目］（名） 篇章の題目。

（へん-もく［偏目］（名） かため。

（へん-やく［變約］（名） 約束を變ずること。

（へん-やく［變易］（名） 「へんえき」に同じ。——しやうじ［變易生死］（名） 【佛】迷悟の遷移。

（べん-よ［便輿］（名） よつてかご。やまかご。

（へん-ら［扁螺］（名） 【動】「しじみ」に同じ。

（へん-らん［變亂］（名） 事變おこりて世の亂るゝこと。

（べん-らん［便覽］（名） 見るに便利なるやうにつくりたる書物。

（べん-り［便利］（名） たよりよきこと。勝手よきこと。便宜。

（べん-り［辨理］（名） とゝのへをさむること。とりあつかふこと。——こうし［辨理公使］（名） 特命全權公使の次に位する公使、一般に國家又は政府を代表せずして各事項につきて代表するもの、全權大使又は全權公使を派遣せざる條約國に派遣せらる。

ヘンルウダ［芸香］（名） 【植】（「オランダ」語 Wijnruit の訛）芸香科に屬する草、葉は複葉にして白色を帶ぶ、初夏の頃、白色の花開く、果實は藥用に供せらる、もと「オランダ」人の齎(モタラ)したるもの。

（へん-るゐ［邊壘］（名） くにざかひのとりで。

（へん-れい［返禮］（名） 他人より禮を受けたるに對して、かへしむくゆる禮。

（べん-れい［勉勵］（名） つとめはげむこと。

（へん-れき［遍歷］（名） 諸國をへめぐること。（周遊、歷遊）。

（へん-ろ［遍路］（名） 所願のため道中食を乞ひながら、四國八十八個所の靈所をめぐり行くもの。

（べん-ろ［便路］（名） 勝手よきみち。

（へん-ろう［偏陋］（名） かたよりてせまきこと。

（べん-ろん［辯論］（名） ㊀のべとくこと。いひはること。㊁論じあふこと。いひあらそふこと。

（へん-ゐ［變位］（名） 【理】動體の位置をかふること、動體が甲點より乙點に至るときは、甲乙二點の距離を其變位といふ。

†へん-ゐ［版位］（名） 古昔、朝賀・祭祀等の時、群臣の座位を定むるに置きし木札。しるしのいた。

（へん-をく［偏屋］（名） かたびさしのいへ。

ほ　ぼ　ぽ

ほ　喉音H即ち聲帶を少しく張り聲門を稍や狹めて深厚なる氣息を通ずれば生ずる音と、母音「お」との綴音。

ぼ　「ほ」の濁音、すべて「ほ」と同じくして、たゞ聲帶の振動の伴ふを異なりとす、從來「ほ」の濁音となしゝは誤なり。

ぽ　脣的破裂音P即ち兩脣を閉ぢて破裂せしむる音と、母音「お」との綴音、從來「ほ」の半濁音となしゝは誤なり。

†ほ［秀］（名） ぬきいで、目につくこと。ひいづること。

†ほ［火］（名） ひ。「——串」「——影」。

ほ［穗］（名） ㊀抽き出でたる莖頭の實を結び又は花の開く所。「稻の——」。㊁槍の刃のさき。㊂すべて尖りたるもの、さきの稱。㊃思ひのほどの外貌にあらはれ見ゆること。

ほ［帆］（名） 帆柱に揚げ張り風を受けしめて、船を進むる具、布又は蓆にて作る。（颿、颺、篷）。

（ほ［步］（名） ㊀あゆむこと。あゆみ。あし。㊁あしどり、あゆみかた。㊂をり、機運。「國——艱難」。㊃「ぶ」に同じ即ち、坪。

（ほ［畝］（名） ㊀うね。㊁支那にて、反別の稱。「五——田」。

（ほ［補］（名） ㊀すけ。補役。㊁みならひ。候補。

（ほ［圃］（名） はたけ。

ほ［百］（數） もゝ。ひやく。「い——」。

ボーイ［Boy］（名） こもの。こづかひ。（小厮）。

ボーイ-コット［Boycott］（名） （始めて此制裁を加へられたる「アイルランド」の地主の名に出づ）地主・商人・雇主又は其他に對し、同盟して反抗を企て社交上又は業務上の關係を絕ちてこれをくるしむること。

ホーウィッツル（名） （「オランダ」語 Howitzer）臼砲。

ホーク［Fork］（名） 西洋料理の用具、金屬にて製し、端末指狀をなして尖(トガ)る、「ナイフ」にて切りたる肉をさして食ふに用ふるもの。にくさし。

ボート［Boat］（名） 西洋形の端艇。——レース［Boat-race］（名） 「ボート」の競漕。

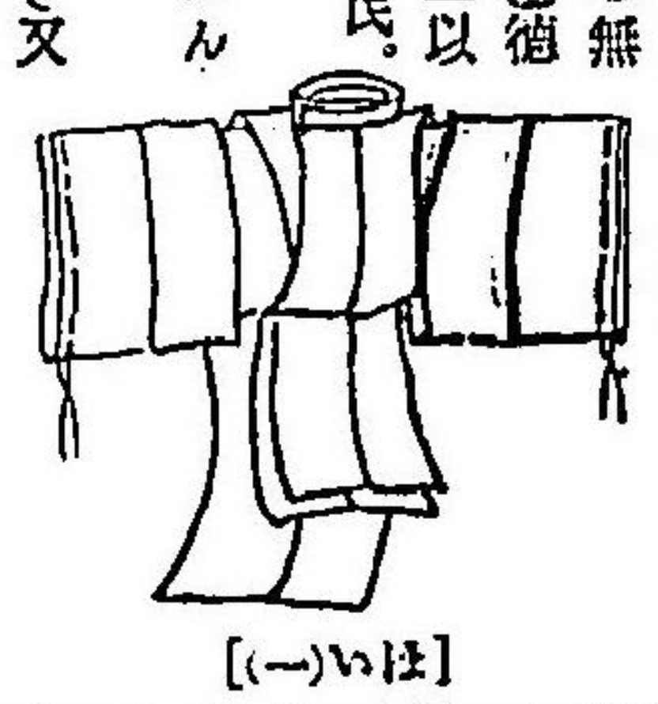
ボードの きそく［——の規則＝Bode's rule］［天］遊星の太陽よりの距離に關する經驗的規則、0, 3を初項及次項とし、次項以下順次に二倍して得る級數即ち0, 3, 6, 12, 24, 48, 96, 192, 384の各數に、4を加へて得る級數即ち4, 7, 10, 16, 28, 52, 100, 196, 388が、各遊星の太陽よりの距離の比を近似的に表はすといふこと、此中海王星の距離は此規則に合はず、地球の距離を10とせば海王星の距離は300なり。

ボール［Ball］（名） たま。まり。

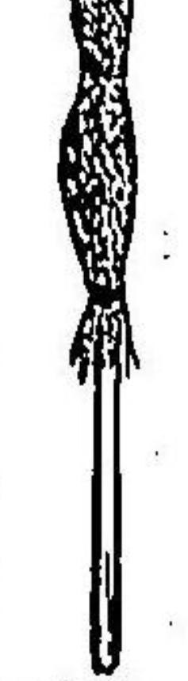
ボール-がみ［——紙］（名） （Board の訛）「ばふんし」（馬糞紙）に同じ。

ボールド［Baord］（名） 敎授上などに用ひらるゝ塗板、黑板。

ほ-あし【帆脚】(名) 帆の下のふち。
(ほ-あん)【保安】(名) 「はうあん」に同じ。
(ほ-い)【布衣】(名) ㊀無文の狩衣。ほうい。㊁徳川時代に、旗臣の目見以上の班次の稱。㊂平民。ふい。


[ほい(一)]

ほ-い【本意】(名) 「ほんい」の略言。
(ほい)(感) ㊀物をかつぎ又は押すときなどのかけ聲。㊁失敗に氣附きて發する聲。「—しまった」。
(ほ-いう)【補佑】(名) おぎなひたすくること。
(ほ-いう)【保有】(名) たもつこと。
(ほい-かご)(名) 昔時、辻待せし駕籠。
(ほ-いく)【保育】(名) 保護しそだつること。
ほい-しん【背心】(名)【佛】袖なき僧衣。
ホイ-タウ（ウト）【陪堂】(名)【佛】飯米の稱。
ほいたけ-ぼう【祝竹棒】(名) 兩羽地方にて古來習慣として作り來れる杖、毎五年正月十日道祖神の祭りとて男子これを持つを祝儀とす、古昔は、これを以て女の腰を打ちたりといふ。


[ほいたけぼう]

(ほい-だ-す)（さしすすせせ）(他、さ四) おひ出す。
(ほい-と)【乞兒】(名) (「はいたう」(陪堂)の轉、米を乞ふ意)「こつじき」の異稱。(中國地方の方言)。
ほい-な-し（くしき、けれ）【本意無】(形、二) 事は思ひの如くならず。失望せり。
ホイヘンス の げんり【—の原理＝Huygens' Principle】【理】波動の傳遞する際、媒質内に於て波面上の各部が順次に波源となり、其無數の小波面を包む面が、少時間後の波面なりといふ原理、「オランダ」人「ホイヘンス」の始めて唱へたるもの。
(ほい-ほい)(名、副) わけもなくたゞ毀しかばふさまにいふ語。
(ほい-や-る)（らりるれれろ）(他、ら四) おひやる。
ホイ-ロ【焙爐】(名) (字の宋音)火の上に懸け中に物を入れて乾かす具、框(ワク)に紙などを貼(ハ)れるもの。(焙爐、紙炬)。
(ぼ-いん)【母音】(名)【文法】聲帶の振動によりて起る音波が、調聲管を通過する際に、其共鳴によりて副音波を增減して生ずる樣々の音色の稱、我國にては「あ・い・う・え・お」の五音をいふ。
(ぼ-いん)【拇印】(名) 拇指の先端に墨をつけ、其膚理の紋を捺して、實印に代用するもの。つめいん。
ポイント【Point】(名) ㊀場所。點。㊁鐵道にて、汽車の車輛を甲線より乙線に移すため、岐路に備へ置く裝置。 **——メン**【Pointsmen】(名) 鐵道の「ポイント」を取扱ふ人。
(ほう)【鳳】(名) 鳳凰の雄。
(ほう)【鵬】(名) 支那にて、想像上の大鳥、鯤の化したるものにして、其翼の徑(サシワタシ)三千里ありといふ。おほとり。
(ほう)【封】(名) ㊀大名の領地。食邑。㊁土地の境界。さかひ。㊂もりつち。㊃をか。㊄晉版。上奏。
(ほう)【鋒】(名) ㊀ほこさき。きっさき。㊁つるぎ。ほこ。
(ほう)【烽】(名) のろし。あげび。
(ほう)【俸】(名) 扶持。給料。
ほう【頰】(名) 「ほほ」の音便。
ほう【法】(名) 「はふ」の音便。
(ほう-)【鳳】(接頭) 或語に冠して、敬意を表する語。
(ぼう)【棒】(名) ㊀細長くして手に持ち得らるゝ程の竹・木又は金屬製のもの。杖、(棍棒、椎)。㊁武藝にて使用する五六尺の圓き木の杖。又、これを使用する術。㊂引きたる線。 **——に ふる** 無益に手離す。 **——を ひく** すぢを引く。又、帳消となす。
†ほう-い【布衣】(名) 「ほい」(一)に同じ。
(ほう-いう)【朋友】(名) ともだち。とも。
(ほう-えう)（ウヨ）【蜂腰】(名) ㊀こしをれうた。㊁蜂の如くに括れたる細き腰、「—蟬娟」。
(ほう-えき)【縫掖】(名) 袍の兩腋の下を縫ひつけて裔(スソ)のあるもの、古昔、天子及武官の正服なり。まつはしのうへのきぬ。
(ぼう-えき)【貿易】(名) ㊀【經】財の交換即ち交易。㊁外國貿易の特稱。 **——じむくわん**【貿易事務官】(名) 領事を置かざる地に置かるゝ官職、外務大臣の訓令に基づき、領事官の職務に關する法令及條約の規定に準依して其職務を行ふもの。 **——しやう**（ヨウシ）【貿易商】(名) 外國貿易の營業。又、其營業の人。 **——ぢやう**（ヨウヂ）【貿易場】(名) 「ごしやう」(互市場)に同じ。 **——ふう**【貿易風】(名)【地】赤道の南北三十度以内の海上に生ずる恆風、其商船に利する所多きよりいふ。
(ほう-えん)【烽煙】(名) のろしのけむり。
(ほう-いん)【鳳音】(名) ㊀律の上無(カミム)の調。㊁音聲又は音信の敬稱。
(ほう-か)【豐下】(名) しもぶくれ。
(ほう-が)【奉加】(名) 神佛に寄進する品物の中に金を加へ奉ること。
(ほうかい-ぶし)(名) 俗謠の一種、謠の中間に「ほうかい」といふ語をそへて謠ふよりいふ。
(ほう-かう)（ウコ）【奉行】(名) 旨をうけてとりあつかふこと。うけたまはりて行ふこと。
(ほう-かう)（ウコ）【封港】(名) 「ふうかう」に同じ。
(ほう-かう)（ウコ）【蓬蒿】(名)【植】「よもぎ」に同じ。
ぼう-がしら【棒頭】(名) 駕籠かきの頭。
ぼうが-ちやう（ヨウチ）【奉加帳】(名) 奉加の目錄を記入する帳簿。
(ほう-かん)【幇間】(名) をとこげいしや。たいこもち。
(ほう-き)【蜂起】(名) 蜂の如くにむらがり起ること。
(ぼう-ぎ)【謀議】(名) はかりごとの相談。計畫の評議。
(ほう-きふ)（ウキ）【俸給】(名) 國家が官吏に又は會社・個人が其雇人・事務員等に支給する一定の給與金。
(ほう-きやう)（ヨウキ）【封疆】(名) ㊀領地のさかひ。㊁土地のさかひ。
(ほう-ぎよ)【崩御】(名) 帝王のかくれ給ふを申し奉る語。(登遐、登仙、晏駕)。
(ほう-きよう)【豐凶】(名) 豐年と凶年と。
(ほう-きん)【俸金】(名) ほうきふ。
†ほう-く（くけけくくるくれけよ）【惚】(自、か下二) 「ほく」の延言。「病み—」。
†ほう-ぐ【反故】(名) ほぐ。すたれがみ。(破故紙)。
(ほう-ぐう)【逢遇】(名) あふこと。であふこと。
ぼう-ぐひ（イグ）【棒杭】(名) 圓き木材の杭。
ぼう-ぐみ【棒組】(名) ㊀あひぼう。なかま。㊁活版にて、框に入れずに横に長く組みたるもの。
(ほう-くわ)【烽火】(名) のろし。とぶひ。
(ほう-くわ)【蜂窩】(名) はちのす。
(ほう-くわい)【崩潰】(名) くづれつひゆること。
(ほう-くわん)【奉還】(名) 上にかへしたてまつること。「大政を—す」。
(ほう-げい)【奉迎】(名) 貴人をお迎すること。
(ぼう-けい)【謀計】(名) はかりごと。てだて。
(ぼう-げき)【矛戟】(名) ほこ。
ぼう-けし【棒消】(名) ちやうけし。
(ほう-けつ)【鳳闕】(名) 禁裡の異稱。
(ほう-げつ)【萌蘖】(名) めばえ。ひこばえ。
(ほう-けふ)（ヨウキ）【豐頰】(名) ㊀美しくゆたかに肥えたる頰。㊁美人。
(ほう-けん)【奉獻】(名) たてまつること。
(ほう-けん)【封建】(名) 土地をわけて諸侯を建つること、即ち封建制度。 **——じだい**【封建時代】(名) 封建制度の時代、我國にては鎌倉時代より明治維新に至るまでは封建時代なり。 **——せいど**【封建制度】(名) 諸侯に封土を與へ、其子孫をして其封土を世襲し、一定の制限以外は其封内の政治をおのおの隨意に取扱はしめし制度、郡縣制度の對。
†ほう-こ【布袴】(名) 古昔、直衣にしたがさね及さしぬきを着せしこと。
†ほう-こ【封戸】(名) 「ふご」に同じ。
†ほう-ご【反故】(名) ほぐ。すたれがみ。(破故紙)。
(ほう-こう)【奉公】(名) ㊀公に仕へ奉ること。㊁主人に仕ふること。
(ほう-こう)【封侯】(名) 封土を受けて大名となること。
(ほうこう-にん)【奉公人】(名) めしつかひ。やとひにん。 **——くちいれ**【奉公人口入】(名) 奉公人の周旋。
ぼう-ごえ【棒肥】(名) 植物の周圍の處々に穿(ウガ)ちたる孔中に肥料を施して、其上に土をかくること。
(ほう-こく)【封國】(名) 大名の領地。
ホウゴロウ【鳳五郎】(名) (「オランダ」語 Struis Vogel の上略)駝鳥の異稱。
†ほう-ごゑ(名) ほうほうと叫ぶ聲。
(ほう-さ)【封鎖】(名) 「ふうさ」に同じ。
(ほう-さ)【硼砂】(名) 「はうさ」に同じ。
(ほう-さう)（ウソ）【蓬窓】(名) 船のまど。
ぼう-さき【棒先】(名) ㊀駕籠の棒の先肩。㊁人にたのまれたる買物の代價のうはまへ。 **——を きる** 人にたのまれたる買物の代價のうはまへをとる。
(ほう-さく)【豐作】(名) 穀物の豐熟すること。五穀のよくみのること。(滿作)。
(ぼう-さく)【謀策】(名) はかりごと。たくらみ。
(ぼう-ざたう)（ウト）【棒砂糖】(名) 圓錐形に固めたるざらめ砂糖。
(ぼう-さつ)【謀殺】(名)【法】豫謀に出でたる殺人、即ち思慮をめぐらして殺人の意思を遂行したること。 **——ざい**【謀殺罪】(名)【法】謀殺の所爲の犯罪。
(ほう-さん)【硼酸】(名) 「はうさん」に同じ。
(ほう-し)【法師】(名) 「はふし」の音便。
(ほう-し)【奉仕】(名) 君主に仕へまつること。伺候。
(ほう-じ)【鳳字】(名) (鳳の字を分くれば凡鳥となるよりいふ)なみの器量なるをいふ語。
(ほう-じ)【奉事】(名) 長上につかふること。
†ほう-じ【法事】(名) 「はふじ」に同じ。
(ぼう-し)【謀士】(名) 謀計を立つる人。計畫する人。
(ぼう-し)【眸子】(名) ひとみ。
(ほう-しき)【縫織】(名) 「ほうしよく」に同じ。
(ほうし-ちやうじや)（ヨウヂ）【封豕長蛇】(名) (大なる家と長きへびとの義)他國を侵略して飽くなきものにいふ語。
ぼう-じま【棒縞】(名) 黑の條の縦に入りたる縞。
†ほうし-まらひと-の-つかさ【玄蕃寮】(名) (法師賓客の義)「げんばれう」に同じ。
(ほう-しや)【硼砂】(名) 「はうしや」に同じ。

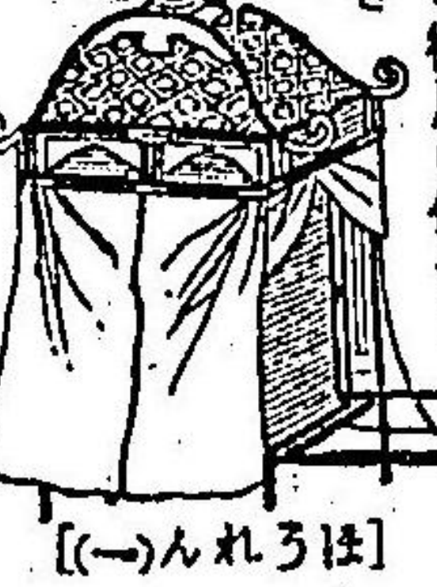
(ほう-じやう（ヨウ）[豐穰](名) ㊀ゆたかなること。お
ほきこと。豐饒。㊁豐年。
ぼうじやう-いわう（ヨウ）（イ ジヨウ）[棒狀硫黃](名)【化】
天然に產出する硫黃を蒸溜し、發散せる硫黃の蒸氣
が冷却して液狀となりたるを、圓壔形の型（カタ）に入
れて凝固せしめたるもの。　「もの。
(ぼう-しゆ[謀主](名) 主となりて謀計を立つる
(ほう-じゆう[捧銃](名) 小銃をさゝげ持つこと。
(ほう-じゆく[豐熟](名) 穀物のよく熟すること。
(ほう-しよ[奉書](名) ㊀室町時代に、將軍の命を
承（ウ）けて、執事又は奉行等より下だしゝ文書。㊁
「ほうしよがみ」の略言。㊂「ほうしよつむぎ」の略言。
(ほう-じよ[幇助](名) そばより力を添ふること。た
すくること。　「もん。
(ぼう-しよ[謀書](名) にせてがみ。にせしよう
(ほう-しよう[奉承](名) うけたまはること。
ほうしよ-がみ[奉書紙](名) 肌美しく皺の無き
楮紙。
(ほう-しよく[奉職](名) 其職務に從事すること。
(ほう-しよく[縫織](名) ぬひはりとはたおり
(ほう-しよく[豐殖](名) 殖の多くなること。「と。
ほうしよ-つむぎ[奉書紬](名) 羽二重（ハブタヘ）に似
たる精良の紬。
(ほう-じん[封人](名) くにざかひを守る人。
(ぼう-しん[謀臣](名) 謀計を立つる臣下。
(ほう-ず（ズル ゼヨ ズレ セジ ズ）[崩](自、さ變) 帝王かくれさせ
たまふ。かみさる。
ほう-ず（ズル ゼヨ ズレ セジ ズ）[奉](他、さ變) ㊀たてまつる。け
んず。㊁うけたまはる。うく。「命を—」。㊂いたゞ
く。たふとぶ。㊃さゝげ持つ。さゝぐ。
ほう-ず（ズル ゼヨ ズレ セジ ズ）[封](他、さ變) ㊀土を積む。も
る。㊁さかひを設く。きまる。㊂土地を與へて大
名にとりたつ。㊃利を專にす。私を行ふ。「自ら—」。
㊄ふうをなす。とづ。
(ほう-ずゐ[烽燧](名) のろし。とぶひ。　「と。
(ほう-せう（ヨウ シ）[奉詔](名) みことのりをうくる
(ほう-ぜつ[封舌](名) くちどめ。
(ほう-せん[俸錢](名) きふれう。俸給。
(ほう-せん[奉饌](名) 饌をさゝげたてまつること。
(ほう-せん-くわ[鳳仙花](名)【植】鳳仙花科に
屬する草。葉は桃に似、淡綠色にして鋸齒と白毛と
を有す。花は美麗にして葉腋に簇生し、紅白色を呈
す。觀賞用として栽培せらる。(金鳳花、染指甲)。
(ほう-そ[硼素](名)「はうそ」に同じ。
(ほう-そう[奉送](名) 貴人をみおくりすること。
(ほう-たい[奉體](名) うけたまはりて心にとゞ
め身に行ふこと。　「くこと。
(ほう-たい[奉戴](名) 上としてうやまひいたゞ
(ほう-たい[蜂蠆](名) はちとさそりと。
(ほう-たい[硼帶](名)「はうたい」に同じ。——
えき[硼帶液](名)「はうたいえき」に同じ。
(ほう-だい[豐大](名) ゆたかにしてふときこと。
(ほう-たう（ウ ト）[朋黨](名) 同志の團結。ととう。
(ほう-たふ（ウ ト）[奉答](名) 貴人に對して御答へす
ること。
ぼう-だら[棒鱈](名) ㊀乾したる鱈。㊁〜ぶえや
う。やりっぱなし。(中國地方の方言)。
ぼう-たん[牡丹](名) ㊀【植】「ぼたん」の延言。「さ
うびー からなでしこ」。㊁かさねの色目、表は白に
して裏は紅梅なるもの。㊂古昔の婦人の服、練貫に
金の箔にて模樣を畫き又は繡をなして、赤き裏をつ
けたるもの。

(ほう-ぢ[捧持](名) さゝげもつこと。
(ほう-ぢ[奉侍](名) つかへはんべること。
ぼう-ぢぎり[棒千切](名) ちぎりき。棒のきれは
(ほう-ちつ[俸秩](名) 扶持。知行。　「し。
(ほう-ちやく[逢着](名) でくはすこと。
(ほう-ちよく[奉勅](名) みことのりをうけたま
はること。
(ほう-づ[法度](名) かぎり。さいげん。「—がない」。
ぼう-つかひ（カイ ツ）[棒遣](名) 棒を使用する武藝を
修むる人。又、其術に長じたる人。
(ぼうっ-と(副) ㊀ぼんやりと。㊁ほんのりと。
(ほう-てい[奉呈](名) さしあぐること。たてまつる
こと。けんじやう。　「と。
(ほう-てい[捧呈](名) 手にさゝげてたてまつる
(ほう-てい[鵬程](名) はるけき航路。
(ほう-てき[鋒鏑](名) ほこさきとやさきと。
ぼう-てふり[棒手振](名) ふりうり。ぼてふり。
十ぼう-と(副) 物を落し又は打ちたる音のさまにい
ふ語。　「つか。
(ほう-ど[封土](名) ㊀大名の領地。㊁もりつち。
(ぼう-と[謀圖](名) はかりごと。もくろみ。
(ほう-とう[奉燈](名) 神佛にたてまつるみあか
し。みあかし。
(ほう-とう[蓬頭](名) 頭髮のそゝげ亂れたること。
(ほう-どく[捧讀](名) 手にうや〳〵しく持ちて
讀むこと。
(ぼう-どく[棒讀](名) ぼうよみ。
(ほう-なふ（ナウ イ）[奉納](名) 神佛にそなへたてまつ
ること。——じあひ（イ ア）[奉納試合](名) 神佛
の祭禮などに、にぎはひのため諸人に縱覽せさする
武術の試合。——ずまふ（マウ ス）[奉納相撲](名)

神社の祭禮などに、にぎはひのため諸人に縱覽せさ
する相撲。——てぬぐひ（グイ ヌ）[奉納手拭](名)
神社佛閣の手水鉢の處などに奉納してさげおく
手拭。
(ほう-にく[豐肉](名) 肉のこえふとりたること。
ぼう-ね[棒根](名) 眞直に下へ向かひて生長せる
草木の根。たちね。ごぼうね。
(ほう-ねん[豐年](名) 穀物のみのりよきこと。豐
作。(豐稔、有年、康年)。——をどり[豐年踊]
(名) 豐年を祝して村中の男女などが相集まりてな
(ほう-ばい[朋輩](名) ともどち。(傍輩)「す踊。
(ほう-ばう（ウ ボ）[鋒鋩](名) ほさき。きっさき。
(ほう-ばう（ウ ボ）[蜂房](名) はちのす。
(ほう-はつ[蓬髮](名) そゝげ亂れたる頭髮。亂
髮。　「づれ。
ぼう-ばな[棒鼻](名) ㊀棒のはし。㊁宿驛のは
(ぼう-はん[謀判](名) 他人の印形ににせてつく
りたるものを捺して、其人の作成したる文書の如く
すること。にせはん。　「くこと。
(ぼう-はん[謀叛](名) むほんをおこすこと。そむ
(ほう-び[鳳尾](名) ㊀鳳の尾。㊁【植】「とらの
を」に同じ。——さう（ウ ソ）[鳳尾草](名)【植】
「うらぼし」に同じ。——せう（ヨウ シ）[鳳尾蕉](名)
【植】「そてつ」に同じ。——ちく[鳳尾竹](名)
【植】「ほうわうちく」に同じ。
ぼう-びや[棒火箭](名) 鐵製の筒に火藥を込め
砲にて發射するもの。
(ほう-ふ[豐富](名) ゆたかにとめること。
(ほう-ふく[捧腹](名) (腹をかゝふる義)大いに
笑ふこと。——ぜったう（ウ ト）[捧腹絕倒](名) 殆
ど堪へがたき迄に笑ふこと。

ぼう-ふら[棒振](名)【動】「ぼうふり」に同じ。
ボウブラ[南瓜](名)〈「ポルトガル」語 Abobora〉
【植】「カボチャ」に同じ。
ぼう-ふり[棒振](名) ㊀棒を振りまはすこと。㊁
「ぼうふりむし」の略言。——けんじゆつ[棒
振劍術](名) 拙劣なる劍術をのゝしりていふ語。
——むし[棒振蟲](名)【動】蚊の幼蟲、夏日水
中に孵化し赤黑色にして長さ一二分許、泳ぐさまの
恰も棒を振るが如く見ゆるより此名あり。ぼうふ
ら。ぼうふり。(蠛蠓、孑孑、釘倒蟲)。
(ほう-へい[奉幣](名) 神に幣を奉ること。——
し[奉幣使](名) 命を受けて奉幣に赴く勅使。
(ほう-ほう[蓬蓬](名、副) ㊀風の吹き行くさま
にいふ語。㊁轉々して處を定めざるさまにいふ語。
㊂そゝけ亂るゝさまにいふ語。
(ぼう-ぼう[莽莽](名) ㊀草などの生ひ茂れるさ
まにいふ語。「草—と茂る」。㊁髮眉などの生ひ立ち
て亂るゝさまにいふ語。「—眉」。　「名。
〜ぼうぼう-にし[岩螺](名)【動】「いぼにし」の一
(ほう-まい[俸米](名) 扶持米。
(ほう-めい[奉命](名) 命をうけたまはること。
ほう-めい-の-せちゑ[豐明節會](名)「とよの
あかりのせちゑ」に同じ。
十ほう-もち[捧物](名) さゝげもの。
(ほう-もつ[捧物](名) さゝげたてまつるもの。さ
ゝげもの。　「まひ。
(ほう-もん[蓬門](名) よもぎのかど。いぶせきす
(ほう-やう（ウ ヨ）[奉養](名) 長上につかへ、これを
やしなふこと。
(ほう-よ[鳳輿](名)「ほうれん」(鳳輦)に同じ。
ぼう-よみ[棒讀](名) 漢文を音讀して、返へること
なく讀み下すこと。

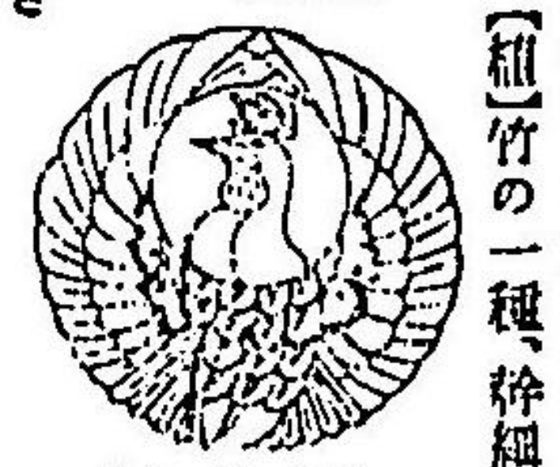
(ほう-らい[蓬萊](名) ㊀支那の傳說に、海中にあ
りて仙人の住むといふ神山。㊁轉じて、其神山に象
り、これに松竹梅・鶴龜・尉姥などを飾りて、祝事な
どに用ふるもの。㊂「ほうらいかざり」の略言。——
かざり[蓬萊飾](名) 新年の祝ひに、三方の上
に米をもり、其上に熨斗・搗栗・昆布・海老・馬尾藻な
どの類を飾りたるもの。——さん[蓬萊山]
(名) ㊀蓬萊(一)に同じ。㊁富山の稱。——だい
[蓬萊臺](名) 蓬萊飾をのする臺。——たう（ウ ト）
[蓬萊島](名) 蓬萊(一)に同じ。よもぎがしま。
——の-やま[蓬萊山](名) 蓬萊(一)に同じ。
——まめ[蓬萊豆](名)「げんじまめ」に同じ。
(ほう-らん[峰巒](名) 山のみね。
(ぼう-らん[棒蘭](名)【植】蘭科に屬する草、莖圓
くして葉なし、夏の頃、蘭に似たる小花開く。(釵子股)。
(ほう-り[鳳梨](名)【植】「アナナス」に同じ。
(ぼう-りやく[謀略](名) はかりごと。
〜ほう-る（ラ リ ル ル レ レ）[放](他、ら四)「はふる」の訛。
(ほう-れき[鳳曆](名) こよみの美稱。(新年狀な
どに用ふる語)。
(ほう-れん[鳳輦](名) ㊀屋形の上に金
の鳳凰を著けたる輦、主上の御用に供せし
もの。㊁轉じて、主上のめさ
せらるゝ御乘物の
稱。
(ほう-ろう[崩漏]
(名) 子宮の內部爛
れて出血する病氣。
(ほう-わう（ウ ヲ）[蜂王](名)【動】蜂の一群
中の唯一の蜂、常に巢內にありて產卵に從



[ほうれん(一)]

事するもの。

(ほう-わう［鳳凰］(名) 支那にて想像上の鳥、高さ五六尺、雞の如き頭、蛇の如き頸、燕の如き頷、龜の如き背、魚の如き尾にして、羽に五彩を供へ、聲は五音に中り、梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず、醴泉にあらざれば飲まず、飛べば群鳥これに從ふ、至德の瑞應として現ずといふ。——ちく［鳳凰竹］(名)【植】竹の一種、枠細くして蒹葭(カ)に似る、夏の土用頃に筍を出だす。(土用竹、鳳尾竹)。——まる［鳳凰丸］(名) 紋所の名、鳳凰を正面に見たるさまを描(ヱ)けるもの。


［鳳凰丸］

(ほう-ゐき［封域］(名) ㊀さかひ。㊁大名の領地の境。

(ほ-えき［補益］(名) おぎなひ益すること。

ほえ-つ・く（かきくくけけ）［吠附］(自、か四) 犬はげしく吠えて近寄る。

〔ほえ-づら［吠面］(名) なきがほ。なきつら。——かく なきがほをなす。なく。

ほか［外］(名) ㊀そと。おもて。㊁よそ。卄——ありき［外行］(名) 外へ出あるくこと。

(ほ-かう（ホコウ）［歩行］(名) あゆむこと。あるくこと。

(ほ-かく［補角］(名)【數】二つの角の和が二直角に等しきとき、各角の他の角に對しての稱。

ほ-かけ［穗掛］(名) 稻穗などをものにかけて乾(ホ)すこと。又、其かけ乾す具。

ほ-かげ［帆影］(名) 遠く見ゆる帆の形。

ほ-かげ［火影］(名) ㊀火の影、火のひかり。㊁燈火のひかりにてうつる影。——すがた［火影姿］(名) 燈火のひかりにうつるすがた。

ほかけ-ぶね［帆掛船］(名) 帆を掛けたる船。

ほか-ごころ［外心］(名) あだごゝろ。

ほか-さま［外樣］(名) ㊀そとの方。㊁よその方。

ぼかし［暈］(名) ぼかすこと。ぼかしたるさま。(暈滃)。

〔ほか・す（さしすすせせ）［放］(他、さ四) すつ。

ぼか・す（さしすすせせ）［暈］(他、さ四) 一方を濃くして他方の次第に薄くなるやうに色を染む。くまどる。

ほ-かぜ［帆風］(名) ㊀おひてかぜ。順風。㊁ときめくいきほひ。

ほか-ソウ［放下僧］(名) 「はうかぞう(放下師)」に同じ。

(ほ-かつ［墓碣］(名) はかの石碑。

〔ほか-ど (副) 頭などを叩(タタ)く音のさまにいふ語。

ほが-ばら［外腹］(名) めかけばら。(妾腹)。

卄ほがひ（ホガイ）［壽］(名) ほがふこと。ほぐこと。祝ふこと。

卄ほがひ-びと（ホガ）［乞兒］(名) こつじき。

卄ほが・ふ（ホガウ）（はひふふへへ）［壽］(他、は四) ほぐ。いはふ。

ほか-ほか［外外］(名) よそ。他所。

〔ほか-ぼか (副) 氣の蒸(ム)して暖きさまにいふ語。

〔ほか-ぼか (名、副) ㊀前條に同じ。㊁木魚又は頭などを叩(タタ)くさまにいふ語。

卄ほ-がみ［陰上］(名) 下腹。

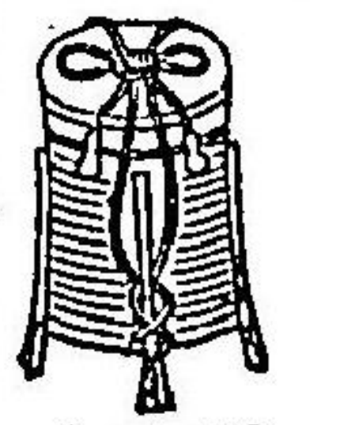
ほがらか［朗］(名) ㊀うち開けておほひなきさま。「音聲「才智——」。㊁あざやかにして曇りなきさま。——」。㊂はれわたりてさわやかなるさま。のどか。

卄ほがら-ほがら-と［朗朗］(副) ほがらかに。

〔ほかり (名、副) 頭などをなぐるさまにいふ語。

〔ほかり (名、副) 前條に同じ。

卄ほか-ゐ［行居］(名) 食物を盛りて運ぶ器、圓くして高く、蓋あり、脚は三個にして外方へ反る。


［ほかゐ］

ほか-ゐ［外居］(名) よそにゐること。そとにゐること。

卄ほき［岸險］(名) 山そばの險所。「いはのかげふむ、——のかけみち」。

(ほ-き［蒲葵］(名)【植】「びらう」に同じ。

(ぼ-き［簿記］(名) 簿記法によりて、日々の取引出納を帳簿に記入してこれを整理すること。

(ぼ-ぎ［母儀］(名) はゝご。

(ぼ-ぎ［模擬］(名) かたどりなぞらふること。まぬること。

ボギー-しや［Bogie-truck——車］(名) 車輪を車臺に固定せしめずして車箱を長く造りたる汽車又は電車、車輪の軌線に從ひて自由に迂曲するため、車箱の長きとは毫も妨げとならず。

卄ほき-うた［祝歌］(名) いはひて詠じたる歌。

(ぼき-がく［簿記學］(名) 簿記法を研究する學。

ぼき-かた［簿記方］(名) 會社又は商店などにて、簿記を擔當する人。

卄ほぎ-くるほ・す（オスークヮ）（さしすすせせ）［祝廻］(他、さ四) かさねがさねにほぐ。

卄ほぎ-ごと［祝事］(名) いはひごと。

卄ほぎ-ごと［祝言］(名) いはひてのぶることば。

〔ほき-だ・す（さしすすせせ）［吐出］(他、さ四) 吐き出す。

(ぼき-てん［模擬店］(名) 園遊會などにて、處々に飲食店になぞらへたるものを設けて、來客に飲食せしむる所。

(ぼき-はふ（ウーホ）［簿記法］(名) 日々の取引又は出納を、規則正しく秩序を追ひて各種の帳簿に記載し、これが勘定整理をなす方法。

(ほ-きふ（ウーキ）［補給］(名) 補助して給與すること。——きん［補給金］(名) 損失又は利益の不足を補給する金。——りし［補給利子］(名) 政府が生産業保護のため、會社創業の際などに、定額の利益

に不足を生ずるとき、これを補給する金などの稱。

(ぼき-ぼう［簿記棒］(名) 簿記にて、帳簿に線を引くに使用する九稜の定規。

(ぼき-ぼき (名、副) ものゝもろく折るゝさまにいふ語。

(ぼき-ぼき (名、副) 前條に同じ。

卄ほき-みち［岸險路］(名) 山腹の險所の路。

卄ほぎ-もとほ・す（オスーモト）（さしすすせせ）［祝廻］(他、さ四) 「ほぎくるほす」に同じ。

(ほ-きやく［逋客］(名) 「ほかく」に同じ。

(ほ-ぎよ［捕魚］(名) いさり。すなどり。

ほ・く（けけくくるくれけよ）［惚］(自、か下二) 知覺にぶくなる。ぼんやりす。ほる。

卄ほ・く（かきくくけけ）［惚］(自、か四) 前條に同じ。

ほ-ご［反故］(名) ㊀書畫などを書きたる紙の不用となりたるもの。すたれがみ。ほうぐ。ほご。㊁不用なる物事。「約束を——にする」。

卄ほ・ぐ（かぎくくけけ）［祝］(他、か四) ことほぐ。

卄ほ・ぐ（がぎぐぐげげ）(他、か四) うがつ。かく。(關西地方の方言)。

(ぼく［木］(名) ㊀じゆもく。き。㊁木のふるき根。又、幹のまがりくねりたるもの。

(ぼく［僕］(名) つかひをとこ。しもべ。下男。

(ぼく［僕］(代) 自稱の代名詞。やつがれ。

(ほく-かい（ホッ）［北海］(名) ㊀北方のうみ。㊁北海道の略言。——だう（ホッドウ）［北海道］(名) 渡島・後志・膽振・石狩・天鹽・日高・十勝・釧路・根室・北見・千島の十一國の總稱。

(ほくかい-だう-ちやう（ホッ-ドウ-チヤウ）［北海道廳］(名) 北海道廳長官が其職務を取扱ふ所。又、其取扱ふ事務の全體の稱。——ちやうくわん（—チヨウー）［北海道廳長官］(名) 一般には内務大臣の指揮監督を受け各省の主務に就きては各省大臣の指揮監督を受けて法律命令を執行し、北海道の拓地殖民の事務及内部の行政事務を總理するもの。

(ぼく-かう（ボッコウ）［墨香］(名) すみのかをり。

(ぼく-かく（ボッ）［墨客］(名) 書畫をかく人。「文人——」。

(ぼく-かん（ボッ）［木桿］(名) 木の棒。

(ぼく-かん（ボッ）［木幹］(名) 木質の幹莖。きのみき。

(ぼく-ぎう［牧牛］(名) 牛をはなしがひすること。又、はなちがひの牛。——ぢやう（—ヂヨウ）［牧牛場］(名) 牛をはなちがひする所。

(ぼく-きやう（ボッキヨウ）［木強］(名) きすぐ。ぶこつ。——かん［木強漢］(名) きすぐなる男子。ぶこつなるをとこ。

(ぼく-きやく（ボッ）［墨客］(名) 「ぼくかく」に同じ。

(ぼく-きよ［牧圉］(名) うまかひ。

(ぼく-きよ（ボッ）［卜居］(名) 居をトして住むこと。

(ほく-きよく（ホッ）［北極］(名) 地球又は天球の軸の北方。又、磁針の北に向へる方。——きより［北極距離］(名) 天體の北極よりの角距離。——ぐま［北極熊］(名)【動】「しろくま」(白熊)に同じ。——けん［北極圈］(名)【天】地球上北極より二十三度半を通過する地軸に直角なる方向。——しゆつち［北極出地］(名) 支那の古昔の天文學にて、北極星を測るに、赤道にては地平にありて、それより北へ向つて一度進むごとに地平より一度上がり、九十度に至れば頭上に在りと定め、其所々に度を附して地球の緯度を測りしこと。——せい［北極星］(名)【天】北極に最も近く輝ける星、北極を去ること一度十三分なり。ねのほし。(北辰、天極、紫微宮)。

(ぼく-ぐう［木偶］(名) 木にてつくりたる人形。——にん［木偶人］(名) 前條に同じ。

(ほく-ぐわ［北畫］(名) 北宗畫に同じ。南畫の對。

(ぼく-くわ［木瓜］(名)【植】「ぼけ」に同じ。

(ぼく-ぐわ［墨畫］(名) すみゑ。

(ほく-くわく（ホッ）［北郭］(名) 東京にて、吉原の遊廓の稱。

(ぼく-けい［墨刑］(名) いれずみの刑。

(ぼく-げき［木屐］(名) 木にてつくりたるはきもの。あしだ。げた。木履。

(ほく-けつ（ホッ）［北闕］(名) 禁中。禁裡。

(ぼく-けん（ボッ）［木劍］(名) 木にて刀の形につくりたるもの。きだち。

(ぼく-こう［木工］(名) だいく。こだくみ。

(ほく-こく（ホッ）［北國］(名) ㊀北方のくに。㊁北陸道の諸國の稱。

(ぼく-さう（リッ）［牧草］(名) 家畜の飼料とする草。

(ぼく-さつ［撲殺］(名) たゝきころすこと。うちころすこと。

卄ほ-ぐし［火串］(名) ㊀ともしの松明を挾む木。㊁篝火の土臺の上の杙。

(ぼく-し［牧師］(名) (羊をかふ牧者にたとへたる語)「キリスト」教の教會堂の主任者。

(ぼく-しつ［朴質］(名) 次條に同じ。

(ぼく-じつ［朴實］(名) いつはりかざりなくして正直なること。すなほ。(樸實)。

(ぼく-じつ［木實］(名) このみ。

(ぼく-じつ［卜日］(名) 日の吉凶をうらなふこと。又、期日をえらぶこと。

(ぼく-じふ（ウージ）［墨汁］(名) ㊀すみのしる。㊁くろきしる。㊂インキ。

(ぼく-しや［卜者］(名) うらなひしや。

(ぼく-しや［牧者］(名) 畜類をはなしがひするもの。

(ぼく-しやう（ヨウ）［木匠］(名) こだくみ。だいく。

(ぼく-しゆ[墨守](名) おのが意見を頑固にかたく守ること。

(ほく-しゆう[北宗](名)[佛]禪宗にて、神秀を宗とする宗派の稱。南宗の對。――ぐわ[北宗畫](名) 支那在來の畫風にて、形貌彩色に重きを置く流派の稱。南宗畫の對。

(ぼく-しよく[墨色](名) すみいろ。

(ほく-しん[北辰](名) 北極星。

(ぼく-しん[卜人](名) うらなひしや。

(ぼく-しん[牧人](名) 牧者に同じ。

ほぐ・す[解](他、さ四) ほごす。ほどく。とく。

ぼく・す[卜](他、さ變) ㊀うらなふ。「地を―」。㊁さだむ。

(ぼく-せい[卜筮](名) うらなひ。

(ぼく-せき[墨蹟](名) ふでのあと。筆蹟。

(ぼく-せき[木石](名) 木と石と。轉じて情事を解せざるむくつけきもの。――かん[木石漢](名) 情事を解せざるむくつけきをとこ。――ちやう[木石腸](名) 情事を解せざるむくつけき心。

(ぼく-せふ[僕妾](名) しもべとそばめと。又、めしつかひ。

卄ほ-くそ[火糞](名) ㊀蠟燭のもえがら。ほそくづ。㊁をがらのほくち。

卄ほくそ[黑子](名) ほくろ。

(ぼく-そ[朴素](名)「そぼく」(素朴)に同じ。(樸素)。

ほくそ-づきん[北叟頭巾](名) (塞翁の故事より出て、世俗を脱したるものゝ被る義なりといふ) 頭巾の一種、眼ぶかに被るもの。

卄ほくそ-わらふ[嬉笑](他、は四) ほくほくとよろこびて笑ふ。

(ぼく-だい[墨臺](名) すりかけの墨を載(ノ)せおく小さき臺。

(ほく-だう[北堂](名) (支那の上古に母の堂は北に設けたりしよりいふ) はゝぎみ。はゝご。母堂。

(ぼく-たう[木刀](名) ぼくけん。きだち。

(ぼく-たく[木鐸](名) ㊀舌を木にてつくりたる鈴、支那の上古に、文事に關する敎令を宣傳するとき鳴らしゝもの。㊁轉じて、世人を敎導する人。

ほ-くち[火口](名) 燧火を打ちつけて火をおこすもの、いちびがらなどより製す。ほくそ。ほそくづ。(引火奴、火絨)。

(ぼく-ち[墨池](名) ㊀すゞりのうみ。㊁すみつぼ。

(ぼく-ち[卜地](名) 地の吉凶をうらなふこと。又、地をみて場所を定むること。

(ぼく-ち[牧地](名) 牧場を設くる土地。

(ぼく-ちく[牧畜](名) 畜類を飼養すること、家畜をはなしがひすること。――じだい[牧畜時代](名)[經]人智稍や進みてたゞ自然物の恩惠にのみ依賴せず、多少勢力を加へて自然を支配し、野獸を馴養することを覺り、部落をなし水草を追ひて移轉する時代、此時代には共同生活の端緒を開きたれど、未だ土著の習慣を生ぜず。――のう[牧畜農](名) 牧畜を專門とする農業。又、其人。

(ぼく-ぢやう[牧場](名) 牛馬羊豚などの家畜をはなしがひする場所。まきば。

(ぼく-ぢやう[墨場](名) 相會して書畫などをかく場所。

(ぼく-ちよく[朴直](名) 質樸にて正直なること。ぢつてい。(樸直)。

卄ほ-くづ[火屑](名) ひのこ。

(ほく-てう[北朝](名) ㊀我國にて、南朝に對し、足利尊氏が京師に擁立したる光明天皇より崇光・後光嚴・後圓融を經(へ)て、後小松天皇が南朝の後龜山天皇より三種の神器を受けたまふ迄、五帝五十七年間の稱。(南朝の條參照)。㊁支那にて、南朝に對し、北方の諸國が魏に併吞せられ、魏は後に西魏、東魏となり、東魏は北齊に禪へ、西魏は後周に禪へ、後周は北齊を併せて隋に禪へ、隋が南朝の陳を滅しまで、二百十八年間の稱。(南朝の條參照)。

(ぼく-てき[牧笛](名) 牧者の吹く笛。

(ぼく-でふ[墨帖](名) 石ずり。

(ぼく-でん[牧田](名) 古昔、馬寮の飼馬の秣草の要用にあてられし田。

(ぼくでん-りう[卜傳流](名) 劍道の一派、神道流より轉化したるものにして、塚原卜傳を祖とす。

(ほく-と[北斗](名)「ほくとせい」の略言。

(ぼく-と[墨斗](名) ㊀すみつぼ。㊁やたて。

(ぼく-どう[僕僮](名) しもべ。こもの。

(ぼく-どう[牧童](名) はなちがひする牛馬などの世話をなすわらべ。

(ほくと-しちせい[北斗七星](名) 次條に同じ。

(ほくと-せい[北斗星](名)[天]「だいゆうせい」(大熊星)に同じ。

(ぼく-とつ[木訥](名) いつはりかざりなくして、くちまめならざること。

(ぼく-なう[墨囊](名) 烏賊などの墨汁をたくはふるふくろ。

(ぼく-ねん-じん(名) むくちにして愛想なき人。

(ぼく-ば[牧馬](名) はなしがひのうま。

(ぼく-ば[木馬](名)「もくば」に同じ。

(ぼく-はい[木牌](名) ㊀木のふだ。㊁木の位牌。

(ほく-ばう[北邙](名) (支那の河南省河內府の北にある山の名、山に貴人名士の墳墓多きよりいふ) はかば。ぼしよ。埋葬地。――のけむり[北邙煙](名) 前條の義より、死ぬることにいふ語。――のちり[北邙塵](名) 前條に同じ。

(ぼく-ひ[木皮](名) 樹木のかは。

(ぼく-ひ[僕婢](名) 下男と下女と。

(ぼく-ひつ[木筆](名)「もくひつ」に同じ。

(ほく-ふう[北風](名) きたかぜ。

(ぼく-ほん[木本](名) 樹木。き。

卄ほ-ぐみ[穗組](名) 稻穗を組みて積むこと。

(ぼく-みん[牧民](名) 地方の人民を治むること。――のしよく[牧民職](名) 地方長官の職。

(ぼく-めつ[撲滅](名) うちほろぼすこと。ねだやしすること。

(ほく-めん[北面](名) ㊀北向き。㊁臣下の君主に服從すること、君主は南面するよりいふ。㊂「ほくめんのぶし」の略言。――のさむらひ[北面侍](名) 次條に同じ。――のぶし[北面武士](名) 院の御所を守護する武士、白河院の時より始まる。

(ほく-やう[北洋](名) 北方のうみ。

(ぼく-やう[牧養](名) 畜類をかふこと。

卄ほ-くら[神庫](名) (秀(ホ)庫の義) ㊀神寳を納むる庫。(寳倉)。㊁やしろ。ほこら。

(ぼく-り[木履](名) ㊀足駄。㊁下駄。

ほくり(名、副) 物の脆く折るゝさまにいふ語。

(ほく-りく[北陸](名)「ほくりくだう」の略言。――だう[北陸道](名) 若狹・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七個國の稱。

ほぐ・る[解](自、ら下二) とけはなる。とく。ほつる。

(ぼく-れい[僕隷](名) しもべ。下男。

ほくろ[黑子](名) 人の皮膚に點在せる黑斑。はゝくそ。ほくそ。(黶子)。

(ほくろく-だう[北陸道](名)「ほくりくだう」に同じ。

(ほ-くわく[捕獲](名) ㊀とらふること。いけどること。㊁とりおさふること。ぶんどること。

(ほ-くわん[保管](名) 規定又は契約に基き、他人の物を占有してこれを保護管理すること。あづかること。――りん[保管林](名) 社寺の區域に連接したる官有の森林にして、社寺の保管するもの。――れう[保管料](名) 保管の報酬として支拂ふ金。

(ほく-ゑつ[北越](名) 越中・越後の稱。

卄ほ-け[本家](名) いへもと。親里。

ぼ-け[木瓜](名)[植]薔薇科に屬する木、幹の高さ六七尺、葉は長楕圓形をなし、花は春に開き紅色又は白色を呈す、觀賞用として栽培せらる。

(ほ-げい[捕鯨](名) 鯨を捕獲すること。――げふ[捕鯨業](名) 捕鯨の事業。――せん[捕鯨船](名) 捕鯨のために遠洋に航する船。

(ぼ-けい[模型](名) いがた。かた。

(ぼ-けい[模形](名) かたどりたるかた。かた。

(ぼけ-いろ[惚色](名) 色のはっきりせざること。

ほけ-ザンマイ[法華三昧](名) 他事をすてゝ餘念なく一心に法華經を讀むこと。

卄ほけ-し・る[惚痴](自、ら下二) ぼけておろかになる。

ほ-げた[帆桁](名) 帆檣の上に横にわたせる材、帆をかくるためのもの。(帆架)。

(ほ-けつ[補闕](名) かけを補ふこと。不足をたすこと。――せんきよ[補闕選擧](名) 議員又は委員などの闕員を生じたるとき、其闕員を補ふためになす選擧。

卄ほけ-づ・く[法氣附](自、か四)「ほうけづく」に同じ。

卄ほけ-つち[惚土](名) 粘りうせたる土。

卄ほけ-びと[惚人](名) ぼけたる人。おいぼれたる人。

卄ほけ-ぼけ・し[惚惚](形、二) いとぼけて見ゆ。

卄ほけ-ぼけ-と[惚惚](副) いとぼけて。ぼけぼけしく。

卄ほけ-やか(名)「ほがらか」に同じ。

〜ほ・げる(自、か下一) あなあく。くぼくなる。(中國地方の方言)。

〜ほ・ける[惚](自、か下一) ㊀「ほく」の訛。㊁色はっきりせず。

(ほ-けん[保險](名) ㊀經濟上にては、財產又は身體に關し、偶然にして且つ豫知すべからざる危險より生ずる一個人の損害を、未だ其損害を受けざる多數人に分配してこれを賠償せしむる制度、法律上にては、當事者の一方が、偶然なる一定の事故によりて生ずることあるべき損害を塡補し若しくは一定の金額を支拂ふことを約し相手方はこれに對して報酬を與ふることを約する契約、生命保險・海上保險・火災保險等あり。㊁損害を償ふとの保證。又、確實にして疑ひなきとの保證。――かかく[保險價格](名) 保險の目的物の價格。――かけきん[保險掛金](名) 保險料に同じ。――きん[保險金](名) 保險者が被保險者に賠償する金。――くわいしや[保險會社](名) 保險業を營む會社。――けいやく[保險契約](名)[法]法律上に於ける保險をなす相互の契約。――げふ[保險業](名) 保險の業務。――しや[保險者](名) 保險にて、損害の塡補又は一定の支拂をなす義務を負ひ、これに對して一定の報酬

を受くる權利を有するもの。——しようけん[保險證券](名) 保險者が被保險者の權利を證明するために交付する要式の證券。——にん[保險人](名) 保險者に同じ。——れう[保險料](名) 被保險者より保險者へ定期に支拂ふ金額、即ち、保險契約上に於て保險者の受くる報酬。

ほこ[矛](名) 形槍に似て、雙刃劍形の身ある兵器、敵をさすために用ふるもの。(鉾、戈)。

[ほこ]

ほこ[架](名) かけわたしたる木、よこぎ。

ほこ[反故](名) 「ほご」に同じ。

(ほご[保護](名) 「はうご」に同じ。——あづかり[保護預](名) 「はうごあづかり」に同じ。

(ほこう-えい[蒲公英](名) 【植】「たんぽぽ」に同じ。

ほこ-ぎ[矛木](名) ㊀矛のさまをなして立ちたる木。㊁廿勾欄の柱の矛に似たる形のもの。

ほこ-ぎぬ[架衣](名) 鷹のとまる横木にかけて鷹に着する衣。

(ぼ-こく[母國](名) 其國の分れ出でたるもとの國の稱。

(ほご-こく[保護國](名) 「はうごこく」に同じ。

ほこ-さき[鋒先](名) ㊀きっさき。㊁するどきいきほひ。「議論の—」。

(ほご-しや[保護者](名) 「はうごしや」に同じ。

(ほご-しよく[保護色](名) 「はうごしよく」に同じ。

ほご・す[解](他、さ四) ほぐす、ほどく、とく。

ほこ-すぎ[矛杉](名) 矛の如くのび立ちたる杉。

(ほご-ぜい[保護稅](名) 「はうごぜい」に同じ。

ほこ-だし[矛出](名) 城壁などに矛を突き出すために設けたる孔。

ほこ-だし[矛山車](名) 上に矛を立てかざりたる山車（ダシ）。

ほこ-だち[棖](名) 門の兩傍の木の矛の如くに立てるもの。はうだて。

ほこ-だて[棖](名) 「ほこだち」に同じ。

ほこ-だれ[架垂](名) ほこぎぬ。

(ほご-てう[保護鳥](名) 「はうごてう」に同じ。

廿ほこ-とり[矛取](名) 矛をさまざまに弄（モテアソ）ぶ技。

(ほご-ぼうえき[保護貿易](名) 「はうごぼうえき」に同じ。

〔ほこ-さん[矛盾](名) (衆議院議員某が誤り讀みたるに出づ)「むじゆん」に同じ。

(ほこ-ば[矛羽](名) 鷹が他の鳥を追ひ行くときの羽。

〔ほこ-ぼこ(名、副) 中空にして外側のくぼみ易き物をたゝくさまにいふ語。

〔ほこ-ほこ(名、副) 前條に同じ。

廿ほこ-ゆげ(名) 矛をつかひならすこと。

ほ-こら[祠](名) (神庫（ホクラ）の轉) 神を祀れる殿堂、やしろ。(小祠、野廟)。

廿ほこらか・す[誇](他、さ四) ほこりかにす。

廿ほこら・し[誇](形、二) 誇るべし。

ほこり[誇](名) ほこること。じまん。

ほこり[埃](名) 空中を飛散する細きごみ。

〔ほこり(名、副) 「ほこほこ」に同じ。

〔ほこり(名、副) 「ぼこぼこ」に同じ。

廿ほこり-か[誇](名) ほこれるさま、自慢らしきさま。

ほこり-かづき[埃被](名) 【植】「だいなごんあづき」の一名。(猪肝赤)。

ほこり-がほ[誇顏](名) 自慢らしきかほつき。

ほこり-たけ[埃茸](名) 【植】菌類の一、夏の頃、陰地に生ず、打てば灰の如き粉末の飛散するもの。おにふすべ。やぶだま。(馬勃)。

ほこり-はらひ[埃拂](名) ちりはらひ。はたき。(拂塵帚)。

ほこ・る[誇](自、ら四) たかぶりてらふ、得意のほどを示す、自慢す。(矜)。

ほころばか・す[綻](他、さ四) ほころぶるやうにす。

ほころば・す[綻](他、さ四) 前條に同じ。

ほころび[綻](名) ほころぶること、又、ほころびたる所。

廿ほころ・ふ[誇](自、は四) 「ほこる」の延言。

ほころ・ぶ[綻](自、は上二) ㊀縫目解く。ほぐる。㊁稍少しく開く、ひらく。㊂露顯す。あらはる。

(ほ-さ[輔佐](名) たすけ、すけ、うしろみ。「幼君を—す」。

(ほ-ざい[補劑](名) おぎなひに飲ます藥劑。

(ほ-さい[募債](名) 公債又は社債などをつのること。

ほ-さき[穗先](名) ㊀穗のさき。穗のはし。(芒)。㊁刃のさき。きっさき。(鋒鋩)。

ほざ・く[祝](他、か四) 祝（コト）ぎ言ふ。ほぐ。

〔ほざ・く(他、か四) しやべる。いひたつ。

(ほ-さく[摸索](名) てさぐり。

(ほ-さつ[簿冊](名) とぢ本。帳物。帳面。

ボ-サツ[菩薩](名) (梵語 Bodhi-sattva(菩提薩埵)の略、覺有情と譯す)【佛】(い)佛に亞ぐ位置、即ち大勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を濟ひ、已に妙覺の果に近づきたる人。(ろ)古昔、朝廷より碩德の高僧に賜はりし號。「行基—」。——いばら[菩薩薔薇](名) 【植】十姉妹に同じ。——かい[菩薩戒](名) 【佛】不殺・不盜・不婬・不妄語・不酤酒・不說過罪・不自讃毀他・不慳・不瞋・不謗三寶の稱。——じよう[菩薩乘](名) 【佛】六度の行を修し衆生を化し生死を出離すること。

(ほさ-にん[補佐人](名) ㊀或人を補佐する人。㊁【法】民事訴訟にて、法廷に出頭して、原告若しくは被告を補佐するために辯論にあづかる人、刑事訴訟にて、公判に出頭し、被告を補助するために辯論にあづかる人。

(ほさ-にん[保佐人](名) 【法】準禁治產者の財產を監督する人。

(ほ-ざん[逋竄](名) のがれにぐること。

(ぼ-さん[墓參](名) はかまゐり。

ほし[星](名) ㊀【天】晴夜天空に輝（カガヤ）きて小點と見ゆる天體、恆星・遊星・彗星・衞星の別あり、光度に應じて等級を分ち、肉眼にて見ゆる最小のものを六等とし、最大のものを一等とす。㊁星月夜の光。㊂小さき白き點。㊃ぼち、てん。㊄兜の鉢の鋲の如きつぶ。㊅小さき黴（カビ）の斑。㊆めど、めあて。㊇神樂歌の曲名。㊈九星の中其人の生年に中りたるもの。又、其をりをりの當年に於ける吉凶。㊉〜戀愛の對象。——をいただく[戴星] 夜の明けぬ中に行き、又は夜に入りて歸るにいふ。——をつらぬ[列星] 多くの人の威儀をたゞして居ならぶにたとへいふ。

ほ・し[欲](形、二) ㊀求むる心切なり。得んと思ふ心しきりなり。㊁ねがはし。のぞまし。

(ぼ-じ[哺時](名) ひぐれ。

(ぼ-し[墓誌](名) はか石に其死者の事跡をしるせる文。又、金石に死者の事跡をしるして其墓側に埋むるもの。

(ぼ-し[母子](名) ㊀はゝとこと。㊁元金と利子と。㊂一つにつらなるものにて大なるものと小なるものと。「—珠」。

ぼ-し[拇指](名) おほゆび。

ほし-あかり[星明](名) 星月夜のあかり。又、星のひかり。

ほし-あげ-た[乾上田](名) 水をからしてかわかしたる田。

ほし-あはび[乾鰒](名) 鰒の肉を蒸乾にしたるもの。

廿ほし-あひ[星合](名) 七夕（シチセキ）の夜、牽牛・織女の二星相合すといふこと。——のそら[星合空](名) 七夕の空。

ほし-アン[乾餡](名) 餡をほしかわかしたるもの。

ほし-いし[星石](名) 「ゐんせき」(隕石)に同じ。

ほし-いひ[乾飯](名) 飯をほしかわかして貯ふるもの、昔時は兵糧として用ひたり。

ほしい-まま[縱、恣、擅](名) (「ほしきまま」の音便) ㊀自己の心の儘にものすること。自己の思ふ通りに勝手に行ふこと。きまゝ。㊁制限をこえたる事を憚らずになすこと。分際に過ぎたる事を遠慮せずに行ふこと。

(ぼ-しう[暮秋](名) あきのすゑ。

ほし-うどん[乾饂飩](名) ほしかわかしたる饂飩。ひうどん。

ほし-うり[乾瓜](名) ほしかわかしたる瓜。

ほし-うを[乾魚](名) 脊を開きてほしかわかしたる魚。ひうを。

ほし-か[乾鰯](名) 鰯の脂を絞（シボ）りたる滓（カス）を日に乾したるもの、肥料とす。

ほし-がき[乾柿](名) 澁き柿をほしかわかして甘くしたるもの。つるしがき。

ほし-かげ[星鹿毛](名) 馬の毛色、鹿毛に白き斑點のあるもの。

ほし-かた・む[乾固](他、ま下二) ほして固くす。

〔ほしかためる(他) 前條の訛。

ほし-かぶと[星兜](名) 鉢に鋲の如き粒の列なりたる鐵のかぶと。

〔ほし-が・る[欲](他、ら四) ほしくおもふ。

ほし-がれひ[星鰈](名) 【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、體形ひらめに似て鱗なし、右側はよく發達し暗黑色にして白點あり、左側は白色なり、體長一尺許に達す、我國東北海に多く產す。「鰈。

廿ほしき-まま[縱](名) 「ほしいまま」に同じ。

ほし-ぐさ[乾草](名) ほしからしたる草。

廿ほし-くそ[星屎](名) ほしいし。

ほし-ぐり[乾栗](名) ほしかわかしたる栗の實。

〔ほじくり-かへ・す[穿返](他、さ四) いたくほじくる。しげくほじくる。

〔ほじく・る[穿](他、ら四) ㊀掘りうがつ。うがちせゝる。㊁さがしもとむ。

ほし-こ[干海鼠](名) ほしたるなまこ。

廿ほ-しし[脯](名) ほしたる肉。

ほし-だいこん[乾大根](名) ほしてからびさせたる大根。

ほし-だら[乾鱈](名) ひだら。

ほしづき-の-うま[星月馬](名) 額上に白き小點ある馬。

ほし-づき-よ[星月夜](名) 星の光の月の如く地上を照らす夜。(星夜)。

廿ほし-づき-よ[星月夜](枕) 「鎌倉山」に冠らする詞。

ほし-づくよ[星月夜](名) 「ほしづきよ」に同じ。

廿ほし-どり[乾鳥](名) 乾してからびさせたる鳥肉。

ほし-な[乾菜](名) ほしてからびさせたる菜の葉。

ほし-なつめ[乾棗](名) ほしてからびさせたる棗の實。

ほし-なまこ[乾海鼠](名) 「ほしこ」に同じ。

ほし-にく[乾肉](名) ほしたる肉。ほしし。

卄**ほし-の-くに**[星國](名) そら。あめ。

卄**ほし-の-くらゐ**[星位](名) 三公の位。

卄**ほし-の-たま**[星玉](名) ぎばうしゆ。

卄**ほし-の-はやし**[星林](名) ㊀星のあつまれる所。㊁高位の人のあつまれる所。

卄**ほし-の-まぎれ**[星紛](名) 星の光のおぼろなること。

ほし-の-やどり[星宿](名) ㊀「せいざ」(星座)に同じ。㊁高位の人などのあつまる所。

ほし-のり[乾苔](名) 漉(ス)きてほしたるのり。

ほし-ひ（イ）[糒](名) 「ほしいひ」に同じ。

(**ほ-しふ**（シウ）[補習](名) 前に修めまなびたる事を更におぎなひならふこと。——**くわ**[補習科](名) 補習のために設けたる科程。

(**ぼ-しふ**（シウ）[募集](名) つのりあつむること。

卄**ほし-ボトケ**[星佛](名) 古昔、九曜星の中、其年にあたりたるもの、形像をほり、眞言宗の行者これを祭りたるもの。

ほし-まだら[星斑](名) 牛の毛色、星の如く斑のあるもの。

ほし-まつり(名) ㊀【佛】眞言宗などにて、九曜星の中、其年に當たれる星を開運のために祭ること。(尊星供)。㊁七夕祭。

卄**ほし-まよ・ふ**（マヨウ）（はひふふへへ）[星迷](自、は四) 星ちらばりて見ゆ。

卄**ほし-みぐさ**[星見草](名) 【植】菊の異稱。

ほし-みせ[干見世](名) 大道みせ。露店。

(**ぼ-しめい**[墓誌銘](名) ㊀墓誌の末に加へたる銘。㊁墓誌。

ほし-めがね[星眼鏡](名) 天文用の望遠鏡。

ほし-もの[干物](名) ㊀洗濯物を日にほすこと。又、其ほす物。㊁すべて日にほすこと又はほすもの、の稱。——**ざを**[干物棹](名) 洗濯物をかけてほす棹。

(**ほ-しや**[輔車](名) 車と車のそへぎと。轉じて、相助けあはざれば存在し難き關係のもの。「脣齒—」。

(**ぼ-しや**[模寫](名) かたどりうつすこと。

(**ほ-しやう**（シヨウ）[保障](名) さゝへ。ふせぎ。

(**ほ-しやう**（シヨウ）[補償](名) おぎなひつぐなふこと。

(**ほ-しやう**（シヨウ）[步障](名) ㊀幕を張りたるかこひ。㊁古昔、女の外出のとき、頬をおほふに用ひしもの、木の框(ワク)に絹をかけてつくる。

(**ほ-しやく**[保釋](名) 【法】豫審判事が拘留中の刑事被告人の請求により、檢事の意見を聽き、何時にても呼出に應じて出頭すべき證書を差出さしめ、且つ保證のため、本人若しくは其法定代理人より金錢又は有價證券を差出さしめてこれを釋放すること。——**きん**[保釋金](名) 保釋のために差出す金。——**ねがひ**（ガイチ）[保釋願](名) 保釋を願ふこと。又、其願書。

(**ほ-しゆ**[保守](名) ㊀舊習を保ち守ること。ふるきをまもること。㊁急激なる革新に反對なること。舊來の狀態を重んずること。

(**ほ-じゆう**[補充](名) ㊀「ほじゆうへい」の略言。㊁不足をおぎなひみたすこと。——**きん**[補充金](名) 補充するための金。——**せうしふ**（シヨウシウ）[補充召集](名) 師團長が軍隊の缺員を補充するため、在鄉軍人を召集すること。——**ひ**[補充費](名) 【法】第一豫備金の稱。——**へい**[補充兵](名) 補充兵役に服する兵。——**へいえき**[補充兵役](名) 兵役の一、現役兵の補缺に充て、戰時若しくは事變に際して召集せらるゝもの、陸軍にては十二個年四個月にして海軍にては一個年なり、其年の所要の現役兵員に超過する人員の服すべきもの。又、陸軍にては分つて第一第二とし第一補充を召集して尚ほ兵員を要するときに第二補充を召集する規定なり。——**めいれい**[補充命令](名) 【法】法律の規定せざる事件に就き、其不備を補ふために發布せらるゝ命令。

(**ぼ-しゆん**[暮春](名) ㊀はるのくれ。㊁陰曆三月の異稱。

(**ほ-じよ**[補助](名) おぎなひ助くること。てつだひ。又、てつだひする人。

(**ぼ-しよ**[墓所](名) はかば。はかどころ。

(**ぼ-しよ**[簿書](名) ちやうめん。

(**ほ-しよう**[保證](名) ㊀物事の確實にしていつはりなきを責任を負ひて證すること。うけあふこと。㊁【法】第三者が債權者に對して、債務者が其義務を履行せざる場合に、これに代はりて履行すべき契約をなすこと。㊂【法】訴訟上、相手方に損害を蒙らしむることある場合の補償のため、裁判所の意見により、豫め適應の現金又は有價證券を供託して、これが擔保を立つること。——**きん**[保證金](名) 保證のために差出しおく金。——**けいやく**[保證契約](名) 【法】保證をなす契約。(保證(二)を見よ)。——**さいむ**[保證債務](名) 【法】保證契約によりて生ずる債務、其履行は主たる債務者が其債務を履行せざることを條件とす。——**せきにん**[保證責任](名) ㊀保證の責任。うけあひたるせめ。㊁【法】產業組合にて、組合の財產のみにては其債務を完濟し得ざるとき、組合員は其出資額以外に一定の金額を限りて責任を負ふこと。——**にん**[保證人](名) 保證に立つ人。

(**ほ-じよ-きくわん**[補助機關](名) 主たるものを補助するために設けたる機關。

(**ほ-しよく**[補職](名) 官職に補すること。

(**ほ-しよく**[補色](名) 「よしよく」(餘色)に同じ。

(**ぼ-しよく**[暮色](名) くれがたの景色。

(**ほ-じよ-くわ**[補助貨](名) 次條に同じ。

(**ほ-じよ-くわへい**[補助貨幣](名) 支拂に一定の制限ありて本位貨幣を助けて交換の媒介をなす貨幣、其含有せる金屬の實際價格は法定の價格に及ばざること遠きものなり、我國の銀貨・白銅貨・銅貨等これに屬す。

(**ほ-じよ-たんゐ**[補助單位](名) 【數】單位を細分し若しくは合併して別に與ふる名稱。

(**ほ-じよ-ぼ**[補助簿](名) 主要なる帳簿の記入を尚ほ一層明細にするため別に備ふる帳簿。

(**ほ-じよ-ゆそつ**[補助輸卒](名) 戰時などに、輜重輸卒の缺乏を補ふため臨時徵集したる輸卒。

ほじ・る（らりるるれれ）[穿](他、ら四) ほじくる。うがつ。

ほ・す（さしすすせせ）[乾](他、さ四) ㊀火又は日の熱にあて、水分を蒸發せしむ。かわかす。㊁かへ盡くす。「池の水を—」。㊂飲み盡くす。「杯を—」。㊃食を與へず。

ほ・す（せしすするすれせよ）[補](他、さ變) 「ふす」に同じ。

(**ほ-すう**[步趨](名) あしどり。あゆみ。

(**ぼ-すう**[母數](名) 步合算にて、元金の稱。

ポスト[Post](名) ㊀郵便。㊁郵便函。

ホスホル[Phosphor](名) 「りん」(燐)に同じ。

(**ほ-せい**[補正](名) おぎなひなほすこと。

(**ほ-ぜい**[逋稅](名) 稅をおさめざること。

(**ほぜい-さうこ**（ソウコ）[保稅倉庫](名) 輸入手數未濟の貨物を藏(ヲサ)め置く所、藏置中の貨物は庫入の日より一個年間は輸入したるものと看做されざるものとす、庫入のまゝ一個年を過ぐれば、最初庫入の時の性質及數量によりて輸入稅を徵收せらる、官設のものと私設のものとあり。

(**ほ-せう**（シヨウ）[步哨](名) 步兵のみはり。たちばん。

(**ほ-せう**（シヨウ）[堡礁](名) 【地】海岸に平行したる珊瑚礁、海岸と礁との間に海水を挾むもの。

(**ほ-せき**[晡夕](名) ひぐれ。ゆふぐれ。

ほせく・る（らりるるれれ）(他、ら四) 「ほじくる」に同じ。

(**ほ-せつ**[補綴](名) おぎなひつゞること。

(**ぼ-せつ**[暮雪](名) くれがたのゆき。

(**ほ-せん**[步戰](名) かちだちになりてたゝかふこと。

(**ほ-せん**[保線](名) 線路を保全すること。

(**ほ-ぜん**[保全](名) 保護して安全にあらしむること。

(**ぼ-せん**[拇戰](名) ㊀擘(ケン)をうつこと。㊁ゆびずまふ。

(**ぼ-せん**[母線](名) 【數】運動するとき或體形を生出する線。

ほそ[細](名) ㊀ほそきもの。㊁「ほそびき」の略言。

ほそ-[細](接頭) 或語に冠してほそき意又はやさしき意を表する語。

ほそ[臍](名) 次條に同じ。

ほぞ[臍](名) ㊀腹部の中央にある臍緒の痕。㊁果實の蒂。へた。㊂接ぎ合はする一方の材につくりたる突起物、これを他方の臍穴に嵌(ハ)めて材と材とを接ぎ合はす。——**を かむ**[噬臍] 悔ゆとも及ばず。——**を かたむ** 覺悟をなす。決心す。

ほぞ-あな[臍穴](名) 接ぎ合はする一方の材につくりたる孔、これに他方の臍を入れて接ぎあはす。

ほそ-えい[細纓](名) 古昔、六位以下の武官の着けし冠の纓。

ほぞ-おち[臍落](名) ㊀果實よく熟して自ら落つること。又、其果實。(蒂落) ㊁承知。合點。

ほそ-おび[細帶](名) 幅狹き帶。

ほそ-おもて[細面](名) ほそやかなる顏。

卄**ほそ-き**[蔓椒](名) 【植】「つるはじかみ」の古稱。

(**ほ-そく**[捕捉](名) とらふること。つかまへること。

(**ほ-そく**[補足](名) おぎなひたすこと。

卄**ほそ-くづ**[燼](名) 「ほくづ」に同じ。

ほそ-くび[細首](名) ほそやかなるくび。

卄**ほそ-くみ**[半夏](名) 【植】「はんげ」に同じ。

卄**ほ-そけ**[火退](名) 野火などの燃え來るに對し、此方よりも火を放ち、燒きてこれを防ぐこと。(逆燒)。

ほそ-ごし[細腰](名) ほそやかなる腰。

ほそ-こゑ[細聲](名) さゝやかなる聲。

ほそ・し（くしきけれ）[細](形、二) ㊀圍み短し。ちひさし。㊁幅狹し。せまし。㊂聲低し。ひくし。㊃乏し。とぼし。

卄**ほそ-しき**[細敷](名) 底幅せまき靴。

ほそ-だか[細高](名) ほそくして高きこと。

ほそ-だち[細太刀](名) 裝束に佩ぶる蒔繪の刀。

ほそ-たにがは（ガワ）[細谷川](名) 流れのほそき谷川。

ほそ-ぢ[細乳](名) 乳の出の少なきこと。

ほぞ-ち[臍落](名) 熟したるまくはうり。(熟瓜)。

(**ほ-そつ**[步卒](名) かちの兵卒。

ほそ-どの[細殿](名) 宮殿などの周圍に通路としてつくりたる細長き屋。(廊)。

ほそ-なが[細長](名) ㊀細くして長きこと。㊁卄古昔、童子又は女官などの着用せし衣類。

ほそ-なが・し（くしきけれ）[細長](形、二) 細くして長し。

ほそ-ぬの[細布](名) 絲の細き布。

ほそ-ね[細根](名) ほそき根。——**だいこん**[細根大根](名) 【植】大根の一種、根莖の太さ指位のもの。

ほそ-の-を[臍緒](名) 胎兒の臍より胎盤に通ず

る細長き肉管、これにて母體より滋養分を取る。〔臍帶〕。
ほそはぎ〔細脛〕(名) かぼそき脛。
ほそびき〔細引〕(名) 麻にて糾(ヨ)りたる繩。〔麻繩〕。
〜**ほそびく**〔細引〕(他、か四) 細くす。
卄**ほそびつ**〔細櫃〕(名) 今の塗桶の類、綿をかけてのばすもの。
ほそまゆ〔細眉〕(名) 狹く長き眉。
ほそまゆげ〔細眉毛〕(名) 前條に同じ。
ほそみち〔細道〕(名) せまき路。
ほそみづ〔細水〕(名) ちひさきながれ。
ほそめ〔細目〕(名) ㊀すこしく開きたる目。㊁細く編みたる目。㊂狹きすきま。
ほそやか〔細〕(名) ほそきさま。
卄**ほそやぐ**〔細〕(自、か四) ほそやかになる。ほっそりす。
ほそらか〔細〕(名) 「ほそやか」に同じ。
ほそる〔細〕(自、ら四) 細くなる。「井の水が—」。
ほそろひ〔穗揃〕(名) 穗の秀でそろふこと。
ほそわた〔細腸〕(名) 小腸。
ほそゐ〔細藺〕(名) 【植】藺の一種、高さ四五尺、水田に植ゑ、刈りて疊の表を織る、其皮をゐがらといふ。とうしんぐさ。
ほそゑぼし〔細烏帽子〕(名) 細長き立烏帽子。
卄**ほそん**〔本尊〕(名) 「ほんぞん」に同じ。
(**ほぞん**〔保存〕(名) 「はうぞん」に同じ。
ほぞんかけたか(名) ほとゝぎすの鳴き聲。
ほた〔榾柮〕(名) 木の切れ端。ほたぐひ。
卄**ほだ**〔穗田〕(名) 稻などの穗揃の田。
(**ほだ**〔捕拿〕(名) とらふること。とりおさふること。
ボーダイ〔菩提〕(名) 【佛】(い)(梵語 Bodhi、道又は覺と譯す)無上の正道、無上の正覺。(ろ)佛門に入ること。佛果を得ること。「—を弔ふ」。(は)念佛すること。——**かう**〔菩提講〕(名) 菩提のために法華經を說く法會。——**ごゑ**〔菩提聲〕(名) 念佛する聲。——**サッタ**〔菩提薩埵〕(名) 【佛】菩薩の條を見よ。——**し**〔菩提子〕(名) 菩提樹の實。——**じゆ**〔菩提樹〕(名) ㊀【佛】釋迦牟尼佛、其下に坐して大正覺を成したりといふ樹、涅槃の日に至る每に一たび萎(シボ)みしばらくしてもとに復すといふ。㊁【植】「しなのき」に同じ。——**しよ**〔菩提所〕(名) 檀那寺。香花院。——**しん**〔菩提心〕(名) 佛道に入る心。又、正覺を開く心。——**ず**(名) ㊀【植】菩提樹に同じ。㊁菩提子に同じ。——**のしか**〔菩提鹿〕(名) 菩提の容易に得がたきを鹿にたとへいふ語。

(**ほたり**〔逋逃〕(名) のがれにぐること。
(**ほだう**〔母堂〕(名) 母の敬稱。(北堂)。
〜**ほたえる**(自、や下一) さわぐ。ふざれる。(大阪地方の方言)。
卄**ほたき**〔火焚〕(名) 古昔、十一月に陽氣を迎ふるためとて火を焚きたる祭事。
ほたぐひ〔榾柮〕(名) ほた。
(**ほだつ**〔逋脫〕(名) ㊀のがれまぬかるゝこと。㊁租稅を納めざること。
ほだし〔絆〕(名) ㊀ほだすこと。㊁馬の脚を繫ぐ繩。㊂自由を束縛する物事。「妻子の—」。
ボタシウム〔Potassium〕(名) 【化】「カリウム」に同じ。
ほたおり〔保多織〕(名) 讃岐國香川郡中村より產出する縞織の絹布。
ほだす〔絆〕(他、さ四) 繫(ツナ)ぎとむ。束縛す。「子を思ふ心にほだされて」。

ほだち〔穗立〕(名) 穗の抽き立つこと。
ほたてがひ〔帆立貝〕(名) 【動】瓣鰓類中單柱類に屬する貝、介殼の一片は膨(フク)れ他の一片は扁(ヒラ)く、表面は黃色にして廣き溝を有し、裏面は白色なり、扁き介殼を上にして泳(オヨ)ぐさまの帆を揚げたらんやうなるより此名あり。(海扇)。
〜**ほだてる**〔攪〕(他、た下一) 攪きまず。
ほだはら〔穗俵〕(名) 【植】褐色藻に屬する海藻、葉狀をなす部分に葉と柄との如き部分あり、食用又は肥料に供せらる、なのりそ。なのりそ。ほんだはら。じんばさう。(馬尾藻、神馬藻、莫告藻)。
ほたび〔榾柮火〕(名) ほたをたく火。
〜**ほたほた**(名、副) ほたゝるさまにいふ語。
ぼたもち〔牡丹餅〕(名) 「ぼたんもち」に同じ。
〜**ほたり**(名、副) 一しづくほたゝるさまにいふ語。
〜**ぼたり**(名、副) 前條に同じ。
ほたる〔螢〕(名) (火垂(ホタリ)の義) 【動】鞘翅類中發光科に屬する昆蟲、五六月の頃、水邊に生ず、大さ三四分許、頭赤く他は炭黑色なり、夜間腹部より燐光を發す。ほたろ。なつむし。(宵行、自照)。——**いし**〔螢石〕(名) 【鑛】「けいせき」に同じ、其暗所にて熱すれば燐光を放つより此名あり。——**かご**〔螢籠〕(名) 螢を入るゝ籠、わく又は曲物に紗を張りたるもの。——**がひ**〔螢貝〕(名) 【動】蜆の類、殼の外面黑色にして、內面は眞珠光を呈す、大さ四五分許。——**がり**〔螢狩〕(名) 螢を狩り捕ふること。(撲螢)。——**ぐさ**〔螢草〕(名) 「うつしばな」に同じ。——**さう**〔螢草〕(名) 【植】柴胡(サイコ)の一種、莖は大形にして、秋の頃柴胡に似たる花を開く。——**び**〔螢火〕(名) ㊀螢の

夜間に放つ燐光。㊁消え殘りたる小さき埋火。
〜**ほたろ**〔螢〕(名) 【動】「ほたる」の訛。
ボタン〔紐釦〕(名) (ポルトガル語 Botão)「シャツ」・洋服其他衣類の一方に着け他方にある穴にはめ入れて合はせとむるもの、介殼又は金屬などにてつくる。(扣鈕)。
(**ぼたん**〔牡丹〕(名) 【植】(い)卄「やぶかうじ」の古稱。(ろ)毛茛科に屬する灌木、初夏の頃、美麗なる大形の花開く、重瓣・單瓣・紅・白・紫等色種々あり。はつかぐさ。ぼうたん。(木芍藥、花王、寶相花)。——**たまご**〔牡丹卵〕(名) 一種の料理、煮(ニ)えたてる胡麻油の中に卵を割りおとしてつくりたるもの、黃身を圍みて白身ひろがり恰も牡丹の花の狀をなす。——**づる**〔牡丹蔓〕(名) 【植】毛茛科に屬する草、原野に自生す、葉、牡丹に似て、秋の頃、四瓣の白花又は淡紫色の花開く。(女萎)。——**もち**〔牡丹餅〕(名) 丸めたる餅に餡又はきなこをつけたるもの。ぼたもち。はぎのもち。きたまど。(餺飥餅、飯團餅)。
(**ほぢ**〔保持〕(名) たもつこと。もつこと。
(**ぼち**〔墓地〕(名) 死者を埋葬して墓をたつる所。はかどころ。はかば。はかはら。むしよ。
ぼち〔點〕(名) 小さき點(テン)。ちよぼ。——**ぼち**〔點點〕(名、副) 「ちよぼちよぼ」に同じ。
〜**ぼち**(名) 祝儀。饅頭。(京阪地方の方言)。
〜**ぼちやぼちや**(名、副) ㊀水の淺き所などを游(オヨ)ぐさまにいふ語。㊁ふくらかにて愛らしきさまにいふ語。
(**ほちゆう**〔補註〕(名) 在來の註に補(オギナ)ひたしたる註。又、其註ある書物。
(**ほつい**〔發意〕(名) 思ひたつこと。案じ出すこと。

(**ぼついぎ**〔沒意義〕(名) 意義なきこと。
卄**ほつえ**〔上枝〕(名) (秀之枝の義)上の枝。又、初枝(ハツエ)。
(**ほつが**〔發駕〕(名) 駕籠にのりて出たつこと。〔貴人にいふ語〕。
〜**ほっかむり**〔頰被〕(名) 「ほほかぶり」の訛。
(**ほっき**〔發起〕(名) ㊀くはだてはじむること。思ひたつこと。「—人」。㊁發心。「一念—」。
(**ほつぎ**〔發議〕(名) 評議にて或意見をとなへ出すこと。
(**ぼっき**〔勃起〕(名) にはかにおこりたつこと。
(**ほっきにん**〔發起人〕(名) くはだて始むる人。
(**ほっく**〔發句〕(名) ㊀連歌の初句、即ち五文字・七文字・五文字の三句。㊁連歌の發句より轉じて一體をなしたる詩、後に俳句ともいふ。
〜**ぼっくり**(名、副) もろく折らるゝさまにいふ語。
〜**ぽっくり**〔木履〕(名) 駒下駄の一種、一つの材の底をくりてつくり後側を圓く角をとり、漆にて黑く又は赤く塗りたるもの、おもに少女の用ふるもの。
(**ほつぐわん**〔發願〕(名) 神佛に願をかくること。ぐわんだて。
(**ほっけ**〔法華〕(名) 【佛】「ほっけしゆう」の略言。——**ザンマイ**〔法華三昧〕(名) 一心に法華經を誦讀して其妙理を觀念すること。——**しゆう**〔法華宗〕(名) ふるくは天台宗の別稱。のちには專ら日蓮宗の別稱。——**だう**〔法華堂〕(名) 法華三昧を修するための堂。又、貴人の遺骨を收むる處。——**はっかうゑ**〔法華八講會〕(名) 法華經の問答にて八座の論議あること、一日に朝座と夕座との二座あり、一座に一卷づゝを修し四日にて全部八卷を終ふるもの、略して八講(ハッカウ)ともいひ、更につゞめて「はかう」ともいふ。
(**ほっけう**〔法橋〕(名) 法眼(ホフゲン)の次位にて、律

師に相當せる僧位。(上人)。
ホッケン〔黃絹〕(名) (字の唐音)東京(トンキン)より舶來する絹布、黃絹の絲にて織れるもの。
(**ほつご**〔發語〕(名) ㊀いひ出すこと。はつごん。㊁文句の冒頭におく語。「そもそも」「およそ」などの類。㊂深き意味なく或語の上に添へらるゝ語。「たやすし」「さまよふ」「み雪」の「た」「さ」「み」などの類。
(**ぼつご**〔歿後〕(名) みまかりたるのち。死後。「—の門人」。
(**ぼっこう**〔勃興〕(名) にはかにおこること。盛に勃起すること。
(**ほつごん**〔發言〕(名) いひ出すこと。言ひはじむること。はつげん。
(**ほっさう**〔法相〕(名) 【佛】(い)萬法の性質。(ろ)「ほっさうしゆう」の略言。——**しゆう**〔法相宗〕(名) 【佛】佛教の一派、解深密經及唯識論を所依として法相を究明するを旨とするもの、唐にては玄奘これを興へ、我國にては孝德天皇の御宇に僧道照入唐(ニッタウ)してこれを玄奘に學び歸朝して唱へたるに始まる。
(**ほっし**〔法嗣〕(名) 「はふし」の音便。
(**ほっし**〔法師〕(名) 「ほふし」の音便。
(**ぼっしう**〔沒收〕(名) ㊀上(カミ)に取りあぐること。㊁【法】附加刑の一、法律にて禁制したる物件又は犯罪の用に供したる物件若しくは犯罪によりて得たる物件を取りあぐること。
(**ぼつじかん**〔沒字漢〕(名) 文字を知らざるもの。あきめくら。
(**ぼつじひ**〔沒字碑〕(名) 前條に同じ。
ほつしもめん〔綿撒絲〕(名) 綿布の絲をほつして藥液に浸したるもの、創口にさし入れ又はあつるもの。
(**ほっしゆ**〔法主〕(名) 「ほふしゆ」に同じ。
(**ぼつしゆみ**〔沒趣味〕(名) 趣味のなきこと。

(ぼっ-しよ［沒書］(名) 寄書が揭載せられずして止むこと。

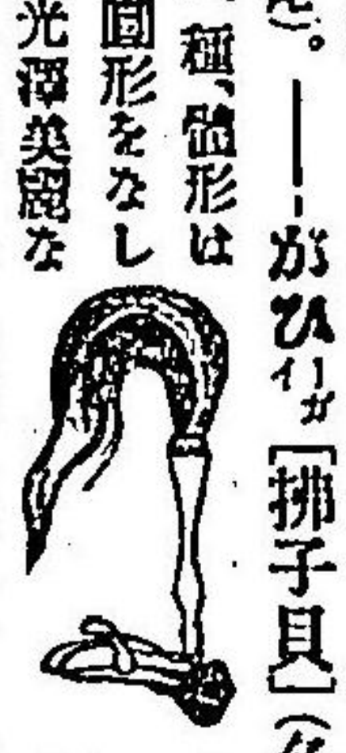
(ぼつ-じよ［勃如］(名、副)「ぼつぜん」に同じ。

(ぼっ-しよく-し［沒食子］(名)「もっしよくし」に同じ。——さん［沒食子酸］(名)「もっしよくしさん」に同じ。

(ほっ-しん［法身］(名)【佛】「ほふしん」の音便。

(ほっ-しん［發心］(名) ㊀思ひたつこと。企て起すこと。(發起、主唱)。㊁菩提心を發(オ)こすこと。

(ほっ-す［拂子］(名) はぐまの毛を束ねて、柄を附けたる佛具。(麈尾)。——がひ（イガ）［拂子貝］(名)【動】海綿動物の一種、體形は圓形若しくは楕圓形をなし一束の長くして光澤美麗なる玻璃質の細條を有し、これを海底に挿入して生息す。我國にては相模洋に産す。


［ほっす］

ほっ·す（さしすすせせ）［解］(他、さ四) ほぐす。とく。

ほっ·す（せしすするすれせよ）［欲］(他、さ變)（「ほりす」の音便）㊀ほしくおもふ。得んと思ふ。㊁ねがふ。のぞむ。

ぼっ·す（せしすするすれせよ）［沒］(自、さ變) ㊀しづむ。㊁おぼる。㊂かくる。㊃おちこむ。㊄うづまる。㊅ほろぶ。㊆みまかる。死ぬ。(歿)。㊇閉所になる。

ぼっ·す（せしすするすれせよ）［沒］(他、さ變) ㊀かくす。うづむ。しづむ。おとす。なくなす。㊁閉所にす。

(ぼっ-せい［沒世］(名) 身まかること。

(ぼっ-せき［沒籍］(名) 族籍を沒收して平民となすこと。

(ぼつ-ぜん［勃然］(名、副) ㊀にはかにおこるさまにいふ語。㊁むっとして怒るさまにいふ語。

(ほっ-そく［發足］(名) かどで。旅立。出立。

ポッタース［Potash］(名)【化】水酸化「カリウム」に同じ。

(ほっ-たい［法體］(名) 佛門の體裝をなせること。僧となれること。

ポッタシウム［Potassium］(名)【化】「カリウム」に同じ。

ほっ-たて［掘建］(名) 柱の根を直に地に建つること。——ごや［掘建小屋］(名) 掘建の粗末なる家。

〔ほったらかし(名) ほったらかすこと。

〔ほったらか·す（さしすすせせ）(他、さ四) すておく。

〔ほったら-やき(名) 水にてゆるくねりたる温飩粉に砂糖を加へ、これを火にかけたる金屬製の板の上に滴(タタ)して燒きたるもの。(東京の方言)。

〔ほったり(名、副) 滴(シタタ)りおつるさまにいふ語。

(ほっ-たん［發端］(名) いとぐち。おこり。はじまり。

〔ぼっち(名) 小さきつまみ。(東京の方言)。

〔—ぼっち(接尾) 或語に添へて、小量の意を表はす語。「五錢—」「ひとり—」。(東京の方言)。

〔ぼっ-ちゃん［坊樣］(名) ㊀身分ある人の幼き男の子の敬稱。㊁世事に通ぜざる男をのゝしりていふ語。——そだち［坊樣育］(名) 世の中の狀態を知らずに安樂に生長すること。

ほ-づつ［火砲］(名) 小銃・大砲の稱。

ほ-づつ［帆筒］(名) 帆柱の端に裝置したる具、これに帆綱を通して帆を上下するもの。——しめなは（ワナ）［帆筒締繩］(名) 帆筒をしむるなは。

〔ぼっつり(名、副)「ぶっつり」に同じ。

(ほっ-てい［發程］(名) かどで。ほっそく。(首途)。

(ぼっ-でき［沒溺］(名) おぼるゝこと。

(ほっ-と［發途］(名) たびだち。かどで。(發足)。

〔ぼっ-と(副) ㊀ぼんやりするさまにいふ語。㊁然えたつさまにいふ語。㊂顏の赤らむさまにいふ語。

〔ぼっ-と(副) 飛び込むさま又は飛び出るさまにいふ語。

(ほっ-とう［法燈］(名)【佛】「ほふとう」に同じ。

(ほっ-とう［發頭］(名)「ほっとうにん」に同じ。——にん［發頭人］(名) 事を唱へおこしたる人。(張本人。主謀者)。

〔ぽっと-で(名) 田舍より始めて都に出て來れる人。

ポットロード(名)（「オランダ」語 Pot lood）鉛筆。

ほ-づな［帆綱］(名) 帆を帆柱に上下させ又は繫(ツナ)ぎ止むるための綱。

(ぼつ-にふ（ウ｜ニ）［沒入］(名) ㊀しづみ入ること。又、しづめ入るゝこと。㊁おちいること。又、おとしいるゝこと。㊂官府にめしあげらるゝこと。又、官府よりめしあぐること。

(ほつ-ねつ［發熱］(名)「はつねつ」に同じ。

(ぼつ-ふうりう［沒風流］(名) 風流ならざること。いやしきこと。俗なること。

(ぼつ-ぶんげう（ヨウ｜ギ）［沒分曉］(名) 物事のわきまへの出來ぬこと。はなしのわからぬこと。「—漢」。

〔ほっ-ぺた［頰邊］(名)「ほほぺた」の訛。

〔ほっぽ［懷］(名) ふところ。(小兒の語)。

(ぼつ-ぼつ［勃勃］(名、副) 勇氣などのそぞろにおこりたつさまにいふ語。

〔ぼつ-ぼつ(名、副) 漸を追ひて進むさまにいふ語。

〔ぼつ-ぼつ(名、副) ㊀點の散在せるさまにいふ語。㊁雨などのふりはじむるさまにいふ語。

(ぼつ-めつ［沒滅］(名) ほろぶること。又、ほろぼすこと。

(ぼつ-らく［沒落］(名) ㊀城地などの敵に奪はるゝこと。㊁領主の滅亡すること。㊂倒產。破產。

(ぼつ-りさう（ソ｜ウ）［沒理想］(名) 理想なきこと。理想の明かならざること。

〔ぼつり-ぼつり(名、副)「ぼつぼつ」に同じ。

〔ぽつり-ぽつり(名、副)「ぽつぽつ」に同じ。

ほつ·る（られるるるれれよ）［解］(自、ら下二)（「はつる」の轉）ほどけとく。ほぐる。

卄ほ-て［最手］(名) 相撲の大關。(秀手)。

ほ-て［帆手］(名) 帆の左右につけたる綱。

〔ほて(名)「ほてれん」の略言。

卄ほ-てい［拂底］(名)「ふってい」に同じ。

(ほ-てい［布袋］(名) 七福神の一、支那の梁の時代の散聖の名にして、彌勒の化身なりといふ、普通其像として身體肥滿し腹部の殊に膨大せる僧體の大いなる袋を荷へるさまを描(ヱガ)く。——ちく［布袋竹］(名)【植】竹幹短かく、節多きもの、杖などにつくる。(佛面竹)。

(ほ-てう（ヨウ｜チ）［步調］(名) ㊀多人數の步行調子。あしなみ。㊁多人數の行動の調子。

ほ-て-ふり［棒手振］(名) 品物を提(サ)げ又は擔(ニナ)ひてうりあるくこと。又、其人。ふりうり。(行賈)。

ほ-てり［火照］(名) ㊀のぼせて顏の赤らむこと。㊁卄ゆふやけ。

ほて·る（らりるるれれ）［火照］(自、ら四) 熱く感ず。

ホテル［Hotel］(名) 大なる旅館。やど屋。旅舍。

〔ほてれん(名) 子を孕みて腹のふくるゝこと。

卄ほて-わき［最手脇］(名) 相撲の關脇。

(ほ-てん［補塡］(名) おぎなひみたすこと。

ポテンシャル［Potential］(名)【理】「てんゐ」(電位)に同じ。

卄ほ-と［女陰］(名) 女子の陰部。

ほど［塊］(名) ㊀【植】「ほどいも」に同じ。㊁【植】豆科に屬する草、纏繞莖を有す、葉は羽狀複葉にして三個乃至七個の小葉より成り紫色を帶ぶ、花は豆に似て淡黃紫色を呈し、夏の頃開き後二寸許の莢を結ぶ、地下の塊部は食用に供せらる。塊芋(ホドイモ)。㊂爐の下の灰の塊。

ほど［程］(名) ㊀ころあひ。度合。㊁かぎり。きまり。㊂みぶん。ぶんざい。㊃へだゝり。あひだ。㊄ころ。をり。㊅やうす。調子。「—の善い人」。

—ほど［程］(接尾) ㊀ばかり。だけ。㊁いよ〳〵ます〳〵。「見れば見る—」。㊂ころに。をりに。

ほど-あひ（イ｜ア）［程合］(名) 適宜のほど。ころあひ。

ほど-いも［塊芋］(名)【植】「ほど」(二)の條を見よ。

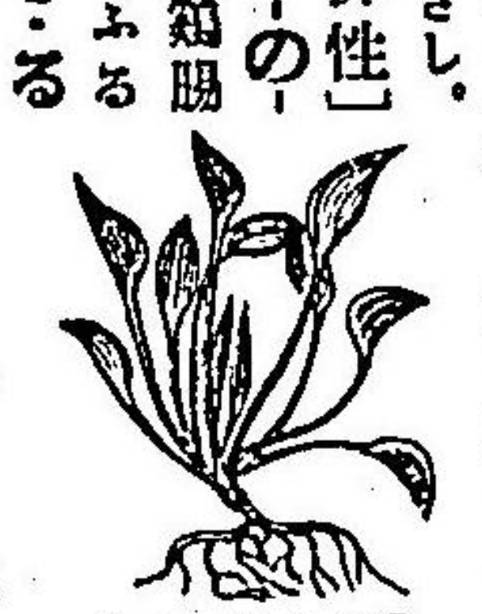
卄ほと-ぎ［缶］(名) 上古の瓶の類、腹太く口小さきもの。支那の上代には、秦の國などにて樂器に用ひられたり。

ほどき-もの［解物］(名)「ときもの」に同じ。

ほど·く（かきくくけけ）［解］(他、か四) ㊀分け解く。とく。㊁とき放つ。はなつ。㊂むすび又はかけたる物事を、むすび又はかけざる以前の如くにす。

ほど·く（けけくくるくれけよ）［解］(自、か下二) 分かれ解く。

ホトケ［佛］(名)【佛】（梵語 Buddha の轉）㊀佛陀。㊁佛像。㊂釋迦牟尼。㊃佛葬したる死者の靈。㊄〔いと正直にして無邪氣なる人の稱。——いぢり［佛弄］(名) 香花を供し讀經などして佛に事ふること。——ぎ［佛氣］(名) いと正直にして無邪氣なる性質。——くさ·し（くしきしけれ）［佛臭］(形、二) 坊主くさし。佛敎くさし。——しやう（シ｜ヤウ）［佛性］(名) 佛氣に同じ。——の-ざ［佛座］(名)【植】鷄腸(カハラケナ)を春の七種に用ふる時の稱。——づく·る（らりるるれれ）［佛作］(自、ら四) 死顏になる。——まつり［佛祭］(名) 佛に供養すること。


［ほとけのざ］

〔ほどける［解］(自)「ほどく」の訛。

ほどこし［施］(名) ほどこすこと。めぐみあたふること。めぐみすくふこと。(布施、施行、喜捐)。——ぐすり［施藥］(名) ほどこしに出す藥。

ほどこ·す（さしすすせせ）［施］(他、さ四) ㊀一般に行きわたらす。あまねく及ぼす。㊁そなへ設く。まうく。㊂用ふ。行ふ。「智勇—所なし」。㊃附け加ふ。㊄惠みて與ふ。あはれみて給す。

卄ほどこ·る（らりるるれれ）［延、播］(自、ら四) 延びひろがる。ゆきわたる。

卄ほど-つら(名)［百部］【植】「ひやくぶ」に同じ。

ほととぎす［時鳥］(名) ㊀【動】攀木類に屬する鳥、嘴は扁平にして上嘴の末端は少しく鉤狀をなす、ひよどりよりは稍や瘦形にして尾長し、背部は淡黑色にして、頭部白し、卵を他鳥の巢に生みて、他鳥をしてこれを孵さしむ。ときのとり。しでのたをさ。たまむかへどり。(子規、杜鵑、杜宇、蜀魂、田鵑、催歸、不如歸、郭公)。㊁【植】百合科に屬する草、高さ二三尺、葉は楕圓狀披針形にして莖を抱きて生ず、花は帶白色にして暗紫色の斑點を有す、觀賞用として栽培せらる。(油點草)。

ほととぎす(枕)「とばたのうら」に冠する詞。

ほど-なく［程無］(副) 間もなく。やがて。

ほど-な·し（くしきしけれ）［程無］(形、一) ㊀せまし。㊁近し。

ほど-ばかり［程許］(名) ほど。ばかり。

ほと-ばし·る（らりるるれれ）［迸］(自、ら四) 飛び注ぐ。飛び散る。飛び走る。たばしる。とばしる。

卄ほと-ば·す（さしすすせせ）［潤］(他、さ四) ほとぶるやうにす。

卄ほと-ぶ（びびぶぶるぶれびよ）［潤］(自、は上二) 水分を含み脹(フク)る。ふやく。

卄ほと-ほと［殆］(副) ㊀其近き處まで及びて、今少

しにて。すんでのことに。おほかた。ほとんど。（殆）。㊁いたく。きはめて。

ほと-ほと（名、副）㊀戸を叩（タ）く音のさまにいふ語。（剝啄）。㊁斧にて伐（キ）る音のさまにいふ語。（丁丁）。

十ほと-ほと・し（しく・しく・しき・しけれ）［殆］（形、二）いと近く迫れり。いますこしなり。

十ほど-ほど・し（しく・しく・しき・しけれ）［程程］（形、二）程過ぎたり。ながびけり。

ほど-ほど-に［程程］（副）ものゝ適當の程度に。ものゝよきほどに。

十ほとほり（リ―オ）［熱］（名）ほとほること。ほとほるあつさ。

ほとぼり［熱］（名）㊀（前條の轉）㊁世上の評判。世人の注意。

十ほとほ・る（ホト・オル）（ら・り・る・る・れ・れ）［熱］（自、ら四）㊀熱氣發す。ほてる。ほとる。㊁いきどほる。はらだつ。

ほとぼ・る（ら・り・る・る・れ・れ）（自、ら四）前條の轉。

ほど-むら［程村］（名）常陸國程村より産出する紙、にしのうちの屬にして上品なるもの。

ほど-よ・し（く・し・き・けれ）［程好］（形、一）ぐあひよし。都合よし。

ほど-らひ（イ―ウ）［程合］（名）㊀ほどあひ。㊁精密ならぬこと。よい加減になすこと。

ほとり［邊］（名）㊀あたり。そば。㊁きは。はし。

ほとり［熱］（名）ほとること。あつさ。

十ほとり-ば・む（ま・み・む・む・め・め）［邊］（自、ま四）㊀あさはかなり。㊁端近なり。

ほと・る（ら・り・る・る・れ・れ）［熱］（自、ら四）熱氣立つ。あつし。ほとほる。

十ほど-ろ［程］（名）ほど。「夜の―にまゐり」。

ほど-ろ［解穗］（名）のびたるわらびの穗。

十ほど-ろ［斑］（名）はだら。マダラ。

ほと-んど［殆］（副）ほと〳〵。おほかた。（殘）。

十ほ-なか［火中］（名）火の中。「もゆる火の―にたちてとひし君はや」。

ほ-なが［穗長］（名）［植］「ほだ」に同じ。

ほ-なみ［穗波］（名）稻などの穗の風にゆるぐさまを波にたとへいふ語。

ほ-なみ［穗並］（名）穗の出であらはるゝさま。

十ボニ［盆］（名）盂蘭盆の略言なる盆（ボン）に同じ。

ホニムーン［Honey-moon］（名）㊀新婚の當月。結婚後の一個月。㊁新婚旅行。

（ほ-にゆう）［哺乳］（名）幼兒に乳をのませてそだつること。――どうぶつ［哺乳動物］（名）［動］哺乳類に屬する動物。――るゐ［哺乳類］（名）［動］脊椎動物の一、體面に毛生じ、肺を以て空氣を呼吸し、溫血にして概ね胎生なり、幼兒は母體より出づる乳汁にて養育せらる、人類もまた此類に屬す。

ほね［骨］（名）㊀動物體の柔軟なる部分を支持する堅牢なる物質、即ち骨骼。㊁器具の體を支ふる材料。「障子の―」。㊂物事を擔當し得る技倆又は氣槪。㊃取扱のむづかしきこと。〜――がをれる　苦勞又は面倒なり。〜――とかは　病氣のため身體のいたく瘦せたるにいふ。――にてっす［徹骨］いたく感ず。――にとほる　前條に同じ。――になる　㊀死ぬ。㊁主となりてはたらく。〜――ををしむ　なまける。〜――ををる　はたらく。出精す。苦勞をなす。

ほね-がらみ［骨絡］（名）全身に蔓延して痼疾となりたる黴毒。

ほね-きり［骨切］（名）はもなどの小骨をよく切りむくこと。

ほね-ぐみ［骨組］（名）骨の組み合はせ。骨の組織。

ほね-ちがひ（ガイ―チ）［骨違］（名）骨の關節のはづれたがふこと。（脫臼）。

ほね-つぎ［骨繼］（名）骨の折れ又は關節の外（ハヅ）れたるをなほす術。又、其人。（整骨、接骨）。

ほね-なし［骨無］（名）脊髓のなえたる不具者。

ほね-ぬき［骨拔］（名）魚を料理して其骨を去りたるもの。「―鮨」。

ほね-ばなれ［骨離］（名）骨と肉とのはなるゝこと。

（ほね-ば・る）（ら・り・る・る・れ・れ）［骨張］（自、ら四）㊀骨多くあり。㊁意地づよくかどだつ。

ほね-ぶし［骨節］（名）骨のつがひめ。

ほね-み［骨身］（名）㊀骨と身と。㊁全身。

（ほね-をしみ）［骨惜］（名）勞を厭ふこと。なまけ。

ほね-をり［骨折］（名）ほねををること。精を出して働くこと。つとむること。

ほね-を・る（ら・り・る・る・れ・れ）［骨折］（自、ら四）精を出だして働く。精を出す。つとむ。

（ほ-ねん）［暮年］（名）晚年。

十ほの―［仄］（接頭）ほのかに。かすかに。「―見し」。

ほの-か［仄］（名）分明ならざるさま。遠くより見聞するさま。かすか。ほんのり。（髣髴、彷彿）。

ほの-ぐら・し（しく・しく・しき・しけれ）［仄暗］（形、二）うすぐらし。

ほ-の-ほ（オ―）［炎、焰］（名）（火の穗の義）「くわえん」（火焰）に同じ。

ほの-ぼの［仄仄］（名、副）甚だほのかなるさま。（朦朧）。――あけ［仄仄明］（名）ほのかに白みたるあかつき。

ほの-ぼの・し（しく・しく・しき・しけれ）［仄仄］（形、二）いとほのかなり。

ほの-めか・す（さ・し・す・す・せ・せ）［仄］（他、さ四）㊀ほのめくやうにす。㊁氣振に見す。ほのかに示す。

ほの-め・く（か・き・く・く・け・け）［仄］（自、か四）ほのかに見ゆ。うっすらとあらはる。

（ほ-ばう）（ウ―ホ）［捕亡］（名）㊀にぐるものを捕ふること。㊁罪人のめしとり。又、其役。――り［捕亡吏］（名）罪人めしとりの役人。

ほ-ばく［捕縛］（名）とらへしばること。

ほ-ばしら［帆柱］（名）帆をあぐる爲に船に樹（タ）つる柱。（檣）。

十ほ-ばら［膘］（名）魚のうきぶくろ。

（ほ-ひ）［墓碑］（名）はかのたていし。

（ほ-ひつ）［輔弼］（名）たすくること。（輔佐）。

（ほ-ひつ）［補筆］（名）かきくはへ。

（ほふ）（ウホ）［法］（名）《「はふ」の呉音》［佛］（い）のり。佛法。佛教。（ろ）萬有一切の本性。意識所緣の對境。

（ほ-ぶ）［步武］（名）あゆみ。あし。「―を揃ふ」。

（ほふ-いん）（ホウ―）［法印］（名）㊀僧正に相當する僧位。㊁やまぶし。

（ほふ-え）（ホウ―）［法衣］（名）僧の服。法服。

（ほふ-がう）（ホウゴウ）［法號］（名）佛門に入りたるものゝ稱號。戒名。

（ほふ-く）［匍匐］（名）はらばふこと。はふこと。――けい［匍匐莖］（名）［植］平臥して地面を匍匐する莖。「さつまいも」の莖の如きこれなり。

（ほふ-ぐわい）（ホウ―）［法外］（名）㊀法の外。のりの外。㊁度に過ぐること。分限をこゆること。

（ほふ-げん）（ホウ―）［法眼］（名）法印に次ぐ僧位。僧都に相當せるもの。（和尙）。

（ほふ-さう）（ホウソウ）［法相］（名）［佛］「ほっさう」に同じ。――しゆう［法相宗］（名）［佛］「ほっさうしゆう」に同じ。

（ほふ-し）（ホウ―）［法師］（名）僧侶の通稱。

（ほふ-じ）（ホウ―）［法事］（名）佛事。（法會）。

（ほふ-しやう）（ホウシヤウ）［法性］（名）［佛］諸法の眞實の體性。

（ほふ-しゆ）（ホツ―）［法主］（名）［佛］一宗の長。

（ほふ-しん）（ホツ―）［法身］（名）［佛］佛の三身の一、卽ち本有の法性にして、佛の出世若しくは出世なきことを問はず、常に平等にして變易なきもの。――ブツ［法身佛］（名）［佛］常住普徧なる法身の佛。

（ほふ-しんわう）（ホツシンノウ）［法親王］（名）得道したまひたる親王を申す語。

（ほふ-たい）（ホウ―）［法體］（名）［佛］（い）「ほふしやう」（法性）に同じ。（ろ）「ほったい」に同じ。

（ほふ-だん）（ホウ―）［法談］（名）宗法上の趣意を說き聽かすること、卽ち、一向宗の說敎又は淨土宗の談義若しくは日蓮宗の說法などにいふ。

（ほふ-とう）（ホウ―）［法燈］（名）［佛］正法の迷執を破ることを燈明の暗闇を照らすが如きにたとへいふ語。又、其正法を承繼することを燈明の薪油によりてつゞくにたとへいふ語。

ほ-ぶね［帆船］（名）㊀帆をかけたるふね。㊁帆前船。

（ほふ-ねん）（ホウ―）［法然］（名）［佛］自然なること。

（ほふ-ふく）（ホウ―）［法服］（名）「ほふえ」（法衣）に同じ。

（ほふ-みやう）（ホウミヤウ）［法名］（名）「かいみやう」（戒名）に同じ。

（ほふ-む）（ホウ―）［法務］（名）㊀古昔、一山の事務を指揮せし職。㊁寺院の事務。

（ほふ-もん）（ホウ―）［法門］（名）衆生が佛法に入る門。

（ほふ-らく）（ホウ―）［法樂］（名）㊀佛事のときの音樂。㊁神佛の音樂。「―の能」。㊂なぐさみ。たのしみ。

（ほふ-りん）（ホウ―）［法輪］（名）［佛］正法の外道邪見を破碎して、敎化の轉々して故障なきことを車輪のめぐり行くにたとへいふ語。

ほふ・る（ら・り・る・る・れ・れ）［屠］（他、ら四）㊀禽獸の體を切り割く。㊁殺し盡す。みなごろしにす。

（ほふ-るゐ）（ホウ―）［法類］（名）同宗旨の僧侶の互に呼ぶ稱。

（ほふ-わう）（ホウヲウ）［法皇］（名）佛門に入りたまひし太上天皇を申し奉る語。

（ほふ-わう）（ホウヲウ）［法王］（名）㊀孝謙天皇の時、僧道鏡に授けられたる位、月料は供御に准ぜられたり。㊁「カトリック」敎の總首領の稱號、「カトリック」敎の敎權を代表し「イタリア」國「ローマ」に居り、其下に內閣ありて、法王の空位となるときは、內閣これを選擧す。「パッパ」、「パウプ」、「ポープ」。

（ほふ-ゑ）（ホウ―）［法會］（名）［佛］（い）法を說くために衆を會すること。（ろ）死者の追福を營むこと。

（ほ-へい）［步兵］（名）徒步にて戰鬪に從事する兵種。又、其兵種に屬する軍人。

（ほ-へう）（ヒョウ）［墓表］（名）はかじるし。（墓標）。

ボヘミア-ガラス［Bohemian glass］（名）「カリガラス」に同じ。

ほほ（ホホ）［頰］（名）顏面の一部、目の下にして鼻口の傍なる所。つら。

ほ-ほ（名）輕く笑ふさま。

ほほ（ホホ）［朴］（名）［植］木蘭科に屬する木、多く深山に生ず、葉柏に似て鋸齒なし、夏の頃白木蓮に似たる香氣多き花開く、樹皮は染料に木材は種々の用に供せらる。ほゝのき。（商州厚朴）。

（ほ-ほ）［步步］（副）一足づゝ。又、あゆみながら。

（ほ-ぼ）［保姆］（名）「はうぼ」に同じ。

ほぼ［略、粗］（副）あら〳〵。あらかた。おほかた。大抵。

ほほ-あて（ホオ―）［頰當］（名）めんぼほ。

十ほほか・す（ホオカス）（さ・し・す・す・せ・せ）［放棄］（他、さ四）はかす。すつ。

ほほ-かぶり（ホオ―）［頰被］（名）頭より頰へかけて手拭などを被ること。

（ほほ-がへし）（ホオガヘシ）［頰返］（名）㊀頰張りたるものを咀嚼すること。㊁都合をつくること。

（ほほ-げた）（ホオ―）［頰桁］（名）ほゝぼね。

ほほけ‐だ・つ（たちつつてて）［蓬起］（自、た四） ふくだむ。けばだつ。

ほほ‐おろホホ［頬白］（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀より大なり、全體灰赤色にして背部に黑斑あり、腹部は赤黃色を帶び胸部に赤斑あり、脚赤黃色にして頸部白し、よく囀る、其聲喨（ハウル）し。（黃道眉）。

ほほ‐すけホホ［綬］（名） むいかけ。

廿**ほほ‐だて**ホホ［頬立］（名） 「ほこだち」に同じ。

ほほ‐づきホホ［酸漿］（名）【植】茄科に屬する多年生草本、莖は卵形にして花冠は白色なり、葯は淡黃色を呈す、萊中の果實は球形にして熟すれば赤色となる、女兒其なかごを去りて中空にし、口に含みて吹き鳴らす。 ――**ヂヤウチン**ヂヤウ［酸漿提燈］（名） 赤く染めたる正圓の小提燈。（鬼燈）。

ほほ‐づゑホホ［頬杖］（名） 肘を立て手にて頰をさゝふること。つらづゑ。

ほほ‐のきホホ［朴木］（名）【植】「ほほ」に同じ。

ほほ‐ば・るホホ（らりるるれれ）［頬張］（他、ら四） 頰の中に一杯に食物を滿たす。

ほほ‐ひげホホ［頬髭］（名） 頰に生じたるひげ。（髯）。

ほほ‐べにホホ［頬紅］（名） 頰に化粧する紅。

ほほ‐ぼねホホ［頬骨］（名） 頰の上部眥（マナジリ）の下部にある骨、左右一對あり。つらぼね。（顴骨）。

廿**ほほ‐ま・る**（らりるるれれ）［含］（自、ら四） ふゝまる。ふくまる。

廿**ほほ・む**（まみむむめめ）［含］（他、ま四） ふゝむ。ふくむ。

廿**ほほ・む**（めめむむるるれめよ）（他、ま下二） ふくむやうにす。

廿**ほほ‐ゆが・む**ホホ（まみむむめめ）［頬喎］（自、ま四） 事實にあらざる事を語る。

廿**ほほ‐ゆが・む**ホホ（めめむむるるれめよ）［頬喎］（他、ま下二） 事實を曲げて語る。

廿**ほほ‐ゑ・む**（まみむむめめ）［微笑］（自、ま四） ㊀にっこり笑ふ。㊁花少し開く。

〜**ほ‐まち**（名） 臨時の所得、私得。

ほまへ‐せんホマヘ［帆前船］（名） 帆によりて航走する西洋形の船。はぶね。

ほまれ［譽］（名） 世にたゝへられて面目のはえあること。評判のよきこと。（名譽）。

ほ・む（めめむむるるれめよ）［譽、褒］（他、ま下二） はえあるやうにいふ。賞しいふ。いひはやす。たゝふ。

廿**ほ‐むけ**［穗向］（名） 穗の靡（ナビ）くこと。

ほ‐むしろ［帆筵］（名） 帆となすむしろ。

廿**ほ‐むだ**［鞆］（名） とも。

廿**ほ‐むら**［焰、炎］（名） ほのほ。

廿**ほめ・く**（かきくくけけ）［熱］（自、か四） ほとほる。ほとる。

廿**ほめ・く**（かきくくけけ）［蟲］（自、か四） とゞろく。

ほめ‐ことば［譽詞］（名） ほめていふことば。

ほめ‐そや・す（さしすすせせ）［譽囃］（他、さ四） 盛んに譽む。しきりに譽む。ほめたつ。

ほめ‐たた・ふ（へへふふふれへよ）［譽稱］（他、は下二） 前條に同じ。

ほめ‐た・つ（てててつつるつれてよ）［譽立］（他、た下二） 前々條に同じ。

ほ‐もめん［帆木綿］（名） 帆に用ふる綿布、厚く丈夫に織れるもの。

廿**ほや**［寄生］（名） やどりぎ。

（**ほ‐や**［保夜］（名）【動】被囊類の一、單體なるものと群棲なるものとの二種あり、何れも幼蟲時代には尾及脊索を具し水中を游泳すれど、成長の後は退化す、赤色にして外面疣狀の突起あり、其肉は食ふべし、我國北海道及奥羽地方の海岸に多く產す。（石勃卒、海鞘、老海鼠）。

ほ‐や［穗屋］（名） 薄の穗にて葺（フ）きたる家。

ほ‐や［火屋］（名） ㊀火の上に蓋（オホ）ふ蓋。（香蓋）。㊁「ランプ」の火を蓋ふ硝子製の筒。

（**ほ‐や**［暮夜］（名） よる。

〜**ほや**（名） 火災の大事に至らずして消えたるもの。

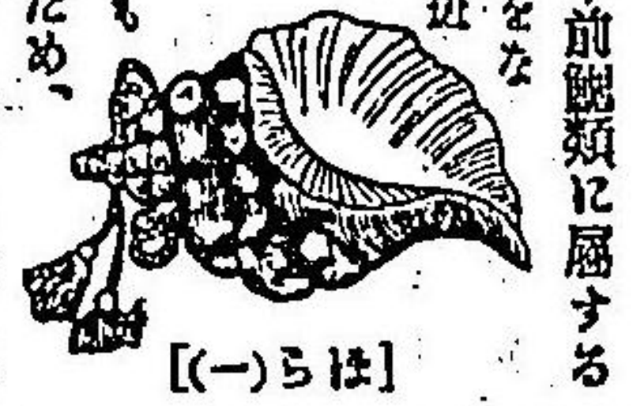
（**ほ‐やう**ヤウ［保養］（名） ㊀身體を健かにたもち養ふこと。養生。㊁心を慰めたのしますること。なぐさみ。

ほ・ゆ（えええゆゆるゆれえよ）［吠］（自、や下二） ㊀獸鳴く。㊁大きなる音を出だしてなく。（吼）。

（**ほ‐よく**［輔翼］（名） そばにありてたすけまもること。

ほ‐ら［洞］（名） 空虛の穴。（洞窟）。

ほ‐ら［法螺］（名） ㊀【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、海に產す、介殼は螺旋狀をなし、上部は延長して螺頭すぼむ、虎斑あり、肉食ふべし、其大形なるものゝ螺頭に孔を開けて吹けば、遠く響く音を發す、昔時、これを軍陣の合圖に鳴らしたり、又、修驗者なども山に入るとき、猛獸を畏れしむるため、これを吹き用ふ。ほらのかひ。ほらがひ。ぢんがひ。（梭尾螺）。㊁虛言。大言。



［ほら(一)］

ぼら［鯔］（名）【動】硬鰭類中ぼら科に屬する魚、體は稍圓形にして側扁す、頭部大形なり、背部は暗灰色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは二尺餘に達す、我國沿海多少これを產せざる所なし。

ほら‐がひガイ［法螺貝］（名） 法螺(一)に同じ。

ボラピューク［Volapük］（名） 西曆一千八百七十九年「ドイツ」人「シュラィエル」が萬國共通用としてつくれる言語、材料は多く「ローマンス」語及び「チュートン」語より採り、その文法的組織は極めて正格なり、されど實際には廣く行はるゝに至らざりき。

ほり［堀］（名） ㊀はること。㊁地を掘り開きて水を通ぜしむる所。㊂城の周圍を掘りて、水を深くたゝへたる所。（塹、壕）。

（**ほ‐り**［捕吏］（名） めしとりかた。とりて。

ほり［彫］（名） はること。又ほりたるさま。 ――**あげ**［彫上］（名） うきあげぼり。うきぼり。

（**ほ‐りう**［保留］（名） 失はざるやうに後日にとゞめおくこと。

（**ほ‐りう**［蒲柳］（名） 體質のかよわきこと。「―の質」。

ほり‐え［堀江］（名） 掘りて水を通ぜしむる川。

廿**ほり‐き**［堀］（名） 「ほり」(三)に同じ。

廿**ほり・す**（せしすするすれせよ）［欲］（他、さ變） 「ほっす」に同じ。

ボリス［Police］（名） 巡査。

ほり‐だし［掘出］（名） ほりだすこと。 ――**もの**［掘出物］（名） 豫期せずしてさがし得たる格外によきしろもの。

ほり‐だ・す（さしすすせせ）［掘出］（他、さ四） ㊀掘りて出す。㊁さがし出す。

ほり‐どめ［堀留］（名） 堀のはり留めたる所。

ほり‐ぬき［掘貫］（名） ㊀はりぬくこと。㊁「はりぬきゐど」の略言。 ――**ゐど**［掘貫井戸］（名） 地下を深く掘りて不透水層に達したる井戸、不透水層上に集まれる水の湧出するもの。（鑽井）。

ほり‐ぬ・く（かきくくけけ）［掘貫］（他、か四） 掘りてつらぬく。

ほり‐ぬ・く（かきくくけけ）［彫貫］（他、か四） 刻みてつらぬく。

ほり‐もの［彫物］（名） ㊀物の面に形象を彫り刻むこと。又、其技術。彫刻。㊁針にて人の膚に模樣を刺し、墨・朱などにて彩色したるもの。（剳青、文身）。 ――**し**［彫物師］（名） 彫物を業とする人。

〜**ぼり‐や**（名） 不當の遊興費を請求する家。（東京の方言）。

（**ほ‐りよ**［捕虜］（名） とらはれ、とりこ。

ほり‐わり［掘割］（名） 地を掘り割りて水を通ずる所。ほり。

ほり‐ゐど［掘井戸］（名） 掘りて設けたるゐど。

廿**ほ・る**（らりるるれれ）［欲］（他、ら四） ほりす。ほっす。

ほ・る（らりるるれれ）［堀、掘］（他、ら四） ㊀地をうがつ。地にあなをあく。㊁地を穿ちて物を取る。「金を―」。㊂草木を根ごめうがちて取る。

ほ・る（らりるるれれ）［彫、鐫、刻］（他、ら四） きざむ。ゑる。彫刻す。

ほ・る（れれるるるれれよ）［恍、惚］（自、ら下二） ㊀うっとりす。ぼんやりす。ぼく。ぼける。㊁心醉す。戀慕す。（惚）。

〜**ぼ・る**（らりるるれれ）（自、ら四） 不當の遊興費を請求す。

ボルト［Volt］（名）【理】電力の差、即ち電壓の單位、抵抗一「オーム」の導線に「アムペア」の電流が通ずるとき、其導線の兩端の電位の差に等し。

ボルドー（名）（「フランス」語 Bordeaux）「フランス」國「ボルドー」より產出する上品なる葡萄酒。

ホルトガル（名）（「ポルトガル」國より渡來せし故に名づく） ㊀橄欖油の稱。㊁佛狼機（フッラウキ）の稱。

ホルト‐さうサウ［續隨子］（名）【植】大戟科に屬する草、莖は圓く太くして高さ一二尺、葉は對生す、四瓣黃紫色の花開く、果實は毬狀にして中は褐色の種子を藏す。

ホルト‐の‐あぶら［續隨子油］（名） 「ホルト」さうの種子より採取したる油。

（**ぼ‐れい**［牡蠣］（名） ㊀【動】「かき」に同じ。㊁かきの介殼を燒きて製したる粉末、藥用に供せらる。

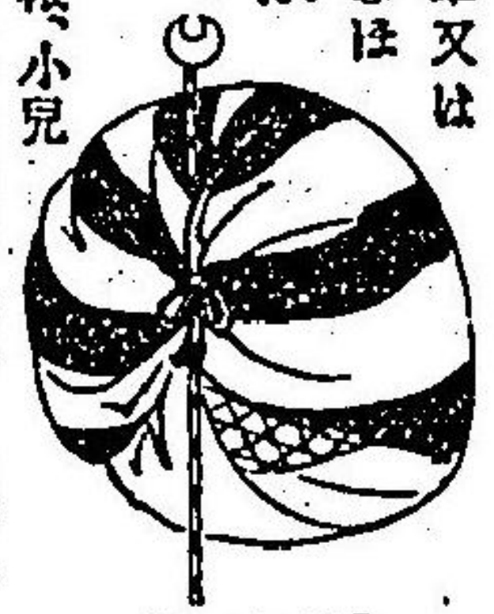
〜**ほれ‐ぐすり**［惚藥］（名） ㊀相手に戀慕の情を催さしむるといふ藥、從來ゐもりの黑燒を用ひたりとぞ。㊁金錢の俗稱。

ほれ‐ぼれ［惚惚］（名、副） いたくほれたるさまにいふ語。

ほれ‐ぼれ・し（しくしくしきしけれ）［惚惚］（形、二） いたくほれたるさまなり。

〜**ほれ・る**［惚］（自） 「ほる」の訛。

ほろ［母衣］（名） ㊀鎧の背に負ひて矢を防ぐ具、竹を骨として、布を被せたる圓きもの、紐にて肩と腰とに結びつく。㊁馬車又は人車などの雨よけのおほひもの。（幌）。 ――**がや**［母衣蚊屋］（名） 竹を骨とし、ほろの形に作りたる小さき蚊帳、小兒などの寐る時に被ひて、蚊又は蠅を防ぐもの。 ――**ばしや**［母衣馬車］（名） 上に母衣を設けたる馬車。



［ほろ(一)］

ぼろ［梵論］（名） ㊀乞食の僧。㊁虛無僧。（暮露、梵論字）。

ぼろ［襤褸］（名） ㊀布帛の用ひふるしてむさくるしくなりたるもの。つゞれ。㊁むさくろしき衣服。つぎはぎの衣服。㊂つたなき個所。缺點。「―を出す」。「―が出る」。

ぼろ‐ぎもの［襤褸着物］（名） むさくろしき衣服。つぎはぎの衣服。

ぼろ‐ぎれ［襤褸切］（名） ぼろの切れ。

〜**ぼろ‐くそ**［襤褸糞］（名） いとねうちなきもの。

ほろし［痱子］（名） 皮膚につぶ〳〵の生ずる小さき瘡。「かさ―」。（瘡疹）。

ほろせ［痱子］（名） 前條に同じ。

〜**ぼろっ‐かひ**カイ［襤褸買］（名） 誰彼の差別なく目下の女に通ずること。

〜**ぼろっ‐と**［襤褸］（名） ぼろきれ。

〜ぼろっ-さぢ[襤褸綴](名) ぼろのきもの。

卄ほろ-ば[保呂羽](名) 鳥の股の下の羽。

ほろ-びき[母呂引](名) 馬上にて母衣を長く垂らし、これを地に曳かざるやうに疾走すること。

ほろ・ぶ[滅、亡](自、は上二) なくなる。うせはつ。たゆ。きえうす。

ほろぼ・す[滅、亡](他、さ四) ほろぶるやうにす。たやす。けす。「城を―」。

ほろ-ほろ(名、副) ㊀こぼれ散るさまにいふ語。㊁もろく破るゝさまにいふ語。㊂雉子の鳴聲のさまにいふ語。

〜ぼろ-ぼろ(名、副) ㊀いたく裂けやぶれたるさまにいふ語。㊁脆(モロ)く裂け破るゝさまにいふ語。㊂こぼれ散るさまにいふ語、「―もつる」。

ぼろ-ぼろ[梵論](名) ぼろ。ぼろんじ。

〜ぼろ-ぼろ(名、副) こぼれ散るさまにいふ語。

ほろ-ミソ[法論味噌](名) 胡麻・麻・山椒などの實を碎(クダ)き入れたる燒味噌の乾したるもの。

〜ほろ-よひ[微醉](名) 「ほろゑひ」に同じ。

——きげん[微醉機嫌](名) ほろよひのこゝちよきさま。

ほろり(名、副) 涙などのおつるさまにいふ語。

ほろり(名、副) 前條に同じ。

ほろろ(名、副) 「はろはろ」に同じ。

卄ほろろ・ぐ[散](他、か下二) ばら〳〵にす。ちらす。

ほろ-ゑひ[微醉](名) 酒にすこしく醉ふこと。

ほ-わた[穗絮](名) 【植】ちがやなどの穗を綿の代用としたるもの。(茅花絮)。

（ほ-ゐ[補遺](名) もれ落ちたるを拾ひて補ふこと。

（ほ-ゐん[母韻](名) 「ぼいん」(母音)に同じ。

（ほん[品](名) 親王に賜はりたる位階の稱。「一―、二―」。

（ほん[本](名) ㊀てほん。原本。㊁しよもつ。書籍。㊂かゞみ。龜鑑。

（ほん―[本](接頭) ㊀或語に冠して、「まこと」又は「正し」の意を表する語。「―物」。「―氣」。㊁或語に冠して、「もと」の意を表する語。「―家」。「―店」。㊂或語に冠して、主の意を表する語。「―部」。「―隊」。㊃或語に冠して、「その」の意を表する語。「―人」。㊄或語に冠して、「この」の意を表する語。「―日」。㊅或語に冠して、自稱の意を表する語。「―官」。

（―ほん[本](接尾) 書物又は長き物を數ふるにいふ語。「二―」。

（ぼん[盆](名) ㊀ひらたき瓦器。ひらか。鉢。㊁ひらたくして緣淺く物を載(ノ)するに用ふる器具。

——をくつがへす[覆盆] 雨のはげしくふるにいふ。

（ぼん[凡](名) ㊀なみ。普通。㊁なみのもの。普通のもの。

ボン[盆](名) ㊀「ウラボン」(盂蘭盆)の略言。㊁盂蘭盆の布施・供物。㊂盂蘭盆の前後の頃。

ボン[梵](名) (梵語 Brahma) ㊀言說すべからず、思惟すべからず、たゞ煩惱を脫したる叡智によりて感知し得らる、絕對惟一の眞理。㊁汚染なきこと、けがれなきこと。㊂梵天(テン)の略言。

ボン―[梵](接頭) 佛敎に關する物事に冠する語。「―刹」。「―妻」。

（ほん-あん[飜案](名) 本來の仕組をかふること。あたらしく立案すること。

（ほん-い[本意](名) ㊀まことののぞみ。まことのこゝろ。(本懷)。㊁根本の意志。

（ほん-いう[本有](名) ㊀本來具有すること。固有。㊁【佛】未來の因となる根本。

——くわんねん[本有觀念=Innate ideas](名) 【哲】本來具有する觀念、又、直接自明の觀念。

（ほん-いつ[奔逸](名) ㊀かけはしること。㊁それはしること。

（ほんうん-ふくう[翻雲覆雨](名) (杜甫の「翻手爲雲覆手雨」の句に出づ)人情の反覆常なきことにいふ語。

（ほん-えい[本營](名) 總大將のゐる軍營。本陣。

（ほん-か[本歌](名) ㊀正しき和歌。狂歌・俳諧などの對。㊁脫化し、模倣したる和歌に對して、そのもとの和歌の稱。「―取り」。

ボン-かく[梵閣](名) テラ。寺院。

（ほん-がく[本覺](名) 【佛】未來の佛性を覺悟すること。佛果を證見すること。

（ぼん-がん[凡眼](名) なみ〳〵の眼識。

（ほん-き[本氣](名) まじめのこゝろ。しやうき。本心。

——にする 信じて疑はず。——になる 決心す。心を確にもつ。

（ほん-ぎ[本紀](名) 紀傳體の歷史にて、帝王の一世の事を主として記したるもの。「高祖―」。

（ほん-ぎ[本義](名) ㊀まことの意義。㊁根本の意義。

ボン-きやう[梵境](名) 寺院の境內。

ボン-ぎやう[梵行](名) 「バラモン」の修行。佛門の修行。淸淨なる行。

（ほん-ぎやく[叛逆](名) 「はんぎやく」に同じ。

（ほん-きよ[本據](名) おもなるよりどころ。

（ぼん-きん[凡近](名) 趣味の乏しきこと。着想の俗なること。

（ほん-きんこ[本金庫](名) 「きんこ」(金庫)の條を見よ。

ほん-くじ[本鬮](名) 賴母子講にて、其醵金の落札者を定むるくじ。花鬮の對。

〜ぼん-くら[凡藏](名) ㊀粗末なる藏。㊁なまけもの、いくぢなし。

ボン-くれ[盆暮](名) 盂蘭盆の頃と年末と。

（ほん-くわ[本科](名) 其學校の主たる科程。

——せいけうゐん[本科正敎員](名) 小學校の一般の敎授課目を敎授することを得る資格の敎員。

（ぼん-ぐわ[盆畫](名) 盆に種々の色に染めたる砂をもてもの、形象を描くこと。又、其描きたるもの。

（ほん-くわい[本懷](名) 本意。本望。「―の至り」。

（ほん-くわん[本貫](名) 原籍。

（ほん-くわん[本官](名) ㊀試補又は見習若しくは假傭等に對して、普通の官職の稱。㊁兼官に對して、其人の主たる官職の稱。

（ほん-くわん[本官](代) 官吏の自稱。

（ほん-ぐわん[本願](名) 本來のねがひ。

（ほん-け[本家](名) 根本の家筋、いへもと。宗家。分家の對。

（ぼん-げ[凡下](名) 身分なき人。たゞの人。

（ぼん-けい[凡計](名) そうかんぢやう。そうじめ。

（ぼん-けい[盆景](名) 盆栽に石などをとりあはせて山水の風景をうつしたるもの。

ほんけ-がへり[本卦囘](名) 六十一歲になりたるときの稱。本命即ち自己の生年の干支と同じ干支の年に再び返れりとの義よりいふ。(還曆)。

（ほん-げつ[本月](名) 當月。

（ほん-げふ[本業](名) 本體の職業。

（ほん-げん[本源](名) もと。みなもと。

ほんけん-の-うつたへ[本權訴](名) 【法】占有の訴に對して、占有權以外の權利の保護を請求する訴の稱。

（ほん-げんぶく[本元服](名) 半元服に對して、元服の稱。

卄ほん-ご[反故](名) ほご。すたれがみ。(破故紙)。

ボン-ご[梵語](名) 印度の古代の言語。「サンスクリット」語。

（ぼん-こう[凡工](名) なみ〳〵のたくみ。又、なみ〳〵の職工。

〜ほん-こく[本穀](名) 仙臺米の稱。(東京地方の方言。)

（ほん-こく[翻刻](名) 版本を其まゝ通りに版に上せて發兌すること。

——もの[翻刻物](名) 翻刻したる書物。

（ほん-ごく[本國](名) ㊀其人の國籍の屬する國。㊁ふるさと。こきやう。

——はふ[本國法](名) 【法】其人の國籍の屬する國の法律。

（ぼん-こつ[凡骨](名) なみ〳〵の器量のもの。

（ほん-さい[本妻](名) 正當の妻。たゞしき妻。むかひめ。妾の對。(正室、大妻、嫡妻)。

（ほん-さい[本才](名) 役に立つ才能。

（ぼん-さい[凡才](名) なみ〳〵の才能。

（ぼん-さい[盆栽](名) はちうゑの草木。はちうゑ。

ボン-さい[梵妻](名) 僧侶の畜ふる妻。だいこく。

（ほん-ざう[本草](名) ㊀くさき。植物。㊁「ほんざうがく」の略言。

——か[本草家](名) 本草學を修むる人。又、本草學に長じたる人。

——がく[本草學](名) 支那古代の植物學。

（ぼん-さく[凡策](名) なみのはかりごと。

ボン-さつ[梵刹](名) 「ボンせつ」に同じ。

（ほん-ざん[本山](名) ㊀一宗の長たる寺。㊁この寺。當寺。

（ほん-ざん[奔竄](名) はしりかくるゝこと。にげかくるゝこと。

ボン-さん[梵讚](名) 梵語のまゝに唱ふる佛德を稱したる文、和讚または漢讚の對。

（ほん-し[本支](名) もとゝわかれと。

（ほん-し[本子](名) 元金と利子と。

（ほん-し[本始](名) はじめ。もと。

（ほん-し[本旨](名) 本來のむね。

（ほん-し[本志](名) ほんい。ほんくわい。

（ほん-し[本紙](名) ㊀附錄に對して、文書の主たる部分のもの。㊁此新聞紙、「―の夙に唱へたる所」。

（ほん-じ[本字](名) 假名に對して、漢字の稱。

（ほん-じ[本事](名) ㊀てなみ。うでまへ。㊁【佛】佛及菩薩の傳記。

（ほん-じ[本寺](名) 本山に同じ。

ボン-じ[梵字](名) 梵天王の作りたりといひ傳ふる印度の文字、其母字を悉曇(シッタン)といひ、子字を體文といひ、體文に添ふる韻の點畫を摩多(マタ)といひ、合はせて摩多體文ともいふ。(悉曇章)。

（ほん-しき[本式](名) ㊀正當に行ふ式。簡略又は違法ならざる式。㊁正當に行ふこと。

（ほん-しけん[本試驗](名) 及落を判ずる主たる試驗。

（ほん-しつ[本質](名) 本體。實質。

（ほん-じつ[本日](名) 當日。今日。

（ほん-しや[本社](名) ㊀主なる神社。末社の對。㊁主たる會社。又、この會社。㊂この神社。

（ほん-しやう[本性](名) ㊀天稟の性質。うまれつき。㊁本氣。本心。「なまゑひ―を忘れず」。

（ほん-しやう[本省](名) ㊀管下の官廳に對して、これを管轄する省の稱。㊁この省。當省。

（ほん-じやう[本城](名) ねじろ。ほんまる。

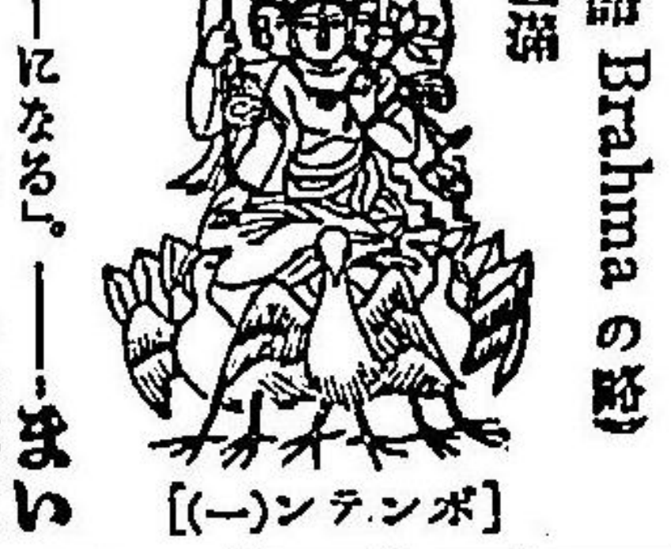
（ほん-しゆ[本主](名) ㊀もと。もち。㊁まことの主人。

(ほん-しゆ［凡手］（名） なみ〳〵のうでまへ。又、其人。
(ほん-ぢゆうしよ［本住所］（名） 生活の本據なる住所。
(ほん-しよ［本初］（名） もと。はじめ。
(ほん-しよ［本書］（名） ㊀正式の文書。㊁主たる文書。㊂原本。㊃この文書。
(ほん-しよ［凡書］（名） なみ〳〵の書。
ボン-しよう［梵鐘］（名） 寺院のかね。
(ほん-しよく［本職］（名） もちまへの職業又は職務。
(ほん-しよく［本色］（名） もちまへの性質。
(ほん-しよく［本職］（代） 官吏などの自稱。
(ほん-しよ-しごせん［本初子午線］（名）【地】地球上に於ける經度測定の基礎とする子午線。一般に「イギリス」國「グリニチ」を通過する子午線を本初子午線とす。
(ほん-しん［本心］（名） ㊀本來のたゞしき心。くらまざるもとの心。㊁本氣。正氣。㊂いつはりかざりのなき心中。
(ほん-じん［凡人］（名） なみの人。つねの人。
ボンス（名）（「オランダ」語 Punch）砂糖・檸檬汁（レモン）及酒精に水を和したる飲料。（橙果汁）。
(ほん-せい［本性］（名） 本來の性。
(ほん-せい［本姓］（名） 其人の生家の苗字。又、其人のまことの苗字。
(ほん-せう［凡小］（名） 器量の小なること。又、其人。
(ほん-せき［本籍］（名） 其人の身分上の所屬せる土地の戸籍。原籍。寄留の對。——ち［本籍地］（名） 其人の本籍の所屬せる土地。
(ほん-せき［盆石］（名） 盆などに石及砂などをとりあはせて山水の景をうつしたるもの。又、これに使用する石。

ボン-せつ［梵刹］（名） テラ。寺院。
(ほん-せん［奔泉］（名） 流れの急なるいづみ。
(ほん-せん［翻然］（名、副）「はんぜん」に同じ。
(ほん-ぜん［本膳］（名） 我國古來の本式の饗膳などにて、飯・汁・肴を具へて第一に供ふる膳。次に雜肴を具へて其左右に供するを、二の膳・三の膳といふ。現時はおもに、飯・汁・燒肴・口取・蓋の五種を整へたるものをいふ。
(ほん-ぜん［本然］（名） 本來然ること。生來然ること。うまれつき。——の-せい［本然性］（名） 儒家にて、人類が一切平等に具有せる自然の性の稱。至善にして汚染罪惡なきものといふ。
(ほん-そ［本訴］（名）【法】反訴に對して、本來の訴訟の稱。（反訴の條を見よ）。
卄ほん-ぞ［本所］（名） ㊀其ところ。㊁わがつかへゐるところ。
(ほん-そう［奔走］（名） ㊀はせまはること。かけまはること。㊁いろ〳〵と周旋すること。
(ほん-ぞう（名）「ほんぞうご」の略言。——ご（名） 父母のいつくしむ子供。「二人が中の——」
(ほん-ぞく［凡俗］（名） ㊀なみ〳〵にして異なるさまのなきこと。又、品ひくゝいやしきこと。㊁さとびたる人。俗人。
(ほん-ぞん［本尊］（名） 寺院にて主とする佛像。ほぞん。
(ほん-たい［本體］（名） ㊀まことのかたち。まことのさま。㊁もと。ねもと。㊂事物の實相。現象の根本。
(ほん-たう［本當］（名） まこと。眞實。（眞正）。
(ほん-だう［本堂］（名） 寺院の主たる殿堂。
(ほん-だう［本道］（名） ㊀正しき道路。㊁漢法醫術にて、內科の稱。

(ほん-たく［本宅］（名） 別宅に對して、常に居住する家の稱。
ほん-だち［本裁］（名） 裁縫にて、並幅一反の布帛にて衣服を仕立つること、即ち大人の衣服の仕立。
ほん-だな［本棚］（名） 書物をのせおく棚。
ほん-だな［本店］（名）「ほんてん」に同じ。
ほん-だはら［馬尾藻］（名）【植】「ほだはら」に同じ。
(ほん-たらう（名） まぬけたる人をあざけりていふ語。
(ほん-たん［奔湍］（名） はやせ。急流。
(ほん-ち［本知］（名） もとの知行所。（舊封）。
(ほん-ち［本地］（名） 本土。本國。
(ほん-ち［奔馳］（名） はせかくること。
(ほん-ぢ［本地］（名）【佛】（い）本門の證果を得たる地位。（ろ）垂跡化身の本體。
(ほん-ち［凡智］（名） なみ〳〵の智慧。
(ほんち（名） 未成年男子の尊稱。（大坂地方の方言）。
ポンチ（名）（「イギリス」語 Punch）西洋の人形芝居のおどけものゝ稱。又、滑稽諷刺の畫。——ゑ（名） 俗に滑稽なる畫の稱。戲畫。
(ほん-ぢ-すゐじやく-せつ［本地垂跡說］（名） 日本の神々は諸佛の垂跡なりといふ神佛混合の說。
(ほん-ぢん［本陣］（名） ㊀大將の居る軍陣。㊁昔時、宿場にて貴人のとまる旅宿の稱。
(ほん-つく（名） まの拔けたる人。
ほん-て［本手］（名） ㊀もちまへの技倆。㊁其道のくろうと。㊂三味線の普通の手。
(ほん-てい［本邸］（名） 控邸又は別邸などに對して、常に住居する家の稱。
(ほん-てう［本朝］（名） ㊀我國の朝廷。（皇朝）。

㊁わが國。「——廿四孝」。
(ほん-てうし［本調子］（名） ㊀三味線の調子、宮の音としたる第二絃の音と徵の甲音としたる第一絃の音と徵の乙音としたる第三絃の音とが、相和したる音、即ち宮と徵との和合の音。「二上り」「三下り」の對。㊁其道のくろうとのなす工合。
(ほん-てん［本店］（名） 支店又は分店などに對して、其主たる店の稱。
(ほん-てん［本天］（名） はん「ビロード」。
(ほん-でん［本田］（名） 苗代田に對して、稻を植うる田の稱。
ボン-てん［梵天］（名）（梵語 Brahma の略）おもに婆羅門教にて祭れる圓滿具足大自在なりといふ神。佛教にてもこれを祭れる宗派あり。㊁修驗道にて、祈禱に用ふる幣束。——ごく［梵天國］（名） 放逐せらるゝこと。「——になる」。——まい［梵天米］（名） のしね。——わう［梵天王］（名）「ボンてん」(一)に同じ。


[ボンテン(一)]

ボンド［Pound］（名） ㊀「イギリス」國の衡量の單位。「アヴォイルヂュポイス」衡にては七千「グレイン」に等しく、我國の百二十一匁に當り、「トロイ」衡にては五千七百六十「グレイン」に等しく我國の九九・五三匁に當る。後者は金銀珠玉の目方を計るにのみ用ひらる。（封）。㊁「イギリス」國の貨幣の名、我國の九圓八十四錢餘に當る。（磅）。
(ほん-なう［煩惱］（名）【佛】㊀無明貪愛のまどひ。情慾願望のまよひ。㊁心神をわづらひなやましむる妄念。——さぎ［煩惱鷺］（名）【動】渉禽類中鷺科に屬する鳥、形鷺に似て小さし。あしごろ。——の-いぬ［煩惱犬］（名） 煩惱のはなれ難きを犬のつきまとふにたとへいふ語。「——は追へども去らず」。
ほん-なほし［本直］（名） 燒酎十石と糯白米二斗八升と麥麴一石二斗との割合にて醸したる酒、風味燒酎に似て稍や甘し。
ほん-に（副） まことに。げに。じつに。
(ほん-にん［本人］（名） 其人。當人。
(ほん-にん［凡人］（名） 平凡なる人。たゞのひと。ぼんじん。
(ほん-にん［犯人］（名） 罪を犯しゝ人。
(ほん-ね［本音］（名） ㊀まことの音色。㊁まことの心をいひあらはす言。「——を吐く」。
(ほん-ねん［本年］（名） ことし。當年。
(ほん-のう［本能］（名） 本來具有せる性能、即ち考察・反省・熟慮等意識的作用をまたず、自然に要求し自然に行動する性能。——しゆぎ［本能主義］（名）【倫】本能の要求は人生の最高目的を表示するものとし、これを滿足せしむるを標準とする主義。——まんぞくろん［本能滿足論］（名）【倫】前條に同じ。
ぼん-の-くど［盆窪］（名） 次條に同じ。
ぼん-の-くぼ［盆窪］（名） 頸の中央の窪（ボク）みたる處。ぼんのこ。ぼんのくど。ぼのくど。頸窩。
ぼん-の-こ［盆窪］（名） 前條に同じ。
ほんのり［仄］（名、副） ほのかなるさまにいふ語。うつすら。
ほん-ば［本場］（名） ㊀本手のあつまる場所。㊁其物のまことの產地。
ボン-バイ［梵唄］（名）（「バイ」は梵語 Bhâsâ）如來を讚歎供養する詞。聲明（シヤウミヤウ）。
(ほん-ばう［本坊］（名） 寺にて、住職の住む處。
(ほん-ばう［奔放］（名） ㊀はせさること。はなれはしること。㊁常規にしたがはざること。ほしいまゝなること。
ほん-ぱう［本邦］（名） 此國。又、我國。（本國）。
ほん-ばこ［本箱］（名） 書籍を入るゝ箱。
ほん-ばしよ［本場所］（名） ㊀「ほんば」（本場）に同じ。㊁東京にて、一年二回相撲（スマフ）協會に屬するすべての相撲取の打集まりて興行する席次定め又は給料定めの相撲。
ほん-ばら［本腹］（名） 本妻の腹に生まるゝこと。又、其生まれたる人。
(ほん-びき（名） ぽっと出のゐなか者などを誘ひて詭計を以て其所持金をまきあぐるもの。（東京の方言）。
(ほん-びやく［凡百］（名） もろ〳〵。
ほん-ビロウド［本天鵞絨］（名） 經（タテ）緯（ヨコ）共に絹絲なる天鵞絨。
(ほん-ぶ［本部］（名） 中樞の部局。
卄ほん-ぷ［品封］（名） 古昔、親王・內親王に賜はりたる封戸。
(ほん-ぷ［本夫］（名） 正當のをっと。
(ほん-ぷ［凡夫］（名） ㊀たゞびと。㊁無智の人。
ポンプ［Pump］（名） 水を高きにあぐるに用ふる機械、即ち押上「ポンプ」吸上「ポンプ」の總稱。みづはじき。（喞筒）。
(ほん-ぶく［本復］（名） 病氣の全快すること。なほること。「——祝」。
(ほん-ぶん［本分］（名） 分際として盡さゞるべからざる責任、即ち道德上の義務。
ボンベン（名）（「オランダ」語 Bom-ben）破裂彈。
(ほん-ぽ［本舗］（名） ほんてん。
(ほん-ぽう［本俸］（名） 加俸などに對して、主た

る俸給の稱。

ぼんぼち-どめ（名）粘氣なくなりたるひね米。

ぼんぼり（名）一種の料理。鯛・鰤・海老等の肉を湯煎にしてほぐし、更に固めて煮出汁をかけたるもの。

ぼんぼり（名）㊀中啓(チユウケイ)の一種。㊁耳の垢を拂(ハラ)ふ小さき具、頭を羽にて造り柄を附けたるもの。みゝはらひ。(消息子)。㊂紙張りのおほひある手燭。(雪洞)。

ぼん-ぼん（名、副）物のふるひ鳴る音のさまにいふ語。

ぼん-ぼん（名）一種の菓子。砂糖にて固め、中に種々の液汁を入れたるもの。

〔ぽん-ぽん（名、副）㊀怒氣をふくみて、ことばのあらきさまにいふ語。㊁鼓を打つ音のさまにいふ語。㊂花火などの打つゞけに上がるさまにいふ語。㊃「ぽんぽんどけい」の略言。

〔ぽん-ぽん（名）おなか。はら。(小兒の語)。

〔ぼんぼん-どけい（名）大形の振子時計。其音の「ぼん〳〵」と聞ゆるよりいふ。

〔ほん-ま［本馬］（名）宿場の駄馬の一駄、即ち三十六貫目の稱。

ほん-ま［本眞］（名）まこと。ほんたう。

〔ほん-まう［本望］（名）本來ののぞみ。もとよりのこゝろざし。

〔ほん-まつ［本末］（名）もとゝすゑと。はじめとをはりと。

ほん-まつり［本祭］（名）正式に行ふ祭典。かげまつりの對。

ボン-まへ(マエ)［盆前］（名）盂蘭盆に近き頃。

ほん-まる［本丸］（名）城の內郭、即ち主將の居る處。ねじろ。(本城、牙城)。

〔ほん-みやう［本名］（名）まことの名。

〔ほん-みやう［本命］（名）生れたる年の干支。(元命)。――しやう［本命星］（名）【佛】北斗七星に金輪星・妙見星を加へての稱。

〔ほん-む［本務］（名）おもなるつとめ。主たるつとめ。

〔ほん-めい［奔命］（名）命令によりてあちらこちらに奔走すること。

〔ほん-めい［本命］（名）「ほんみやう」に同じ。

〔ほん-もん［本文］（名）㊀文中の主たる文句。㊁古書などの典故とすべき文句。(典語)。

〔ほん-もん［本門］（名）【佛】本有の妙理を明かにする法門。

ほん-や［本屋］（名）㊀母屋(オモヤ)。㊁しよもつや。書肆。(書林)。

〔ほん-やく［飜譯］（名）他國の語を自國の語になほすこと。――くわん［飜譯官］（名）外國文書の飜譯をつかさどる高等官。――けん［飜譯權］（名）或著作物の飜譯をなし得る特權。

〔ぼん-やり（名、副）㊀分明ならぬさまにいふ語。(朦朧)。㊁勇氣くじけたるさまにいふ語。(茫然)。㊂才氣の利(キ)かぬさまにいふ語。

〔ぼん-やり（名）才氣の利かぬもの。うすのろ。

〔ほん-よう［凡庸］（名）つね。なみ。

ほん-よみ［本讀］（名）新作物の芝居を興行する前、出席する役者を集め、其脚色の正本(シヤウホン)を讀み聞かすること。

〔ほん-らい［本來］（名）㊀とも。元來。㊁あたりまへ。通常。「―なれば切って捨つべきなれども」。――くう［本來空］（名）【佛】諸法は本來空にして、無所得なること。

〔ほん-らい［奔雷］（名）(はしるかみなりの義)急流のはげしき水音にいふ語。

〔ほん-りう［奔流］（名）はやせ。

〔ほん-りう［本流］（名）㊀主たる河流。㊁主たる流儀。

〔ほん-りやう［本領］（名）㊀本來の領地。もとの知行所。本知。㊁特色。特質。――あんど［本領安堵］（名）「あんど」(安堵)(三)に同じ。

〔ほん-りよ［凡慮］（名）凡人のかんがへ。

〔ほん-ろう［飜弄］（名）勝手にもてあそぶこと。てだまにとること。

〔ほん-ろん［本論］（名）主たる議論。

ボン-わう［梵王］（名）「ボンてん」に同じ。

〔ほん-ゐ［本位］（名）基本となす標準。――くわ［本位貨］（名）次條に同じ。――くわへい［本位貨幣］（名）國家の貨幣制度上、豫約なき限には、無制限に如何なる巨額の取引にてもこれを以て支拂ひ得る貨幣。大抵其實際價格と法定價格と一致し得るやうに鑄造せらるゝもの、我國の金貨の類これなり。

ぼん-ゑ［盆繪］（名）「ぼんぐわ」に同じ。

ボン-をどり［盆踊］（名）盆に、男女群れあつまりてなすをどり。

ま

ま　唇的鼻音m即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通じて發する音と、母音「ア」との綴音。

ま［間］（名）㊀あひだ。あひ。㊁いとま。ひま。㊂をり。しほ。㊃ざしき。へや。(室)。㊄歌舞の調子。㊅其場の樣子又は面目。「―がわるかった」。

マ［魔］（名）(梵語Maraの略)修道の障碍をなす惡善事に障害を與ふる神。

ま［馬］（名）「うま」の約言。「―屋」。

ま［目］（名）「め」の轉。「―のあたり」。

ま［眞］（名）まこと。「―にうく」。

ま―［眞］（接頭）㊀或語に冠して、まことの意を表はす語。「―心」。㊁或語に冠して、正しき意を表はす語。「―直」。㊂或語に冠して、まじりなき意を表はす語。「―黑」。

ま―［今］（接頭）(「いま」の約言)もっと。も。なほ。「―一つ」。

―ま［間］（接尾）へやを數ふるにいふ語。「ひと―」。

ま（助）未來を示す助動詞なる「む」の變化。「見―はし」。

〔まあ［先］（副）まづ。しばらく。

〔まあ（感）㊀制しとゞむる聲。㊁驚きて發する聲。

まあぢ［眞鰺］（名）【動】「むろあぢ」に對して、普通の鰺の稱。

まあひ(イア)［間合］（名）あひだ。いとま。(間隙)。

〔まあ-まあ［先先］（副）まづ〳〵。

廿まい［烏牛］（名）黑色の牛。

〔まい―［每］（接頭）或語に冠して、其事物ごとにを表はす語。「―年」。「―月」。

〔―まい［枚］（接尾）㊀平たくして薄き物を數ふるにいふ語。「紙五―」。㊁昔時、金銀貨幣を數ふるにいひし語、金一枚は七兩二歩に當り、銀一枚は四十三匁に當たれり。

まい-あさ［每朝］（名）日々のあさ。

まい-か［眞烏賊］（名）【動】するめいかに對して、普通のいかの稱。

〔まい-きよ［枚擧］（名）かぞへあぐること。「―にいとまあらず」。

〔まい-くわい［每回］（名、副）其たびごと。

〔まい-げ［眉毛］（名）「まゆげ」の訛。

〔まい-げつ［每月］（名）つきごと。つき〴〵。――しやうどう［每月章動］（名）【天】太陽の赤緯變化により、黃道に對する地球の極の運行を變化すること、其週期は半個月なり。

〔まい-こ［每戶］（名）いへごと。けんべつ。

〔まい-さい［每歲］（名）まいとし。とし〴〵。

〔まい-さう［昧爽］（名）よあけ。あかつき。ひきあけ。(拂曉)。

〔まい-さう［埋葬］（名）死人を土中に埋(ウヅ)むること。はうむること。

〔まい-ざう［埋藏］（名）埋(ウヅ)めかくすこと。

マイス［賣僧］（名）(字の宋音)㊀商ひする僧侶。㊁僧侶を罵りていふ語。

〔まい-たい［莓苔］（名）こけ。

ま-いちもんじ［眞一文字］（名）まっすぐ。

まいて［況］（副）「まして」の音便。「―いとあるまじき御ことなり」。

〔まい-てう［每朝］（名）まいあさ。

〔まい-ど［每度］（副）いつも。たびごと。たび〴〵。

〔まい-とし［每年］（名）としごと。とし〴〵。

〔まい-にち［每日］（名）ひごと。にち〳〵。――うんどう［每日運動］（名）【天】地球の西より東に自轉するによりて、天體の日々東より西に向ひて運動するが如く見ゆること。

〔まい-ねん［每年］（名）まいとし。

まい-ば［蟠車］（名）「まひば」の轉。(舞羽)。

まい-はだ［槇皮］（名）檜の內皮の稱、舟又は槽(フチ)などの水の漏るゝを防ぐため、あはせめ又はつぎめにつめこむもの。のみ。のめ。

〔まい-ばん［每晩］（名）よごと。每夜。

〔まい-ふく［埋伏］（名）かくれひそむこと。又、かくしひそますこと。

〔まい-ぼつ［埋沒］（名）埋(ウヅ)もれてかくるゝこと。

〔まい-まい［每每］（名、副）いつも〳〵。たび〳〵。(每回、每度)。

廿ま-いみ［眞忌］（名）神事に與る人の殊に謹みてするものいみ。散齋(アライミ)の對。(致齋)。

〔まい-もつ［埋沒］（名）「まいぼつ」に同じ。

〔まい-や［每夜］（名）よごと。まいばん。

マイル［哩＝Mile］（名）「イギリス」國の長さの單位、八〇「チエイン」にして我國の十四町四十三間一尺三寸餘に當る。(英里)。

〔まう［猛］（名）たけきこと。つよきこと。あらきこと。

〔まう［盲］（名）めくら。めしひ。

〔まう［妄］（名）うそ。いつはり。あやまり。

〔まう-あ［盲啞］（名）めくらとおしと。――がくかう［盲啞學校］（名）盲啞を教育する學校。

〔まう-あく［猛惡］（名）たけくしてあしきこと。

〔まう-う［猛雨］（名）はげしきあめ。

〔まう-か［孟夏］（名）陰曆四月の異稱。――の-しゆん［孟夏旬］（名）古昔、四月一日に行はれたる公事、臣下に御酒を賜ひ政をきこしめされたり。

〔まう-かく［妄覺］（名）【心】知覺の病的となりて、實在せざる現象の實在せるが如くに見ゆること。

〔まうか・る［設］（らりるるれれ）（自、ら四）得(ト)につく。まうけになる。

まうき-の-ふぼく［盲龜浮木］（名）(法華經に「如一眼之龜値浮木之孔」とあるに出づ)いとあひがたきよき仕合にあふこと。

(まう-きん モウ［猛禽］(名) 猛禽類に屬する鳥。たけき鳥。 ――るゐ［猛禽類］(名)【動】鳥類の一、體軀強剛にして嘴爪共に鋭く上嘴曲がる、強大なる羽翼を有し飛翔迅速なり、性猛悍にして脊椎動物を捕食す、通常僅少の卵を産む、羽毛は雌雄及雛と成鳥とによりて異なり、たか・ふくろふ等これに屬す。

まう・く クモウ〔けけくくるくれけよ〕［設］(他、下二)(「まく」の音便)㊀豫め用意す。かねて支度す。そなへおく。㊁立つ。こしらふ。つくる。

まう・く クモウ〔けけくくるくれけよ〕［儲］(他、か下二) ㊀たくはへて待つ。たくはふ。㊁ひかへとして置く。㊂利益を得。「金を―」。

‡まう・く モウ〔こきくくるくれこよ〕［參來］(自、か變)「まゐく」の音便。

(まう-くわ モウ［猛火］(名) 勢はげしく燃(モ)ゆる火。

(まう-くわん モウ［盲官］(名) 昔時、盲人の官名、檢校・勾當・座頭の類。

まう-け ケモウ［設］(名) まうくること。まうけたるさま。そなへ。

まう-け ケモウ［儲］(名) ㊀そへ。ひかへ。㊁とく。利得。

――の-きみ［儲君］(名) 皇太子の御稱。

ま-うけ［眞受］(名) 眞實として聞き受くること。

(まう-こ モウ［猛虎］(名) たけきとら。

(まう-ご モウ［妄語］(名)【佛】五戒の一、虚言すること。うそをいふこと。

(まう-こう モウ［猛汞］(名)「しようこう」(昇汞)に同じ。

(まう-ざう ソウモウ［妄想］(名) ㊀【佛】正しからざる想念。みだりなるおもひ。㊁淫事など夢みて、我知らず精液をもらすこと。(遺精)。

‡まう-さ・く サウモウ［白、申］(副)「まうす」の延言。

(まう-し モウ［猛士］(名) をのこ。つよきさむらひ。

まうし-あ・ぐ シモウ〔げげぐぐるぐれげよ〕［申上］(他、か下二) 上へ申し出づ。

まうし-あげ シモウ［申上］(名) まうしあぐること。

(まう-しう モウ［孟秋］(名) 陰曆七月の異稱。

(まう-じう モウ［猛獸］(名) たけきけだもの。あらきけだもの。

まうし-う・く シモウ〔けけくくるくれけよ〕［申受］(他、か下二) 願ひて受く。申し請ひて受く。

まうし-うけ シモウ［申受］(名) 申し受ること。

まうし-お・く シモウ〔かきくくけけ〕［申置］(他、か四) いひおく。

まうし-おく・る モウ〔らりるるれれ〕［申送］(他、ら四) 先方へいうてやる。

まうし-ご シモウ［申子］(名) 神佛に祈(イノ)りて授かれといふ子。

まうし-こ・む キモウ［申込］(他、ま四) ㊀人又は團體の中にいひ送る。㊁進んで約束をなす。

まうし-つぎ シモウ［申次］(名) ㊀いひつぎ。㊁とりつぎの人。とりつぎ。

まうし-ひらき モウ［申開］(名) いひひらき。いひわけ。(分疏)。

まうし-ひら・く〔かきくくけけ〕［申開］(他、か四) まうしひらきをなす。

(まう-しふ シウモウ［妄執］(名) みだりなる執念。又、まよへる執念。

‡まうし-ぶみ シモウ［申文］(名) 上申の文書。(奏文)。

まうし-ぶん シモウ［申分］(名) ㊀まうしわけ。㊁非難。「―なし」。

(まう-しや モウ［盲者］(名) めくら。めしひ。(瞽者)。

(まう-じや モウ［亡者］(名) ㊀【佛】死亡したる人。其魂魄の猶は人體をなし、成佛し得ずして冥土にありといふもの。㊁僧家にて、魚の隱語。

(まう-しやう モウシヤウ［猛省］(名) 精神をふるひてよくよく反省すること。

(まう-しやう マウシヤウ［猛將］(名) たけき大將。

(まうじやう-みやく モウジヤウミヤク［網狀脈］(名)【植】葉脈の主脈と支脈との間にありて許多の網狀をなせる細脈。

(まう-じゆう モウ［盲從］(名) 是非善惡にかゝはらずつきしたがふこと。わけもなくつきしたがふこと。

(まう-しゆん モウ［孟春］(名) 陰曆正月の異稱。

まうし-わけ シモウ［申分］(名) いひわけ。いひひらき。(申譯)。

まうし-わたし シモウ［申渡］(名) まうしわたすこと。いひきかせ。いひわたし。

まうし-わた・す シモウ〔さしすすせせ〕［申渡］(他、さ四) 下なるものにいひ告ぐ。いひきかす。いひわたす。

(まう-しん モウ［妄信］(名) みだりに信ずること。あやまり信ずること。

(まう-じん モウ［盲人］(名) めしひ。めくら。ざとう。(瞽者)。

まう・す スモウ〔さしすすせせ〕［申］(自、さ四)(「まをす」の音便)㊀「語る」「いふ」又は「つぐ」の敬語。「申し上ぐ」。㊁ねがふ。請ふ。「申し受く」。㊂爲(ス)・爲(ナ)すを丁寧にいふ語。「御供―」。「知り申さず」。

(まう-せい モウ［猛省］(名)「まうしやう」に同じ。

(まう-ぜん モウ［猛然］(名、副) いきほひたけきさまにいふ語。

(まう-そう-ちく モウ［孟宗竹］(名)【植】竹の一種、太くして、徑尺餘あり、筍は食ふべし、もと支那より渡來せるもの。

‡まうち-ぎみ チモウ［公卿］(名) まへつぎみ。「むつましう、さるべき―たち」。

(まう-ちやう モウチヤウ［盲腸］(名)【生】大腸の條を見よ。

まう・づ〔でぢづづるづれでよ〕［詣］(自、た下二)(「まゐいづ」の音便)㊀「來る」「至る」の敬語。「出で―」。㊁參上す。參詣す。まゐる。

‡ま-うど［眞人］(名)「まひと」に同じ。

‡まう-ど モウ［參人］(名)(「まゐひと」の音便)きやく。まらうど。(客人、賓客)。

(まう-とう モウ［孟冬］(名) 陰曆十月の異稱。 ――の-おゆん［孟冬旬］(名) 古昔、十月一日に行はれし公事、群臣に酒を賜ひ政をきこしめされたり。

まう-に モウ［猛］(副) はげしく。たけく。

(まう-ねん モウ［妄念］(名)【佛】まよへる執念。

‡まう-のぼ・る モウ〔らりるるれれ〕［參上］(自、ら四) 參上す。まゐる。

(まう-まく モウ［網膜］(名)【生】眼球の最内部にありて視神經の分布せる膜。

(まう-もく モウ［盲目］(名) めくら。めしひ。

(まう-ら モウ［網羅］(名) 網を張りたらんやうに殘らず收め入るゝこと。

(まう-らう ロウモウ［孟浪］(名) くはしからざること。おろそか。マンラン。

(まう-りやう モウリヤウ［魍魎］(名) ㊀水の神。みづは。㊁山川の稱。

(まう-れつ モウ［猛烈］(名) 勢のいと烈しきこと。

‡まう-ろく モウ(名) としよりておろかしくなること、おいぼるゝこと、老耄。

(まう-ゐ モウ［猛威］(名) たけき威。

マカ［摩訶］(名)(梵語 Maha)大なること。「―般若」。

‡まが―［禍］(接頭)(曲の義)あしきこと。よこしま。わざはひ。「―事」(邪凶)。

マ-かい［魔界］(名) 惡魔の世界。

‡まが-かみ［禍神］(名) 凶き神。

まが-き［籬］(名) ㊀粗く編(ア)みたる垣。ませがき。㊁遊郭にて、店と入口の落間との間の格子戸。

ま-かげ［目蔭］(名) 手を額にかざして日光を遮ること。 ――を-さす まかげをなす。

‡まが-ごと［禍事］(名) わざはひ。さいなん。

‡ま-がしら［目頭］(名) めの鼻に近き角。まじりの對。

まか・す〔せせすするすれせよ〕［任］(他、さ下二) ㊀その爲すまゝにす。「をしからぬいのちなれども心にし、まかせられねば、うき上にぞふる」。㊁委任す。ゆだぬ。㊂その在るまゝになす。「金にまかせて作る」。

まか・す〔さしすすせせ〕［負］(他、さ四) 負けさす。まくるやうにす。(負)。

ま-かず［間數］(名) 室のかず。

‡ま-かたち［婢］(名) こしもと。そばめ。(侍婢)。

まが-たま［勾玉］(名) 上古、身の裝飾に用ひし玉、多くは瑪瑙質のものにして、形種々あれど、大抵巴の紋の中の一片に似たる形をなす。

‡まか・づ〔でぢづづるづれでよ〕［罷出］(自、た下二) まかり出づ。

(まかつ-きゆう［摩羯宮］(名)【天】十二宮の一。

‡まが-つ-び［禍津日］(名) 凶事の神。まがゝみ。

〜ま-がな-すき-がな(副) 絶えず。つねに。

まかなひ マカナイ［賄］(名) ㊀まかなふこと。㊁まかなひ方。 ――かた［賄方］(名) まかなひを擔當する人。 ――せいばつ［賄征伐］(名) 寄宿舍などにて、寄宿人が結合して賄方をくるしむること。

まかな・ふ ナウ〔はひふふへへ〕［賄］(他、は四) ㊀設けて待つ。設けておく。㊁調へあたふ。あてがふ。㊂食事を調へあたふ。飮食をあてがふ。(饗飯)。

‡ま-がね［眞金］(名) くろがね。てつ。

‡まがね-ふく［眞金吹］(枕)「吉備」に冠らする枕詞。

まが-ひ マガイ［紛］(名) ㊀まがふこと。㊁あやまち。㊂にせてつくりたるもの。

まが・ふ マガウ〔はひふふへへ〕［紛］(自、は四) ㊀まじり亂る。入りみだる。(混)。㊁分け難くあり。

まが・ふ マガウ〔へへふふるふれへよ〕［紛］(他、は下二) ㊀混(マ)ぜ亂す。みだす。㊁似す。(擬)。

マカ-ふしぎ［摩訶不思議］(名) 甚しく不思議なること。

‡ま-かぶら［眶］(名) まぶち。まなかぶら。

まが-へ マガエ［紛］(名) ㊀まがふること。㊁にせてつくりたるもの。

ま-がほ マガオ［眞顏］(名) まじめなる顏。まことらしき顏色。

‡まが-まが・し〔しくしくしきしけれ〕(形、二) ㊀まがごとの如し。さがなし。㊁いまはし。いま〱し。

‡まか-やき［陵苕］(名)【植】「のうぜんかづら」に同じ。(凌霄花)。

‡まかり(名) ㊀なべの類。㊁貝の介殼にてつくりたる杯。

まかり―［罷］(接頭) 動詞に冠してその意義を強むる語。「―ならぬ」「―在り」。

まがり［曲］(名) ㊀まがること。まがるさま。㊁「まがりもち」の略言。

まかり-い・づ〔でぢづづるづれでよ〕［罷出］(自、た下二) ㊀しりぞき歸る。㊁參上す。

まがり-かど［曲角］(名) 道などのをれまがる角。

まがり-がね［曲尺］(名) 工匠の具、直角に折れ曲がれる物差、長き方に一尺五寸の目を短かき方に七寸五分の目を盛りて、勾股弦をうつしたるもの。かねざし。さしがね。(矩)。

まかり-こ・す〔さしすすせせ〕［罷越］(自、さ四) まゐる。ゆく。

‡まかり-ぢ［罷路］(名) 冥途の路。

‡まかり-まう・す マウス〔さしすすせせ〕［罷申］(自、さ四) 暇乞をなす。

まがり-みち[曲路]（名） 折れ曲がれる路。

十**まがり-もち**[勾餅]（名） 米麥の粉を飴に和し、捩ぢ曲げて油にて揚げたるもの。

まか・る（らりるるれれ）[罷]（自、ら四）（離(カ)ルの義）㊀退き去るの敬語。(退)。㊁往來すの敬語。㊂死去す。

〰**まか・る**（らりるるれれ）[負]（自、ら四） 價を減らすことを得。

まが・る（らりるるれれ）[曲]（自、ら四） ㊀かゞむ。屈す。ゆがむ。㊁折る。ねぢく。「ー路」。

ま-かんむり[麻冠]（名）「まだれ」に同じ。

ま-き[眞木]（名） ㊀檜・杉類の總稱。㊁[槇] 松柏科の常綠喬木、葉は松に似て扁く、花は單性なり、材は緻密にして用途廣し。㊂[槇]「いぬまき」に同じ。㊃たきゞ。

まき[牧]（名） 牛馬の類を放しがひにする處。まきば。ぼくぢやう。

まき[卷]（名） ㊀卷物。轉じて書籍。㊁書冊の區分。「下のー」。㊂卷きたるもの又は書籍を數ふる語。

十**ま-き**[間木]（名） なげしの上などに設けたる棚。

十**まぎ**[覓]（名） 求むること。

まき-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[捲上]（他、か下二） ㊀まきて上ぐ。㊁うばひ取る。ふんだくる。

まき-えい[卷纓]（名） 古昔、武官の冠内に卷きたるえい。

まき-がみ[卷紙]（名） 半切紙を接(ツ)ぎあはせて卷きたる紙、手紙を認むるもの。

まき-がり[卷狩]（名） 四方を取り卷きて狩りすること。「富士のー」。

まき-くさ[地膚]（名） [植]「はゝきゞ」に同じ。

まき-じた[卷舌]（名） 東京の下等なる者の言ひぶりの如く、舌を卷くやうにして早口にいふこと。

まき-ずし[卷鮨]（名） 乾海苔又は玉子燒などにて飯をつゝみまきたる鮨。

まき-するめ[卷鰑]（名） 卷きて輪切にしたる鰑。

まき-ぞひ（イーツ）[卷添]（名） 次條に同じ。

まき-ぞへ（エーツ）[卷添]（名） 他人の罪に關係して罪におちいること。かゝりあひ。ひきあひ。連累。

まき-タバコ[卷煙草]（名） 煙草を細長く卷きたるもの、紙卷と葉卷とあり。(雪茄煙)。——**いれ**[卷煙草入]（名） 卷煙草を入れて携ふる具。

まき-ぢく[卷軸]（名） 卷物に同じ。

まき-ば[卷葉]（名） 初生にてまだ開かぬはすの葉。

まき-ば[牧場]（名） まき。ぼくぢやう。

ま-ぎは（ワーキ）[眞際]（名） 物事の切迫せる際(ワキ)。

ま-き-ばしら[眞木柱]（枕）「ふとき」に冠らする詞。

まき-はだ[卷皮]（名）「まいはだ」に同じ。

まき-もの（名） ㊀横に長く表裝したる軸物。卷軸。㊁卷きたる反物。

まき-もめん[卷木綿]（名） 傷所などに卷きつくる綿布。綳帶。

〰**まき-や**[新屋]（名） まきをあきなふ人又は家。

まぎらか・す（さしすすせせ）[紛]（他、さ四） まぎらはす。まぎるゝやうにす。

まぎらは・し（マギラ ワシ）（しくしこしき しけれ）[紛]（形、二） 紛れ易し。まがひやすし。

まぎらは・す（マギラ ワス）（さしすすせせ）[紛]（他、さ四） まぎるゝやうにす。まぎらかす。

ま-ぎり[間切]（名） 琉球にて、もと土地の區劃の稱、現時は行政區劃の一にして、町村より成り郡の管轄に屬す。

まぎり-がはら（ワーガ ワク）[龍骨]（名） 大いなる和船の底の中央に舳より艫に亙りて全體を支ふる材、これにて波を切る。かはら。若き。

ま-ぎ・る（らりるるれれ）[間切]（自、ら四） ㊀波間を切り行く。㊁風を斜めに受けて船を遣(ヤ)る。

まぎ・る（れれるるるれよ）[紛]（自、ら下二） ㊀區別し難くあり。㊁入りまじる。入り移る。「遊びにー」。

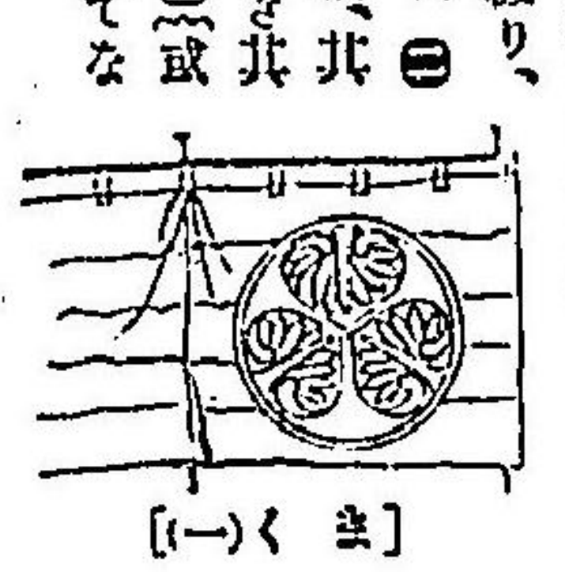
まき-わら[卷藁]（名） 卷き束ねたる藁草、射術を習ふに用ふるもの。

まき-わり[薪割]（名） 薪を割るに用ふる刃物。(劈柴)。

まき-ゑ[撒餌]（名） 鳥又は魚をあつめよするためにまきむく餌。

まき-ゑ[蒔繪]（名） 漆と金銀粉とにて、器物の面に模樣をあらはしたるもの、先づ漆にて模樣を描き、其漆の乾かぬ内に金銀の粉をまきつけ後これを研ぎて光澤を出す、梨地・研出・金貝等其描方の異なるに從ひて種々の稱あり。(描金、泥金、描漆)。——**ゑ**[蒔繪師]（名） 蒔繪を業とするもの。

まく[幕]（名） ㊀長く縫ひ綴り、物に張りて界となす布。㊁芝居にて演藝の一段落の稱、其始まりに舞臺の面に幕を閉さ其終りに幕を引くよりいふ。㊂〰或事件の場所。「手前のでるーでない」。



［まく(一)］

まく[膜]（名） ㊀動物體又は植物體の内にありて、肉又は諸機器をおほふ薄きもの。たなゝ、うすかは。「耳ー」。㊁轉じて、すべて物の面をおほふ薄きものゝ稱。

ま・く（かきくくけけ）[卷、捲]（他、か四） ㊀くるくると圓く曲げ屈む。㊁からみつく。㊂をさむ。

十**ま・く**（かきくくけけ）[枕]（他、か四） ㊀枕とす。㊁同衾せさす。

ま・く（かきくくけけ）[蒔]（他、か四） ㊀撒らし植う。(播)。㊁蒔繪をなす。

ま・く（かきくくけけ）[撒]（他、か四） ㊀ふり撒らす。㊁注(ソ)ぎかく。㊂〰連れの人を途中にて巧に紛らして離れさす。

十**ま・く**（けけくくるくれけよ）[設]（他、か下二） ㊀「まうく」に同じ。㊁向く。「夕方まけて」。

十**ま・く**（けけくくるくれけよ）[任]（他、か下二）（「まからす」の約）地方官に赴任せさす。「大君のまけのまに〳〵」。

ま・く（けけくくるくれけよ）[負]（自、か下二） ㊀力敵せずして敗る。(負)。㊁抵抗すること能はず。㊂かぶる。

ま・く（けけくくるくれけよ）[負]（他、か下二） 直段を引く。(負)。

十**まく**（助動） 未來の義を示す助動詞なる「む」の變化せるもの。「見ーの欲しき」。

ー**まく**[幕]（接尾） 芝居の狂言の段數を數ふるにいふ語。

十**ま・ぐ**（がぎぐぐげげ）[覓]（他、か四） もとむ。たづぬ。

ま・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[曲]（他、か下二） ㊀まがるやうにす。ねぢくるやうにす。㊁理を非になす。法を矯(タ)む。㊂志を折る。說を屈す。

まく-あひ（イーア）[幕合]（名） 芝居にて演藝のなき時、其幕をひきて舞臺をおほふよりいふ。

ま-ぐさ[秣]（名）（馬草の義）牛馬などの飼養の料とする草。かひば。(芻)。——**きり**[秣切]（名） 秣を細く切る具、臺の上に刃物を裝置し、秣を刃物と臺との間に入れ押へて切る。——**ば**[秣場]（名） 秣を刈りとる所。

十**まぐさ**[楣]（名） 門の戸上にわたす横の梁。

〰**まく-ゐるゐ**[膜翅類]（名）[動] 昆蟲類の一、四翅は膜質にして脈少なし、口器は咬(カ)み又は舐(ネ)むるに適す、頭に單眼と複眼とを有し、胸部と腹部との分界明かなり、雌體は完全にして、幼蟲には肢を有せざるもの多し、雌は尾端に產卵器又は螫を有す、即ち、はち・あり等これに屬す。

ま-ぐそ[馬糞]（名） うまのくそ。——**がみ**[馬糞紙]（名） ばふんし。

ま-ぐち[間口]（名） 家屋地面などの表に沿(ソ)ひて測りたる長さ。奥行の對。「ー何間」。

十**ま-くなぎ**[瞬]（名） ㊀またゝき。めくばせ。㊁[動]「かつをむし」の一名。

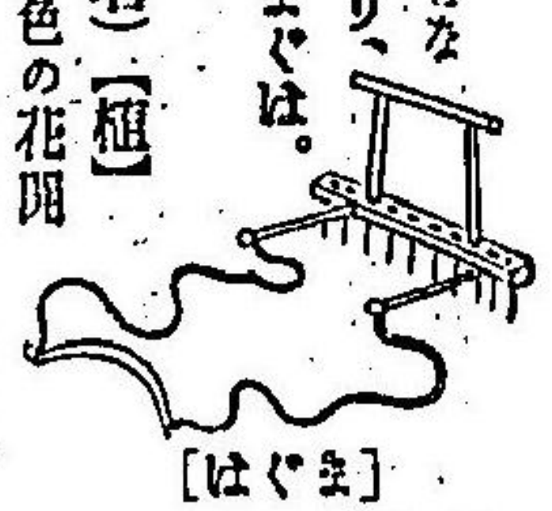
マグネシア（名）[化]（「オランダ語Magnesia」）「マグネシウム」の酸化物、苦味あり、下劑に用ひらる。(苦土)。

マグネシウム[Magnesium]（名）[化] 銀白色の金屬、空氣中にては徐々に酸化して光澤を失ひ、熱すれば強き光を放ちて燃ゆ、炭酸鹽・硅酸鹽として種々の鑛物を成し、ひろく散布す。

マグネット[Magnet]（名） 磁石。

まく-のうち[幕内]（名） ㊀昔時、相撲上覽の時、殊に勝れたる力士數人の幕の内に伺候せし者の稱。㊁轉じて相撲番附の上欄に名を掲ぐる上級の力士の稱。㊂其社會の高地位のもの。㊃〰肥大なる婦人をのゝしりていふ語。㊄〰芝居の辨當。(東京の方言)。

ま-ぐは（ワーグ）[馬鍬]（名） 水田をならす具、上に柄あり下に齒あり、牛馬に牽(ヒ)かせて使用す。うまぐは。(馬杷、耙)。



［まぐは］

まくはうり（マク ワー）[眞桑瓜]（名）[植] 葫蘆科に屬する草、夏の頃黄色の花開く、果實は楕圓狀にして甘味を有し、食用に供せらる。あぢうり。あまうり。(甜瓜)。

十**ま-ぐはし**（ワーグ ワシ）（しくしこしき しけれ）[眼妙]（形、二）（目妙(マグハシ)の義）美妙なり。うつくし。うるはし。

十**ま-ぐはひ**（ハイ ワーグ）[交接]（名） 男女の閨中のまじはり。(交合)。

まく-ばり[幕張]（名） 幕を張りたる處。

ま-くばり[間配]（名） まくばること。

ま-くば・る（らりるるれれ）[間配]（他、ら四） あちらこちらへくばりわく。

まく-や[幕家]（名） 幕を四方に張りたる家。

ま-くら[枕]（名）（纏座(マキクラ)の義）㊀寐るに頭を支ふる具。㊁寐ること。「旅ー」。㊂頭部。上部。㊃上りどころ。たね。㊄すべて横になりたるものゝ下に置きて、これをさゝへもたする爲に用ふるもの。㊅〰落語家が、其咄の初に添へていふ短かき咄。——**かけ**[枕掛]（名） 枕に掛けて枕と肩とのすきさまを被ふ小さき蒲團。——**がたな**[枕刀]（名） 枕邊に用心のためにおく刀。——**がね**[枕金]（名） 遊女身請の手附金。——**がへし**（エーガ シ）[枕返]（名） ㊀枕の位置をかふること。㊁重ねたる枕をさま〴〵に弄ぶ遊戲。——**がみ**[枕上]（名） まくらもと。(枕邊)。——**がみ**[枕紙]（名） ㊀木枕の上の小枕を包む紙。㊁枕邊に置く紙。——**がみ**[枕神]（名） 夢枕に立つといふ神。——**ぎ**[枕木]（名） 横になりたるものゝ下にかひおく木。「鐵道のー」。——**きん**[枕金]（名） 藝妓と情交の約をなすために出す金。十——**ごと**[枕言]（名） 平常いひならはせる言葉。又、典故とする言葉。——**ことば**[枕詞]（名） 或語に冠らする一種の修飾語、多くは語を調ふるに用ひらるゝもの。「ひさかたの天」「ちはやぶる神」などの「ひさかた」「ちはやぶる」の類。(冠辭)。——**ざうし**（ワーツ）[枕草紙]（名） ㊀隨筆。㊁春畫の册子。——**さがし**[枕探]（名） 旅客の寐ねたる中に其紙入などを盜むもの。——**だち**[枕太刀]（名） まくらがたな。——**なほし**（オーナ シ）[枕直]（名） 產婦の產蓐を出て、平素の起居狀態に復する祝事、分娩後二十日目に行ふを普通とす。——**ひき**[枕引]

(名) 一種の遊戲、一つの木枕を兩人共に指先に持ちて引きあふこと。――びやうぶ[枕屛風](名) 枕頭にたてゝおく小屛風。(臥屛)。――もと[枕頭](名) 寢て居る枕の邊。枕上。――ゑ[枕繪](名) 春畫。――をかはす 同衾す。――をたかくす[高枕] 安心して寐ぬ。

十まくら・く[枕](他、か四) 枕とす。

まくり[海仁草](名) ㊀[植]褐色藻科に屬する海藻、黑黃色にして長さ一二寸、微毛あり、どくまくりの原料とす。(鷓鴣菜)。㊁胎毒を下すため生兒に飲ますする一種の藥、海藻のまくりと甘草とを合せたるもの、これを湯に浸(ひた)して使用す。どくまくり。

まくり[捲](名) ㊀まくること。㊁貼(は)りたりし書畫などをはがしたるもの。――で[捲手](名) うでまくり。そでまくり。

まく・る[捲](他、ら四) ㊀まきて揚ぐ。まきあぐ。㊁はがす。はぐ。㊂はらひ除(の)く。おひはらふ。

まぐ・る[紛](自、下ら二) まぎる。

まぐれ[紛](名) まぐるゝこと。「氣―」。――あたり[紛中](名) 偶然にあたること。――ざいはひ[紛幸](名) こぼれざいはひ。

まぐろ[鮪](名) (眞黑の義)[動]硬鰭類中さば科に屬する魚、體軀は楕圓形にして肥滿す、脊部は蒼黑色、腹部は銀白色にして黃色の斑點あり、體長六尺餘に達するものあり、我國太平洋に面する東北の沿岸に多く產す。――なべ[鮪鍋](名) 一種の料理、鮪の肉と葱などを汁多く煮たるもの。――ぶし[鮪節](名) 鮪の肉を煮乾したる節。

十まけ[任](名) 地方官に任ずること。「―のまに〳〵」。

十まけ[目氣](名) そこひ。(眚)。

まけ[負](名) ㊀まくること。敗北。㊁價を減(へ)らくこと。

まけ[族](名) やから。たぐひ。「平家の―」。

まげ[曲](名) ㊀まぐること。㊁わげ。(髻)。

十まけ・いくさ[負軍](名) まけとなりたるいくさ。

十まげ・いほ[曲庵](名) まがりたる小さき家。

まけ・いろ[負色](名) 負けなんとする樣子。負けかゝるけしき。(敗色)。

まけじ・ごころ[不負心](名) 次條に同じ。

まけじ・だましひ[不負魂](名) 人に負けじといきばるたましひ。勝氣(カチキ)の強き心。

まけ・ず・おとらず[不負不劣](副) 互に優劣なく、雙方同じやうにはりあひて。

まげ・て[枉](副) 無理に。強ひて。

まげ・もの[曲物](名) ㊀わげもの。㊁質ぐさ。質いれ。

まけ・ばら[負腹](名) まけたるために腹立つこと。

〔まける(自) 「まく」の訛。

〔まける(他) 「まく」の訛。

〔まける(他) 「まぐ」の訛。

十まけ・わざ[負業](名) 勝負に負けたる方より饗應すること。「はりまの守非の―しける日」。

〔まけ・をしみ[負惜](名) 負けたるを口惜しがりて強情を張ること。

〔まけん・しやう[不負性](名) まけじだましひ。

（まこ[麻姑](名) 指の爪いと長しといふ仙人。轉じて、痒の手。――かゆきをかく[麻姑搔痒] 物事のゆきとゞくにいふ。

まご[孫](名) (「うまご」の約)子の子。

まご[馬子](名) うまかた。

まごころ[眞心](名) ㊀いつはりなき眞實の心。正直にしてわだかまりなき心。㊁其物事にのみ注(ソソ)ぎて他に移らざる心。まことに其ものを思ふ心。

まごたらう・むし[孫太郞蟲](名) [動]翅類に屬する昆蟲、體軀は紡錘形をなし、池水に浸する水草などに附着し、小蟲を捕食す、磐城國刈田郡齋川より多く產出す、小兒の疳の藥に用ひらる。

〔まどつ・く(自、か四) まよひてぐづ〳〵す。まどひてうろ〳〵す。

まこと[實](名) ㊀いつはりにあらざること。かりにあらざること。虛妄にあらざること。(眞)。㊁いつはらざること。かざらざること。あざむかざること。(誠)。

まこと[實](副) じつに。げに。

十まこと・し[實](形、二) まことらし。まことしやかなり。

まことし・やか[實](名) まことらしくあるさま。

まこと・に[實](副) 實に。げに。(誠)。

まご・の・て[孫手](名) 先端に小さき指の爪に似たる形のものをつくりつけたる棒、背の手の屆かぬ部分などを搔(か)くに用ふるもの。(麻姑、爪杖)。

ま・ごひ[眞鯉](名) [動]緋鯉に對して、黑鯉の稱。

まご・びさし[孫廂](名) 母屋の廂(ヒサシ)の外に、更に添(ソ)へたる庇。

〔まご・まご(名、副) まごつくさまにいふ語。

まご・まめ[孫豆](名) [植]「いんげんまめ」に同じ。

ま・こも[眞菰](名) [植]禾本科に屬する草、池沼に生ず、高さ二三尺、葉は披針形にしてしやうぶに似たり、秋の頃、花梗長くのびて小花開く。こも。かつみ。はながつみ。――ずみ[眞菰墨](名) 秋の頃、まこもの根に生ずる菌の如き芽。こもづの。

十ま・ごやし[苜蓿](名) [植]「うまごやし」の古稱。

まさ[正](名) ㊀「まさめ」の略言。「桐の―下駄」。㊁「まさめがみ」の略言。

ま・さか[目前](名) まのあたり。めのまへ。――のとき[目前時](名) 事態の目前にせまりたる場合。急迫の場合。

〔まさか(副) よもや。やはか。――に(副) 前條に同じ。

ま・さかり[鉞](名) (眞折刀(マサキリ)の義)大形なる斧、中古には兵器として使用したり。

ま・さかり[眞盛](名) 最もたけなはなる時。眞最中。

十ま・さき[眞折](名) [植]「まさきのかづら」に同じ。

まさき[柾](名) [植]衞矛科に屬する灌木、葉は楕圓形をなして對生し、花は兩全なり、秋南天燭の如き淡紫色の實を結ぶ、觀賞用として栽培せらる。

十まさき・く[眞幸](副) 「さきく」に同じ。「―あらばまたかへりみむ」。

十まさき・づら(名) [植]次條に同じ。

十まさき・の・かづら[眞折葛](名) [植]常綠なる蔓草の稱。

十まさぐ・る[弄](他、ら四) もてあそぶ。

ま・さご[眞砂](名) 細かき砂。まなご。すな。

まさ・し[正](形、二) まことなり。たしかなり。たゞし。

（まさつ[摩擦](名) ㊀すれあふこと。又、こすること。㊁[理]一物體が他の物體の上に運動せんとするとき、其接觸面に於て受くる抵抗、二物體間の壓力に關し接觸面の大さに關せず。――おん[摩擦音](名) [文法]子音の一、調聲器の一部非常に狹まりて、通過する空氣の摩擦して起る聲音、喉的摩擦音・顎的摩擦音・脣的摩擦音に分つ。――でんき[摩擦電氣](名) [理]摩擦によりて生ずる電氣。陰電氣。――りよく[摩擦力](名) [理]摩擦の力。

まさ・つち[正土](名) とこつち。(床土)。

十まさで・に[正](副) まさしく。たしかに。

十まさな・ごと[正無事](名) まさなき事。兒戲に類したる事。

まさな・し[正無](形、二) 宜しからず。よくなし。

まさ・に[正](副) ㊀まさしく。たしかに。㊁あたかも。丁度。(方)。㊂かならず。きつと。(漢文にては當又は應の字を用ひ、「べし」と返へし讀む)。㊃すんでのことに。ほとんど。(漢文にては將の字を用ひ、「す」と返へし讀む)。㊄いかでか。あに。

〔まさ・まさ・と(副) あり〳〵と。まさしく。

十まさ・め[正眼](名) まのあたり。

まさ・め[正目](名) 眞直(マツスグ)に通りたる木理。――がみ[正目紙](名) 質厚くして色白き上品なる杉原紙、多く錦繪を刷(ス)るに用ふるもの。

まさ・ゆめ[正夢](名) 實事と符合する夢。

ま・さる[眞猿](名) [動]「さる」に同じ。

まさ・る[增](自、ら四) 數增す。增加す。ふゆ。くはゝる。

まさ・る[勝](自、ら四) こえ出づ。すぐる。ひいづ。

まざ・る[雜](自、ら四) まじる。混ず。

まし[增](名) ㊀ますこと。增加。㊁まさりてあること。

十まし[猿](名) [動]「ましら」の略言。

十まし[汝](代) 「いまし」の略言。

まし(助動) 過去の推量又は願望の意を表はす語。

まじ[蠱](名) 「まじもの」の略言。

まじ[助風](名) 西南の海の方より來る風。ひかた。

まじ(助動) 推量又は願望の意を表はす打消の語。まい。

まし・か・ば(助動) 助動詞「まし」の已然法に「ば」を添へたるもの、多く過去の事を推量するに用ひ、下は必ず「まし」にて結ぶ。「人しれずたえな―わびつゝも、なき名とだにもいはましものを」。

〔まじく・なふ(他、は四) 誤魔化す。

〔まじ・く・る[蠱](他、ら四) まじにあつ。蠱にかゝらす。

まし・こ[猿子](名) [動]「ましこどり」の略言。――どり[猿子鳥](名) [動]燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀に似、全身灰色にして翅に黑色の斑あり、胸腹は淡紅色を呈し嘴は短くして赤黑色なり、鳴聲喧し。

十まじこ・る[蠱](自、ら四) まじにあたる。厄に遭(ア)ふ。

まし・する[增錘](名) 竿秤の端に加ふるおもり。

まし・て[況](副) なほさら。ことさら。いはんや。

まじ・なひ[呪禁](名) まじなふこと。又、まじなふ術。(厭勝)。

まじ・な・ふ[呪](他、は四) 神佛の通力其他或一種の神祕力に因りて、災厄を免れ若しくは災厄を下さんことを祈禱す、蠱(マジ)の法術を行ふ。

ま・しば[眞柴](名) 柴。

まじはり[交](名) ㊀つきあひ。よしみ。交際。㊁男女の交合。

まじは・る[交](自、ら四) ㊀入り亂る。入りあふ。まじる。㊁ゆきあふ。交叉す。㊂よしみを結ぶ。交際す。つきあふ。㊃交合す。

まじ・ふ[交](他、は下二) ㊀入れ合はす。まず。(雜)。㊁交叉せさす。

〔まじへる(他) 「まじふ」の訛。

〔まじ・まじ(名、副) まばたきするさまにいふ語。まんじり。

まします[坐](自、さ四) 「ます」を尚ほ一層敬意を表していふ語。おはします。

まし・みづ[增水](名) 水のふゆること。みづて。出水。

まじ・め[眞面目](名) ㊀本氣なる顏色。精神をこめたるおももち。㊁精神をこむること。本氣なること。

――がほ［眞面目顏］（名）前條（一）に同じ。

〔――**くさ・る**（らりるるれれ）［眞面目臭］（他、ら四）いと眞面目なるさまをよそほふ。

＋**まじ・もの**［蠱物］（名）災厄の人にかゝるやうに祈禱するを、又、其術。（蠱術）。

ま-しやう（シヤウ）［眞正］（名）まこと、まじめ。

ま-しやく［間尺］（名）㊀作事の寸法。ましやく。㊁（計算。「―に合はず」。

〔**ま-しよく**（名）「ましやく」に同じ。

〔**まじゆ**［交］（他）「まじふ」の訛。

マ-じゆつ［魔術］（名）不思議なる術。あやしき術。

＋**ましら**［猿］（名）【動】「さる」に同じ。

＋**ま-しらげ**［眞精］（名）上等の白米。（精米）。

＋**まじらひ**（マジワイ）［交］（名）つきあひ。まじはり。

＋**まじら・ふ**（マジラウ）（はひふふへへ）［交］（自、は四）（「まじる」の延言）㊀まじる。まざる。㊁交際す。つきあふ。

＋**ま-じり**［眦］（名）まなじり。めじり。

まじり［雜、混］（名）まじるを、まじりたるもの。――**け**［雜毛］（名）まじりある他の毛。――**だね**［雜種］（名）異なる種の相雜りてあるを。純粹の種類にあらざるを、又、其もの。あひの子。「―の犬」。――**もの**［雜物］（名）まじり入りたる他のもの。

まじ・る（らりるるれれ）［雜、交］（自、ら四）㊀入り合ふ。混ず。㊁＋わけいる。いりこむ。「野山に―」。

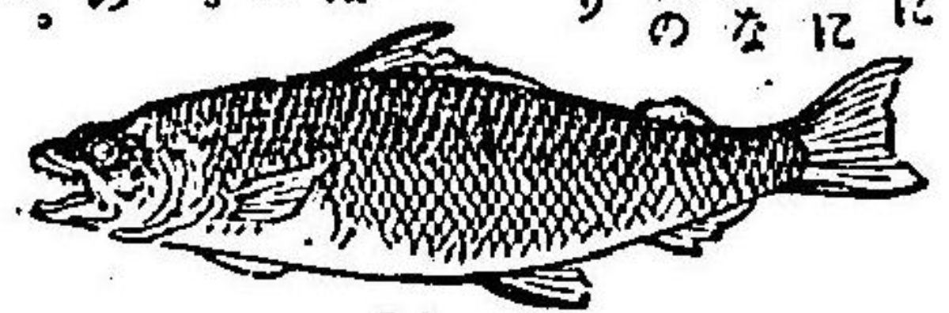
＋**ま-じろ・ぐ**（がぎぐぐげげ）［瞬］（自、か四）（目退ぐの義）めはたきす。またゝく。

＋**まじ-わざ**［蠱事］（名）まじもの、法。まじなひ。（呪咀、禁厭、符呪）。

（**ま-しん**［痲疹］（名）「はしか」に同じ。

マ-しん［魔神］（名）人に禍する神。まがつひ。

ます［鱒］（名）【動】喉鰾類中さけ科に屬する魚、形さけに似、背部は濃藍色にして側線下は銀白色を呈す、體長大なるは二尺餘に達す、多く我國の東北の河湖の間に產す、夏の頃河に遡（サカノボ）りて子を產む。（鱒、赤眼魚、鮅魚）。



［ます］

ます［枡］（名）㊀（數を增す義）穀量又は液量を計る器、從來我國にて用ふるは、木を以てつくりたる方形のもの。㊁枡にて量りたる量。ますめ。「―がからい」。㊂芝居にて、見物人の居る處に枡形の區劃を設けたるもの。㊃樋の相接する所に設けたる箱。

ま・す（さしすすせせ）［坐］（自、さ四）㊀「ゐる」「在り」の敬語。㊁「行り」の敬語。㊂或動詞に添へて、敬意を表する語。「出でませる君」。

ま・す（さしすすせせ）［增、益］（自、さ四）加はる。多くなる。「ふゆ」。

ま・す（さしすすせせ）［增、益］（他、さ四）多くす。加ふ。ふやす。

ま・す（さしすすせせ）［巾］（他、さ四）「まうす」の約言。

ま・す（せせすするすれせよ）［老成］（自、さ下二）年齡より大人ぶ。およずく。ねぶ。「ませたりとしも見えぬ君かな」。

ま・ず（ぜぜずずるずれぜよ）［交、雜］（他、さ下二）入れ合はす。まじふ。（混）。

ます-おとし［枡落］（名）枡をそばだて、中に餌をおきて鼠を誘ひ、鼠來りて其端を踏めば、枡は直に倒れてこれを覆（オホ）ひかぶする裝置なるもの。

ます-かがみ［十寸鏡］（名）「ますみかがみ」に同じ。

ます-かがみ［十寸鏡］（枕）「照る」「とぐ」「磨き」に冠らする詞。

ます-かき［枡掻］（名）「とかき」に同じ。

ます-かけ［枡掛］（名）手のすぢの掌（テノヒラ）を横につらぬきたるもの。

ます-がた［枡形］（名）㊀枡の如き形。㊁「とがた」に同じ。㊂城郭の狹くして方形をなしたる所。

マスク［Mask］（名）「ベースボール」にて捕手の用ふる面。

ますぐ［眞直］（名）すこしもまがらざるを。いとなほきと。

ますぐに［眞直］（副）㊀いとなほく。㊁わきめもふらずに。一心に。

ます-ざ［桝座］（名）德川時代に、免許を得て枡を製造せし所。

マスト［Mast］（名）ほばしら。

〔**ます-のみ**［枡吞］（名）枡に盛りはかりたる酒を其まゝ口をつけてのむを。

＋**ま-すほ**［眞赭］（名）「まそほ」に同じ。

ます-ます［益］（副）いやましに。ましにまして。いよいよ。（倍、增）。

ます-め［枡目］（名）枡にてはかる量。

ますら-たけを［益荒猛男］（名）「ますらを」に同じ。（丈夫）。

ますら-を［丈夫］（名）剛勇なる男子。をゝしき男子。ますらたけを。（益荒男、武夫、健男）。

（**ま-すゐ**［痲醉］（名）酒又は藥のために、痺（シビ）れて感覺を失ふを。――**ざい**［痲醉劑］（名）痲醉せさするために使用する藥劑。――**やく**［痲醉藥］（名）前條に同じ。

＋**ませ**［籬］（名）㊀厩の入口を塞ぐ棚。㊁竹木にてつくれる目のあらき垣。まがき。㊂精靈棚の飾りに境界とする杉の籬。

ませ-がき［籬］（名）㊀「ませ」に同じ。

〔**ませ-かへし**（カエシ）［雜返］（名）まぜかへすを。

〔**ませ-かへ・す**（カエス）（さしすすせせ）［雜返］（他、さ四）㊀かきまず。かきまはす。㊁差出口をいひ嘲弄す。

〔**ませ-く・る**（らりるるれれ）［雜繰］（他、ら四）前條に同じ。

〔**ませ-とせ**（名）入れまじへたるを。

ませ-ば［座］（助動）助動詞「まし」の變化にして「ましかば」と相對するものなるべし、多く過去の推量に用ひ下は必ず「まし」にて結ぶ。「くやしかもかく知らーあをによしくぬちことごと見せましものを」。

〔**ませる**［老成］（自）「ます」の訛。

〔**ませる**［雜］（他）「まず」の訛。

＋**ま-そ-かがみ**（枕）「ますかがみ」に同じ。

＋**ま-そほ**（オ）［眞赭］（名）㊀あか色のつち。㊁赤色。

また［叉］（名）（兩立の義）幹より枝の分かれ出でたる處。

また［胯］（名）股と股との間。またぐら。（股）。

マタ［摩多］（名）（梵語Matrka、母の義）梵字の點畫。

また［亦］（副）これもかれとひとしく。おなじく。「これも―惡し」。

また［復］（副）さらに。かさねて。ふたゝび。「あす―見ん」。

また［又］（接）しかのみならず。其上に。其外に。（還）。「―其上に妹まで」。「山―山」。

まだ［未］（副）「いまだ」の略言。

また-いとこ（名）互に親がいとこ同士の相方の子の關係。再從兄弟。三從兄弟。

マ-だう（ドウ）［魔道］（名）惡魔のみち。あしきみち。

また-うけ［復請］（名）かさねての保證。

また-うつし［復寫］（名）寫したるものをかさねて寫すを。（轉寫、傳寫）。

また-がし［復貸］（名）己の借りたるものを他へ貸すを。（轉貸）。

また-がり［復借］（名）人の借りてあるものをまた借るを。（轉借）。

またが・る（らりるるれれ）［跨］（自、ら四）㊀一方より一方へ亙る。「富士山は二國に―」。㊁股をひろげて乘る。

また-ぎ［叉木］（名）またになりたる木。

＋**まだき**［夙］（名、副）未だ其時期に達せざる時。はやきとき。「わが名は―立ちにけり」。

また-ぎき［復聞］（名）聞きたる人より聞くを。

＋**まだき-に**［夙］（副）未だ其の時に至らぬ先に。はやくより。（豫）。

＋**またく**［全］（副）「まったく」に同じ。

＋**また・く**（かきくくけけ）［急］（自、か四）いそぐ。はやる。

また・ぐ（がぎぐぐげげ）［跨］（他、か四）股をひろげ張りて其上を超（コ）ゆ。

また・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）［跨］（他、か下二）前條に同じ。

〔**また-ぐら**［胯］（名）「また」に同じ。

ま-だけ［眞竹］（名）【植】竹の一種、高さ六七丈、周圍一尺五六寸に達するものあり、節は他の竹に比すれば間長く、五月頃に筍を出だす、莖及籜（カハ）は種々の用に供せられ、筍は食用に供せらる。

＋**また-げらい**［復家來］（名）家來の家來。ばいしん。

＋**また・し**（くしきしけれ）［全］（形、二）（眞足の義）かけたる處無し。そろひてあり。まったし。

＋**まだ・し**（くしくしきしけれ）［未］（他、形二）未だ其時機にいらず。未だ境域に達せず。いまだし。

また-しても（副）こりずまに。かさねて。

まだ-しも（副）また左程にはあらざれど。

＋**まだ・す**（さしすすせせ）［獻上］（他、さ四）たてまつる。さしあぐ。

また-ぞろ［復候］（副）またもや。ふたゝび。

また-たき［瞬］（名）㊀またゝくを。めばたき。まじろき。㊁極めてわづかなる時間。

また-た・く（かきくくけけ）［瞬］（他、か四）（目叩（マタタク）の義）㊀上下の瞼（マブタ）を開合せさす。めばたきす。㊁まじろく。㊂＋瞑目せずしてあり。ながらへてあり。㊃＋ひらめく。――**あひだ**（アイダ）［瞬間］（名）またたく時間。――**うち**［瞬中］（名）前條に同じ。――**ひま**［瞬間］（名）前條に同じ。

また-だのみ［又賴］（名）仲に人を立て賴むを。

またたび［木天蓼］（名）【植】猿猴桃科に屬する灌木、葉は楕圓形にして尖り、細き鋸齒を具す、梢葉は夏日往々白色を呈す、花は白色にして梅花に似、果實は細長くして尖り藥用に供せらる。（藤天蓼、辛椎、蒟醬）。

〔**また-と**［又、復］（副）㊀此外に。「―あるまい」。㊁ふたゝび。「―行くまい」。

また-どなり［又隣］（名）隣のとなり。

また-ね［復寐］（名）一旦覺めてふたゝび寐るを。

また-の-あした［又朝］（名）翌朝。あくるあさ。

また-の-とし［又年］（名）翌年。

また-の-な［又名］（名）別の名。一名。

また-の-ひ［又日］（名）㊀翌日。㊁後日。

また-の-よ［又世］（名）再び此世に生れ出でたるとき。來世。（再世）。

また-ぶり［杈椏］（名）叉（マタ）をなせる木の枝。

また-また［復復］（副）かさねて。

また-また［又又］（接）其上に。

また-もの［又者］（名）またげらい。陪臣。

マダラ［曼陀羅］（名）（梵語Mandalaの轉）淨土の實相の圖。

マダラ［斑］（名）（前條の轉）種々の色の入り雜りたるもの。ぶち。＋――**うり**［斑瓜］（名）【植】瓜の一種、果皮に黃色の斑あるもの。――**ぐも**［斑蜘蛛］（名）【動】女郎蜘蛛の一名。――**だけ**［斑竹］（名）【植】「はんちく」に同じ。――**まく**［斑幕］（名）一幅ごとに色の異なる布を用ひて縫ひたる幕。だんだらすぢの幕。（斑幔）。

マダラ-おん［摩多羅神］（名）【佛】天竺の神、常行三昧の守護神といふ。

まだる・し［間怠］（形、二）手間取りて遲し、てぬるし、緩漫なり。

〔まだるっ-こ・い〕（形、一）前條に同じ。

まだ-れ［麻垂］（名）漢字の冠の名。麻・床などの上にある广の字の稱。

また-をひ［又甥］（名）甥の子、（姪孫）。

まち［町］（名）❶田の間のしきり、「千―田」。❷部屋のつらなれるもの、「きさい―」。❸市街などの路によりたる區劃。❹商家の軒を並べたる地、市街。

まち［襠］（名）❶衣服の布の幅の足らざる處に別に布を補ひ添ふるもの。❷袴の內股の部分。

まち-あは・す［待合］（他、さ下二）人又は汽車などの來るを待ち受く。

まち-あひ［待合］（名）❶約束して互にまち受くると。又、其待ち受くる家。❷「まちあひぢや」の略言。――ぢやや［待合茶屋］（名）まちあひの席をかす事を業とする茶屋、現時多くは酒食遊興の貸席をいふ。――ざけ［待合酒］（名）待合茶屋にて藝妓などを呼びて飲む酒。――あそび［待合遊］（名）待合茶屋に入りて遊興すると。

まち-あみ［待網］（名）❶水中に網を張り、魚の其中に入るを待つと。❷一種の網、底は囊狀をなし、多くは三角形の緣をつけて用ふるもの。

まち-いしや［町醫者］（名）昔時、御殿醫などに對して、坊間に開業せる醫者の稱。

†まち-い・づ［待出］（他、下た二）待ちて迎（ア）ふ。「ありあけの月をまちいづるかな」。

まち-う・く［待受］（他、か下二）來るを待つ。まちまうく。むかへまつ。

まち-うけ［待受］（名）まちうくると。――る（他）「まちうく」の訛。

まぢか［間近］（名）まぢかきと。

まぢか・し［間近］（形、一）接近してあり。いと近し。

まち-かね［待兼］（名）まちわびて居ると。

まち-か・ぬ［待兼］（他、な下二）來るを遲しと待ちわぶ。

まち-がひ［間違］（名）❶まちがふと、あやまり、（失錯、錯誤）。❷けんくわ、あらそひ。❸若き男女の間の正しからずなると。

まち-が・ふ［間違］（自、は四）ちがふ。あやまる。たがふ。

まち-が・ふ［間違］（他、は下二）とりちがふ。あやまつ。しそこなふ。

まち-がへ［間違］（名）まちがふると、とりちがへ。しそこなひ。あやまち。

†まち-ぎみ［町君］（名）「まうちぎみ」の約言。

まち-ぐわいしよ［町會所］（名）町內の會所。

まち-だうぢやう［町道場］（名）❶市中にある佛堂。❷昔時、市中にて武藝を敎へたる所。

まち-だか［襠高］（名）「まちだかばかま」の略言。――ばかま［襠高袴］（名）襠（マチ）の高き袴、馬のり袴。

まち-ぢよらう［待女郎］（名）婚禮のとき、新婦に附き添へる腰元の稱。（伴姑）。

まち-つ・く［待附］（他、か下二）待ちはたす。

まち-どころ［町所］（名）町內。

まち-どしより［町年寄］（名）徳川時代に、一町內の雜務を處理せしもの、多く町人の選擧になり、幕府の直轄地に置かれたり。

まち-どほ［待遠］（名）まちどほしきと。

まち-どほ・し［待遠］（形、二）待ちわびてあり、待つこと久し。

まち-と・る［待取］（他、ら四）待ち受く。まちつく。

まち-なみ［町並］（名）町家の並べるさま。

まち-ばり［待針］（名）針仕事にて、縫ひどめの標（シルシ）として刺しおく針。

まち-びけし［町火消］（名）市中の消防夫。

まち-びと［待人］（名）來るを待ち受けられて居る人、「―戀の辻占」。

まち-ぶぎやう［町奉行］（名）徳川時代に、江戶・京都・大阪・駿府等に設けて、市中の戶籍・租稅・訴訟其他一切の事を司らしめし職。

まち-ぶせ［待伏］（名）隱れゐて人の來るを待ちうけ、これを襲（ソ）ふと。

まち-まう・く［待設］（他、か下二）❶まちうく。❷期す。豫期す、期待す。

〔まち-まち〕［區區］（名、副）ものものことなるさま。さまざま。別々。

まち-や［町家］（名）市中にある商家、又、商家の並べる處。

まち-やっこ［町奴］（名）「をとこだて」に同じ。

まち-わ・ぶ［待詫］（他、は上二）來る事の遲きを待ちくたびる。

マチン［馬錢］（名）【植】馬錢科に屬する小木本、東インドに產す、葉は柄なく對生し、花は小形なり、扁圓形の種子を生ず、種子は有毒にして重要なる藥品とす。（番木鼈）。

まつ［松］（名）❶【植】松柏科に屬する喬木、幹に節多くして樹皮は龜甲狀に裂け鱗に似る、葉は針狀常綠にして二個づゝ、若しくは五個づゝ叢生し、基部は褐色の鱗片にて包まる、毬果は二年乃至三年を經て成熟し、果鱗は二個の胚珠を含有す、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる、（探春、鮮見）。❷たいまつ。

まつ［末］（名）こな、細末。

ま・つ［待］（他、た四）❶物事の到來を望みて居る。❷物事の向ひ來るを迎へてなす。❸取りおきて後の用に供す、（俟、候）。

まづ［先］（副）❶早く、さきに。❷なにはともあれ、ともかく。❸しばらく、暫時。

まっ-か［眞赤］（名）❶眞に赤きと。❷すこしも羞はずむを出しなると。

（まっ-かう）［眞向］（名）❶額のまんなか。❷鉢卷、（抹額）。

（まっ-かう）［抹香］（名）しきみの葉又は皮を細末となしたる香。――くさ・し［抹香臭］（形、二）佛くさし、俗侶じみたり。――くぢら［抹香鯨］（名）【動】鯨の一種、頭部大にして膨起し前方は扁平なり、口小さくして腹面にあり、齒は圓錐形をなす、一個の噴水孔は頭端の背面にあり、背部淡黑色にして腹部に至るに從ひ漸く淡し、體長大なるは六丈に達す、常に熱帶地方の海に棲息し、時としては溫帶地方の海に來遊す。

（まつ-がく）［末學］（名）❶枝葉の學問。❷未熟なる學徒。

まつ-かさ［松毬］（名）松の毬果。まつふぐり。まつぼくり。（松實、松子）。

まつ-がさね［松襲］（名）かさねの色目、表はもえぎにして裏の紫なるもの。

まつ-かざり［松飾］（名）正月の門松の飾。

まつ-かぜ［松風］（名）❶松を吹く風。❷茶の湯にて、茶釜のにえ立つ音。❸一種の菓子、饂飩粉などにて扁く方形に燒き、表に砂糖の液を塗りて裏に、罌粟（ケシ）をつけたるもの。

まつかは-ばうさう［松皮疱瘡］（名）かさぶたの松の皮の如くに重なりて生ずる惡性の疱瘡。

まつかは-びし［松皮菱］（名）紋所の名、花菱を八重に描きたるもの。

†ま-づかひ［間使］（名）時々の消息をつたふるつかひ。

まっ-かへさま［眞反樣］（名）まっさかさま。

まつ-ぎ［末技］（名）枝葉の技藝、又、未熟の技藝。

まつ-ぐみ［松茱萸］（名）【植】桑寄生科に屬する小灌木、多く松に寄生す、果實は成熟すれば紅色となる。

まっ-くら［眞暗］（名）眞に暗きと。（暗黑）。

まっ-くろ［眞黑］（名）全く黑きと。（純黑）。

まつ-げ［睫］（名）（目之毛（マツゲ）の義）まぶちの毛、

（まつ-ご）［末期］（名）いまはのきは、しにぎは。臨終、――のみづ［末期水］（名）しにみづ。

（まつ-ざ）［末座］（名）すゑのざ、しもざ。（末席）。

マッサージ［Massage］（名）西洋風の按摩、我國在來の按摩と殆ど同じく、たゞ皮膚に藥液を塗布するを異なりとす。

まっ-さいちゆう［眞最中］（名）まことの最中。

まっ-さかさま［眞逆樣］（名）高處より物のさかしまにおつるさまなどにいふ語。

まっ-さかり［眞盛］（名）まさかり。

まっ-さき［眞先］（名）最もさき。

（まっ-さつ）［抹殺］（名）はらひけすと。又、うちけすと。

まっ-さを［眞靑］（名）眞に靑きと。（純靑）。

（まっ-し）［末子］（名）すゑの子。ばっし。

（まつ-じ）［末寺］（名）配下の寺院。

〔まづ・し〕［不味］（形、二）❶味よからず。うまからず。❷つたなし、下手なり、（拙）。

まづ・し［貧］（形、二）❶金錢財寶に乏し、生活ゆたかならず、貧乏なり。❷足らず。とぼし。

まっしぐら-に［驀地］（副）勢烈しく直進して、わきめもふらずに。いっさんに。

（まっ-しや）［末社］（名）❶本社に附屬せる神社。えだがみ。（攝社）。❷遊里にて、客の取持をする者。❸部下、手下。

まっ-しやうぢき［眞正直］（名）いさゝかもつゝみかくしのなきと。すこしもまがりたる事のなきと。

（まっ-しよ）［末書］（名）註釋の書。

まっ-しろ［眞白］（名）全く白きと。（純白）。

まっ-すぐ［眞直］（名）いさゝかのゆがみもなく直きと。

（まっ-せ）［末世］（名）すゑのよ。

（まっ-せう）［末梢］（名）❶枝のさき、こずゑ。❷はし、さき。――しんけい［末梢神經］（名）神經中樞よりわかれてこまかに分布せる神經纖維。

（まつ-せつ）［末節］（名）「ばつせつ」に同じ。

（まつ-だい）［末代］（名）死後の世、末の世、（後世）。

まったく［全］（副）❶まるで、悉く、すべて、みな。❷まことに。じつに。

まつ-だけ［松茸］（名）【植】菌類の一、松葉の腐敗せるものに寄生し、殊に赤松の林中に多し、菌傘の表面は紫黑色にして裏面は灰白色、菌柄は淡褐色なり、香氣高く、食用菌類中の最上たるもの。（松蕈）。

まった・し［全］（形、二）❶「またし」の音便。❷缺けたる所なし、十分なり。完全なり、（完）。❸安全なり。やすし。やすらかなり。

まっ-ただなか［眞直中］（名）まなか。中央。

ま-つち［眞土］（名）耕作上最も適當なる土壤。

マッチ［燐寸＝Match］（名）すりて火を出す具。

鹽素酸「カリウム」・硫化「アンチモン」及硫黄等の混合物を膠汁によりて木片の一端に附着せしめ、これを入れおく箱の赤燐・過酸化「マンガン」・硫化「アンチモン」等の混合物を塗布したる側面に摩擦して發火せさするもの。

(まっ‐ちゃ[抹茶](名) 「ひきちゃ」に同じ。

まっ‐て[待手](名) 碁・將棋・相撲等にて、相手の仕向くるをやめてひかへさすること。

廿まっ‐と[眞人](名) 「まひと」に同じ。

〔まっ‐と(副) いますこし。もすこし。もっと。

まつ‐の‐うち[松內](名) 正月の松飾をとりのけざる間、即ち元日より七日頃までの間。

まつ‐の‐かど[松門](名) ㊀松飾のある門。㊁山中のすまひ。

まつ‐の‐くらゐ[松位](名) ㊀《秦始皇が雨よけしたる松を封じたる故事に出づ》大夫の官。㊁轉じて、遊女の最高の位地。「—の大夫職」。

まつ‐の‐けぶり[松煙](名) ㊀松をたく煙。又、たいまつの煙。㊁墨の異稱。

廿まつ‐の‐ことのは[松言葉](名) 《古今集の序に「松の葉の散り失せずして」といふ語あるに出づ》和歌の稱。

まつ‐の‐は[松葉](名) ㊀仙人の境涯。㊁寸志。

廿まつはし‐の‐うへのきぬ（マツワシーウエー）[縫掖](名) 「ほうえき」に同じ。

まつは‐す（マツワス）〔さしすすせせ〕[纏](他、さ四) まつはるやうにす。まつはらしむ。

まっ‐ぱだか[眞裸](名) 全身をあらはせること。

まつ‐ばやし[松林](名) 松の多く生ひたる所。

まつば‐ゆり[松葉百合](名) 【植】「あまな」の一名。

まつ‐ばら[松原](名) 松の多くある原。

まつば‐らん[松葉蘭](名) 【植】松葉蘭科に屬する草、莖細長くして少數細微の葉生ず、花は黄色にして莖頭に開き、觀賞用として栽培せらる。

まつは‐る（マツワル）〔らりるるれれ〕[纏](自、ら四) ㊀まきつく。まとはる。からまる。まとひつく。㊁從ひてはなれず。つきまとふ。(纏綿)。

まっ‐ぴら[眞平](副) ひたすら。ひとへに。平に。

まっ‐ぴるま[眞晝間](名) ひるなか。

まつ‐ふぐり[松毬](名) まつかさ。

〔まつ‐ぼっくり[松毬](名) 前條に同じ。

廿まつ‐ほど[松塊](名) 【植】茯苓（ブクリヤウ）の古稱。

まつ‐むし[松蟲](名) 【動】直翅類中蟋蟀科に屬する小蟲、背面赤褐色にして腹部黄色なり、多く松林に産す、世人飼（カ）ひて其聲を賞す。(金琵琶)。

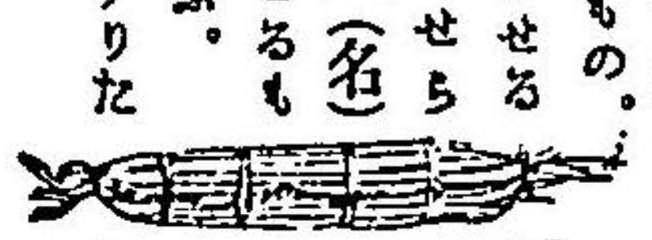
まつ‐も[松藻](名) 【植】(い)褐色藻に屬する海藻、形松の葉に似る、食用に供せらる。(ろ)「きんぎよも」の一名。

まつ‐もと[松本](名) 【植】《初め信濃國松本より出だし、故に此名あり》「せんむうげ」の一名。

まつ‐もどき[松擬](名) 一種の料理、茄子を細く切りて、油を加へて羹（アツモノ）にしたるもの。

まつ‐やに[松脂](名) 松の樹の分泌せる液、粘氣（ネバリケ）多きもの、種々の用に供せらる。

——らふそく（ロウ）[松脂蠟燭](名) 笹の葉に松脂を包みて蠟燭に代用せるもの、古昔、奥羽地方にて用ひたりといふ。



[まつやにらふそく]

まつ‐やま[松山](名) 松の生ひしげりたる山。

まつ‐よひ（ヨイ）[待宵](名) ㊀人を待つ宵。「—に更け行く鐘の聲聞けば」。㊁《十五夜の月を待つ夜の義》陰暦十四日の夜の稱。

廿まつら‐ふ（マツラウ）〔はひふふへへ〕[服、順](自、は四) したがひつく。ふくじゆうす。

まつり[祭](名) ㊀祭ること。(祀、祭祀、祭典、醮祭、祭禮、祭儀)。㊁古昔、山城國加茂神社の葵祭の特稱。

(まつ‐り[茉莉](名) 【植】紫茉莉科に屬する木、熱帶地方に産す、葉は圓狀にして對生し、夏秋の交、枝端に五瓣白色の花着生し、夕に開きて朝に落つ、香氣高し。

(まつ‐りう[末流](名) 「ばつりう」に同じ。

廿まつり‐ご‐つ〔たちつつてて〕[爲政](他、た四) 政を行ふ。

まつり‐ごと[政](名) 君王が國土人民を治め萬機を處理すること、即ち國家の主權者が其領土及臣民を統治すること、轉じて、國家の機關が其職權によりて施行する諸種の行爲をもいふとあり。せいむ。

——はじめ[政始](名) 一月四日に行はるゝ公事、主上の其年の萬機を聞きたまふ初めにして、まづ神宮の事を奏するを定例とす。 廿——びと[政人](名) 判官（ハウグワン）。

廿まつり‐や[祭屋](名) 神靈を祭る家。

まつ‐る〔らりるるれれ〕[奉](他、ら四) ㊀動詞に添へて敬意を表する語。「仕へ—」。㊁まゐらす。たてまつる。

まつ‐る〔らりるるれれ〕[祭](他、ら四) ㊀儀式を供へて靈を慰む。㊁靈として崇（アガ）む。(祀)。

(まつ‐ろ[末路](名) 「ばつろ」に同じ。

廿まつろ‐ふ（マツロウ）〔はひふふへへ〕[順、服](自、は四) 服從す。

廿まつろ‐ふ（マツロウ）〔へへふふるれへよ〕[服](他、は下二) 服從せさす。

ま‐て[全手](名) もろて。兩手。

まて[蟶](名) 【動】瓣鰓類中同柱類に屬する貝、海に産す、外殼は淡黒色を呈し狹長にして恰も竹管の

如し、肉は蝸に似て細長し。(竹蟶、馬蛤)。

廿まで[詣](動) 「まうで」の略言。「—來ず」。

まで[迄](助) ㊀そなたへ及ぼす意を表はす語。「千代—榮ゆ」。㊁ばかり又は「ほど」の意を表する語。「みづはぐむ—年老いにけり」。(迄)。

廿まて‐つがひ（ガイ）[眞手番](名) 古昔、五月五日の騎射に、近衛の射手の立合ひしこと。

まて‐ど‐くらせ‐ど[待暮](副) 待ちわびて、幾多の日をおくれど。

まて‐ばしひ（シイ）[全手葉椎](名) 【植】椎の一種、葉も實も大形にして實は食ふべし。まてばがし。

まと[的](名) 《目處の義》㊀矢を射又は彈丸を發して當つるめあて。(鵠)。㊁のぞみ。めあて。

ま‐と[眞砥](名) 刀の仕上に用ふる砥石、質緻密にして滑かなるもの。

まど[窓](名) 《間戸の義》日光を受け又は空氣を流通せしむるため、家の屋根若しくは側壁にあけたる孔。(牖)。

まど‐あかり[窓明](名) 窓よりさしこむ光線。

廿まと‐い[的射](名) 的を射ること。

まど‐か[圓](名) まるきさま。圓滿なるさま。

まと‐かは（ワ）[的皮](名) 射場の的の役に張る皮。

まど‐ガラス[窓硝子](名) ガラス窓に用ひたるガラス。

やまがた。

廿まど‐ころ[政所](名) 家內にて家政を取扱ふ處。

まんどころ。

廿まど‐し〔しくしくしきしけれ〕[貧](形、二) まづし。

まど‐の‐つき[窓月](名) ㊀窓にさしこむ月影。㊁一種の菓子、もなかの類、方形に製し、中に月形をつくれるもの。

まと‐ば[的場](名) 的を設け弓術を習ふ所。

まどはか‐す（カスマドワ）〔さしすすせせ〕[惑](他、さ四) まどはす。

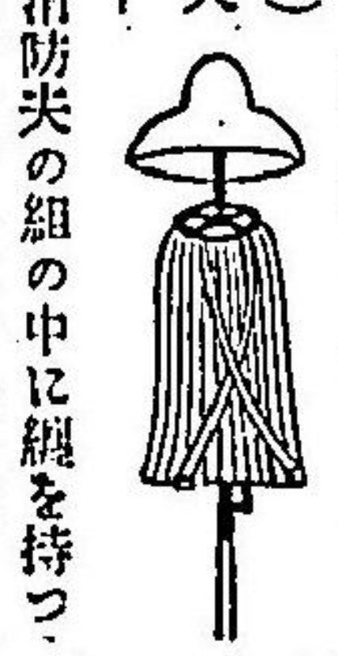
まとは‐す（マトワス）〔さしすすせせ〕[纏](他、さ四) まつはす、まとひつかす。まきつかす。

まどは‐す（マドワス）〔さしすすせせ〕[惑](他、さ四) ㊀思慮を亂す。分別をあやまらす。㊁あらぬ道に誘ひ入る。よからぬ事に導く。㊂あざむく。だます。

まとは‐る（マトワル）〔れれるるるれれよ〕[纏](自、ら下二) まきつく。からまる。からみつく。(絡)。

まとひ（マトイ）[纏](名) ㊀まとふこと。㊁昔時、陣所の標（シルシ）としたるもの、竿の頭に種々の飾りをつけ、多くは其下に馬簾（バレン）を垂る、現時は消防夫の組の標とす。

——もち[纏持](名) 消防夫の組の中に纏を持つ役のもの、常に消口の衝に立つが故に、其組中にて勇敢敏捷なるものを選びてこれに充つ。



[まとひ(二)]

まどひ（マドイ）[惑](名) まどふこと。まどへるかんがへ。

まと‐ふ（マトウ）〔はひふふへへ〕[纏](自、は四) まきつく。からまる。(絡)。

まと‐ふ（マトウ）〔はひふふへへ〕[纏](他、は四) まきつかす。からみつかす。

まど‐ふ（マドウ）〔はひふふへへ〕[惑](自、は四) ㊀分別になやむ。取捨にくるしむ。迷ふ。當惑す。㊁取りちがふ。思ひあやまる。㊂あらぬ道に心奪はる。よからぬ事にふける。

〔まど‐ふ（マドウ）〔はひふふへへ〕[償](他、は四) つくなふ。

ま‐どほ（マドオ）[間遠](名) ㊀間の隔たれること。㊁織目の粗（アラ）きこと。

ま‐どほ‐し〔しくしくしきしけれ〕[間遠](形、二) まどほなり。

廿まと‐まうし（ウーシモ）[的申](名) 古昔、的の傍に居て、射手の射中（ア）つれば旗を上げて知らせし役。(司的)。

まとまり[纏](名) まとまること。

まとま‐る〔らりるるれれ〕[纏](自、ら四) ㊀一つに統（ス）べあはせらる。㊁すぢみち立つ。㊂治まり定まる。

まと‐む〔めめむむむるむれめよ〕[纏](他、ま下二) ㊀一つに統（ス）べ合はす。㊁すぢみちを立つ。㊂きまりをつく。㊃治め定む。

〔まとめる(他) 「まとむ」の訛。

ま‐とも[正面](名) 《眞之面の義》㊀まやうめん。正しく向かふ方。㊁まじめ。ほんと。

ま‐どり[間取](名) 室の構へ方。室の位置。

マドロス[水夫](名) 《「オランダ」語 Matroos》㊀ふなのり。船頭。㊁氣の利かぬ人。

ま‐どろみ[微睡](名) まどろむこと。

ま‐どろ‐む〔まみむむめめ〕[微睡](自、ま四) 《目蕩むの義》暫時の間おのづと眠る。我知らずしばし眠る。

まど‐ゐ[團居](名) ㊀一座に集まりて圓く居ならぶこと。くるまざ。(團欒)。㊁よりあひ。集會。

ま‐な[眞名](名) ㊀楷書。㊁假字に對して、漢字の稱。「—文」。(眞字、男文字)。

廿ま‐な[眞魚](名) 《「ま」は美稱》魚の稱。 ——いた[眞魚板](名) 魚肉を料理するに用ふる板、庖丁もて物を切る臺。(俎)。

ま‐なか[眞中](名) たゞなか。まんなか。

ま‐なか[間中](名) 一間の半ば。

まな‐がつを[眞魚鰹](名) 【動】硬鰭類中まながつを科に屬する魚、體は側扁にして鱗は小圓形をなす、背部は蒼色にして腹部は淡し、頭部及鰭部は蒼黒色を呈す、長大なるは二尺餘に達す、我國西南海濱に中國の近海に多く産す。

廿まな‐かひ（イーガ）[目交](名) めのさき。

‡まなかぶら［眶］（名）まぶち。

‡まなぐひ イ-ク［眞魚咋］（名）魚を料理して食餌にそなふること。

まなこ［眼］（名）（目之子の義）㊀めだま。㊁目。

‡まなご［眞砂］（名）まさご。すな。

‡まなご［愛兒］（名）いとしご。

まなこゐ［眼居］（名）めつき。まなざし。

まなざし（名）めつき。眼光。

‡まなしかたま［目無堅間］（名）密に編みて目のなき竹籠、或は古代の舟なりともいふ。

まなじり［眥］（名）（目之後（シリ）の轉）めじり。まじり。

まなづる［眞名鶴］（名）【動】（い）白鶴の稱。（ろ）鶴の一種、丹頂より小形にして、額・頰赤く、背部は灰色にして暗色をおぶ。（鶬鶏）。

まなばし［眞魚箸］（名）魚を料理するに用ふる箸、もとのは木なりしが、後世のは鐵製にして長さ六寸柄四寸許あるもの。（眞那箸、生鵠箸、魚箸）。

まなはじめ［眞魚始］（名）幼兒に始めて魚肉を食はする式。

まなばん［眞名盤］（名）七種香の一。

まなび［學］（名）學ぶこと。學問。――**のまど**［學窓］（名）學問する所。

まなぶ（ばびぶぶべべ）［學］（他、は四）（「まねぶ」の轉）㊀ならひて行ふ。まねて爲す。（習）。㊁敎へを受く。業を授かる。㊂或物事を知らんとして修め究む。或物事に熟せんとして修め行ふ。

まなぶた［瞼］（名）まぶた。まぶち。（眼胞）。

‡まなむすめ［眞娘］（名）眞のむすめ。又、愛するむすめ。

‡まにあはせ ワ-ア セ［間合］（名）急場の間に合はすること。暫時の用に立つること。

まにあひ イ-ア［間合］（名）㊀普通の鳥子紙を長く漉（ス）きて半間即ち三尺の間に合はするもの、屏風又は襖などに貼（ハ）る。㊁まにあはせ。

マニーしゆ［摩尼珠］（名）（「マニ」は梵語 Mani）【佛】龍王の腦中にありといふ清淨なる珠。

‡まにま［隨］（副）次條に同じ。

まにまに［隨］（副）物事の成り行きにまかせて。そのまゝに。「風の―」。（隨意）。

まにんげん［眞人間］（名）正道なる人。

まぬ（ぬれねねぬるぬれねよ）［眞似］（他、な下二）他に似す。まねをなす。

まぬかる（れれるるるれれよ）［免］（他、ら下二）㊀避けて預からず。外（ハヅ）れて加はらず。のがる。㊁其場を外（ハヅ）す。其事を避く。にぐ。（脫）。

〔**まぬけ**［間拔］（名）調子にあはぬこと。又、其人。とんま。ひやうしぬけ。

まぬるし（くしきけれ）［間緩］（形、二）ゆるやかにして時期に後る。のろくして用をなさず。

まね［眞似］（名）他に似せてなすこと。他にならひてなすこと。

まねき［招］（名）㊀まねくこと。㊁織機の具、足の大指にて踏みつゝ、綜（アゼ）を上下せさするもの。（機躡）。㊂見物人を招き寄するために設けたるもの。

まねく（かきくくけけ）［招］（他、か四）㊀平手を上下にあふりて人を呼ぶ。㊁つかひ又は書狀もて人を誘ひ來らす。（招請）。

‡まねし（くしきけれ）［多］（形、二）おほし。志げし。

‡まねぶ（ばびぶぶべべ）［學］（他、は四）（眞似を活用す）㊀まねて行ふ。（習）。㊁其まゝを人に語る。

〔**まねる**［眞似］（他）「まぬ」の訛。

まのあたり［面］（名）㊀めのまへ。目前。㊁さしあたり。當座。㊂うちつけ。直接。

‡まのがる（れれるるるれれよ）［免］（他、ら下二）「まぬかる」に同じ。

‡まのし［目主］（名）眼を見張ること。

‡まのまへ エ-マ［目前］（名）まのあたり。

〔**まのろし**（くしきけれ）［間緩］（形、二）「まぬるし」に同じ。

まはし シ-ワ マ［廻］（名）㊀まはすこと。㊁腰に絡（マト）ひ着（ツ）くる布、婦人又は力士などの用ふるもの。㊂遊郭にて、娼妓の順々に客を取ること。――**ガッパ**［廻合羽］（名）上に引き廻して着る袖なき合羽。ばうずガッパ。（廻袖袂）。――**ぎり**［廻錐］（名）㊀ろくろがな。㊁まひぎり。（舞錐）。――**もの**［廻者］（名）敵中に忍び入りて事狀を探る人。忍びのもの。間者。

まばしら［間柱］（名）大いなる柱と柱との間に立つる小さき柱。

まはす スマワ（さしすすせせ）［廻］（他、さ四）㊀輪狀に廻轉せさす。めぐらす。㊁あまねくゆきわたらす。㊂順番におくりわたす。㊃方々へ行かす。「のり―」。「引き―」。㊄さまざまにふり動かす。「刀をふり―」。

まばたき［瞬］（名）めばたき。またゝき。

まばゆし（くしきけれ）［目映］（形、二）㊀光烈しく目を刺激して見にくし。まぶし。㊁他の映（ハ）えあるに對して恥づかしく覺ゆ。

まばら［疎］（名）（間散の義）間の透きて密ならぬこと。志げからぬこと。

まはり リマワ［廻］（名）㊀まはること。回轉。㊁めぐり。周圍。㊂みまはり。巡視。――**あはせ** ワ-ア セ［廻合］（名）自然にめぐり來たる其身の運。榮枯盛衰の轉變。運命。「―がわるい」。――**えん**［廻緣］（名）室をめぐりたる緣。――**どほし**（くしきけれ）（形、二）迂廻してはかゞしからず。――**しや**

うぎ シヨ-ウギ［廻將棊］（名）一種の遊戲、將棊盤の隅の一格を出發點とし、これに各持分の駒一つを置き、金將四つを振り、其出でたるさまによりて預じめ數を定め、其數だけ格を數へて自己の駒を進め、早く中心の一格に達したるを勝とするもの、又、將棊盤の外邊の格に適當なる間隔を取りて各自の駒を置き、前同樣に金將四つを振り、其數によりて格を數へて進み他を追ひ起したるを勝とするもの。――**スゴロク**［廻雙六］（名）一種の遊戲、道中雙六の如く、振りたる采（サイ）の目の數によりて、順次に區劃を追ひ進み、早くあがりに達したるを勝とするもの。――**どうろう**［廻燈籠］（名）外框（ソトワク）に紙を張り中框（ウチワク）に種々の畫の切拔を貼（ハ）り、中心に軸を立て上に風車を設けたる燈、風のために廻轉するに從ひて、其畫像の影の廻轉して見ゆるもの。かげどうろう。（走馬燈）。――**どほし** オシ-ド（くしきけれ）［廻遠］（形、二）㊀道路まはりて行くに遠し。㊁手段拙（ツタナ）くして爲すに敏捷ならず。㊂事情に適切ならず。――**ばしご**［廻梯子］（名）螺旋狀に廻りたる梯子。（螺旋梯）。――**ばん**［廻番］（名）㊀順を逐ひかはりあひて事に當たること。順番。輪番。㊁みまはりする順番。――**ぶたい**［廻舞臺］（名）芝居の舞臺の中央の廻轉する裝置ある部分、又、其部分を設けたる舞臺。――**みち**［廻路］（名）遠き路を取りて行くこと。又、まはりどほき路。――**もち**［廻持］（名）順々に受け持つこと。輪番に所持すること。

―**まはり** リワ［迴］（接尾）㊀七日を一期として數ふるにいふ語。（所願又は服藥などにいふ）。「一―」。㊁かさ又は容積にいふ語。「ふた―大きい」。

まはる ルマワ（らりるるれれ）［廻］（自、ら四）㊀輪狀にめぐる。めぐる。㊁あちこちと歩む。めぐり行く。「乘り―」。㊂さまざまになす。いろいろに行ふ。「はね―」。「飛び―」。㊃行きわたる。行きとゞく。「手が―」。㊄遠き路筋をとほりて行く。㊅周圍に從ひて行く。

‡まひ イマ［賂］（名）㊀おくりもの。㊁だちん。

まひ イマ［舞］（名）㊀音樂又は歌謠にあはせて、手足體軀を種々に動かすこと。又、其技。㊁「まひば」（舞葉）の略言。

（**まひ**［痲痺］（名）志びるゝこと。感覺なくなること。

まび［間日］（名）㊀八專の中の丑・辰・午・戌の日の稱。㊁瘧（オコリ）の醒（サ）むる日。㊂すべて其物事の間の日の稱。

まひあがる イマ（らりるるれれ）［舞上］（自、ら四）まひて空に上がる。

まひあふぎ オ-マイ ウギ［舞扇］（名）まひに用ふる扇。

‡まびき［眼色］（名）まなこゐ。めつき。

まびき［間引］（名）まびくこと。――**な**［間引菜］（名）まびきたる菜。

まひぎね イマ［舞杵］（名）からざを。

まひぎり イマ［舞錐］（名）刃三叉にして鉾（ホコ）に似たる錐、酒樽などに呑口の孔を穿つ時などに用ふるもの。まはしぎり。（舞鑽、三叉錐）。

まびく（かきくくけけ）［間引］（他、か四）㊀間（アヒダ）を隔てて拔きてまばらにす。うろぬく。㊁片田舍などにて、子多くして養育しがたきとき、親自ら我子を殺すにいふ。

まひこ イマ［舞子］（名）舞ひて酒興を添ふる少女。舞妓。――**だけ**［舞子茸］（名）【植】「まひだけ」（ろ）に同じ。

〔**まひご** イマ［迷兒］（名）まよひご。（迷子、厝子）。――**ふだ**［迷子札］（名）「まよひごふだ」に同じ。

まひこむ イマ（まみむむめめ）［舞込］（自、ま四）㊀舞ひながら入り込み來る。㊁酒などに醉ひ興じて入り來る。

まびさし［目庇］（名）㊀兜の鉢の庇。（眉子）。㊁海軍帽・鳥打帽などの庇。

まびしやく［馬杓］（名）馬に水を與ふる杓。

まひだけ イマ［舞茸］（名）【植】（い）「わらひだけ」に同じ。（ろ）菌類の一種、莖白く層々相重なるもの。まひこだけ。

まひづる イマ［舞鶴］（名）紋所の名、鶴の翼を張りたるさまを描きたるもの。

‡まひと［眞人］（名）天武天皇の朝に定められたる八色の姓（カバネ）中の第一位。まうと。まっと。

まひど イマ［舞戸］（名）ひらきど。

まひなひ イマ イナ［賂］（名）㊀むくりもの。音物。（幣）。㊁自家を利せんため、其筋のものに私かに財物を贈ること。又、其おくる財物。賄賂。

まひなふ ウナイマ（はひふふへへ）［賂］（他、は四）まひなひを贈る。

‡まひば イマ［舞羽］（名）絲を絡（ク）ふ具、短かき竿（ヲサ）を立て上にわくを添へて、廻はすもの。（絡車）。

まひば イマ［舞葉］（名）赤くなりたる煙草の葉。

まひひめ イマ［舞姬］（名）舞ひをなす女。舞妓。

まひまひ イマ イマ［舞舞］（名）曲拍子にて舞ふ舞曲。幸若（カウワカ）大柏（ダイガシハ）笠屋（カサヤ）の三派あり。――**つぶり**［舞舞螺］（名）【動】「かたつむり」の一名。――**むし**［舞舞蟲］（名）【動】「みづすまし」の一名。（關西の方言）。

まひもどり イマ［舞戻］（名）まひもどること。

まひもどる イマ（らりるるれれ）［舞戻］（自、ら四）勢よくもとへもどる。

まひやうし〔間拍子〕(名) をり。しほ。

まひら〔眞平〕(名) 全くひらたきこと。

まひらど〔間平戸〕(名) 横に細き棧(サン)のある戸。(骰子戸)。

まひりぐさ〔迷草〕(名) 【植】「くらら」の一名。

まひる〔眞晝〕(名) ひる。日中。(白晝、白日)。

廿まひろぐ〔間廣〕(他、か下二) あまりなく廣ぐ。

〔まふ〔痲布〕(名) あさの布。

まふ〔舞〕(自、は四) ㊀翔(カケ)りめぐる。まはる。㊁舞を演ず。

〔まぶ〔間夫〕(名) みそかを。情夫。

〔まぶ〔間府〕(名) 鑛山の坑。(鑛夫の語)。

まぶか〔目深〕(名) 目の隠るゝまで深く被(カム)るさま。

廿まぶし〔射踏〕(名) 鳥獸を射るため、柴など折りて身を隠すもの。

まぶし〔蠶簇〕(名) 十分に成長したるかひこを入れて繭をつくらするすだれ、これに束ね折りたる藁などをならべて、繭をつくるたよりとす。えびら。

廿まぶし〔目節〕(名) めつき。めいろ。めざし。

〔まぶし (形、二) 「まぼし」の轉。

まぶす〔塗〕(他、さ四) まみれさす。ぬる。

まぶた〔目蓋〕(名) 眼の上を被ふ皮。(瞼)。

まぶち〔目縁〕(名) 目のふち。まなかぶら。(眶)。

まぶる〔塗〕(他、ら四) まみれさす。まぶす。

まぶれる〔塗〕(自、ら下二) まみる。

〔まぶれる (自) 「まぶる」の訛。

まへ〔前〕(名) (目邊(ヘ)の義) ㊀顔又は目の向ひたる方。おもて。㊁はじめ。最初。㊂ゆくへ。ゆくて。㊃てぢか。目前。㊄むかし。もと。㊅みちびき。㊆神の御身。㊇主上の御身。㊈陰部。まへのもの。

—まへ〔前〕(接尾) ㊀人の目にかゝる所、「人—」。㊁割り充てたる部分、「五人—」。㊂婦女の名に添へていふ語。「菖蒲の—」。

廿まへいた〔前板〕(名) 車の前なる上こぎ。

まへうしろ〔前後〕(名) まへとうしろと。又、まへとうしろと位置の顚倒すること。

まへおき〔前置〕(名) 文章又は談話等にて、本題に入る前にのぶること。「本文の—」。

まへがき〔前書〕(名) 本文の前に書き加ふること。又、其文句。

まへかけ〔前懸〕(名) 膝の前、着物の上に掛くる布、着物の汚れを防ぐためのもの。まへだれ。

まへがし〔前貸〕(名) 前に貸すこと。支拂ふべき期日より前に、貸錢などを貸し與ふること。

まへがしら〔前頭〕(名) 相撲(スマフ)の小結以下のものゝ稱。

まへかた〔前方〕(名、副) ㊀すでに經過したる時。㊁未だ到來せざる時。

まへかど〔前廉〕(名、副) 前條に同じ。

まへがみ〔前髮〕(名) ㊀結髮にて、額上の前方にある髮を別に束ねたるもの。㊁昔時、未だ元服せざる男子の稱。

まへがり〔前借〕(名) 後日受取るべき金錢を、其期日前に借り入るゝこと。ぜんしやく。(豫借)。

まへきん〔前金〕(名) 金を前に拂ふこと。

まへくづけ〔前句附〕(名) ㊀三句十七字の俳諧を咏むとき、宗匠が末の句を題として出だし、これに前の句を附けさすること。㊁昔時、俳諧の宗匠が、「五句三十一字の中の下の二句を題として出だし、上の三句を附けさせて、秀逸のものに景品を與へしこと、後には一二三等の數字を封じて入札とし、中(アタ)りたるものに金錢を與ふることとなりたり、享保の初めに禁ぜらる。

まへごし〔前腰〕(名) 袴の腰の下に當たる部分。

まへだて〔前立〕(名) 兜のたてもの。——もの〔前立物〕(名) 前條に同じ。

まへだれ〔前垂〕(名) まへかけ。——かけ〔前垂掛〕(名) 前垂をかけたる姿。

廿まへつぎみ〔公卿〕(名) 天皇の御前に伺候する人の敬稱。きんだち。うへびと。まちぎみ。まうちぎみ。(侍臣)。

〔まへのもの〔前物〕(名) 陰部。

まへのよ〔前世〕(名) 【佛】生前の世。ぜんせ。

まへば〔前齒〕(名) 前面の齒。ぬかば。むかば。むかふば。(板齒、門齒)。

まへばらひ〔前拂〕(名) 前金を支拂ふこと。前に代金を拂ふこと。

まへばり〔前張〕(名) 前の張りたる袷(アハセ)の袴、昔時親王・攝家などの童兒の着用せられしもの。

まへび〔前日〕(名) ㊀其日の前の日。ぜんじつ。㊁先頃。

〔まへひろに〔前廣〕(副) あらかじめ。かねてより。

廿まへまうし〔前申〕(名) 君の前にて物言ふこと。

〔まへまへ〔前前〕(名) ㊀以前。「—からいうておいた」。㊁廿人々。

まへもつて〔前以〕(副) あらかじめ。かねて。

まへやく〔前厄〕(名) 厄年の前年、厄は其後半期にかゝることありといふ。

まへわ〔前輪〕(名) 鞍の前の高き處。

まへわたし〔前渡〕(名) ㊀期日前又は到來前にわたしおくこと。㊁まへがし。

廿まへわたり〔前渡〕(名) 前を過ぎわたりて行くこと。「御—」。

まほ〔眞帆〕(名) 順風にかけたる帆。

廿まほ〔眞穗〕(名) まじめ。ほんたう。「—に記す」。

まぼし (形、二) 「まばゆし」の轉。

マほふ〔魔法〕(名) 魔力にて怪しき事を行ふ術。(妖術)。——つかひ〔魔法遣〕(名) 魔法をつかふ人。

マホメットけう〔麥哈默教＝Mahometanism〕(名) 「アラビヤ」國「メッカ」の人「マホメット」を教祖とし、其人格を中心として組織せられたる一神教、其神を「アラー」(Allah)と呼び其經典を「コーラン」(Koran)といふ。「アジア」の西方及「アフリカ」の北方等に行はる。「フヰフヰ」教。(回回教)。

廿まほら (名) 山丘などに圍まれたるところ。まほらま。まほろば。

廿まほらま (名) 前條に同じ。

廿まほる〔貪〕(他、ら四) むさぼり食ふ。まうはる。

廿まぼる〔守〕(他、ら四) 「まもる」に同じ。

まぼろし〔幻〕(名) (目惑(マホル)の義) ㊀現在せざるもの、現在せるかの如くに見ゆるもの。㊁見ゆるまもなく忽ち消え失(ウ)するもの。㊂魔法つかひ。——のよ〔幻世〕(名) はかなき此世、無常の世。

廿まほろば (名) 「まほらま」に同じ。「大和は國の—」。

まま〔儘、隨、任〕(名) ㊀其さまにまかすること。其なりゆきに隨ふこと。「心の—」。㊁思ふとほり。「—ならず」。㊂如何にあらうとも頓着せざること。

廿まま〔乳母〕(名) めのと。うば。

まま〔飯〕(名) めし。(小兒の語)。

まま〔間〕(副) をりをり。をりふし。(往々)。

まま—〔繼〕(接頭) (間々の義) ㊀親子とはいへど生まぬ中なる意を表はす語。㊁兄弟とはいへどはらちがひなる意を表する語。「—え」。「—いも」。

ままおや〔繼親〕(名) 生まぬ中の親。

廿ままき〔細射〕(名) 木と竹とを繼(ツ)ぎ合はせたる弓、「いかにせん、—の弓のともすれば」。——や〔細射矢〕(名) 細射に用ふる矢、鏃(ヤジリ)は金屬製なり。——ゆみ〔細射弓〕(名) 「まゝき」に同じ。

ままきやうだい〔繼兄弟〕(名) 異腹の兄弟、はらちがひ。

ままこ〔繼粉〕(名) 粉を水などにて捏(コ)ぬる時、中にこなれぬところのできたる部分。

ままこ〔繼子〕(名) ㊀生まぬ中の子。まゝのこ。はらちがひの子。たねちがひの子。㊁疎外せらるゝもの。——あつかひ〔繼子扱〕(名) 殊更らに他と異にしてうとんずること。親しくせざること。——こんじやう〔繼子根性〕(名) 自分は疎外せらるゝものと思へるひがみ根性。

ままごと〔飯事〕(名) 女兒などの遊戲、おもちやにて、炊事のまねをなすこと。

ままし〔繼〕(形、二) 生まぬ中にてあり。又、腹ちがひにてあり。

ままちち〔繼父〕(名) 生まぬ中の父。(異父)。

ままなき〔吃〕(名) どもり。ことどもり。(奥州及越後地方の方言)。

ままに〔隨〕(副) ㊀如くに。通りに。㊁よりて。隨ひて。まにまに。

ままはは〔繼母〕(名) 生まぬ中の母。けいぼ。(異母)。

ままよ〔儘〕(感) 如何にならうとも。さもあらばあれ。「—あとは野となれ山となれ」。

廿まみ〔目見〕(名) 目をはたらかして物を見る氣色。物を見る目もと、目つき。

まみ〔眞猯〕(名) 【動】狸の一種、普通の狸よりは肥滿し、毛色淡黑色なり、穴居しよく眠る。(猯、貒)。

まみえ〔見〕(名) まみゆること。めみえ。

まみゆ〔見〕(自、や下二) おめにかゝる。謁見す。會見す。

まみる〔塗〕(他、ら四) ぬりつく。ぬり汚す。

まみる〔塗〕(自、ら下二) ぬれ汚る。つき汚る。まぶる。「血に—」。

〔まみれる (自) 「まみる」の訛。

まむかひ〔眞向〕(名) まともむかひ。

まむき〔眞向〕(名) 正しく向ふこと。正しく前へ向きたること。正面。

まむぎ〔眞麥〕(名) 【植】小麥の一名。

まむし〔眞蟲〕(名) 【動】蛇類に屬する爬蟲、多く濕地に棲む、頭は三角形をなして太く、頸細くして尾尖れり、全身暗灰色にして赤褐色の斑文あり、毒牙は毒液の流通する孔貫通して管狀をなし、平生潛伏すれども口を開けば起立す、其毒は激甚なり。はみ。くちばみ。

まむすび〔眞結〕(名) こまむすび。(死結)。

まめ〔豆、荳〕(名) ㊀【植】荳科に屬する植物、葉は三個の小葉より成り、花は小形にして帶紫色若しくは白色を呈す、花柱は通常平滑にして莢は通常くびれを有す、種子は重要なる食料にして、廣く栽培せらる。(菽)。㊁【植】大豆の特稱。㊂女の陰核。

まめ〔肉刺〕(名) 手足に生ずる豆の如き水腫、勞作又は履物などのためにすれて生ずるもの。のいずみ。(胼胝)。

まめ〔忠實〕(名) ㊀廿まじめ。まこと。はんき。あだの對。㊁面倒をいとはずになすこと。よく注意して

はたらくを。勤勉なるを。眞心をつくすを。かげひなたなきを。信實。㊂身體の健全なるを。すこやか。㊃いろごのみ。

まめ—[豆](接頭) 成語に冠して、小さき意を表はす語。「—人形」。

まめ-いた[豆板](名) 銀玉。

まめ-いり[豆炒](名) ㊀豆を火に炒(イ)りたるもの。いりまめ。㊁豆・氷・あられなどを炒(イ)りて砂糖をまぜたるもの。

まめ-うち[豆打](名) まめまき。おにやらひ。

まめ-がき[豆柹](名) 【植】「さるのがき」の一名。(君遷子)。

まめ-がに[豆蟹](名) 【動】蟹の一種、いと小形なるもの。

まめ-がら[豆萁](名) 豆の實をとりさりたる枝莖など。

まめ-ぎん[豆銀](名) 銀玉。まみいた。

まめ-ざう[豆藏](名) ㊀口早く巧におどけたることをいひ又は行ひなどして金錢をもらひあるく賤しきもの。㊁轉じて、よくしやべるものをいやしめていふ語。

まめ-ざき[豆咲](名) 蝶形花冠を有する花。豆又は藤などの類の花の形にいふ語。(蝶形花)。

まめ-しぼり[豆絞](名) 芥子絞の粒の大いなるもの。

‡**まめ-ぞめ**(名) 古昔、柳の下襲の裏を青黑色に染めたるもの。

まめ-だ・つ たち・つ・て・て [實立](自、た四) ㊀‡まじめになる。本氣となる。ひらき直る。(斂色)。㊁まめやかに行ふ。

(**ま-めつ**)[磨滅](名) すれてへるを。「活字の—」。

‡**まめ-つき**[豆搗](名) 「きなこ」に同じ。

まめ-でっぱう[豆鐵砲](名) 一種の玩具、小さき鐵砲の如くにつくり、豆を彈丸としてうつもの。

‡**まめ-どろばう**(名) 「よばひ」に同じ。

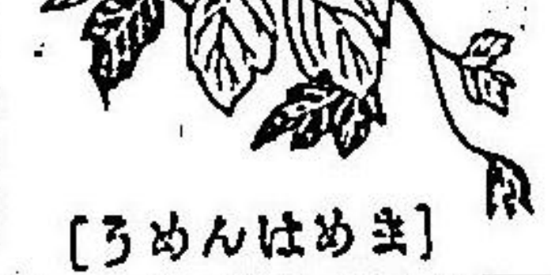
まめ-なっとう[豆納豆](名) 濱名納豆に對して、普通の納豆の稱。

まめ-にんぎやう[豆人形](名) けしにんぎやう。

まめ-のこ[豆粉](名) 「きなこ」に同じ。(豆麨)。

まめ-のと[豆油](名) 大豆を水に浸し、石灰を加へて碾(ヒ)きたるものを綿布にて漉(コ)したる液、豆腐の製造又は染物などに用ひらる。

まめ-はんめう[豆斑猫](名) 【動】鞘翅類中芫菁科に屬する細蟲、頭部赤褐色を呈し全身黑色にして翅に三個の黃色を帶びたる縱條あり、大豆の葉を食害す。(葛上亭長)。


[まめはんめう]

まめ-ふぢ[豆藤](名) 【植】旌節花科の落葉灌木、葉は楕圓形にして尖り、鋸齒あり、花軸は二三寸にして、黃色の花をひらき、球形の果實をつく。きぶし。(旌節花)。

まめ-まき[豆蒔](名) ㊀豆の種子を畑に蒔くを。㊁「おにやらひ」に同じ。

まめ-まはし[豆廻](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、深山に棲み、形もずに似る、頭及翅は黑色にして尾は茶褐色をなし、他は灰色なり、嘴は黃色にして脚は赤色なり、豆をよく嘴にて廻轉す。まめどり。いかるが。(蠟觜、三光鳥)。

まめ-まめ・し しく・しく・し・き・しけれ [忠實](形、二) ㊀いと忠實なり。まことに正直なり。㊁働きぶり深切なり。よく立ち働けり。㊂まじめなり。本氣なり。

まめ-やか[實](名) ㊀忠實なるさま。かげひなたなきさま。㊁はたらきぶりの親切なるさま。注意のゆきとゞくさま。㊂まじめなるさま。

‡**まもら・ふ** [護](他、は下二) 「まもる」の延言。

まめ-をとこ[實男](名) ㊀まめなる男。まじめなる男。まことある男。眞意のある男。㊁好色なる男子。

まめ-をとこ[豆男](名) ㊀豆蒔する年男。㊁小さき體の男。

まも-なく[間無](副) ㊀絶え間なく。ひまなく。㊁わづかの後に。やがて。

マ-もの[魔物](名) ばけもの。禍をなすもの。

まもり[守](名) ㊀まもるを。㊁まもる設備。そなへ。㊂「まもりふだ」の略言。㊃「まもりぶくろ」の略言。——**がたな**[守刀](名) 護身用の刀、多く短刀にいふ。——**がみ**[守神](名) 守護したまふ神。——**づけ**[守附](名) 昔時の戰爭にて、決死の武士が、自己の名を記して背につけおきしもの。——**ぶくろ**[守袋](名) 守札を入れおく袋、厄疫を除くためとて常に身につけおるもの。(守囊、擁頸袋)。——**ふだ**[守札](名) 神佛の加護のこもるといふ札、社寺などより受け、厄難などをよくるため身のまもりとするもの。(護符、神符)。——**ほんぞん**[守本尊](名) 其人を守る佛。‡——**め**[守目](名) 守る役。目付。

まも・る ら・り・る・る・れ・れ [守](他、ら四) ㊀‡伺ひ考ふ。うかゞふ。㊁見詰む。目を離さず。㊂害あらせじと庇(カバ)ふ。侵されじと防ぐ。保護す。たもつ。(衛、護)。

ま-や[馬屋](名) ㊀うまや。㊁宿場。

‡**ま-や**[兩下](名) 棟の兩側に破風を設けて、前後に葺きおろしたる家作。

(**まやかし**)(名) まやかすを。——**もの**(名) にせもの。いかもの。

(**まやか・す**) さ・し・す・す・せ・せ (他、さ四) 紛らかし迷はす。ごまかし欺く。(騙)。

(**ま-やく**)[痲藥](名) まひれぐすり。

まゆ[繭](名) 蠶が自ら吐出したる纖維性の絲狀物をもつてつくり、中に籠りて蛹期を經過する巢、楕圓形にして普通少しくくびれを有す、色は黃又は白色にして、一匹一個を普通とす、これより生絲又は眞綿を採取せらる。又、すべて蛾類の幼蟲が蛹期を經過するためにつくる外部の包被物の稱、何れも纖維性の絲狀物より成る。

まゆ[眉](名) ㊀まいげ。㊁まゆずみ。——**げ**[眉毛](名) まいげ。——**じり**[眉尻](名) 眉毛の末尾。——**ずみ**[眉墨](名) 眉を畫にて畫くを。又、其畫くに用ふる墨。(黛、蛾綠)。——**ね**[眉根](名) 眉毛の根もと。——**はき**[眉掃](名) ㊀小さき刷子、白粉をつけたる後、眉を拂ふに用ふるもの。㊁【植】「はなあざみ」の一名。

まゆ-だま[繭玉](名) 柳の枝に繭ほどの餅を數多つけたるもの、東京にては龜井戸妙義神社などにて賣る、轉じて、柳の枝にいろいろの飾をつけたるものをもいふ。

‡**ま-ゆみ**[眞弓](名) 弓の美稱。

まゆみ[檀](名) 【植】衛矛科に屬する灌木、花は春に開く、花蓋は白黃色にして帶紫色の基脚を有し、葯は紫黑色なり、果實は扁(ヒラ)くして自然に裂けて紅肉を見はす、觀賞用として栽培せられ、木材も種々の用に供せらる、古昔、おもに弓をつくる料となしゝより此名あり。にしきぎ。(衛矛)。

‡**まよ**[繭](名) 「まゆ」に同じ。

‡**まよ-がき**[眉畫](名) まゆずみにて眉をかくを。

マ-よけ[魔除](名) 魔を除(ヨ)くるたよりとなるもの。神符。

まよはか・す さ・し・す・す・せ・せ [迷](他、さ四) 次條に同じ。

まよは・す さ・し・す・す・せ・せ [迷](他、さ四) まよふやうにす。まどはす。

まよひ[迷](名) ㊀まよふを。まどひ。㊁まぎるゝを。まぎれ。㊂成佛のさはりとなる死者の妄執。㊃‡布帛の經緯亂れてかたよるを。

‡**まよ-びき**[眉引](名) まよがき。「つねなりし、ゑまひ—さくはなの」。

まよひ-ご[迷子](名) 路に迷ひて歸るを得ざる小さき兒。まひご。(迷兒)。——**ふだ**[迷子札](名) 迷子となりたるとき、容易く人に知らるゝため、住所氏名を表るして子供の腰につくる札。

まよひ-ぼし[惑星](名) 「わくせい」に同じ。

まよ・ふ は・ひ・ふ・ふ・へ・へ [迷](自、さ四) ㊀「まどふ」に同じ。㊁まぎる。まがふ。㊂あちらに赴きこちらに來る。「吹き—」。㊃死者の魂魄が妄執のために成佛し得ず。㊄‡布帛の經緯亂れて片寄る。

‡**まよわ**[石炎螺](名) 貝物不詳、螺(ニシ)の類といふ。

マラ[魔羅](名) (梵語 Mara) ㊀惡念又は修道の障礙をなすもの。(惡魔、邪魔)。㊁陰莖の稱。(もと僧家の陰語)。

‡**まらうど**[賓、客](名) (稀に來る人の義)他より訪れ來りたる人。きやく。‡——**ゐ**[賓居](名) 賓を通す所。客殿。客座敷。

‡**まら-ひと**[賓、客](名) まらうど。きやく。

マラリア[痲拉利亞](名) (「イタリア」語 Malaria 惡しき空氣の義) ㊀沼澤・濕地若しくは植物腐敗等より發生する蒸發氣の如く、不健康なる物質を含有する氣。(瘴氣)。㊁一種の傳染病、先づ惡寒を感じて戰慄し、やがて高熱を發して煩悶し、後體溫普通となり、寒熱が一定の傾向を有するもの、即ち、瘧(オコリ)これなり。——**ねつ**[痲拉利亞熱](名) 前條(二)に同じ。

まり[毬](名) 圓狀をなす玩弄用の球、革製・護謨製又は綿を心とし絲をまとひたるもの等あり。(鞠)。

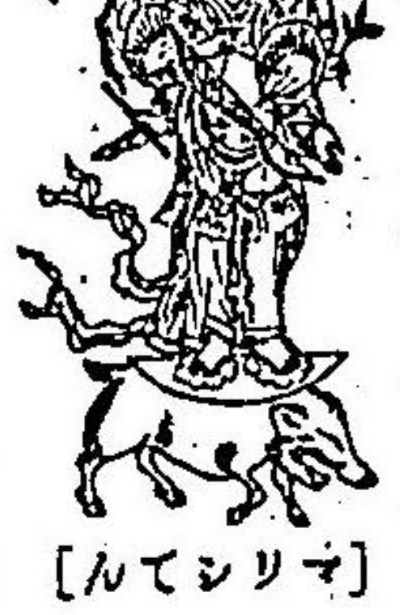
‡**まり**[椀](名) 古昔、流動體を盛りたる器。「金—」。(鋺)。

—**まり**[餘](接尾) 「あまり」の略言。

まり-うち[打毬](名) まりをうちあふ遊戲。

まり-ぐつ[毬履](名) 蹴毬のときにはくくつ。

マリシ-てん[摩利支天](名) 【佛】(「マリシ」は梵語 Marici 陽炎神の名、後世誤りて、武頭の神として祀る。


[マリシてん]

まる[丸](名) ㊀球形。又、圓形。㊁完全、又、全體。「—出し」、「—きり」、「—儲(ケ)」。㊂城郭の內部、「本—」。㊃(金錢の隱語)。

まる[虎子](名) 大小便を受くる桶、病者又は小兒の用とするもの。おまる。おかは。

‡**ま・る** ら・り・る・る・れ・れ [放](他、ら四) 大小便をなす。ひる。

——**まる**[丸](接尾) (麻呂の訛)人、又は名作の器具若しくは犬・船などの名に添へ用ふる語。「牛若—」、「膝切—」、「東京—」。

まる-あらひ[丸洗](名) 衣服など解きはなさず、其まゝにて洗濯するを。

まる-うち[丸打](名) 紐(ヒモ)などを丸く打つを。又、其打方の紐。

まる-えり[圓襟](名) 袍又は水干などの襟の圓く仕立てたるもの。(盤領)。

まる-えり[丸襟](名) 羽織の襟の丸幅にて仕立てたるもの。

まる-おび[丸帶](名) 一枚の帶地を折り返して縫ひ合はせたる婦人の帶、腹合の對。

(**まる-がち**)[丸勝](名) 全然のかち。

まる-ガッパ［丸合羽］（名） ひきまはし。

まる-かんな［圓鉋］（名） 鉋の一種、中高にて圓き刃を外（ト）まるといひ、圓き溝を削るに用ふ、中窪にて圓き刃を内まるといひ圓き材を削るに用ふ。

まる-き［丸木］（名） 削り又は磨きなどせず伐りたるまゝの木。――**ばし**［丸木橋］（名） 一本の丸太を渡して橋とせるもの。（獨木橋）。――**ぶね**［丸木船］（名） 一木の樹幹を刳（ク）りて船とせるもの。うつほぶね。（刳木船）。

まる-ぎり［圓錐］（名） 圓き穴を穿つに用ふる錐、刃は半圓形をなす。

マルク［馬］（名） （「ドイツ」語 Mark）「プロシア」國の貨幣、我國の四十八九錢にあたる。

まる-ぐけ［丸絎］（名） 丸くくけて綿を入れたる帶。（圓衽）。

まる-こ［丸子］（名） 【動】金魚の一種、體肥滿して殆ど球狀をなすもの。

まる-ごし［丸腰］（名） 昔時、武士が腰に刀を佩（オ）びざること。

まる・し（く、しき、けれ）［圓］（形、二） 「まろし」に同じ。

まる-た［丸太］（名） ㊀丸く長き材木。㊁【動】「みぞごひ」に同じ。――**ばしら**［丸太柱］（名） 前條（一）に同じ。

まる-だし［丸出］（名） ㊀かくさずに全體をあらはすこと。むきだし。㊁全然其人に似て殆ど見分けがたきこと、「團十郞――」。

まる-ヂヤウチン（ヂヨウ―ウ―）［丸提灯］（名） 丸形の提灯。

まる-づけ［丸漬］（名） 切らずに其まゝ漬物とすること、又、其漬物。――**うり**［全漬瓜］（名） 【植】葫蘆科に屬する植物、秋の頃、果實を結ぶ、形まくはうりに似て大なり、熟すれば黄色となる、專ら漬物とす。（越瓜）。

〔**まる-で**［丸］（副） 全く。殘らず。すべて。

まる-どり［丸取］（名） すべてを取ること。

まる-ね［丸寐］（名） 「まろね」に同じ。

まる-のみ［圓鑿］（名） 刃の圓き鑿、圓き穴を穿つに用ふるもの。

まる-のみ［全呑］（名） ㊀其儘の形にて呑むこと、嚙まずにのみこむこと。㊁全體を併呑すること。㊂全體殘らず會得すること。㊃よく研究せずして、たゞ其物事を記憶すること。

まる-はだか［丸裸］（名） ㊀あかはだか。㊁一身の外には何等の所有物なきこと。

まる-ブシゆかん［圓佛手柑］（名） 【植】佛手柑の一種、果實は柚に似て稍や稍圓狀をなす、砂糖漬として食用に供せらる。（枸櫞、香櫞）。

〔**まる-ぽちや**（名） 顏の丸く肉づきて愛嬌あること。（東京の方言）。

まる-まけ［丸負］（名） 全然負くること。

まる-まげ［丸髷］（名） 婦人の髮の結方、頂に稍圓形にして、稍や扁（ヒラ）き髻をつけたるもの、嫁したる女の結ふを常とす。ほんだ。まるわげ。

まる-まる［丸丸］（名） ㊀二重の圏點。㊁〔金錢の隱語。㊂或物事を暗に指していふ語、「――は留守か」。

〔**まる-まる**［丸丸］（副） まつたく。すべて。

〔**まる-まる-さ**［丸丸］（副） よく肥えふとりて。

まる-み［圓狀］（名） 圓くあるさま。

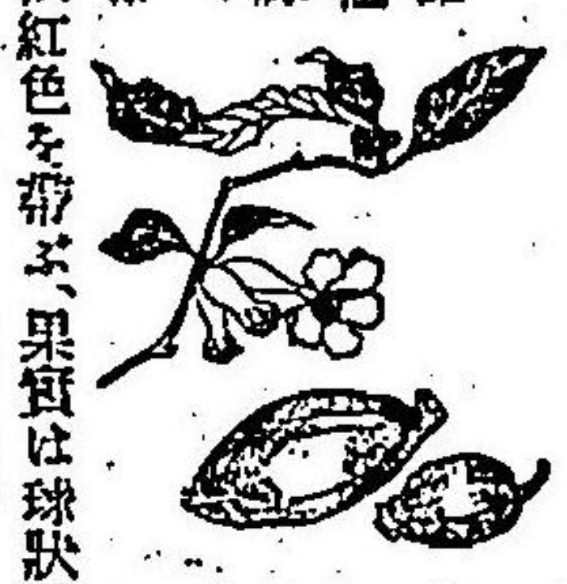
まる・む（め、め、む、むる、むれ、めよ）［丸］（他、ま下二） 「まろむ」に同じ。

まる-むね-づくり［圓棟造］（名） 屋根の勾配を中高に造りたるもの。

〔**まるめ-こ・む**（ま、み、む、む、め、め）［丸込］（他、ま下二） 他人を自分の自由になるやうにとりこむ。

〔**まるめる**（他） 「まるむ」の訛。

マルメロ［榲桲］（名） 【植】（「ポルトガル」語 Marmelo）薔薇科の植物、葉は楕圓形にして、緣邊に細かき鋸齒を有し、下面に密毛を有す、花は頂端に生じ白色にして淡紅色を帶ぶ、果實は球狀黄綠色にして香氣あり、食用に供せらる。（香圓）。



［マルメロ］

マルモット［土撥鼠］（名） 【動】（い）（「オランダ」語 Marmot）齧齒類に屬する獸、四肢短くして形南京鼠に似、指趾に蹄狀の爪あり、尾なし、もと南「アメリカ」の原產なりしが、今は諸邦に飼養せらる。「モルモット」。（名）譯りて、天竺鼠の稱。

まる-もの［圓物］（名） 的の一種、徑五寸乃至八寸許にして太鼓に似たるもの。

まる-やき［丸燒］（名） ㊀切らずにまるにて燒くこと、又、其燒きたるもの。「芋の――」。㊁全體を燒くこと。

まる-やけ［丸燒］（名） 火にかゝり殘るところなく一切燒くること。

まれ［希、稀］（名） しげからざること。多からざること。――**に**［希、稀］（副） たまさかに。めづらしく。

十**まれら-に**［希、稀］（副） まれに。

十**ま-ろ**［麻呂、麿］（代） 自稱の代名詞。おのれ。われ。

――**まろ**［麻呂、麿］（接尾） ㊀古昔、人の名の下につけ用ふる語、「牛若――」、「多聞――」。㊁後には、童子にのみ用ひし語、「稱――」、「田村――」。

十**まろ-がしら**［圓頭］（名） ばうずあたま。

まろが・す（さ、し、す、す、せ、せ）［轉］（他、さ四） ころがす。まろばす。

十**まろ-がなへ**［圓鼎］（名） 足なき鼎、即ち釜の古稱。

十**まろか・る**（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）［圓］（自、ら下二） 圓く凝り固まる。まろくなる。

まろき-ばし［丸木橋］（名） 「まるきばし」に同じ。

まろき-ぶね［丸木船］（名） 「まるきぶね」に同じ。

十**まろ・ぐ**（げ、げ、ぐ、ぐる、ぐれ、げよ）［丸］（他、か下二） まろむ。

まろ・し（く、し、き、けれ）［圓］（形、二） ㊀圓形若しくは球形なり。まるの形なり。まどかなり。㊁かどだゝず。かどなし。㊂缺（カ）けたる所なし、滿ち足りてあり。㊃おだやかなり。

まろ-ね［丸寐］（名） 帶をもとかず衣をもかへず、着のみ着のまゝにて寐ること。まるね。まろぶし。

まろばか・す（さ、し、す、す、せ、せ）［轉］（他、さ四） まろばす。

まろば・す（さ、し、す、す、せ、せ）［轉］（他、さ四） まろぶやうにす。ころがす。ころばす。

まろび-ね［轉寐］（名） ころびね。

まろ・ぶ（ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ）［轉］（自、は四） ㊀圓くめぐりて行く。ころがる。㊁たふる。ころぶ。

まろ-ぶし［丸臥］（名） まろね。まるね。

まろ・む（め、め、む、むる、むれ、めよ）［丸］（他、ま下二） かためて圓くす。

十**まろ-むし**［丸蟲］（名） 【動】「こがねむし」の古稱。

〔**まろめる**［丸］（他） 「まろむ」の訛。

十**まろ-や**［丸屋］（名） 茅・葦などにて葺（フ）きたる假家。「葦の――に秋風ぞ吹く」。

まろ-やか［圓］（名） まろきさま。

十**まろ-らか**［圓］（名） 前條に同じ

ま-わた［眞綿］（名） 繭を引きのばしたるもの、白くして光澤よく柔かにして輕し、衣に入れ又は種々の用に供せらる。木綿の對。（蠶綿）。

ま-わたし［間度］（名） ㊀竹木の細き材を組みたる壁の下地の目あらきもの。㊁まにあはせ。

十**まゐ――**［參］（接頭） 他の動詞に冠して、まゐるの意を表する敬語。「――のぼる」。

まゐら・す（せ、せ、す、する、すれ、せよ）［進］（他、さ下二） ㊀進上す。たてまつる。㊁自己の動作をあらはす動詞に添へて、敬意を表する語、「思ひ――」、「存じまゐらせ候」。

まゐ・る（ら、り、る、る、れ、れ）［參］（自、ら四） ㊀參上す。あがる。うかゞふ。㊁「飲む」「食ふ」「着る」「用ふ」などの敬語。㊂參詣す。まうづ。㊃負く。降る。㊄愛に溺る。

ま-を［眞麻］（名） 【植】「からむし」の一名。

ま-をか（カモウ）［眞岡］（名） 「まをかもめん」の略言。――**もめん**［眞岡木綿］（名） 下野國眞岡地方より產出する丈夫なる木綿。

十**まを・す**（さ、し、す、す、せ、せ）［申］（他、さ四） ㊀「言ふ」「告ぐ」の敬語。㊁仕官す。つかふ。㊂自己の動作をあらはす動詞に添（ソ）へて敬意を表する語。「御話し――」、「御送り――」。

ま-をとこ［間男］（名） ㊀みそかを。密夫。間夫。㊁密夫を持つこと。

〔**まん**［幔］（名） 幕の類。

〔**まん**［萬、万］（名） 數多きこと。

〔**まん**［萬、万］（數） 千の十倍。

〔**まん――**［滿］（接頭） 其數に滿てること、まる、「――年」、「――三」。

〔**まん-い**［慢易］（名） あなどりかろんずること。

〔**まん-いう**［漫遊］（名） 諸々方々を廻りあるくこと。

〔**まん-いち**［萬一］（名、副） 「ばんいち」に同じ。

〔**まん-いん**［滿引］（名） ㊀弓を十分に引きしぼること。㊁杯になみなみと注（ツ）ぎたる酒を、一氣に飲みほすこと。

〔**まん-えい**［滿盈］（名） 一杯になること、十分に足ること。みつること。

〔**まん-えつ**［滿悅］（名） 十分よろこぶこと。

まん-えふ-がな（ウ―ヨ）［萬葉假名］（名） （萬葉集に用ひたればいふ）漢字の意義によらず、其音をかりて、國語を寫したるもの。まな。まがな。

〔**まん-えん**［蔓延］（名） はびこること。（蔓衍）。

まん-が［馬鍬］（名） （「まぐは」の轉）一種の農具、形馬鍬に類して人の手に持ちて使用するもの。

〔**まん-かい**［滿開］（名） 十分に花の開くこと。

〔**まん-が-いち**［萬一］（名、副） 「まんいち」に同じ。

マンガン［滿俺＝Manganese］（名） ㊀灰赤色を帶びたる金屬、僅かに磁性を有し、質硬くして脆し、大氣中にては酸化すること鐵よりも速かなり、自然に遊離して產出することなし、其化合物は總て多量の酸素を含むが故に酸素を得る料に供せられ、又、玻璃・陶器の染料に供せらる。㊁俗に過酸化「マンガン」の特稱。（無名異）。――**ど**［滿俺土］（名） 酸化「マンガン」の一種、極めて軟鬆にして輕きこと黑土の如きもの。

〔**まんかん-しよく**［滿艦飾］（名） ㊀軍艦全體を飾り立つること。㊁〔身なりを美々しく飾ること。

〔**まん-き**［慢氣］（名） 慢心を懷くこと。おごりたかぶること。（慢心）。

〔**まん-き**［滿期］（名） 期限の滿つること。

〔**まん-ぎん**［漫吟］（名） そゞろに詩歌をくちずさむこと。くちずさみ。

〔**まん-ぐわ**［漫畫］（名） いたづらがきの畫。又、滑稽なる畫。「北齋――」。

〔**まん-くわい**［滿會］（名） 賴母子（タノモシ）講などの終期となること。

〔**まん-ぐわん**［萬卷］（名） おほくの卷物又は書物。

〔**まん-ぐわん**［滿願］（名） 祈願の日數のみつること。（結願）。

〔**まん-けい**［蔓荊］（名） 【植】「はまばひ」に同じ。

〔**まん-げん**［漫言］（名） そゞろごと。又、みだりなる言。

(まん-げん)［慢言］(名) たかぶりていふ言。

(まん-げつ)［滿月］(名)【天】太陰が太陽に對して衝に來りたるとき、太陰の全面の輝きて見ゆるもの。十五夜の月。望月。

(まん-ご)［漫語］(名)「まんげん」(漫言)に同じ。

(まん-ご)［慢語］(名)「まんげん」(慢言)に同じ。

(まん-こう)［滿口］(名) 口一杯。

(まん-こう)［滿腔］(名) 胸一杯。

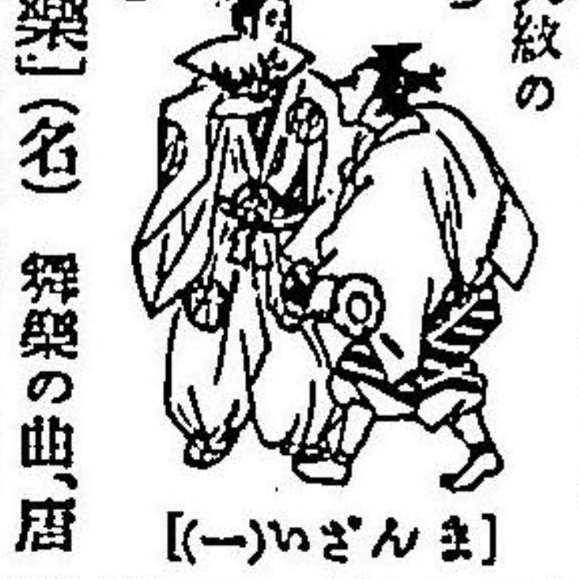
まん-ごくどほし［萬石通］(名)「せんごくどほし」に同じ。

まん-ゴフ［萬劫］(名) 限りなき世。萬世。(劫の條參照)。——**まつだい**［萬劫末代］(名) 萬世の後。永遠の後。

(まん-ざ)［滿座］(名) 座中全體。

(まん-さい)［滿載］(名) 一杯にのすること。

(まん-ざい)［萬歲］(名) ㊀よろづよ。(萬年)。㊁古昔、正月五日に行はるゝ公事なる釿始(テウナハジメ)の次に千秋萬歲(センズマンザイ)と祝ひたるに本づき、後世、年の初めに、風折烏帽子を戴き大紋の直垂を着て、腰鼓(ツヅミ)を擊ち祝言を歌ひて滑稽なる踊りを演ずるものゝ稱。——**あふぎ**［萬歲扇］(名) 萬歲の用ふる下等なる扇子。——**らく**［萬歲樂］(名) 舞樂の曲、唐の則天武后の作なりといふ。㊁踏歌(タフカ)の異稱。㊂俗に地震の時に唱ふる呪詞。


［まんざい(一)］

(まん-さく)［滿作］(名) 穀物のよくみのること。豐作。

(まん-さう)［蔓草］(名) 蔓莖を有せる草。つるくさ。

まん-ざら(名、副) ㊀廿ひたぶるなること。「――の忠ある人」。㊁全くそれと定まれるにもあらざるさまにいふ語、つねに下に打消の語を伴ふ。「――いやでもあるまい」。

(まん-さん)［蹣跚］(名、副) よろめくさま。よろぼふさま。

(まん-ざん)［滿山］(名) 山一杯。

(まん-じ)［滿字］(名) 滿洲の文字。滿文。

まん-じ［卍］(名) 西域の萬の字、佛の胸臆に描(ヱガ)き、吉祥(キチジヤウ)萬德の相となすもの。——**ともゑ**［卍巴］(副) 相追ふ如くにして縱橫に亂るゝさまにいふ語。

マンジユシヤゲ［曼珠沙華］(名)【植】(「マンジユシヤゲ」は梵語 Manjūsaka の略、天上の華の義) 石蒜科に屬する草、一根より數莖を生ず、葉は細長くして綠黑色を呈す、葉枯れて後、莖生じ花開く、花は繖形に排列す、花蓋は通常深紅色を呈し六片に深裂して各裂片は反捲す、雄蕊は花蓋より長し。しびとばな。(石蒜)。

(まんじゆ-せつ)［萬壽節］(名)「ばんじゆせつ」に同じ。

(まん-しん)［滿身］(名) からだ一杯。全身。

(まん-しん)［慢心］(名) ほこること。傲氣。

まん-ず(自、さ變)［慢］ 慢心す。ほこる。おごる。

まん-すぢ［萬筋］(名) 千筋(センスヂ)よりもなほ細き縞。

(まん-すゐ)［滿水］(名) 河水のみなぎり滿ること。

(まん-せい)［漫性］(名) 病氣の容易に全快せざる性質。持病となる性質。

(まん-せい)［蔓菁］(名)【植】「かぶら」に同じ。

(まん-ぜん)［漫然］(名、副) ㊀とりとめなきさまにいふ語。㊁注意せざるさまにいふ語。

(まん-ぞく)［滿足］(名) ㊀望み足りて不平なきこと。安んじてゐること。㊁十分なること。まったきこと。「――の事は出來ぬ」。㊂(數)方程式の未知數に適當なる値を與へたるとき、等式の成立すること。

(まん-だう)［滿堂］(名) 堂一杯。

マンダラ［曼陀羅］(名)(梵語 Mandala) ㊀【佛】淨土寶相の圖。㊁種々雜多の色。——**げ**［曼陀羅華］(名)【植】(い)蓮の花。(ろ)「きちがひなすび」に同じ。

(まん-ち)［滿地］(名) 地上一杯。

(まん-ぢやう)［滿場］(名) 場所一杯。

(まん-ちやく)［瞞着］(名) 欺くこと。たぶらかすこと。

マン-ヂユウ［饅頭］(名)(字の唐音の訛、蜀の諸葛孔明が南征して瀘水を渡りしとき、土俗人頭を以て其神を祭りしかば、孔明羊豕を以てこれに代へ且つ麪を以て塊をつくりこれに人頭を描きて、祭らしめしに濫觴すといふ、我國にては曆應年中、元人林淨因歸化して創製したりといふ) 一種の菓子、饂飩粉に甘酒を加へて捏(コ)ね、餡(アン)を包みて蒸したるもの。

マンテイカ(名)(「ポルトガル」語 Mantaiga) 豬家などの脂肪。

(まん-てう)［滿潮］(名) みちしほ。

(まん-てう)［滿朝］(名) 朝廷に滿つること。又、朝廷の人全體。

マンテル(名)(「オランダ」語 Mantel) 西洋服の上衣、外套。

(まん-てん)［滿點］(名) 規定の最高點に達すること。

(まん-てん)［滿天］(名) 空にみつること。又、空の全體。

(まん-てんか)［滿天下］(名) 天下の全體。

マント(名)「マンテル」に同じ。

(まん-ど)［萬度］(名) 萬度の祓(ハラヒ)をしたる祓串を祓箱に入れて配るもの。

(まん-どう)［萬燈］(名) ㊀多數のともしび。㊁木の框(ワク)に紙を張り、中に火を點ずるもの、祭禮などに用ふ。

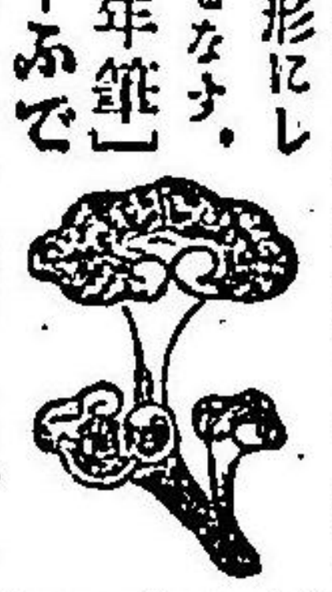
まん-どころ［政所］(名) ㊀公家などの邸にありて、財政及雜事を掌りし所。㊁檢非違使の廳。㊂鎌倉幕府の政令を出だしゝ所。㊃室町幕府の政事を統(ス)べし所。

マントル［Mantle］(名) ㊀「マンテル」に同じ。㊁白熱燈の火焰を覆ひ、光輝を發するもの、硝酸「ドリウム」・硝酸「セリウム」を染ませたる筒狀の綱を燒き、灰となしてつくる。

まん-な［眞字］(名)「まな」の音便。

まん-なか［眞中］(名) ただなか。(正中、最中)。

(まん-ねん)［萬年］(名) よろづよ。萬歲。——**ぐさ**［萬年草］(名)【植】景天科に屬する草、濕地に生ず、葉は長楕圓形にして厚く、殆んど半圓筒狀をなす、初夏の頃、黃色五瓣の花開く。(佛甲草、玉柏)。——**しんざう**［萬年新造］(名) 年長(タ)くるまで嫁(トツ)がず、常に年少きよそほひをなせる婦人の稱。——**しんぞ**［萬年新造］(名) 前條に同じ。——**ず**［萬年酢］(名) 酒・酢・水を合はせ密封せば日を經(ヘ)てなる酢、其一盞を汲めば、酒一盞を加へ置き、永く盡きざるやうに貯へおくもの。——**だけ**［萬年茸］(名)【植】菌類の一、枯木の腐蝕したる處に生ず、固形にして柄長く傘部は輪狀をなす。


［まんねんだけ］

——**ひつ**［萬年筆］(名) 次條に同じ。——**ふで**［萬年筆］(名) 管中に入れおく墨汁又は「インキ」が細孔を通じて筆端に出づる裝置の筆、墨汁又は「インキ」をつけずとも、隨時使用の出來るもの。

(まん-のう)［萬能］(名)「ばんのう」に同じ。

(まん-ば)［漫罵］(名) みだりにのゝしること。

(まん-ば)［慢罵］(名) 自らほこりて他をのゝしること。

まん-ばう［飜車魚］(名)【動】固顎類飜車魚科に屬する魚、體は扁くして、殆ど尾なく、皮膚粗し、背部は灰白色にして黃褐色の斑紋あり、浪に從ひて游泳す、奧羽の海岸に多く產す。——**ざめ**【動】前條に同じ。

まん-ぱち［萬八］(名)(萬の中にて眞は僅に八つの義) うそ。いつはり。

(まん-び)［滿備］(名) 完全にそなはること。

まん-びき［萬引］(名) 物を買ふさまをよそほひて、其物を掠(カス)むること。又、其人。(扒手)。

(まん-ぴつ)［漫筆］(名) ㊀そゞろにかきつくること。㊁隨筆。——**ぐわ**［漫筆畫］(名) そゞろにかきたる畫、何といふきまりなくかきたる畫。

(まん-びやう)［萬病］(名) 多くのやまひ。

(まん-ぴやう)［漫評］(名) みだりなる批評。何くれとなき批評。

(まん-ぶ)［慢侮］(名) 自らたかぶり他をあなどること。

(まん-ぷく)［萬福］(名)「ばんぷく」に同じ。

(まん-ぷく)［滿腹］(名) 腹一杯。

(まん-べん-なし)［萬遍無］(形、二) ゆき屆かぬ所なし。

(まん-ま)［飯］(名) まゝ。めし。いひ。(小兒の語)。

(まん-まく)［幔幕］(名) 幕。

まん-まる［眞圓］(名) 正しく圓きこと。正圓。

まんま-と(副) うまうまと。首尾よく。たくみに。

(まん-まん)［漫漫］(名、副) ひろきさま又はながきさまにいふ語。

(まん-まん)［滿滿］(名、副) みちあふるゝさまにいふ語。「不平――」。

(まん-めん)［滿面］(名) かほ全體。

(まん-もく)［滿目］(名) 目にみゆるかぎり。

マンモス［Mammoth］(名) 古世界に生存せし極めて巨大なる獸、象の種類なりといふ。

マンラン［孟浪］(名)(字の唐音)「まうらう」に同じ。

(まん-り)［鰻鱺］(名)【動】「うなぎ」に同じ。

(まん-りき)［萬力］(名)(萬人の力の義) 器械にて數人の力に當たるもの、總稱、又、車地(シヤチ)の特稱。

(まん-りやう)［萬兩］(名)【植】紫金牛科に屬する木、高さ一尺許、葉は革質にして厚く光澤あり、花は繖狀に排列し、花冠は稍や白色にして暗色の小點を有す、果實は球狀にして、紅色・黃色或は白色を呈す、觀賞用として栽培せらる。(硃砂根)。

(まん-れう)［滿了］(名) みちをはること。

(まん-ろく)［漫錄］(名) そゞろにしるしたるもの。

(まん-ろく)(名) 準(ロク)の正しきこと。「――でない」。

まん-ゐん［滿員］(名) 人員みちてもはや一人も入るべからざること。人員の定限に滿つること。

み

み 唇的鼻音M即ち兩唇を閉ぢて有聲の氣息を鼻腔に通じて發する音と、母音「い」との綴音。

み［身］(名) ㊀からだ。身體。㊁ぶん。自身。㊂ぶんざい。身分。㊃まごゝろ。まこと。「――を盡す」。㊄ししむら。肉。㊅木皮の內部。㊆鞘の內なる刃(ハ)。㊇器物の蓋に對して、物を入るゝ方の稱。——**にあまる** 堪へられぬ。又、過分なり。——**にならぬ** むちつきて見聞せられず又は飲食せられず。——**につまされて** 我身にひきくら

べられて。―ふたつになる　分娩す。―をくだく［碎身］　能ふかぎりの力を盡す。―をこにす　前條に同じ。―をたつ［立身］　世に自己の地位を占む。又、出世す。

み［實、子］（名）㊀花の生殖作用によりて成生し種子を含有するもの、即ち果實。（核）。㊁汁の中の菜又は肉の稱。㊂包被せられたる内容。なかみ。

み［巳］（名）（蛇（ヘビ）の略稱）㊀十二支の一、第六次のもの。㊁時の名、昔時の巳のよつどき、今の午前十時に當る。㊂方角の名、東南の南によりたる所。

廿**み**［水］（名）「みづ」の略言。「―がくる」。「―門」。「垂―」。

み［海］（名）「うみ」の略言。「ありそ―」。

み［鰘］（名）【動】「みごひ」に同じ。

み［箕］（名）（簸（ヒ）と同義）穀を簸（ヒ）て塵・泥などを分くる具、底く淺く前平かにして三方に緣あり、小さき割竹を編みて作れるもの。

み［見］（名）みると。「―に行く」。

み［身］（代）自稱の代名詞。われ。「―不肖といへども」。

み［三］（數）一と二との和。みつ。

み―［御］（接頭）（眞（マ）の義）物事に冠して敬稱に用ふる語。

（**み**―）［未］（接頭）或語に冠して、未だ其物事のならざるさまを表はす語。「―開」。

み―［三、深］（接頭）物事の美稱に用ふる語。「―吉野」。

―**み**（接尾）形容詞の語根に添へて、其程度又は狀態を表し、これを名詞となす語。「赤―」。「深―」。

（―**み**）［味］（接尾）調合の材料又は飲食物を數ふる語。「百―の飲食」。

み-あかし［御燈明］（名）㊀神佛の前に供ふる燈明。㊁佛にさゝぐるみあかしの料とする錢。

み-あ・ぐ（ぐげぐぐるぐれげよ）［見上］（他、か下二）㊀首をあげて見る。仰ぎ見る。㊁優りて見ゆ。たふとく見ゆ。

〜**みあげる**（他）「みあぐ」の訛。

み-あは・す（ーアワス）（せせすするすれせよ）［見合］（他、さ下二）㊀對照す。互に見る。相見る。㊁彼此をくらべて見る。㊂時機をはかる、場合をうかゞふ。㊃決行することを控へ待つ。㊄夫婦となす。めあはす。

み-あはせ（ーアワセ）［見合］（名）見合はすると。〜―る（他）「みあはす」の訛。

み-あひ（ーアイ）［見合］（名）㊀みあふと。㊁婚姻せんとする男女みづからの諾否を定むるために、對面して互に容子を見合ふと。

み-あ・ふ（ーアウ）（はひふふへへ）［見合］（他、は四）互に相見る。

廿**み-あらか**［御舍］（名）（御在處の轉）家の敬語。

み-あらは・す（ーアラワス）（さしすすせせ）［見露］（他、さ四）㊀さがし出す。㊁あばき出す。

廿**み-あれ**［御生］（名）山城國加茂神社の祭事の稱、陰暦四月中の申の日に行はれたり。

み-いだ・す（さしすすせせ）［見出］（他、さ四）外（ト）の方を見る。ながむ。

み-いだ・す（さしすすせせ）［見出］（他、さ四）「みだす」に同じ。

ミイラ［木乃伊］（名）㊀（イギリス語 Mummy を支那にて、木乃伊（モノ）と誤譯せしものゝ轉訛）「エジプト」國古代の習俗にて、人死すれば其屍に藥を施して腐爛を防ぎ、これを地に埋めむき年久しくなりて乾枯せるもの、固くして黑し、藥用に供せらる。㊁轉じて、生物體の化石。

み-いり［實入］（名）㊀實の成熟すると。㊁收入。㊂內にもの入れると。

み-い・る（らりるるれれ）［見入］（自、ら四）㊀見とる。ふけり見る。㊁とりつく。たゝる。「天狗―」。（魅）。

み-い・る（れれるるるれれよ）［見入］（他、ら下二）㊀奥まで見る。㊁執念をかく。

み-いれ［見入］（名）見いるゝと。

み-うけ［身請］（名）㊀勸奉公に身を賣りたるものゝ身の代（シロ）を出して、其奉公をやめさせ普通の人となすと。うけだすと。（贖身）。㊁すべて金錢を出して藝妓又は娼妓などを其商賣より退（ヒ）かすると。

み-うごき［身動］（名）からだを動かすと。

み-うち［身內］（名）㊀からだぢゆう、全身。（渾身）。㊁みより、親族。（親類、親戚）。㊂同一の親方に從屬する子分のものども。

み-うり［身賣］（名）身の代（シロ）をとりて、約定の年季間、勸奉公などに出づると。

みえ［見］（名）㊀見ゆるさま。みば。㊁うはべのかざり、外觀。「―坊」。（邊幅）。

み-えい［御影］（名）肖像の尊稱。貴き御肖像。―だうく［御影供］（名）御影に供ふる物。―だうウド［御影堂］（名）㊀御影を奉祀する堂。（靈屋）。㊁京都五條極西の新善光寺（彌陀の御影のある所）の俗尼の製出したる扇子、其つくり方を御影折といふ。―をり［御影折］（名）前條を見よ。

みえ-がくれ［見隱］（名）見えつ隱れつすると。或は見え或はかくるゝと。（隱見）。

廿**みえ-ぐる・し**（しくしくしきしけれ）［見苦］（形、二）まみえにくし。あひがたし。

廿**みえ-あらが・ふ**（ーガウ）（はひふふへへ）（自、は四）見えば見えは出て會ふ。をり〳〵目にふる。

み-おくり［見送］（名）出立をおくると、みおくると。（送別）。

み-おく・る（らりるるれれ）［見送］（他、ら四）㊀遠く行くまでながめ遣る。（目送）。㊁人の出立を送る。みたつ。

み-おと・す（さしすすせせ）［見致］（他、さ下二）此方を見る。

み-おとし［船首］（名）「みよし」に同じ。

み-おとし［見落］（名）みおとすと。みもらすと。

廿**み-おと・す**（さしすすせせ）［見貶］（他、さ四）見くだす。みさぐ。（蔑視）。

み-おと・す（さしすすせせ）［見落］（他、さ四）見ながら心づかずして脫（ト）す。見てゆくうちに漏（モ）らす。（看過）。

み-おとり［見劣］（名）豫ての想像よりは、其實際の劣れると。見つむれば次第に劣りて見ゆると。

み-おぼえ［見覺］（名）一旦見てそれを記憶せると。かねてより見て知りをれると。

み-おも［身重］（名）みもち。懷胎。

み-おろし［見下］（名）みおろすと。又、みおろすながめ。

み-おろ・す（さしすすせせ）［見下］（他、さ四）㊀下方を見やる。（下瞰、登臨）。㊁下方に見る。

み-か［甕］（名）酒を醸すに用ふる大いなる瓶。かめ。みわ。

み-か［三日］（名）㊀日數三つ。㊁月の第三の日。

（**み-かい**）［未開］（名）㊀まだ開化せざると。（野蠻）。㊁まだ開拓せられざると。

み-かき［御垣］（名）垣の敬稱。廿―がはら［御垣原］（名）禁中の御庭の敬稱。廿―もり［御垣守］（名）禁中御門の衛士。

み-がき［身欠］（名）頭・尾を去りて乾したるにしん。

みがき-と［磨粉］（名）次條に同じ。

みがき-ずな［磨砂］（名）粘氣（ネバリケ）なき白堊、ものを磨く料とす。

み-かぎり［見限］（名）みかぎると。

み-かぎ・る（らりるるれれ）［見限］（他、ら四）㊀おもひきる。斷念す。㊁とりあはず。

（**み-かく**）［味覺］（名）「みかん」（味感）に同じ。

み-か・く（けけくくるくれけよ）［見掛］（他、か下二）目にとむ。みとむ。

みが・く（かきくくけけ）［研磨、琢］（他、か四）㊀擦（ス）りて光澤をいだす。㊁きれいにす。かざる。淨（キヨ）くす。㊂勉めていよ〳〵善くす。修めてます〳〵進む。「業を―」。

廿**み-かく・す**（さしすすせせ）［見隱］（他、さ四）見て知らぬ振りなす。

廿**み-がく・る**（れれるるるれれよ）［水隱］（自、ら下二）水の中にかくる。水の中にあり。みごもる。

廿**み-がく・る**（れれるるるれれよ）［身隱］（自、ら下二）身體、ものかげにかくる。

み-かけ［見掛］（名）みかくると。みかくるさま。みつき。みば。みえ。（外見）。

み-かげ［御影］（名）㊀神靈の尊稱。㊁肖像などの尊稱。みえい。

廿**み-かげ**［水陰］（名）みがくると。水に隱はるゝと。「―草」。

みかげ-いし［御影石］（名）（攝津國兵庫郡御影村より出づるによりて此名あり）「くわかうせき」（花崗石）に同じ。

廿**み-かけ-だふし**（ーオシ）［見掛倒］（名）外見徒に美しくして實質のはるかに劣れると。

〜**みかける**（他）「みかく」の訛。

み-かさ［水嵩］（名）水の満。

みかさ-づけ［三笠附］（名）前句附の一種、初句を三様に出だして、次の二句を附けさするもの。

廿**みかさ-やま**［三笠山］（名）古昔、大將・中將・少將の異稱。

み-かた［味方］（名）（身方の義）自己の屬する方。自己のなかま。かたうど。同屬。

み-かた［見方］（名）㊀見るさかた。㊁觀ずるさま。

みか-づき［三日月］（名）㊀陰曆にて、月の第三日の夜に出づる月。新月。（朏）。㊁（夜間登樓して、招きたる遊女が、初めにちらりと顏を出し其後終に來らざると。

みかづき-の［三日月］（枕）「われて」に冠らする詞。「宵の間に出て、入りぬる―われて物思ふ頃にもある哉」。

み-かど［御門］（名）㊀皇居の門。宮門。禁門。㊁皇居の總稱。㊂天皇の御一族。㊃天皇の御身。㊄天皇の治め給へる御世。㊅天皇の治め給へる御國。―まつり［御門祭］（名）上古、六月及十二月の兩度行はれし祭事、禁中の惡靈を攘（ハラ）ふための祭事。―まゐり［御門參］（名）ものなりきといふ。―まゐり［御門參］（名）皇居へ參ると。參内。―もり［御門守］（名）宮門守護の士。みかきもり。―をがみ［御門拜］（名）昔時正月元日に、朝廷へ百官の參りて祝詞をのべしと。（朝拜、朝賀）。

〜**み-かね・る**（ねねねるねるねれねよ）［見兼］（自、な下二）見て其まゝにして置くに忍びず。見すごすと能はず。

み-かは・す（ーカワス）（さしすすせせ）［見交］（他、さ四）互に見る。相見る。みあふ。みあはす。

みか-ばち［樹蜂］（名）【動】蜂の一種、大形にして、胸部背部は黑色を帶び、腹部は黃色にして數條の黑色なる橫條を有す、尾端に劍狀の突起あり、松樹を害す。

廿**み-かは-みづ**（ーカワーミズ）［御溝水］（名）大內の周圍の溝。みかはのいけ。

廿**み-かは-やうど**（ーカワヨウド）［御厠人］（名）（みかはやひとの音便）禁中にて御厠の掃除を扱ふ下婢。

み-がはり（ーガワリ）［身代］（名）他人の身の代はりに立ちて死ぬると。

み-か・ふ（ーカウ）（へへふふるふれへよ）［見變］（他、は下二）㊀見て他のものにかふ。㊁其さき從來と一變して、他のもの、如くに見る。

み-かへし（ーカエシ）［見返］（名）㊀みかへすと。㊁書籍

の裂紙のうらがへしたる所。

みかへ・すエス[さしすすせせ]「見返」(他、さ四) ㊀後の方へ向ひ見る。㊁見られたる返報に見る。㊂見棄てられたる人に對し、前にまさりて映(ハ)えある身分となりて、これ見よがしに示す。

みかへ・るエル[らりるるれれ]「見返」(他、ら四) 後の方をふり向き見る。

〔**みかへる**(他)「みかへさ」の訛。

卄**みがほ・し**[しくしきしけれ]「見欲」(形、二)「みまほし」に同じ。

卄**みかまぎ**「御薪」(名) (御竈木の義)古昔、正月十五日に百官の宮中に奉りし薪。(御竈木)。

みがまへマエ「身構」(名) 敵に向へる身體のかまへ。

みがら「身柄」(名) 身分の程。

(**みかん**「味感」(名)【生】口に飲食の刺激を受け味神經によりてこれを知覺すると。

みかん「蜜柑」(名)【植】芸香科に屬する木。花は白色にして柄を具し、果實は黃色にして甘味を有し食用に供せられ、其果皮は藥用又は香料に供せらる。(甜橙)。

みき「幹」(名) 樹木の地上にあらはれて枝條を生ずる部分。

みき「御酒」(名) 酒の敬語。(御酒、神酒)。

みぎ「右」(名) ㊀人の南へ向ひて西の方。㊁在來の書方の文書にて前の方。前に述べたる事柄。前條。㊂二つのものを比較して勝れたる方。㊃歌合にて、二首の歌を判ずる時、前のものを左と稱するに對して後のもの〻稱。

みきき「見聞」(名) 見つき〻つすると。けんもん。

みき・く[くかきくくけけ]「見聞」(他、か四) 見もしき〻もす。

卄**みきのつかさ**「造酒司」(名) 古昔、宮内省の被官にして、酒・酢などの事を宰りしもの。さけのつかさ。

みぎはワ「汀」(名) (水際の義)土地と水との接したる所。(水際、水涯、渚、沚)。

みきは・むワム[めめむむるむれめよ]「見極」(他、ま下二) ㊀見屆く。㊁眞僞を鑑定す。

みきはめワメ「見極」(名) みきはむると。たしかむると。

みきり「見切」(名) みきると。——もの「見切物」(名) 見切りて賣る品物。

みぎり「右」(名)「みぎ」に同じ。

みぎり「砌」(名) ㊀軒下又は階下などの石畳。雨滴を受くる敷石。㊁をり。ころ。「大暑の—」。

みき・る[るらりるるれれ]「見切」(他、ら四) ㊀見終はる。㊁見捨つ。見限る。㊂價を甚だ安くして賣る。

卄**みくさ**「水草」(名) 水中に生ふる草。みづくさ。

みくじ「御鬮」(名) 神佛に祈りて吉凶を決するに探り取るくじ。(神籤)。

卄**みぐし**「御首」(名) かうべの敬稱。

卄**みぐし**「御髮」(名) 頭髮の敬稱。——あげ「御髮揚」(名)「かみあげ」の敬稱。——おろし「御髮下」(名) 髮を剃りて佛門に入るとの敬稱。

卄**みくしげどの**「御匣殿」(名) 古昔、禁中の貞觀殿の中、后町(キサイマチ)の北にして御裝束をしたゝめたまひし所。

みくだ・す[すさしすすせせ]「見下」(他、さ四) 侮り見る。輕んじ見る。さげしむ。みさぐ。

みくだりはん「三行半」(名) (俗に三行半に書くといふに出づ)妻への離緣狀。

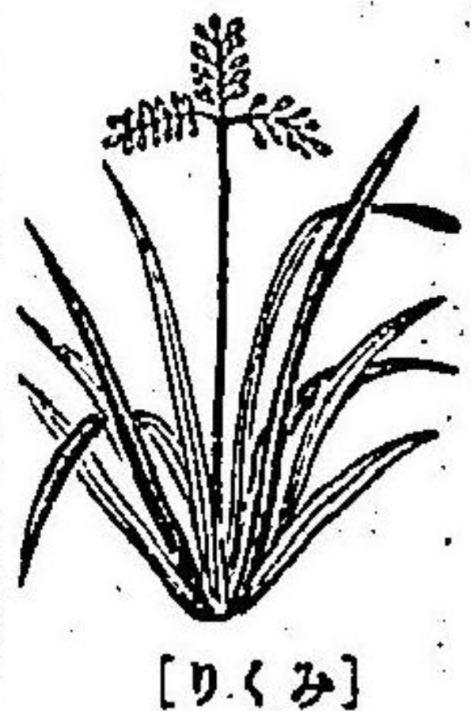
みくづ「水屑」(名) 水中の塵芥。

みくに「御國」(名) 我國の尊稱。(皇國)。——ぶり「御國風」(名) ㊀御國の風俗。㊁我國の文學。——ゆづり「御國讓」(名) 主上の御位を太子に讓り給ふと。(讓位)。

〔**みくび・る**[るらりるるれれ]「輕蔑」(他、ら四) みくだす。みさぐ。

卄**みくり**「御厨」(名) 御饌(ミケ)を供ふる所。(おもに伊勢の神宮にいふ)。

みくり「三稜草」(名)【植】莎草科に屬する草。莖は三稜をなす。葉はがまに似て狹く、花は莖頭に簇生し、紫色にして穂狀をなす。雄花は上部にありて雌花は下部にあり、葉は細の料とし莖の纖維も種々の用に供せらる。(黑三稜)。



[みくり]

みぐる・し[しくしきしけれ]「見苦」(形、二) みにくし。みともなし。

(**みくわん**「味官」(名) 味感を司(ツカサド)る器官、即ち舌。

(**みくわん**「未完」(名) 完結せざると。

卄**みけ**「御食」(名) 神に供ふるもの、御食事の料。くご。(供御、御饌)。

みけ「三毛」(名) 猫の毛色、白・黑・褐三色の雜(マジ)れるもの。(金花猫)。

みけうしよウーキョ「御教書」(名) 古昔、院又は關白・將軍より下されし文書(モンジヨ)の總稱。くだしぶみ。

卄**みけし**「御衣」(名) 衣の敬語。みぞ。

(**みけつ**「未決」(名) いまだ決定せざると。——かん「未決監」(名) 監獄にて、未決囚を入れおく所。——しう「未決囚」(名) 拘留せられ審理中の刑事被告人。

卄**みけつくに**「御食國」(名) 御饌の贄(ニヘ)を奉る國。

卄**みけつくに**「御食國」(枕) 野(ヌ)に冠らする詞。

卄**みけつのかみ**「御饌津神」(名) 宇賀のみたま、即ち稻荷の神。

卄**みけつもの**「御食物」(名) 神などに奉る食物。

(**みけん**「眉間」(名) 眉と眉との間。

みこ「御子」(名) 天子の御子。(皇子、王)。

みこ「神子」(名) 神に仕へて神樂(カグラ)を舞ひ又は祈禱を行ひ若しくは神意を伺ひなどする女。かんなぎ。(巫女)。

みご「稈心」(名) 藁の皮を去りたる莖。

みこし「御輿」(名) ㊀輿の尊稱。㊁神輿。㊂多くの人にかつぎ出だされ持(モ)てはやさる〻人。

みこし「見越」(名) みこすと。「—の松」。——志ゆにふユウニ「見越輸入」(名) 或貨物に對する輸入稅率引上の新法發布前、其高き稅率の賦課を免れ且つ新法の發布後其貨物の騰貴を待ちて利益を得んため、かねてこれを輸入すると。——にふだうニユードウ「見越入道」(名) たけ二三丈ありといふ坊主頭の怪物(バケモノ)。——ゆにふユウニ「見越輸入」(名)「みこし志ゆにふ」に同じ。

卄**みこしぶり**「御輿振」(名) 古昔、叡山の僧徒が強訴のため、京師に神輿をかつぎ込みしと。

みごしらへゴシラエ「身拵」(名) 身なりを拵へ繕ふと。裝束をつくると。身仕度。

卄**みこしろ**「御子代」(名) 子代の敬稱。

みこ・す[すさしすすせせ]「見越」(他、さ四) ㊀さきを見る。㊁中間にある物をこして向を見る。

みこと「尊」(名) (御事の義)上古、神又は貴人などの稱呼の尊稱。

みこと「御言」(名) おほせ。みことのり。(命)。

みごと「見事」(名) ㊀すぐれて巧(タク)みなると。いとうまきと。㊁いさぎよきと。はっきりすると。㊂うるはしきと。うつくしきと。りっぱなると。(美事)。

みことのり「詔」(名) (御言宣(ミコトノリ)の義)天皇の御命令を申す語。昔時、大事には詔と書き小事には勅と書くを例とせり。(勅命、宣命、宣旨)。

卄**みこともち**「宰」(名) (御言をうけて政を行ふもの〻義)上古、出でゝ地方を治めし官。(司)。

卄**みこのみや**「御子宮」(名) 皇太子。東宮。

みごひイゴ「白魚」(名)【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚。體形・體色共に鯉に似て稍や圓く、河水に棲息す。さい。まじか。

みこみ「見込」(名) ㊀もひつき。かんがへ。㊁あて。めあて。計畫。㊂有望。多望。

みこ・む[むまみむむめめ]「見込」(他、ま四) ㊀もひつく。かんがへつく。㊁あてとす。めあてとす。計畫す。㊂有望なりと思ふ。多望なりとなす。

卄**みこもり**「水籠」(名) みごもると。みがくると。

みごもり「身籠」(名) みごもると。はらむと。

みごも・る[るらりるるれれ]「水籠」(自、ら四) 水中に潛伏す。みがくる。

みごも・る[るらりるるれれ]「身籠」(自、ら四) はらむ。懷姙す。

みこよせ「神子寄」(名) くちよせ。

みごり「見懲」(名) 見てこる〻と。

みごろ「裑」(名) (身衣の略)衣服の表及背の全部を被ふ部分の稱。

みごろ「見頃」(名) 見るに適當なる時期。

みごろし「見殺」(名) 人の死するを見てゐながらこれを救ひ得ざると。みすみす助け得ざると。

(**みこん**「未婚」(名) 未だ結婚せざると。——しや「未婚者」(名) 未だ結婚せざるもの。

みさかひイカ「見境」(名) 物事のみわけ。區別。「彼是の—なし」。

卄**みさかり**「方」(名) まさかり。眞最中。

みさき「岬、崎」(名) 海中に突き出でたる陸地のはし。はな。さき。

卄**みさ・く**[くけけくくるくれけよ]「見放」(他、か下二) 遠く見やる。

みさ・ぐ[ぐげげぐぐるぐれげよ]「見下」(他、か下二) 見くだす。あなどる。蔑視す。

〔**みさげる**(他) 前條の訛。

みさご「鶚」(名)【動】猛禽類中たか科に屬する鳥。背部は褐色にして腹部は白色を呈す。水上を飛翔して巧(タク)みに魚を捕ふ、其捕へたる魚を岩石の凹所に貯へおく、これを鶚鮓といふ。(雎鳩)。

みささぎ「陵」(名) (御狹狹城の義)帝王・后妃の御墓所、高く築きて陵(ヲカ)をなす。(山陵)。

みさだ・む[めめむむるむれめよ]「見定」(他、ま下二) 見てさだむ。たしかなる點を見てとる。

みさだめ「見定」(名) みさだむると。みさだめて決定したると。

卄**みさと**「京」(名) (御里の義)みやこ。

卄**みさび**「水銹」(名) 濁水などの水面にうかぶ銹(サビ)の如きもの。

卄**みさ・ぶ**[びびぶぶるぶれびよ]「水銹」(自、は上二) 水上に銹(サビ)の如きもの浮ぶ。

みざめ「見醒」(名) 見て興のさむると。みおとり。

みさを「水竿」(名) 差して船を行る竿。(棹)。

みさを「操」(名) 道を守りてかへぬと。志を立てゝ屈せざると。(節操、晉操、貞操)。——に(副) 心を變へずに。——をつくる 體裁をつくる。——やぶる 女子などの汚れたる行をなすにいふ。

みじか「短」(接頭) 名語に冠して、みじかき意を表する語。「—夜」。

みじかうた「短歌」(名) 通常の五・七・五・七・七の五句よりなる和歌の稱。長歌の對。

みじか・し（く・し・き・けれ）[短]（形、二）㊀たけ乏し。ながさ少なし。㊁久しからず。暫時なり。㊂ひくし。

みじか・む（め・め・む・むる・むれ・めよ）[短]（他、ま下二）みじかくす。

みじかめる（他）前條の訛。

みじか-やか[短]（名）短かきさま。

みじか-よ[短夜]（名）日くれよりよあけまでの短かきこと。夏の夜。

卄みじか-らか[短]（名）前々條に同じ。

み-じたく[身支度]（名）身の支度。みごしらへ。

みし-と[緊]（副）㊀ひしと。㊁みしみしと。

卄み-しね[稻]（名）[稻]「いね」に同じ。

み-しぶ[水澁]（名）みづあか。みさび。

卄み-しほ[御修法]（名）古昔、正月大内裏の眞言院にて、行はれし佛事。みずほふ。

みしま-ごよみ[三島暦]（名）應仁・文明の頃、伊豆國三島神社より作り出だし、暦、多くは假名にて細（コマ）く書けり。

みしま-で[三島手]（名）高麗品などの茶碗に竪に細（コマ）く模樣のあるもの、其みしまごよみの假名に似たりとて名づく。こよみで。

み-しまひ（イーマ）[身仕舞]（名）みなりをつくろひとゝのふること。身仕度。（假粧）。

みしま-をこぜ[三島鰧]（名）【動】硬鰭類中かさご科に屬する魚、體扁稍や楕圓形をなし、背部灰色にして白斑あり。めがねうを。むしまをこぜ。

〔みし-みし（名、副）人の廊下を歩む時などの音のさまにいふ語。

〔み-じめ[不見目]（名）見るに忍び難きこと。いたいたしきこと。

み-しやう（ゴーシ、ヨウ）[實生]（名）みばえの樹木、接木の對。

み-しやう（ヨーシ、ヨウ）[身性]（名）㊀うまれつき。しやうとく。㊁みのうへ。身分。㊂みもち。品行。

（み-じゆく[未熟]（名）㊀物事の未だよく成りとゝのはぬこと。成熟せざること。㊁經驗いまだ足らざること。修練いまだ到らざること。――もの[未熟者]（名）物事の未熟なるもの。

み-しらず[身不知]（名）㊀自己の分限を顧みぬこと。㊁自己の身體を重んぜざること。

み-しり[見知]（名）㊀見知ること。㊁しりあひ。――ごし[見知越]（名）たゞ見て知りて居ること。（面識）。

卄み-し・る（ら・り・る・る・れ・れ）[見知]（他、ら四）㊀見て知る。㊁交りて相知る。

卄み-じろき（名）みじろくこと。

卄み-じろ・く（か・き・く・く・け・け）（自、か四）身を動かす。

卄み-じろ-の-いね[實白稻]（名）實の白き稻。

（み-しん[未進]（名）年貢のとゞこほり。

ミ-シン[彌針]（名）（「イギリス」語 Sewing machine の略の轉）洋服「シャツ」などを縫ふ機械、手にて廻はして使用するものと足にて踏（フ）みて使用するものとあり。

（み-しん-けい[味神經]（名）【生】舌の粘膜に密布せる味感をつかさどる神經。

み-じんまく[身愼莫]（名）身體の支度。

み-す[御簾]（名）㊀「すだれ」の敬語。㊁綾・純子などの縁をつけたる精好（セイガウ）のすだれ。

卄み・す（さ・し・す・す・せ・せ）[見]（他、さ四）㊀「見る」の敬語。㊁「治めたもつ」の敬語。「我大君のきこしー」。

み・す（せ・せ・す・する・すれ・せよ）[見]（他、さ下二）㊀見るやうにす。見さす。㊁受けしむ。被らしむ。「憂き目をー」。

み-す・う（ゑ・ゑ・う・うる・うれ・ゑよ）[見据]（他、わ下二）㊀見つむ。㊁見さだむ。

みす-うち[御簾內]（名）㊀垂れ下げたるみすの内。㊁（義太夫節の寄席などにて最初に御簾をあげずに語るもの。

み-すか・す（さ・し・す・す・せ・せ）[見透]（他、さ四）みとほす。みぬく。「内兜をー」。

み-すぎ[身過]（名）生涯をすごし行くこと。すぎはひ。くちすぎ。くらし。生計。（生活）。

み-すぐ・す（さ・し・す・す・せ・せ）[見過]（他、さ四）みおとす。みのがす。

みず-しらず（さ・し・す・す・せ・せ）[不見不知]（名）一面識もなきこと。

み-すず[水篶]（名）（「み」は接頭語）「すず」（篠）に同じ。

みすぢ-の-いと[三筋絲]（名）三味線の異稱。

みすぢ-の-こま[三筋駒]（名）（歌をのせてひく義よりいふ）前條に同じ。

み-す・つ（て・て・つ・つる・つれ・てよ）[見棄]（他、た下二）うち捨てゝとりあはず。すてゝ顧みず。すつ。みかぎる。

〔みすてる（他）「みすつ」の訛。

〔みず-てん[不見轉]（名）㊀花合にて、親が場の札を下向けて播き賞を得ること。但しこの時、親は必らず勝負させざるべからず。㊁藝妓が、客のいひよるまにまにたやすく情を賣ること。又、其藝妓。

み-すぼら・し（く・し・き・けれ）[見窄]（形、二）姿やつれし。みそぼらし。貧相なり。

み-すま・す（さ・し・す・す・せ・せ）[見澄]（他、さ四）心を定めてよく見る。熟視す。

卄み-すまる[御統]（名）上古、頸などに掛くる玉飾のかざり。「珠のー」。

みす-みす[見見]（副）見てゐながら。知りてゐながら。

卄み-すり（名）衣服に色を摺りつくること。

（み-すゐ[未遂]（名）いまだなしとげざること。――はん[未遂犯]（名）【法】犯罪の着手以後其目的をなしとげざる所爲、卽ち着手未遂犯と缺效未遂犯との總稱。

み-すゑ[見据]（名）みすうること。みさかひ。みとほし。

み-せ[見世]（名）みせだな。たな。（店）。――あきうど[見世商人]（名）店を張れる商人。

（み-せいねん[未成年]（名）いまだ成年に達せざること。又、其人。――しや[未成年者]（名）未成年の人。

（み-せい-ひん[未製品]（名）㊀いまだ精製せざる品。（粗製品）。㊁前途の如何になりゆくかいまだ分明ならざる人。

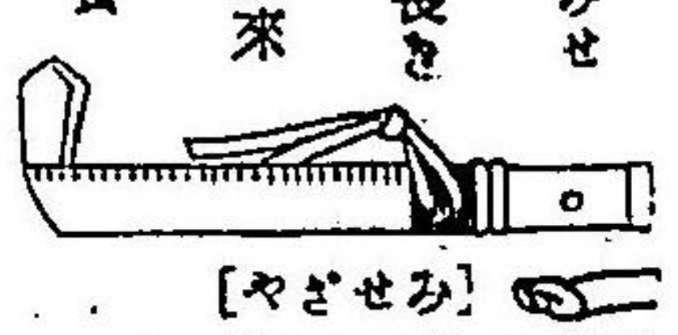
（み-せう（ヨーシ、コウ）[微笑]（名）「びせう」に同じ。

み-せ-か・く（け・け・く・くる・くれ・けよ）[見掛]（他、か下二）内實は然らざれどうはべをいつはりつくる。

み-せ-かけ[見掛]（名）㊀みせかくること。㊁みえ。外見。

み-せ-さき[見世先]（名）みせの前。みせのまんなか。

み-せ-ざや[見鞘]（名）短き腰刃に長き鞘袋をかけたるもの。


[みせざや]

み-せしめ[懲戒]（名）例を示して將來をこらしいましむること。

み-せ-だな[見世棚]（名）商家にて貨品を陳列する處。たな。（鋪）。

〔み-せ-びらか・す（さ・し・す・す・せ・せ）（他、さ四）これ見よがしにす。

み-せ-びらき[見世開]（名）始めて店を開きあきなひをはじむること。開店。

み-せ-もの[見世物]（名）珍らしき物又は演藝などを人に觀せて、見料を取るもの。（觀場）。

（み-ぜん[未然]（名）㊀いまだ然らざること。㊁いまだ到來せざること。――げん[未然言]（名）【文法】「しやうぜんげん」（將然言）に同じ。

ミ-ソ[味噌]（名）味噌豆を搗（ツ）き碎（クダ）きて麴と鹽とを和し、これを桶に藏（ヲサ）めてならしたるもの、其まゝ食用とするを得べく、又擂（ス）りつぶして汁とし、其他種々食味の調理に用ひらる。（味醬）。

〔――をつける　失敗す。しくじる。

卄み-ぞ[御衣]（名）衣の敬語。

卄み-そ[三十]（數）十の三倍。さんじふ。

みぞ[溝]（名）㊀地を細長く掘り開きて水を通ずるもの。せゝなぎ。どぶ。（渠）。㊁敷居などに細長く凹（ボク）き條線を刻せるもの。

みぞ（名）針の絲を通すあな。みゝ。みづ。めど。（目所）。

ミソ-あへ（エーア）[味噌韲]（名）味噌にて調理したるあへもの。

（み-ぞ-う[未曾有]（名）未だ曾（カツ）て有らざること。以前より未だ有らざりしこと。

卄ミソ-うづ[味噌水]（名）味噌汁の雜炊（ザフスヰ）。

〔みぞ-おち[水落]（名）「みづおち」の訛。

みそ-か[三十日]（名）㊀月の第三十日。㊁つごもり。晦日。

卄みそか[密]（名）ないしよう。ひそか。こつそり。

卄み-ぞ-かけ[御衣懸]（名）衣桁（イカウ）に同じ。

卄みそか-ごと[密事]（名）㊀おほやけならぬ事。ないしようごと。㊁男女の密通。私通。

みそか-に[密]（副）ひそかに。こつそり。

みぞ-かは（ーカワ）[溝河]（名）水の常に流れかよふ溝。

みぞ-がひ（イーカ）[溝貝]（名）【動】「どぶがひ」の一名。

卄みそか-びと[密人]（名）みそかを。

ミソ-がゆ[味噌粥]（名）味噌汁にてたきたる粥。

卄みそか-を[密男]（名）密（ミツ）に他人の妻などに通ふ男。まをとこ。（密夫）。

卄みそか-をとこ[密男]（名）前條に同じ。

みそぎ[禊]（名）身に罪又穢のあるとき河に赴き、水にて身を淨（キヨ）むること。

卄みそ・ぐ（が・ぎ・ぐ・ぐ・げ・げ）[禊]（自、か四）みそぎを行ふ。身を淨む。

ミソ-こし[味噌漉]（名）曲物（マゲモノ）の底に竹の簀を張りたる篩、味噌汁の滓（カス）を漉（コ）すに用ふ。

みぞ-ごひ（イーコ）[溝鯉]（名）【動】「まるた」に同じ。

みぞ-ごゐ[溝五位]（名）【動】涉禽類中鷺科に屬する鳥、嘴長くして革質なり、頸長く脚また長し、趾間の基部に小膜を張る、常に水邊に棲息して魚類を捕食す。ひのくちまもり。

みそ-さざい[溝鷦鷯]（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形雀に似て小さく嘴尖れり、全身灰色にして黑色及褐色の細き斑紋あり、冬來り春の頃囀る聲美し、巧（タク）に巢を構ふるより一に巧鳥ともいふ。（鷦鷯、巧婦鳥）。

ミソ-しる[味噌汁]（名）味噌を擂（ス）りて水に溶（ト）かして煮たるもの、野菜又は肉を實となす。

ミソ-すり[味噌擂]（名）㊀味噌を擂ること。㊁「ミソすりぼうず」又「ミソすりようにん」の略言。――ぼうず（ボーウ）[味噌擂坊主]（名）寺院の炊事などにつかはるゝ僧侶。又、僧侶をあざけりていふ語。――ようにん[味噌擂用人]（名）貴人の邸に仕ふる用人をのゝしりていふ語。

み-そ-ぢ[三十]（數）さんじふ。みそ。

ミソ-づけ[味噌漬]（名）味噌に漬けたる肉又は菜などの稱。

〜ミソっぱ［味噌齒］（名）「ミソは」に同じ。

みそなは・す（さしすせ）［見行］（他、さ四） 御覽ず。見たまふ。（看行）。

ミソ-は［味噌齒］（名） 黑くなりそこなはれかけたる齒、小兒に多し。

みそ-はぎ［溝萩］（名）【植】千屈菜科に屬する草、水邊又は濕地に生ず、莖の高さ二三尺、葉は柳に似、花は紅紫色にして梢頭に若生し穗狀に排列す。みづかけぐさ。（千屈菜）。

みそひと-もじ［三十一文字］（名） 和歌の稱。

〜みそぼら・し（しく しき しけれ）［見窄］（形、二）「みすぼらし」に同じ。

み-そ・む（め め む むる むれ めよ）［見初］（他、ま下二） ㊀初めて見る。㊁初めて見て戀ふ。

〜みそめる（他） 前條の訛。

廿みそやか［密］（名） ひそやか。

ミソ-やき［味噌燒］（名） 味噌をつけて燒きたる料理。

み-そ・る（れ れ る るる るれ れよ）［見逸］（他、ら下二） 見忘る。

廿みぞ・る（れ れ る るる るれ れよ）［霙］（自、ら下二） みぞれ降る。

みぞれ［霙］（名） 雪の降下の際稍や溫暖なる氣層を通過するとき、其一部の溶解して急激に降るもの。

〜みそれる［見逸］（他）「みそる」の訛。

ミダ［彌陀］（名）【佛】阿彌陀の略言。「一の本願」。

み-だい［御臺］（名） ㊀古昔、貴人の御食を載(ノ)せたる臺。㊁食事。㊂御臺所の略言。「一さま」。（御內）。 ——どころ［御臺所］（名） 大臣・大將・將軍家の內室の尊稱。みだい。

廿み-だえ［水絶］（名） 水の絶ゆると。水路のきるゝと。

廿みたけ-さうじ（サウーツ）［御嶽精進］（名） 大和國金峯山への參詣者の行ふ精進(シヤウジン)。

廿みたけ-まうで（ウーモ）［御嶽詣］（名） 大和國金峯山への參詣。

廿みたけ-まゐり［御嶽參］（名） 前條に同じ。

み-だし［見出］（名） ㊀見てあらはし出すと、又、見て求め出だすもの。㊁とりたて。ひきたて。㊂書籍帳簿などに、其中の或事項を見出だすたよりに設けたるもの。（檢標、索引）。

み-だしなみ［身嗜］（名） 身の持ちやう。身體の注意。

みた・す（さ し す す せ せ）［滿］（他、さ四） みつるやうにす。（充）。

みだ・す（さ し す す せ せ）［亂］（他、さ四） みだるゝやうにす。

み-だ・す（さ し す す せ せ）［見出］（他、さ四） ㊀見はじむ。㊁見てあらはし出す。見て求め出す。發見す ㊂とりたつ。拔擢す。

み-た・つ（て て つ つる つれ てよ）［見立］（他、た下二） ㊀人の首途(カドデ)を見送る。㊁見て選(エラ)び定む。鑑定す。

み-たて［見立］（名） ㊀見送ると。みおくり。㊁見て選び定むると。鑑定。 ——がへ（エーガ）［見立替］（名） 始め見立てたるもの、代はりに、他のものを更に見立つると。

み-だぬき［貒狸］（名）【動】「まみ」に同じ。

み-たふし（オシーク）［見倒］（名） 見たふすと。

み-たふ・す（オスーク）［見倒］（他、さ四） おとし見る。見てけなす。

み-たま［御靈］（名） 靈(タマ)の敬稱。 ——うつし［御靈移］（名） 御靈を移すと。 ——しろ［御靈代］（名） 御靈としてまつるかたしろ。 ——や［御靈舍］（名） 御靈をとゞめまつる所。おたまや。（靈廟）。

廿み-たま-の-ふゆ（名） 天神又は天皇の御稜威・御恩をたふとび申す語。

廿み-だ・ゆ（え え ゆ ゆる ゆれ えよ）［水絶］（自、や下二） 水だえとなる。水絶ゆ。

みだら［淫猥］（名） 男女間の禮儀正しからざると。けがらはしく見苦しきと。 ——がはし（ワーガシ）（しく しき しけれ）［淫猥］（形、二） みだらなるさまなり。 ——ごと［淫事］（名） みだらなるおこなひ。

み-たらし［御手洗］（名） 神社の前なる口・手などを滌むるための水。みたらひ。

みだら-に［妄、漫］（副） みだりに。やたらに。

廿みだらを-の-うま［驄馬］（名） 馬の毛色、背白の雜(マジ)れるもの。

みだり［妄、漫］（名） ㊀すぢみちの立たざると。順序なきと。㊁分限にこえたると。禮儀に外(ハヅ)れたると。㊂思慮なきと。堪忍なきと。

廿みだり-あしのけ［脚氣］（名）「かっけ」に同じ。

廿みだり-かくびやう（ヨウ ービ）［亂脚病］（名） 前條に同じ。

廿みだり-かぜ［亂風］（名） かぜ。風邪。

みだり-がは・し（ワーガシ）（しく しき しけれ）［淫、猥］（形、二） みだらなるさまなり。

廿みだり-ごこち［亂心地］（名） 病みたる心地。

みだり-に［妄、漫］（副） ㊀やたらに。性急に。㊁めちやくちやに。わけもなく。さしてがましく。㊂分(ブ)にこえて。禮に外(ハヅ)れて。

みだ・る（れ れ る るる るれ れよ）［亂］（自、ら下二） ㊀順序をやぶる。規律立たず。㊁入り雜(マジ)る。混雜す。㊂思ひ惑ふ。煩ひなやむ。㊃離れ散る。ばら〳〵になる。㊄騷動おこる。內亂生ず。㊅常を失す。正をうしなふ。

みだ・る（ら り る る れ れ）［亂］（他、ら四） みだるゝやうにす。みだす。

みだれ［亂］（名） ㊀みだるゝと。㊁さわぎ。騷動。內亂。㊂琴の曲名。 ——あし［亂足］（名） ㊀脚氣。㊁足並の亂るゝと。 ——がき［亂書］（名） みだれたる書方。 ——がはし（ワーガシ）（しく しき しけれ）［亂］

（形、二） みだりがはし。 ——がみ［亂髮］（名） ふりみだれたるかみ。 ——ぐら［亂鞍］（名） 輪に居木(キスエ)をつけざる鞍。 ——ばこ［亂箱］（名） 衣服などをたゝみて入るゝはこ。 ——やき［亂燒］（名） 刀の燒方、肌の理(キメ)のうねりて亂れたるもの。 ——よ［亂世］（名） みだれたる世。治まらざる世。らんせい。

みち［道］（名） ㊀往來すべきすぢ。だうろ。（路）。㊁人の履行すべき道理。のり。㊂てだて。方法。㊃をしへ。敎戒。㊄てつゞき。順序。㊅むき。方面。㊆すぢ。條理。㊇原理。妙用。㊈あゆむと。あるくと。㊉みちのり。行程。

廿みち［海驢］（名）【動】「あしか」に同じ。

廿みち［蜜］（名） 蜂蜜。

廿みち-あへ-の-まつり（エーア）［道饗祭］（名） 古昔、六月晦日に行はれたる祭事、疫神を京城に入れじとて途中に饗し止むる意なりといふ。ちあへのまつり。

み-あやまり［見誤］（名） みあやまると。

み-あやま・る（ら り る る れ れ）［見誤］ 見方を誤る。異るものと見る。

みち-あんない［路案內］（名） 路すぢの案內。

み-ぢか・し（く し き けれ）［身親］（形、二） 血緣ちかし。

み-ちがひ（ガイ）［見違］（名） みちがふると。みそこなひ。みあやまり。

み-ちが・ふ（ガウ）（へ へ ふ ふる ふれ へよ）［見違］（他、は下二） みあやまる。

み-ちがへ（ガエ）［見違］（名） みちがふると。

みち-くさ［路草］（名） ㊀路傍に生じたる草。㊁馬などが路傍の草を食ひなどして進みの遲きと。人の路を行きながらひまを費やすと。「一を食ふ」。㊂【植】「あぶらな」の一名。

廿みち-くらべ［道競］（名） かけくらべ。競走。

みち-しき［道敷］（名） 道路の敷地。だうろしき。

みち-しば［道芝］（名） ㊀路傍に生じたる雜草。㊁【植】禾本科に屬する草、しばくさに似て、其穗は細長し。

みち-しほ（オーシ）［滿潮］（名） 海水の表面が一日の中最も高く上りたるときの稱。さししほ。

みち-しるべ［路導］（名） ㊀路の方向を示す標識。㊁路の案內。みちびき。㊂【動】「みちをしへ」の一名。

⌒みち-すう［未知數］（名） ㊀【數】方程式中にて求むべき數、又、これを代表する文字。㊁前途の如何になりゆくかしりがたきもの。

みち-すがら［途上］（副） 路を過ぎながら。歩み行きながら。途中。

みち-すぢ［道筋］（名） ㊀道路のすぢ。途上。㊁物事の道理。

みち-づれ［路連］（名） 連れ立ちて行く人。同伴。「旅は一世はなさけ」。（同道者、道伴）。

みち-の-き［道記］（名） 旅行の日記。紀行。

廿みち-の-く［陸奧］（名） 陸前・陸中・陸奧三國の古稱。 ——がみ［陸奧紙］（名） 古昔、陸奧國より產出せし檀紙。

廿みち-の-し［道師］（名） ㊀天武天皇の時に定めたまひし八色の姓の第五。㊁諸道の師匠。

みち-の-もの［道者］（名） 或藝道を職とするもの、又、或藝道に達したるもの。達人。

みち-のり［道法］（名） 道路の里數。里程。行程。

みち-ばし［路橋］（名） 路にかけたる橋。

みち-ばた［路端］（名） 道路のほとり。

廿みち-ばち［蜜蜂］（名）【動】「みつばち」に同じ。

みち-はらひ（ライーハ）［道拂］（名） 貴人の通行先の人をはらひのくると。さきばらひ。（前道）。

廿みち-はり［路墾］（名） 道路をあらたにひらくと。

みち-び［道火］（名） ㊀くちび。㊁「みちびなは」の略言。 ——なは（ワナ）［道火繩］（名） 火藥を込めたる線狀のもの、くち火をつくるための料。（導火線）。

みちびき［導］（名） てびき。案內。

みちび・く（か き く く け け）［導］（他、か四） ㊀路案內をなす。㊁手引をなす。㊂いざなひ致す。㊃をしへ啓(ヒラ)く。

みち-びらき［道開］（名） ㊀道を設けひらくと。㊁みちびき。案內。

みち-ブシン［路普請］（名） 道路の修繕又は開設。

みち-まどひ（ドイーマ）［路惑］（名） 路にまよふと。

〜みち-みち（名、副）「みしみし」に同じ。

みち-みち［道道］（名） ㊀さま〴〵の道。㊁途中の處々。

廿みち-みち・し（しく しき しけれ）［道道］（形、二） 理窟だちてあり。道理にかなへり。

廿みち-も-さりあへず（エーア）（副） 路もよけ難きほどに。

みち-もせ［路狹］（名） 路も狹くなる程なると。（道迫）。「一にちる山櫻ばな」。

みち-もり［道守］（名） 道を守る人。道路の番人。ちもり。

み-ちやう（チョウ）［御帳］（名） おましのとばり。

⌒み-ぢやう（ジョウ）［未定］（名） いまだ定まらぬと。みてい。

みち-ゆき［道行］（名） ㊀道を行くと。㊁芝居にて、男女連(ツ)れ立ち旅行のさまを演ずると。㊂すべて男女連れ立ちて行くとの稱。㊃順序。手續。㊄「みちゆきぶり」(三)に同じ。 廿——うら［道行占］（名） つじうら。 ——ぶり［道行觸］（名） ㊀廿途中にて行きあふと。㊁旅行の日記。紀行。㊂一種の服、被風(ヒフ)に似て襟(エリ)なきもの。

〜みち-わる［道惡］（名） ぬかりて惡(ワル)き路。

みち-をしへ（シエ）［路敎］（名）【動】鞘翅類中斑蝥科に屬する昆蟲、形「はんめう」に似て稍や小さし、全

全身黑色にして黄色の斑を有し美麗なり。常に路上に歩み又は飛び、人に迎ひて恰も案内するが如き狀をなすより此名あり。（斑猫）。

（み-ぢん［微塵］（名）㊀こまかきほこり。㊁微細なるもの。（極微、分子）。**――こ**［微塵子］（名）【動】甲殼類に屬する細微なる小蟲。體軀は甲殼を被り赤色にして透明なり。觸角大きくして分岐せり。溜水などに無數に産す。**――こ**［微塵粉］（名）糯米を碾（ヒ）き粉となして炒（イ）りたるもの。**――せつ**［微塵說］（名）【理】「びぢんせつ」に同じ。**――ぼう**［微塵棒］（名）一種の菓子。微塵粉に砂糖を加へかためて細長くしたるもの。**――も**［微塵］（副）すこしも。ちっとも。

（みつ［蜜］（名）㊀「はちみつ」の略言。㊁「みつざたう」の略言。

（みつ［密］（名）㊀ひそか。みそか。㊁つまびらか。こまやか。㊂きびしきこと。あつきこと。

み-つ［三個］（數）一と二との和。一の三倍。

みつ［三］（名）相撲（スマフ）にて、犢鼻褌（フンドシ）の横に腰部に纏ふ部分と縱に陰部を蔽ふ部分と、背面に於て交叉する處の稱。

み・つ（たちつつてて）［滿］（自、た四）㊀つまりふさがる。（盈）。㊁十分に足る。たる。（充）。㊂缺陷せず。「月―」。（盈）。㊃期限に達す。「任―」。

み・つ（てててつつるつれてよ）［滿］（他、た下二）みつるやうにす。（充、盈）。

みづ［針孔］（名）絲を通（トホ）す針の孔。めど。みぞ。（針眼）。

みづ［瑞］（名）うるはしきこと。「―穗」。

みづ［水］（名）㊀地球上最も廣く存在せる液體。純粹なるものは無味無臭にして、攝氏四度に於て最大密度を有し、攝氏零度に於て凝結して氷となり、攝氏百度に於て沸騰す。水素一酸素八の割合にて成り、中性にして且つ安定なる化合物なり。固體・液體若しくは氣體等種々の物質を溶解する性に富む。天然水は必ず多少種々の物質を溶解せるを免れず。海水は數多の鹽類を含み、其百分中三分は鹽類にして殊に食鹽に富む。㊁相撲（スマフ）にて、勝負つかず雙方とりつかれたるとき、暫時離して休ますること。**――いたってきよければすなはちうをなし**［水至淸則無魚］明察の才あって人をいるゝ度量なければ、孤獨にしてたすけなきにいふ。**――おたりていしうがたる**［水滴石穿］水のおたゝると度かさなれば果ては石にも穴のあくといふ義にして、物事は少しづゝにても度重なれば、やがて容易ならざる事となるにいふ。〜**――となる** 消えうす。又、やめとなる。〜**――にながす** 既往の關係をすべて打消す。**――にゑがくがごとし**［如畫水］なし、事の跡かたもなく消えうするにいふ。**――のたる** いとみづみづしくあり。**――ははうゑんのうつはにしたがふ**［水隨方圓器］人の善に赴くと否とは友人の如何によるをたとへいふ語。〜**――もらさず** 交情いと親しきにいふ。又、すこしの間隙なく圍むにいふ。〜**――をさす** 中たがひをせさす。又、物事不調とならしむ。

みづ-あか［水垢］（名）水中に溶解せる物質が水面に浮び若しくは物につきてきたなく見ゆるもの。みあか。みしぶ。

みづ-あげ［水揚］（名）㊀船の荷物を陸へ上ぐること。㊁婦人の始めて男子と交接すること。

みづ-あさぎ［水淺葱］（名）薄色のあさぎ。水藍色。

みづ-あそび［水遊］（名）水中にて遊ぶこと。又、水をもてあそぶこと。

みづ-あたり［水中］（名）水を飲み中（アタ）られて病氣となること。

みづ-あび［水浴］（名）㊀水を浴ぶること。㊁游泳。

みつ-あふぎ（オーギ）［三扇］（名）紋所の名。開きたる三枚の扇の各の要（カナメ）を中心にして三方へ向かふさまを描（エガ）きたるもの。

みづ-あふひ（オーイ）［水葵］（名）【植】雨久花科に屬する草。水田又は小河等に生ず。葉は卵狀形をなし、花は桔梗に似、深紫色若しくは白色を呈す。（雨久花）。

みづ-あぶら［水油］（名）㊀液狀をなせる化粧用の油。㊁「ともしあぶら」の一名。

みづ-あめ［水飴］（名）飴の液狀をなすもの。

（みつ-い［密意］（名）ないないのむね。ひみつのむね。

〜**みづ-いらず**［水不入］（名）内輪のもののみにて他人を交（マジ）へざること。

みづ-いれ［水入］（名）硯に注ぐ水を入れおく器。

みづ-いろ［水色］（名）薄き藍色。

十**みづ-うまや**［水驛］（名）㊀船路の宿。㊁街道の宿場。立ち寄りて水など飲むによりていふ。㊂男踏歌のとき、酒又は湯漬などのみを饗すること。饗膳を用ふるを飯驛（イヒウマヤ）といふ。其をどり廻ることを道中にたとへていへるなりとぞ。㊃轉じて、來客に對して、何の風情（フゼイ）もなきこと。

みづ-うみ［湖］（名）（水海の義）四面陸にて圍まれて、淡水（マミヅ）の湛（タタ）へたる所。

みづ-うみ［水膿］（名）うすき膿。うみしる。

みづ-うるし［水漆］（名）【植】「いはがねさう」の一名。

みつ-うろこ［三鱗］（名）紋所の名。相並べる二個の三角形の上に一個の三角形を重ねたるもの。

（みつ-うん［密雲］（名）しげきくも。重なれる雲。

雨霧を促（ウナガ）すが如き雲。

十**みづ-え**［瑞枝］（名）みづみづしくわかき枝。若枝。「―さす」。

みづ-おしろい［水白粉］（名）水にとかしたるおしろい。

みづ-おち［水落］（名）胸骨の下の中央の窪みたる所。むなもと。（心窩、鳩尾）。

みづ-おと［水音］（名）水の落ち又は流るゝ音。

（みっ-かう（コー）［密行］（名）㊀しのびあるき。㊁「みっかうおゆんさ」の略言。**――おゆんさ**［密行巡査］（名）密行して巡回する巡査。

（みっ-かう（コー）［密航］（名）ひそかに航海すること。又、ひそかに渡航すること。**――ふ**［密航婦］（名）ひそかに外國に渡航する醜業婦。

みづ-かがみ［水鏡］（名）水に物の映（ウツ）ること。又、水に自分の容貌をうつして見ること。

みづ-かき［水搔］（名）游禽類に屬する鳥などの趾間に張れる膜。水を搔（カ）く用をなすもの。（蹼）。

みづ-がき［瑞籬］（名）神のやしろのかき。いがき。**――の**（枕）「久し」に冠らする詞。

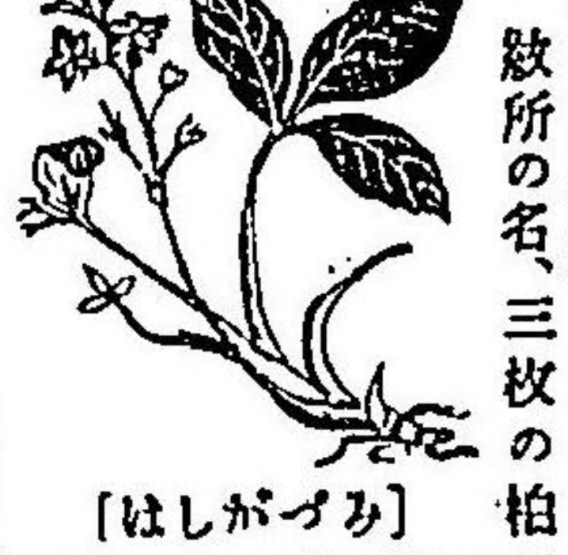
みづ-かけ［水掛］（名）互に水をかけあふこと。**――ろん**［水掛論］（名）雙方互に理屈を言ひ張りて、はてしなく爭ふこと。

みづ-かげん［水加減］（名）水を加ふる度合。

みづ-かさ［水嵩］（名）河水などの分量。

みつ-がしは（ガシワ）［三柏］（名）紋所の名。三枚の柏葉を三方に並べたるさまを描（エガ）きたるもの。

みづ-がしは（ガシワ）［水柏］（名）【植】龍膽科に屬する草。水邊に生ず。葉は三個の小葉より成り、花は總狀花序に排列す。花冠は白色にして其裂片は内面に白色の密生毛を有す。觀賞用として栽培せられ、又、葉は藥用に供せらる。（睡菜）。


［みづがしは］

みつ-かど［三角］（名）㊀三つの角。三稜。㊁道の三方よりあつまれる辻。

みづ-かね［水銀］（名）「すゐぎん」に同じ。**――のかす**［水銀滓］（名）「はらや」に同じ。

みっか-ばうず（ボーズ）［三日坊主］（名）一つ事業の多く長つゞかざる人をあざけりていふ語。

みづ-かひ（ガイ）［水貝］（名）「なまがひ」に同じ。

みづ-がめ［水瓶］（名）飮水又はながしにて使用する水をたくはへおく瓶。水甕。

み-づから［自］（代）自稱の代名詞。（貴女の語）。

み-づから［自］（副）己れ自身にて。自分にて。（躬）。

みづ-ガラス［水硝子］（名）【化】無水硅酸の粉末を水酸化「アルカリ」と共に融解するとき生ずるもの。水に溶解して水飴の如き粘液となる。布・材木等に塗布して防火の用にせられ、又、染色・人造石製造等に用ひらる。

み-つき［見付］（名）みば。みえ。外貌。「―のよき家」。

み-つぎ［貢］（名）㊀「つき」の敬語。（調）。㊁屬國などより君王に一定の時にたてまつる財物。

（みつ-ぎ［密議］（名）ひそかに議すること。ないしようの評議。

十**みづ-き**［承鞚］（名）「みづつき」に同じ。

十**みづ-き**［水城］（名）古昔、筑前國太宰府の近傍に設けおかれし城郭の稱。堀を構へて、水を湛（タタ）へし故に名づく。

みづ-き［瑞木］（名）みづみづしき若木。

みづ-ぎは（ギワ）［水際］（名）水の邊。みぎは。**――たつ** 目立ちて映（ハ）ゆ。

みつぎ-もの［貢物］（名）みつぎとして奉る財物。

みづ-ぎれ［水切］（名）水の絶ゆること。

み-つ・く（かきくくけけ）［見附］（他、か四）見馴る。

み-つ・く（けけくくるくれけよ）［見附］（他、か下二）見出す。發見す。

み-つ・ぐ（かぎぐぐげげ）［見繼］（他、か四）財物を給與す。しおくる。

十**み-づ・く**（かきくくけけ）［水浸］（自、か四）水にひたる。水つく。「海ゆかば―かばね」。

十**みづ-ぐき**［水莖］（名）㊀消息の文。㊁手跡。㊂筆。**――のあと**［水莖跡］（名）前條（一）（二）に同じ。

みづ-くさ［水草］（名）㊀水中に生ずる草。㊁みづとくさと、

十**みづ-くさ**［水瘡］（名）みづむし。

〜**みづ-くさ・し**（くしききけれ）［水臭］（形、一）へだて心あり。愛情うすし。

みづ-ぐし［水櫛］（名）水に浸して髮を梳（ス）く齒の粗き櫛。

みづ-ぐすり［水藥］（名）水にとかしたる藥。

みつ-ぐそく［三具足］（名）香爐・花瓶・燭臺を一對としての稱。

みつ-くち［兎缺］（名）いぐち。（兎脣、缺脣）。

みづ-ぐち［水口］（名）㊀水のおち又は出づる口。㊁臺所の水を汲み入るゝ口。

みづ-ぐひ（グイ）［水杙］（名）㊀岸に打つ杙。㊁「みづしやく」（水尺）に同じ。

みづ-ぐも［水蜘蛛］（名）【動】「みづすまし」に同じ。

十**みつ-ぐり-の**［三栗］（枕）「中」に冠らする詞。

みづ-ぐるま［水車］（名）水力にて回轉せさする裝置の車。すゐしや。

み-つくろひ（ツクロイ）［見繕］（名）みつくろふこと。

み-づくろひ（ヅクロイ）［身繕］（名）姿をとゝのふること。みごしらへ。みしたく。

みつくろ・ふ（ーツク ロウ）〔はひふへ二〕［見繕］（他、は四）品物をみはからふ。

(みっくわい［密會］（名）ひそかに會合すること。

みづぐわし［水菓子］（名）食用となるくだもの。果物。——や［水菓子屋］（名）水菓子をあきなふ人又は家。

みつけ［見附］（名）㊀見つくること。㊁城門に番兵の見張る所。「三十六—」。

(みっけい［密計］（名）ないしよのはかりごと。

(みっけう（ーキ ロウ）［密教］（名）【佛】佛の祕密の教法。眞言宗の類。

みづけむり［水煙］（名）㊀水面に立つ靄。（水氣）。㊁水の飛びて烟の如き細沫をなすもの。（飛沫）。

〔みつける［見附］（他）「みつく」の訛。

みつご［三子］（名）㊀一回の産に三人生まれたる小兒。（品胎）。㊁三歳の小兒。

(みつご［密語］（名）ひそ〳〵ばなし。こそ〳〵ばなし。又、ないしよばなし。

みづご［稚子］（名）生まれたるばかりの兒。あかご。ちご。（嬰兒）。

(みっこく［密告］（名）㊀ひそかに告げかたること。㊁ひそかに告發すること。

みづごけ［水苔］（名）㊀【植】水蘚科に屬する下等植物、多く沼澤などに發生し、淡綠色若しくは帶黃色を呈す。㊁物に附着せるみづあか。

みづこし［水漉］（名）㊀みづぶるひ。すゐなう。㊁水を漉して澄ます器、桶・瓶などに或は砂を盛り或は紗などを張りて漉す。

みづこぼし［水翻］（名）茶碗を洗ひたる水を翻す茶器。こぼし。（建盞、建水）。

みづごり［水垢離］（名）垢離に同じ。

(みっさう（ウーツ）［蜜槽］（名）植物の蜜を分泌する機官、花の內部にあるものと花の外部にあるものとあり、又、葉柄にあるものあり、何れも蜜蟲を誘引するためのもの。

〔みづざうしき（ウーツ）［水葬式］（名）死骸を水中にはうむること。

〔みづざうれい（ウーツ）［水葬禮］（名）前條に同じ。

みづさかづき［水杯］（名）酒の代りに水を用ふる別れの杯。永き別れを豫期してなすもの。

みづさき［水先］（名）㊀水の流れ向ふ方。㊁船の進み行くべき水路。㊂水先案內をなすもの。

——あんない［水先案內］（名）大船の港灣を出入する際、危險をまぬかるゝため、水路に明かなるものを傭（ヤト）ひ、小船を以て其先に立ち案內をなさしむること。水路の案內。又、其業の人。

みづさし［水差］（名）鐵瓶・花瓶又は茶湯の釜などに水を注（ツ）ぎ入るゝ器。（水注子、水提）。

みつざたう（ウート）［蜜砂糖］（名）砂糖の未だ精製せずして黑色の液狀をなすもの。

(みっし［密使］（名）ないしようの使者。ひそかにつかはす使者。

(みっし［密旨］（名）祕密のむね。

(みつじ［密事］（名）祕密のことがら。

十みづし［御廚子］（名）廚子の敬稱。

十みづし［水仕］（名）「みづしめ」に同じ。

みづしごと［水仕事］（名）水を使用する仕事。又、臺所の仕事。

(みっしつ［密室］（名）㊀密閉して妄りに人の出入を許さゞる室。㊁祕して他に知れざるやうにしたる室。——かんきん［密室監禁］（名）【法】豫審判事が、犯罪事實の發見の妨害を防ぐため、職權

又は檢事の請求により、拘留せられたる豫審中の刑事被告人を密室に監禁すること、其期限は十日以上を超ゆることを得ず、又、其期限中少くとも二度以上被告人を訊問することを要するものなれど、更に言渡をなすときは幾回にてもこれを行ふを得。

十みづしどころ［御廚子所］（名）古昔、禁中にて樂器・書籍などををさめおかれたる所。

十みづしどころ［水仕所］（名）㊀禁中にて朝夕の供御（ゴク）を調ふる所。㊁貴人の家の臺所。

(みっしふ（ウーシ）［密集］（名）しげくあつまること。ごたごた集まること。

みづしめ［水仕女］（名）水仕事に使はるゝ下女。臺所に使はるゝはしため。

みづしも［水霜］（名）つゆしも。

(みっしやう（ヨウーシ）［密娼］（名）いんばい。ぢごく。

(みっしやう（ヨウーシ）［密商］（名）密買する商人。ぬけうりするもの。

みづしやく［水尺］（名）水の高さを測るために水中に樹（タ）て尺度をきめる材。（水則）。

(みっしゆう［密宗］（名）【佛】「みっけう」に同じ。

(みっしよ［密書］（名）祕密の文書又は手紙。

みづすぢ［水筋］（名）水の流れ向ふすぢ。

みづすまし［水澄］（名）【動】（い）鞘翅類に屬する昆蟲、長さ五六分許、全身淡黑色にして光澤を帶び、形蜘蛛に似、常に水面に群集す。みづぐも。かつをむし。（水黽）。（ろ）「まひまひむし」に同じ。

(みっせい［密生］（名）しげくすきまなく生ずること。

(みっせう（ヨウーシ）［密詔］（名）內密のみことのり。

みつせがは（ワーガ）［三瀨川］（名）「さんずがは」（三途川）に同じ。

(みっせつ［密接］（名）すき間なくつくこと。ぴったりとつくこと。「—の關係を有す」。

みづぜめ［水攻］（名）㊀河水を堰（セ）きとめて、敵城に向ひそゝがしむること、敵城を水びたしにして苦しむること。（灌城）。㊁敵城の汲水路を絕ちきりて苦しむること。

みづぜめ［水責］（名）水を浴（ア）せ又は飲ませて拷問すること。

ミツダ［密陀］（名）「ミッダソウ」の略言。——ソウ［密陀僧］（名）【化】酸化鉛の稱。——のあぶら［密陀油］（名）密陀僧を荏の油に溶かしたるもの、油繪に用ふ。

みづた［水田］（名）水のある田。

みつだうぐ（ウードー）［三道具］（名）㊀衝棒（ツクボウ）・刺叉（サスマタ）・そでがらみを合せての稱。㊁錐・小刀・鋏を合せての稱。

みづタバコ［水煙草］（名）【植】苦苣苔科に屬する草、葉は平滑にして根より生ず、花は莖端に簇生して聚繖花序をなす、花冠は幅狀に五裂す、觀賞用として栽培せられ、葉は食用に供せらる。（苦苣苔）。

みづたま［水玉］（名）㊀水の玉となりて飛散するもの。㊁荷葉（ハス）の上などにおける露のたま。㊂硝子を吹きて玉を作り、內部に水などをいれたるもの、兒女の翫などゝす。

みづたまり［水溜］（名）水のたまりたる所。にはたづみ。

みづだめ［水溜］（名）水を溜め置く所。

(みつだん［密談］（名）ない〳〵のさうだん。內密のはなしあひ。內談。

みづち［蛟］（名）龍の屬、蛇に似て四脚ありといひ、又、龍の子なりともいふ。（虬、虯）。

十みづち［水神］（名）みづは。

〔みっちや（名）あばた。

みづちやう（ヨウーチ）［水帳］（名）（御圖帳の義）古昔、土地段別の圖に其持主の名及年貢高などを記して民部省に備へおかれし帳簿。たぶみ。（田籍）。

(みっちやく［密着］（名）すきまなく附着すること。ぴったりとつくこと。

みづちやや［水茶屋］（名）路傍などにて、煎茶・飲水などを通行人に賣る店。

(みっつう［密通］（名）男女ひそかに相通ずること。みそかごと。

十みづつき［承鞚］（名）古昔は手綱の端を受くるくつわの孔の稱。現今は手綱の兩端の稱。

みづづく（かきくけけ）［水漬］（自、か四）水に浸（ヒタ）る。みづく。

みづづけ［水漬］（名）水をかけたる飯。みづめし。

十みづて［水手］（名）文字の書き方、蘆手の類にして水の流るゝ形に擬して書けるもの。走りがき。

十みづてうし（ウーチヨ）［水調子］（名）三味線の調子の甚だ低きもの。

みづでっぱう（ウーポ）［水鐵砲］（名）一種の玩具、一端に節ある竹筒を用ひ、節の中心に小孔を穿ち、細長き棒の先端に襤褸（ボロ）などを卷きたるものを筒內にさし入れ、これを手許に引きて水を先端の小孔より筒中に吸ひ入れ、後更にこれを押して其小孔より迸出せしむるもの。

みづてんま［水傳馬］（名）「みづぶね」（一）に同じ。

ミット［Mitt］（名）野球にて球を受くるために用ふる手袋、中に毛を入れ大きくしたるもの。

(みつど［密度］（名）㊀こげき度合。㊁【理】物體の單位體積の質量。

みづどけい［水時計］（名）水を用ひて時刻をはかる裝置のもの、底に水の漏孔（モレアナ）のある盌（ボツ）に水を盛るこれを漏盌といふ、其水中に箭（ヤ）を立つ、

これを漏箭といひ、この水の漏れ減ずるに從ひ、漏箭の漏刻は次第に見はれ出づ、これを讀みて時を知ることを得。

みつどもゑ［三巴］（名）紋所の名、ともゑの三つ相めぐれる象（カタチ）を描（エガ）けるもの。

みづどり［水鳥］（名）水上に游泳する鳥の總稱、すべて趾に蹼を有す。（水禽）。

みづとりぶね［水取船］（名）「みづぶね」（一）に同じ。

みづな［水菜］（名）【植】十字花科に屬する栽培植物、葉は細裂して數多叢生し、花は黃色を呈す、葉は羹又は漬（ツ）けて食用に供せらる、水のみにて育（ソダ）つといふより此名あり。みぶな。きやうな。

十みつながしは（シーガ シワ）［御綱柏］（名）「みつのがしは」に同じ。

十みづながれ［水流］（名）火災（忌詞）。

十みつなし（くしきけれ）［無智］（形、二）才無し。

みづなし［水梨］（名）水分の多き梨の果實。（消梨、雪梨）。

十みつなのすけ［御綱助］（名）古昔、行幸に際し、車駕の綱を取りし近衛の官人の稱。

みづなは（ワーナ）［水繩］（名）「みづばかり」に同じ。

みづぬき［水拔］（名）みづはき。

みづのあわ［水泡］（名）㊀水上に浮ぶ泡。㊁はかなき物事にいふ語。㊂心盡しのかひなきこと。無効。

みづのえ［壬］（名）（水の兄の義）十干の一にして、其第九位にあるもの。

十みつのがしは（シーガ シワ）［三角柏］（名）古昔とよのあかりなどに御酒を盛るに用ひられし柏の葉にして、其尖端の三叉（マタ）となれるもの。みつながしは。

みつのたから［三寶］（名）㊀三種の神器の稱。㊁【佛】「さんばう」に同じ。

みづ-の-て［水手］（名）㊀城などに飲料として引く水。（汲路、汲道）。㊁火消の水。

みづ-の-と［癸］（名）（水の弟の義）十干の一にして、其最終に位するもの。

みづ-のみ［水呑］（名）水を呑む器、多くは玻璃にて製す。コップ。

みづのみ-びやくしやうヨウーシ［水呑百姓］（名）いと貧しき農民。

みつ-ば［三葉］（名）【植】繖形科に屬する草、香氣あり、山地に自生し又は栽培せらる、莖圓く、葉は三個の小葉より成る、花は白色小形にして稍や淡紅色を帶び繖形花序に排列す、葉莖は食用に供せらる。みつばぜり。（野蜀葵）。

廿**みづは**［罔象］（名）水の神。

廿**みづ-は**［瑞齒］（名）老人となりて生ふる齒にして、長壽の相といへるもの。（齯）。

（**みつ-ばい**［密賣］（名）㊀禁制又は規約を犯（カオ）して竊（カヒソ）に賣ること。㊁「みつばいいん」の略。――**いん**［密賣淫］（名）ひそかに淫をひさぐこと、又、其女。

みづ-ばかり［準］（名）㊀水を流して物の面の平なるか否かを測ること。㊁細長き材に溝を穿ちて水を盛り、これを物の上に置き、其水平面によりて傾きの度を知る器。㊂水準器。

みづ-はき［水吐］（名）溜水を落とす處。（放水）。

廿**みづは-ぐ・む**むまみむむめめ［瑞齒萠］（自、ま四）㊀みづは生ず。㊁甚だ老ゆ。

みづ-はこべ［水繁縷］（名）【植】水馬齒科に屬する草、流水に生ず、莖は細くして叢生し、葉は小形にして對生す。（水馬齒）。

廿**みづは-さ・す**さしすすせせ［瑞齒萠］（自、さ四）みづはぐむ。

みづ-はじき［水彈］（名）空氣の壓力を利用して水をひきあぐる器械、卽ち「ポンプ」、龍吐水・水鐵砲等の類の稱。

みつ-ば-ぜり［三葉芹］（名）【植】「みつば」に同じ。

みつ-ばち［蜜蜂］（名）【動】膜翅類中蜜蜂科に屬する昆蟲、群棲して巢を營み一社會をなす、形は山蜂に似て小さく、背部暗黑色にして羽は灰色なり、一匹の蜂王及少數の雄蜂はたゞ巢內にありて生殖に從事し、他の幾多の生殖器能なき職蜂は花蜜及花粉の採集・巢窠の營造及育兒等に從事す、其巢內に貯蓄して冬期の食料に充つる蜜及其巢窠より製造せらるゝ蠟は、種々の用に供せらる。みちばち。

みつば-つつじ［羊躑躅］（名）【植】「いはつつじ」の一名。

みづ-ばな［水鼻］（名）水の如く淡（ハア）き鼻汁。

廿**みつば-よつばに**［三葉四葉］（副）宮殿の幾棟となく打續くさまにいふ語。「―殿づくりせり」。

みづ-ばり［水張］（名）水にひたしたる布帛を板に張ること、又、其張りたる布帛。

みづ-ばれ［水腫］（名）身體、水氣のためにはれふくるゝこと。

みづ-ひき［水引］（名）㊀もとは、專ら下に張りて上に張る帽額（モカウ）に對せしむる幕の稱。今は、芝居にて舞臺の上に張る細長き幕の稱。㊁紙捻に糊水を引きて乾し固めたるもの、進物を結ぶに用ふ、吉事に用ふるものは半紅半白にして凶事に用ふるものは半白半黑なり。㊂【植】蓼科に屬する草、葉は楕圓狀をなす、花は小形にして普通深紅色を呈し蔟生して總狀花序をなし、其白色を呈するを銀水引といひ、紅白相雜（ジマ）はれるを御所水引といふ。（金線草）。

みづ-びたし［水浸］（名）水にひたりうるほふこと。

（**みっ-ぷ**［密夫］（名）みそかをとこ、かくしをとこ。

（**みっ-ぷ**［密婦］（名）かくしをんな、いろをんな。

（**みっ-ぷう**［密封］（名）すきまなく堅く封をなすこと。

みづ-ぶき［水蕗］（名）【植】「おにばす」の一名。

みづ-ぶくろ［水袋］（名）魚の腹中にある氣胞、卽ちうきぶくろ。（水鰾）。

みづ-ぶくれ［水脹］（名）皮膚の腫（ク）れて水腹をもつこと、又、其もの。

みづ-ぶね［水船］（名）㊀飲水を運搬する船、水傳馬、水取船。㊁水を貯へ置く大いなる匣。（水槽）。㊂いけぶね。いけす。

廿**みづ-ふぶき**［水蕗］（名）【植】「おにばす」の一名。

みづ-ぶるひルイ－フ［水篩］（名）みづこし、水濾（スイナウ）。

（**みっ-ぺい**［密閉］（名）すきまなく堅くとづること。

廿**み-つぼ**［水泡］（名）粒立ちたる水の泡。

みづ-ほ［瑞穗］（名）みづ〳〵しき稻の穗。――**のくに**［瑞穗國］（名）我日本國の美稱。

（**みつ-ぼう**［密謀］（名）祕密のはかりごと。

みつ-ぼし［三星］（名）㊀からすき星。㊁紋所の名。

みづ-まき［水撒］（名）地上に水を撒（マ）きうるほすこと、又、其事にやとはれたる人。

みづ-ます［水枡］（名）液量を計る枡。

みつ-また［三叉］（名）㊀三筋に派（ワ）かれたる所。㊁【植】瑞香科に屬する小木本、枝は三叉（マタ）をなす、葉は長楕圓狀披針形をなし落葉す、早春の頃黃色の花開く、樹皮の纖維は製紙の料に供せらる。（黃瑞香）。

みつ-まめ［蜜豆］（名）ゆでたる豌豆に蜜又は砂糖をかけたるもの。

みつ-み［三身］（名）並幅一反の布帛の半分にて仕立てたる衣服、三歲より五歲頃までの小兒の着（キ）るもの。

（**みつ-みつ**［密密］（名）㊀ひそか、㊁こまやか、㊂ぴったり。

廿**みつ-みつ・し**しくしくしきしけれ［潾潾］（形、二）ものたらひてあり。又、若くして元氣あり。

廿**みつ-みつし**（枕）「久米の兒等」・「久米の若子」に冠らする詞。

みづ-みづ・ししくしくしきしけれ［瑞瑞］（形、二）うるはし、つやゝかなり。

み-つ・むめめむむるれめよ［見詰］（他、ま、下二）餘念なく其ものゝみを見て更に目を他に移さず、久しく目をとゞめ見る。（凝視）。

みづ-むし［水蟲］（名）㊀水中に生ずる蟲。㊁【動】「やまめ」の一名。㊂水仕事する人の手又は足などに生ずる小さき疥、皮剝けて赤肌となる。（濕紫風）。

み-つ-め［三目］（名）㊀目の三つあること。㊁婚禮又は誕生より、三日目の稱。（三朝）。――**ぎり**［三目錐］（名）三稜ある錐。（三稜錐）。――**こゾウ**［三目小僧］（名）目の三つありといふ怪物。

みづ-めし［水飯］（名）すゐはん。みづづけ。

〜**みつめる**（他）「みつむ」の訛。

廿**みづ-もせ**［水狹］（名）水上も狹きほどなること。

みづ-もち［水餅］（名）堅くならぬため且つはかびのはえぬため水に漬け置きたる餅。

みづ-もの［水物］（名）㊀水氣あるもの。又、流動物。㊁自然の運に任（カマ）す外なるもの。㊂忽ちろうずとなり易きもの。

み-つもり［見積］（名）みつもること、目算。――**がき**［見積書］（名）見積の結果を書きしたゝめたる書きもの。

みづ-もり［水盛］（名）「みづばかり」に同じ。

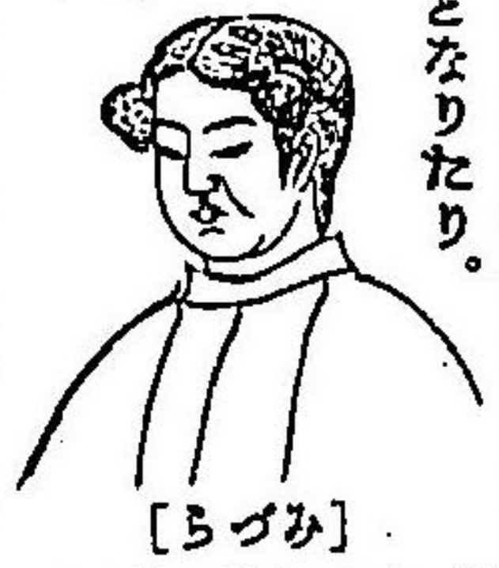
み-つも・るらりるるれれ［見積］（他、ら四）㊀目分量にてあらましを測算す、㊁すべて物事のあらましを測算するにいふ。

みづ-や［水屋］（名）㊀神社・佛閣に水を供へおきて參詣人に手又は顔を洗はする所。㊁茶室の隅に設けおきて茶器を洗ふ所。㊂飲料水を賣る人。㊃夏日氷水などを賣る家。

（**みつ-やく**［密約］（名）祕密の約束。

みづ-よけ［水除］（名）水を防ぐために設けたるもの。

み-づら［角髮］（名）上古、男子の髮の結方、頂の髮を左右へ分けて結べるもの、卽ち後世のあげまきにして、少年の髮の結方となりたり。びんづら。（角子）。



［らづみ］

〜**み-づら**［見面］（名）みえ。外見。

みづ-らうウーロ［水牢］（名）下に水をたゝへたる牢屋。

みづら-ささげ［角髮大角豆］（名）【植】さゝげの一種、莢二叉（フタマタ）をなして、形みづらに似る。

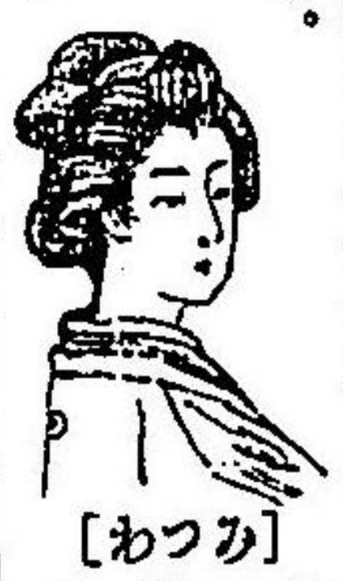
（**みつ-らふ**ウーロ［蜜蠟］（名）蜜蜂の巢窠より製したる蠟、蜜を採（ト）りたる後の巢窠を湯にて煮て融（ト）かし、浮きあがりたる油狀のものをすくひ取りて、冷水に入れ固まらせたるもの。

廿**みつ・る**るれれるるれよ［羸］（自、ら下二）身やつる。

廿**み-つれ**［羸］（名）身やつるゝこと。

（**みつ-れふ**ヨウーリ［密獵］（名）ひそかに規定を破って獵すること。「―船」。

み-つ-わ［三輪］（名）婦人の髮の結方、髻（モトドリ）の末を三つに分けて綰（ワガ）ぬるもの。



［わつみ］

みつ-わり［三割］（名）㊀四斗樽の酒の三分の一の量。又、其量を入るゝ樽。㊁凡てのもの、三分の一、「―一つ」。

みづ-を［鐙靼］（名）鞍（クラ）の脇より下の鐙（アブミ）を釣る革の紐（ヒモ）。ちからがは。――**がね**［鐙靼鐵］（名）ぴちよがね。

み-て［見手］（名）見る人。

（**み-てい**［未定］（名）いまだ定まらざること。――**かう**コーウ［未定稿］（名）いまだ推敲を經ざる草稿。

（**み-ていねん**［未丁年］（名）未だ丁年に達せざること。――**しや**［未丁年者］（名）未だ丁年に達せざるもの。

廿**み-てぐら**［幣］（名）神に奉る物の總稱。ぬさ、御幣、幣束。

み-と［水門］（名）海水の出入口、みなと、瀨戶、（水戶）。

み-とが・むめめむむるれめよ［見咎］（他、ま下二）見て咎立（トガメダテ）をなす。

〜**みとがめる**（他）前條の訛。

廿**み-とき-よく**［御時好］（副）㊀折よく、好機會に。㊁機嫌よく。

廿**み-どころ**［見處］（名）㊀見るべき處、見るねうちある處。㊁見逃すべからざる處。㊂將來の有望なること。みこみ。

廿**み-とし-ろ**［御戶代］（名）神に供する稻を作る處。神田。（御刀代）。

み-とど・くけけくくるくれけよ［見屆］（他、か下二）㊀たしかに認（ミト）む、しかと見る。見のがさず。㊁をはりまでよく見る。前途まで見る。

み-とどけ［見屆］（名）みとゞくること。

廿**み-と-の-まぐはひ**ワイーフグ［交合］（名）男女の交合、媾合。

み-とほしオートシ［見通］（名）㊀此方より彼方まで一

目に見ゆるを。㊁みすかすと、見通（トホ）すと。（洞見）。㊂あやまりなく將來を推定するを。㊃「みえ。外見。（伊豆地方の方言）。

み-とほ・す（オス）（さしすせ）［見通］（他、さ四）㊀此方より彼方を一目に見る。㊁隱れたる事をよく推知す。みすかす。洞察す。㊂將來の事をよく推知す。

み-と・む（めめむむるれめよ）［認］（他、ま下二）㊀それと見定む。見て知る。㊁志かと見定む。たがひなしと見る。㊂可とす。ゆるす。うべなふ。

みとめ［認］（名）㊀みとむるを。㊁「みとめいん」の略言。**——いん**［認印］（名）苗字などを彫りつけたる簡略なる印形。實印の對。

みっ-と-む-な・し（くしきけれ）（形、二）みともなし。

み-ども［身共］（代名）自稱の代名詞、德川時代に武士などの下輩に對して多く用ひしもの。

み-とも-な・し（くしきけれ）（形、二）㊀見たくなし。㊁人聞わるし。人目はづかし。

卄**み-とらし**［御執］（名）弓の敬稱。御弓。

み-とり［看取］（名）㊀見て知るを。㊁見てうつしとるを。㊂病人の側に在りて介抱するを。看病。

みどり［綠］（名）㊀靑と黃との間色。㊁深き藍色。翠色。（翠）。㊂松の若葉。**——いろ**［綠色］（名）前條(二)に同じ。

みどり-ご［嬰兒］（名）（綠の子の義、其髮黑くして綠色を帶ぶる義）五六歲までの小兒の稱。（孩兒）。

みとり-づ［見取圖］（名）見たるさまをうつしとりたる略圖。

みどり-の-くろかみ［綠黑髮］（名）黑くして綠色を帶ぶるつやよき髮。

み-と・る（らりるるれれ）［見取］（他、ら四）㊀傍より見て知る。㊁見てうつしとる。㊂看病す。

み-と・る（れれるるれれろよ）［見蕩］（自、ら下二）餘念なく見る。心奪はれて見つむ。恍惚として見る。

⌒**みとれる**（自）「みとる」の訛。

—みどろ［塗］（接尾）まぶるるを。まみるるを。「血—」。

卄**みな**［蜷］（名）【動】「にな」に同じ。

みな［皆］（副）すべて。ことごとく。全體。（咸、僉）。

みな-かみ［水上］（名）かはかみ。上流。

卄**みな-がら**［皆］（副）のこらず。すべて。みんな。

卄**み-な-ぎは**（ワギ）［水際］（名）みぎは。

卄**み-な-ぎら・ふ**（ラフ）（はひふふへへ）［漲］（自、は四）「みなぎる」の延言。

み-な-ぎ・る（らりるるれれ）［漲］（自、ら四）㊀水勢はびこり盛（サカ）る。水流みち溢る。㊁はびこりわたる。ひろがりみつ。「烟焔天に—」。

みな-くち［水口］（名）田に引く水の入口。

みなぐち-ざいく［水口細工］（名）近江國水口より產出する葛蔓の細工物。ふぢがうり。

み-なげ［身投］（名）水に身をなげて死ぬるを。入水。

みな-ごろし［鏖］（名）殘らず殺すを。

み-な-し［看做］（名）みなすを。

み-な-し-ご［孤］（名）親のなき幼兒。（孤兒）。

卄**み-な-しろ**［御名代］（名）「なしろ」の敬稱。

み-な・す（さしすすせせ）［看做］（自、さ四）㊀見てそれと假り定む。㊁見て其ものとなす。

み-な-そこ［水底］（名）水のそこ。みづそこ。

み-な-づき［水無月］（名）陰曆六月の異稱。

み-な-と［水門］（名）（水之門（ト）の義）「みと」に同じ。

み-な-と［港］（名）（前條の轉）海の陸に入りこみて船舶のあつまり碇泊する處。（湊）。

み-な-ぬか［三七日］（名）人死にて二十一日目の稱。

み-な-は（ワナ）［水繩］（名）檣のけたにつけて帆を上げ下げする綱。

（**み-な-ふり**［未納］（名）いまだをさめざるを。

み-な-ほし（オシ）［見直］（名）みなほすを。

み-な-ほ・す（オス）（さしすすせせ）［見直］（他、さ四）㊀更にあらためて見る。㊁見ておもひなほす。

卄**み-な-また**［水派］（名）河水の派（カワ）るゝ所。

みなみ［南］（名）㊀日出に面して右手の方。みんなみ。㊁「みなみかぜ」の略言。**——かぜ**［南風］（名）南より吹き來る風。**——くわいきむふうたい**［南回歸無風帶］（名）【地】回歸無風帶の條を見よ。**——どち**［南東風］（名）南にかたよりたる東風。

み-な-もと［源］（名）㊀河水の流れ出づるもと。㊁物事のおこりはじまるもと。

み-な-ら・す（さしすすせせ）［見馴］（他、さ四）見なるゝやうにす。

み-な-らひ（ライ）［見習］（名）㊀みならふを。㊁或業務を見ならふためにつとめゐる人。「—士官」。

み-な-ら・ふ（ラウ）（はひふふへへ）［見習］（他、は四）傍にゐて見て習ふ。見て學ぶ。

み-な-り［身形］（名）衣服をつけたるさま。よそほひ。

み-な・る（れれるるれれろよ）［見馴］（自、ら下二）常に見る。しば〳〵見て異樣に感ぜず。

み-な・る（れれるるれれろよ）［身馴］（自、ら下二）からだによくなる。からだにあふやうになる。

卄**み-な・る**（れれるるれれろよ）［水馴］（自、ら下二）水に浸りて馴る。「みなれざを」。

み-な-れ-がほ（オガ）［見馴顏］（名）㊀常に見馴れたる顏。㊁見馴れたるさまをよそほふを。

み-な-れ-ごろも［身馴衣］（名）常に着てからだになれたる衣。

卄**み-な-れ-ざを**［水馴棹］（名）水馴れたる棹。

⌒**みなれる**（自）「みなる」の訛。

卄**み-な-わ**［水泡］（名）水の泡。あわ。**——がくれ**［水泡隱］（名）水なわの下にかくれて見えざるを。

卄**みな-わた**［背腸］（名）「せわた」に同じ。

み-にく・し（くしきけれ）［見惡］（形、二）㊀見るに困難なり。見分け難し。㊁見るに嫌はし。㊂けがらはし。いやしむべし。㊃容貌わるし。器量おとれり。みめよからず。（醜）。

み-ぬ・く（かきくくけけ）［見拔］（他、か四）㊀みとほす。みすかす。洞見す。察知す。㊁鑑定してあつ。㊂見てえらびおく。

みね［峯］（名）㊀山の頂。ね。㊁刀のむね。（刀背）。**——いり**［峯入］（名）「おほみねいり」に同じ。**——うち**［峯打］（名）「むねうち」に同じ。

卄**み-ね-た-て-まつ・る**（らりるるれれ）（自、ら四）（「みね」は御哭の義）哀（カナ）しみ泣き奉る。

みね-ばり［峯榛］（名）【植】「をのをれ」に同じ。

みの［蓑］（名）茅又は菅などの莖葉を編みて作りたる雨具、編みあましたる莖の末みだれ髮の如く垂る。

卄**みの**［葈子］（名）【植】禾本科に屬する草、廢田に生ず、苗、麥に似て小さし、初夏穗を結ぶ。みのごめ。（菵草）。

み-の［美濃］（名）「みのがみ」の略言。

み-の-うへ（エウ）［身上］（名）㊀一身の關係。「—を思ふ」。㊁生涯の運命。

みの-かさ［蓑笠］（名）蓑とかさと。又、蓑を着て笠をいたゞくを。

み-の-がし［見逃］（名）みのがすを。

み-の-が・す（さしすすせせ）［見逃］（他、さ四）㊀見て打捨ておく。見ながら其まゝにしておく。㊁咎（トガ）むべきはずのものを咎めず。ゆるしおきて問はず。

みの-がみ［美濃紙］（名）美濃國より最も多く產出する紙、厚くして強く、判は半紙より廣し。（書院紙、直紙）。

みの-がめ［蓑龜］（名）【動】(い)龜の年老いて甲に毛の如き苔の生じたるもの。（綠毛龜）。(ろ)龜の一種、海中に產す、長さ七尺餘に達す、甲紋十三あり、肉は食用に供せらる、小笠原島にて多くこれを漁獲す。

み-の-け［身毛］（名）皮膚の毛。

みの-げ［蓑毛］（名）鷺の頸に亂れ垂れて蓑の如きさまをなせる羽。

み-の-け-だ・つ（たちつつてて）［身毛立］（自、た四）恐さ又は怖しさにぞっとして、身の毛いよだつ。

み-の-しろ［身代］（名）㊀人身賣買の金。（身價）。㊁船人の給料。**——きん**［身代金］（名）前條に同じ。

卄**み-の-しろ-ごろも**［蓑代衣］（名）蓑の代はりに着る衣。

み-の-たけ［身長］（名）人の身の高さ。せい。

卄**みの-はし**（ワシ）［蘼芘］（名）【植】「さゝくさな」の古稱。

みの-ほし［美濃干］（名）守口大根の乾したるもの、美濃國及尾張國の產。**——だいこん**［美濃干大根］（名）前條に同じ。

みの-むし［蓑蟲］（名）【動】鱗翅類に屬する昆蟲、全體赤黑色なり、若葉の出づる頃、老葉を卷きて棲み、絲を吐きて蓑狀の巢を作り、其中に入りて蛹化す、雌蟲は其巢中に產卵して蛹狀のまゝにして潜伏すれど、雄蟲は出でゝ蛾に化す。ごみむし。（結草蟲、木螟、避債蟲）。

卄**み-の-も**［水面］（名）水の表面。すゐめん。

み-のり［實］（名）みのるを。みのるさま。（結實）。

卄**み-のり**［御法］（名）宗教の敬稱、佛法の敬稱。

みの・る（らりるるれれ）［實］（自、ら四）實を結ぶ。

みの-わた［三膲］（名）腹の臟腑。

み-ば［見場］（名）みえ。外見。

み-ばえ［實生］（名）草木の種子より發芽して生長したるもの、接木などに對していふ。みしやう。

み-ばえ［見映］（名）外見のはえあるを。みえのよきを。

み-はかし［御佩］（名）「はかし」の敬語、即ち貴人の佩刀の敬稱。

み-はからひ（ハカライ）［見計］（名）みはからふを。

み-はから・ふ（ハカラウ）（はひふふへへ）［見計］（他、は四）見て適度のものを定む。みつくろふ。

み-はた［御旗］（名）旗の敬稱。「錦の—」。

（**み-はつ**［未發］（名）いまだ外に發せざるを。**——の-ちゆう**［未發中］（名）儒學にて、外物に接せざるときの精神狀態の中正なるとの稱。

み-は・つ（てつつつれてよ）［見果］（他、た下二）見をはる。

⌒**みはてる**（他）「みはつ」の訛。

み-は-なし［見離］（名）みはなすを。

み-は-な・す（さしすすせせ）［見離］（他、さ四）㊀從來の關係を絶ち捨てゝかへりみず。みすつ。㊁目を離す。守り見ず。

み-は-な・つ（たちつつてて）［見放］（他、た四）前條に同じ。

み-はば［身幅］（名）㊀みのはば。㊁みごろの橫幅。（裁縫の語）。

み-はらし［見晴］（名）みはらすを。みはらすさま。ながめ。景色。

み-はら・す（さしすすせせ）［見晴］（他、さ四）廣く見渡す。遠く見やる。

みはり［見張］（名） 見渡して守ること、みはること、

――ばん［見張番］（名） 見張する番人。

みはる［三春］（名） 睦月（ムツキ）・如月（キサラギ）・彌生（ヤヨヒ）、即ち、舊暦正月・二月・三月の三月。さんしゆん。

みは・る（らりるるれれ）［見張］（他、ら四） ㊀目を開きて見つむ。（瞠、睢盱、直視）。㊁見渡して番をなす。

廿みはるか・す（さしすすせせ）［見晴］（他、さ四） みはらす。

みひら・く（かきくくけけ）［見開］（他、か四） ㊀目を開きて見る。㊁見出だす。發見す。㊂洞觀す。みやぶる。

廿みぶ［御封］（名） 封戸（フコ）を略していふ敬語。

廿みふ・す（せせすするすれせよ）［見伏］（他、さ下二） みさだむ。

みふゆ［三冬］（名） 神無月（カミナヅキ）・霜月（シモツキ）・極月（シハス）の三個月、即ち、陰暦十月・十一月・十二月の三個月。さんとう。

みぶり［身振］（名） からだを動かすさま、身のふり。（姿態、身態）。

みぶるひ（ルイブ）［身振］（名） ㊀身を振ひうごかすこと。㊁身のふるひうごくこと。をのゝくこと。（戰慄）。

みぶん［身分］（名） ㊀貴賤上下の階級。「―相應」。㊁一身の分際。㊂【法】法律上に於ける一定の地位。

――けん［身分權］（名） 【法】身分に伴ふ權利、例へば戸主權の如きこれなり。

みへ・だすき（ュ）［三重襷］（名） 三條の斜線を打ち違へにしたる模樣。

廿みぼめ［身褒］（名） 自らほこること。じまん。

みほ・る（るれれるるるれれよ）［見惚］（自、ら下二） 惚恍として見る。みとる。

みほん［見本］（名） 全體を推して知らしむるために示す品物の一部分。

廿みまう・し（くしきけれ）［見憂］（形、一） 見るとうし。見ると厭はし。めもあてられず。

廿みまか・る（らりるるれれ）［身罷］（自、ら四） 現世より罷り去る。死ぬ。

みまさり［見優］（名） 前よりはまさりて見ゆること。

廿みまし［御座］（名） 「おまし」に同じ。

廿みまし［汝］（代） いまし、なんぢ、な、まし。

廿みまぞか・り（らりりるれれ）［御座在］（自、ら四） 「いまぞかり」に同じ。

みまち［巳待］（名） 巳の日の夜に行ふ辨財天の祭事。

廿みま・の・みこと［御孫命］（名） 天照大神の御子孫の稱、天皇。「すめ―」。

みまは・す（さしすすせせ）［見廻］（他、さ變） 方々を見る。

みまはり（ワリ）［見廻］（名） みまはること。又、みまはる人。

みまは・る（ワル）（らりるるれれ）［見廻］（他、ら四） 警戒のために見てめぐりあるく。監督のため見てめぐりあるく。（巡回、巡察、巡見）。

みまひ（イ）［見舞］（名） ㊀みまふこと。㊁みろふて贈る音物（インモツ）。――じやう（ロウジ）［見舞狀］（名） 見舞の手紙。

みま・ふ（ウ）（はひふふへへ）［見舞］（他、は四） 起居を問ふ。樣子をたづぬ。とぶらふ。おとづる。

みまま［身隨］（名） 身の自由を得ること。身勝手。

（みまん）［未滿］（名） 或一定の數に未だ至らざること。不足。

みみ［耳］（名） ㊀顏の左右にありて聽感をつかさどる器官、外部を外耳といひ、其次の部を中耳といひ、内部を内耳といふ。（聽官）。㊁耳の形をなしたる取手。「鼎の―」。㊂聞くこと。又、聞ゆること。㊃扁たきものゝはし。――がとほい 耳のよく聞えざるにいふ。――がはやい 聞くことのさときにいふ。――にいる 聞こゆ。――につく 或聲のために心亂れて煩はしくあり。又、其聲を記憶して尚は聞ゆるかの如くに思はる。――にとまる 聞こゆ。――はやし 聞くとするどし。――をおほひてすずをぬすむ［掩耳竊鈴］ 自らは自らの罪惡が他に知れまじと思へど、他はよくこれを知れるにいふ。――をかたむく［傾耳］ 注意して聞く。――をすます 前條に同じ。――をそばだつ 前條に同じ。――をそろへて 金額をとりそろへて。――をたつ 耳をかたむく。――をそむ 前條に同じ。

みみあか［耳垢］（名） 耳の孔の垢。（耵聹）。

みみうち［耳打］（名） みゝこすり。さゝやき。（耳語）。

みみかき［耳搔］（名） 耳の孔の痒（カユ）きを搔（カ）きて掃除する具、多くは角類にて細き杓子形につくれるもの。（耳爬子）。

みみがくもん［耳學問］（名） きゝおぼえの學問、淺學なる者の學問。

廿みみかしがま・し（しくしきけれ）［耳囂］（形、二） かまびすし。やかまし。

廿みみかた・し（くしきけれ）［耳固］（形、二） 聞くことにぶし。

みみきき［耳聞］（名） ㊀きくこと。㊁世間をきゝさぐる役人。

みみぐさり［耳鎖］（名） 耳朶（ミヽタブ）につらぬきかざりとするくさり。

みみくせ［耳癖］（名） 聞きなれたる習慣。

みみくそ［耳屎］（名） みゝあか。（耵聹）。

みみぐる・し（しくしきけれ）［耳苦］（形、二） きゝぐるし、聞くに堪へず。（耳痛）。

みみこすり［耳擦］（名） 耳へ口を寄せて話すこと。

みみざはり（ワリ）［耳障］（名） 聞きて氣に障ること。聞くも厭はしきこと。

みみ志ひ（イーシ）［聾］（名） 耳の志ひたるもの。つんぼ。

みみず［蚯蚓］（名） 【動】（目不見の義）環蟲類に屬する蠕形動物、體圓く細長くして數多の環節より成る、腹面に細小なる刺を列生すれど、極めて短くして僅かに其尖頭を體表に出すのみ、其尖頭は後方に向ひ體の退卻を妨げ以て其前進を助く、各自雌雄の生殖器を具し、各自に卵子を產す、此類の蟲は土壤を食ひて細末とし且つ地中に穿入して空氣を流通せしめ植物の成長に効あれど、其萌芽を害するを以て、又害なしとせず、ゑさに使用せらる。めゝず。（歌女、曲蟺）。――がき［蚯蚓書］（名） みゝずの伸びたらんが如き文字、即ち拙き筆跡にたとへいふ語。――ばれ［蚯蚓脹］（名） 肌を搔（カ）きて又は長きものにて打たれたるあとの、みゝずの形の如くに腫（ハ）れてあからむこと。

廿みみせせのほね［完骨］（名） 耳の後の高き骨。

廿みみだた・し（しくしきけれ）［耳立］（形、二） みみだちてあり。耳障りなり。

みみだ・つ（たちつつてて）［耳立］（自、た四） ㊀耳ざはりとなる。㊁注意して聞くに足る。

みみたぶ［耳埵］（名） 耳の下部の垂れさがりたる肉。みゝのびく。みゝたび。（耳朶）。

みみたび［耳埵］（名） 次條に同じ。

みみたぼ［耳埵］（名） 前條に同じ。

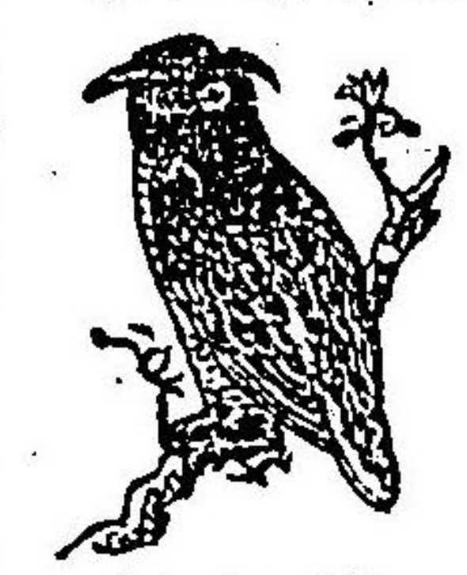
みみだらひ（ライ）［耳盥］（名） 「つのだらひ」に同じ。

みみだり［耳漏］（名） 耳孔より膿の出づる病氣。

みみだれ［耳漏］（名） 前條に同じ。

廿みみつきに［耳付］（副） みゝよりに。早く聞きたくて。

みみづく［木菟］（名） 【動】猛禽類中ふくろふ科に屬する鳥、頭部猫に類し耳に長毛を生じ其狀恰も耳殼の如し、圓形巨大の眼を有し、晝は森林にひそみ夜間出でゝ食を求む。（角鴟）。


［みみづく］

みみと・し（くしきけれ）［耳利］（形、一） 聽くとするどし。耳早し。

みみどほ・し（オード）（くしきけれ）［耳遠］（形、一） ㊀耳よく聞えず。㊁諭（サト）すにまはりどほし。迂遠なり。

みみな［耳菜］（名） 【植】「みみなぐさ」に同じ。――ぐさ［耳菜草］（名） 【植】石竹科に屬する草、路傍などに自生す、莖葉共に微毛あり、花は白色にして繖形花序をなす、葉の形鼠の耳に似たれば此名あり。（卷耳）。

みみなり［耳鳴］（名） 逆上して耳の鳴ること、

みみな・る（るれれるるるれれよ）［耳馴］（自、ら下二） 耳に馴る。たびたび聞きて怪まず。

廿みみばさみ［耳挾］（名） 上古、婦人が立ち働く時などに、其髮を耳の後へ搔（カ）き遣（ヤ）りたること。

みみばらひ（ライ）［耳拂］（名） 耳孔の垢を拂ふ具、鳥の柔毛をあつめこれに柄をつけたるもの。ぼんぼり。（消息子）。

みみふ・る（りりるるれれ）［耳古］（自、ら上二） 久しく聞き馴る、ふるくさくなりて珍らしく感ぜず。

みみへん［耳偏］（名） 漢字の偏の名、聽・聒等の左方にある耳の字の稱。

みみやす・し（くしきけれ）［耳易］（形、一） 聞き入れやすし。

みみより［耳寄］（名） 聞きたく思ふこと。

みみわ［耳環］（名） 耳朶（ミヽタブ）に垂るゝ玉環。

みむき［見向］（名） みむくこと。回顧。

みむ・く（かきくくけけ）［見向］（他、か四） 其方へ向きて見る。ふりむく。

みむろ［御室］（名） ㊀神のいます處。ほこら。㊁住所の敬稱。むむろ。

廿みめ［妃］（名） （御妻の義）きさき。

みめ［眉目］（名） ㊀かほだち。容貌。㊁ほまれ。面目。

（みめい）［未明］（名） 夜の全く明けはなれぬ時分。

みめかたち［眉目形］（名） かほだちとすがたと。

みめぐ・る（らりるるれれ）［見巡］（他、ら四） みまはる。

みめよ・し（くしきけれ）［眉目好］（形、一） かほだちすぐれたり。かほばせうつくし。きりやうよし。

みもち［身持］（名） ㊀子をはらむこと。懷姙。（懷胎）。㊁おこなひ。品行。行跡。㊂みなり。すがた。

みもと［身許］（名） ㊀身の出所。素性。㊁みのうへ。一身上の關係。――きん［身許金］（名） 奉公人の保證金。――ほ志よう［身許保證］（名） 其身の確實なることのうけあひ。其身上に就いての責任。――ほ志ようきん［身許保證金］（名） 身許保證のために差出す金。

みもの［見物］（名） ㊀目ざましきこと。見るに足るべきもの。（壯觀）。㊁けんぶつすること。みること。

廿みものおもひ（モイ）［諒闇］（名） （物思ひの敬語）天子の喪。

廿みもろ［御室］（名） みむろ。祠。神社。

みや［宮］（名） （御屋の義）㊀皇宮。禁裏。㊁皇后・中宮・皇子・皇女の御殿。又、其方々の尊稱。㊂伊勢の宗廟其他特別の神を祀る神社。

みやう（ヨウ）［見樣］（名） ものを見るさま。みかた。

（みやうが）（ヨウガ）［冥加］（名） ㊀冥々のうちに神佛の加護を蒙ること。冥利。㊁人のおかげ。――きん［冥加金］（名） 冥利を祈るためにいだす金錢。

十みやう-かう［名香］（名）めいかう。

（みやう-がう［名號］（名）【佛】阿彌陀佛の名。

（みやう-かん［冥感］（名）冥々のうちに神佛の感應あること。

十みやう-ぎやう［明經］（名）古昔、大學寮にて、經書を修めし科。――はかせ［明經博士］（名）古昔、大學寮にて明經の教授をなしゝもの。

（みやう-くわん［冥官］（名）地獄の廳にゐるといふ官人。

（みやう-けん［冥見］（名）神佛の冥々のうちにみそなはすこと。

（みやう-ご［明後］（名）㊀翌のつぎ。「――年」。㊁「みやうごにち」の略言。――にち［明後日］（名）明日の次の日。あさって。

（みやう-じ［名字］（名）姓の外につくる家名。うぢな（苗字）。――たいたう［名字帶刀］（名）德川時代に、平民が特殊の取扱によりて苗字をとなへ、帶刀するを許されしこと。

（みやう-じやう［明星］（名）㊀よひのみやうじやう及よあけのみやうじやうの總稱。㊁一社會に於て最も傑出し萬人其德光を仰ぐ程の人の稱。

（みやう-しゆん［明春］（名）明年のはる。

（みやう-じよ［冥助］（名）神佛の加護、冥加。

（みやう-じん［名神］（名）㊀名高き神。おもき神。㊁轉じて、名の字に明を宛て、神の尊號とす。「春日――」、「稻荷大――」。――だい［名神大］（名）（名神大座の略）古昔、神祇官の名神祭にあづかりし二百八十五座の內、祈年（トシゴヒ）・月次（ツキナミ）・新嘗等の御祭典に案上官幣にて幣を奉る重き神。

（みやう-せき［名跡］（名）名字の跡目をうけ繼ぐこと。

（みやう-せん-じしやう［名詮自性］（名）名はおのづから其ものゝ、性をいひあらはすこと。名實相應すること。

（みやう-だい［名代］（名）代理をつとむること。又、代理をつとむる人。――にん［名代人］（名）名代をつとむる人。

みやうつし［宮移］（名）「せんぐう（遷宮）」に同じ。

（みやう-てう［明朝］（名）あすのあさ。

（みやう-でん［名田］（名）新開地又は買受けたる田の、所有者の名を附したるもの。

（みやう-にち［明日］（名）あくるひ。あす。翌日。

（みやう-ねん［明年］（名）今年のつぎのとし。來年。

（みやう-ばつ［冥罰］（名）神佛より蒙る罰。

（みやう-ばん［明晚］（名）明日の夕。

（みやう-ばん［明礬］（名）【化】「アルミニウム」及「カリウム」の硫酸鹽にして無色透明の結晶體、火山地方に往々天然に產すれども、多くは粘土と硫酸とを熱し、これに硫酸「カリウム」を加へて製す、染色術其他工業上種々の用に供せらる。――せき［明礬石］（名）【鑛】明礬製造の原料とする硫酸及礬土の化合物、火成岩に屬す。

（みやう-ぶ［命婦］（名）㊀古昔、五位に叙せられたる女官の稱。㊁內侍司（ナイシノツカサ）の下級の女官。

十みやう-ぶ［名簿］（名）上古、貴人に見え又は他人に服從し、若しくは師に入門の時などに證として送りし名札。なづき。

十みやう-ぼふ［明法］（名）古昔、大學寮にて、律令・格式を修めし科。――はかせ［明法博士］（名）古昔、大學寮にて明法の科を教授せしもの。

（みやう-みやう-ごにち［明明後日］（名）

明日の次の又其次の日。やのあさって。

（みやう-みやう-ごねん［明明後年］（名）明年の次の又其次の年。

（みやう-もく［名目］（名）物事の稱呼。めいしやう。となへな。

（みやう-もん［名聞］（名）㊀世間に聞ゆる名譽。ほまれ。㊁ほまれを求めんためになすこと。

（みやう-り［名利］（名）名譽と利欲と。めいり。

（みやう-り［冥利］（名）㊀【佛】神佛が冥々の中に利益（リヤク）を垂れ給ふこと。㊁おこなひの隱報。

（みやう-りよ［冥慮］（名）神佛のみこゝろ。

（みやう-わう［明王］（名）【佛】異相を現じ三毒・國土・人民等を擁護すといふ神。「不動――」。「愛染――」。

みや-ぎ［宮木］（名）宮殿を造る材木。――もり［宮木守］（名）宮木を守る人。

（みやく［脈］（名）㊀【生】動物の體中にて血の運行する脈管、即ち動脈及靜脈の稱。ちのみち。（脈絡、脈管）。㊁【鑛】岩石の割目を充たせる鑛物質。㊂すべてもの、つゞき通りて系統をなすもの、稱。「山――」。㊃脈搏の略稱。――くわん［脈管］（名）【生】前條（一）に同じ。――どころ［脈所］（名）㊀身體の按じて脈搏を知りうべき所。㊁物事の急所。――はく［脈搏］（名）【生】動脈管の彈力により心臟より來る血液が波流をなして脈を搏つこと。――みやく［脈脈］（名、副）絕えず繼せらるゝさまにいふ語。――らく［脈絡］（名）つゞき。すぢ。――をとる　脈搏を按じて容體をうかゞふ。――をみる　前條に同じ。

（みやく-しるゐ［脈翅類］（名）【動】昆蟲類の一目、四翅の大さ略ほ等しく膜質透明にして翅脈は網

狀をなす、口器は物を咬（カ）み又は舐（ネブ）るに適す、變態は完全なり。うすばかげろふ・くさかげろふ等これに屬す。

みや-け［宮家］（名）親王方。

みや-け［屯倉］（名）（御宅（ミヤケ）の義）古昔、處々に設け置かれたる御料地の收穫を藏め置きし所。又、其官舍。（屯家）。

みや-げ［土產］（名）㊀其地に產するものを齎（モタ）らしかへりて贈るもの。いへづと。㊁すべて齎しかへりたるもの。――ばなし［土產話］（名）旅行中見聞したる物事のはなし。――もの［土產物］（名）「みやげ」に同じ。

みや-こ［都］（名）㊀（宮處（ミヤコ）の義）帝王の宮居ある土地。みさと。（京都）。㊁すべて人家あげくならびて物貨のよりあつまる地の稱。――いり［都入］（名）みやこに入ること。入京。――うつし［都移］（名）みやこを他所にうつさるゝこと。（遷都）。――うつり［都遷］（名）みやこの他所にかはること。――おち［都落］（名）みやこをにげ落つること。――がへ［都替］（名）みやこうつし。――ぐさ［都草］（名）【植】荳科に屬する草、葉は羽狀複葉にして五個の小葉より成る、花は黃色にして豌豆に類す、牧草に供せらる。（百脈根）。――ぢ［都路］（名）みやこのみち。又、みやこへのみち。――どり［都鳥］（名）【動】（い）涉禽類に屬する鳥、全身白く、嘴・脚赤し、海に近き河に棲む。（ろ）（謠曲隅田川に出づ）「かもめ」の一名。（隅田川にていふ）。――のぼり［都上］（名）みやこいり。――ばな［都花］（名）【植】「みやこぐさ」に同じ。――びと［都人］（名）みやこにすめる人。十――ぼとり［都誇］（名）都にすめるをほこること。――まひ［都舞］（名）やまとまひ。

みや-じ［宮主］（名）「みやぬし」に同じ。

みや-しげ-だいこん［宮重大根］（名）【植】尾張國中島郡宮重村より產出する大根、長くして端末太く、味美なり。

みや-じま-ざいく［宮島細工］（名）安藝國宮島よりつくり出す木彫の盆の類。

十みや-ぢ［宮路］（名）宮にまゐる路。

みや-すどころ［御息所］（名）（「みやすみどころ」の義）㊀天子の御休息所。㊁皇子を生みたてまつりたる女御、更衣の敬稱。㊂東宮・親王の妃の敬稱。

十みや-づかさ［宮司］（名）㊀中宮職。㊁「ぐうじ」に同じ。

十みや-づかふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）［宮仕］（他、は四）宮仕せさせて使ふ。

十みや-づかふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）［宮仕］（自、は下二）みやづかへをなす。

十みや-づかへ［宮仕］（名）㊀宮中に仕へ奉ること。㊁仕官。奉公。――びと［宮仕人］（名）宮仕せる人。

十みや-つこ［造］（名）（御臣の義）㊀朝廷に奉仕する人。文武百官・地方官等の總稱。㊁國造・伴造。

十みや-つこ［御奴］（名）官に仕ふる奴婢。

十みやつこ-ぎ［接骨木］（名）【植】「にはとこ」の古稱。

十みや-で［宮出］（名）禁中よりまかり出づること。

みや-でら［宮寺］（名）神佛混合のやしろ。

みや-どころ［宮所］（名）みやゐ。みや。

十みや-ぬし［宮主］（名）神祇官の重職。

みや-ばしら［宮柱］（名）宮のはしら。

十みや-ばら［宮腹］（名）皇女の御腹に生まれたまふこと。又、其御方。

十みや-ばら［宮儕］（名）宮家。宮方。

みや-び［雅］（名）みやびたること。俗ならぬこと。けだかきこと。風流。風雅。

十みや-びか［雅］（名）「みやびやか」に同じ。

みやび-ことば［雅言］（名）みやびたる言。正しき言葉。

みや-びと［宮人］（名）宮仕の官人。

みや-びやか［雅］（名）みやびたるさま。

みや-び-を［雅男］（名）みやびたる人。風流なるをとこ。

みや-ぶ（び、び、ぶ、ぶる、ぶれ、びよ）［雅］（自、は上二）優に貴きさまなり。けだかくあり。おとやかなり。俗ならず。風流なり。

み-やぶる（ら、り、る、る、れ、れ）［看破］（他、ら四）祕密などをさとり知る。みぬく。

み-やま［深山］（名）㊀山。㊁奧深き山。――がくれ［深山隱］（名）奧山の深くひそまりたる所。――がらす［深山鴉］（名）【動】燕雀類中からす科に屬する鳥、深山に穴居す、全身黑青色にして、目及口の邊と嘴とは赤し。（山烏）。――ぎ［深山木］（名）深山に生ふる木。――ざと［深山里］（名）深山にある人里。――だ［深山田］（名）深山にある田。――どり［深山鳥］（名）【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、雀より小さく、背・翅は赤黑色にして、斑文あり、能く囀（サヘヅ）る。

みや-まゐり［宮參］（名）うぶすなまゐり。

みや-めぐり［宮巡］（名）方々の宮を巡拜すること。

みや-もり［宮守］（名）宮の番人。

み-やり［見遣］（名）みやること。ながめ。みわたし。

み-やる（ら、り、る、る、れ、れ）［見遣］（他、ら四）遠方を見る。ながめ見る。見渡す。

みや-ゐ［宮居］（名）神の宮のある處。皇居。

み-ゆ［御湯］（名）㊀いでゆ。溫泉。㊁ゆだて。（湯立）。

み・ゆ（え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ）［見］〔自、や下二〕㊀目に知らる。見らる。㊁まみゆ。謁す。㊂發露す。あらはる。

み-ゆき［行幸］（名）天子の外出したまふこと。ぎやうかう。

み-ゆき［深雪］（名）雪。

み-ゆづ・る（ら、り、る、る、れ、れ）［見讓］（他、ら四）見比べて他に讓る。みかふ。

み-ゆる・す（さ、し、す、す、せ、せ）［見赦］（他、さ四）みのがしてとがめず。

み-よ［御代］（名）天皇の御治世。（御世）。

廿**み-よ**［三世］（名）【佛】「さんぜ」に同じ。「―の佛」。

み-よ［澪］（名）「みを」の訛。

み-よし［船首］（名）㊀船のさきにありて波を切る木。㊁轉じて、船のさき。

廿**み-よ-の-し**［三世師］（名）僧侶。

廿**み-よ-はじめ**［御代始］（名）御即位。踐祚。

み-より［身寄］（名）みうち。親族。（緣類）。

廿**みら**［韮］（名）【植】「にら」の古稱。

（**み-らい**［未來］（名）㊀時間の三區別の一、現在の後に來るべき時。將來。㊁後生。――**き**［未來記］（名）未來の事を豫言したる書。（讖書、讖文）。

廿**みら-の-ねぐさ**［細辛］（名）【植】「さいしん」の古稱。

ミリグラム［瓱＝Milligramme］（名）一瓦（グラム）の千分の一。

ミリメートル［粍＝Millimetre］（名）一米（メートル）の千分の一、三厘三毛に當る。

（**み-りん**［味醂］（名）「みりんしゆ」の略言。――**しゆ**［味醂酒］（名）一種の銘酒、燒酎・糯飯・麴にて釀したる甘味あるもの、飲料又は食物の調理等に用ふ。

みる［海松］（名）㊀【植】綠色藻に屬する海草、多數の管狀をなす細胞は密集して球形・圓筒形若しくは扁平狀等を形成し、多くは綠色を呈す。みるめ。うみまつ。㊁「みるいろ」の略言。

み・る（み、み、る、る、れ、よ）［見］（他、ま上一）㊀目にとめて知る。㊁眺む。望む。見物す。（觀）。㊂とりしらぶ。又、とりしまる。（視）。㊃つきそふ。又、まもる（看）。㊄讀む。「書を―」。㊅占ふ。「人相を―」。㊆延見す。㊇受く。「憂目を―」。

み・る（み、み、る、る、れ、よ）［試］（他、ま上一）ためす。こゝろみる。

みる-いろ［海松色］（名）㊀萌黃色を帶びたる綠色。みるの如き色。㊁かされの色目、表萌黃にして裏の青なるもの。

みる-がひ（イ-ガ）［海松貝］（名）【動】「みるくひ」の訛。

ミルク［Milk］（名）㊀牛乳。㊁「コンデンスミルク」。――**ホール**［Milk-hall］（名）客に牛乳を飲ましむる家。

みる-くひ（イ-ク）［海松食］（名）【動】斧足類中ばかがひ科に屬する貝、介殼稍や楕圓形をなして後方に開く、表皮稍や薄くして輪層をなし水管長くして表皮に覆はる、殼口にみるの多く生じ、それを食ふが如きさまなるより名づく。みるかひ。（西施舌）。

廿**みる-ぶさ**［海松房］（名）房になりて生ひたるみる、古昔、髮そぎの時、調度に加へたるもの。

廿**みる-め**［海松布］（名）【植】「みる」に同じ。（水松）。

みる-め［視目］（名）見る所。――**かぐはな**［視目嗅鼻］（名）㊀【佛】閻魔の像の傍にすゑたる善惡二者の人頭、よく亡者生前の善惡を知るといふ。㊁世人が他の擧動につきて注意深く觀察をなすことにいふ語。

みれう-の-いん（ウ-リョ）［未了因］（名）現世に於て未だつきはてざる前世の因緣。

（**み-れん**［未練］（名）㊀いまだ熟練せざること。未熟なること。㊁心の殘ること。あきらめ得ざること。

ミロク［彌勒］（名）㊀【佛】（梵語 Maitreya（梅咀麗耶）、慈氏と譯す）當來の佛、即ち未來に現出すといふ佛。㊁布袋（ホテイ）の異稱、彌勒の化身なりといふ。――**ブツ**［彌勒佛］（名）【佛】前條に同じ。廿――**ゑ**［彌勒會］（名）古昔、每年三月志賀の崇德寺にて彌勒佛を勸請する法會。

廿**み-わ**［酒甕］（名）㊀酒をかもすかめ。みか。㊁みき（神酒）。

廿**み-わき**［見分］（名）見わくこと。

み-わ・く（か、き、く、く、け、け）［見分］（他、か四）次條に同じ。

み-わ・く（け、け、く、くる、くれ、けよ）［見分］（他、か下二）見て區別す。知りて區別す。

み-わけ［見分］（名）みわくること。辨別。

み-わだ［水曲］（名）川の曲りたる處。

み-わた・す（さ、し、す、す、せ、せ）［見渡］（他、さ四）廣く遠方を見る。遠望す。ながむ。（展望）。――**かぎり**［見渡限］（副）目のとゞくかぎり。（極目）。

み-を［澪］（名）河海中にて船を通ずる水路となる深み。みよ。（水脈）。

み-を-ぎ［澪木］（名）みをのしるしに立つる木。

み-を-ぐひ（イ-グ）［澪杙］（名）前條に同じ。

み-を-さめ［見收］（名）見るはこれを限りとすること。見ることの最終。

廿**み-を-しる-あめ**［身知雨］（名）㊀おもひある身をしりがほにそのをりからふる雨。㊁「なみだ」の異稱。

み-を-じるし［澪標］（名）次條に同じ。

廿**み-を-つ-くし**［澪標］（名）（澪之串の義）澪（ミヲ）を示すために立つるしるし。みをじるし。

廿**みを-びき-ぶね**［澪引船］（名）大船を導きてみをを示し行く船。

ミン［明］（名）支那の有名なる朝、我紀元二千二十三年に朱元璋が元を滅して帝位に即きしより同二千三百七十二年に永明王が淸の太祖に滅されたる迄の間の稱。

（**みん-い**［民意］（名）人民の意思。

（**みん-いう**［民有］（名）人民の所有。――**ち**［民有地］（名）其所有者が人民なる土地。

（**みん-か**［民家］（名）㊀人民の家。㊁ひやくしやうや。

（**みん-かん**［民間］（名）人民の社會。

（**みん-けい-きよく**［民刑局］（名）司法大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、裁判所の設立廢止及管轄區域・民事・刑事及非訟事件・裁判・檢察・恩赦・復權・死刑執行及戶籍等に關する事項を取扱ふ司法省の一局。

（**みん-げふ**（ヨウ-ギ）［民業］（名）人民の事業。

（**みん-けん**［民權］（名）人民の政事上に於ける權利。――**たう**（ウ-ト）［民權黨］（名）民權を擴張若しくは維持することを主義とする黨派。

（**みん-こ**［民戶］（名）人民のいへ。

（**みん-ざい**［民財］（名）人民の資財。

（**みん-じ**［民事］（名）【法】私權に關する裁判事件。私法上の裁判事件、刑事の對。――**くわいしや**［民事會社］（名）【法】營利を目的とすれども、營業として商行爲をなすことを目的とせざる社團。――**げんこくにん**［民事原告人］（名）【法】公訴に附帶して私訴を提起する原告人。――**さいばん**［民事裁判］（名）【法】民事の裁判。――**さいばんしよ**［民事裁判所］（名）【法】民事裁判をなす裁判所。――**じけん**［民事事件］（名）【法】民事に同じ。――**せいさい**［民事制裁］（名）【法】他人の私權を犯し自己の義務を怠りたるものに蒙らしむる惡報。――**そしよう**［民事訴訟］（名）【法】民事制裁を司法裁判所に請求する手續、民事に關するうつたへ。――**たんたうにん**（ウ-ト）［民事擔當人］（名）被傭者又は無能力者等に代りて民事上の責任を負ふもの。――**ぶ**［民事部］（名）司法裁判所にて民事訴訟事件を取扱ふ所。

（**みん-じやう**（ジ-ヤウ）［民情］（名）人民の情態。しも〴〵のさま。

（**みん-しゆう**［民衆］（名）もろ〳〵の人民。

（**みん-しゆ-せいぢ**［民主政治］（名）民主制度によりて行はるゝ政治。

（**みん-しゆ-せいど**［民主制度］（名）其國の主權が人民にある制度。

（**みん-しよ**［民庶］（名）もろ〳〵の人民。

（**みん-しん**［民心］（名）人民のこゝろ、しも〴〵のこゝろ。

（**みん-じん**［民人］（名）たみ。

（**みん-せい**［民聲］（名）人民のこゑ、即ち人民のいふ所。

（**みん-せい**［民政］（名）人民の安寧幸福を目的とする政務。――**ちやうくわん**（ウ-チョ）［民政長官］（名）民政部の長官。――**ぶ**［民政部］（名）臺灣總督府及關東都督府にて、軍政以外の政務を取扱ふ所。

（**みん-せき**［民籍］（名）國籍。

（**みん-せつ**［民設］（名）人民の設けたるもの、官設の對。

（**みん-せん**［民選］（名）人民の選擧。人民の選出。――**ぎゐん**［民選議員］（名）人民の選出せる議員、代議士。

（**みん-ぞく**［民俗］（名）人民のならはし。

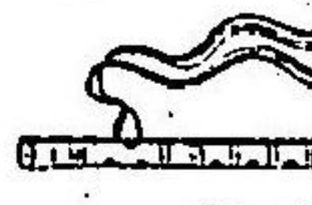
（**みん-ぞく**［民族］（名）人民の種族。

（**みん-だん**［民團］（名）外國に在留せる帝國臣民の狀態により外務大臣が必要と認むるとき、一定の地域内に居住する帝國臣民を以て組織する法人、官の監督を受け、法令・條約若しくは慣例に依り其事務を處理するもの。

（**みん-ちく**［閩竹］（名）【植】竹の一種、もと支那の閩より渡來す、觀賞用として栽培せらる。

ミン-てう（テ-ウ）［明朝］（名）明（ミン）朝のときに傳來したる木版活字の書體、縱畫太くし横畫細きもの、もと宋朝より始まりたるが故に宋體ともいふ。

ミン-てき［明笛］（名）笛の一種、七孔あり中央の一孔には竹紙を貼（ハ）る。



［ミンてき］

（**みん-ど**［民度］（名）人民の文野又は貧富の度合。

（**みん-ど**［民帑］（名）人民の財產。

（**みん-とく**［民德］（名）人民の德行。

（**みん-ばう**（ウ-ボ）［民望］（名）人民の心をよせて仰ぎたふとぶこと。人望。

（**みん-ぱふ**（ウ-ポ）［民法］（名）【法】主として私權の通則を規定したる法律。

（**みん-ぶ-しやう**（ヨウ-シ）［民部省］（名）古昔の八省の一、國中の土地・人民を管轄し其租稅及賦役等を掌りしもの、維新後にも一時これを設置せられたり。たみのつかさ。

（**みん-ぺい**［民兵］（名）民間にて備へ置く壯勇兵。

（**みん-やく-せつ**［民約說］（名）「けいやくせつ」（契約說）に同じ。

（**みん-りよく**［民力］（名）人民の財力。――**きうやう**（ウ-ヨ）［民力休養］（名）課稅をうすくし負擔を輕くして、つとめて人民の財力をゆたかならしむること。

む

む 唇的鼻音M即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「う」との綴音。

(む)[無](名) ㊀現在せざること、空虚なること。㊁【佛】斷見。

む[六](數) 三と三との和。ろく。むつ。

むめむ(助動) 未來及推量を表はす助動詞。

む(感) ㊀拒否の聲。「―といらへて立つ」。㊁感慨甚だ激し、口を結びて發する聲。「―かなしや」。

(む―)[無](接頭) 或語に冠して、其物事を打消す意を表はす語。

(む-い)[無意](名) ㊀故意なきこと。㊁無意識(二)に同じ。

むい-か[六日](名)（「むゆか」の轉） ㊀月の第六日。むよか。㊁日數六つ。――**の-あやめ**[六日菖蒲](名)（五月節句の翌日なる六日の菖蒲の義） 時機におくれて役に立たぬものにかりいふ語。

(む-いぎ)[無意義](名) 意義なきこと、主旨なきこと。

(む-いしき)[無意識](名) ㊀【心】[Unconsciousness]自我の觀念が活動なき狀態、例へば睡眠中に於ける意識の狀態の如し。㊁[Non-voluntary]意思の選擇を離れたる行動の狀態、例へば反射運動の狀態の如し。

(む-いちもつ)[無一物](名) 何ものをも所有せざること。「本來―」。

(む-いはん)[無意犯](名)【法】故意なくして成立する犯罪、例へば失火の如し。

(む-えき)[無益](名) 利益なきこと。むだ。むやく。

(む-えん)[無緣](名) ㊀緣の無きこと。㊁死者を弔ふ緣者の無きこと。「―塚」。「―佛」。(不血食)。

(む-えん)[夢魘](名) 夢におそはるゝこと。

(むえん-くわやく)[無煙火藥](名) 植物纖維卽ち綿の如きものを濃厚なる硝酸に浸(ひた)して製する火藥、通常の火藥に比すれば數倍の爆發力を有し、且つ爆發する際に煙を發せざるもの。

(むえん-たん)[無煙炭](名)【化】百分中に九十以上の炭素を含む石炭、石炭中最も多量に炭素を含有するもの、漆黑にして光澤を帶び、これを熱すとも容易に燃燒せざれど、空氣の流通を十分にすれば強熱を發して燃燒し、惡臭及煙を發せず。

むえん-づか[無緣塚](名) 弔(とむら)ふもののなき死者の墓。

むえん-ボトケ[無緣佛](名) 無緣の亡者。

(む-か)[無瑕](名) きずなきこと。むきず。

(む-が)[無我](名) ㊀我見なきこと。我意なきこと、私心なきこと。㊁我を忘れてなすこと。

(む-がい)[無害](名) 害なきこと。害をなさゞること。

(む-がい)[無涯](名) かぎりなきこと。

(む-か-いう)[無何有](名)「むかう」に同じ。

むかう[向](名)（「むかひ」の音便） ㊀正面の方。前面。「―きず」。「―齒」。㊁かなたの方。「―の山」。㊂未來の時。向後。爾後。㊃先方。對手。㊄【芝居】にて、舞臺の正面の棚のさ若き。――**を-はる** 對手となりて爭ふ。對抗す。

(む-か-う)[無何有](名)（莊子に出づ）何等の物事もなきこと、何等の人爲もなきこと。

(む-かう)[無效](名) ㊀しるしなきこと、効能なきこと。㊁【法】其行爲の法律上何等の効果をも生ぜざること。

むかう-きず[向傷](名) 前面へ受けたる傷。

むかう-の-さと[無何有鄕](名) 無爲にしてたのしき仙境。「ぞ。

むかう-ずね[向脛](名) 脛(はぎ)の前面。むかはぎ。

むかう-ば[向齒](名) 上の前齒。むかば。

むかう-まへ[向前](名) むかひ合ふこと。

むかう-みず[向不見](名) 思慮なく突進すること、前後を顧みずになすこと。

(む-がく)[無學](名) 學問上の知識なきこと。學問を知らぬこと。

むか-ご[零餘子](名) やまのいもの肉芽。ぬかご。

むかし[昔](名) ㊀年久しき前。遠く去りたる時。いにしへ。(往古。宿昔)。㊁過去の十年を一期としての稱。「一―」。「二―」。――**おぼ-ゆ**[昔覺](自、や下二) 古の事を思ひ出さる。「うちある調度も―おぼえて」。――**かたぎ**[昔堅氣](名) 古風にて律義なること。舊弊を守りて頑固なること。――**がたり**[昔語](名) むかしばなし。――**ざま**[昔樣](名) むかしのさま。――**づくり**[昔作](名) 古風のつくり。――**ながら**[昔隨](名、副) 昔そのまゝ。「―の山櫻かな」。――**なじみ**[昔馴染](名) むかしの親友。――**の-よ**[昔世](名) ㊀すぎさりし世。㊁前生。――**ばなし**[昔話](名) むかしのものがたり。――**びと**[昔人](名) ㊀年老いたる人。㊁身まかりたる人。――**ぶり**[昔風](名) むかしのさま。卄――**ぶ**[昔](自、は上二) むかしのさまにてあり。ふるめかしくあり。卄――**へ**[昔方](名) 過去の時。むかし。――**もの**[昔者](名) ㊀老人。㊁むかしかたぎの人。――**もの**[昔物](名) むかし流行せしもの。又、むかしつくられたるもの。――**ものがたり**[昔物語](名) むかしの事柄の物語。

卄**むか-し**（しく、しく、し、しき、しけれ）[向](形、二) 向かまほし。おもむかし。ゆかし。

卄**むかし-ぶ**（ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ）[向](自、は四) むかしく思ふ。うれしがる。ゆかしく思ふ。

(むか-つ-く)（か、き、く、く、け、け）[逆](自、か四) ㊀吐氣を催す。㊁心氣逆上しておちつかず。

むか-で[百足](名)【動】多足類中蜈蚣類に屬する節足動物、體軀細長く頭部及腹面は黄褐色にして背部は暗綠色なり、脚二十對あり、人これに嚙(カ)まるれば烈しき疼痛を感ず。(蜈蚣)。

むか-ば[向齒](名) 上部の前齒。むかうば。ぬかば。

卄**むか-はぎ**[向脛](名) むかうずね。

卄**むか-ばき**[行縢](名)（「向穿き」の義）獸の毛皮にて製し腰に着けて袴の前面を垂れおほふもの、昔時專ら騎馬に用ひたり。

(むかばら-だ-つ)（た、ち、つ、つ、て、て）(自、た四) わけもなく腹立つ。

卄**むかはり**[向變](名) 一年又は一月の周り來ること。周期。

卄**むか-は-る**（ら、り、る、る、れ、れ）[向變](自、ら四)（「むきかはる」の義） 廻轉してもとへ戻る。

(むかひ)[迎](名)「むかへ」の訛。

むかひ[向](名) ㊀むかふこと。㊁此方に對する彼方の側。――**あはせ**[向合](名) ㊀むきあふこと。㊁對面。――**あひ**[向合](名) むかひあふこと。――**あ-ふ**（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[向合](自、は四) むきあふ。――**ぎし**[向岸](名) むかひの岸。――**かぜ**[向風](名) 進み行く前方より吹き來る風。逆風。――**づち**[向槌](名) あひづち。卄――**つぶて**[向礫](名) 一種の遊戲、礫を打合ふもの。――**ばら**[向腹](名) 現在の妻の生みたること。又、其生みたる子。(當腹)。――**び**[向火](名) ㊀燒け來る火に向ひて、此方よりも火をかけて其勢を弱らすること。㊁人の怒りたる時、此方よりも怒りて其勢を壓伏すること。㊂人を怒らすやうに仕向くること。――**め**[向妻](名) 正當の妻。もとつめ。本妻。(正妃、嫡妻)。――**やま**[向山](名) むかひにある山。――**わたり**[向邊](名) きん若上。ちかまはり。

むかふ[向](名)「むかう」に同じ。

むか-ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[向](自、は四) ㊀面を其方にむく。「鏡に―」。㊁おもむく。かたむく。㊂近づく。近よる。㊃匹敵す。あたる。(對)。㊄抵抗す。はむかふ。㊅ならぶ。

むか-ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）[向](他、は下二) むかふやうにす。むかはす。

むか-ふ（へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ）[迎](他、は下二) ㊀出て來るを待ちうく。㊁居て來るを待つ。㊂受けて防ぐ。「敵を―」。(逆)。㊃呼びて來らす。まねく。

むかふ-きず[向傷](名)「むかうきず」に同じ。

卄**むか-ぶ-す**（さ、し、す、す、せ、せ）[向伏](自、さ四) 向の方遠く低く伏したる如くに見ゆ。

むかふ-ずね[向脛](名)「むかうずね」に同じ。

むかふ-ば[向齒](名)「むかうば」に同じ。

むかふ-まへ[向前](名)「むかうまへ」に同じ。

むかふ-みず[向不見](名)「むかうみず」に同じ。

むかへ[迎](名) ㊀むかふること。㊁むかふるために行く人。――**かう**[迎講](名) 他所の佛像を迎へて饗を催(モヨ)すこと。――**ざけ**[迎酒](名) 宿醉を發散せしむるために飲む酒。卄――**と-る**（ら、り、る、る、れ、れ）[迎取](他、ら四) ㊀迎へて我身に受く。㊁迎へて我家に入る。――**の-くも**[迎雲](名) 佛の化身を迎ふるため若しくは死者を極樂に迎ふるために、天くだるといふ紫の雲。――**び**[迎火](名) 盂蘭盆に亡者を迎ふるための門火(カド)。

(むか-むか)(名、副) 吐氣を催すさま、又は怒氣のおこり立つさまにいふ語。

(むが-むしん)[無我無心](名) 次條に同じ。

(むが-むちゆう)[無我夢中](名) 或物事に心をとられ我を忘れて他を顧みざること。

卄**むか-もも**[向股](名) ふと股。

(む-かんかく)[無感覺](名) 感覺なきこと。感覺せざること。

むき[向](名) ㊀むくこと。㊁むく方。(方向、方面)。㊂其方。其筋。「田舍―」。「流行―」。㊃左程にもなき事を本氣になること。

(む-き)[無期](名) 期限なきこと。期限を定めざること。

(む-き)[無機](名) 生活力を有せざること、有機の對。

むぎ[麥](名) ㊀【植】禾本科に屬する栽培植物、一年生若しくは二年生にして、莖は直立し中空にして節あり高さ二三尺、花は穗狀花序をなし、穎果は四列に並ぶ、卽ち大麥・小麥の總稱なり。

むき-あひ[向合](名) ㊀むきあふこと。㊁對面。對坐。

むき-あ-ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）[向合](自、は四) 互に相對す。相向ふ。

むぎ-うち[麥打](名) からざを。

むぎ-おし[麥押](名) 麵棒(メンボウ)。むぎおすき。

卄**むぎ-おすき**[麥押木](名) 前條に同じ。

(むき-がん)[無機岩](名)【鑛】無機鑛物より成る岩石、卽ち砂土・粘板岩の類。

(むき-くわうぶつ)[無機鑛物](名)【鑛】無機物より成る鑛物、石英・水晶・長石等の如きすべて有機鑛物以外のものゝ稱。

(むき-くわがく)[無機化學](名)【化】無機化合

物に就きて研究する化學。

(むき-くわがふぶつ)[無機化合物](名)【化】炭素を主成分として水素・酸素或は窒素よりなれる化合物以外の化合物「アムモニア」水・硫酸・昇汞の類これなり。有機化合物の對。

むぎ-かす[麥滓](名) 小麥粉のふすま。

‡**むぎ-かた**(名) 小麥粉にて製したる餅。

(むき-げん)[無期限](名) 期限なきこと。無期。

(むき-こうさい)[無期公債](名) 元金償還の期限を豫定せざる公債。

むぎ-こがし[麥麨](名) 大麥を炒(イ)りて焦(コガ)したるを碾(ヒ)きて粉としたるもの。こがし。はったい。

む-きず[無疵](名) 疵なきこと。又、疵なきもの。

むぎ-すくひ(クイス)[麥抄](名) うんどんを煮て抄(スク)ふざる。あげざる。

(むき-たい)[無機體](名) 無機物。

むき-だし[剝出](名) ㊀むきだすこと。むきだしたるさま。(露出)。㊁あらは。あからさま。うちつけ。「―にいふ」。(露骨)。

むき-だ-す[剝出](他、さ四) あらはし出す。かくれなくあらはす。露出す。

(むき-とけい)[無期徒刑](名)【法】常事犯の重罪に科する刑罰、終身島地にありて服役せしめらるゝもの。

(むぎ-とろ)[麥薯汁](名) 麥飯にとろゝをかけたるもの。

‡**むぎ-なは**(ワナ)[麥繩](名) 索餅(サクベイ)。さうめん。

むぎ-の-あき[麥秋](名) 麥のとりいれどき。

(むき-ふ)(キウ)[無給](名) 給料なきこと。「―助手」。

(むき-ぶつ)[無機物](名)【化】生活機能を有せざるもの、金・銀・土・水・空氣等これなり。有機物の對。

むき-み[剝身](名) 蛤などの殼を取りたる中の肉。

むき-むき[向向](名、副) 其向(ム)きにより各ごとなるさまにいふ語。それ〴〵。思ひ〳〵。こゝろ〳〵。

(むき-めい)[無記名](名) ㊀姓名を記さゞること。㊁無記名式なること。――**しき**[無記名式](名) 權利義務を表示する書面に、其所有者の姓名を記さゞる方式。――**さいけん**[無記名債權](名) 無記名證券を以て表示する債權。――**しようけん**[無記名證券](名) 無記名式の證券。――**とうへう**(ヨウヒョウ)[無記名投票](名) 投票紙に選擧人の姓名を記入せざる投票。

むぎ-めし[麥飯](名) ㊀大麥と米とを混じて炊(タ)きたる飯。㊁寛文・天明の頃、江戸の赤阪にありし淫賣宿、もと麥飯を商へりといふ。

(む-きやう)(ヨウキ)[夢境](名) ゆめの中。ゆめぢ。

(む-きやう)(ヨウキ)[無疆](名) かぎりなきこと。

むぎ-ゆ[麥湯](名) 大麥を炒(イ)りて焦したるを湯に煎じたるもの。

(む-きゆう)[無窮](名) ㊀かぎりなきこと。きはまりなきこと。㊁永久。永遠。「―に傳はる」、「天壤―」。――**きふすう**(ウーキャ)[無窮級數](名)【數】無限級數に同じ。

(む-きよく)[無極](名) ㊀はてなきこと。かぎりなきこと。㊁絕對無限なる宇宙の根本。

(むき-りうけい)[無期流刑](名)【法】國事犯の重罪に科する刑罰、終身島地にありて服役せしめざるもの。

(む-きりつ)[無規律](名) 規律なきこと。規律立たざること。

(む-きりよく)[無氣力](名) 氣力なきこと。

むぎ-わら[麥藁](名) 麥の實をとりたるあとの莖。(麥稈)。――**ざいく**[麥藁細工](名) 麥藁にて編(ア)みたる種々の細工。――**さなだ**[麥藁眞田](名) 麥藁にて編みたる眞田、帽子の材料なり。――**だひ**(イータ)[麥藁鯛](名) 麥のとりいれどきにとる鯛。(中國地方の方言)。――**ぶき**[麥藁葺](名) 麥藁にてふきたる屋根。又、其家。

むく[椋](名)【植】楡科に屬する木、葉はかしに似、圓形にして鋸齒あり互生す、實は圓形黑色なり、材堅くして種々の用に供せられ、葉は器を磨くに用ひらる。むくのき。(椋葉樹)。

(む-く)[無垢](名) ㊀衣服の表裏より下着まで表裏共に無地の同じ色にて仕立てたるもの。「白―」。㊁まじりものゝなきこと。じゆんすゐ。「金―」(純)。㊂けがれなきこと。きよきこと。「淸淨―」。

〔むく〕[無患子](名) むくろじの果實。

〔むく〕[尨](名) ㊀「むくげ」に同じ。㊁「むくいぬ」の略。

む-く(かきくくけけ)[向](自、か四) ㊀面を其方にす。むかふ。「右に―」。㊁おもむく。かたむく。「善に―」。㊂適應す。「流行に―」、「小兒に―」。

む-く(けけくくるくれけよ)[向](他、か下二) 向くやうにす。むかはしむ。むかす。

む-く(かきくくけけ)[剝](他、か四) 上に被れる物を離し取る。はがす。へぐ。

む-く(けけくくるくれけよ)[剝](自、か下二) おほひ物離れ脫す。はがる。

‡**む-く**(けけくくるくれけよ)[平](他、か下二) 服從せさす。討ち平ぐ。

むくい[報、酬](名) ㊀むくゆること。返報。㊁果報。

むく-いぬ[尨犬](名)【動】尨毛の犬。

(む-くえ)[無垢衣](名) 袈裟の異稱。

〔むくいる〕[報](他) 「むくゆ」の訛。

むく-げ[尨毛](名) 長く垂れさがれる獸の毛。――**いぬ**[尨毛犬](名)【動】むくいぬ。

むく-げ[毳](名) やはらかきけ。にこげ。(柔毛)。

むく-げ[木槿](名) (字の轉音)【植】錦葵科に屬する灌木、葉は卵狀楔形にして三裂し、夏秋の交花開く、大形にして短き柄を有し白色・紅色・紫紅色等を呈す、此朝に開き夕に萎むより、朝顏の古名あり。もくげ。きばちす。はちす。(槿花、朝開暮落花)。

‡**むく-さか**(名) めでたく繁昌するさま。

む-くち[無口](名) 口數のすくなきこと。多く默すること。(寡言)。

‡**むくつけ-し**(くしきけれ)(形、二) ㊀‡みにくゝ恐ろし。こはし。㊁きみわるし。むさくるし。

むく-と(副) 起きあがるさまにいふ語。

むく-どり[椋鳥](名) ㊀燕雀類に屬する鳥、多く原野に棲息し樹上に巢ふ、形鳩に似て小さく全身灰黑色にして頂白し、よく椋の實を食ふ、群がり飛びて鳴く。(白頭翁)。㊁ゐなかもの。ぽっとで。(東京の方言)。

むく-の-き[椋樹](名)【植】「むく」に同じ。

むく-ふ(ムクウ)[報](自、は四) むくいとなりてきたる。「親の罰(バチ)が子に―」。

むく-み[浮腫](名) むくむこと。又、むくめるさま。

むく-む(まみむむめめ)[浮腫](自、ま四) 水腫にてはる。

〔むく-むく〕(名、副) ㊀肥えたるさまにいふ語。むっくり。㊁うごめくさまにいふ語。㊂多くかさなり合ひたるさまにいふ語。「毛―と生ひたる」。(形)。

‡**むく-むく-し**(しくしきしけれ)(形、二) いとおそろし。又、はなはだきみわるし。

‡**むく-め-く**(かきくくけけ)[蠢](自、か四) うごめく。

むく-ゆ(いいゆゆるゆれいよ)[報、酬](他、や上二) 受けたる物事にこたへて仕向く。返報す。

‡**むぐら**[葎](名)【植】「やへむぐら」に同じ。――**のやど**[葎宿](名) むぐらの生ひ茂れる家。又、いぶせきすまひ。

むぐら-もち[土龍](名)【動】食蟲類の獸、體は鼠大にして、頭尖り、股短く、眼小に、全身柔毛密生し、土中を潜行して昆蟲を捕食す。

〔むくり〕(名、副)「むく〳〵」に同じ。

〔むぐり〕[潜](名) ㊀「もぐり」に同じ。㊁【動】鳰(ニホ)の一名。

〔むくり-こくり〕(名) (「むくり」は蒙古の義、「こくり」は高句麗の義、後宇多天皇の御宇に其我國に攻め來りし時斯く稱へしよりいふ)昔時、小兒の泣くを威(オド)して制する時にいひし語。

〔むく-る〕(らりるるれれ)[剝](他、ら四)「むく」に同じ。

〔むぐ-る〕(らりるるれれ)[潜](自、ら四)「もぐる」に同じ。

‡**むくれに-じ**[木欒子](名)【植】「もくげんじ」に同じ。

むくろ[軀](名) ㊀からだ。身體。㊁なきがら。死骸。㊂くち木の幹。

むくろ-じ[無患子](名)【植】無患子科に屬する木、幹は高く成長す、葉は羽狀複葉にして冬落つ、夏の頃花開く、花は小形淡黃色にして穗狀をなす、雄花は八個の雄蕊を有し雌花は三個の子房を有す、果實は圓形にして熟すれば外皮黃色を呈し、内に堅き圓形の種子を藏す、其外皮は洗濯用に供せられ種子は念珠又は羽子(ハネ)に用ひらる、材もまた種々の用に供せらる。(木槵樹)。

(む-くわ)[無花果](名)【植】「いちじゆく」に同じ。

(む-くわん)[無官](名) 官職なきこと。

(む-くわんけい)[無關係](名) 關係なきこと。關係せざること。

(む-くわんしん)[無關心](名) 心にかゝらざること。自己の利害に關せざること。

むくわん-の-たいふ(ウーイ)[無官大夫](名) 古昔、五位の位にありて官職なき人の稱。又、公卿の子の未だ元服せざるもの。

‡**むけ**[平](名) むくること。たひらぐること。

(む-け)[無卦](名) 陰陽家にて、其人の生年の干支のまはりあはせにより五年間凶なりといふこと。

(む-げ)[無碍](名) さはりなきこと。

(む-げ)[無下](名) 一概。一向。いちづ。「―の事なり」。

(む-けい)[無稽](名) よりどころのなきこと。根據のなきこと。「荒唐―」。

(む-けい)[無形](名) かたちなきこと。又、かたちなきもの。――**しほん**[無形資本](名)【經】資本の區別の一、價格に見積られ生產のために使用せらるゝとは有形資本に異ならざれど、使用する爲に減少することなく却てこれが爲に存在して增加するもの、卽ち得意・專賣權・版權等の如きこれなり。有形資本の對。――**にん**[無形人](名)【法】法人。――**の-ざいさん**[無形財產](名) 其人の修得せる技術又は學問などの如く、これによりて收益をなし得らるゝ無形のもの。――**めいし**[無形名詞](名)【文法】無形のものをいひあらはす名詞。有形名詞の對。(抽象名詞)。

(む-げい)[無藝](名) 藝能を有せざること。「―大食」。

(む-けういく)(キョウーイク)[無教育](名) 教育を受けざること。知識なく又は道德なきこと。

むけ-か-ふ(ウーカ)(へへふふるふれへよ)[向替](他、は下二) 其ものゝむきをかふ。

むけ-かへ(カーエ)[向替](名) むけかふること。

(む-げつ)[無月](名) 雨ふりて月の出でざること。「中秋―」。

(む-けつ-ちゆう)［無血蟲］(名) 血のなき蟲。轉じて、人情なく冷酷なるものをのゝしりていふ語。

むげに［無下］(副) ひたぶるに。まことに。一向に。非常に。「—いと頼もしげなく」。

むげ-の-たみ［無下民］(名) 極めていやしきたみ。

むげる［向］(他)「むく」の訛。

(む-げん)［夢見］(名) ゆめみ。

(む-げん)［無言］(名)「むごん」に同じ。

(む-げん)［無限］(名) ㊀かぎりなきこと。きはまりなきこと。㊁宇宙の人力を以て明かにつくしがたき狀態。

(む-げん)［無間］(名)【佛】「アビ［阿鼻］」に同じ。

(む-げん)［夢幻］(名) ㊀ゆめまぼろし。㊁人生の物事のはかなきにたとへていふ語。

(むげん-きふすう)［無限級數］(名)【數】項の數が限りなく多き級數。

(むげん-げき)［夢幻劇］(名) 事柄の變化と場面のおもむきとを主としたる脚色の演劇。

(むげん-せう)［無限小］(名) ㊀限りなく小さきこと。㊁【數】或數を限りなく小さくしたるときの極限。

(むげん-せきにん)［無限責任］(名)【法】一定の資本金總額を擧げて債務の辨濟に充(ア)て、尙は完濟とならざるときは、各自の財產を以て辨濟の責に任ずること、合名會社の社員の如きは無限責任を有す。有限責任の對。

(むげん-だい)［無限大］(名) ㊀限りなく大なること。㊁【數】如何なる數よりも大なる數、即ち或數を限りなく大きくしたる極限。

(む-こ)［婿］(名) 婿子(ムカヒコ)の義。娘の夫。(聟)。

(む-こ)［無辜］(名) つみなきこと。「—の民」。

卄む-ご［無期］(名) 期限なきこと。

むこ-いり［婿入］(名) ㊀入夫結婚をすること。又、其式。㊁結婚後、夫たるものが始めて其妻たるものゝ生家に行くこと。又、其式。

(む-こう)［無功］(名) 功果なきこと。

(む-こう-こ)［無口湖］(名)【地】排水口なき湖。

卄むこ-がね［婿料］(名) かねて婿にと思ひさだめたる人。

(む-こく)［無告］(名) 自己のくるしみを告げん所もなきこと。たよりのなきこと。「—の民」。

むご・し くしきけれ［慘］(形、一) ㊀あはれむべし。いたはし。㊁無慈悲なり。殘酷なり。

むごたら・し しくしきけれ［慘］(形、二) むごらし。むごし。

むこ-ひきで［婿引手］(名) 婚姻の時、舅(シウト)より婿への引出物(ヒキデモノ)。

むこ-やうし［婿養子］(名) 娘にめあはせて養子となすもの。——えんぐみ［婿養子緣組］(名)【法】養子緣組と同時に其養子と娘とを結婚せさすること。

卄むごら・し しくしきけれ［慘］(形、二) むごきさまなり。むごし。(殘酷)。

(む-こん)［夢魂］(名) 夢のうちのたましひ。

(む-こん)［無根］(名) 根のなきこと。事實なきこと。

(む-ごん)［無言］(名) ものをいはぬこと。(不言)。

卄む-さ［武者］(名)「むしや」に同じ。

(む-さい)［無才］(名) 才智の足らぬこと。

(む-さい)［無妻］(名) つまなきこと。つまを持たぬこと。ひとりみ。やもを。

(む-ざい)［無罪］(名)【法】裁判上犯罪の成立せざること。つみなきこと。

(む-さう)［夢想］(名) ㊀夢におもひ見ること。㊁夢中に神佛の示現あること。

(む-さう)［無雙］(名) ㊀ならびなきこと。無二。「海内—」。㊁衣服又は器具などの表と裏と又は外と内との同じやうなるもの。——がは［無雙側］(名) 表と裏と又は内と外との側が相同じきもの。「—の袂時計」。——だんす［無雙簞笥］(名) 一種の材にてつくりたる簞笥。——ばおり［無雙羽織］(名) 裏表共に着らるゝやうに仕立てたる羽織。——ひきだし［無雙引出］(名) 此方へも、むかふへも、ひきさしせらるゝやうにつくりたる引出。——ふで［無雙筆］(名) 用ゐる時に穗の出づるやうに造りたる筆。——まくら［無雙枕］(名) 幾個も入籠(イレコ)につくりたるまくら。——まど［無雙窓］(名) 隙ある櫺子(レンジ)に隙ある引戸を立て、閉づれば板張の如くに見ゆる窓。——れんじ［無雙櫺子］(名) 無雙窓にたつる櫺子。

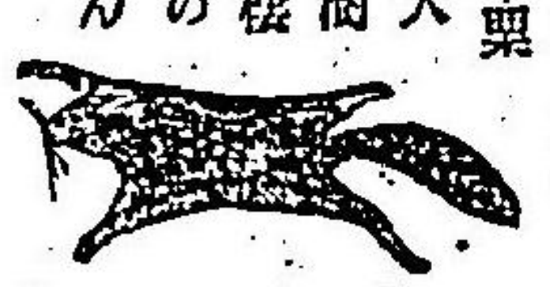
(む-ざうさ)［無造作］(名) ざうさ無きこと。たやすきこと。

卄む-さえ［無才］(名)「むさい」に同じ。

むさくる・し しくしきけれ［汚穢］(形、二) きたならし。

むさくろ・し しくしきけれ［汚穢］(形、二) 前條に同じ。

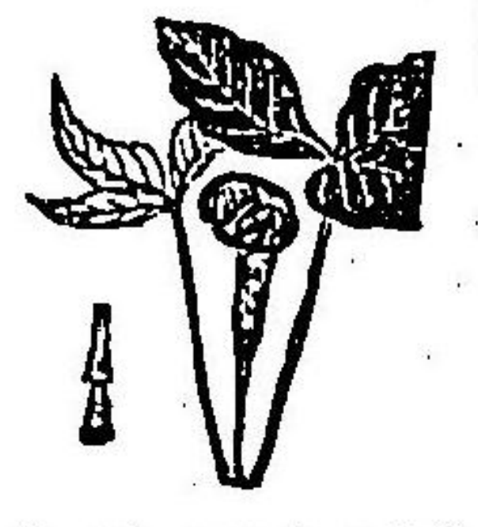
むささび［鼯鼠］(名)【動】嚙齒類中栗鼠科に屬する獸、形は栗鼠に似て大形なり、前後兩肢間に膜ありてよく樹上を飛行す、深山の樹木のうつろに棲み、夜間出て、果實を食ふ、聲小兒の泣く如く聞こゆ。もみ。もゝが。もゝんぐわ。(鼯鼠)。


［むささび］

む-さし［六指］(名) 一種の遊戲、盤上に九條の線を劃し、六個の石を二分して各三個を持ち、其餘路をたどり早く定めの點に至りて相連ぬるを勝とするもの。(六道)。

むさ・し くしきけれ［汚穢］(形、二) 不潔にして不快なり。きたならし。(穢陋)。

むさし-あぶみ［武藏鐙］(名) ㊀卄古昔、武藏國より產出せし鐙。㊁【植】天南星科に屬する草、高さ一二尺、葉は大形にして天南星に似、花は鐙狀をなし莖端に着生す、蕊頂白色なり、赤色の果實を結ぶ。(由跋)。


［むさしあぶみ(二)］

むざ-と (副) 惜氣もなく。わけもなく。

卄むざね［實］(名) さうじみ。正體。

(む-さべつ)［無差別］(名) 差別なきこと。差別をおかざること。同一。平等。

むさぼ・る らりるれ［貪］(他、ら四) 欲して飽くを知らず。過度に欲す。ほしがる。よくばる。(婪、饕)。

むざ-むざ (名、副) 惜氣もなきさま又はわけもなきさまにいふ語。

(む-さん)［無算］(名) ㊀數の多くしてかぞへきれぬこと。㊁はかりごとなきこと。

(む-さん)［無產］(名) ㊀職業なきこと。㊁資產なきこと。

(む-ざん)［無慚］(名) ㊀【佛】はぢを知らぬこと。㊁いたはしきこと。

卄むし［枲麻］(名) ㊀「からむし」の略言。㊁「むしのたれぎぬ」の略言。(帔)。

むし［蟲］(名) ㊀動物の汎稱。㊁人・禽・獸・介・魚以外の動物の汎稱。㊂聲を愛して聞く蟲。㊃はらのむし。蛔蟲。㊄小兒の體弱く病つよきこと。㊅癇氣づきて腹の痛むこと。㊆痼癖、——がいい むし強し。無遠慮なり。づるし。——がかぶる 產氣つきて腹痛催す。——がつく 蟲が其ものに害をなす。又、年少き女に情夫出來る。——をころす 癇癪をおさふ。

むし［蒸］(名) ㊀むすこと。㊁味噌。(女房詞)。㊂「ちやわんむし」の略言。

(む-し)［無視］(名) あれども無きが如く見ること。其ものを何とも思はぬこと。

むしあつ・し くしきけれ［蒸暑］(形、一) 風なくして蒸すが如く暑し。

卄むし-あを［蟲襖］(名) 黑ずみたる萌黃色。

(む-しう)［無臭］(名) くさみのなきこと。

卄むし-えらみ［蟲選］(名) 古昔、殿上人の野に出て、蟲をえらみ捕りしこと。

むし-おくり［蟲送］(名) ひろく作物に害蟲のつきたるとき、諸人申合せ、鉦・太鼓をならし又は祭典を行ひなどして、これを祓(ハラ)ふこと。

むし-おさへ［蟲押］(名) 小兒にむしの起らぬやうに飮ましむる藥。

(む-しかく)［無資格］(名) 資格なきこと。

むし-かご［蟲籠］(名) 松蟲・鈴蟲・螢などの類を畜(カ)ふ籠。(蟲屋)。

卄むし-かめ-ば［蟲齧齒］(名) むしば。(齲)。

むし-がれひ［蒸鰈］(名) 鰈を鹽水に浸(ヒ)して濕氣に蒸し、陰乾(カゲボシ)にしたるもの。

(む-しき)［無識］(名) 知識なきこと。

むし-ぐすり［蒸藥］(名) 煎じ出し又は湯に浸(ヒ)して患部を蒸す藥。(蒸劑)。

むし-ぐすり［蟲藥］(名) 小兒の蟲の療治に飮ましむる藥。

むし-くひ［蟲食］(名) むしばみたること。又、其痕。むしばみ。(蝕)。

むし-ぐわし［蒸菓子］(名) 蒸してつくりたる上品の餅菓子。むしもの。

むし-け［蟲氣］(名) 小兒の身體弱りて神經の衰弱すること。

むし-けら［蟲螻］(名) 蟲を賤しみていふ語。(蟲豸)

むし-けん［蟲拳］(名) 拳の一種、手の大指を蛙に、人差指を蛇に小指をなめくじに擬して、勝負をあらそふもの、なめくじは蛇に蛇は蛙に蛙はなめくじに勝つものとす。

(む-しけん)［無試驗］(名) 試驗を要せざること。

むし-こ［蟲籠］(名) むしかご。

むし-ず［蟲酢］(名) 溜飮にて、口に出づる酸敗液の稱。

卄むし-たれ-ぎぬ (名)「むしのたれぎぬ」に同じ。

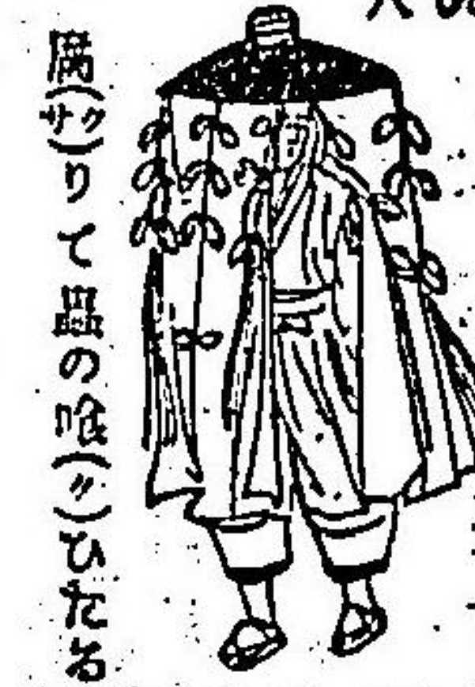
(む-じつ)［無實］(名) ㊀實の無きこと。㊁罪なきに罪ありとせらるゝこと。(寃枉)。

むじな［貉］(名)【動】食肉類中犬科に屬する獸、頭及鼻は尖り、毛は黃褐色にして深厚なり、穴居す、性よく睡る。うじな。もじな。(狢)。

むし-の-いき［蟲息］(名) たえだえなる息。

むし-の-す［蟲窩］(名)「カラフト」だま。

卄むし-の-たれ-ぎぬ［帔］(名) 上古、婦人の外出するとき、笠の四方に垂れたる薄き枲麻の布。


［むしのたれぎぬ］

むし-ば［蟲齒］(名) 腐(サク)りて蟲の喰(ク)ひたるが如く缺け落つる齒。

むし-ばみ［蟲食］(名) むしばむこと。むしくひ。

むし-ば・む まみむめ［蟲食］(自、ま四) むし、ものをかみ殘(ソコナ)ふ。むしくふ。(蝕)。

むし-はら［蟲腹］(名) 蛔蟲のために腹の痛むこと。

むしばらひ（ハライ）［蟲拂］（名） 蟲ぼし。

（**むじ-ひ**［無慈悲］（名） なさけ心なきこと。あはれみなきこと。

むし-ふうじ［蟲封］（名） 子供に蟲のおこらぬやうに、まじなひをなすこと。

＋**むし-ぶすま**［蒸被］（名） 暖かなるふすま。「―なごやが下に」。

むし-ぶろ［蒸風呂］（名） 四方を密閉し、湯氣をもて體を蒸しあたゝむる風呂。

むし-へん［蟲偏］（名） 漢字の偏の名、蚊・蛇など左方の虫の字の稱。

むし-ぼし［蟲干］（名） 夏の土用中などに、書籍・衣類等を日に干し、黴・蟲などを防ぐこと。むしばらひ。土用干。（曝涼）。

〔**むし-むし**［蒸蒸］（名、副） むしあつき、さまにいふ語。

（**むし-むしゆう**［無始無終］（名） 始めもなくをはりもなきこと、即ち常住なること。

むし-めがね［蟲眼鏡］（名） 凸「レンズ」の稱、又、顯微鏡の稱、微細なるものを見るに用ふるよりいふ。

むし-もの［蒸物］（名） ㊀蒸したる蔬菜。㊁蒸菓子。

むし-や［蟲屋］（名） ㊀蟲籠。㊁松蟲・鈴蟲・螢などを賣る者。

（**むしや**［武者］（名） 甲冑をよろひたる人。戰鬪する人。いくさびと。つはもの。武人。戰士。兵士。

（**むしやう**（ショー）［無償］（名） 報酬なきこと。

（**むじやう**（ジョー）［無情］（名） ㊀なさけ心の無きこと。㊁非情。

（**むじやう**（ジョー）［無常］（名） 世上の有限なる物事の生滅轉變して定めなきこと。つねなきこと。はかなきこと。

（**むじやう**（ジョー）［無上］（名） 此上もなきこと。極點。

（**むじやう**（ジョー）［無狀］（名） 「ばうじやう」（亡狀）に同じ。

むし-ヤウカン（ヨー）［蒸羊羹］（名） 菓子の一種、煮たる小豆を擂りて皮をとり、其水をしぼりたるものに麪粉を加へ、砂糖の汁にてこね、これを釜にて蒸したるもの。

むしやう-けいやく（ショー）［無償契約］（名） 【法】一方のみが利益を享受する契約、例へば、贈與の如きこれなり。

〔**むじやう-しよ**（ジョー）［無常所］（名） はかば。墓地。

（**むじやう-に**（ジョー）（名） むやみに。やたらに。（無正、無性）。

（**むじやう-だう**（ジョードー）［無上道］（名） ㊀此上もなき至道。㊁【佛】菩提。

（**むじやう-めいれい**（ジョー）［無上命令］（名） 「ちよくせつめいれい」（直接命令）に同じ。

むしや-おし［武者押］（名） 武者の隊をなして進むこと。

むし-やき［蒸燒］（名） 密閉して外部より中にあるものを燒くこと。

（**むしやく**［無爵］（名） 爵位のなきこと。華族にあらざること。

（**むじやき**［無邪氣］（名） ㊀心にわだかまりのなきこと。ねぢけたる心のなきこと。㊁何の考へもなきこと。いつはりかざりのなきこと。

〔**むしや-くしや**（名、副） ㊀いたく揉みあらしたるさまにいふ語。㊁心もだえ亂れて堪へがたきさまにいふ語。――**ばら**（名） むしやくしやして心氣の逆上すること。

むしや-ざうり（ゾー）［武者草履］（名） 小兒のはく草履。

むしや-しゆぎやう（ギョー）［武者修行］（名） ㊀兵事上に關する地理又は人事を視察するため回國せしこと。㊁武術鍛錬のため回國せしこと。

むしや-だまり［武者溜］（名） 城の一の門と二の門との間にある騎卒の屯所。

むしや-どころ［武者所］（名） 院の御所にて下北面（ゲホクメン）の武者の居る處。

（**むしや-ぶぎやう**（ギョー）［武者奉行］（名） 武家時代に、平時には武者の進退をつかさどり、戰時には軍中の事を指揮せし役。

むしや-ぶり［武者振］（名） 戎衣を着したる姿。又、武人としてのふるまひ。

〔**むしやぶり-つ・く**（かきくくけけ）（自、か四） 力をこめてはげしく取りつく。

（**むしやべつ**［無差別］（名） 「むさべつ」に同じ。

〔**むしや-むしや**（名、副） 物を無作法に食ふさまにいふ語。

むしや-わらぢ［武者草鞋］「むしやざうり」に同じ。

（**むしゆ**［無主］（名） 所有主なきこと。

（**むしゆぎ**［無主義］（名） 一定の主義なきこと。

（**むしゆく**［無宿］（名） ㊀住むべき一定の家なきこと。又、其人。㊁戶籍なきこと。人別なきこと。又、其人。

（**むしゆぶつ**［無主物］（名） 所有主なきもの。

（**むしゆみ**［無趣味］（名） 趣味なきこと。おもむきなきこと。沒趣味。

（**むじゆん**［矛盾］（名） 矛と盾とを鬻ぐ者あり、自ら譽めて、予の矛（ホコ）は如何なる盾（タテ）をもきるべく予の盾は如何なる矛をも防ぐに足るといふ、或人、汝の矛を以て汝の盾をきらば如何といひしに、答へ得ざりきといふ故事（韓非子に出づ）、前後相撞着すること。あとさきの相違すること。――**りつ**［矛盾律＝Law of contradiction］（名） 【論】一事物を否定若しくは肯定しながら、同時にこれを肯定

若しくは否定し得ずといふこと、例へば甲が若し乙ならば非乙なるを得ずといふ類。

（**むしよ**［墓所］（名） はかば。はかどころ。（墓場）。

（**むしよえ**［無所依］（名） よりどころなきこと。たよる所なきもの。無所屬。

（**むしよく**［無色］（名） いろなきこと。「―透明」。

（**むしよく**［無職］（名） 一定の職業なきこと。――**げふ**（ギョー）［無職業］（名） 前條に同じ。

むし-よけ［蟲除］（名） 神佛の御符などの毒蟲を除（ヨ）くる功德（クドク）ありといふもの。

（**むしよぞく**［無所屬］（名） 所屬なきもの。何れにも屬せざるもの。

（**むしよとく**［無所得］（名） 何の得るところもなきこと。

（**むしよゐ**［無所畏］（名） おそるゝ所なきこと。

（**むしほん**［無資本］（名） 資本なきこと。

（**むしりよく**［無資力］（名） 資力なきこと。

むし・る（らりるるれれ）［毟］（他、ら四） 擢（カツ）みて引き拔く。

むしろ［席］（名） 《蓆代の稱》 ㊀藺（ヰ）・蒲（ガマ）・竹・藁などにて編（ア）みてつくりたる敷物の稱。（筵）。㊁わらむしろの略稱。

むしろ［寧］（副） 彼よりは此を擇ぶ意にいふ語。いつそ。「取らんより―捨てん」。

（**むしん**［無心］（名） ㊀心なきこと。考のなきこと。心のとゞまらぬこと。「―の態」。㊁憚りなく、みだりに物を與へよと望むこと。「―する」。

（**むしん**［無心］（名） 前條（一）に同じ。「そは―なり、待ちてたべ」。

（**むじん**［無盡］（名） ㊀盡きざること。㊁「むじんかう」の略言。――**かう**（コー）［無盡講］（名） 「たのもしかう」（賴母子講）に同じ。――**ざう**（ゾー）［無盡藏］（名） ㊀天地を藏（ザウ）に比して、萬物の無盡なることにいふ語。㊁其中のものを取れども盡きざる所の稱。――**とう**［無盡燈］（名） 油皿の油の漸々減ずるに從ひ、傍より油の加はるやうにつくりたる燈臺。

（**むしんけい**［無神經］（名） 感じのうすきこと。

（**むしんじん**［無信心］（名） 信心せぬこと。信仰心のなきこと。

（**むじんたう**（トー）［無人島］（名） 住む人なき海洋中の孤島。

（**むしんろん**［無神論＝Atheism］（名） 神といふものゝ存在を否定する論。有神論の對。

＋**む・す**（さしすすせせ）［生、產］（自、さ四） 生まる。生ふ。生ず。

む・す（さしすすせせ）［蒸］（他、さ四） 湯氣にとぢこめて熱す。熱氣を通して熱せしむ。ふかす。

む・す（さしすすせせ）［蒸］（自、さ四） 風なくして暑氣蒸すが如くに感ぜらる。

む・す（せせすするすれせよ）［噎］（自、さ下二） 氣、喉（ノド）につまりふさがる。むせぶ。

（**むすう**［無數］（名） 數かぎりの無きこと。かぞへきれぬこと。

むす-こ［息］（名） （產子（ムスコ）の義）男の子。子息。

むず-と［無手］（副） 急に力を入れて、勢はげしく手を掛けて。「次條に同じ。

むすばは・る（ムスバワル）（れれるるるれれよ）［結］（自、ら下二） 自然に結びたる如くになる。（締結、愁結）。

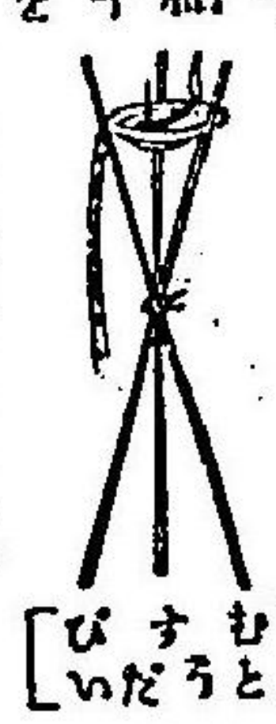
＋**むす-び**［產靈］（名） 天地萬物を產（ム）し成す靈妙なる神靈。

むすび［結］（名） ㊀むすぶこと。くゝり。㊁をはり。しまひ。末尾。㊂【文法】句の末又は文の末に置く動詞・形容詞・助動詞等の語尾を、上におきたるかゝりに對せしむるための特殊の用法。「かゝり―」。

むすび［結飯］（名） にぎりめし。（摶飯）。

むすび-がみ［結髮］（名） 婦人の頭髮をたゞくるくるとまきつけたるもの。

むすび-とうだい［結燈臺］（名） 三本の竿の中央を結び其上下を開かせて、其上に油皿を置きて點火するもの。



［むすびとうだい］

＋**むすび-の-かみ**［產靈神］（名） 「むすび」（產靈）に同じ。

＋**むすび-の-かみ**［結神］（名） 「むすぶのかみ」の訛。

むすび-ばな［結花］（名） 造花をいろ絲にて結びかざりたるもの。

むすび-ぶくろ［結袋］（名） 口を結ぶやうにつくりたる袋。

むすび-ぶみ［結文］（名） 卷きてさきを結びたる手紙。

むすび-め［結目］（名） むすびあはせたる所。

むす・ぶ（ばびぶぶべべ）［結］（他、は四） ㊀絲・紐（ヒモ）などを繫（ツナ）ぎあはす。㊁つなぎ止めて離れしめず。くゝる。㊂ちぎる。約束す。㊃くみあふ。くむ。㊄かまへつくる。かまふ。㊅終はりとす。とめとす。㊆生ず。「實を―」。㊇【文法】上下のかゝりむすびの相對するやうにす。

むす・ぶ（ばびぶぶべべ）［掬］（他、は四） 掌（テノヒラ）に抄（スク）ひ汲む。

＋**むすぶ-の-かみ**［產靈神］（名） 「むすびのかみ」の訛。「君見れば―ぞ、恨めしき」。

むすぶ-の-かみ［結神］（名） 男女の緣を結び合はすことを掌るといふ神。婚姻の神。（月下氷人）。

＋**むすぼほ・る**（ボール）（れれるるるれれよ）［結］（自、ら下二） 「むすぼる」に同じ。

むすぼ・る（れれるるるれれよ）［結］（自、ら下二） ㊀むすばれて解（ト）け難くなる。㊁氣塞ぎて晴れず。（愁結）。

むす-め［娘］（名） ㊀女の子。息女。むすこの對。㊁

をとめ。㊁横濱にて「ラシヤめん」の稱。――ぎ［娘氣］（名）をとめのうぶなる心。――ぎだいふ［娘義太夫］（名）年若き女の語る義太夫節。又、其語る女。――ごころ［娘心］（名）むすめぎ。――し［娘師］（名）土藏やぶり。

むず-むず（副）㊀絶えずかゆき感じのするさまにいふ語。㊁自己の技倆を振はんと欲し傍觀するに堪へざるさまにいふ語。㊂廿物を無作法に食ふさまにいふ語。

（むすゐ-あひさん［無水亞砒酸］（名）【化】有毒性の白色の粉末、砒素又は其鑛物を空氣中に於て燒けばこれを得。

（むすゐ-ありうさん［無水亞硫酸］（名）【化】一種刺戟性の臭氣ある無色の氣體、硫黃と酸素との化合物なり、銅屑に強硫酸を加へ熱して製す、絹・毛・家禽等を漂白するに用ひ、又、殺菌力あるを以て防腐消毒の用に供せらる。

（むすゐ-ありんさん［無水亞燐酸］（名）【化】空氣の供給不十分なる所にて燐を燃（も）やして得る白色の固體。

（むすゐ-けいさん［無水硅酸］（名）【化】硅素と酸素との化合物、石英は即ち無水硅酸にして、瑪瑙・蛋白石等は無水硅酸に多少水の加はりたるものなり、又、稻藁・木賊等は多量にこれを含む、硅藻土は多くは無水硅酸より成り、北海道地方にあるが如く往々積聚して大層をなす、水に溶解せず、又、弗化水素を除く外、酸類にも溶解せず、天然產の無水硅酸の鑛物は、粉末となして「ガラス」・陶器等の製造に用ひらる。

（むすゐ-たんさん［無水炭酸］（名）【化】弱き酸味を有し殆ど無臭無味無色の氣體、炭素を含む物體の燃燒又は生物の呼吸等によりて生ず、空氣中に存し又は天然水に溶解して存す、石灰水に導くときは白色の濁を生ぜしむ、水によく溶解す、「ラムネ」「ビール」等は、壓力によりてこれを多量に溶解せるものなり。

（むすゐ-ほうさん［無水硼酸］（名）【化】硼酸を熱して得る「ガラス」狀のもの。

（むすゐ-ひさん［無水砒酸］（名）【化】砒酸を強熱して得る白色の固體。

（むすゐ-りんさん［無水燐酸］（名）【化】燐を乾きたる空氣中或は酸素中にて燃（も）やすとき生ずる白色の粉末、潮解し易し。

（む-せい［無聲］（名）聲なきこと。聲のきこえぬこと。

（む-せい［無性］（名）男女の性のなきこと。ちゆうせい。

（む-せい［無稅］（名）稅なきこと。稅のかゝらぬこと。

（むせい-おん［無聲音］（名）【文法】聲帶の振動せずして起る音、短裂音・摩擦音の類これなり。

（むせい-げん［無制限］（名）制限なきこと。

（むせい-せいしよく［無性生殖］（名）【動】下等動物の生殖、一個のものが分裂して二個若しくは二個以上となり、又は芽を生じて繁殖するが如きこれなり。

（むせい-ぶつ［無生物］（名）生活力なきもの。

む-せ-かへ・る（らりるるれれ）［噎返］（自、ら四）㊀いたくむす。つゞけてむす。㊁いたくむせびなく。

（む-せき［無籍］（名）㊀何れの地にも本籍なきこと。㊁何れの國の國籍をも有せざること。――もの［無籍者］（名）無籍なるひと。

（む-せきにん［無責任］（名）㊀責任を有せざること。㊁責任を重んぜざること。責任をおひて語らず、又は行はざること。

むせび-なき［噎泣］（名）むせび入りつゝ泣くこと。

むせ・ぶ（ばびぶぶべべ）［噎、咽］（自、は四）㊀喉につかへふさがる。むす。㊁むせびなきをなす。つかへつゝ泣く。㊂つかへとゞこほる。

（むせる［噎］（名）「むす」の訛。

（む-せん［夢占］（自）夢の吉凶のうらなひ。

（む-せん［無錢］（自）金錢を所持せざること。――いうきよう［無錢遊興］（名）遊興して、其料金を支拂はざること。

（むせん-でんしん［無線電信］（名）【理】電線を用ひずして通信する電信、「イタリア」國人「マルコニ」の發明にかゝるもの最も廣く行はる、發信機は感應「コイル」を主要部とし、其第二「コイル」の一端を高く立てたる鉛直の導線に路（ツナ）ぎ、他端を地中に連なる導線に連接して、二つの導線の一端は各球狀にして近く相對するものとす、受信機は「コヘラ」と普通の電信に用ふる受信機とを電池に連接したるものにして、「コヘラ」の一端は高く聳ゆる導線に、他端は地に通ずる導線に連絡す、又、「コヘラ」に電流の通ずる際直にこれを打ちて電流を絶つ裝置を備ふ、甲地にて感應「コイル」の第一「コイル」に電流を通じ、導線の兩球間に火花を飛ばすときは、電波四方に傳達して、乙地の「コヘラ」に感じて電流を通じ磁石を働かしむ、因りて甲地にて電流を斷續するときは、乙地の受信機に出づる紙片に點と線とより成る文字の記號を印す。

廿むそ［六十］（數）十の六倍。ろくじふ。

（む-そく［無足］（名）武士の無祿なること。

（む-そけん［無訴權］（名）【法】訴權なきこと。

む-そぢ［六十］（數）「むそ」に同じ。

廿むた［共］（接尾）名詞の下にある「の」「が」などの助詞の下に添へて「と共に」の義をなし、其名詞を副詞體となす語、「天地の――窮りなし」。（與）。

むだ［徒］（名）益なきこと。役にたゝざること。いたづらなること。（費、冗）。

（む-たい［無體］（名）㊀ないがしろ。㊁無法。㊂「無形」。

（む-だい［無代］（名）代價のなきこと。たゞ。

（む-だい-か［無代價］（名）前條に同じ。

（む-たい-ぶつ［無體物］（名）形體なくたゞ思想上にて理會し得るもの。

（む-たう（ウート）［無刀］（名）刀を持たざること。

（む-たか［無高］（名）知行高の未定なること。

廿むだ・く（かきくくけけ）［抱］（他、か四）いだく。かゝふ。「子（ク）―」。

むだ-がき［徒書］（名）役に立たぬことを書くこと。又、そのかきもの。

むだ-ぐち［徒口］（名）役に立たぬ言をいふこと。

むだ-ぐひ（イーグ）［徒食］（名）あひだぐひ。

むだ-じに［徒死］（名）無益に死ぬること。いぬじに。

むだ-づかひ（カイーツ）［徒遣］（名）金錢を無益に費すこと。

むだ-ばな［徒花］（名）咲けども實をむすばざる花。あだばな。

むだ-ばなし［徒話］（名）無益なるはなし。

むだ-ぼねをり［徒骨折］（名）骨折りて効果のなきこと。ほねをりぞん。（徒勞）。

むだ-もの［徒物］（名）ありて益なきもの。無用のもの。

（む-だん［無斷］（名）ことわらざること。

（む-ダン［無檀］（名）檀家の無きこと。

むち［鞭、笞］（名）㊀馬を打ちて進ましむる竹又は革製などの細長きもの。㊁人を打ち戒しむるために用ふる竹又は革製などの細長きもの。

（む-ち［無知］（名）知識なきこと。

（む-ち［無智］（名）おろか。あはう。

む-ぢ［無地］（名）全體一色にして模樣なきもの。

むち-う・つ（たちつつてて）［鞭、箠］（他、た四）㊀鞭もて打つ。（鞭撻）。㊁はげましすゝむ。

（む-ちやう-こうし（ウーチヨ）［無腸公子］（名）【動】蟹の異稱。

（む-ちや［無茶］（名）すぢみちのたゝぬこと。みだれくるふこと。――くちや［無茶苦茶］（名）前條に同じ。

（む-ちゆう［霧中］（名）きりのとぢこめたるなか。

（む-ちゆう［夢中］（名）㊀夢を見てゐる間。㊁或物事に熱心して我を忘るゝこと。有頂天。

（む-ぢゆう［無住］（名）寺院に住持の無きこと。

むつ［鯥］（名）【動】硬鰭類中むつ科に屬する魚、體は延長にして薄き鱗を被る、脊部は紫黑色にして腹部は淡し、體長一尺餘に達す、脂は燈油に供せらる、我國にては太平洋面の北東に多く產す。ろくのうを。（鯥、花鯥）。

むつ［石鯥魚］（名）【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、淡水の池澤に產す、形はえに似て狹長なり、鱗細かく口大きく、よく蟲を捕り食ふ。かはむつ。

むつ［六］（名）昔時の時の名、今の午前及午後の六時にあたる。

廿む-つ［六］（數）三と三との和。ろく。

廿むつ-および［六指］（名）指の六本ある不具者。（駢拇）。

むづか・し（しくしくしきしけれ）（形、二）㊀わづらはし。いとはし。㊁理解し難し。わかりにくし。㊂成就し難し。とゝのひ難し。㊃快復し難し。病體あし。㊄容易く聞入れず。苦情多し。㊅氣輕ならず。そひよりわろし。――や（名）よく彼此と苦情をいふ人。氣輕ならざる人。

廿むつ-がたり［睦語］（名）むつましく語りあふこと。むつごと。（昵語）。

むづか・る（らりるるれれ）［憤］（自、ら四）㊀廿むづかしく思ひていかる。むづく。㊁ぢれて泣く。すねてさからふ。（小兒にいふ）。

む-つき［睦月］（名）陰曆正月の異稱。

むつき［襁褓］（名）㊀うぶぎ。㊁おしめ。

廿むづ・く（けけくくくれけよ）［憤］（自、か下二）「むづかる」（一）に同じ。

（むつくさ（副）「むくと」に同じ。「――たちあがる」。

（むつくり（名、副）「むくむく」に同じ。

むつ-ごと［睦言］（名）㊀むつまじく話しあふこと。㊁房中にかたりあふこと。「とけてねた夜の――に」。

（むつつり（名、副）言葉少なくして陰氣なるさまにいふ語。

（むつ-と（副）俄にいかりて口をつぐみものをいはざるさまにいふ語。「――してかへれば門の柳かな」。

むつ-の-はな［六花］（名）㊀雪の異稱、其結晶の六出なればいふ。㊁菓子の名、落雁の一。

廿むつ-の-みち［六道］（名）「ろくだう」に同じ。

廿むつ-の-わ［六輪］（名）六道の輪廻（リンヱ）。

廿むつ-の-を［六緒］（名）六絃の和琴。

廿むつ-び［睦］（名）むつぶること。

むつ・ぶ（ぶびぶぶるぶれびよ）［睦］（自、は上二）むつまじくす。したしくす。したしむ。なかよくす。

むつま・じ（じくじくじきじけれ）［睦］（形、二）交情互にこまやかなり。したし。仲よし。

むつ-ゆび［六指］（名）「むつおよび」に同じ。

むつ・る（れれるるるれれよ）［睦］（自、ら下二）親しみまつはる。親しみ馴る。むつぶ。

むつ-わり［六割］（名）四斗樽の酒六つに分けた

る也。又、其桴。

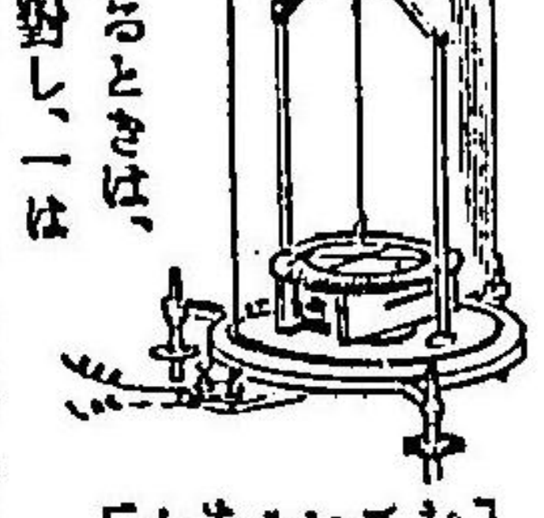
むて[無手](名) ㊀すて。から手。(徒手)。㊁手段なくて行ふこと。

(**むて-いけい**[無定形](名) 不定形に同じ。

(**むて-いけん**[無定見](名) 一定の見識なきこと。

(**むて-いじ**[無丁字](名) すこしも文字の識めざること。あきめくら。

(**むていゐ-しん**[無定位針](名) [理]極の強さの等しき二つの磁針を平行にし且つ其異極を相向けて水平に吊りたるもの、二つの異極は互に等しき力にて相引合ふを以て、地磁氣の作用を受くることなく、磁針は何れの方向にも向ふべし、故に無定位といふ。――**でんりうけい**[無定位針電流計](名) [理]無定位針を用ひたる電流計、弱き電流を計るに用ひらる、二つの磁針の中、下方の磁針を圍む「コイル」あり、又、上方の磁針の直下に目盛盤あり、初め「コイル」の平面を磁針と同方向ならしめ、「コイル」に電流を通ずるときは、二つの磁針は異極を以て對し、一は「コイル」の內にありて一は外にあるを以て、「コイル」に生ずる磁氣作用により、二つの磁針を同方向に廻轉せんとして磁針を吊りたる絲を捩(ネ)ぢり、其抗力と釣合ふに至りて靜止す、よりて上方の磁針により目盛盤にて廻轉角を讀み電流の強さを知る。



[むていゐしん でんりうけい]

(**むて-いたう**[無抵當](名) 金を貸して抵當物をとらざること。

むて-かつ-りう[無手勝流](名) (塚原卜傳が、琵琶湖上矢走の渡の舟中にて、同舟の武術修行者に眞劍仕合を挑(イド)まれ、計を以てこれを湖上の小洲にあざむきのぼせ、そこにおきすて、其血氣をいましめたりといふ故事に出づ)卜傳流の異稱。

(**むて-き**[無敵](名) 敵するもののなきこと。相手に立つもののなきこと。「―艦隊」。

⌐**むてっぱふ**[無手法](名) あとさきみず。むやみ。

(**むてん**[無點](名) 漢文にて、訓點の無きこと、(白文)。――**ぼん**[無點本](名) 無點の漢籍。

(**む-とく**[無德](名) ㊀德望のなきこと。宿德のなきこと。㊁見るかひなきこと。わびしきこと。

(**む-どく**[無毒](名) 毒なきこと。

(**む-とくしん**[無得心](名) 得心せざること。

(**む-とんぢやく**[無頓着](名) 物事に頓着せざること、平氣なること。

むな[棟](名) 「むね」に同じ。「―木」。

十**むな-**[空、虛](接頭) 他の語に冠して、むなしき意を表する語。「―ぐるま」。「―空」。

むな[胸](名) 「むね」に同じ。「―見る時」。「―先」。

むな-いた[胸板](名) ㊀胸部の平かなる所。㊁鎧の胸にあたる所。

十**むな-がい**[鞅](名) 「むながき」の音便。

十**むな-がき**[鞅](名) 馬の胸より鞍に繫(カ)くる組緒。

むな-かんぢやう[胸勘定](名) むなざんよう。

むな-ぎ[鰻鱺](名) (胸黃の義)「うなぎ」の古稱。

むな-ぎ[棟木](名) 棟に用ふる材木。

むな-ぐら[胸座](名) 着たる衣服の胸の邊の襟。「―をつかむ」。

むな-ぐる-し（しく、しく、し、しき、しけれ）[胸苦](形、二) 胸もと苦し。

十**むな-ぐるま**[空車](名) 人の乘り居らざる乘車。から車。

むな-げ[胸毛](名) 胸の邊に生ずる毛。

十**むな-ごと**[空言](名) かりそめの言。あだ言。

むな-さき[胸先](名) 胸のみづおちの邊。むなもと。(心下)。

むな-さわぎ[胸騷](名) 心臟の鼓動急にはげしくなりて、心氣の穩(オダ)かならざること。(心悸)。

むな-ざんよう[胸算用](名) 心中にてみつもりをたつること。(心算)。

むな-し（しく、しく、し、しき、しけれ）[空、虛](形、二) ㊀中に物無し。內容なし。からなり。㊁あとかたなし。事實なし。㊂無益なり。むだなり。㊃蓄積なし。とぼし。㊄防禦なし。そなへなし。㊅身失す。死ぬ。

十**むな-で**[空手](名) からて。素手。

むな-ふだ[棟札](名) 棟上の時、建築の年月又は大工の人名などを記して、棟木に打ち着(ツ)くる木札。

むな-もと[胸元](名) むなさき。

十**むな-わけ**[胸分](名) 獸類などが、胸にて草木をわけ行くこと。

(**む-に**[無二](名) ならびなきこと。「―の友」。(無比)。

む-に-す（せ、し、す、する、すれ、せよ）[無](他、さ變) むだにす。むなしくす。

(**むに-むさん**[無二無三](名) [佛](法華經に唯有一乘法無二亦無三とあるに出づ)ただこれのみにて他にあらざること。惟一。「―の道直し」。――**に**[無二無三](副) 傍目も振らず一心に。一向に。

(**むにん-たう**[無人島](名) むじんたう。

む-ね[胸](名) ㊀體の前面の首と腹との間。㊁衣服の胸にあたる處。えもん。㊂こゝろ。おもひ。心中。――**あく** 心地よくなる。――**がやける** 溜飮おこる。――**さく** 胸の極めて苦しく殆ど堪へがたきにいふ。――**さわぐ** むなさわぎす。

――**せきあぐ** 悲しくして胸ふさがる。――**つぶる** 心かなしみに滿つ。十――**のひまあく** 心地よくなる。――**のひまなし** 思ひ絕えず。――**はしる** 氣いらつ。――**ひらく** 心地よくなる。――**わるし** 性質よくなし。又、吐氣を催す。――**をこがす** いたく思ひわづらふ。こがる。――**をひやす** おそれ危ぶむ。

むね[旨](名) ㊀こゝろ。意思。㊁おもむき。趣意。

むね[宗](名) かなめ。もと。本體。主要。

むね[棟](名) ㊀むなぎ。㊁屋根の最も高き處。

むね[刀背](名) 刀のみね。

むね[棟](接尾) 家を數ふるにいふ語。

むね-あげ[棟上](名) 家を建つる時、柱梁の上に棟木を上ぐること。又、其式。

むね-あて[胸當](名) ㊀胸部にあつるよろひ。(胸甲)。㊁布帛にて仕立て、小兒などの胸元のよごれぬためにかくるもの。

むね-うち[刀背打](名) 刀のむねにて打つこと。

十**むね-け**[胸氣](名) 胸のいたむこと。

むね-と[宗徒](名) むねと賴むともがら。主なるもの。

むね-の-ひ[胸火](名) おもひなやむ心。胸をこがすおもひ。

十**むね-むね-し**（しく、しく、し、しき、しけれ）[宗宗](形、二) おもだてり。主たり。

十**むね-わけ**[胸分](名) 「むなわけ」に同じ。

⌐**むね-わる**[胸惡](名) 心根の惡しきこと。又、其もの。

(**む-ねん**[無念](名) くちをしきこと。くやしきこと。「―骨髓に徹す」。(殘念)。

(**む-のう**[無能](名) 役に立たぬこと。才能なきこと。

(**む-のうりよく**[無能力](名) ㊀物事をなし得る能力なきこと。㊁[法]民法上にては、完全に私權を行使し得ざること。又、刑事上にては、行爲の責任を負はざること。――**しや**[無能力者](名) 無能力なるもの、民法にては未丁年者・禁治產者・準禁治產者及妻をいひ、刑法上にては身體精神の不十分なる發達又は異狀等に起因したる犯罪者をいふ。

(**む-はいにゆう-しゆし**[無胚乳種子](名) [植]胚のみありて別に胚乳を存せず、子葉部は著しく肥えて內に多分の養料を存する種子、ゑんどう・そらまめ等の種子これに屬す。

十**むばら**[茨、荊](名) 「うばら」の古稱。

(**む-ひ**[無比](名) ならびなきこと。たぐひなきこと。(無類)。

(**む-び**[夢寐](名) ねむり。

(**む-ひくわ**[無被花](名) [植]萼及花冠なき不完全なる花、例へば柳の花の如きこれなり。

(**む-ひつ**[無筆](名) 文字を知らざること。無學。

(**む-びやう**[無病](名) 病氣なきこと。壯健なること。

(**むび-るゐ**[無尾類](名) [動]兩棲類の一目、即ち蛙の類、幼時は水中に棲息し尾を有すれども、其己に變態を經過したるものは、尾なくして四肢よく發達し肺を以て呼吸す。

(**む-ふう**[無風](名) ㊀氣流のいと靜穩なること。㊁[地]烟の直上するほどの氣流。――**たい**[無風帶](名) [地]回歸無風帶の條を見よ。

(**む-ぶん**[無文](名) 學問を知らぬこと。

(**む-ぶん**[無聞](名) 世の中にきこえぬこと。名聲なきこと。

(**む-ふんべつ**[無分別](名) ふんべつなきこと。かんがへなきこと。

むべ[郁子](名) [植]木通科に屬する木、莖は上昇す、葉は複葉にして數個の小葉より成り淡綠色を帶ぶ、春末に花梗を抽(ヌ)き、花叢生す、花の形百合に似、白色にして淡紫色を帶ぶ、果實は球形なり、觀賞用として栽培せらる。うべ。(野木瓜)。

十**むべ**[宜](名) げにさもあるべきこと。うべ。

十**むべ-むべ-し**（しく、しく、し、しき、しけれ）[宜宜](形、二) さもあるべきさまなり。うべ〳〵し。

(**む-へん**[無邊](名) かぎりなきこと。はてなきこと。――**りう**[無邊流](名) 槍術の一派、大內無邊を祖とす。

(**む-ぼう**[無謀](名) 謀計なきこと。又、思慮なきこと。

(**む-はふ**[無法](名) 法なきこと。亂暴なること。

(**む-ほん**[無品](名) 親王の敍位を有し給はぬこと。

(**む-ほん**[謀叛](名) 君王又は主君に叛(ソム)きて兵を起すこと。そむくこと。

十**むま**[馬](名) [動]「うま」に同じ。

十**むま-き**[牧](名) 馬・牛・羊などをはなし飼ひにするところ。うまき。まき。

(**む-み**[無味](名) ㊀あぢなきこと。㊁趣なきこと。「―乾燥」。

(**む-みやう**[无明](名) [佛]過去の煩惱の惑ひが本性をおほひ、ために邪見妄執をおこして事理に闇(クラ)きこと。――**のやみ**[无明闇](名) 前條に同じ。

(**むみやう-い**[無名異](名) ㊀[化]過酸化滿俺の稱。㊁吳須(スヰ)の稱。㊂炭を燒きたる地下に生ずる黑色の塊。(藥木膠)。

十**むむき**[朊](名) 鳥の五臟。もゝき。もゝけ。

むめ[梅](名) [植]「うめ」に同じ。

(**む-めい**[無銘](名) 製作物に製作者の銘なきこと。又、其もの。「―の刀」。

(**む-めい**[無名](名) 名のわからぬこと。又、名を記さゞること。――**し**[無名氏](名) 名のわからぬ人。――**し**[無名指](名) べにさしゆび。くすりゆび。――**とうへう**[無名投票](名) 無

記名投票に同じ。

卄むも・る（れれるるる、るれれよ）［埋］（自、ら下二）「うもる」に同じ。

⌒むもん［無紋］（名）無地なること。模樣なきこと。紋なきこと。「─の羽織」。──きん［無紋筋］（名）束をなさずして内臟壁を圍繞する筋肉、即ち不隨意筋の稱。

⌒むやく［無益］（名）むだ。むえき。

⌒むやく［無役］（名）役目のなきこと。

卄むやひ（ムヤイ）［紡］（名）むやふこと。もやひ。

卄むや・ふ（ムヨウ）［（はひふふへへ）］［紡］（他、は四）船を聚（ツナ）ぐ。「もやふ」。

〜むやみ［無暗］（名）理非を分別せざること。前後を思慮せざること。かんがへなきこと。──に［無暗］（副）みだりに。やたらに。

〜むや-むや（名、副）もだえわづらふさまにいふ語。

⌒むよう［無用］（名）ようなきこと。役に立たぬこと。むだ。（無益）。──のちやうぶつ（チヨウ）［無用長物］（名）あって益なきもの。むだもの。

⌒むよく［無欲］（名）むさぼらざること。欲心なきこと。

むら［村］（名）㊀田舍にて人家のある處。（村落、村里）。㊁「そん」に同じ。

むら［群、叢］（名）「むれ」の轉。「─雲」。「─千鳥」。

むら［斑］（名）㊀色の彼處此處に濃淡あること。㊁そろはぬこと。きまらぬこと。

卄─むら［疋］（接尾）（疋（ムラ）の義）卷物の布を數ふるにいふ語。「絹二─」。（端、段）。

卄むらい［無禮］（名）禮儀を失へること。ぶれい。

⌒むらい［無賴］（名）「ぶらい」に同じ。

卄むら-がへ・る（らりるるれれ）［群返］（自、ら四）むれて飛びかへる。

むらがり［群、叢］（名）むらがること。

むらが・る（らりるるれれ）［群、叢、簇］（自、ら四）群れゐる。あつまる。よる。むる。

〜むらき［斑氣］（名）㊀好惡喜怒の常なきこと。心のさだまらぬこと。㊁激したる心。怒氣。

むら-ぎえ［叢消］（名）まばらに消ゆること。

卄むら-ぎみ［邑長］（名）村を治むるつかさ。むらをさ。

卄むら-ぎみ［漁長］（名）漁夫の長。

卄むら-ぎも［腎肝］（名）心の底。肺肝。──の［腎肝］（枕）「心」に冠らする詞。

卄むら-ぎ・ゆ（ええゆゆる、ゆれえよ）［叢消］（自、や下二）まばらに消ゆ。

むら-くも［叢雲］（名）あつまりむれたる雲。──のつるぎ［叢雲劍］（名）三種の神器の一、即ち草薙劍の前稱。（草薙劍の條を見よ）。

むら-ご［叢濃］（名）色の此處彼處に濃淡ありて一樣ならざること。

むら-さき［紫］（名）（叢咲（ムラサキ）の義）㊀［植］紫草科に屬する草、莖は直立して高さ二尺許、花は白色を呈し、楕圓狀披針形にして互生す、莖葉共に少毛を有し、根に深紫色の部あり染料に供せらる。（紫草）。㊁紫草の根皮にて染めたる色。赤と青との間色。㊂［動］「いわし」の異稱。㊃醬油の異稱。──いろ［紫色］（名）前條（二）に同じ。──すそご［紫裾濃］（名）下方濃紫色にして、上方にいたるに從ひ次第に色をうすくしつひに全く白色となす染めかた。「─のさしぬき」。──ずゐしやう（ヨシウ）［紫水晶］（名）［鑛］紫色を呈する水晶。卄──にほひ（オヒ）［紫匂］（名）かさねの色目、表は紫色にして裏はうす紫なるもの。卄──のうすやう（ヨウ）［紫薄樣］（名）かさねの色目、表は紫にして裏の白なるもの。卄──のちり［紫塵］（名）蕨の芽の稱。卄──のには（ワニ）［紫苑］（名）大内の御苑を申す語。卄──のみや［紫宮］（名）

中宮を申す語。──のり［紫菜］（名）［植］「あまのり」に同じ。──ばうし（ウーボ）［紫帽子］（名）㊀女形の俳優の被る鬘（カツラ）の稱、昔時、紫の切れを額部に當てたるよりいふ。㊁わかしゆ。〜──ゑもん［紫衛門］（名）女學生の異稱、「紫式部─」。

むら-ざと［村里］（名）人家のあつまる所。

むら-さめ［村雨］（名）ひとしきりづゝ降るあめ。にはか雨。夕立。（白雨、過雨）。

卄むら-じ［連］（名）（群主（ムラヌシ）の義）㊀上古、神別諸氏の姓（カバネ）の一にして、朝政に與りしものゝ稱。㊁天武天皇の御世に定められたる八色姓の第七位。

むら-しぐれ［村時雨］（名）一むら降りすぐる時雨。

むらた-じゆう［村田銃］（名）村田經芳の創意に成る後裝銃。

むら-だち［叢立］（名）むらがりて立つこと。

むら-だ・つ（たちつつるつれて）［叢立］（自、た四）むれ立つ。

卄むら-と［腎］（名）（叢所（ムラト）の義にして精氣の聚まる所の義）腎（ジン）の古稱。

むら-なし［斑無］（名）むらのなきこと。そろひたること。

むら-びと［村人］（名）村のものども。

むら-むら（名、副）㊀そこゝにむらがれるさまにいふ語。（叢叢）。㊁俄に逆上するさまにいふ語。（斑斑）。

卄むら-むら・し（しく、し、しき、しけれ）（形、二）㊀マダラなり。㊁心定まらず。

むら-やくば［村役場］（名）村長が其事務を取扱ふ所。

むら-をさ［村長］（名）一村の長。（邑長）。

⌒むり［夢裡］（名）ゆめのうち。

⌒むり［無理］（名）㊀道理のなきこと。㊁しひてなすこと。──さんだん［無理算段］（名）強ひて物事の融通をつくること。──しき［無理式］

（名）［數］根號を含む代數式。──しんぢゆう［無理心中］（名）男又は女が、相手の女又は男の不同意なるにかゝはらず、先づこれを殺して己が自殺すること。──すう［無理數］（名）［數］完全なる平方數又は立方數にあらざる數、即ち開平又は開立の法にて、その平方根又は立方根の出でざるもの、かゝる數は整數若しくは分數にあらず、例へば $\sqrt{2}$、$\sqrt[3]{3}$、$\sqrt[3]{5}$ の如し。

⌒むりそく［無利息］（名）貸金等の利息をつけぬこと。

⌒むり-むたい［無理無體］（名）㊀強ひて行ふこと。㊁無法。──に［無理無體］（副）「むりやりに」に同じ。

⌒むりやう（リヤウ）［無量］（名）量のはかられざる程多きこと。かぎりの知れぬこと。莫大の量。

⌒むりやう-じゆ［無量壽］（名）［佛］阿彌陀佛の異稱。──ブツ［無量壽佛］（名）前條に同じ。

⌒むりやり-に［無理遣］（副）無理に。しひて。

⌒むりよ［無慮］（副）およそ。おほかた。

むりよう［五綵緞］（名）支那より渡來する上品なる縮子。

⌒むりよく［無力］（名）ちからなきこと。

〜むり-わうじやう（ワウジヤウ）［無理往生］（名）むりやりにおしつけ遂に我意に從はしむること。

む・る（れれるるる、るれれよ）［群］（自、ら下二）一處に集まりよる。むらがる。

む・る（れれるるる、るれれよ）［蒸］（自、ら下二）あつくなる。熱とほる。

⌒むるゐ［無類］（名）たぐひなきこと。くらべなきこと。（無比）。〜──とびきり［無類飛切］（名）最もすぐれて他にたぐひなきこと。

むれ［群］（名）㊀あつまり。むらがり。㊁なかま。とも。

⌒むれう［無料］（名）料金を要せざること。

⌒むれう［無聊］（名）㊀たよりなきこと。心ぼそきこと、㊁さびしきこと、つれ〴〵なること。

むれ-だ・つ（たちつつるつれて）［群立］（自、た四）むらがりて立つ。

〜むれる［蒸］（自）「むる」の訛。

むろ［室］（名）㊀上古、家の奧に設けたる土もて塗り籠（コ）めたる寢所の稱。㊁上古、山腹などに掘りたる窟（イハヤ）の稱。㊂後に、家屋特に僧房の稱。㊃物を入れおきて、暖め又は外氣に觸れしめざるために特別の構造をなさせる所の稱。

むろ［榁］（名）［植］松杉科に屬する木、葉は針狀をなす、麥門冬に似たる果實を結ぶ、材は水濕に堪へ、種々の用に供せらる。（杜松）。

⌒むろ［無漏］（名）［佛］見思の惑を斷じて涅槃の樂を證すること。

むろ-あぢ［室鰺］（名）［動］硬鰭類中あぢ科に屬する魚、體は狹長にして肥え、頭圓くして尖れり、背部蒼色にして、腹部は銀白色なり、體側の中央に黃色なる一條の線あり、體長三四寸、我國太平洋方面に多く產す。

⌒むろく［無祿］（名）ふちなきこと。知行なきこと。

むろ-ざき［室咲］（名）むろにあたゝめて咲かせたる草木の花。

むろまち-じだい［室町時代］（名）我國南北朝の合一以後より織田信長が足利氏に代る頃まで、凡そ百八十年間の稱、室町幕府の時代。

むろまち-ばくふ［室町幕府］（名）足利義滿が京都室町に設けたる幕府、室町時代の政令の出でし所。

むろ-や［室屋］（名）「むろ」（室）に同じ。

⌒むろん［無論］（名）いふに及ばざること。もちろん。（勿論）。

⌒むゐ［無位］（名）くらゐなきこと。

⌒むゐ［無爲］（名）「ぶゐ」に同じ。──のくわ［無爲化］（名）「ぶゐのわく」に同じ

め

め　脣的鼻音M即ち兩脣を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「え」との綴音。

め［牝］（名）動物體の受精して子をはらみ生む器官を具有するものゝ稱。めす。（雌）。

め［女］（名）㊀人類の牝。をんな。㊁配偶のをんな。つま。（婦）。

め［目］（名）㊀動物の視官、即ち眼。㊁めだま。眼球。㊂めづかひ。めざし。めつき。㊃めだまの狀をなすもの。「卵の─」。㊄見ること。見ゆること。㊅逢ふこと。會すること。「うき─」。㊆縱橫に交はるものゝ間隙。「網の─」。㊇のぞみ見らるゝ空孔。あな。㊈ならびたる齒の形。又、ならびたる高き筋。「鋸の─」。「錯の─」。㊉度をはかるため、ものにつけたるしるし。「秤の─」。⑪匁の別稱。「百─」。⑫秤及枡にてはかる量。⑬采の面のしるしの點。⑭もくめ。木理。⑮端と端との相合ふ處。「折り─」。──がこえる　見るに從って鑑識すゝむ。──がさめる　睡より[illegible]、睡氣去る。又、まよひとく。──がたかい　よく目利をなす。──がつく　注目す。──にあまる　數多くあり。又、默して居ること出來ず。──にいる　見ゆ。あふ。──にかゝる　見ゆ。──にかく　見さす。又、ひいきす。──にさはる　目の毒となる。又、めざはりとなる。──にたつ　きはだちて見ゆ。めだつ。──につく　見ゆ。目をそゝぐ。──にとまる　見ゆ。又、氣に入る。

―にふる[瞑目]見ゆ。―にものみす　おどろかし惱す。ひどい目にあはす。―をかく　ひいきす。いたはる。―をきはむ[極目]　みゆる限りを遠くにて見る。―をくはす　めくばせす。―をくばる　氣をつけて諸方を見る。―をくらます　人目をあざむく。―をこやす　よきものを見て慰む。―をこらす　みつむ。―をさます　ねむりよりさむ。又、迷ひを去る。―をすます　おちつき見つむ。―をそそぐ　目をつく。注意して見る。―をそばだつ[側目]　よこめて見る。―をそばむ　前條に同じ。―をたつ　注意して見る。―をつく　目をそゝぐ。十―をさぐ　するどく見る。―をさほす　全體を見る。―をなぐさむ　面白きもの又ははれ〴〵しきものを見る。―をぬく　あざむく。だます。―をぬすむ　人目を忍ぶ。―をねむる　死ぬ。―をふさぐ　見ぬふりす。又、死ぬ。―をまはす　氣絶す。又、あわてふためく。―をみはる　注意して見る。

め[芽](名)《萠(モエ)の義》草木の枝・葉・幹・莖となるべきもの、僅かに發生したるものゝ稱。

め[海布](名)《滋(モ)の轉》食用になる海草の總稱。

め―[女](接頭)　名詞の上につけて、女性を表はす語。をの對。「―五」、「―瀧」。

―め[目](接尾)　㊀或語に添へて、物事の順序を數ふるにいふ語。「十年―」、「三番―」。㊁或語に添へて、物事の程度を表する語。「細―」。

―め(接尾)《賤(ヒ)の轉》人を卑(ヒ)しめ罵るとき、稱呼に添へいふ語。「畜生―」。

メース[錢](名)　清國貨幣の名。

メートル[米突＝Metre](名)　長さの基本單位、約地球子午線の四千萬分の一、其原器は「フランス」國の萬國「メートル」同盟度量衡局に保管せらる。(米)。

―はふ・どりやう・かう[米突法度量衡](名)　[數]長さの單位を一「メートル」として他の單位を割き出だす式、「フランス」國の創定にして、廣く世界に行はる。

め・あか[目赤](名)　眼球の充血して赤くなる病。

め・あか[目垢](名)　めやに。

め・あかし[目證](名)　下級のをかっぴき。(督跡)。

め・あき[目明](名)　㊀物を見得る人。㊁事理を解する人。㊂文字を解する人。

め・あて[目當](名)　㊀目を當てねらふもの。ねらひ。まと。㊁心の赴き向ふ點。めど。あてど。㊂物事の據り行ふべきもと。標準。㊃鳥銃の照星。

め・あは・す〔せ、せ、す、する、すれ、せよ〕[娶](他、さ下二)　配して妻とす。

〔めあはせる(他)　「めあはす」の訛。

(めい[命](名)　㊀いのち。壽命。㊁いひつけ。命令。㊂めぐりあはせ。運命。

(めい[明](名)　㊀あきらか。あざやか。㊁くもりなきこと。おほひなきこと。㊂いちじるしきこと。あらはなること。㊃かしこきこと。さとさこと。㊄ひかり。かゞやき。㊅ちゑ。才智。㊆目のものを見得る力。「―をうしなふ」。

(めい[銘](名)　㊀漢文にて、器物又は墓碑等に志るす頌讃の文、句末に韻をふみて每句同字數なるもの。「―を鐫(ザキ)む」。㊁自警の詞。いましめ。「座右の―」。㊂器物に刻する製造者の氏名。(款識)。㊃酒などに附する特別の名稱。

(めい―[名](接頭)　或語に冠して、其名高き意又はすぐれたる意を表する語。「―君」「―所」。

(―めい[名](接尾)　人數を數ふるにいふ語。「五―」。

(めい・あん[明暗](名)　あきらかなるとくらきと。

(めい・あん[冥闇](名)　くらがり。やみ。

(めい・あん[名案](名)　すぐれたる考案。

(めい・い[明衣](名)　喪服(モフク)。

(めい・うん[命運](名)　うんめい。

(めい・えん[茗讌](名)　茶湯の會。

(めい・か[名家](名)　㊀名望のある家。有名なる家門。㊁其道にすぐれたる人。名高き人。

(めい・か[名歌](名)　名高きうた。すぐれたる歌。

(めい・かい[冥界](名)　めいど。よみぢ。(冥府)。

(めい・かい[溟海](名)　あをうなばら。おほうみ。

(めい・かう[名香](名)　すぐれてよき香。――あはせ[名香合](名)　香あはせ。

(めい・がう[名號](名)　となへ。

(めい・かく[明確](名)　あきらかにして曖昧ならざること。たしかにしてまぎらはしからざること。

(めい・かん[明鑑](名)　あきらかなるめきゝ。よきみわけ。

(めい・かん[銘肝](名)　心に刻みつくること。かたく心にとめて忘れぬこと。

(めい・き[名器](名)　名高きうつは。

(めい・き[銘旗](名)　葬式にて、死者の姓名を記したる旗の稱。

(めい・き[冥鬼](名)　よみぢにありといふ鬼。

(めい・ぎ[名義](名)　㊀名號。名前。「人の―を騙る」「他人の―にて」。㊁名によりて立ちたる人倫上の道義。名分。「―を汚す」。㊂表面上の名稱。

(めい・ぎ[名妓](名)　評判のうたひめ。

(めい・きやう[明鏡](名)　㊀くもりなきかゞみ。「―止水」。㊁くもりなき本性。

(めい・きやう[冥境](名)　よみぢ。

(めい・きゆう[迷宮](名)　其中に入れば出口のわからざるやうにつくりたる宮殿。

(めい・きよ[明渠](名)　地上にあらはに設けられたる溜水を流すみぞ。

(めい・きん[鳴禽](名)　㊀鳴禽類に屬する鳥。㊁なくとり。――るゐ[鳴禽類](名)　[動]鳥類の一目、概ね小形にして、脚は步行又は攀木に適す、鳴管を有し美聲を發して囀(サヘヅ)るもの多し、うぐひす・すずめ等これに屬す。

(めい・く[名句](名)　すぐれてよき句。

(めい・くわ・じふ・いう[名花十友](名)　荼蘼(韻友)・茉莉(雅友)・瑞香(殊友)・荷花(淨友)・巖桂(仙友)・海棠(名友)・菊花(佳友)・芍藥(艶友)・梅花(淸友)・梔子(禪友)の稱。

(めい・くわ・じふ・に・かく[名花十二客](名)　牡丹(貴客)・梅(淸客)・菊(壽客)・瑞香(佳客)・丁香(素客)・蘭(幽客)・蓮(靜客)・荼蘼(雅客)・桂(仙客)・薔薇(野客)・茉莉(遠客)・芍藥(近客)の稱。

(めい・くわん[鳴管](名)　鳴きさへづるための特殊の氣管。

(めい・ぐわん[冥頑](名)　知識なくしてかたくななること。

(めい・くん[明君](名)　明智の君。かしこき君。

(めい・くん[名君](名)　器量すぐれたる君。

(めい・けう[名教](名)　名分によりて設けたる教へ。「―の中自ら樂地あり」。

(めい・げつ[明月](名)　㊀はれわたりたる月。㊁「十五夜の月。

(めい・けん[明賢](名)　かしこきこと。又、其人。

(めい・けん[明驗](名)　あきらかなる効驗(シルシ)。あきらかなるきゝめ。

(めい・げん[迷眩](名)　まよひて目くるめくこと。

(めい・げん[明言](名)　あきらかにいふこと。はっきりといふこと。

(めい・げん[鳴弦](名)　弓弦を鳴らしてもののけなどを祓(ハラ)ふこと。つるうち。

(めい・こう[名工](名)　すぐれたる職工。

(めい・こん[迷魂](名)　まよひて浮ばれぬたましひ。

(めい・こん[命根](名)　いのちのもと。

(めい・さい[明細](名)　くはしきこと。もれなきこと。こまか。(精密)。

(めい・さう[瞑想](名)　目をとぢて或物事をかんがへおもふこと。又、現前の境を忘れて或對象をかんがへ思ふこと。

(めい・さう[迷想](名)　迷へるかんがへ。

(めい・さく[名作](名)　すぐれてよき製作物。

(めい・さつ[明察](名)　あきらかに推察すること。察しのよきこと。

(めい・さん[名産](名)　其土地に産する有名なる物。名物。

(めい・ざん[名山](名)　名高き山。

(めい・し[名詞](名)　[文法]有形の物體より無形の動作狀態に至るまで、すべて事物の名稱を表する語の稱、本來名詞と定まれるものと他の動詞・形容詞等より轉じたるものとありて、本來名詞と定まれるものを普通名詞と固有名詞とに分つ。なことば。

(めい・し[名刺](名)　なふだ。

(めい・し[明示](名)　あきらかに示すこと。

(めい・し[明視](名)　あきらかに見得ること。――きより[明視距離](名)　眼を勞せずして物を明視し得る距離、普通には二十五糎なり。

(めい・し[名士](名)　名高き人。すぐれたる人。

(めい・じ[名辭＝Term](名)　[論]言語文字を用ひて概念を表示するものにして單一なる事物の名稱をいふ。

(めい・じつ[名實](名)　名と實と。となへとまことと。

(めい・しふ[迷執](名)　まよへる執念。

め・いしや[眼醫者](名)　眼病專門の醫者。

(めい・しや[鳴謝](名)　ふかく御禮をいふこと。

(めい・しやう[名匠](名)　㊀勝れたる學者。㊁僧侶の泛稱。㊂巧(タク)みなる大工。すぐれたる職人。

(めい・しやう[名將](名)　すぐれたる大將。

(めい・じやう[名狀](名)　其狀態を言ひあらはすこと。「―すべからず」。

(めい・じやう[明淨](名)　あきらかにしてくもりなきこと。

(めい・しゆ[盟主](名)　同盟したるものゝ中にて主長の地位にたつもの。

(めい・しゆ[明主](名)　かしこききみ。

(めい・しゆ[名主](名)　なだかききみ。

(めい・しゆ[名手](名)　すぐれたるうでまへの人。上手。

(めい・しゆ[明珠](名)　透明にしてくもりなきたま。

(めい・しゆ[銘酒](名)　普通の清酒の製法とことなる製法によりて醸造し、これに特別の名稱を附したる酒。――や[銘酒屋](名)　銘酒を賣り又は一杯若干と價を定めて酒を飲ます店。

(めい・しよ[名所](名)　景色若しくは古蹟等にて名だかき所。(勝地)。

(めい・しよう[名勝](名)　前條に同じ。

(めい・しよう[名稱](名)　よびな。となへ。

(めい・しよう[明證](名)　あきらかなる證據。

(めい・しん[迷信](名)　まよひ或はあやまれる信仰。正しからぬ信仰。――かい[迷信界](名)　迷信の行はるゝ社會。

(めい-じん[名人](名) すぐれて巧(タク)なる伎倆の人。
めい-す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[瞑](自、さ變) 目を閉づ。死ぬ。
めい-ず(ぜ、じ、ず、ずる、ずれ、ぜよ)[命](他、さ變) ㊀言ひつく。まうしつく。げちす。㊁名稱を附す。
(めい-すう[名數](名) ㊀戸籍。「ーに登せられず」。㊁名稱の數を以て唱へらるゝもの、即ち三十二相・三十番神・七賢・三德などの類。㊂[數]單位の名を添へたる數。
(めい-すう[命數](名) ㊀いのちの長さ又はかぎり。壽命。㊁運命のなりゆき。天命。
(めい-せい[名聲](名) ほまれ。評判。
(めい-せき[名籍](名) 人別。名簿。
(めい-せき[明晳](名) はっきりしてあきらかなること。「言語ー」。
(めい-せつ[名節](名) 人倫上、守るべきみさを。
(めい-せつ[名說](名) すぐれてよき說。
(めい-せん[銘仙](名) 絲車にかけずして取りたるまゝの絲をもて織りたる絹布。(銘撰)。
(めい-せん[鳴箭](名) なりかぶら。
(めい-せん-じしやう[名詮自性](名) 「みやうせんじしやう」に同じ。
めい-ソウ[名僧](名) すぐれたる僧。
(めい-ぞく[名族](名) 名望あるやから。有名なる家門。
(めいた(名) 牝犬。
(めい-だい[命題=Proposition](名) [論]判斷の結果を言辭に表示したるもの、主辭・賓辭及繫辭より成り、二個若しくは二個以上の概念間の關係を判斷するもの。
(めい-たう(ウート)[名刀](名) すぐれてよきかたな。
(めい-だう(ウード)[明堂](名) 支那の周時代に、天子巡守のとき、諸侯を會せし所。

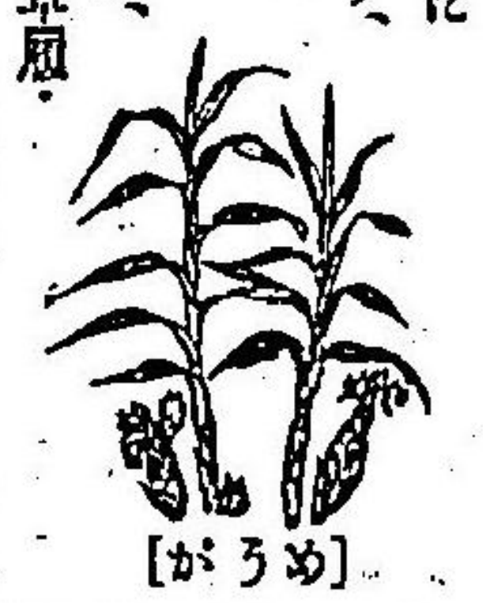
(めい-だう(ウード)[冥道](名) [佛](い)地獄の道にありといふ官吏。(ろ)轉じて、佛の異稱。
めい-たがれひ(レイガ)[目板鰈](名) [動]軟鰭類中ひらめ科に屬する魚、一方の側面は褐灰色にして褐色の細微なる斑點散布し他の側面は白色なり、口小さく、兩眼突出す。
(めい-たつ[明達](名) 才智多くして、物事によく通ぜること。
(めい-たふ(ウート)[明答](名) はっきりしたるこたへ。あきらかなるこたへ。
(めい-たん[明旦](名) ㊀あした。あさ。㊁あすのあさ。
(めい-だん[明斷](名) かしこき決斷。よきさばき。
(めい-ち[明知](名) あきらかに知ること。
(めい-ち[明智](名) 智慧のくもりなきこと。すぐれてかしこきこと。
(めい-ちや[銘茶](名) 特別の製法にて、特別の銘を打ちたる茶。
(めい-ちゆう[命中](名) めあてとするものによくあたること。(的中)。
(めい-ちよう[明澄](名) くもりなきこと。すみたること。
(めい-てい[酩酊](名) いたく酒に醉(ヱ)ふこと。
(めい-てき[鳴鏑](名) なりかぶら。かぶらや。
(めい-てつ[明哲](名) 智慧あきらかにして事理に通ずる人。かしこき人。
(めい-ど[冥土](名) [佛]亡者の魂の行くといふ所。よみぢ。(黄泉)。
(めい-どう[鳴動](名) 鳴りうごくこと。
(めい-とく[明德](名) ㊀公明なる德行。㊁天より受けたるくもりなき本性。
めい-ど-の-たび[冥土旅](名) ㊀死出の旅、よみぢのたび。㊁人生の終には死すべきものなるより、生涯の行路を旅にたとへいふ語。「門松やーの一里塚」。

(めい-にち[命日](名) 其人の死したる日と同じき日。忌日。
(めい-ばう(ウーボ)[名望](名) 世人より仰ぎたゝへらるゝこと。 ——か[名望家](名) 名望ある人。
(めい-はく[明白](名) はっきりとあきらかなること。疑ひなきこと。 ——ち[明白地](名) あからさま。あきらか。(瞭明、判然)。
(めい-はつ[明發](名) よあけがた。しら〳〵あけ。
(めい-ばつ[冥罰](名) 神佛のとがめをうくること。
(めい-はんぐわん[明判官](名) 聰明にしてつねに判決をあやまらざる裁判官。
(めい-び[明媚](名) 山水のきよらかにして景色のおもむき多きこと。
(めい-ひつ[名筆](名) 書又は畫をすぐれてよくかくこと。又、すぐれてよき書又は畫。
(めい-びん[明敏](名) かしこくさときこと。才智するどくすばやきこと。
(めい-ふ[冥府](名) めいど。よみ。あのよ。
(めい-ふ[明府](名) 地方長官の敬稱。
(めい-ふく[冥福](名) 死後の幸福。又、これを祈るために佛事を營むこと。「ーを祈る」。
(めい-ぶつ[名物](名) ㊀有名なるもの。評判のもの。㊁其土地にて有名なる產物。土地の名產。㊂名稱あるもの。 ——をとこ[名物男](名) よく世間に評判せらるゝ男子。
(めい-ぶん[名分](名) 名によりて表はされたる人倫上の分際、即ち君に對しては臣たる分際あり父に對しては子たる分際あるの類。
(めい-ぶん[明文](名) あきらかに規定したる條項。

(めい-ぶん[名文](名) すぐれてよき文章。
(めい-べん[明辯](名) はっきりしたる辯舌。
(めい-ぼ[名簿](名) ㊀「みやうぶ」に同じ。㊁姓名を記(シル)せる帳面。
(めい-ぼう[明眸](名) あざやかなるめもと。轉じて、美人。「ー皓齒」。
卄めい-ぼく[面目](名) 「めんぼく」の音便。
(めい-ぼく[名木](名) すぐれてよき木。
(めい-まう(ウーモ)[迷妄](名) まよひてまことならぬ事をなすこと。まよひ。いつはり。
(めい-めい[銘銘](名、副) おの〳〵。それ〴〵。各自。
(めい-めい[冥冥](名、副) ㊀くらきさまにいふ語。(溟溟)。㊁知るべからず見るべからざるさまにいふ語。㊂事のあらはれざるさまにいふ語。
(めい-めい[明命](名) 神明又は君上の命。
(めい-めい[命名](名) 名をつくること。 ——しき[命名式](名) 名をつくる時の儀式。
(めい-めい[明明](名、副) いとあきらかなるさまにいふ語。 ——ち[明明地](名) あからさま。あきらか。 ——はくはく[明明白白](名、副) いとあきらかにしてすこしも疑ふべき點なきさまにいふ語。
(めい-めつ[明滅](名) 光などのあかるくなり又くらくなること。
(めい-もう[溟濛](名) 霧など立ちふさがりてくらきこと。
(めい-もく[瞑目](名) ㊀目を塞(フサ)ぐこと。㊁死ぬること。
(めい-もん[命門](名) 目の稱。
(めい-もん[名門](名) めいぞく。めいか。
(めい-やく[盟約](名) ちかひ。
(めい-よ[名譽](名) 世上に對して面目のはえあること。ほまれ。「軍人のー」。 ——けい[名譽刑](名) [法]名譽を褫奪する刑、即ち爵位又は勲章の褫奪等これなり。

——けうじゆ(ウーキヨ)[名譽教授](名) 帝國大學に功勞あるか若しくは學術上功績の顯著なるものに對し、勅旨又は文部大臣の奏宣によりて授與せらるゝ名譽の稱號。 ——りやうじ(ウーリヨ)[名譽領事](名) 普通の領事を置かざる地に於て、其國の臣民若しくは在留せる第三國の臣民を以て、領事の職務を行はしむるもの。
(めいよ-しよく[名譽職](名) 給料を受けず名譽として從事する職務。 ——さんじくわいゐん[名譽參事會員](名) 名譽職として府縣・郡・市等の參事會員たるもの。
(めい-らう(ウーロ)[明朗](名) あきらか。ほがらか。
(めい-り[名利](名) 名譽と利益と。「ーに走る」。
(めい-りう[名流](名) 名ある人。名人。
(めい-りやう(ヨーリウ)[明亮](名) さやけきこと。あきらか。
(めい-れい[螟蛉](名) ㊀[動]「あをむし」に同じ。㊁(詩經に出づ)養子の稱。
(めい-れい[命令](名) ㊀まうしつけ。いひつけ。おほせ。げち。㊁他人の意思を強制して或事をなさしめ又は或事をなさしめざること。㊂[法]帝國議會の協贊を經ずして發せらるゝ法規の稱、即ち勅令・閣令・省令・府縣令・警察令等をいふ、勅令は統治權の一作用に出づるものにして、他はことごとく職權によるものなり。 ——けん[命令權](名) [法]命令を發する權。 ——げん[命令言](名) [文法]動詞の語尾の變化が或動作を命令する意を表はすもの、例へば「言ふ」・「見る」を「言へ」・「見よ」と活用するの類。(希求言)。
(めい-れう(ヨーリウ)[明瞭](名) はっきりしてあきらかなること。(明白)。

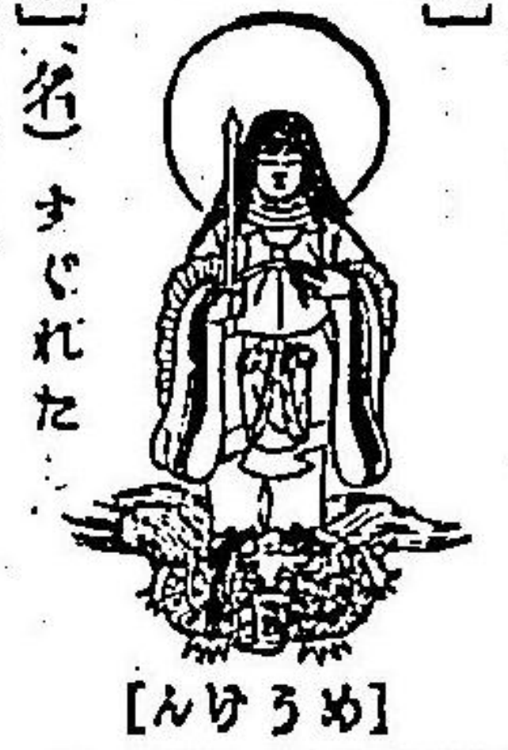
め-いろ[目色](名) 目のいろざし。
メイロ[迷廬](名) (梵語Meru)「ソメイロ」に同じ。
(めい-ろん[名論](名) すぐれてよき論。
(めい-わう(ウーワ)[明王](名) すぐれてかしこき君主。
(めい-わく[迷惑](名) ㊀まよひまどふこと。㊁こまること。當惑すること。
(めい-ゐ[命位](名) [數]諸等數に於て、或等數の單位の幾つが次の等數の單位となるかを定むること。
(めう(ウーヨ)[妙](名) ㊀すぐれて巧(タク)なること。極めて尊きこと。たへなること。㊁ふしぎ。不可思議。㊂深遠なる道理。
(めう-あん(ウーヨ)[妙案](名) すぐれて巧(タク)なるかんがへ。極めて尊きかんがへ。
めう-が(ウーヨ)[茗荷](名) [植]蘘荷科に屬する草、自生し又は栽培せらる、特異の香氣を有す、葉は長くして高さ一二尺、花は穗狀に排列し鱗狀葉これを被包す、名づけて「めうがのこ」といひ食用に供せらる、嫩き葉莖もまた食用に供せられ、莖葉の乾きたるものは鞋・草履・繩などをつくる料に用ひらる。(蘘荷)。


[めうが]

(めう-かう(ウーヨ・ウーコ)[妙巧](名) いとすぐれて巧なること。
(めう-かうざん(ウーヨ・コウ)[妙高山](名) [佛]須彌山(シユミセン)の漢譯。
(めう-かく(ウーヨ)[妙覺](名) [佛]究竟の解脫。
めうが-の-こ(ウーヨ)[茗荷子](名) 茗荷の條を見よ。
(めう-ぎ(ウーヨ)[妙技](名) たへなるわざ。すぐれて巧なるわざ。
(めう-く(ウーヨ)[妙句](名) たへなる句。すぐれてよき句。
(めう-けい(ウーヨ)[妙計](名) すぐれて巧(タク)なるは

かりごと。いとよきはかりごと。

（めう-けん）[妙見]（名）【佛】菩薩の名、北斗星の本地にして、國土を擁護し貧窮を救ふといふ。


[んけうめ]

（めう-さく）[妙策]（名）すぐれたるはかりごと。よきはかりごと。

（めう-さん）[妙算]（名）前條に同じ。

（めう-じ）[苗字]（名）「みやうじ」（名字）に同じ。

（めう-しゆ）[妙手]（名）たへなる伎倆。又、其人。上手なる人。

（めう-しゆ）[妙趣]（名）妙なるおもむき。

（めう-しよ）[妙所]（名）妙なるところ。

廿め-うつし[目移]（名）眼を移して他を見ること。

め-うつり[目移]（名）他のものを見て迷ふこと。他のものを見るにつけて心うごくこと。

め-うと[夫婦]（名）「めをと」の音便、

め-うへ[目上]（名）己より地位の尊き人。（尊長）。

（めう-ほふ）[妙法]（名）不可思議のみち。たへなるのり。「―蓮華」。

（めう-み）[妙味]（名）妙なるあぢ。たへなるおもむき。

（めう-めう）[妙妙]（名）いとすぐれてよきこと。

（めう-やく）[妙藥]（名）きゝめの靈妙なる藥。

（めう-よう）[妙用]（名）たへなるはたらき。たへなる作用。

（めう-れい）[妙齡]（名）年のわかきこと。年頃。

め-おぼえ[目覺]（名）見忘れぬためのしるし。めじるし。

め-おや[女親]（名）をんなおや。はゝ。「―のおはせぬに」。

廿め-か[茗荷]（名）【植】（芽香(カ)の義）「めうが」の古稱。

廿め-か[牝鹿]（名）をんなの鹿。めしか。（麀）。

廿め-かかう[赤目比]（名）（目赤(メアカ)の義）めあかう。あかめ。べっかっかう。べかし。

め-がく[目掛]（他、か下二）目をつけてねらふ。ねらひのぞむ。（屬目）。

め-かくし[目隱]（名）㊀目を布帛にて蔽(オホ)ひて物を見せぬこと。㊁小兒の遊戲、中にて一人眼を隱くして、他の者を捕へんと追ひ、捕へられたるもの代りて、眼を隱して他を捕ふるもの。めんないちどり。めなしどち。めどち。（捉迷藏）。

め-かけ[妾]（名）（目を掛くる義）そばめ。てかけ。（側室、權妻、庶妻）。――ばら[妾腹]（名）めかけ腹に生まるゝこと。又、其生まれたる人。（庶子）。

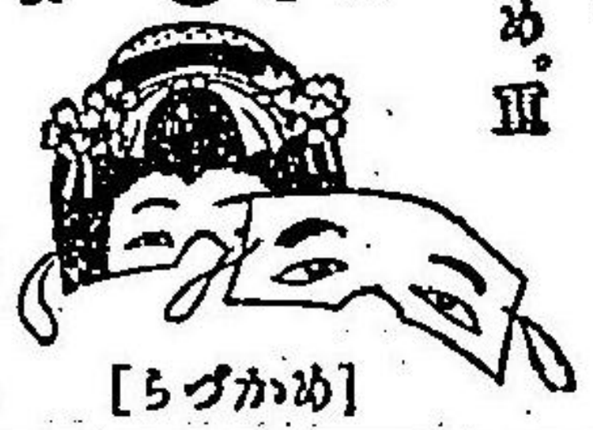
〔めがける〕（他）「めがく」の訛。

めか-す（他、さ四）めくやうにす。「今―」。

〔めか-す〕（自、さ四）みなりをかざる。よそほひをこらす。（艶飾）。

め-かた[目方]（名）おもさ。かけめ。重量。

め-かづら[目鬘]（名）小兒の玩具、目より上部の眉・髮などの形を描(エガ)きたる假面の如きもの、紐(ヒモ)もて耳に釣りてかく。


[らづかめ]

め-かど[目角]（名）眼の鋭く物を見るさま。（目稜）。

め-かど[目廉]（名）物事の箇所を認むること。「―に取る」。

廿め-がね[妻料]（名）豫て妻と思ひ定めたる人。

め-がね[眼鏡]（名）㊀「がんきやう」に同じ。㊁善惡可否を見定むること。めきゝ。みわけ。（鑑識）。――にかなふ　目上の人によきものと見らる。

め-がはら[牝瓦]（名）屋根の上にあふむけて葺(フ)く瓦。

廿め-かる[目離]（自、ら下二）見ることやむ。見さかる。

廿め-かれ[目離]（名）目を離すこと。注視せぬこと。

――せず　目を放たずして見る。注視す。

めぎ[小蘗]（名）【植】小蘗科に屬する灌木、幹の高さ五六尺に達す、枝繁茂して刺多し、葉は小さくして倒卵形をなし對生す、花は淡黄白色にして通常總狀花序に排列す、枝葉は藥用に供せられ、樹皮は黄色の染料に供せらる。

め-きき[目利]（名）㊀器物書畫などの可否眞僞を見わくること。鑑定。（鑑識）。㊁鑑定をなす人。又、鑑定に巧(タク)なる人。

廿め-ぎみ[妻君]（名）他人の妻の敬稱。

――めく（接尾）體言に接して、其體(テイ)に見ゆといふ意を添ふる語。「今―」。

め-くぎ[目釘]（名）刀の柄と刃心(コミ)とを刺し止むる釘。

廿めぐ-し（形、二）㊀見る目苦し。いたげなり。㊁めぐむべくあり。いとほし。いつくし。むごらし。かはゆらし。めごし。

め-ぐすり[目藥]（名）眼病を治療する藥。

め-くそ[目屎]（名）めやに。

め-くはす[眴]（他、さ下二）目をうごかして意を通ず。目色にて知らす。

め-くはせ[眴]（名）めくはすこと。（目成、目加）。

〔めくばせ〕[眴]（名）前條の訛。

め-くばり[目配]（名）方々を注意して見ること。

めぐみ[惠]（名）㊀あはれみ。なさけ。いつくしみ。㊁ほどこし。おくりもの。

め-ぐむ[萌]（自、ま四）芽を出だす。きざす。

めぐむ[惠]（他、ま四）㊀なさけをかく。いたはる。あはれむ。㊁物をほどこす。物を與ふ。（恤）。

め-くら[盲]（名）㊀目の見えぬこと。又、其人。めしひ。（瞽）。㊁文字の讀めぬこと。又、其人。㊂物事のわからぬこと。又、其人。――いん[盲印]（名）「めくらばん」に同じ。――うち[盲打]（名）わいだめなくうつこと。――さがし[盲探]（名）あてどもなく手さぐりにさがすこと。――じま[盲縞]（名）經(タテ)緯(ヨコ)共に紺色の木綿絲にて織りたるもの。――ぢ[盲地]（名）前條に同じ。――ばん[盲判]（名）其書面の如何を知らずに判をおすこと。――めっぽふかい[盲滅法界]（名）わけのすこしもわからぬこと。やうすのちっとも知れぬこと。――へびにおぢず　ものを知らぬものは物事に頓著せぬことをいふ。

廿めぐらし-ぶみ[廻文]（名）まはしぶみ。うつしぶみ。（廻文、廻狀）。

めぐら-す[廻]（他、さ四）㊀めぐるやうにす。まはす。㊁はたらかし用ふ。凝(コ)らす。「工夫を―」。「謀を―」。㊂廿廻文にて知らせやる。

廿めぐら-ふ[廻]（自、は四）（「めぐる」の延言）世の中に立つ。人中にまじはる。

廿め-くらべ[目競]（名）にらみくらべ。にらみっくら。

めくり[捲]（名）めくること。

めぐり[廻]（名）㊀めぐること。まはること。（廻轉）。㊁かこみ。周圍。㊂あたり。きんじよ。㊃行きてもとへもどること。㊄廿古昔の小兒の遊戲、直立して身をめぐらすこと。㊅飯の菜。おかず。㊆つきやく。月經。

――あはせ[廻合]（名）吉凶善惡の事情が其身に到來すること。まはりあはせ。――あ-ふ（自、は四）めぐり〳〵て出會す。邂逅す。てあふ。

廿めぐり-みづ[曲水]（名）「めぐりみづのとよのあかり」の略言。――のとよのあかり[曲水宴]（名）「ごくすゐのえん」に同じ。

めく-る[捲]（他、ら四）「まくる」の轉。

廿めく-る[目暗]（自、ら下二）目くらむ。

めぐ-る[廻]（自、ら四）（目轉(メクル)の義）㊀周圍をまくが如くに行く。（周）。㊁行きてもとにかへる。㊂それよりそれへと傳はり行く。㊃まはる。㊄まはりを圍めり。（繞）。㊅方々をあるきまはる。遍歷す。㊆廿世の中に交はる。

廿め-くるめ-く[眩]（自、か四）目くらむ。

〔めげ-る〕[破]（自、か下一）㊀缺け損ず。㊁よわる。（衰頽）。

廿め-こ[妻子]（名）㊀妻と子と。㊁つま。

〔め-こぼし〕[目溢]（名）とがむべき筈なれど、ゆるしてとがめざること。見のがすこと。

廿め-さく[鯨]（他、か四）入墨の刑に處す。

廿め-ざし[髻]（名）㊀男女の童の額髮。㊁轉じて男女の童。

め-ざし[目刺]（名）鰯など、數疋の目に藁又は串を通して乾したる物。（鮿）。

め-ざし[目指]（名）めつき。めのいろ。

め-ざ-す[目差]（他、さ四）目がく。ねらふ。「―敵」。

め-ざ-す[芽]（自、さ四）めぐむ。

め-ざと-し[目聰]（形、二）㊀見つくることすばやし。めばやし。㊁目を覺ますこと敏し。いざとし。

め-ざはり[目障]（名）見る目に障(サハ)ること。目の邪魔になること。

め-ざまし[目覺]（名）㊀めをさますことのたよりとなるもの。㊁小兒のめざめに與ふる菓子などの稱。㊂「めざましどけい」の略言。――ぐさ[目覺草]（名）目覺のたよりとなるもの。――どけい[目覺時計]（名）豫めねぢをかけおけば、豫定の時刻に至りてはげしく鳴る裝置の時計。

め-ざま-し[目覺]（形、二）㊀物事の意外にて目も醒むるばかりなり。おどろくべし。㊁立派なり。

め-ざ-む[目覺]（自、ま下二）㊀睡よりうつゝにかへる。おく。㊁睡氣去る。㊂まよひ開らく。㊃おどろかる。

め-ざめ[目覺]（名）めさむること。めざむること。ねおき。ねざめ。

めし[飯]（名）㊀穀類を炊(カシ)ぎたる物。㊁食事。

めし[召]（名）めしだすこと。めすこと。

〔めじ〕[鯢鰹]（名）【動】「めじか」に同じ。

めしあがり-もの[召上物]（名）めしあがるもの。

めしあが-る[召上]（他、ら四）「飲む」「食ふ」の敬語。

めしあ-ぐ[召上]（他、か下二）㊀呼び出だす。めしだす。㊁官府にとり上ぐ。沒收す。

〔めしあげる〕（他）「めしあぐ」の訛。

廿めし-あはせ[召合]（名）古昔、七月二十八日に相撲節會(スマヒノセチヱ)の準備に行はれたる手合(テアハセ)。

めし-いだ-す[召出]（他、さ四）官に召す。よびだす。

廿めし-い-づ[召出]（他、た下二）前條に同じ。

めし-うど[召人]（名）㊀廿めかけ。てかけ。㊁とらへて獄につながれたるもの。とらへびと。囚人。

めじ-か[鯢鰹]（名）(い)「めじがつを」の略言。(ろ)「さうだがつを」の稱。

めし-かか-ふ[召抱]（他、は下二）秩祿又は給料を與へて家人となす。

めし-かかへ（カエ）［召抱］（名） めしかゝふること。又、めしかゝへられたる人。

めじ-がつを［䲖鰹］（名） 【動】かつをの一種、小形にして體長一二尺、春夏の交多く漁せらる、味淡泊なり。

廿**めし-ぐ-す**（せしすするすれせよ）［召具］（他、さ變） 連れ行く。

廿**めし-こむ**（めまむむむめめ）［召籠］（他、ま下二） 召しよせてをしこむ。

廿**めし-こめ**［召籠］（名） めしこむること。

めし-ごり［飯行李］（名） 辨當に用ふる小さき行李。

めし-じやう（ジヤウ）［召狀］（名） 官より人を召すために發する書狀。（徵書）。

めし-じやくし［飯杓子］（名） 飯をもる杓子、扁平にして稍や楕圓狀をなす。しやもじ。

めし-たき［飯炊］（名） 飯を炊（カシ）ぐ僕又は婢。

め-した［目下］（名） 自分より地位ひくきもの。

めし-つかひ（カーツカイ）［召使］（名） ㊀廿召して使はるゝ禁中の下司。㊁下男、下女。奴婢。

めし-つか-ふ（はひふふへへ）［召使］（他、は四） 召して身近く使役す。

廿**めし-つぎ**［召次］（名） とりつぎ。

めし-とり［召捕］（名） めしとること。罪人の捕縛。

めし-と-る（らりるるれれ）［召取］（他、ら四） めし寄（ヨ）す。

めし-と-る（らりるるれれ）［召捕］（他、ら四） 官の命令を帶びて罪人を捕ふ。逮捕す。（縶捕、捕縛）

めし-バチ［飯鉢］（名） めしびつ。

めし-はな-す（さしすすせせ）［召放］（他、さ四） 官にとり上ぐ。

廿**めし-はな-つ**（たちつつてて）［召放］（他、た四） 衆中よりえらびぬきて召しよす。

め-しひ（イーシ）［盲］（名） （目盲の義）めくら。（瞽）。

めし-びつ［飯櫃］（名） 飯を入れて貯へおく木製の器、圓形にして蓋あり。いひけ。いひびつ。めしつぎ。めしバチ。

めし-ぶみ［召文］（名） めしじやう。さしがみ。

めし-もの［召物］（名） ㊀貴人の衣服・飲食などの敬稱。㊁特に衣服の敬稱。「お—」。

〔**めし-もり**［飯盛］（名） 旅店の下女にして遊女兼帶のもの。おぢやれ。

〔**めし-や**［飯屋］（名） 飯を賣る家。

めし-よ-す（せせすするすれせよ）［召寄］（他、さ下二） ㊀呼びて來らしむ。よびよす。㊁とりよす。

〔**めしよせる**（他） 「めしよす」の訛。

メシヨン（名） （「ドイツ」語 Meerschaum の訛）卷煙草の「パイプ」などにする一種の鑛物。

め-じり［目後］（名） まなじり。（外眦）。〔—**をさげる** 女に見とる。又、女に溺る。

め-じるし［目標］（名） 見て知るたよりの標。

めし-れう（リヨウ）［召料］（名） 高貴の人の用ふるもの。御用品。

廿**め-しろ**［眼代］（名） もくだい。（目代）。

め-じろ［眼白］（名） 【動】鳴禽類中めじろ科に屬する鳥、形はみそさざいに似て稍や大きく、眼邊に白き圈あり、全身黃綠色にして腹部は灰白色なり、其性群を好む。（繡眼兒）。

めす［雌］（名） めん。め。（牝）。

メス（名） （「オランダ」語、Mes）西洋形の小刀。

廿**め-す**（さしすすせせ）［見］（他、さ四） ㊀見たまふ。みそなはす。㊁統御したまふ。しろす。「しろし—」。（看）。

め-す（さしすすせせ）［召］（他、さ四） ㊀「食ふ」「飲む」「著る」の敬語。㊁動詞の末にそふる敬語。たまふ。「聞こし—」。

め-す（さしすすせせ）［召］（他、さ四） ㊀呼び寄す。まねく。㊁呼び出して官職を授く。（徵）。

め-せき-がさ［目塞笠］（名） 目を甚だ細く作りたる藺（ヰ）の編笠。

〔**めそ**（名） 【動】鰻の小なるもの。（東京の方言）。

廿**め-ぞめ**［目染］（名） しぼりぞめ。

廿**め-だい**［目代］（名） 「もくだい」に同じ。

廿**め-だう**（ウード）［馬道］（名） 母屋に行きかよふ廊の下の人馬などの通るところ。

廿**め-だうか**（ウード）［女蹈歌］（名） をんなだうか。

め-だか［目高］（名） 【動】喉鰾類中めだか科に屬する小魚、淺水に產す、長さ一寸許、全身淡褐色にして下顎は上顎より長く、目大きくして高し。（丁斑魚、麥魚）。

め-だき［女瀧］（名） 二條の瀧の中、勢ゆるく小さきもの。をだきの對。

め-だけ［雌竹］（名） 【植】竹の一種、幹細く葉廣くして篠竹に似たるもの。

め-だし［芽出］（名） 芽を出だすこと。又、出でたる芽。

廿**め-だ-し**（しくしかしき）［愛］（形、二） めでたし。あいちし。

廿**め-だた-し**（しくしかしきしけれ）［目立］（形、二） 目立ちて見ゆ。（顯著）。

め-だち［芽立］（名） 草の芽又は松のみどりなどの萌えたつこと。「—のみどり」。

め-だ-つ（たちつつてて）［目立］（自、た四） きはだちてよく目につく。いちじるしく人目をひく。（顯著）。

廿**め-だ-つ**（てててつつるつれてよ）［目立］（他、た下二） 目をつく。目をそゝぐ。（注目）。

め-たて［目立］（名） 鋸・鑢・碓（カラウス）の目などの鈍くなりたるを鋭くすること。

め-だま［目玉］（名） ㊀まなこ。眼球。㊁〔—にらまるゝこと。「お—を頂戴す」。㊂親方又は取締などの稱。

廿**め-だり-がほ**（オーガ）［目垂顏］（名） ㊀下方を向きて居る顏。㊁面目なささまの顏つき。

メタル（名） 「メダル」に同じ。

メダル［Medal］（名） 賞牌。

メタン［Methane］（名） 【化】無色無味無臭にして點火し易き氣體、炭化水素中最小の分子量を有するもの、石油產地の地中或は草木の遺物のある沼澤の底より發生す、一に沼氣といふ。

メチル-アルコホル［Metyl-alcohol］（名） 【化】木材を乾溜するときに生ずる一種の香氣ある液體、一に木精と稱す。

廿**め-ぢ**［眼路］（名） めどほり。めさき。（眼界）

め-ちがひ（ガイーチ）［目違］（名） みそこなひ。みあやまり。

〔**め-ちや**［滅茶］（名） ㊀すぢみちの立たぬこと。わけのわからぬこと。㊁過度なること。はなはだしきこと。

——**くちや**［滅茶苦茶］（名） 前條に同じ。

め-づ［馬頭］（名） 地獄にありといふ馬の如き頭を有する獄卒。「牛頭—」。

め-づ（でででづるづれでよ）［愛］（他、た下二） いとほしむ。かはゆがる。いつくしむ。愛す。めづらしく思ふ。

め-づかひ（カーツカイ）［目遣］（名） 目をうごかし物を見るさま。

〔**めっ-かち**［偏目］（名） かため。〔——**しやうが**（ウーショ）［偏目生姜］（名） 東京芝神明の祭禮の時に賣るしやうがの稱、昔時めつかちのものこれを賣りしよりいふ。

め-つき［目着］（名） 目のはたらくさま。目の樣子。めざし。

めっ-きん［滅金］（名） ㊀「ときん」（鍍金）に同じ。㊁中みあしくしてうはべを飾りたるもの。

〔**めっ-きやく**［滅却］（名） きえほろぶること。又、ほろぼすこと。

めっ-きり［目切］（副） 際立ちて。めき〱と。

め-つ-く（けけくくるくれけよ）［目附］（他、か下二） ㊀目をつく。注目す。㊁みいだす。みつく。

め-つけ［目附］（名） 武家の職名、諸事に立合ひ又は非法を糾（タヾ）す任を帶びしもの。「隱—」。

〔**めっ-ける**（けけけるけるけれけよ）（他、か下一） 「めつく」に同じ。

廿**めづ-こ**［愛子］（名） 愛する子。いとしご。

〔**めつ-ざい**［滅罪］（名） つくりたる罪をほろぼすこと。

（**めっ-さう**（ウーツ）［滅相］（名） 【佛】業盡き命終はりて身體もまた壞滅すること。

（**めっ-さう**（ウーツ）［滅相］（副） 法外に。はなはだしく。

（**めつ-じん**［滅盡］（名） ほろびつくること。又、ほろぼしつくすこと。

めっ-す（せしすするすれせよ）［滅］（自、さ變） ほろぶ。

めっ-す（せしすするすれせよ）［滅］（他、さ變） ほろぼす。

（**めつ-ぜつ**［滅絕］（名） ほろびたゆること。又、ほろぼしたやすこと。

〔**めっ-た**［滅多］（名） むちやくちや。みだり。——**うち**［滅多打］（名） むちやくちやに打つこと。

——**に**［滅多］（副） ㊀みだりに。むやみに。㊁殆ど。稀に。（下に打消の來る時に用ふ）。

（**めっ-たり**（ウート）（名） 次條に同じ。

（**めつ-だう**（ウード）［滅道］（名） 【佛】迷の因果を滅（メツ）する修行。さとりの因果。

〔**めった-むしやう**（ヨウームシ）［滅多無性］（名） むちやくちや。やたら。——**に**［滅多無性］（副） むやみに。めったに。

（**めった-やたら**［滅多矢鱈］（名） 「めったむしやう」に同じ。——**に**［滅多矢鱈］（副） 「めったむしやうに」に同じ。

（**めつ-ど**［滅度］（名） 【佛】佛果を得て生死を超越すること。

〔**めっ-ぱ**［目張］（名） 目のひつつりたるもの。

（**めつ-ばう**（ウーボ）［滅亡］（名） ほろぶること。

〔**めっ-ぱり-こ**［目張子］（名） にらみっこ。

め-つぶし［目潰］（名） 灰・砂などを抛（ナゲウ）ちて、相手の目を眩（クラ）ますこと。

（**めっ-ぽふ**（ウーボ）［滅法］（名） 【佛】一切有漏の究竟を觀じて苦集を滅すること。

（**めっ-ぽふ**（ウーボ）［滅法］（副） 法外に。はなはだしく。

——**かい**［滅法界］（副） 法外に。

め-づま［目褄］（名） 見る所。目さき。——**をしのぶ** 人目を避く。

（**めつ-もん**［滅門］（名） 「めつもんにち」の略言。

——**にち**［滅門日］（名） 陰陽家にて百事すべて凶なりといふ大凶日、月每に五日あり、大禍日。狼藉日と共に三惡日と稱す。（滅日）。

廿**めづ-らか**［珍］（名） めづらしきさま。

めづら-し（しくしからしき）［珍］（形、二） ㊀廿愛すべし。いつくしむべし。㊁世に稀なり。つねにあらず。㊂ふるくさからず。ありきたりならず。㊃たまさかなり。——**が-る**（らりるるれれ）［珍］（他、ら四） めづらしく思ふ。——**びと**［珍人］（名） たまさか來りたる人。

廿**めづら-に**［珍］（副） めづらかに。

（**めつ-れつ**［滅裂］（名） ほろびさくること。形をうしなふこと。「支離—」。

め-て［馬手］（名） ㊀馬の手綱を持つ手、即ち右の手。弓手の對。㊁「めてざし」の略言。——**ざし**［馬手差］（名） 馬手に差す短刀。よろひどほし。（刺刀）。

廿**めで-くつがへ-る**（らりるるれれ）［愛覆］（他、ら四） いたく愛づ。

廿**めで-し-る**（れれるるるれれよ）［愛痴］（他、ら下二） 心の惑になる程めづ。歡喜して有頂天になる。

めで・た・し（くしき、けれ）（形、二）（愛（メデ）痛しの轉）㊀賞づべし。あいらし。賞すべし。㊁うるはし。うつくし。㊂祝ふべし。よろこぶべし。

卄めで・や・ぐ（かぎぐげ）［愛］（自、か四）めでたきさまに見ゆ。

卄めで・ゆす・る（らりるるれれ）［愛搖］（他、ら四）めでどよめく。稱揚す。

め・ど［著］（名）【植】「めどはぎ」に同じ。

め・ど［針孔］（名）（「みぞ」の轉）針の一端にある絲を通す孔。はりのみゝ。（針眼）。

め・ど［目處］（名）めざすところ。めあて。目的。

めど・ぎ［筮］（名）卜筮の具、蓍木の莖五十本を用ふ、其中一本を取りてこれを太極とし、殘る四十九本を陰陽の兩分に象りて無心に二分し、右手にあるものを下におき、其中の一本を取りて左手の無名指と小指との間に挾みこれを扐（ロク）といふ、右手にて左手にあるものを二本づゝ八卦の名目を追ひて數へ、殘るところのものに扐の一本を加へて、二本なれば兌、三本なれば離、四本なれば震、五本なれば巽、六本なれば坎、七本なれば艮、八本に滿つれば坤、一本なれば乾とし、其卦を算木の象とす、後世多く竹にて作りたるものを用ふ。

めど・ぎ［蓍木］（名）【植】「めどはぎ」に同じ。

めど・はぎ［蓍萩］（名）【植】荳科に屬する草、莖は宿根より發生す、葉は羽狀複葉にして狹倒卵形又は倒披針形をなす、花梗は甚だ短くして一個又は少數の花開く、花は白色にして紫色を帶ぶ。（鐵掃帚）。

め・どほり（ードオリ）［目通］（名）㊀目の前。めさき。㊁貴人の目前に出でゝ謁すること。

め・どり［雌鳥］（名）鳥のめす。めんどり。**卄——ば**［雌鳥羽］（名）雌鳥は左の翼にて右の翼を掩ふとて、すべて左にて右を掩ふことの稱。めんどりば。

め・ざ・る（らりるるれれ）［娶］（他、ら四）（妻取（メトル）の轉）妻に迎へ取る。

（め・なう（ーノウ）［瑪瑙］（名）【鑛】石英の一種、種々の金屬化合物を含み、美麗なる色を帶び、玻璃の如き光澤を有す、印材・文房具等種々の裝飾品を製するに用ひらる。（瑪瑙）。

卄め・なし・かたま［目無籠］（名）「まなしかたま」に同じ。

め・なし・ちご［目無兒］（名）めかくし。

め・なし・どち［目無共］（名）めかくし。

めなだ［赤目魚］（名）【動】「いせごひ」に同じ。

めなもみ［豨薟］（名）【植】菊科に屬する草、莖は方形にして高さ二三尺、葉は圓狀にして尖り細毛を有し對生す、花は小形黃色にして秋の頃枝端に簇生す。されん。（狗膏、粘糊菜、希仙）。

卄め・なら・ぶ（ばびぶぶべべ）［目並］（自、は四）目に見え並ぶ。

め・ぬき［目貫］（名）刀の柄の目釘に差し込む金具。

め・ぬき［目拔］（名）㊀大切なる處。主要なる場。㊁著しくひいてたるもの。めぼしきもの。（眼目）。

卄め・の・おと（名）㊀妻の妹。㊁轉じて、乳母。

卄め・の・こ［女子］（名）をんな。又、女の子。

め・の・こ［目子］（名）「めのこざん」の略言。**——ざん**［目子算］（名）算盤などを用ひずに、目さきにて計算すること。**——かんぢやう**［目子勘定］（名）前條に同じ。

め・の・たま［眼球］（名）「めだま」（一）に同じ。

め・の・と［乳母］（名）抱へられて其家の子供に乳をのませ、もりそだつる女。うば。（姆）。**——ご**［乳母子］（名）乳母の子。

め・の・まへ（ーマエ）［目前］（名）㊀見てあるまへ。まのあたり。（眼前）。㊁極めて接近せるところ。いと近きあたり。㊂たちまち。

卄め・の・わらは（ーワラワ）［女童］（名）㊀少女。㊁小間使の少女。（女嬬）。

卄め・の・をんな［妻女］（名）つま。

め・ばえ［芽生］（名）㊀めだし。發芽。㊁種子より生じたる木。接木の對。

め・はし［目端］（名）見て氣のつく才智。場合を見はからふ氣轉。めはしり。

卄め・はじき［充蔚］（名）【植】（い）「やくもさう」の一名。（ろ）薄荷の一名。

め・はしり［目走］（名）「めはし」に同じ。

め・は・そらに（ーリ）［目空］（副）目にとめずに。

め・ばたき［瞬］（名）またゝき。

め・ばち［牝蜂］（名）めすのはち。

め・ばた・く（かきくくけけ）［瞬］（自、か四）またゝく。

め・はちぶん［目八分］（名）物を捧（サヽ）げ持つに、眉とひとしき高さにあぐること。

め・はや・し（くしき、けれ）［目早］（形、二）見ることすどし。めざとし。

め・ばり［目張］（名）物の隙などを紙にて貼（ハ）り塞ぐこと。

め・ばる［眼張］（名）【動】硬鰭類中めばる科に屬する魚、體は楕圓形にして扁細し、眼張り出づ、全體黑色にして茶綠色を含む、體長五六寸に達す、近海に產す。（鮋）。

め・ひ（ーイ）［姪］（名）兄弟姉妹の娘。外甥。

卄め・ぶ［馬部］（名）馬寮（メレウ）の下衆。とねり。

め・ぶんりやう（ーリヨウ）［目分量］（名）目にて見て其大凡の度をはかること。

め・ぼし［目星］（名）㊀めあて。めじるし。㊁眼球に生ず白色の小點。

め・ぼ・し（しくしき、しけれ）（形、二）目立ちたり。いちじるし。（著）。

め・まぐる・し（しくしき、しけれ）［目苦］（形、二）（目紛（マギ）ラシの轉）目ざはりになりて煩はし。

め・まひ（ーマイ）［眩、暈］（名）目のくらむこと。めくるめくこと。

め・みえ［目見］（名）㊀まみゆること。謁すること。㊁奉公人の始めて主人に會（ア）ふこと。㊂德川時代に、旗本の親しく將軍に謁することを得る格式。

め・め・し（しくしき、しけれ）［女女］（形、二）柔弱にして女らし。

〜めめず［蚯蚓］（名）【動】「みみず」の訛。

めも・あはず（ーアワズ）［目不合］（副）眠るに眠られずして。

めも・あやに［目奇］（副）目にきらめくさまに。見るにいやちこなるさまに。目も眩くさまに。

め・もじ［目文字］（名）會ふことの敬語。（婦人の語）。

卄め・も・すまに（副）目をも離さずに。

め・もと［目許］（名）㊀目の邊。㊁めざし。めつき。

め・も・はる・に［目遙］（副）見る目遙かに。ながめ遠く。

め・もり［目盛］（名）㊀目分量にて盛りつくること。㊁量又は度を示す志るし。**——きかい**［目盛器械］（名）尺度・弧度などの目盛を刻する器械。

め・やす［目安］（名）㊀見易からしめんため個條などを立てゝ書くこと。又、其かきたる文書。㊁個條を立てゝ書き述ぶる訴狀。個條書きのうつたへぶみ。㊂珠算にて、算盤の右方に置く加數・減數・乘數・除數の稱。㊃めあて。めど。**——がき**［目安書］（名）前條（一）（二）に同じ。**——かた**［目安方］（名）古昔、評定所にて、訴狀を調ぶる役。**——ばこ**［目安箱］（名）享保六年の始めより、評定所の前に設けおかれし箱、役人の非理を人民より訴ふるとき、目安書にして投げ入れしむるためのもの。

め・やす・し（くしき、けれ）［目易］（形、二）見るに難からず。見ぐるしからず。みやすし。

め・やに［目脂］（名）めくそ。（眼涕、眵、瞘眵）。

め・やみ［眼病］（名）めのやまひ。がんびやう。（眼疾）。

卄め・ゆひ（ーユイ）［目結］（名）㊀志ぼりぞめ。㊁めかくし。

〜め・らう（ーロウ）［女郎］（名）㊀女のわらは。㊁轉じて、女を賤しめて呼ぶ語。

卄め・らは（ーワ）［女童］（名）女のわらは。

めり［減］（名）㊀めること。へること。㊁音樂にて、調子を低くすること。

（め・り［罵詈］（名）のゝしること。（惡口）。

卄めり（りりるるれれ）（助動）物事の狀態を察りと推量していふ意の語。「風さわぐ—」。

めり・かり（名）音調の高低。

〜メリキ（名）「ミルク」の訛。

メリケン・こ［米利堅粉］（名）「アメリカ」合衆國より輸入する小麥の粉。

〜めり・こ・む（まみむむめめ）［減込］（自、ま四）㊀深く減りて中に入る。㊁壓されて下がり入る。

メリヤス［莫大小］（名）㊀（「スペイン」語 Medias）絲にて密に編みて、伸縮するやうに作りたる織物、手袋・股引・襦袢などに製す。㊁〜長唄の一種、文短くして演劇の間の伸縮に合はするもの。

メリンス（名）薄く柔かく織りたる一種の毛織物。（毦）。たうちりめん。「メレンス」。

め・る（らりるるれれ）［減］（自、ら四）すくなくなる。へる。

メルカトル・ざうえいはふ（ーホウ）［ー投影法］=Mercator's projection（名）【地】圓柱投影法に同じ、「フランス」人「メルカトル」の初めて造りしものなるが故に名づく。

メルカトル・へいめんづ・はふ（ーホウ）［ー平面圖法］=Mercator's plane projection（名）【地】前條に同じ。

卄め・れう（ーリョウ）［馬寮］（名）うまのつかさ。

メレンス（名）「メリンス」の轉。

め・をと［夫婦］（名）ふうふ。いもせ。**——ひな**［夫婦雛］（名）夫婦揃ひたる雛人形。

（めん［面］（名）㊀かほ。つら。おもて。㊁顏面の形に擬造したるもの、顏に被りて舞ふ。おもかた。（假面）。㊂器物の角を淺く削ること。㊃擊劍の道具、即ち「めんぼほ」の略言。㊄擊劍にて、めんぼほの上部を擊つこと。㊅【數】多面體の限界をなす平面。

（めん［免］（名）㊀年貢を免（ユル）さるゝこと。㊁免職。

（めん［麵、麪］（名）㊀うどんこ。こむぎこ。㊁うどん粉をこねてつくりたる餛飩・索麪などの總稱。

（めん［綿］（名）木綿の織物。絹の對。

〜めん［雌］（名）「め」の音便。

（ーめん［面］（接尾）扁（ヒラ）き物を數ふる語。「額一ー」。

（めん・い［綿衣］（名）木綿の織物にて仕立てたる衣服。めんぷく。

（めん・いう［面友］（名）うはべばかりの交際の友。

（めん・いうへい［免幽閉］（名）【法】五年を經たる無期流刑の罪囚若しくは三年を經たる有期流刑の罪囚に對し、獄內の幽閉を免じ、島地を限り住居せしむること。

（めん・えき［免役］（名）㊀服役を免ずること。㊁特に、病疾に罹（カヽ）れるもの又は不具者等の如く兵役に堪へざるものに對して、兵役を免除することの稱。**——じつ**［免役日］（名）囚徒の服役を免ぜらるゝ日、現今にては、大祭日及一月二日と十二月三十一日となり。

（めん・えつ［面謁］（名）目どほりに出でゝ見（マミ）ゆること。（拜謁）。

めん-がた［面形］（名）㊀面(一)に同じ。㊁ものにかはのあたりて殘る痕。

(めん-ぎ)［面議］（名）「めんだん」（面談）に同じ。

(めん-きつ)［面詰］（名）まのあたりせめなじるヿ。

(めん-きよ)［免許］（名）㊀特定の物事に對して官より許すヿ。（官許、官准）。㊁師より藝術の奥義を授けらるゝヿ。ゆるし。傳授。**――えいげふ**［免許營業］（名）官に願ひ出て、免許を得るにあらざれば開始するを能はざる營業。**――かいでん**［免許皆傳］（名）奥義をことごとく傳授せらるゝヿ。**――かんさつ**［免許鑑札］（名）官より免許の證として下付する鑑札。**――じやう**［免許狀］（名）次條に同じ。**――しよ**［免許書］（名）官より免許の證として下付する文書。**――ぜい**［免許税］（名）物事の免許を付與するにつきて徴收する税。**――だいげん**［免許代言］（名）辯護士の規定なき以前に於ける辯護士の俗稱。**――ねんげん**［免許年限］（名）或物事に對して免許を付與したる年限。**――れう**［免許料］（名）或物事に對し免許を付與するにつきて徴收する料金。

めん-くら-ふ（はひふへ）［目眩］（自、は四）㊀目眩む。㊁あわてふためく。

(めん-くわ)［綿花］（名）採收したるまゝのわたの果實の白毛。

(めん-くわい)［面會］（名）まのあたりに會ふヿ。相見るヿ。（對面、對顔）。

(めん-くわやく)［綿火藥］（名）綿花を硝酸と硫酸との混合液に浸して製したる火藥、密閉せる器中に入れはげしく打撃すれば爆發し、點火すればはげしく燃ゆ。

(めん-くわん)［免官］（名）官職を免ぜらるゝヿ。めんしよく。

(めん-げん)［瞑眩］（名）めまひ。めくるめくヿ。**――やく**［瞑眩藥］（名）めまひするほど烈しき藥。

(めん-ご)［面晤］（名）面會してはなしするヿ。

(めん-こう)［綿亙］（名）つゞきわたるヿ。ながながつゞくヿ。

(めん-ざい)［免罪］（名）罪囚に對して刑罰をゆるすヿ。

(めん-ざう)［面相］（名）めんてい。おもざし。かほつき。面貌。

めん-ざん-し［綿撒絲］（名）「ほづしもめん」に同じ。

(めん-し)［綿絲］（名）もめんいと。

(めん-しき)［面識］（名）互に面を識(シ)りあひてゐるヿ。しりあひ。

(めん-じやう)［面上］（名）つらの上。

(めん-じやう)［免狀］（名）㊀免許の證として付與する文書。㊁卒業證書。

(めん-じゆう)［面從］（名）其人のめのまへにてはこれに服從するヿ。

(めん-しよく)［面色］（名）かほいろ。顔色。

(めん-しよく)［免職］（名）就任せる職を免ぜらるゝヿ。解職。（免官）。

めん-す［面］（自、さ變）向く。向ふ。

めん-ず［麪子］（名）うどん・さうめん等の總稱。

めん-ず［免］（他、さ變）㊀ゆるす。㊁職を解く。役を止む。

(めん-ぜい)［免税］（名）税をゆるすヿ。

(めん-せき)［面責］（名）まのあたりにせむるヿ。

(めん-せき)［免責］（名）責任をときゆるすヿ。

(めん-せき)［面積］（名）平面形又は表面上の形の限界内の場所のひろさ。**――そくど**［面積速度］（名）【天】動徑が單位時間に通過する面積。

(めん-せつ)［面接］（名）たいめん。めんくわい。

(めん-せつ)［面折］（名）まのあたりせめなじるヿ。

(めん-ぜん)［面前］（名）目の前。まのあたり。

(めん-そ)［免訴］（名）【法】豫審判事が、刑事被告人に對して、其起訴の效力を消滅せしむる決定をなすヿ、其事件の罪とならざるとき・犯罪の證迹十分ならざるとき・公訴の時效に罹(カカ)りたるとき・已に確定判決を經たるとき・大赦ありたるとき・法律に於て其罪を全免するときに行ふものにして、其決定の確定する場合には、更に新なる理由生ずるにあらざれば、其事件につき再び起訴せらるゝヿなし。

(めん-そ)［面訴］（名）まのあたりうったふるヿ。

(めん-そ)［免租］（名）「めんぜい」に同じ。**――ち**［免租地］（名）地租を徴收せられざる民有地。

(めん-たいしよう)［面對稱］（名）【數】一つの平面より一つの圖形上の一點に至る距離と等しき距離にして反對の位置に第二の圖形上の點が必ずあるとき、又は一つの圖形が一つの平面にて分たれ其一半上の一點と此平面より等距離にして反對側の點が必ず他半の上にあるとき、初めの二つの圖形又は後の圖形は平面對稱なりといふ。

(めん-だう)［面倒］（名）爲すに煩はしきヿ。行ふにいとはしきヿ。（煩厭）。**――くさ-し**（形、二）甚だ面倒なり。

艹**めん-だう**［馬道］（名）「めだう」に同じ。

(めん-だん)［面談］（名）會ひて直接に相談するヿ。

メンチ（名）（「イギリス」語 Mince の訛）西洋料理にて、細かく刻みたるものゝ稱。**――エキス**（名）「メンチ」の牛肉に卵をかけたる西洋料理。**――ビーフ**（名）馬鈴薯を擂(ス)りたる汁にて「メンチ」の牛肉を煮(ニ)たるもの。**――ボー**（名）牛肉と馬鈴薯とを搗(ツ)き合はせてあげたるもの。

(めん-ぢよ)［免除］（名）㊀ゆるしのぞくヿ。㊁義務を解きゆるすヿ。

(メンツウ)［面桶］（名）（宇の宋音）飯を一人前づゝ配る曲物(マゲモノ)。普通乞食の持つもの。

(めん-てい)［面體］（名）かほかたち。おもざし。面相。

(めん-てん)［綿天］（名）（綿天鵞絨の略）めん「ビロード」に同じ。

(めん-どう-くさい)［面倒臭］（形）めんだうくさし。

めん-どり［雌鳥］（名）㊀雌の鳥。㊁雌の鷄。**――すすめて をんどり ときを つぐ** 妻若しくは妾が其主人に或事をすゝむるにより、主人其氣になりて事を行ふにいふ。

めんどり-ば［雌鳥羽］（名）「めとりば」に同じ。

めん-ない-ちどり（名）（目無兒捉(メナシチドリ)の義）小兒の遊戯。めかくし。

(めん-ばう)［面貌］（名）おもざし。めんてい。

(めん-ばう)［麪包］（名）「パン」に同じ。

(めん-ばく)［面縛］（名）手を前面にしばるヿ。

(めん-ばん)［綿蠻］（名）鳥のさへづるヿ。

(めん-ばんしよ)［面番所］（名）見張の番所。

(めん-ぴ)［面皮］（名）世の人に對すべき顔。かほ。**――をかく** 面目をうしなふ。

(めん-ぴ)［免避］（名）のがれさくるヿ。

めん-ビロード［綿天鵞絨］（名）綿絲を用ひて織りたる天鵞絨(ビロード)。

(めん-ぶ)［面部］（名）かほ。顔面。

(めん-ぷ)［綿布］（名）綿絲にて織りたる織物。（綿花布、綿布）。

(めん-ぷく)［綿服］（名）綿布にて仕立てたる衣服。もめんぎもの。

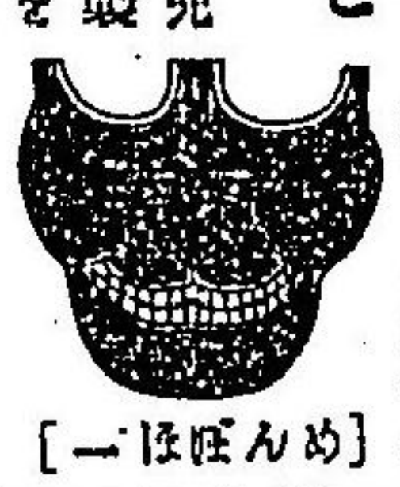
(めん-ぷん)［麪粉］（名）こむぎのこ。うどんこ。

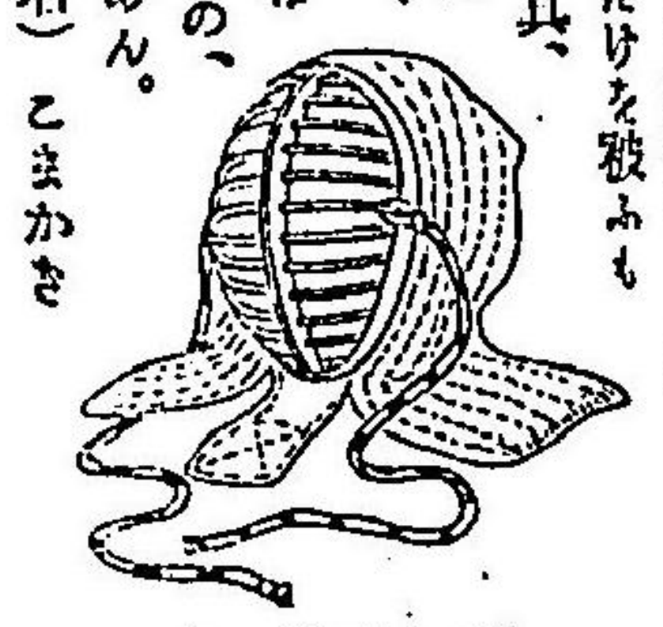
(めん-ぺき)［面壁］（名）（達磨の故事に出づ）壁に向ひての坐禪。「―九年なんざんす」。

(めん-ぼう)［麪棒］（名）饂飩などを押し延(ノ)ばすに用ふる棒。むぎおすぎ。

(めん-ぼく)［面目］（名）㊀かほかたち。かほつき。㊁ありさま。やうす。「――を改む」。㊂世の中に立ちて相當の地歩を占むるヿ。他よりいやしめられず又はわらはれざる程のさま。他人に對してはづかしからぬさま。めぼく。めいぼく。**――なし** 恥しくして人に對すべきやうなし。**――をうしなふ** 前條に同じ。**――をほどこす** ほまれを得。

めん-ぼほ［面頰］（名）㊀兜(カブト)の附屬具、鐵にて面の形に製し、顔にあつるもの、顔の全部を被ふものと、頰より下だけを被ふものとあり。㊁劍術の道具、面にあたる部分を鐵にて格子の如くにつくり、これに綿を入れたる布をつけてつくりたるもの、頭部と面部とを被ふ。めん。


［めんぼほ一］


［めんぼほ二］

(めん-みつ)［綿密］（名）こまかきヿ。密なるヿ。

(めん-めん)［面面］（名、副）めいめい。各々（各自）。

(めん-めん)［綿綿］（名、副）つゞきて絶えざるさまにいふ語。

(めん-もく)［面目］（名）「めんぼく」に同じ。

(めん-やう)［綿羊］（名）【動】「ひつじ」に同じ。

(めん-ゆ)［面諭］（名）眼前にて説諭するヿ。

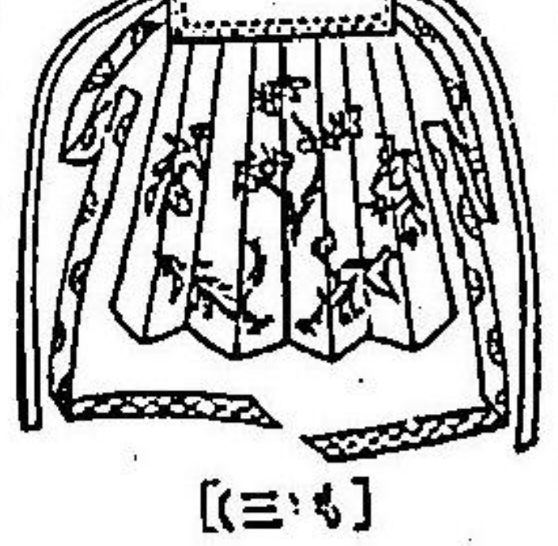
(めん-よう)［面容］（名）おもざし。めんてい。

めん-よう（名）不思議なるヿ。奇怪。

も

も 唇的鼻音M即ち兩唇を閉ぢ有聲の氣息を鼻腔に通ずれば生ずる音と、母音「お」との綴音。

も［裳］（名）㊀はかま。㊁男子裝束の時、袴の上より腰に纒ふ服。㊂女子裝束の時、袴の上より纒ふ服、腰裙(紕)ありて、後(ウシロ)に長く引く。


［も三］

も［喪］（名）㊀人死して其親族が若干日の間、遜ひに沈みて籠(コモ)り居るヿ、親疎によりて其期に長短あり。㊁艹わざはひ。凶事。

も［藻］（名）【植】水中に生活する植物の總稱。

も［亦］（助）同じさまなる物事を並べていふ語。「山――川――」。

艹**も**（感）まあ。よ。

(もー)（接頭）この上に。さらに。また。「――すこし」。

モーニング-コート［Morning-coat］（名）洋服の一種、「フロックコート」の前方のつま先を丸くとりたる如きもの。

モール［毛織］（名）もと「インド」國「モゴル」より輸出したる織物、緞子に似て浮織とせるもの、緯(ヨコ)に金絲を經(タテ)に絹絲を用ひたるを金「モール」といひ、緯に銀絲を經に絹絲を用ひたるを銀「モール」といふ、別に風通と稱するものあり、金銀線を用ひ花紋ありて金襴の如し。（回回織）。**――がは**［毛

織皮」(名) いんてん皮の類、厚くして皺あるもの。

も-いを[藻魚](名)【動】硬鱗類中もいを科に屬する魚、形めばるに似、稍や狹長にして鱗細かなり、尾・鰭ともに赤し、體長一尺に達するものあり。もうを。いそめばる。

(もう-い)[毛衣](名) 獸の毛皮にて仕立てたる衣服。

(もう-う)[濛雨](名) 空かきくもりてふりきる雨。

(もう-えい)[毛穎](名) 筆の異稱。

(もう-きさ)[濛氣差](名)【天】「たいきさ」(大氣差)に同じ。

(もう-くわん)[毛管](名) 「もうさいくわん」(毛細管)に同じ。

(もう-こ-くわん)[蒙古患](名) 「くわうくわ」(黄禍)に同じ。

(もう-こ-じん-しゆ)[蒙古人種](名) 「くわうしよくじんしゆ」(黄色人種)に同じ。

(もう-さい-くわん)[毛細管](名) ㊀細かき管。㊁【生】血管の細枝の更に分岐したる細きもの。――いんりよく[毛細管引力](名)【理】毛細管現象を生ずる引力。――げんしやう[毛細管現象](名)【理】細き管を液中に沈むるとき、液若し管を濡すときは液は管中高く上り、液若し管を濡さゞるときは管中の液面陷没する現象、例へば細き管を水中に入るゝときは、水、管中に上れども、水銀中に入るゝときは、管中の水銀面は陷没するが如し。

(もう-ざう)[夢想](名) ㊀思ひ煩ひて夢見ること。㊁「ゐせい」(遊精)に同じ。

(もう-すゐ-し)[毛錐子](名) 筆の異稱。

(もう-せん)[毛氈](名) 毛と綿とを交へ、壓しかためて製したるもの、敷物とす。――ごけ[毛氈苔](名)【植】茅膏菜科に屬する草、沼地に自生す、

葉は圓形にして長き葉柄を有し、其腹毛突起よりて小蟲を捕獲してこれを養料とす。

(もう-ぞく)[毛族](名) けだもの。

(もう-ぢん)[蒙塵](名) 天子の難に遇ひて漂泊したまふこと。

(もう-とう)[毛頭](副) 毛のさき程も。すこしも。

(もう-どう)[艨艟](名) いくさぶね。戰艦。

(もう-はつ)[毛髮](名) かみのけ。――しつどけい[毛髮濕度計](名) 毛髮の濕氣を受くるときは延び、乾くときは縮む特性を利用したる濕度計。

(もう-ひつ)[毛筆](名) 獸毛にて穗をつくりたる筆、即ち我國在來の筆。――ぐわ[毛筆畫](名) 毛筆を使用して描(ヱガ)く畫、我國在來の畫の如きこれなり。

(もう-ふ)[毛布](名) 「ブランケット」「ケット」。

(もう-まい)[蒙昧](名) 知識開けざること。物事にくらきこと。「―の世」(未開)。

(もう-めい)[濛溟](名) 空(ソラ)のかきくもりてくらきこと。

(もう-もう)[濛濛](名、副) 霧又は雨などにて薄暗きさまにいふ語。

(もう-ろう)[朦朧](名) ㊀おぼろに暗きさまにいふ語。㊁貧乏となりてこまるさまにいふ語。(東京の方言)。――ぐみ[朦朧組](名) 朦朧車夫のなかま。――しやふ[朦朧車夫](名) 人を見掛けて法外の酒手(サカテ)を強請する無頼の車夫、多く遊郭界隈にゐる。(東京の方言)。――たい[朦朧體](名) 詩文などの意義の明瞭ならざるもの、又、繪畫の輪郭の明かならざるもの。

も-うを[藻魚](名)【動】「もいを」に同じ。

もえ-あが・る(ら、り、る、る、れ、れ)[燃上](自、ら四) もえてほのほ高くあがる。

もえ-い・づ(で、で、づ、づる、づれ、でよ)[萌出](自、た下二) めぐむ。生ず。

もえ-い・づ(で、で、づ、づる、づれ、でよ)[燃出](自、た下二) もえて外へ出づ。

もえ-がら[燃殼](名) もえつくして後にのこりたるから。

もえ-ぎ[萌木](名) 芽の出でたる木。

もえ-ぎ[萌葱](名) ㊀葱(キ)の萌えたる色。黄と青との間色。もよぎ。㊁かさねの色目、表は薄青にして裏は縹(ハナ)色なるもの。(萌黄)。――いろ[萌葱色](名) 前條(一)に同じ。――にほひ[萌黄匂](名) 萌黄の絲にておどしたる鎧。

廿もえ-こが・る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[燃焦](自、ら下二) いたくこがれ思ふ。

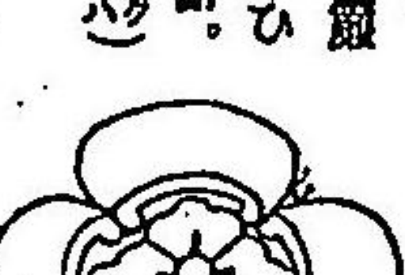
もえ-さし[燃差](名) もえはてずして殘りたるもの。もえぐひ。(燼)。

もえ-た・つ(た、ち、つ、つ、て、て)[燃立](自、た四) さかんに燃ゆ。

もえ-のこり[燃殘](名) 「もえさし」に同じ。

〔もえる〕[燃](自) 「もゆ」の訛。

も-かう[帽額](名) ㊀御簾の上邊を覆ひ垂るゝ布、みづひきの帶の如きものなりといふ。「―のきぬ荒々しく」。㊁窠(クワ)の紋。



[もかう(二)]

も-が・く(か、き、く、く、け、け)[踠](自、か四) ㊀いらち、又はくるしみて、さま〴〵に手足を動かす。あがく。(悶躁)。㊁やっ氣となりていらちはたらく。

廿も-がさ[痘瘡](名) てんねんとう。はうさう。

もがり[虎落](名) (「まがり」の轉) ㊀枝のある竹を列ね立てゝ物を掛くるもの。㊁さくがき。矢來。

㊂紺屋の高き乾場。――だけ[虎落竹](名) もがりに用ふる竹。

廿も-ぎ[裳着](名) 古昔、女子の生長して、始めて裳を著たりしこと。又、其式。

(も-ぎ)[摸擬](名) 眞似すること。にせかたどること。

廿もぎ-き[禿木](名) 枝をもぎとりたる木。禿樹。

〔もぎどう-に〕(副) あら〳〵しく、むごく。

も-ぎぬ[喪服](名) もふく。

もぎ・る(ら、り、る、る、れ、れ)(他、ら四) もぎとる。もぎきる。

(もく)[木](名) ㊀き。樹木。㊁もくめ。木理。

(もく)[目](名) ㊀きめ。すぢ。㊁かど。條項。㊂こわけ。細別。㊃となへ。稱號。㊄しなさだめ。品隲。㊅だい。表題。㊆國司の主典。㊇【動】動物の分類上、綱を分けたるもの、更にこれを分ちて科となす。㊈豫算の編制上、款項の區別、彼此流用し得らるゝもの。

(―もく)[目](接尾) 碁盤の目を數ふるにいふ語。「一五―」。

も・ぐ(が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ)[捥](他、か四) ねぢて引き取る。(捩)。

(もく-えう)[木曜](名) 七曜の一、日曜より五日目の日。――じつ[木曜日](名) 前條に同じ。――び[木曜日](名) 前條に同じ。

(もく-か)[目下](名、副) まのあたり。たゞいま。さしかゝり。

もく-かう[木瓜](名) ㊀「もかう」(二)に同じ。㊁【植】虎耳草科に屬する植物、花瓣は白色にして淡紅色を帶び厚くして肉質あり、觀賞用として栽培せらる。

(もく-ぎう)[木牛](名) 蜀の諸葛亮が木にて牛の形をつくり、上に荷物を載(ノ)せてひきゆきたりといふもの。

(もく-きよ)[默許](名) ㊀許すと明言せざれ

ど、とがめずして其まゝにさせすること。㊁知らぬふりして許しおくこと。めこぼし。

(もく-ぎよ)[木魚](名) ㊀寺にて、讀經の時に叩(タタ)きて鳴らす具、木にて造り中空にして横に細長き孔を穿ち、表に魚鱗を彫(ホ)る。㊁身もち女のふくれたる腹をあざけりていふ語。――かう[木魚講](名) ㊀多人數あつまり木魚を叩きて讀經などすること。㊁【俗】輪姦。ねんブツかう。

(もく-きん)[木琴](名) 一種の樂器、一方狹くして他方に至るに從ひて開きたる匣の上に、厚薄其度を異にする幅狹き板を順序よく亙(ワタ)したるもの、叩(タタ)きて高低相異せる音を發せしむ。

(もく-ぐう)[木偶](名) 木にてつくりたる人形。――じん[木偶人](名) 前條に同じ。

(もく-くわん)[木環](名) 木をくりてつくりたる環。

(もく-けい)[默契](名) 暗默の間に互の意思が一致すること。

(もく-げき)[目擊](名) 確かに目にて見とること。しかとみとむること。

(もく-げん-じ)[木患子](名)【植】「むくろじ」に同じ。

(もく-げん-じ)[木欒子](名)【植】木患子科に屬する木、葉は羽狀複葉にして小葉は缺刻及鋸齒を有す、花は黄色小形にして圓錐花序に排列す。(欒樹)。

(もく-ご)[目語](名) 互に目づかひにて意思を通じあふこと。

(もく-こく)[木斛](名)【植】山茶科に屬する木、葉は全邊にして常綠なり、花は白色にして長き柄を有し、夏の頃開く、果實は熟すれば四裂す、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に、樹皮は染料に供せらる。(厚皮香)。

(もく-こん)[目今](名、副) たゞいま。いま。(目下、方今)。

(もく-ざ)[默坐](名) 無言にして坐すること。

も-ぐさ[艾](名) (燃え草の略) よもぎの葉より製したる綿の如きもの、これに火を點じて灸治す。

(もく-ざい)[木材](名) 木をきりて諸種の用とするもの。

(もく-ざう)[木像](名) ㊀木造の像。㊁でくのばう。

(もく-ざう)[木造](名) 木にて造ること。又、其造りたるもの。「―建家」。

(もく-さん)[目算](名) ㊀めぶんりやう。みつもり。㊁あらかじめ想像したる計畫。

(もく-し)[目視](名) 見ること。

(もく-し)[目眦](名) めじり。まなじり。

(もく-し)[默視](名) もだしつゝ見てゐること。

(もく-し)[默止](名) なすがまゝに默してすておくこと。干涉せざること。

(もく-し)[默示](名) ㊀直接に明言せざれど間接に其意思をしめすこと。㊁「けいじ」(啓示)に同じ。

(もく-じ)[目次](名) ㊀細別又は個條若しくは題目の順序。㊁書籍のはじめにつくる目安がき。

(もく-しき)[默識](名) 問ひ又は論ぜずして、心によく理會すること。――しんつう[默識心通](名) 其事を以心傳心に明かにさとること。

(もく-じき)[木食](名) 果實などを食として命を繫(ツナ)ぐこと。

(もく-しゆく)[苜蓿](名)【植】「うまごやし」に同じ。

もく・す(せ、し、す、する、すれ、せよ)[默](自、さ變) もだす。だまる。

(もく-せい)[木犀](名)【植】木犀科に屬する木、葉は常綠にして對生す、花は小形にして芳香を有し黄色若しくは白色を呈す、秋の頃、葉腋に叢生す、觀賞用として栽培せらる。(九里香、桂樹)。

(もくせい【木精】(名)【化】「メチルアルコホル」に同じ。

(もくせい【木星】(名)【天】遊星の最大なるもの、平均直徑は三萬六千里にして、體積は地球の約一千三百倍なり、密度は地球より小にして質量は地球の三百十三倍なり、太陽よりの平均距離は二億〇百萬里にして十一年と三一四・八日にて太陽を一週す、五個の衛星を有す。

(もくせい【木製】(名) 木にてつくるヿ、又、其つくりたるもの。

(もくせう【目笑】(名) 目もとに笑ふ意のあらはるゝヿ。

(もくぜん【默然】(名、副) 口をつぐみてもだせるさまにいふ語。もくねん。

(もくぜん【目前】(名、副) まのあたり。めのまへ。

(もくそう【目送】(名) 其もの、行くを目を離さず見てゐるヿ。みおくるヿ。

(もくそく【目測】(名) 目分量にて距離などを計るヿ。

もくタール【木參兒=Wood tar】(名) 木材を乾溜して生ずるタール、防腐劑等に用ふ。

(もくだい【目代】(名) 古昔、國守の赴任せざるとき、代理となりて其任國に赴き其事務を取扱ひしもの。かんだい。めだい。

(もくだく【默諾】(名) 默示によりてなす承諾。

(もくたん【木炭】(名) ㊀木を蒸燒にしたる燃料、卽ち、すみ。㊁又、專ら下繪を畫くに用ふる細く柔かき木炭。

もくづ【藻屑】(名) 海中に存する藻などのくづ。水中のごみ。——び【藻屑火】(名) もくづをたく火。

廿もくてう【木鳥】(名) 古昔の官名、春宮(トウグウ)の舍人(トネリ)にして衛門の尉を兼ねしもの。

(もくてき【目的】(名) 到達せんと欲する標的。遂行し實現せんとする結果。めざす所。こゝろざす所。めあて。めど。——ぶつ【目的物】(名) 或行爲の目的となる物。——ろん【目的論=Teleology】(名) ㊀【哲】宇宙を有意的に解釋し、事物はすべて何等かの目的を有すとなす說。㊁【倫】善惡の判斷を、行爲及意向の性質が人生の最高目的に到達すべき傾向を有するか否かによりてなす說。

(もくと【目途】(名) あてど。めあて。

(もくにん【默認】(名) 「もくきよ」に同じ。

(もくねん【默然】(名、副) ㊀「もくぜん」に同じ。㊁言はずなさずぼんやりしてゐるさまにいふ語。

(もくば【木馬】(名) ㊀木造の馬。㊁器械體操の用具、ほゞ馬の狀をなす、かけよりて身を躍らせ、其上に手をつきて飛び超(コ)ゆるもの。

(もくはい【木杯】(名) 木製のさかづき。

(もくはん【木版】(名) 木にほりたる版。——や【木版屋】(名) 木版をほるを業とする人。

(もくひ【默祕】(名) 祕していはざるヿ。

(もくひつ【木筆】(名) 鉛筆。

(もくふよう【木芙蓉】(名)【植】「ふよう」(芙蓉)に同じ。

(もくへん【木片】(名) きのきれ。きゞれ。

もくめ【木目】(名) 材木の面にあらはれたるあや。きめ。木理。

(もくもく【默默】(名、副) もだし居るさまにいふ語。

(もくよく【沐浴】(名) 髮を洗ひ身を洗ふヿ。ゆあみするヿ。

〔もぐらもち【鼴鼠】(名)【動】「むぐらもち」に同じ。

廿もくらん【木蘭】(名) ㊀【植】「もくれん」(木蓮)に同じ。㊁「もくらん色」の略言。㊂經(テク)黑く緯(ヨコ)黄なる織色。——いろ【木蘭色】(名) 黄・紅・赤の雜色。きつるばみ。(壞色)。

もぐり【潛】(名) ㊀もぐるヿ。㊁「もぐりだいげん」の略。——だいげん【潛代言】(名) 「さんびやくだいげん」(三百代言)に同じ。

もぐ・る【潛】(自、ら四) ㊀水中にくゞり入る。かづく。㊁ものゝ下にかくれこむ。㊂ひそかに行ふ。ゆるしを受けずしてなすヿ。

(もくれい【默禮】(名) 言を發せずたゞ敬禮するヿ。

(もくれい【目禮】(名) 目つきにて會釋するヿ。

(もくれう【木工寮】(名) こだくみのつかさ。

(もくれん【木蓮】(名)【植】木蘭科に屬する木、葉は倒卵狀にして柿の葉に似、綠色にして光澤あり、落葉す、花は四月頃葉に先って開く、大形にして通常六瓣あり、紫色若しくは白色を呈し美麗なり、其蓮花に似たるより此名あり、觀賞用として栽培せらる。(木蘭)。

(もくれんじ【木欒子】(名)【植】「もくげんじ」に同じ。

(もくろく【目錄】(名) ㊀書中の題目を集め記したるもの。㊁進物の品々の名を記るしたるもの。㊂師より弟子に藝術を傳ふる階級の名目、其初級のもの。㊃ものに包みて人に贈り與(ア)る金圓。——がき【目錄書】(名) 目錄を記るしたるもの。

もくろみ【目論】(名) もくろむヿ。事をくはだてなすヿ。設計するヿ。——がき【目論書】(名) 目論見の次第をかきしたゝめたる文書。

もくろ・む【目論】(他、ま四) たくむ。くはだつ。設計す。

廿もけ【木瓜】(名)【植】「ぼけ」に同じ。

(もこ【模糊】(名) さはやかならぬさま。

モザイック【Mosaic】(名) 着色したる大理石又は

行く。のたくる。(委蛇)。

(もざう【模造】(名) まねて造るヿ。にせてつくるヿ。又、其もの。——ひん【模造品】(名) 模造したる品。

(もさく【摸索】(名) てさぐり。「暗中——」。

廿もし・し【茂】(形、二) しげし。(繁)。

〔もし【若】(副) 假りに。ひよっと。あるひは。

(もし(感) 人を呼ぶ時の掛聲。「——もし」。

(もじ【文字】(名) ㊀もん字。字。㊁ことば。㊂有益の文章。㊃學問。㊄錢面の字のある方。

〔もしか【若】(副) 「もし」に同じ。

もじぐさり【文字鎖】(名) 今樣歌の一種、前の句の終はりの文字を次の句の首にして綴(ツヅ)るもの。

もしくは【若】(接) さもなければ。それでなければ。あるひは。または。

もしそれ【若夫】(接) 端を改めて傍の物事を說き起こすときに用ふる語。(多く漢文に用ふ)。

もしほ【藻汐】(名) 海藻に幾度も汐水を注ぎかけて鹽分を多く含ませ、これを燒きて水に溶(ト)かし、其上澄(ウハズミ)を煮つめて採りたる鹽。(藻鹽)。——ぎ【藻汐木】(名) 藻汐を燒く薪。——ぐさ【藻汐草】(名) ㊀もしほを採るに用ふる海草。㊁轉じて。海草の總稱。㊂物を書き集むるヿ。

もしも【若】(副) 「もし」に同じ。

〔もしもし(名) よたか。蚊母鳥。

〔もしもし(感) 「もし」を重ねたる掛聲。

もしや【若】(副) 「もし」に同じ。

もじよみ【文字讀】(名) 漢名を直譯的に訓讀するヿ、蓬萊を「よもぎがしま」といふ類。

もす【燃】(他、さ四) もやす。たく。

もず【百舌】(名)【動】燕雀類中もず科に屬する鳥、形つぐみより小なり、頭部背部は黄褐色にして胸部は白色、腹部は黄赤色にして黑色の橫斑あり、上嘴は鉤狀をなして尖(ト)り、其側縁に齒狀の缺刻あり、蟲をとりて食ふ。(伯勞)。

もすそ【裳裾】(名) ㊀裳のすそ。㊁衣のすそ。(裳)。

モスリン【Muslin】(名) 「メリンス」に同じ。

廿もそろ【醪】(名) 酒の類。

廿もそろもそろ-に(副) そろ〳〵。ぞろ〳〵。

廿もだ【默】(名) だまるヿ。

もだえ【悶】(名) もだゆるヿ。

もた・ぐ【擡】(他、か下二) 持ち上ぐ。

もた・す【持】(他、さ下二) ㊀持ちてあらしむ。㊁持ち來らしむ。持ち行かす。㊂支へしむ。保たしむ。㊃たてかく。よせかく。(靠)。

もだ・す【默】(自、さ四) ㊀口をつぐみて言はず。㊁其儘にしておく。「君命もだし難く」。

もたせ【持】(名) もたすヿ。——か・く【持掛】(他、か下二) たてかく。よせかく。——かける(他) 「もたせかく」の訛。——る【持】(他) 「もたす」の訛。

廿もたひ【甕】(名) 酒を入るゝかめ。

もだ・ふ【悶】(自、は下二) おもひなやむ。わづらひくるしむ。心かきみだる。(煩悶)。

もだへ【悶】(名) もだふるヿ。又、もだふる思ひ。はんもん。

もだま【藻玉】(名) 熱帶地方に產する或植物の實、形あけびに似て、圓く扁(ヒラ)くして栗色をなす、根附などにす。

もだま【鮀魚】(名)【動】板鰓類中鮫類に屬する魚、吻端尖(トガ)りて長くのび、腹部のみ白色にして他は淡灰色なり、長さ丈餘に達す、我國にては西南海又は東北海等に多く產す、おほふか。

もだ・ゆ【悶】(自、や下二) 「もだふ」に同じ。

もたら・す【齎】(他、さ四) ㊀持ちて行く。㊁持ちて來る。

廿もたり【持】(他、ら變) 持ちてあり。

もた・る【靠】(自、ら下二) ㊀よりかゝる。㊁食物胃に停滯す。

もち【糯】(名)【植】稻・粟・黍等の種子の粘氣多くして搗(ツ)きて餅となし得るものゝ稱。もちごめ。

もち【餅】(名) (「もちひ」の略) 糯米を蒸し、これを搗(ツ)きつぶしたるもの、煮又は燒きて食ふ。——はもちや　專業のものは其物事につきて衆人の及ぶべからざる特長あるにもいふ。又、人は境遇相當の事以上の出來ざるにもいふ。

もち【持】(名) ㊀さゝへたもつヿ。㊁ながく其さまをつゞくるヿ。㊂所有するヿ。㊃うけもち。擔任。㊄歌合などにて互に勝負無きヿ。わけ。

もち【黐】(名) ㊀【植】「もちのき」に同じ。㊁とりもちの木の皮を煮て製したる粘(ネバ)り強きもの、鳥などをとるに用ふ。(黏)。

もち【望】(名) ㊀「もちづき」に同じ。㊁陰曆にて月の十五日の稱。

——もち【匁】(接尾) 綿の量にて二斤又は六兩の稱。

もぢ【錑】(名) 「もぢり」に同じ。

もぢ【綟】(名) 麻絲にて目を粗(アラ)く織りたる布。

もちあ・ぐ【持上】(他、か下二) ㊀もたぐ。高くあぐ。あげ起こす。㊁みだりに稱揚す。ほめおだつ。

〔もちあげる(他) 「もちあぐ」に同じ。

もちあそび【玩弄】(名) ㊀もてあそぶヿ。㊁もてあそぶもの。もちや。

もちあは【糯粟】(名) 種子の粘氣ある粟。

もち-あは-す[持合](他、さ下二) 所持せり。ちやうど持ちてあり。

もち-あはせ[持合](名) もちあはすこと。又、もちあはすもの。

もち-あ-ふ[持合](自、は四) 雙方互につりあひを保つ。

もち-あみ[餅網](名) ❶餅を入れてつるしおく網。❷火の上におきて餅を燒くかな網。

廿**もち-いひ**[餅飯](名) 「もち」に同じ。

もち-かた[持方](名) 「もち(二)」に同じ。

廿**もち-がゆ**[望粥](名) あづきがゆ。

もち-きび[糯黍](名) 黍の種子の粘氣あるもの。

もち-ぐさ[餅草](名) 蓬(ヨモギ)の嫩葉の稱、餅に交ぜて搗(ツ)くよりいふ。

〔**もち-ぐされ**[持腐](名) 所持してゐながら遂にこれを使用し得ざること。

もち-ぐわし[餅菓子](名) 餅を原料としたる菓子。

もち-こ-す[持越](他、さ四) ❶强して次へ送る。❷其まゝにて次へ致す。❸食物胃にもたる。

もち-こた-ふ[持堪](他、は下二) さゝへたもつ。ふみこたふ。

もち-こたへ[持堪](名) もちこたふること。もち。もちかた。

もち-こみ[持込](名) もちこむこと。――**ちん**[持込賃](名) 持込したる賃錢。

もち-こ-む[持込](他、ま四) ❶貨物を送り入る。❷事件を話し掛く。

もち-ごめ[糯](名) 粘氣(ネバ)多き米。

もち-ざを[黐竿](名) 鳥を刺すために黐をぬりたる竹の竿。さいとりざを。

もち-しほ[望潮](名) 陰曆十五日の潮、此日潮汐も高し。

もぢ-ずり[捩摺](名) ❶「しのぶずり」に同じ。❷【植】「もぢずりぐさ」の略言。――**ぐさ**[捩摺草](名)【植】蘭科に屬する草、葉は稻の苗に似、夏の頃、穗狀淡紅色の花を開く。ねぢばな。(綬草)。

もち-だし[持出](名) もちだすこと。

もち-だ-す[持出](自、さ四) ❶內のものを外へ出す。❷言ひ出す。「議論をー」。❸訴へ出づ。❹互に分擔して出す。

もち-つき[餅搗](名) 餅を搗(ツ)くこと。

もち-づき[望月](名) 陰曆十五夜の月、滿月。

もち-つゝじ[羊躑躅](名) ❶【植】つゝじの一種、花は淡紫色なり。いはつゝじ。(羊不食、躑羊花)。❷かさねの色目、表は紫にして裏は紅なるもの。

もち-なは[黐繩](名) 黐を塗りたる繩、張りて鳥を捕ふるもの。

〔**もち-にげ**[持逃](名) 預り置きたる他人の品物を持ちて逃亡すること。(拐帶)。

もち-ぬし[持主](名) 所有者。

もち-の-き[黐木](名)【植】冬青科に屬する木、葉は革質全邊にして常綠なり、花は黃綠色を呈し數個簇生して各柄を具す、果實は圓形にして赤色なり、觀賞用として栽培せられ、樹皮より黐を製す。(細葉冬青)。

もち-ば[持場](名) ❶受持の場所。❷古有の場所。

もち-の-ひ[望日](名) 陰曆十五日の稱。

廿**もち-ひ**[餅](名) 「もちいひ」の略言。――**かがみ**[餅鏡](名) かゞみもち。

もちひ[用](名) ❶用ふること。❷用に立つこと。つかひみちあること。

もち-ふ[用](他、は上二) ❶持ちてはたらかす。つかふ。❷用立につ。❸職務を授く。登庸す。❹採用す。取り上ぐ。

廿**もち-ぶ**[持夫](名) 荷物を持つ人夫。

廿**もぢ-ふ**[捩](他、は下二) もぢる。

もち-ぶん[持分](名)【法】共有の物件又は權利につき、各共有者の有する權利の部分。

もち-まへ[持前](名) ❶其身に固有せる狀態、うまれつき。たち。(本色、眞面目)。❷所有の範圍。

もぢ-もぢ(名、副) 臆してためらふさまにいふ語。

もち-もの[持物](名) たづさへもつもの。

もち-や[餅屋](名) 餅をうる人又は家。

〔**もち-やげる**(他) 「もちあぐ」の訛。

廿**もぢ-ゆ**[捩](他、や下二) もぢる。

もち-ゆり[喪中](名) 喪にこもる期間。

もぢり[捩](名) 「そでがらみ」(二)に同じ。

もぢ-る[捩](他、ら四) ❶ねぢりもとらす。ねぢ。よぢる。❷他の語の口調に似せていふ。

(**もち-ろん**[勿論](副) 言ふに及ばず、いふまでもなく。無論。

もちゐ[用](名) 「もちひ」に同じ。

もちゐ-る[用](他、わ上二) 「もちふ」に同じ。

も-つ[持](他、た四) ❶手に執(ト)る。とる。❷もちふ。(以)。❸自己の有となす。所有す。❹まもる。たもつ。❺受持つ。擔當す。

も-つ[持](自、た四) 久しく堪(タ)ふ。永く其さまにてあり。

もっ-かう[木瓜](名) 「もかう」に同じ。

も-づく[水雲](名)【植】褐色藻に屬する海藻、細くして絲狀をなす、蒼黑色にして滑かなり、酢などをかけて食ふ。(海蘊)。

〔**もっ-け**[勿怪](名) 思ひ設けぬこと。――**の-さいはひ**[勿怪幸](名) 思ひ設けぬ幸。こぼれざいはひ。

もっ-こ[畚](名) (持籠の音便) 莚席の四隅に綱をつけ土芥などを運ぶ具。

(**もっ-さう**[物相](名) 飯を盛りて人別に供する器、一合又は二三合入りのもの。――**はん**[物相飯](名) 次條に同じ。――**めし**[物相飯](名) もっさうに盛りたる飯。

(**もっ-しゅ**[沒收](名) ❶「ぼっしう」に同じ。❷闕所(ケッショ)。

(**もっ-しょく-し**[沒食子](名) 「ふし」(五倍子)に同じ。――**さん**[沒食子酸](名)【化】「タンニン」を稀薄なる酸液に煮て得る針狀の結晶體。天然には五倍子・茶及其他の植物中に存在す。

(**もっ-たい**[物體](名) 物々しきこと。おも〳〵しきこと。(勿體)。――**つ-ける**[物體附](自、か下二) 物體らしく見す。物體ぶる。――**な-し**(形、二) 畏れ多し。かたじけなし。――**ら-し**[物體](形、二) おも〳〵しく見ゆ。おも〳〵しくあり。

もっ-て[以](接) ❶其力に因りて。其ために。❷其上に。かつ。――**の-ほか**[以外](名) おもひのほか。意外。

〔**もっ-そ**(副) 其上に。更に。

もっ-とも[最](名) (次條の轉) 道理至極なること。「ーの次第」。

もっ-とも[最](副) (「もとも」の音便) 第一に勝れて、ぬきいでて。

もっ-とも[尤](接) たゞし。はたまた。

(**もつ-にふ**[沒入](名) 「ぼつにふ」に同じ。

もっ-ぱら[專](名、副) 其事ばかり。もはら。一向。一途。

(**もつ-やく**[沒藥](名) 熱帶地方に產する樹の分泌液より製したる藥、味苦(ニガ)く臭烈し、外傷の藥劑として用ひらる。

もつ-る[縺](自、ら下二) ❶むすぼれて解けず。まじりからまりて離れず。「絲ー」。❷入り亂れて治まらず。「事ー」。❸紛(マギ)れくるひてはっきりせず。「舌ー」。

もつれ[縺](名) ❶もつるゝこと。❷ごた〳〵。もめ。

もて[持、以](他) 「もちて」の略言。

もて-[持、以](接頭) 動詞に冠する意味なき語。「ーひがむ」。「ーはなる」。

もて-あそび[玩](名) もてあそぶこと、又、もてあそぶもの。(弄、翫)――**もの**[玩物](名) もてあそびするもの。おもちや。

もて-あそ-ぶ[玩、弄、翫](他、は四) ❶手に持ち遊ぶ。❷慰み愛す。❸自由にあつかふ。❹なぶる。ひやかす。

もて-あまし[持餘](名) もてあますこと。――**もの**[持餘物](名) もてあます品物。――**もの**[持餘者](名) もてあまさるゝ人。

もて-あま-す[持餘](他、さ四) 扱ひにくゝして困却す。處置になやむ。手にあます。

廿**もて-つ-く-る**[持附](他、か下二) とりつくろふ。もてなす。

もて-なし[持成](名) ❶とりなし。とりつくろひ。❷あつかひ。あへしらひ。❸ふるまひ。ちそう。

もて-な-す[持成](他、さ四) ❶とりあつかふ。あへしらふ。❷とりたす。❸ふるまふ。馳走す。

もて-なやみ[持惱](名) もてなやむこと。

もて-なや-む[持惱](他、ま四) もてあます。

もて-はや-す[持映](他、さ四) はえあるやうにもてなす。ほめはやす。たゝふ。

〔**も-てる**[持](自、た下一) 好遇せらる。

モデル[Model](名) かた。模型。手本。

も-と[元、本、原](名) (根處(トコ)の意) ❶はじまり。おこり。❷もと。ね。❸もとゐ。よりどころ。❹おも。かなめ。❺和歌の上の句。❻さけのもと。酒母。❼もとで。資本。❽もとね。原價。❾みなもと。水源。❿しろ。原料。

もと[下](名) (本の義) ❶根の際。❷かたはら。そば。❸しも。下部。❹のち。後世。「千載のー」。

もと[許](名) ところ。がり。

もと[舊](名) むかし。はじめ。以前。

もと[元、素、故、舊](副) さきに。いぜんに。かつて。最初。

――**もと**[本](接尾) 草木の株を數ふるにいふ語。

廿**もと-あら**[本荒](名) 發生したる草の根の方のまばらなること。「ーの萩」。

もど-か-し[遲緩](形、二) ❶廿もどくべし。批難すべし。❷はかどらずして心いら〳〵し。思ふやうにならずして心いらだゝし、じれったし。

廿**もと-がしは**[故葉](名) ❶去年の葉。❷舊くて本なるもの。

もと-かた[本方](名) ❶もとの方。❷おろしや。問屋。

もと-き[本木](名) ❶散りたる花又は葉などに對して、もとの木の稱。❷はじめの情人。

もどき[抵牾](名) ❶もどくこと。❷それに似すること。まぬること。「雁ー」。

もと-きん[元金](名) ❶貸金の元金。❷もとで。資本。

廿**もど-く**[抵牾](他、か四) さからひて批難す。たがひて論難す。

もと-ごめ[元込](名) 彈丸を火門より込むるこしらへの銃砲、即ち後裝銃及後裝砲の稱。

もとじめ［元締］（名）勘定などの占めくゝりをする役。
もど・すさしすせせ［戻］（他、さ四）㊀故(モト)へ返す。はじめに返す。かへす。㊁反吐(ヘド)をつく。
廿**もとだち**［本立］（名）草木の根本の生(オ)ひたち。草木の根ざし。
もとだね［原種］（名）たね。もと。
（**もとちやう**）［元帳］（名）各口座を分けてそれ〴〵記入する帳簿。原簿。
廿**もとづ・く**かきくくけけ［本、基］（自、か四）もとゝしてはじまる。もとゝしておこる。基因す。
廿**もとつひと**［舊人］（名）もとのひと。
廿**もとつめ**［本妻］（名）むかひめ。ほんさい。
廿**もとつめ**［舊妻］（名）昔のつま。
もとで［元手］（名）商業を營むために要する基本のかね。もときん。資本。
もとどり［髻］（名）髮を頭上に集めて束ねたる處。たぶさ。
もとね［元直］（名）商品を買ひ入れたるねだん。（元價）。
もとのもくあみ（名）（昔時盲人木阿彌の音聲、筒井順昭に似たるがため、順昭の喪を祕せる間、閨中に置きて其代とせしが、既にこれを發表せし後は、又、もとの木阿彌となれるよりいふ）再び以前のさまに立ち歸りて更にはえなきこと。
もとぶね［本船］（名）おやぶね。
廿**もとほ・す**さしすせせ［回］（他、さ四）めぐらす。まはす。
廿**もとほり**［回］（名）㊀もとほると。（徘徊）。㊁まはり。めぐり。（周邊）。㊂[illegible]の脚の紐の金具。
廿**もとほ・る**らりるるれれ［回］（自、ら四）㊀めぐる。㊁まはる。㊂自由になる。
もとみや［本宮］（名）本社。

もと・むめめむむむれめよ［求］（他、ま下二）㊀さがす。たづぬ。（索）。㊁ほしがる。のぞむ。（欲）。㊂ねがふ。請ふ。（需）。㊃買ふ。あがなふ。
もとめ［求］（名）㊀もとむると。㊁あつらへ。注文。
もとも［最、尤］（副）もつとも。拔きんでゝ。
もともと［元元、素素］（副）最初より。元來。
もとゆひイユ［元結］（名）髻(モトドリ)を結ぶに用ふる細き條、古昔は麻絲又は組紐を用ひしが、後世は紙捻にて製す。――**きり**［元結切］（名）佛となると。出家すると。
もとより［固］（副）㊀はじめより。元來。（素）。㊁いふまでもなく。勿論。
もどり［戻］（名）㊀もどると。㊁かへりみち。歸路。㊂鉤の端に出でたるとがり、物を刺して引き懸くるためのもの。――**がけ**［戻掛］（名）我家にかへらんとする途次。――**みち**［戻路］（名）かへりみち。
もと・るらりるるれれ［戻］（自、ら四）そむく。さからふ。（悖）。
もど・るらりるるれれ［戻］（自、ら四）㊀あとにかへる。もとにかへる。㊁我家へかへる。（歸）。
廿**もどろ**［斑］（名）マダラ。
廿**もどろか・す**さしすせせ［斑］（他、さ四）もどろくやうにす。
廿**もどろ・く**かきくくけけ［斑］（自、か四）㊀斑(マダラ)になる。す。（文）。（文）。㊁みだる。まぎる。
もどろ・くけけくくるれけよ［斑］（他、か下二）まだらにす。
もとゐ［基］（名）（本居の義）㊀いしずゑ。どだい。（礎）。㊁物事の成立するよりどころ。
もなか［最中］（名）㊀まんなか。中央。㊁さいちゆう。たけなは。「秋の―」。㊂一種の菓子、餅を薄く燒きて皮とし、二片合はせて中に餡を込めたるもの形最中の月に似たる故に名づく。――**のつき**［最中月］（名）十五夜の月。

もぬ・くけけくくるれけよ［蛻］（自、か下二）（裳脱(モヌ)くの義）㊀蛇・蟬などが成長の時期に外皮を脱(ヌ)ぐ。㊁多くの中にて、すぐれていづ。ぬきんづ。
もぬけ［蛻］（名）㊀もぬけたるかは。ぬけがら。㊁ぬきんでたるもの。
モネー［Money］（名）かね。金錢。
もの［物］（名）㊀吾人の感官によりて感知し得べき有形及感官によりて感知せられずとも其存在を思惟し得らるゝ無形の總稱。㊁事。「―もふ」。㊂ものゝけ。邪鬼。――**たらぬ** 何となく十分ならぬやうに思はる。――**になる** やがて然るべき物事となる。役に立つものとなる。有望なり。――**もいひやうで かどが たつ** ことばのいひかた次第にて、左程になき事も不快に聞ゆ。――**をいふ** 言を發す。
もの［者］（名）人。「馬琴といふ―あり」。
もの（助）㊀下に「を」を添へて、斯くなしたらんにの意を表はす語。「來よといひなば歸りし―を」。㊁如何ともなし難き意を表はす語。「何といったって、濟んで爲まった―」。
廿**ものあげば**［物揚場］（名）船の荷物を岸に揚ぐる所。
ものあ・ししくしこしきけれ［物惡］（形、二）不便なり。
ものあたら・ししくしこしきけれ［物新］（形、二）あたらし。あらたなり。
ものあはせワセ［物合］（名）物を合せて優劣を競ふ游戲。
ものあひアイ［物間］（名）物と物との間。
ものあんじ［物案］（名）かんがへふさぐと。
廿**ものいらま**［物射馬］（名）やぶさめなどにならされたる馬。
ものいはひワイイ［物祝］（名）よろこびごと。いはひごと。

ものいひイイ［物言］（名）㊀ものを言ふと。言葉。㊁ことばたがひ。いひあひ。論爭。
ものい・ふウイ［はひふふへへ］［物言］（自、は四）ことばを發す。いふ。――**はな**［物言花］（名）「かいごのはな（解語花）」に同じ。
ものいみ［物忌］（名）㊀若干日の間、飲食行爲を愼み、身體を淨(キヨ)め不淨を避くると。きよめごと。㊁古昔、太白神(ヒトヒメグリ)天一神(ナカガミ)のふたがりの方をおかすを忌みて、其ふたがりのあくまで、家に籠(コモ)りて愼みしと。㊂古昔、物忌の標(シルシ)に、柳の木の札又は忍草に物忌と書き、これを冠又は簾などにかけしもの。
ものいり［物入］（名）㊀いりめ。いりか。（費用）。費耗。散財。㊁費用の入ると。
ものう・しくしこしきけれ［物憂］（形、二）心はれやかならず。氣すゝまず。不快なり。ものぐさし。たいぎなり。（懶）。
ものうり［物賣］（名）ものをうる人。
ものおき［物置］（名）「ものおきば」の略言。――**ば**［物置場］（名）薪炭其他いろ〳〵の雜具を入れおく處。なや。
ものおそれ［物怖］（名）物事によくおぢおそると。
ものおそろ・ししくしこしきけれ［物怖］（形、二）何となくおそろし。（恐）。
ものおぼえ［物覺］（名）心に物事を覺ゆると。記憶。
ものおほ・すオスオ［せせすするすれせよ］［物仰］（他、下二）仰す。いひつく。
ものおもは・しワシ［しくしこしきしけれ］［物思］（形、二）うれはし。
ものおもひモイオ［物思］（名）うれひおもふと。
ものおも・ふモウオ［はひふふへへ］［物思］（自、は四）うれひに沈む。ものあんじす。
ものかき［物書］（名）㊀文書・記錄などを司る役。かきやく。書記。右筆。㊁代書。

ものかくし［物隱］（名）物事をかくすと。
ものかげ［物蔭］（名）ものゝかげにて見えぬ處。
ものがしら［物頭］（名）武家にて弓組・鐵砲組などの足輕の隊長。ぶがしら。
ものがた・しくしこしきけれ［物堅］（形、一）物事つゝしみ深し。行跡みだりならず。謹直なり。
ものがたり［物語］（名）㊀ものがたると。はなし。談話。㊁物語を記したる草紙。「源氏―」。廿――**どころ**［物語所］（名）ものがたりする場所。談話室。廿――**ぶみ**［物語書］（名）「ものがたり」㊁に同じ。廿――**ゑ**［物語繪］（名）物語中の出來事を描(カ)きたる繪。
ものがた・るらりるるれれ［物語］（他、ら四）物事をかたる。はなしをなす。
ものがな・ししくしこしきしけれ［物悲］（形、二）何となく悲し。
廿**ものから**（助）（「ものながら」の略）ではあるが。なれど。さりながら。
ものぎき［物聞］（名）しのび。たんてい。
廿**ものぐさ**［物種］（名）ものゝたね。
ものぐさ［懶惰］（名）ものうがると。きぶさやうなると。又、其性質の人。「―太郎」。
ものぐさ・ししくしこしきけれ［懶惰］（形、二）ものうし。たいぎなり。きぶさやうなり。
ものぐるひグルイ［物狂］（名）きちがひ。狂氣。亂心。
ものぐるは・しグルワシ［しくしこしきしけれ］［物狂］（形、二）「ものぐるほし」に同じ。
ものぐるほ・しグルオシ［しくしこしきしけれ］［物狂］（形、二）狂したるさまなり。亂心のさまなり。
廿**ものげな・し**くしこしきけれ［物氣無］（形、一）これぞといふ程の事もなし。物々しからず。

ものごころ［物心］（名）世の中の情態のわかる心。よごゝろ。
ものごし［物越］（名）ものを隔てたると。
ものごと［物事］（名）ものとこと。もろ〳〵のもの。もろ〳〵のこと。
ものごのみ［物好］（名）ものずき。
ものさし［物差］（名）物にあてがひて、其長短を計る具、細長く作り、尺・寸・分等の目を盛る。かねざし・まがりざし・くぢらざし・ごふくざし等種々あり。（尺度）。
ものさだめ［物定］（名）しなさだめ。
ものさび・ししくしこしきしけれ［物寂］（形、二）何となくさびし。
ものさわが・ししくしこしきしけれ［物騷］（形、二）㊀やかまし。騷し。㊁世の中穩かならず。
廿**もの・し**しくしこしきしけれ［物］（形、二）物々しく厭はし。きらはし。「人に知られぬ人は、むじんなるこそよけれとて、―げにもおもはしたり」。
ものしらず［物不識］（名）物事に暗き人。知識なき人。
ものしり［物識］（名）物事をよく識(シ)りたる人。知識多き人。がくしや。（博識）。
もの・すせしすするすれせよ［物］（他、さ變）事を爲す。なす。
ものずき［物好］（名）特殊の事を好む性質。一風かはりたる事をすくくせ。又、其人（數奇）。
ものすご・しくしこしきけれ［物凄］（形、一）何となくすごし。
ものすさま・じじくじこじきじけれ［物凄］（形、二）何となくすさまじ。
ものだち［物斷］（名）㊀たちぬひ。裁縫。㊁たちものばうちやう。（裁刀）。――**がたな**［物斷刀］（名）前條㊁に同じ。
ものだね［物種］（名）ものゝもととなるもの。

ものちか・し（くしきけれ）［物近］（形、二）㊀物事ちかし。㊁そばちかし。㊂若たし。

ものつき［物憑］（名）ものゝけのつくと。又、それにつかれたる人。

廿**ものつけ**［物付］（名）右ほての右方の紐。

ものづつみ［物隱］（名）物事をつゝみかくしていはぬと。

ものとがめ［物咎］（名）咎立をなすと。

ものどほ・し（くしきけれ）［物遠］（形、二）㊀物事とほし。㊁おろそかなり。ゆるかせなり。㊂疎遠なり、うとし。㊃迂遠なり。まはりどほし。

ものどり［物取］（名）強盗又は追剝などの稱。

ものなり［物成］（名）土地の産物。

ものな・る（れれるるるれれよ）［物馴］（自、ら下二）物事に熟練す。なれる。て巧(ク)なり。

〔**ものなれる**（自）「ものなる」の訛。

ものにくみ［物惡］（名）何となくものごとをにくむと。

ものねたみ［物妬］（名）何となく物事をねたむと。

ものの（助）「ものから」に同じ。

もののあなた（名）㊀其物の彼方。㊁後の世。

もののきこえ［物聞］（名）世上の評判。

もののぐ［物具］（名）㊀調度。道具。㊁よろひ。

もののけ［物氣］（名）死靈・生靈などの祟ると。又、たゝりをなすといふ死靈・生靈など。（物怪）。

もののし［物師］（名）ものごとの師匠。

もののな［物名］（名）㊀物事の名稱。となへ。㊁和歌の一體、物の名を他にいひかけて詠(ヨ)むと、例へば「なかたまの木」をこめて「みよしのゝ吉野の瀧にうかび出づるあわをか珠の消ゆと見つらむ」と詠む類。かくしだい。

もののね［物音］（名）㊀もの、音。こゑ。㊁なりもの。音樂。

もののふ［武士］（名）いくさに出る職務のたけき人。ぶ志。さむらひ。（武夫）。――**の**［武夫］（枕）「氏」「いは」に冠らする詞。

廿**もののふし**［物節］（名）古昔、近衛の舍人の中にて東遊(アヅマアソビ)に達したる者の稱。

廿**もののべ**［物部］（名）上古、兵衛の一部の武士。

もののはづか・し（しくしきしけれ）［物恥］（形、二）きまりわるし。うらはづかし。

廿**ものはみ**［物食］（名）鳥のゑぶくろ。（膆）。

ものび［物日］（名）祝日又は祭日などすべて特殊の物ごとある日の稱。

ものふ・る（るりるるるれりよ）［物舊］（自、上二）くふるなる。

ものほし［物乾］（名）洗濯したる衣服などをほすと。又、其ために設けたる處。――**ざを**［物乾竿］（名）物をかけて乾すための竿。――**ば**［物乾場］（名）物を乾す處。

廿**ものまう**（モーマウ）（感）（物申すの轉）。他人の家にいたり案内を請ふ聲。「―案内まう」。

ものまうで（ウデ）［物詣］（名）神社又は佛閣にまうづると。さんけい。

廿**ものまさ**［尸者］（名）上古、弔(トム)ひに來たる人に死人の着る着物を着て會ひし人。

ものまなび［物學］（名）物事をまなぶと。學問。

ものまね［物眞似］（名）人畜、其他百般の聲音・風采などを眞似ると。

ものまへ（エマ）［物前］（名）或物事の到來に近づきたる時。

ものみ［物見］（名）㊀見物すると。遊觀。㊁貴人の邸にて、往來を見るために設けたる櫺。㊂敵軍の樣子を探りうかゞふと。又、其任にあたる人。（斥候）。㊃見張りて事のさまをうかゞふと、又其事にあたる人。㊄「ものみやぐら」の略言。廿――**ぐるま**［物見車］（名）見物に乘りて出づる車。――**だか・し**（くしきけれ）［物見高］（形、二）見るべき價値のなき物をもめづらしがりて見る。――**ぶね**［物見船］（名）見物のために乘る船。――**やぐら**［物見櫓］（名）遠望せんために設けたるやぐら。

廿**ものめか・し**（しくしきしけれ）（形、二）ものものしく見ゆ。

廿**ものめか・す**（さしすすせせ）（他、さ四）物々しく見ゆるやうにす。

ものめづら・し（しくしきしけれ）［物珍］（形、二）物事をめづらしがる。

ものもの・し（しくしきしけれ）［物物］（形、二）㊀いかめしく、立派なり。㊁をこがまし。ぎやうさんらし。

ものもらひ（ライモ）［物貰］（名）㊀かたゐ。乞食。㊁瞼(マブタ)に生ずる小さき腫物。

ものやはらか（カヤワ）［物柔］（名）志とやか。おだやか。

〔**ものよし**［癩病］（名）癩病の異稱。

ものわすれ［物忘］（名）物事をわするゝと。

廿**ものわび・し**（しくしきしけれ）［物侘］（形、二）物事わびしく感ぜらる。

ものわらひ（ワライ）［物笑］（名）世人のあざけり。わらひぐさ。

廿**ものゑんじ**［物怨］（名）うらむと。

ものをしみ［物惜］（名）ものををしむと。

廿**もは**［藻葉］（名）【植】「あまも」に同じ。

もはや［最早］（副）今となりては。すでに。もう。

もはら［專］（副）「もつぱら」に同じ。

〔**もはん**［模範］（名）ならひのつとるべきもの。のり。てはん。（軌範）。

廿**もひ**（イモ）［盌］（名）水を盛る器。

廿**もひ**（イモ）［水］（名）飲み水。――**とりのつかさ**［水取司］（名）「もんどのつかさ」に同じ。

廿**もふ**（ウモ）［思］（他、四）「おもふ」の略言。

モヘル［Mohair］（名）舶來の下等なる毛織物、毛を長く織出だす。（長羊毛毯）。

もまた［亦］（名）上を受けて、「これもまた」の意を表する漢字亦の字の稱。

もみ［籾］（名）㊀外皮を去らざる米。㊁米の外皮。もみがら。（糙、殼、稃）。

もみ［樅］（名）【植】松杉科に屬する木、幹は直立して蓋(カク)く、樹皮は初め灰白色なれど後に黑褐色となる、葉は細長く扁平にして四個の樹脂道を有し常綠なり、果實は毬果にして長楕圓狀卵形をなす、材質輕軟なれど廣く諸種の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。

もみ［紅］（名）紅染の無地の絹布。（絳絹）。

もみあげ［揉上］（名）鬢の毛の耳にそひてはえさがりたる處。

もみかは（ワーカ）［揉革］（名）「なしかは」に同じ。

もみがら［籾殼］（名）籾米の殼。あらかは。あらぬか、もみぬか。もみ。（殼皮、稃）。

もみくじ［揉鬮］（名）紙に事を記して拈(ヒネ)り無心に採(ト)りて占ふ鬮。ひねりぶみ。

〔**もみくた**（名）揉(モ)まれて皺(シワ)になれるさま。

〔**もみくちや**（名）前條に同じ。

もみぐるま［籾車］（名）「たうみ」に同じ。

もみすり［籾摺］（名）扱(コ)き落したる籾米の稃(モミガラ)を去ると、先づ唐箕にて秕(シヒナ)を去りたるものを磨臼にかけ、更にこれを唐箕にかけて稃を去りて後、篩又は千石等にかけて籾と米とを別ち、其籾米は再び磨臼にかけて前の如く行ふなり。

もみだ・す（さしすすせせ）［揉出］（他、さ四）もみて出す。

廿**もみだ・す**（さしすすせせ）［紅葉］（他、さ四）紅葉せしむ。

もみぢ［紅葉］（名）㊀【植】「かへで」に同じ。（槭樹、楓）。㊁廿「もみぢば」の略言。㊂かさねの色目、表紅にして裏の青なるもの。㊃麥のふすま。廿――**がさね**［紅葉襲］（名）前條㊂に同じ。――**がり**［紅葉狩］（名）山野にもみぢを探(サグ)りて觀賞すると。（觀楓）。――**づき**［紅葉月］（名）陰曆九月の異稱。――**のにしき**［紅葉錦］（名）もみぢを錦にたとへていふ語。「―着てかへる」。――**のはし**［紅葉橋］（名）（古今集に「天の川もみぢを橋にわたせばや、たなばたつめの秋をしもまつ」の歌に出づ）天の川にわたすといふ橋。――**ば**［紅葉］（名）㊀秋の末に紅葉したる木葉の總稱。（黃葉）。㊁紅葉したる楓の葉の專稱。――**み**［紅葉見］（名）もみぢの見物。

廿**もみ・づ**（づちづるるれでよ）［紅葉］（自、た上二）草木の葉、秋の末に霜のために色を變じて赤又は黃となる。（黃葉）。

廿**もみ・づ**（でてづるづるづれでよ）［紅葉］（自、た下二）前條に同じ。

廿**もみ・づ**（だちづづてて）［紅葉］（自、た四）前々條に同じ。

もみぬか［籾糠］（名）米の外皮。（稃）。

廿**もみよね**［籾米］（名）玄米。

もみれうぢ（ウーリョ）［揉療治］（名）肩腰などをもみて痛み又は凝(コ)りなどを療治すると。按摩。

もみゑぼし［揉烏帽子］（名）烏帽子を溜塗(タメヌリ)にせず、柔かに揉(モ)みたるもの。

も・む（まみむむめめ）［揉］（他、ま四）㊀兩手の間に入れて擦(ス)り柔らぐ。又、手に押へてすり、しわむやうにす。（挼）。㊁錐の柄などを兩手にて廻はし孔を穿つ。（鑽）。㊂揉療治を行ふ。㊃觸れさはりてさまざまに押しへす。㊄相手になりて相撲を教ふ。相撲の相手になりて其技をきたへる。

も・む（めめむむむるむれめよ）［揉］（自、ま下二）押しあふ。せりあふ。こんざつす。

もめ［揉］（名）㊀もまれて皺(シワ)よると。㊁いさかひ。あらそひ。爲論。

〔**も・める**（めめめるめるめれめよ）［揉］（自、ま下一）㊀もまれて皺よる。㊁あらそひ生ず。ごたごたす。起こる。

もめん［木綿］（名）㊀「もめんわた」の略言。㊁「もめんおり」の略言。㊂「もめんいと」の略言。――**いと**［木綿絲］（名）もめんわたをつむぎたる絲。――**おり**［木綿織］（名）木綿絲にて織りたる織物。――**もの**［木綿物］（名）「もめんおり」に同じ。――**わた**［木綿綿］（名）木綿(キワタ)の顆果内にありて種子に若生せる白毛。

もも［桃］（名）㊀【植】薔薇科に屬する木、葉は長楕圓形披針狀にして鋸齒を有す、花は春開き、紅色若しくは白色を呈し美麗なり、果實は大形にして夏秋の交に熟す。觀賞用として栽培せられ、又、果實は食用に供せらる。（仙果花）。㊁きわたの白毛をつゝむ顆果の稱。㊂かさねの色目、表は唐紅にして裏の紅梅なるもの。

もも［股］（名）脚の上部の腰と緊(ツナ)がる部分の稱。（脛、髀）。

もも［百］（名）物事の數の多きを示すに用ふる語。

もも［百］（數）十の十倍。

ももいろ［桃色］（名）うすあか色。淡紅色。

ももか［百日］（名）㊀日數の百なると。㊁小兒の生れて百日目のいはひ。

ももが［鼯鼠］（名）「もゝんぐわあ」に同じ。

ももかは（ワーカ）［桃皮］（名）山桃の皮、其煎汁は藥用又は染料などに用ひらる。志ぶき、楊梅皮。

廿もも-け[鳥臟](名) 鳥の五臟。もゝき。むゝき。

もも-しき[百敷](名) 大宮。禁中。─-の[百敷](枕)「大宮」に冠らする詞。「─の大宮人はいとまあれや」。

廿もも-おり[桃尻](名) 馬にのりて、腰のすわらぬこと。

もも-だち[股立](名) 袴の左右の腰の側面にあたる部分にある縫ひどめ。

廿もも-たらず[百不足](枕)「や そ」「い そ」に冠らする詞。

もも-ち[百千](數) 物事の數の多き事を示す語。

廿もも-ぢ[百](數) 十の十倍。もも。

もも-ちぢ[百千](數)「もゝち」に同じ。

もも-とせ[百歲](名) 數多く重なるとし。

廿もも-とり-の-つくゑ[百取机](名) いろ〳〵のものをとりてのせたる多くの机。

もも-の-さけ[桃酒](名) 古昔、桃節句に飲みたる酒の稱。桃花を其瓶子にさしゝもの。

もも-の-せっく（セツク）[桃節句](名) 三月三日の稱。上巳(ジヤウシ)。

もも-の-つかさ[百官](名) 多くのつかさびと。もろ〳〵のやくにん。ひやくくわん。

もも-の-つけね[股附根](名) 股の内部の下腹に接したる窪き所。(鼠蹊)。

もも-の-ゆみ[桃弓](名) 桃の木にてつくりたる弓、不祥をはらふためのものといふ。

もも-ひき[股引](名) ㊀兩の股まで足を通(ホト)して穿く狹き筒狀の服。はばかま。(褌襠)。㊁昔時、さるもゝひきの稱。

もも-へ-やま[百重山](名) 數多くかさなりたる山。

もも-んぐわあ[鼯鼠](名) ㊀【動】(「もゝ」は「もみ」の訛にして、「くわ」は泣き聲)「むさゝび」の一名。㊁小兒の戯れ、着物を被りて、臂を張り、むさゝびの翅を張りたる眞似して、人などを威(オド)すもの。

も-や[母屋](名) ㊀家の中にて主なる所、即ち、寢屋の中央の間。㊁家の甍(キ)の內。(大工の語)。㊂物置又は離屋などに對して、家人のつねに住む家の稱。おもや。(身屋、身舍)。

もや[靄](名) 空中にもや〳〵としたる氣。深き霧。

廿も-や[喪屋](名) 屍をおさめおき葬式を行ふ家。

(も-やう)[模樣](名) ㊀裝飾の文(アヤ)。㊁ありさま。樣子。

もやし[萌](名) ㊀穀を水に浸(ヒタ)し、筵(ムシロ)にまきつゝみて芽を出さしめたるもの。(糵)。㊁蔬菜などを促成栽培により萌さしめたる芽。「茗荷の─」。

も-やす[燃](他、さ四) 燃(モ)ゆるやうにす。もす。たく。(焚)。

も-やす[萌](他、さ四) 芽を出ださしむ。

もやひ[催合](名) 共同してなすこと。

もやひ[舫](名) もやふこと。「船─」。─-ぐひ[舫杙](名) 船をつなぎおくくひ。かし。(牂牁)。─-づな[舫綱](名) 船をもやふに用ふる綱。

も-やふ[催合](他、は四) より合ひて共同に物事をなす。

も-やふ[舫](他、は四) ㊀船と船とを舫(ハア)せつなぐ。㊁船をつなぎとゞむ。

もや-もや(名副) ㊀分明ならぬさまにいふ語。(朦朧)。㊁思ひ煩らふさまにいふ語。(悒悒)。

も-ゆ[萌](自、や下二) 芽を出だす。めぐむ。きざす。

も-ゆ[燃](自、や下二) 火おこりて焰(ホノホ)あがる。火つく。燃燒す。

廿もゆる-つち[燃土](名) 泥炭又は石炭の稱。

廿もゆる-みづ[燃水](名) 石腦油又は石炭油の稱。

も-よぎ[萌黄](名)「もえぎ」の轉。

もよほし[催](名) ㊀うながすこと。さいそく。㊁もよほすこと。はじまらんとすること。きざし。「御涙の─」。㊂くはだて。ほっき。─-ぜい[催勢](名) 催促し集めたる兵士。

もよほ-す[催](自、さ四) はじまらんとす。おこらんとす。きざす。

もよほ-す[催](他、さ四) ㊀うながす。催促す。㊁設けおこす。くはだつ。

もより[最寄](名) そのほとり。ちかきあたり。近處。近邊。─-ぶね[最寄船](名) 岸邊に近くもやひたる船。

もら-す[漏](他、さ四) ㊀もれたゝり出だす。こぼす。㊁祕密を他に知らす。㊂おとす。ぬかす。㊃のこす。のがす。逃す。

もらひ[貰](名) ㊀もらふこと。㊁客よりもらふ祝儀。㊂乞食のもらふ施物。─-ぐひ[貰食](名) 他人よりもらひて食するもの。─-ご[貰子](名) 他人の子を貰ひてやしなふこと。又、其もらひたる子。─-ため[貰溜](名) 貰ひてためおきたること。又、其もの。─-どし[貰年](名) 生年の凶なる人が、其厄を免(マヌカ)れんため、他より多き年となすこと。─-なき[貰泣](名) 人の泣くを見聞して己も悲しくなり共に泣くこと。(陪泣)。─-び[貰火](名) 類燒の火。ともかけの火。─-むすめ[養女](名) 他人よりもらひて我子となしたる女子。─-もの[貰物](名) 貰ひたる物。

もら-ふ[貰](他、は四) ㊀人の與ふる物を受く。㊁人に望みて物を我手に入る。㊂食を受く。「口を─」。㊃人に事を賴む。「字を書いて─」。㊄迎へて我家の人となす。「女房を─」。

もり[森](名) ㊀樹木の茂り立つ所。こだち。㊁特に神社のある地のこだち。(杜)。

もり[銛](名) 投げ飛ばして鯨を刺す具。鋒(ホコ)のさきに一は長く一は短き左右の兩鈎あり、樫の柄を付く、鋒に繩をつけ其端を船に繫(ツナ)ぐ、投げて鯨に中れば柄は脫(ヌ)け鋒のみ鯨の體に立ちて拔けず、斯くて船は繩にひかれ、鯨の動くまに〳〵從ひ行くなり。(魚杈)。

もり[盛](名) ㊀もること。もる度合。㊁「もりそば」の略言。

もり[守](名) ㊀まもること。まもる人。まもりびと。「宮─」。「關─」。(守者)。㊁小兒にかしづきまもる人。(傅、保姆)。

もり[漏](名) 水の漏(モ)ること。(泄、洩)。

もり-ころ-す[盛殺](他、さ四) ㊀毒を盛り人に飲ませて殺す。毒害す。㊁藥方を誤りて病人を殺す。(醫者にいふ)。

もり-ずな[盛砂](名) (もと降雨の折に散らす料に供したるものといふ)儀式又は貴人を迎ふるときなどに、門の左右に砂をうづたかく盛りたるもの。

もり-そば[盛蕎麥](名) 蒸籠(セイロウ)に盛りたる蕎麥切、つゆをつけて食ふもの。

もり-た-つ[守立](他、た下二) ㊀まもりて育(ソダ)つ。つきそひて成長せさす。㊁すたれたるをおこす。再興す。

(もりたてる)(他)「もりたつ」の訛。

モリブデン[Molybdenum](名)【化】銀白色の稀有なる金屬元素。

廿もり-べ[守部](名) 見はり番をする部族。「橘の─の里」。

もり-もの[盛物](名) ㊀膳に盛りて供ふる食物。㊁佛事の供物。

(もり-もり)(名、副) 堅きものを齒切よく嚙むさまにいふ語。

もり-やく[守役](名) もりする役。かしづきの役。

も-る[盛](他、ら四) ㊀器物に入れ滿たす。㊁うづたかく積む。㊂藥劑を調合す。㊃寸法を定めて志るしを置く。「目を─」。

も-る[洩、泄、漏](自、ら四) 隙間をとほりて出づ。こぼる。

も-る[洩、漏](自、ら下二) ㊀前條に同じ。㊁祕密を他に知らる。㊂脫落す。ぬく。おつ。

も-る[守](他、ら四) もりをなす。まもる。

モルタル[Mortar](名)【化】消石灰に砂を混じ水を加へて煉(子)りたるもの、時日を經過すれば堅硬となる、煉化石・石材等を接合するに用ひらる。

モルチール(名)(「オランダ」語 Morter)「きうはう」(臼砲)に同じ。

モルヒネ(名)【化】「モルフイン」に同じ。

モルフイン[Morphin](名)【化】「アルカロイド」の一種、苦味を有し水に溶(ト)け難き結晶體なり、其鹽は水に溶け易く、少量を服すれば睡眠を催(モヨホ)し、多量なれば有毒なり、醫藥として用ひらる。

モルモット(名)【動】「マルモット」に同じ。

廿もる-め[守目](名) 人の見まもること。

もれ[漏、洩、泄](名) もるゝこと。ぬけ。おち。(漏洩、脫落)。

(もろ)(名) 打擊をまともに受くること。打擊を何等の防禦なしに受くること。

もろ─[諸](接頭) ㊀おの〳〵。めい〳〵。「─人」。㊁ふたつ。雙方。(兩)。

もろこ[諸子](名)【動】「もろこばえ」の略言。

もろこし[唐土](名) ㊀昔時、我國にて支那を呼びし稱。㊁【植】「もろこしきび」の略言。

もろこし─[唐土](接頭) 唐土より來りたる物事に冠する語。「─船」。

もろこし-うた[唐土歌](名) 漢詩。

もろこし-きび[唐土黍](名)【植】禾本科に屬する草、莖は直立し高さ丈餘に及ぶ、葉は長大にして互生す、花は小穗狀花序をなし圓錐花序に排列す、種子は黍より大きく食用に供せらる。(蜀黍)。

もろこし-だんご[蜀黍團子](名) 唐土黍の種子を碾(ヒ)きたる粉にて製したる團子。

もろこし-もじ[唐土文字](名) 漢字。

もろこ-ばえ[諸子鮠](名)【動】喉鰾類中こひ科に屬する魚、體は紡錘形をなし背部黑色にして腹部白色なり、體側に三條の黑線あり、體長一二寸許、近江國諸子川に多く產す。

廿もろ-こひ（イーコ）[諸戀](名) 互に相志たふこと。

廿もろ-ごゑ[諸聲](名) 互に相呼ぶ聲。

もろ-ざし[諸差](名) 諸手を差し入るゝこと。

もろ-さ[脆](名) もろきこと。もろき度合。

もろ-し[脆](形、二) ㊀こはれ易し。碎(クダ)けやすし。㊁弱し。「淚─」。

もろ-て[諸手](名) 左右の手。─-の-いくさ[諸手軍](名) 諸軍。諸部隊。

もろ-とも[諸共](名) とも〴〵になすこと。─-に[諸共](副) とも〴〵に。一緒に。一緒に。ともに。

廿もろ-なり[諸成](名)【植】「ぐみ」に同じ。

廿もろ-ね[諸寢](名) ひとつね。ともね。

もろ-は[諸刃](名) 刃物の兩邊に刃のあるもの。(雙刃)。

もろ-はく[諸白](名) 上品なる酒、麴も米も共に白米を用ひて釀(カモ)すものなるより此名あり、奈良・池田などの名產。(醇酎、醇醪)。

廿もろ-は-ぐさ[兩葉草](名)【植】「かもあふひ」

の異稱。

もろ-はだ［諸肌］（名）脇・肩より腕にかけて雙方の肌。――ぬぎ［諸肌脫］（名）もろはだをぬぐこと。――をぬぐ 襟を開きのけて、もろはだをあらはす。又、全力を注いで仕事をなす。

もろ-ひざ［諸膝］（名）左右の膝。

もろ-びと［諸人］（名）あまたの人。おほくの人。

もろ-み［諸味］（名）㊀醪(モロミ)していまだ漉(コ)さぬ酒（醪酒醪）。㊁造りていまだ漉さぬ醬油。

廿もろ-むき［諸向］（名）㊀あなたこなたへ向くこと。㊁【植】「しだ」に同じ。

モロモット（名）【動】「マルモット」に同じ。

廿もろ-もち［諸持］（名）もろともに持つこと。共同してもつこと。

もろ-もろ［諸］（名）多くのもの。すべてのもの。全體。

もろ-や［諸矢］（名）はやとおとやとの稱。

もろ-をりど［諸折戸］（名）左右へ開く折戸。

もん［紋］（名）㊀あや。模様。㊁家々の定めの徽章。もんどころ。（徽號）。

もん［門］（名）㊀外がこひの出入口。かど。㊁師の許に於いてをしへを受くること。「―に入る」。㊂すべて物事の出入經由する所の稱。「入德之―」。㊃物事の分類上高位のものゝ稱。――いちのごとし［門如市］其家に訪問の客多きにいふ。

（―もん）［文］（名）孔のある錢一個の稱。

（―もん）［門］（接尾）火砲を數ふるにいふ語。「砲百―」。

（―もん）［文］（接尾）㊀孔のある錢を數ふるにいふ語。㊁足袋の底を計るにいふ語。大概大人の足を十文とし、九文・八文など〻數ふ。もと錢を並べてこれを數へたるより起れり。

（もん-らつ）［悶鬱］（名）もだえふさぐこと。

もん-おり［紋織］（名）紋を浮織にしてあらはし出だしたる布帛。

（もん-か）［門下］（名）師の許につきてをしへを受くること。又、其人。（門人。門弟）。――せい［門下生］（名）門人。弟子。

（もん-かう）［問拷］（名）とがめ。せめ。

もん-がまへ［門構］（名）㊀門のかまへのさま。又、門をかまへたる宅。㊁漢字の問・閉等の字の上に冠らする門の字の稱。かどがまへ。

（もん-かん）［門鑑］（名）門の出入の手形。

（もん-きう）［問究］（名）とひきはむること。

もん-きり-がた［紋切形］（名）さだめ。きまり。

（もん-く）［文句］（名）㊀文章の中の語句。文言。㊁いひぶん。いひぐさ。

（もん-ぐわい）［門外］（名）㊀家の門のそと。㊁專門の外。其物事の範圍外。――かん［門外漢］（名）其物事の範圍外にありて直接これにたづさはらざるもの。

（もん-げん）［門限］（名）夜中に門を閉づる刻限。

（もん-こ）［門戶］（名）かどぐち。

（もん-ごん）［文言］（名）文章の中の語句。もんく。

モンゴリアン［Mongolian］（名）蒙古人種。

（もん-ざい）［文才］「ぶんさい」に同じ。

（もん-ざい）［問罪］（名）罪を問ひたゞすこと。――の-し［問罪師］（名）問罪のために派遣せらるゝ軍隊。征伐につかはさるゝ軍隊。

廿もんざう-しやう［文章生］（名）「もんじやうしやう」に同じ。

廿もんざう-はかせ［文章博士］（名）「もんじやうはかせ」に同じ。

（もん-し）［門子］（名）身分高き人の嫡子。

（もん-し）［門齒］（名）齒の前面の眞中に左右各二枚づゝならび生(オ)ふるもの、稱、口腔の門戶にあたるが故にいふ。

（もん-し）［悶死］（名）もだえ死ぬること。

（もん-じ）［文字］（名）㊀もじ。じ。㊁文章。

（もん-じやう）［門牆］（名）㊀かどとかきと。㊁邸內。㊂門下。「―にあつてはこれを慰く」。

廿もんじやう-しやう［文章生］（名）古昔、大學寮にて詔傳及時文を學びたる學生の稱。

廿もんじやう-はかせ［文章博士］（名）古昔、大學寮の博士、詔傳博士の廢せられて後置かれたるものにして、詔傳及時文の事をつかさどりしもの。もんざうはかせ。

廿もんじやく［文籍］（名）書籍。ふみまき。しよもつ。

（もん-しゆ）［門主］（名）門跡の住職。

モンジユ［文珠］（名）【佛】（梵語 Manjusri（曼珠室利）の略、妙德又は吉祥の義）菩薩の一、明かに佛性を見て法身・般若・解脫の三德を具足し不可思議微妙の功德ありといふ。――のちゑ［文珠智慧］（名）すぐれてよき智惠。「三人よればー」。

廿もんじよ［文書］（名）かきもの。もんぞ。――ぶくろ［文書袋］（名）文書を入るゝ袋。

（もん-じん）［門人］（名）門下の人。弟子。門弟。

（もん-じん）［問訊］（名）とひたづぬること。

（もん-せい）［門生］（名）「もんじん」に同じ。

（もん-ぜき）［門跡］（名）㊀（宇多天皇の落飾して仁和寺に入らせ給ひ、これを御門の跡と稱せしよりおこる）法親王の住職して給ふ寺院の稱。㊁本願寺の俗稱。

（もん-ぜつ）［悶絕］（名）もだえて氣を失ふこと。

（もん-せん）［門扇］（名）門のとびら。

（もん-ぜん）［門前］（名）門のまへ。――ばらひ［門前拂］（名）㊀德川時代の刑、追放の輕きものにして、平民は奉行所の門前より追ひ拂はれて歸ることを許されず、大小名は祿を沒收して其屋敷の門より追ひ拂はれたり。㊁面會せんとて來るものにあはずしてかへらしむること。

（もん-そ）［門訴］（名）數人の門前に越訴(ヲツソ)すること。

廿もん-ぞ［文書］（名）もんじよ。かきもの。

（もん-そう）［門送］（名）門出を見送ること。

（もん-だい）［問題］（名）問ひかけて答をなさしむる題。

（もん-だふ）［問答］（名）㊀問ふと答ふと。㊁【佛】禪家にて、僧侶などが互に證悟上の意見をたゝかはすこと。

廿もんだ-ふ［はひふへ］（他、は四）（前條の語を活用す）問答をなす。「もんだはず」。

（もん-だん）［文段］（名）文章の段落。

（もん-だん）［文談］（名）文章についてかたること。

（もん-ぢ）［門地］（名）いへがら。門閥。家格。

（もん-ちやく）［悶着］（名）もめ。あらそひ。（紛爭）。

廿もん-ちゆう［問注］（名）うつたへ。訴訟。――じよ［問注所］（名）鎌倉時代の裁判所。

もん-つき［紋附］（名）紋所を染めぬきたる衣服、一つ紋・三つ紋・五つ紋などあり。（禮服）。

（もん-てい）［門弟］（名）でし。門人。

（もん-ていし）［門弟子］（名）前條に同じ。

（もん-と）［門徒］（名）㊀其宗門に歸依したる人。㊁「もんとしゆう」の略言。――しゆう［門徒宗］（名）【佛】一向宗の俗稱。

もん-どころ［紋所］（名）家々の定紋。

廿もんど-の-つかさ［主水司］（名）上古、宮內省の被官にして、御井水・醬水及氷室の事を掌りしもの。もひとりのつかさ。

もん-どめ［門留］（名）㊀門を閉ぢて通行させぬこと。㊁出入を差止むること。

もん-どり［翻筋斗］（名）身を倒にかへして立つこと。とんぼがへり。「―うつ」。

（もん-ない）［門內］（名）門のうち。

（もん-なし）［文無］（名）㊀（一文無しの略）金の無きこと。㊁（文はづれの略）圖拔けて大いなる足袋、卽ち十二文より大いなるもの。

廿もん-にん［文人］（名）古昔、大學寮にて、漢文及漢詩を作りし人の稱。

モンパ［紋羽］（名）綿布の一種、「フランネル」に似、地質粗にして毛の立てるもの。（文派、紋派）。

（もん-ぱい）［門牌］（名）門のかけふだ。

（もん-ばう）［門榜］（名）門の標札。かどふだ。

（もん-ばう）［門望］（名）其家の名望。

（もん-ばつ）［門閥］（名）いへがら。門地。――か［門閥家］（名）門閥のよき家。

（もん-ばん）［門番］（名）門の番人。（抱關）。

（もん-び）［門楣］（名）㊀門のはり。㊁一門の棟梁。

もん-び［紋日］（名）遊郭などにて衣服を着替へなどする祝日。ものび。

（もん-ぴ）［門扉］（名）門のとびら。

（もん-ぶ-きやう）［文部卿］（名）明治十九年官制改革以前に於ける文部大臣の稱。

（もん-ぷく）［紋服］（名）紋附の衣服。（禮服）。

（もん-ぶ-しやう）［文部省］（名）文部大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて教育行政の事務を取扱ふ所。又、文部大臣の處理する事務全體の稱。

（もん-ぶ-だいじん）［文部大臣］（名）各省大臣の一にして教育行政の最高官府、教育・學藝に關する事務を管理するもの。

（もん-ぼ）［捫摸］（名）てさぐりすること。

（もん-ぽん）［紋本］（名）紋の標本をあつめたる冊子。（紋帖）。

もん-まう［文盲］（名）無學なること。（沒字漢）。

もん-め［匁］（名）㊀銀目にて、小判一兩の六十分の一。㊁秤目にて、貫の千分の一。

（もん-りう）［門流］（名）一門のわかれ。

モンロー-しゆぎ［―主義＝Monroe doctrine］（名）西曆紀元千八百二十二年、「スペイン」が神聖同盟の餘威に藉(ヨ)り、南「アメリカ」に出兵せんと計畫せし際に、時の北「アメリカ」合衆國の大統領「モンロー」が發表せし主義、「ヨーロッパ」の諸國が、「アメリカ」大陸の何れの國たるを問はずこれに干涉するは、北「アメリカ」合衆國を敵視するものなりといふこと、卽ち「アメリカ」大陸に於ては、他國の干涉を容(イ)れずといふこと。

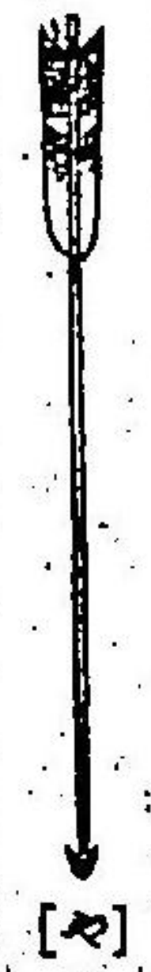
（もん-ゐん）［門院］（名）天子の御生母の尊稱。

（もん-ゑい）［門衞］（名）もんばん。

や

や 母音「い」を從音とし母音「あ」を主音としたる綴音。

や［矢、箭］（名）㊀弓弦につがへて射る武器、矢竹にて幹を作り一端に羽を矧(ハ)ぎ他端に鏃(ヤジリ)を著く、長さ十一束を通常



［や］

とす。㊁すべて弓につがふる矢のさまをなしたるものゝ稱。「車の—」。㊂木口に打ち込みて堅材を割るに用ふるくさび。 —のごとし[如矢] 直くして曲がらざるにたとへていふ語。又、次條に同じ。 —をいるごとし 過ぎ行くとの急なるにたとへていふ語。

や[屋](名) ㊀すみ家。いへ。(家、舍)。㊁いへの屋根。

や[谷](名) 山と山との間。たに。

や[輻](名) 車輪の輞(オホワ)より出て、轂(コシキ)にあつまる許多の細長き材。

や[八](數) 四と四とを加へたる數。やつ。はち。

や[耶、邪、乎、歟](助) ㊀疑ひの意を表はす語。「わが思ふ人はありやなしやと」。㊁反語に用ふる語。「消えずはありとも花と見ましや」。㊂命令の意を表はす語。「爲(シ)—」。㊃希望の意を表はす語。「行かば—」。

や[耶、邪、哉](感) ㊀驚歎して發する聲。「あは—」。「あきまし—」。㊁呼びかくる發聲。「月—」。「春—」。

—や[屋](接尾) ㊀或語に添へて、其職業の人又は家の意を表はす語。「豆腐—」。㊁家號又は雅號などに用ふる語。「伊勢—」。「鈴の—」。㊂或語に添へて、其人の意を表する語。「氣どり—」。「わからず—」。

ヤード[碼=Yard](名) 「イギリス」國の長さの基本單位、三呎にして我國の三・〇一七五尺に當る。

[**ヤール**][碼](名) 「ヤード」の訛。

やあ(感) ㊀驚きたるときの聲。㊁呼びかくるときの發聲。

や-あはせ[矢合](名) 昔時の戰爭にて、其始め兩軍互に先づ矢を射合ひしと。 **—どき**[矢合時](名) 接戰の時刻。

(**やあら**)(感) 失敗したるときの發聲。「—しまった」。

(**やい**)(感) 呼びかくる發聲。「—こりや」。

(**や-いち**)[野遊](名) のあそび。

や-いくさ[矢軍](名) 兩軍互にたゞ矢を射合ふたゝかひ。

‡**や-いぐし**[燒串](名) 「やきぐし」の音便。

‡**や-いごめ**[燒米](名) 「やきごめ」の音便。

や-いと[灸點](名) 「やきと」の音便。

や-いば[刃](名) ㊀「やきば」の音便。㊁刀劍。兵器。

や-いばた[燒畠](名) 春先に地に生じたる草をやき、其灰を肥料として畠となせる所。やきばた。

や-いばり[燒鍼](名) 「やきばり」の音便。

(**や-いん**)[夜陰](名) よる。やぶん。夜中。

(**やう**)[陽](名) 陰陽の條を見よ。

(**やう**)[瘍](名) 一種の腫物、疔の類。

(**やう**)[樣](名) ㊀さま。かた。㊁なり。やうす。㊂同じさま。「いしぶし—のもの御前にまゐらす」。

(**やう**)[洋](名) 海の大いなるもの。なだ。

(**やう**)[洋](接頭) 西洋の物事に冠する語。「—服」。「—行」。

やう-イオン[陽—=Cation](名) 【化】陽電氣を負ふ「イオン」。

(**やう-いく**)[養育](名) やしなひそだつると。 **—ゐん**[養育院](名) 自活すると能はず且つたよる所なき小兒又は老人などを收容して、養育する目的にてたてられたる所。

(**やう-えん**)[陽炎](名) かげろふ。いとゆふ。

(**やう-か**)[養家](名) 養子が養子緣組によりて入りたる家。

やう-か[八日](名) ㊀日數八つ。㊁月の第八の日。

(**やう-かう**)[洋行](名) 「ヨーロッパ」又は「アメリカ」へ渡行すると。

(**やう-がう**)[影向](名) 神佛の靈の降臨あると。

(**やう-がう**)[羊毫](名) 羊の毛にて穗(ホ)をつくりたる筆。

(**やう-かく**)[羊角](名) つむじかぜ。旋風。

(**やう-がく**)[洋學](名) 西洋の學問。特に西洋の語學。

ヤウ-カン[羊羹](名) (字の唐音の訛)蒸羊羹及煉羊羹の總稱。

‡**やう-き**[樣器](名) 物を盛る器物。

(**やう-き**)[陽氣](名) ㊀いさましくにぎはしきと。㊁打ちひらけてはれ〲しきと。㊂時候。㊃春の時氣。㊄作發する氣。 **—はっするところきんせきもまたとほる**[陽氣發處金石亦透] 精神の集注するところ如何なる困難も勝ち得られざるとなきにいふ。

(**やう-きう**)[陽九](名) わざはひ。さいなん。

やうきひ-ざくら[楊貴妃櫻](名) 櫻の一種、花重瓣にて柄短かく、花瓣の基部は紅色を呈す。

(**やう-きう**)[楊弓](名) 玩弄の具となす弓、長さ三尺許、坐して射るもの、的の距離七間半なるを定式とす、徳川時代の中世に普(アマネ)く流行せり。 **—てん**[楊弓店](名) 次條に同じ。 **—や**[楊弓屋](名) 料金を受けて楊弓の遊びをなさしむる家。

(**やう-きよく**)[陽極](名) 【理】電池又は發電機より電流の出づる口。又、電解器又は「ガイスレル」管等へ電流の入る口。

(**やう-きん**)[洋琴](名) 「ピアノ」に同じ。

(**やう-ぎん**)[洋銀](名) ㊀銅六二分・亞鉛二三分・「ニッケル」一五分より成る合金。㊁西洋の銀貨。

(**やう-くわ**)[洋貨](名) 西洋の貨幣。又、西洋の貨物。

(**やう-ぐわ**)[陽畫](名) 寫眞にて陰影と明暗を同じうする畫、陰畫の對、(寫眞術の條參照)。

(**やう-ぐわ**)[洋畫](名) 西洋風の畫、油畫・水彩畫・鉛筆畫などこれなり。

やうくわ-の-あめ[養花雨](名) 花時の前にしと〱とふる春雨。

(**やう-けい**)[養兄](名) 父又は母の養子にして自分より年長なる男子。

(**やう-げつ**)[陽月](名) 陰曆十月の異稱。

(**やう-けん**)[洋犬](名) 西洋種の犬。「カメ」。

(**やう-けん**)[洋劍](名) 「サーベル」。

(**やう-げん**)[揚言](名) 聲高く遠く聞ゆるやうにいふと。ひろくいひ告ぐると。いひふらすと。

(**やう-げん**)[佯言](名) いつはりいふと。

(**やう-ご**)[洋語](名) 西洋諸國の言語。

(**やう-こう**)[洋紅](名) 舶來の紅色の繪具、「ブラジル」國の產、「サボテン」に生ずる蟲より取りたるものといふ。

(**やう-こう**)[陽侯](名) (昔の陽國侯が水に溺れて大海の神となりたりといふ故事に出づ)大いなる波浪。おほなみ。(大浪、鯨波)。

(**やう-こく**)[暘谷](名) 日の出づる處。

‡**やうごと-なし**[止事無](形、二) やんごとなし。

(**やう-さう**)[洋裝](名) 洋服のよそほひ。

(**やう-さん**)[洋傘](名) かうもりがさ。

(**やう-さん**)[養蠶](名) かひこを飼(カ)ふと。こがひ。

(**やう-ざん**)[洋算](名) 「アラビア」數字を使用してなす數學、西洋より傳來したるもの。

(**やう-し**)[養子](名) 養子緣組によりて子たる身分を取得したるもの。他人に養はれ其子となりたるもの。やしなひご。

(**やう-し**)[洋紙](名) 西洋より舶來する紙、又、其法によりて漉(ス)きたる紙。和紙の對。

(**やう-じ**)[楊枝](名) 齒を掃除する具の總稱、もと專ら楊(ヤナギ)の枝にてつくり、其端を碎(クダ)きて總(フサ)となしたるものなりしよりいふ。(刷齒、齒刷)。

やうし-えんぐみ[養子緣組](名) 【法】實際上親子の關係なきものが、法律上親子の關係を生ぜしむる法律行爲。

(**やう-しき**)[樣式](名) ㊀さま。かたち。㊁一定のしかた。

やうし-さき[養子先](名) 養子となりたる先方の家。養家。

(**やうし-しよくぶつ**)[羊齒植物](名) 【植】羊齒類に屬する植物。

(**やう-じやう**)[養生](名) 身の健康をはかると。身の衞生をなすと。

(**やう-しゆ**)[洋酒](名) 西洋より渡來したる酒。又、其法によりて釀造したる酒。

(**やう-しゆん**)[陽春](名) ㊀正月の異稱。㊁春の氣候、陽氣みち〲たる春。

(**やう-しよ**)[洋書](名) 西洋の書籍。

(**やう-しよく**)[洋食](名) 西洋風の料理、西洋料理。

(**やうし-るゐ**)[羊齒類](名) 【植】隱花植物の一、莖は地下莖にして、葉は羽狀複葉なり、子囊體は葉裏に生じ胞子を藏す、胞子より芽生ず、しだ、ぜんまい等これに屬す。

(**やう-しん**)[養親](名) 養子緣組にて親たる身分を取得したるもの。

(**やう-じん**)[洋人](名) 西洋の人。

(**やうしん-りう**)[揚心流](名) 柔術の一派、秋山義時より始まる。

やう-す[樣子](名) ㊀ありさま。さま。㊁なりふり。すがた。㊂仔細。「—あって」。

‡**やう-ず**(ぜ・じ・ず・ずる・ずれ・ぜよ)[瑩](他、さ變) なめらかにつやゝかならしむ。

(**やう-せい**)[養成](名) やしなひなすと。やしなひそだつると。

(**やう-そふ**)[養祖父](名) 養親の父。

(**やう-そぼ**)[養祖母](名) 養親の母。

(**やう-だい**)[樣體](名) ㊀すがた。やうす。㊁病狀。病體。(容體)。 **—がき**[樣體書](名) 病狀の診斷書。

(**やう-たう**)[洋刀](名) 「サーベル」。

(**やう-たう**)[洋島](名) 【地】水の浸蝕によりて大陸と分離して洋中に孤立せる島、地質の構造及動植物等の大陸と關係なきもの。

(**やう-だう**)[陽道](名) 陽の道即ち男子生殖の能力。

やう-ち[家内](名) かない。

やう-ちやう[羊腸](名) つゞらをりの路。

(**やう-ちゆう**)[陽中](名) 陰曆二月の異稱。

(**やう-ぢよ**)[養女](名) 養子となりたる女、他人に養はれ其人の子となりたる女。やしなひむすめ。もらひむすめ。

やう-つり[家移](名) ひきこし。轉宅。

(**やう-てい**)[養弟](名) 父又は母の養子にして自分より年下のもの。

(**やう-でんき**)[陽電氣](名) 【理】硝子棒を絹布にて摩擦したるとき、其硝子棒に生ずるが如き種類の電氣。

(**やう-とう**)[洋燈](名) 「ランプ」。

(**やうとう-くにく**)[羊頭狗肉](名) (羊の頭を看板として實際は狗の肉を賣る義)見せかけの徒に立派にして、實際のこれに伴はざると。

（**やうとく**（ヨウ）［陽德］（名）世上に知らるゝ恩德。陰德の對。

＋**やうなし**（ヨウ）（くしきこ）［無益］（形、二）やくなし。利益なし。

（**やうばい**（ヨウ）［楊梅］（名）【植】「やまもも」に同じ。――**さう**（サウ）［楊梅瘡］（名）全身殊に面部に腫物を發する黴毒、其膿の凝結せるさま楊梅の皮に似たり。――**ひ**［楊梅皮］（名）もゝかは。藥品。

（**やうはう**（ヨウホウ）［養方］（名）養子先。

（**やうはく**（ヨウ）［洋白］（名）洋銀。

（**やうふ**（ヨウ）［養父］（名）養子先の父。

（**やうふう**（ヨウ）［洋風］（名）西洋の物事のさま、西洋風。

（**やうふく**（ヨウ）［洋服］（名）西洋風の衣服。

（**やうぶん**（ヨウ）［養分］（名）營養の料となる成分。

（**やうぶん**（ヨウ）［洋文］（名）洋語にて記したる文。

（**やうぶつ**（ヨウ）［陽物］（名）陰莖の稱。

（**やうへき**（ヨウ）［洋癖］（名）西洋風をかたより好むこと。

（**やうぼ**（ヨウ）［養母］（名）養子先の母。

（**やうほん**（ヨウ）［洋本］（名）西洋の書籍、洋語の書籍。――**とぢ**［洋本綴］（名）洋本の如き綴方、又、其綴方の本。やうとぢ。

（**やうまく**（ヨウ）［羊膜］（名）【動】有胎盤類に屬する哺乳動物の胎兒を包む膜。

（**やうめい**（ヨウ）［揚名］（名）㊀＋名のみにて職務所得のなき官職。「―の介」。㊁名をあぐること。

（**やうめいがく**（ヨウ）［陽明學］（名）明の王陽明の唱（トナ）へたる儒學、心外に事なく心外に理なしと立て、心の靈明にして感應のあやまりなき所を名づけて良知といひ、良知は天地に通じ一身に主たり、吾人の本來これを具有すること聖人に異ならざれど、たゞ私慾のために障礙せられて明かならずと說き、其障礙を去ることを旨として仁義を論じ修養を勵ずるもの。

（**やうやう**（ヨウヨウ）［揚揚］（名、副）ほこりがほなるさまにいふ語。「意氣―」。

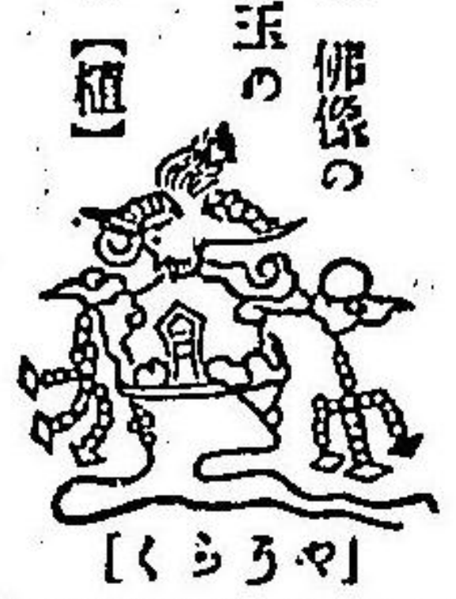
（**やうやう**（ヨウヨウ）［洋洋］（名、副）みち足りて溢れんとするさまにいふ語。

やうやう（ヨウヨウ）［漸］（副）㊀次第を追ひて。だん〱。㊁わづかに。おもむろに。㊂辛うじて。やっと。

やうやく（ヨウ）［漸］（副）前條に同じ。

（**やうらう**（ヨウロウ）［養老］（名）㊀老人を勞（イタ）はること、老人をやしなふこと。㊁老後の年を安樂に送ること。――**ほけん**［養老保險］（名）保險の一、被保險者が老後又は一定の時期に保險金を受取る契約のもの、其死亡したる時といへど、其金額は遺族に支拂はる。

（**やうらく**（ヨウ）［瓔珞］（名）佛像の頭・頸・胸などに掛けたる珠玉のかざり。



［やうらく］

（**やうりう**（ヨウ）［楊柳］（名）【植】「やなぎ」に同じ。

（**やうれう**（ヨウリヨウ）［養料］（名）㊀營養に供するもの。㊁他人の生活を支ふるために給與する財物。

（**やうれき**（ヨウ）［陽曆］（名）太陽曆。

（**やえい**［野營］（名）野外に陣營を張ること。又、其陣營。

やおと［矢音］（名）矢の飛び行く音。

やおもて［矢面］（名）矢の飛び來る方向、敵前。陣頭。（矢表）。

＋**やか**［宅］（名）いへ。

＋**やか**［八日］（名）日數八つ。やうか。

（**やかう**（ヤコウ）［夜行］（名）よるゆくこと。「―汽車」。

（**やがう**（ヤゴウ）［屋號］（名）いへの稱號。

（**やかく**［野客］（名）官に仕へざるもの、處士。

（**やがく**［夜學］（名）よる學問すること。

＋**やかす**［屋宅］（名）門と屏との間のところ。

やかず［家數］（名）いへかず。屋數。（戶數）。

やかず［矢數］（名）㊀射たる矢の數。㊁昔時、差矢（サシヤ）數千本を射て射術をためしゝこと。

やかた［屋形］（名）㊀船の上に屋根の形を設けたるもの。㊁人を乘（ノ）する車の屋。㊂貴族の邸宅。（舘）。㊃國守・大名などの尊稱。「―様」。㊄「やかたぶね」の略。――**ぶね**［屋形船］（名）屋形の設けてある船。（樓船）。

＋**やかつかみ**［宅神］（名）家內を守護する神。

やがて［軈］（副）㊀とりもなほさず、すなはち。（卽）。㊁ほど無く。すぐに。まもなく。（頓）。

（**やがふ**（ヤゴウ）［野合］（名）男女が正當の手續を經（へ）ずに夫婦となること。くっつきあひ。

やかましい（しく しき しけれ）［喧］（形、二）㊀かまびすし、さわがし。㊁わづらはし。面倒なり。㊂小言多し。りくつっぽし。――**や**［喧屋］（名）よく小言又は理窟をいふ人。

やから［族］（名）㊀うから。一族。㊁なかま。黨類。

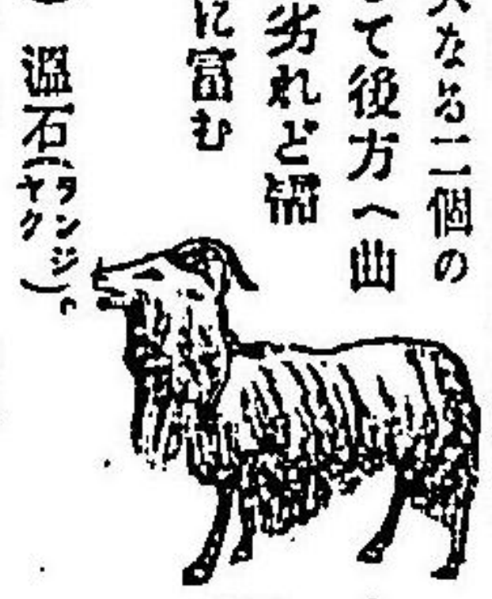
やがら［矢柄］（名）㊀矢の幹。㊁【動】硬鰭類中やがら科に屬する魚、形圓くして細長く嘴もまた細長くして管狀をなす、全身淡赤色にして尾鰭の間より絲狀赤色のものを出す。

（**やかん**［野干］（名）【動】狐の異稱。一說に、狐に似たる一種の獸なりといふ。

やき［燒］（名）㊀やくこと。又、やきたるさま。㊁刃などをやき水に冷して堅くすること。――**がまはる** おろかしくなる。にぶくなる。

（**やき**［夜歸］（名）夜かへること。

やぎ［野羊］（名）【動】偶蹄類中反芻類に屬する獸、形羊に似、頭上に强大なる二個の角を有す、角は中空にして後方へ曲（マ）がる、其肉及毛は羊に劣れど滑用多く、殊に其乳の滋養に富むは獸類の最たり。



［やぎ］

＋**やきいし**［燒石］（名）溫石（ヲンジヤク）。

やきいひ（イイ）［燒飯］（名）燒きたる握飯。

やきいも［燒藷］（名）燒きたる薩摩藷。

やきいん［燒印］（名）金屬にてつくりたる印、火に燒きて物に捺（オ）すもの。（烙印、火印）。

（**やきう**［野球］（名）「ベースボール」に同じ。

（**やぎう**［野牛］（名）【動】牛の原種、北「アメリカ」の原野などに多く群棲す、形牛に比すれば小さし。

やきうち［燒討］（名）火をかけて攻めうつこと。ひぜめ。

やきがね［燒金］（名）㊀鐵を燒き、ものに押しあてゝしるしをつくるもの、牛馬などの尻におして志るしとなす、昔時は罪人の志るしとして其額にあてたり。㊁外科用の金屬製の具、燒きて疽などの肉の腐敗せる部を除去するもの。㊂「やききん」に同じ。

やききり［燒桐］（名）桐を燒きて木理（モクメ）を出だしたるもの。

やききん［燒金］（名）吹分けて純粹の金としたるもの。

やきぐし［燒串］（名）魚肉を燒くためにさす串。「やいぐし」。

やきぐり［燒栗］（名）栗の實をあぶり又は燒きたるもの。

やきごて［燒鏝］（名）火に熇（ヤ）きて布の皺（シワ）をのばし又は折目などをつくるに用ふる鏝（コテ）。

やきごめ［燒米］（名）新稻の米を火にあぶりて、殼を去りたるもの。（糯米）。

やきざかな［燒肴］（名）炙（アブ）りたる魚肉。

やきしほ（オーシ）［燒鹽］（名）蒸燒の壺に入れて蒸燒にしたる鹽。

やきせきかう（コウ）［燒石膏］（名）【化】石膏を熱し其水分を去りて粉末となしたるもの、水にて練（ネ）り型（カタ）に入るれば凝固するを以て、塑像・模型等の製造又は塗料に供せらる。

＋**やきたち**［燒太刀］（名）銳利なる刀劍。――**の**［燒太刀の］（枕）燒太刀は銳（ト）きものなればとて、「と」になど冠らする詞。「―とごゝろ」

やきだま［燒玉］（名）炮烙火矢（ハウロクビヤ）の類。

やきだんご［燒團子］（名）團子のつけやきにしたるもの。

やきつぎ［燒接］（名）陶器の碎（クダ）けたるを釉（クスリ）にて再びもとのごとくやきて接續せしむること。――**や**［燒接屋］（名）燒接を業とする人又は家。

やきつく（け けく くる くれ けよ）［燒附］（他、か下二）やきつけをなす。

やきつけ［燒附］（名）㊀磁器の素燒に釉（クスリ）にて模樣を描（エガ）き、燒きて其模樣のきえざるやうにすること。㊁めっき。鍍金。㊂寫眞術にて、種板を感光性の膜を引きたる紙にあて、日光に曝（サラ）すこと。

やきつち［燒土］（名）木片などを埴土（ハニ）と共に燒きたるもの、肥料として効あり。

やきどうふ［燒豆腐］（名）豆腐を炙（アブ）りたるもの。

やきとり［燒鳥］（名）鳥肉を燒きたるもの。

やきなだれ［燒頽］（名）陶器の釉（クスリ）のながれたるまゝに燒きたるもの。

やきなべ［燒鍋］（名）ものを燒きて調理するに用ふる鍋。

やきば［燒刃］（名）火に熇（ヤ）き水に浸（ヒタ）して鍛（キタ）ひたる刃物。やいば。（烙刃、焠文）。

やきば［燒場］（名）人の死骸を燒く所、火葬場、ひや。ダビ志よ。（化人場、茶毘所）。

やきばた［燒畠］（名）「やいばた」に同じ。（火田）。

やきはまぐり［燒蛤］（名）蛤貝を介殼のまゝに燒きたるもの、普通松葉の火を用ふ。

やきばり［燒鍼］（名）古昔、鍼術に用ひたる鐵製の鍼、火に燒きて患部に刺しゝもの。

やきはん［燒判］（名）「やきいん」（燒印）に同じ。

やきふ［燒麩］（名）火に炙（アブ）りたる麩。

やぎふしんかげ（ヤギウ）［柳生眞影］（名）柳生流に同じ。

やきふで［燒筆］（名）下繪を畫くに用ふる筆、木のさきをやきこがしたるもの。（木炭筆）。

やぎふりう（ヤギウ）［柳生流］（名）劍術の一派、柳生宗嚴を祖とす、眞影流より脫化せるもの。

やきみやうばん（ヨウ）［燒明礬］（名）【化】明礬を熱して其結晶水を失はしめたるもの、粗鬆なる白色の塊をなす、其水溶液は眼藥などに用ふ。（枯礬）。

やきめし［燒飯］（名）やきいひ。

（**やきもき**（名、副）「やきやき」に同じ。

やきもち［燒餅］（名）㊀火に炙（アブ）りたる餅。（煨餅、烑餻）。㊁志っと。ねたみ。――**やき**［燒餅燒］（名）志っと深き人。ねたみ深き人。

やきもの［燒物］（名）㊀土にてつくり燒きて製したるもの、稱、從來我國に行はるゝは、陶土を粉とし軟土とまぜ、水飛（スヰヒ）して其中澄のものを採り、火に乾かし水にて揑（コ）ね、種々の形につくり窯（カマ）に入れて燒く、これを素燒（スヤキ）といふ、素燒に燒物藥をかけ燒くを石燒といふ、又、土燒といふは埴土を原料とし燒物藥をかけてつくりたるもの、其法、石燒と殆ど同じ。（陶器）。㊁やきざかな。――**ぐすり**［燒物藥］（名）素燒の上にかけて燒き石燒又は

土燒とするもの、素燒の原料を水飛（スヰ）する際の上澄を取り、これに蚊母樹（ヒヨン）の果皮の灰を加へたるもの、繪具を加へて種々の色となすを得。ちやわんぐすり。（釉）。――し［燒物師］（名）陶磁器をやくことを業とする人。

（やぎやう［夜行］（名）よあるき。よめぐり。「百鬼―」。

（やぎやぎ（名、副）いらだち思ふさまにいふ語。

（やきよう［夜興］（名）夜のあそび。

やき-ゑ［燒繪］（名）燒鏝にてやきたる繪。

（やきん［冶金］（名）金屬をふき分くること。「採鑛―」。

（やく［役］（名）㊀えだち。公役。㊁つとめ。職務。責務。㊂受持。負擔。㊃芝居にて、脚色（シク）の中の人に扮して行ふべきもの。――にたつ　用をなすに足る。――にたたぬ　用をなさぬ。

（やく［厄］（名）㊀わざはひ。さいなん。㊁厄年。

（やく［約］（名）㊀ちかふこと。ちぎること。約束。㊁つゞまること。つゞまやか。㊂つゞむること。はぶくこと。㊃くゝり。かなめ。

（やく［譯］（名）㊀漢字の訓讀。よみ。㊁飜譯。

（やく［葯］（名）【植】雄蕊の先端にある部分、熟すれば裂開して花粉を出す。

やく（か、き、く、く、け、け）［燒］（他、か四）㊀火をつけてもやす。（燃、焚、燎）。㊁火中に投す。㊂火に當つ。㊃燒印を捺（オ）す。㊄陶磁器又は瓦若しくは木炭などを作る。㊅―りんきす。ねたむ。

やく（け、け、く、くる、くれ、けよ）［燒］（自、か下二）㊀火に燃えて灰となる。㊁火に當りて熱す。やかれて成る。㊂日光にあたりて黑くなる。㊃酸化してくもりを生ず。㊄食物胃に停滯して胸熱するが如く感ぜらる。㊅―ねたましくおもはる。

（やく［約］（副）およそ。ほゞ。「敵は―一大隊」。

（やぐ［夜具］（名）夜臥す時に用ふる布團・搔卷の類の總稱。

（やく-えき［藥液］（名）くすりのしる。

やく-おとし［厄落］（名）厄難をのがるゝこと。

（やく-か［藥價］（名）くすりのねだん。

（やく-かい［譯解］（名）飜譯してときあかすこと。

（やく-かい［厄介］（名）㊀他の厄難を救助すること。世話。介抱。㊁手數のかゝること。面倒なること。――もの［厄介者］（名）㊀他人の世話を受くる人。㊁ゐさふらふ。かゝりうど。

（やく-がく［藥學］（名）藥劑に就きて研究する科學。

やく-がひ［夜久貝］（名）【動】「やくわうのかひ」に同じ。

やく-がへ［役替］（名）㊀かはりたる職務に移ること。（轉役）。㊁役人の更迭。

やく-がら［役柄］（名）㊀役目の體面。㊁役目の性質。

（やく-き［躍起］（名）㊀をどりたつこと。をどりあがること。㊁せきこむこと。いらだつこと。

（やく-き［藥氣］（名）くすりの氣。

（やく-ぎ［役儀］（名）つとめ。やくめ。

（やく-きよく［藥局］（名）藥劑を調合する所。――せい［藥局生］（名）醫師の許（モト）にありて調劑の事をつとむる人。――はう［藥局方］（名）藥劑調合の方。

（やく-けふ［藥莢］（名）銃砲の火藥を入れて包みたるもの、これを銃砲身に裝塡す、發射の後莢のみ殘留す。

（やく-げん［約言］（名）つゞめていふこと。

（やく-ご［譯語］（名）飜譯したる語。

〜やく-ざ（名）役に立たざること。用ひどころなきこと。

（やく-さい［厄災］（名）わざはひ。さいなん。

（やく-ざい［藥劑］（名）藥の品類。くすり。――くわん［藥劑官］（名）陸海軍にて藥劑の事務にあたる高等官。――し［藥劑師］（名）醫師の處方箋により藥劑の調合をなすもの、規定の試驗に及第して免狀を有する者にあらざればなることを得ず。

（やく-さう［藥草］（名）くすりとするくさ。

廿やく-さ-む（む、み、む、む、め、め）［惱］（自、ま四）なやむ。わづらふ。

（やく-し［藥師］（名）【佛】衆生の病患を救ひ无明の痼疾を治する法藥をあたふといふ如來。（大醫王）【佛】。

（やく-じ［藥餌］（名）くすりと食物と。

（やく-しや［譯者］（名）飜譯したるもの。

（やく-しや［役者］（名）㊀其事をつとむる人。㊁演劇を行ふもの。俳優。

（やく-しゆ［扼取］（名）おさへとること。

（やく-しゆ［藥種］（名）くすりの材料。

（やく-しゆつ［譯出］（名）飜譯して出すこと。

（やく-じゆつ［譯述］（名）飜譯してのぶること。

やくしゆ-や［藥種屋］（名）藥種をあきなふ家。

（やく-しよ［役所］（名）官吏が事務を取扱ふ所。

（やく-しよ［譯書］（名）飜譯したる書物。

（やく-じよ［躍如］（名、副）㊀をどりたつさまにいふ語。㊁いき〳〵したるさまなるにいふ語。

やく-す（せ、し、す、する、すれ、せよ）［約］（他、さ變）㊀ちぎる。ちかふ。㊁つゞむ。はぶく。㊂【數】分數にて、分子・分母を其公約數にて割るにいふ。

やく-す（せ、し、す、する、すれ、せよ）［譯］（他、さ變）甲國の言語文字を乙國の言語文字になほす。

やく-す（せ、し、す、する、すれ、せよ）［扼］（他、さ變）㊀にぎる。㊁おさふ。㊂とりひしぐ。「力―虎」。

（やく-すう［約數］（名）【數】甲數が乙數にて割り

切るゝとき乙の甲に對する稱。「公―」

やく-すぎ［屋久杉］（名）大隅國屋久島に產する杉、節多く木理奧（ウツ）し。うづらもく。

（やく-せき［藥石］（名）くすりといしばりと、轉じて、療治。

（やく-せつ［約說］（名）つゞめて說くこと。

（やく-せん［藥箋］（名）「しよはうせん」（處方箋）に同じ。

（やく-ぜん［躍然］（名、副）「やくじよ」に同じ。

やく-ソウ［役僧］（名）寺院の事柄を取扱ふ僧。

（やく-そく［阨塞］（名）要害。

（やく-そく［約束］（名）㊀互に關係せる事につき、互に其將來に就きてとりきめおくこと。ちかひ。いひかはせ。㊁因果。因緣。「前世の―」。㊂規定。制限。――いうびん［約束郵便］（名）郵便官署と特約して、定期刊行物及印刷物を郵送するに其都度郵便切手を貼用せず一定の期間を經て其郵送したる數に對する料金を納付する手續。――ごと［約束事］（名）㊀ちかひたる事項。㊁因緣より成る事。――てがた［約束手形］（名）借務者が借權者に對して借權者又は其指圖人若しくは其手形所持人に一定の金額を支拂ふことを約束する手形、振出人が自ら支拂をなすべきものなるが故に別に支拂人を要せず、裏書によりて輾轉し得らるゝもの。

（やく-だい［藥代］（名）くすりのあたひ。―の。

（やく-たい-し［藥袋紙］（名）楮（カウゾ）の皮をとかしたる上に柿皮の皮をとかしたる液を厚く加へて漉（ス）きたる紙、質密にして強く褐赤色をなす、藥劑の袋とす。

〜やく-たい-な-し（く、し、き、けれ）（形、一）無益にて事の用に立たず。らちもなし。

（やく-たく［役宅］（名）官より其役目のものゝ住居に建て設けたる宅、官舍。

（やく-だく［約諾］（名）ちかひうけがふこと。

やぐち-の-まつり［矢口祭］（名）昔時、武將の狩獵ある時、黑・白・赤などの餅を供へて山神をまつりしこと。

（やく-ぢやう［約定］（名）ちかひ。とりきめ。――ずみ［約定濟］（名）とりきめの既に濟（ス）みたること。

（やく-てん［藥店］（名）藥をうるみせ。

廿やく-と［役］（名）つとめとして。もつぱら。

（やく-とく［役得］（名）その役目に關係して餘分の收入あること。

（やく-どく［藥毒］（名）藥劑に含まれたる毒。

（やく-どく［譯讀］（名）他國の語を譯して讀むこと。

やく-どし［厄年］（名）陰陽家にて、人の一生にて厄難あるべしとして忌む年、男のは二十五・四十二・六十にして、女のは十九・三十三なりといふ。

やく-な-し（く、し、き、けれ）［益無］（形、一）むだなり。

（やく-なん［厄難］（名）わざはひ。さいなん。

（やく-にん［役人］（名）政府の官吏。（有司）。

やく-ば［役場］（名）㊀官吏が擔當の事務を取扱ふ場所。（役所）。㊁町役場又は村役場の總稱。

やく-はらひ［厄拂］（名）㊀わざはひをはらひのぞくこと。㊁大晦日又は節分などの夜に、人の家に到り厄難を祓ふ詞を唱へて錢を乞ふもの。

（やく-びやう［疫病］（名）ひろく流行する傳染性の熱病。えやみ。ときのけ。はやりやまひ。――がみ［疫病神］（名）㊀疫病を發せしむといふ神。㊁人に忌（イ）みきらはるゝもの。

（やく-ひん［藥品］（名）くすりのしな。

〜やく-ぶそく［役不足］（名）自分の役前が心に滿たざること。

（やく-ぶつ［藥物］（名）くすりとなるもの。――がく［藥物學］（名）藥物に就きて研究する科學。

（やく-ぶん［譯文］（名）㊀飜譯の文。㊁漢文を假名交（マジ）り文に書き直すこと。

（やく-ぶん［約分］（名）【數】分數の値を變ぜずして其兩項を小さくすること、即ち兩項を其公約數にて割ること。

（やく-ほ［藥舖］（名）くすりや。藥店。

〜やく-まへ［役前］（名）自分の擔當する役。

（やく-まへ［厄前］（名）厄年の前の齡。

（やく-み［藥味］（名）㊀藥の品類。㊁山椒・胡椒・番椒・生薑・陳皮など食物に添へて食ふべき香料の類。――ざら［藥味皿］（名）藥味を調合する皿。――だんす［藥味簞笥］（名）いろ〳〵の藥味を入れおく簞笥、小さき引出の數多あるもの。

やく-め［役目］（名）つとめ。やくぎ。職務。

やくも-ごと［八雲琴］（名）「にげんきん」（二絃琴）に同じ。

（やく-もさう［益母草］（名）【植】「めはじき」に同じ。（茺蔚）。

やくも-たつ［八雲立］（枕）「出雲」に冠らする詞。

廿やくも-の-みち［八雲道］（名）和歌の道。

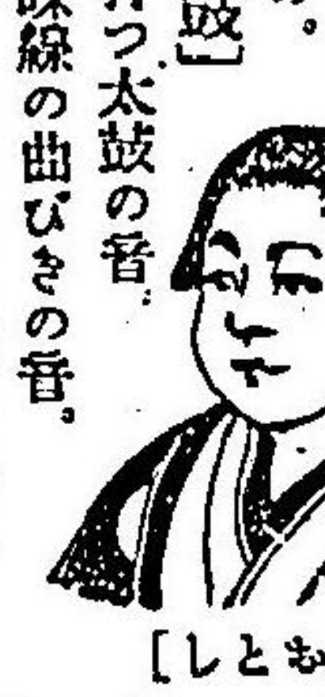
（やく-よう［藥用］（名）くすりとして用ふること。

や-ぐら［谷倉］（名）岩石を穿ちて物をおさめおく所としたるもの。

や-ぐら［櫓］（名）㊀昔時、城壁又は城門の上にきづきたるたかどの、遠きを望み又は矢石を發して敵を防ぐためのもの。（戰樓）。㊁親船の甲板。㊂すべて遠きを望むため高く築きたるもの。「火見―」。

㊃芝居又は相撲の興行場にて、高く構へ太鼓などを鳴らす所。㊄「こたつやぐら」の略言。——おとし［櫓落］（名）髮の結方、幕内の相撲取の結ふもの。

——だいこ［櫓太鼓］（名）興行場の櫓にて打つ太鼓の音。又、これにまねたる三味線の出びきの音。



［やぐらもとし］

（やく-れい［藥禮］（名）醫師に拂ふ藥の代價。

（やく-れう［藥料］（名）前條に同じ。

（やく-れう［役料］（名）職務に對する報酬。（俸祿）。

（やく-ろう［藥籠］（名）㊀くすりばこ。㊁印籠。——ちゆう-の-いちぶつ［藥籠中一物］（名）其人の部下又は門下にて、其人に直言するもの。——ぶた［藥籠蓋］（名）「いんろうぶた」に同じ。

（やく-ろん［約論］（名）つゞめて論ずること。

（や-くわ［野火］（名）のび。

（や-くわ［野花］（名）野にさく花。

（や-くわい［夜會］（名）㊀西洋風の夜の宴會、舞蹈などあるもの。㊁「やくわいむすび」の略言。——むすび［夜會結］（名）束髮の一種、長く高く結びてはでやかなるもの。

（や-ぐわい［野外］（名）のはら。——えんしふ［野外演習］（名）野外に於て行ふ演習。

（や-くわう［夜光］（名）夜間に光を發すること。——ちゆう［夜光蟲］（名）【動】原生動物の一、夜間燐光を放ち、海水もために光るよりいふ。——のかひ［夜光貝］（名）【動】螺の類、殼大きくして厚く、黑色の斑點あり、大隅國屋久島に產す。——のたま［夜光珠］（名）古代の支那にて、暗夜にも光るといひ傳へたる寶珠。又、金剛石。

やく-わり［役割］（名）それ〴〵に役前を割りつくること。又、其事を掌るもの。

（やく-わん［扼腕］（名）はなはだ殘念がりて、我と我腕をにぎりつむること。

やく-わん［藥罐］（名）㊀銅又は眞鍮などにて造りたる鐵瓶の如きもの、もとは、藥を煮（ニ）るに用ひしが、今はおもに湯を沸（ワカ）すに用ふ。㊁〔きんか。

〔——あたま［藥罐頭］（名）きんかあたま、又は、はげあたま。（京阪地方の方言）。

（やく-ゐん［役員］（名）會社などの事務をつかさどるもの。

（やく-ゑん［藥園］（名）藥草をあまた植ゑたる一かこひの地。

やけ［燒］（名）㊀燒くること。㊁日出前又は日没後に日光が雲に反射して空の赤く見ゆること。「朝——」。「夕——」。㊂〔邪の意の如くならざるを憤り自ら無謀のふるまひをなすこと。自暴自棄すること。

廿やけ［宅］（名）（「やか」の轉）いへ。

やけ-あと［燒跡］（名）㊀火に燒けたる跡。㊁火災ありたる所。

（や-けい［夜景］（名）よるのけしき。

（や-けい［野逕］（名）野なかのこみち。

やけ-いし［燒石］（名）火に燒けたる石。——にみづ　支拂ふべき先の多くして、手に入る金は忽に盡くるさまにいふ。

やけ-こがし［燒焦］（名）燒けて焦げたること。

やけ-じに［燒死］（名）火に燒けて死ぬること。（焚死）。

〔やけ-だされ（名）家燒けて外にあること。

やけ-ど［火傷］（名）火又は熱湯などのために、皮膚のそこなはるゝこと。（灼傷、火燒）。

やけ-の［燒野］（名）野火にて燒けたる野。——のからす［燒野鴉］（名）もの丶色黑きにいふ語。——のきぎす［燒野雉子］（名）子を思ふ情の切なることにいふ語。

〔やけ-のみ［燒飲］（名）やけになりて暴飲すること。

やけ-ばた［燒畠］（名）やきばた。

やけ-はら［燒原］（名）燒けたるあとの原。

〔やけ-ばら［燒腹］（名）やけを起すこと。

廿やけ-ふ［燒生］（名）燒野の草の生ひたる所。

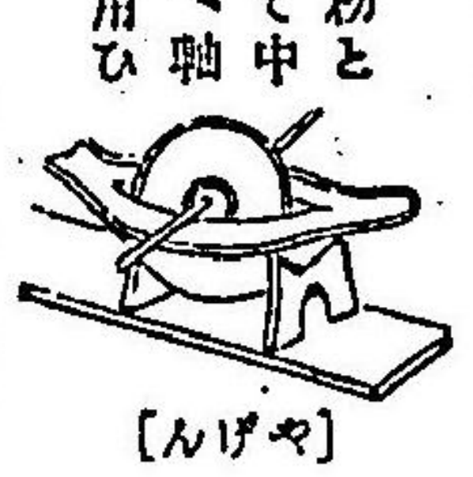
（や-げふ［夜業］（名）夜間に業務をとること。

〔やけ-ぶとり［燒太］（名）㊀やけどのあとのひろがること。㊁火災にかゝりたる以後、却って以前より財產の多くなること。

〔やけ-ぼっくひ［燒木杭］（名）やけつくしたるくひ。——にひがつく　一旦をさまりたる紛議の程經て再び持ちあがること。

やけ-やま［燒山］（名）㊀草木の燒けたる山。㊁休火山。

や-げん［藥研］（名）藥種を細粉となす金屬性の器具、形細長くして中深く窪（クボ）む、これに藥種を入れ、軸ある扇圓狀の金屬製のものを用ひておさへくだく。



［やげん］

（や-こう［冶工］（名）鑛物を吹き分け又は金屬を鑄造する事などを業とする職工。

（や-こく［夜國］（名）地球の北極に近く、一年の半ばは日光の照さゞる國。

や-こ-ぜん［野狐禪］（名）禪を學びて、未だ證見する所なきに、自ら深く造詣せりと傲ずるもの。

や-ごたへ［矢答］（名）㊀射たる矢の手答。㊁やさけび。

や-ごろ［矢頃］（名）矢を射るべきほどあひ。矢の達すべき距離。

やごゑ-の-とり［八聲鳥］（名）鷄の異稱。

やさ——［優］（接頭）或語に冠して、やさしき意を表する語、「——をとこ」。

（や-ざ［夜座］（名）夜いねずして坐し居ること。

（や-さい［野菜］（名）食用とすべき草本。あをもの。——もの［野菜物］（名）前條に同じ。

やさ-がし［家搜］（名）家のうちを殘らず搜索すること。

やさ-がた［優形］（名）やせてやさしきすがた。

やさか-に-の-まがたま［八尺瓊勾玉］（名）三種の神器の一。

廿やさ-か・む［痩］（自、ま四）やせほそる。

や-さき［矢先］（名）㊀やじり。㊁やおもて。㊂事の將にはじまらんとするとき。

や-さけび［矢叫］（名）㊀矢を射て手答ありし時に叫ぶ聲。㊁戰場にて、矢合の時にあぐるときの聲。

廿やさ・し［羞］（形、二）はづかし。

やさ・し［優］（形、二）㊀優美なり。みやびやかなり。㊁柔和なり。おだやかなり。しとやかなり（婉）。㊂容易なり。たやすし。

やさし-が・る（他、ら四）やさしく思ふ。

廿やさし-だ・つ（自、た四）優（ヤサ）しきさまをなす。

廿や-さすかり［八道行成］（名）一種の遊戲、盤に八條の線を描（エガ）き、石子を其線に從ひて、行（ヤ）るもの、即ち今の十六むさしの類。

や-ざま［矢狹間］（名）城の櫓（ヤグラ）又は女墻（ヒメガキ）などに設けたる窓、矢丸（タマ）を放ち又は外を望むためのもの。

やさ-やさ・し［優優］（形、二）いとやさし。

やさ-をとこ［優男］（名）やさしきをとこ。

やさ-をんな［優女］（名）やさしきをんな。

廿やし［海獺子］（名）介の類か、詳に知り難し。

（や-し［椰子］（名）【植】棕櫚科に屬する植物、熱帶地方に生ず、形棕櫚に似て直立し高さ五六丈以上に達す、果實は長さ八九寸徑四五寸許あり、中心空虛にして液あり、味美なり、椰子漿といふ。

や-し［矢師］（名）矢を造る工人。

〔や-し［野師］（名）緣日・祭禮などにて、粗造なる品物を賣り又は見世物などを興行する商人の類。（香具師）。

（や-し［野史］（名）民間にて撰述したる歷史。やしよう。

〔やじ-うま［彌次馬］（名）人の役につきてわけもなく騷ぎまはるもの。（東京の方言）。

や-しき［屋敷］（名）㊀家宅を構へたる一區域の土地。㊁士族の住宅。㊂〔外國商館の異稱。（橫濱の方言）。——ち［屋敷地］（名）屋敷を設くる土地。〔——もの［屋敷者］（名）士族たるもの。（東京の方言）。——わり［屋敷割］（名）屋敷地をわけわること。

やしなひ［養］（名）㊀やしなふこと。㊁肥料。——おや［養親］（名）やうしん。——ご［養子］（名）やうし。

やしな・ふ［養］（他、は四）㊀生長せさす。おほす。そだつ。㊁生活せさす。はぐゝむ。まかなふ。㊂かふ。（飼）。㊃守りて疲らしめず。補ひてよわらしめず。「浩然之氣を——」。㊄治めて健かならしむ。とゝのへてよくならしむ。「病を——」。㊅手許にそだておく。㊆部下としてなつけおく。

廿や-しは-ご［玄孫］（名）曾孫の子。やしやご。

（や-しふ［夜襲］（名）よるおそふこと。ようち。

や-しほ［八入］（名）㊀幾度となく染液にひたしてよく染むること。㊁（植）楓の一種、春の頃、葉いと麗（ウル）はしく赤く、夏に至りて綠色に變ず。

廿や-しほ-ぢ［八潮路］（名）あまたのしほぢ。

廿や-しほ-をり［八鹽折］（名）幾度もくりかへしてなすこと。——のさけ［八鹽折酒］（名）幾度もかもせる酒。——のひもがたな［八鹽折紐刀］（名）よく鍛（キタ）へたる刀。

や-しま［八洲］（名）「おほやしま」に同じ。

ヤシヤ［夜叉］（名）（梵語Yaksa）猛惡なる鬼神。——びしやく［夜叉柄杓］（名）【植】虎耳草科に屬する植物、深山に生じ、他の樹木に寄生す、春の頃、五瓣青白色の花開き、平滑なる漿果を生ず。てんばい・てんのうめ。——ぶし［夜叉五倍子］（名）【植】樺木科に屬する木、葉は卵狀披針形又は長楕圓形なり、果實は褐色の染料に供せらる。

（や-しやう［野釀］（名）ゐなかのさけ。

や-しやご［玄孫］（名）「やしはご」の約言。

（や-しゆ［野趣］（名）のはらのおもむき。又、ゐなかのおもむき。

（や-しよう［野乘］（名）民間にて撰述したる歷史。やし。

（や-しよく［夜色］（名）夜の景色。

（や-しよく［夜食］（名）㊀古昔、一日二食なりしとき、夜に入りて、別に設けたる食事の稱。㊁夕飯。ばんめし。ばんさん。

や-じり［鏃］（名）（矢後の義）やのね。

や-じり-きり［家後切］（名）家の壁などを切りて忍び入り物を盜むこと。又、其人。

や-しろ［社］（名）（屋代の義）㊀古昔、神を祀るにはとして地をきよめたる場所。（齋場）。㊁神を祀る殿舍。ほこら。

（や-しん［野心］（名）㊀（左傳に出づ）なれなつか

ざる心。そむく心。㊁たくらみ。のぞみ。

(や-じん［野人］（名） 無敎育もの。ゐなかもの。

やす［鉏］（名） 魚を刺し捕(ト)る具、鐵にてつくり端末とがれり、これに長き柄をつく。(魚扠)。

や・す（せ・せ・す・する・すれ・せよ）［瘠、痩、瘦］（自、さ下二） ㊀身體の肉減じほそる。㊁土地の生産力乏しく、草木よく成長せず。

廿やす-い［安寢］（名） 心安く眠ること。安眠。

やす-うけあひ（イ―ア）［安請合］（名） 前後の思慮もなく、輕々しく請合ふこと。

やす-ざらし［野洲晒］（名） 近江國野洲より產出するさらし木綿。

やす・し（く・し・き・けれ）［安］（形、二） ㊀災難に遠し。危からず。㊁おだやかなり。しづかなり。㊂窮屈ならず。氣樂なり。㊃うれひなし。こゝろよし。㊄品物の價低し。(廉)。

やす・し（く・し・き・けれ）［易］（形、二） ㊀難からず。たやすし。㊁其傾向あり。むき勝ちなり。

〻やすっぽ・い（く・い・い・けれ）（形、二） 品格なし。ねうちなし。

やすで［馬陸］（名）【動】多足類に屬する倍足動物、體軀は環節より成り圓筒狀をなす、環節に二對の細短なる脚を有す、濕地に棲息し草根又は腐敗物を食とす、惡臭を發す、これに觸るれば卷曲す。ぜにむし、ゑんざむし。あまびこ。

やす-ね［安直］（名） ねだんのやすきこと。

やすま・る（ら・り・る・る・れ・れ）［休］（自、ら四） やすらかになる。

やすみ［休］（名） ㊀やすむこと。㊁休日。㊂蠶が脫皮の際、食慾を缺き動作をやめて眠れる如き狀をなすこと。㊃病氣。(齋宮忌の詞)。――どころ［休所］（名） 休息する所。やすむ所。――び［休日］（名） きうじつ。――やすみ［休休］（副） つゞけずに。あひをおきて。

やす・む（ま・み・む・む・め・め）［休］（自、ま四） ㊀止む。やむ。㊁休息す。いこふ。㊂寢に就く。いぬ。

やす・む（め・め・む・むる・むれ・めよ）［休］（他、ま下二） やすましむ。

やすめ-じ［休字］（名）【文法】文中に有りて別に意味なき文字、即ち「名にしおはば」「いもにしあればの「し」の類。

〻やすめる［休］（他） 「やすむ」の訛。

やす-もの［安物］（名） ねだんやすき粗末なるもの。

やす-やす［易易］（名、副） いとたやすきさまにいふ語。

やす-やす［安安］（名、副） いとやすらかなるさまにいふ語。「―と眠る」。

廿やす-やす［瘦瘦］（名、副） いたく瘦せたるさまにいふ語。「―もいけらばあらんを」。

やす-らか［安］（名） ㊀おだやかにして無事なるにいふ語。㊁心配なくこゝちよきさまにいふ語。

廿やすら-け・し（く・し・き・けれ）［安］（形、二） やすらかなり。

廿やすら・ふ（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）（ウ―フ）［休］（自、は四） ㊀やすむ。いこふ。㊁ためらふ。躊躇す。「やすらはでねなましものを」。

廿やすら-に［安］（副） やすらかに。

や-すり［鑢］（名） 鋸の目を立て又は金類をすり研(ト)ぎするなどに用ふ、鋼鐵にて作り、兩面に細く刻みたる目あるもの。

やす-り［安利］（名） ㊀利息の低きこと。㊁利潤の少きこと。

(やせ［瘠、瘦、痩］（名） やすること。やせたる人。

(や-せい［野生］（名） 動植物のおのづから山野に生長するもの。

(や-せい［野生］（代） 卑下していふ自稱の代名詞。

〻や-ぜい［家税］（名） 家屋税又は家賃の俗稱。

やせおとろ・ふ（は・ひ・ふ・ふ・へ・へ）（ロウ―オト）［瘦衰］（自、は下二） やせておとろへよわる。

〻やせおとろへる（自） 「やせおとろふ」の訛。

やせ-がた［瘦形］（名） やせたるすがた、やさがた。

〻やせ-がまん［瘦我慢］（名） 殆ど堪へ難きを無理にたへしのぶこと。力及ばざれどしひて我慢すること。

〻やせ-ぎす（名） 體のいと瘦せて細きもの。

〻やせ-こ・ける（け・け・ける・ける・けれ・けよ）（自、か下二） いたく瘦せて肉おつ。

やせ-じよたい［瘦世帶］（名） まづしき世帶。

やせ-しんだい［瘦身代］（名） まづしき身代。

やせ-ち［瘠地］（名） ㊀地味豐饒ならず草木の生長よろしからぬ土地。㊁瘦せたる身體。

(や-せつ［野拙］（代） 己を卑下していふ自稱の代名詞。(野生、拙者)。

〻やせっぽち（名） やせてちひさき人をのゝしりていふ語。

廿やせ-どころ［瘦所］（名） やせち。

やせ-ほそ・る（ら・り・る・る・れ・れ）［瘦細］（自、ら四） やせてほそる。

廿やせ-やせ-に［瘦瘦］（副） いたくやせて。

(や-せん［野戰］（名） 平野に於ける戰爭。――いうびん［野戰郵便］（名） 戰地に臨時設けたる郵便。――はう（ウ―ホ）［野戰砲］（名） 險道平かにして野戰に從事し得る火砲、輕量にして兵と共に容易く運搬し得らるゝ裝置のもの。(野砲)。――はうへい（ウ―ホ）［野戰砲兵］（名） 野戰砲を操縱する砲兵。――びやうゐん（ウ―ヒョ）［野戰病院］（名） 戰場に於ける軍隊の後方にありて負傷者に治療を施す處。

(や-ぜん［夜前］（名） 昨日の宵。よべ。

や-そ［八十］（名） 數の多きことにいふ語。

や-そ［八十］（數） 十を八倍せる數。やそぢ。はちじふ。

やそ-うぢびと［八十氏人］（名） 多くの氏の人。

廿やそ-くまぢ［八十隈路］（名） 死者の行く路。

廿やそ-くまで［八十隈路］（名） 前條に同じ。

ヤソ-けう（ロウ―キ）［耶蘇敎］（名） 「キリストけう」に同じ。

廿やそ-しま［八十島］（名） おほくのしま。

廿やそ-たける［八十梟帥］（名） おほくの梟帥(タケル)。

やそ-ぢ［八十］（數） 「やそ」に同じ。

や-たい［屋臺］（名） ㊀屋根ある臺、持ち運びの出來るもの。㊁をどりやたい。――みせ［屋臺店］（名） ㊀屋臺にてものを賣る店、とこみせ。(露店)。㊁嘔吐すること。(へど) 〻――ぼね［屋臺骨］（名） 身代。

や-だいじん［矢大神］（名） 神社の隨身門にある隨身の裝ひしたる像、ずゐじん。

や-たがらす［八咫烏］（名） 神武天皇東征のとき、みちびきをなしたりといふ烏。

や-だけ［箭竹］（名）【植】竹の一種、雌竹に似て細きもの、矢をつくるに用ふ。

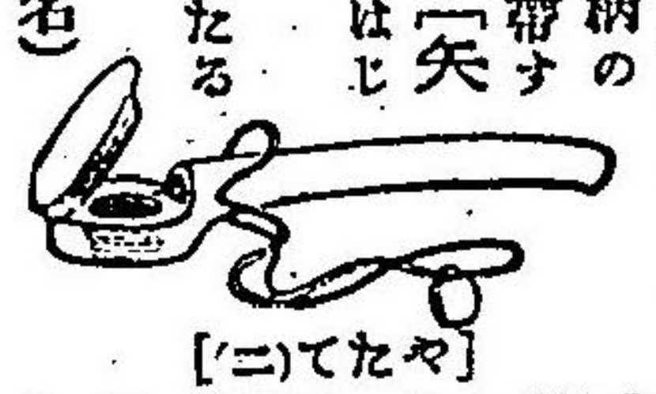
やたけ-ごころ［彌猛心］（名） いやましに勇みすゝむこゝろ。

やたけ-に［彌猛］（副） いやましにいさみすゝみて。「―勇む」。

や-たて［矢立］（名） ㊀軍陣にて箙(エビラ)の中に入れて携帶する硯。㊁墨壺に柄ありて、柄の中に筆を入るゝやうにつくりて携帶するもの。(墨斗)。――のはじめ［矢立初］（名） 旅行日記などの書きはじめ。

や-だね［矢種］（名） えびらにさしたる限りある矢。「―も盡きはてゝ」。

廿やた-の-かがみ［八咫之鏡］（名） 三種の神器の一。



［やたて(二)］

廿や-たふな-に（ウ―ト）（副） 矢を用ふるまでもなく。

やたら-づけ［矢鱈漬］（名） 種々の野菜を取り交(マ)ぜて、漬けたるもの。

〻やたら-に［矢鱈］（副） わいだめなく、みだりに。むやみに。(妄、濫)。

や-ち［谷地］（名） 濕などの濕地。

廿や-ち-くさ［八千種］（名） ㊀種類の多きこと。㊁深山の草木。

や-ち-しほ（オ―シ）［八千入］（名） あまたゝび染むること。

やち-たび［八千度］（名） あまたゝび。

やち-また［八千衢］（名） おほくのちまた。またのみち。

(や-ちやう（ヨウ―チ）［野帳］（名） 土地測量の際、測量したる事項を凡て記入する帳面。

(や-ちゆう［夜中］（名） 夜のほど。夜間。よなか。

(や-ちよ［野猪］（名）【動】「ゐのしし」に同じ。

(や-ちん［家賃］（名） 貸家の賃。(店賃)。

〻やつ［奴］（名） (「やっこ」の略言)人を指して罵りいふことば。「―の僻論」。

〻やつ［谷］（名） たに。(相模地方の方言)。

や-つ［八］（名） 昔の時の名、今の午前又は午後の二時に當る。

や-つ［八箇］（數） 七に一を加へたる數。

やつ-あし［八脚］（名） 「やつあしのつくゑ」の略言。――のつくゑ［八脚机］（名） 脚の八本ある白木の机、神を祭るに用ふるもの。

〻やつ-あたり［八當］（名） 誰彼の差別なく、あら〳〵しくあたること。

や-つか［八束］（名） たけの長きこと、「―の劍」「―足穗」。(八拳、八握)。

やつ-がしら［八頭］（名） ㊀【動】鳩鴿類に屬する

鳥、形鳩に似、嘴黑くして長し、頭上黃色の羽あり、背部は紫色をなし腹部は白色にして黑斑あり。㊁さといもの球莖の稱。

やつがれ［僕］（代） 謙遜していふ自稱の代名詞。拙者。

や-つぎ［矢繼］（名） 矢を弓につぎかふること。――ばや-に［矢繼早］（副） ㊀矢繼をなすことはやく。㊁たゝみかけて。

やつ-くち［八口］（名） 衣服のわきあけ。

や-づくり［家作］（名） 家屋をつくること、又、其つくりかた。

廿やつ-こ［臣］（名） (家之子の義) ㊀君に仕ふる人。㊁人に使はるゝ男女。(孥)。

やっこ［奴］（名） (前條の轉) ㊀しもべ。下男。㊁しもべの髮の風、頂顱の髮を深く廣く剃(ソ)りて髻(ワゲ)短かきもの。㊂人をのゝしりていふ語。㊃「やっこどうふ」の略言。――あたま［奴頭］（名） 前條(二)に同じ。――だこ［奴凧］（名） 武家の奴の袖を張りたるさまにこしらへたる凧。――どうふ［奴豆腐］（名） 豆腐を小さく方形に切り、醬油をつけて食ふもの。

やつ-ざき［八裂］（名） ずた〳〵にさくこと。寸斷。

やつし-がき［俏書］（名） 字畫を省略してかくこと。

やつし-がた［俏形］（名） 芝居にて、遊冶郎のさまに扮するもの。

やつし-じ［俏字］（名） やつしがきにしたる字。

やつしろ-やき［八代燒］（名） 肥後國八代より產出する陶器、淡褐色にて白き模樣あるもの。

やつ・す（さ・し・す・す・せ・せ）［俏］（他、さ四） ㊀姿をやつ〳〵しくなす。やつるゝやうになす。くづす。㊁なまめかしくかざる。めかす。㊂其姿をよそほふ。(扮)。㊃字

の莖を省略す。くヅす。

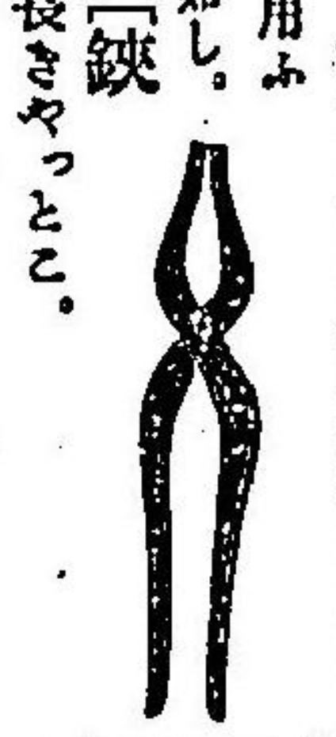
やゞつ「矢筒」（名）矢を入れさしおく筒。

やつ-で「八手」（名）㊀【植】五加科に屬する灌木、葉は大形にして掌狀に分裂す、花は小形にして白色を呈し少しく綠色を帶ぶ、夏の頃開く、觀賞用として栽培せらる。てんぐのはうちは。（八角金盤）。㊁「やつであみ」の略言。――あみ「八手網」（名）四手網に更に四本の手をそへたるもの。

やつ-さ（副）からうじて。やう〳〵に。

やつ-どき「八時」（名）「やつ」に同じ。

やっとこ「鋏」（名）（「やとこ」の音便）鍛冶の鐵鋏を挾み持つ時などに用ふる器、形は釘拔の如し。（鐵鉗）。――ばし「鋏箸」（名）嘴（ハシ）の長きやっとこ。


［やつとこ］

〰**やっとこさで**（副）「やっと」に同じ。

〰**やっとこせで**（副）前條に同じ。

〰**やっとこまかせに**（副）前條に同じ。

〰**やっぱし**（副）「やはり」に同じ。

やつ-はな-がた「八花形」（名）周圍の八角なる鏡。やつはなざき。

やつ-ばら「奴儕」（名）多くのものどもをいやしめていふ語。

〰**やっぱり**「矢張」（副）「やはり」に同じ。

やつ-ぶさ-の-うめ「八房梅」（名）【植】梅の一種、花は單瓣白色にして、一蕚に八個の實を結ぶ。

や-つぼ「矢壺」（名）㊀やづゝ。やなぐひ。㊁矢をはなつ手頃のねらひ場所。

やつむね-づくり「八棟造」（名）神社又は城の天主閣などに、四方の棟の破風を二つゞゝつけたるもの。

やつめ-うなぎ「八目鰻」（名）【動】圓口類に屬する魚、形うなぎに似る、全身赤褐色なり、眼下に七個の鰓孔ありて恰も眼の如し。（鰻魚、文魚）。

やつめ-かぶら「八目鏑」（名）穴の多くある鏑。

やつ-やつ-し（しく、しく、し、き、しけれ）「窶窶」（形、二）いたくやつれたるさまなり。

やつ-よ「彌世」（名）久しく年を經（フ）ると。

やつ-る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）「窶」（自、ら下二）㊀やせ衰ふ。おとろへかじく。㊁さまかたちあしくなる。かたちかはる。

やつれ「窶」（名）やつるゝと。――すがた「窶姿」（名）やつれたる姿。

（**や-さ**「野渡」（名）野中のわたしば。

（**や-ど**「宿」（名）（屋處の義）㊀住む家。すみか。㊁旅にてとまる家。はたごや。㊂奴婢などの親許又は保證人の家。㊃他人に對し、妻が自己の夫をさしていふ語。――をかる　かりうけて宿となす。――をとる　宿と定めてこれにとまる。

やど-かへ（エ、ガ）「宿替」（名）やうつり。轉居。

やど-かり「宿借」（名）借家せる人。

やど-かり「寄居蟲」（名）【動】甲殼類中十脚類に屬する節足動物、形は蝦に似て螯を有し、腹部は柔軟なり、多く空虛なる螺の殼の中に棲む。がうな。

十**やど-こ**「鋏」（名）「やっとこ」に同じ。

やど-さがり「宿下」（名）奉公人の暫時暇を乞ひて、我宿に歸ると。やどおり。

やど-す（さ、し、す、す、せ、せ）「宿」（他、さ四）㊀やどらす。とまらす。㊁懷姙す。はらむ。

やど-せん「宿錢」（名）やどりて拂ふ料金、はたごせん。

やど-ちやう（ヨウ、チ）「宿帳」（名）宿りたる客の住所姓名などをつけこむ帳。

やど-ちん「宿賃」（名）やどせん。

やど-なし「宿無」（名）一定の住家なきもの。

やど-ぬし「宿主」（名）やどのあるじ。

やとひ（イ、ヤト）「雇」（名）㊀やとふと。㊁やとはれたる人。㊂日本官又は本務にあらざる職員。――きり「雇切」（名）常にやとひおくと。――ど「雇人」（名）次條に同じ。――にん「雇人」（名）やとひてつかふ人。――ぬし「雇主」（名）他人をやとひてつかふ本人。――びと「雇人」（名）やとひにん。

やど-ひき「宿引」（名）おのが家へと旅客を誘ひひく人。

やと-ふ（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）「雇」（他、は四）賃錢又は給料を拂ひて、一時人を使役す。（傭）。

やど-ふだ「宿札」（名）家を他に知らするためのかけ札。

やど-もと「宿許」（名）㊀やどる所。㊁すむ所。㊂下婢などの宿とする所。

十**やど-もり**「宿守」（名）家の番人。

やど-や「宿屋」（名）旅人をやどすを業とする家。はたごや。とまりやど。旅館。旅宿。

やどり「宿」（名）㊀やどると。㊁やどる所。㊂星座。㊃十妻。――ぎ「宿木」（名）㊀他の樹木に寄生する木。㊁【植】桑寄生科に屬する植物、葉は革質にして倒卵狀楔形をなし對生す、花は兩性花にして葯は小孔を開き花粉を散ず、果實は黏（チモ）を製する料に供せらる。（桑寄生）。十――の-つかさ「宿官」（名）古昔、卑官より顯職に轉ずる時、暫時ある官に任ぜられしと。

やど-る（ら、り、る、る、れ、れ）「宿」（自、ら四）㊀旅宿としてとまる。とまる。㊁寄生す。㊂其もの丶中に身を托す。㊃星其座にうつる。㊄受胎す。はらむ。

〰**やど-ろく**「宿六」（名）亭主の賤稱。（東京の方言）。

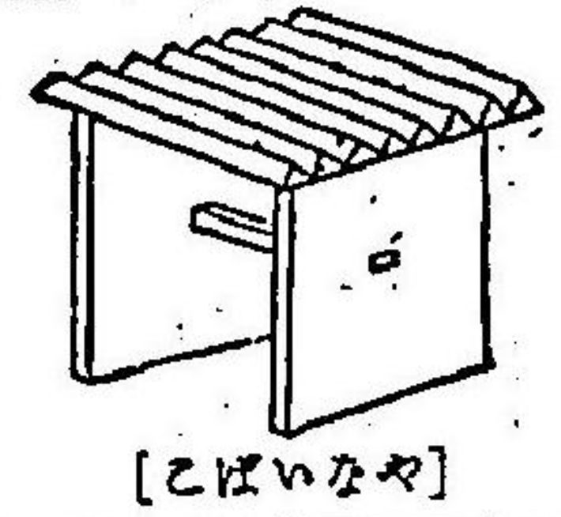
やど-わり「宿割」（名）宿處をわけて人數をくばりあつると。

やな「簗」（名）木を並べ水を塞（フサ）ぎて、魚を捕ふる裝置のもの。（魚梁、魚箔）。

〰**やな-あさって**「明明後日」（名）「やのあさって」の訛。

十**やない-ば**「柳筥」（名）次條に同じ。

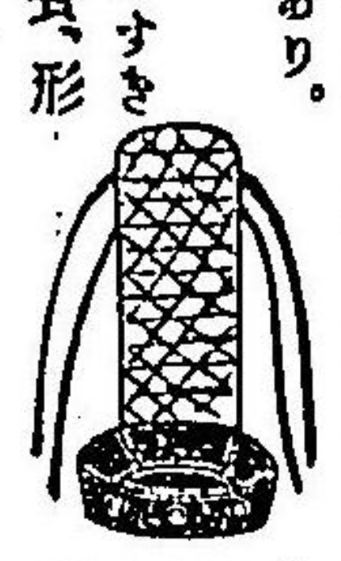
十**やない-ばこ**「柳筥」（名）柳の細き枝にて編みたる匣、其蓋に冠・鞠・硯・短冊などを戴（ノ）せしもの、後に柳の細枝を脚と板とに結びつけて小さき机の狀（サマ）となしゝものをもいひ、又、三角形の白木の橡をならべ板にて脚をつくれるものをもいへり。


［やないばこ］

やな-がは（ワ、ガ）「柳川」（名）「やながはなべ」の略言。――なべ「柳川鍋」（名）どぢやうなべ。

や-なぎ「柳」（名）㊀【植】楊柳科に屬する木、多く水邊に生ず、枝下垂す、葉は桃に似て細長なり、春の頃、黃色の花開く、木材は種々の用に供せらる、種類多し。かざみぐさ。（楊柳）。㊁かさねの色目、表白く裏の赤きもの。㊂「やなぎいろ」の略言。㊃人の言にさからはぬと。うまくうけこたへすると。「――に受く」。――いろ「柳色」（名）白色を帶びたる青色。――かうり（ウ、コ）「柳行李」（名）「やなぎごり」に同じ。――ごし「柳腰」（名）細くしてたをやかなる腰附。――ごり「柳行李」（名）こぶやなぎの枝にて編（ア）みたる行李。――だる「柳樽」（名）㊀角樽又は柄樽の類。㊁川柳の句集。――の-いと「柳絲」（名）柳の枝の細長きを絲にたとへていふ語。十――の-いとなみ「柳營」（名）「りうえい」の文字讀。――の-まゆ「柳眉」（名）細長く美しき眉。美人の眉。――よもぎ「柳蓬」（名）【植】菊科に屬する草、高さ二三尺、葉は柳に似、微毛を具す。花は小形淡黃色にして枝頭に簇生す。（蓬）。

やな-ぐひ（イ、グ）「胡籙」（名）矢を盛りて背負ふ具、平やなぐひ、壺やなぐひあり。（柳箙、胡簶）。


［やなぐひ］

やな-す「簗簀」（名）簗のすきまにあて、魚を捕ふる簀、形すだれに似る。

やな-せ「簗瀬」（名）簗をうちわたしたる川の瀨。

や-なみ「矢並」（名）㊀矢のならび。㊁やつぎ。――つくろふ　矢の列を整ふ。矢を揃ふ。

や-なり「家鳴」（名）家屋の鳴り動くと。

やに「脂」（名）㊀樹の分泌せる粘液。㊁煙草より生じて、煙管の中に溜（タ）まる粘液。㊂めやに。――しる「脂汁」（名）前條に同じ。

〰**やにっこ-い**（く、い、い、けれ）（形、二）㊀もろし。㊁むづかし。㊂いかめし。

十**や-には**（ワ、ニ）「家庭」（名）ひとざと。「もゝちたる――もみゆ」。

やには-に（ワ、ニ、ヤ）「矢場」（副）たちどころに。たゞちに。

十**や-にれ**「楡」（名）【植】「にれ」の古稱。

や-ぬし「家主」（名）㊀一家の主人。㊁家の所有者。いへぬし。

や-ね「屋根」（名）（屋嶺の義）㊀家の上の雨露を凌ぐため瓦・板・茅などにて葺きたる部分。㊁すべて物の上に雨露を凌ぐためのおほひ。――いた「屋根板」（名）屋根を葺くに用ふる板の小片。――がへ（エ、ガ）「屋根替」（名）屋根をとりかふると。――ふき「屋根葺」（名）屋根を葺くと。又、其業の人。――ぶね「屋根船」（名）屋根をつくり設けたる小船。――や「屋根屋」（名）屋根葺を業とする人。

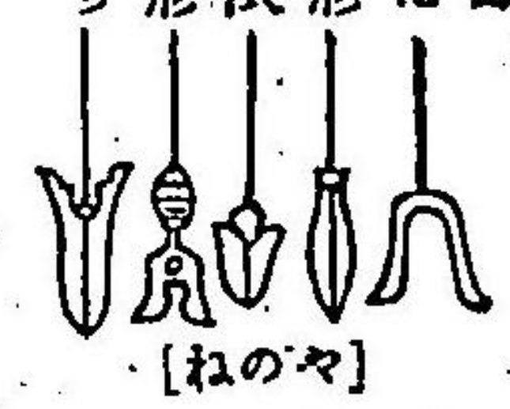
や-の-あさって「明明後日」（名）明後日の次の日、しあさって。やなあさって。

や-の-さいそく「矢催促」（名）しば〳〵いそぎうながすと。

や-の-じ「やの字」（名）帶などの結び方、やといふ字のさまに結ぶもの。

や-の-つかひ（カイ、カツ）「矢使」（名）㊀昔時、戰場にて矢に書簡を結びつけ射て先方へおくりやりしと。㊁度々來るいそぎのつかひ。

や-の-ね「矢根」（名）矢の箆（ノ）のさきにつけたる小さき矛（ホコ）のごときもの、多くは鐵にてつくり、物に中りて立ち込むために尖端を銳くしたるもの、其形種々あり。（鏃）。――いし「矢根石」（名）石器時代の武器、矢根の形をなす、今日土中より往々採掘せらる。（石鏃）。


［やのね］

〰**や-は**（ワ、ヤ）「柔」（名）やはきと。やはきもの。

や-は（ワ）（助）㊀反語をなす語。「そこひなき水――さわぐ」。㊁疑ふ意を表する語。

や-ば「矢場」（名）㊀弓を射るところ。㊁楊弓店。㊂轉じて、表面は楊弓店をなし、裏面に密淫賣婦をおく家。

（**や-ば**「野馬」（名）野にゐる馬。のま。

（**や-ばい**「野梅」（名）野生の梅樹。

（**や-はう**（ウ、ホ）「野砲」（名）「やせんはう」（野戰砲）に同じ。

や-はか（カ、ヤワ）（副）何んとして。いかで。「――さることのあるべき」。

やはぎ［矢矧］（名）矢をつくる工人。（矢人）。

（や-はく）［夜泊］（名）よるのふながゝり。

やは-し（ヤワシ）［（くしき）（けれ）］［柔］（形、二）やはらかなり。よわし。軟弱なり。

＋やは-す（ヤワス）［（さしすせ）（すせぜ）］［和］（他、さ四）やはらぐやうにす。

や-はず［矢筈］（名）㊀矢の頭の弦をかくる部分。㊁打ちちがひて矢の羽に似たる模樣。矢飛白。——もち［矢筈餅］（名）矢筈の形にこしらへたる餅、儀式に用ふるもの。——をとる　矢を番へて直ちに引放たんとするさまに言ふ。

やはた-ぐろ（ヤワタグロ）［八幡黑］（名）黑く染めて柔かにしたるもみ革、山城國八幡邊より産出するもの。

やはた-ごばう（ヤワタゴボウ）［八幡牛蒡］（名）山城國八幡より産する牛蒡。

やばね［矢羽根］（名）矢にはぐ羽根。

やは-だ（ヤワダ）［柔肌］（名）やはらかなるはだ。

やは-やは（ヤワヤワ）［柔柔］（名）やはらかなるさまにいふ詞。

やはら（ヤワラ）［柔］（名）㊀やはらとり。柔術。㊁急所。

＋やはら（ヤワラ）［徐］（副）「やをら」に同じ。

やはらか（ヤワラカ）［柔］（名）やはらかきこと。——もの［柔物］（名）絹布。

やはらか-し（ヤワラカシ）［（くしき）（けれ）］［柔］（形、二）㊀堅からず。こはからず。㊁おだやかなり。㊂しなやかなり。

やはら-ぐ（ヤワラグ）［（がぎぐぐ）（げげ）］［和］（自、か四）㊀やはらかになる。しなやかになる。㊁しづまる。をさまる。㊂むつまじくなる。したしくなる。㊃のどかになる。おだやかになる。

やはら-ぐ（ヤワラグ）［（げげぐぐ）（るれげよ）］［和］（他、か下二）やはらぐやうになす。やはらがしむ。

やはら-ぐさ（ヤワラグサ）［黃耆］（名）【植】「わうぎ」に同じ。

やはら-とり（ヤワラトリ）［柔取］（名）柔術の稱、慶安年中、明人陳元贇歸化して江戸にあり、浪人福野七郎右衞門・礒貝次郎左衞門・三浦與次右衞門これに就きて拳法を學び、更に發明せしところを加へたるもの。

やはり［矢張］（副）そのまゝ。なほ。も亦。

（や-はん）［夜半］（名）よなか。

（や-ばん）［夜番］（名）よばん。

や-ばん［野蠻］（名）㊀人智未だひらけず一般の物事の幼稚なること。開化せざること。又、其人民。㊁無作法なること。無教育なること。又、其人。

（や-ひ）［野鄙］（名）ひなびたること。いやしきこと。

＋や-ひら-で［八開手］（名）神を拜する時に手をあまたゝび拍（ウ）ちならすこと。

やぶ［藪］（名）㊀草などの多く叢生せるところ。㊁竹の林。㊂「やぶいしや」の略言。㊃「やぶにらみ」の略言。——い［藪醫］（名）次條に同じ。——いしや［藪醫者］（名）（藪の如く僅かの風邪（カゼ）にもさわぐといふ意）術の拙き醫者の稱。（庸醫）。——いり［藪入］（名）正月又は七月の十六日前後に、奉公人が、おのれの宿にかへること。やどさがり。やどいり。（走百病）。——か［藪蚊］（名）【動】一種の蚊、大形黑褐色にして脚部及腹部に白色の輪紋あり、刺すこと鋭し。（豹脚蚊）。——かうじ（ヤブコウジ）［藪柑子］（名）【植】（い）紫金牛科に屬する小木、莖は草本狀をなし高さ四五寸許、葉は茶の葉に似て薄く互生す、花梗は葉腋に生じ少數の花を着く、花は夏の頃に開き白色にして赤色の小點を有す、果實は通常紅色を帶ぶ、觀賞用として栽培せらる。（紫金牛）。（ろ）「からたちばな」の一名。（九州の方言）。——からし［藪枯］（名）【植】（い）葡萄科に屬する草、山野に自生す、纏繞莖を有す、葉は掌に似て互生し、嫩葉は赤色なれど後に淡綠色に變ず、花は四瓣綠色にして夏の頃開き實を結ぶ。ひさごづる、びんぼづる、かきとほし。（烏蘞苺）。（ろ）「あをかづら」の一名、〜——からぼり　唐突な事をいひ又は行ふにいふ。——だたみ［藪疊］（名）藪の志げりたる處。——だま［藪玉］（名）【植】「ほこりだけ」に同じ。——にくけい（ヤブニッケイ）［藪肉桂］（名）【植】（い）樟科に屬する木、葉は革質にして三大脈を有し横線あり、花は綠黃色を呈す、果實は三四房をなし下垂し、熟すれば黑色を呈す、材は芳香あり、蠟を採取すべく、又、建築・器具等の種々の用に供せらる。（ろ）「めかづら」の一名。——にらみ［藪睨］（名）物を見るに瞳（ヒトミ）を正しくすること能はざる不具、ひがら。（斜眼）〜——ねらめ［藪睨］（名）「やぶにらみ」の訛。〜——へび［藪蛇］（名）（やぶをつゝいて蛇を出す義）餘計な事をなして禍を買ふこと。——めうが（ヤブミョウガ）［藪茗荷］（名）【植】鴨跖草科に屬する草、葉は茗荷に似、花は白色小形にして、頂部に生じ圓錐狀花序をなす。雄蕊六個あり。（杜若）。

やぶさか［吝、嗇］（名）㊀深くものをしみすること。㊁吝惜をすてがたがること。「過を改むるに—ならず」。

やぶさ-め［流鏑馬］（名）（矢馳馬の轉）騎射の式、馬を馳せ鏑矢にて的を射ること、矢は三本にして弓は白重藤を用ひ、狩衣・綾藺笠（アヤヰガサ）・行縢（ムカバキ）・籠手（コテ）を着くるを古式とす。

や-ぶみ［矢文］（名）㊀矢に結びつけて敵軍の中に送る文書。㊁たゝみかけて發送する書狀。

やぶる［（らりるる）（れれ）］［破、敗］（他、ら四）㊀きずつく。こはす。さく。（傷、毀、壞）。㊁敵を負（マ）かす。まかす。㊂亂す。「家を—」。「法を—」。㊃成り立たしめず。

やぶる［（れれるるるれ）（れよ）］［破、敗］（自、ら下二）㊀きずつく。こはる。さく。（傷、敗、壞）。㊁敵に負（マ）く。まく。㊂亂る。㊃成り立たず。「約—」。

やぶれ［破］（名）やぶるゝこと。又、やぶれたる處。——がさ［破笠］（名）㊀破れたるかさ。㊁【植】菊科に屬する草、葉大形にして七八寸許、其狀恰も破れたる笠に似たり、花は黃白色を呈し莖頂に簇生して穗狀をなす。〜——かぶれ（名）やけれて事の成否善惡に頓着なきこと。

（や-ぶん）［夜分］（名）㊀よなか。夜半。㊁よる。

や-へ（ヤエ）［八重］（名）㊀八つかさなりたること。㊁數多く重なりたること。㊂花冠の數片重なれるもの。（重瓣）。——がき［八重垣］（名）幾重にも結（ユ）ひなしてある垣。——ぐも［八重雲］（名）雲のいくへもかさなれるもの。——ざくら［八重櫻］（名）【植】一種の櫻、花の重瓣なるもの。——なり［八重生］（名）【植】あづきの一種、實は綠色若しくは茶色にして小なり。（綠豆）。＋——のしほぢ（ヤエノシオジ）［八重潮路］（名）遙かなる潮の流。遙かなる海。——ば［八重齒］（名）重なりて生じたる齒。そひば。（重齒）。——むぐら［八重葎］（名）㊀繁茂せるむぐら。㊁【植】茜草科に屬する草、原野又は、路傍に自生す、莖細く長く、葉は茜（アカネ）に似小さくして毛刺あり輪生す。（豬殃殃）。——やま［八重山］（名）山の多く重なれるもの。

＋や-ほ［彌帆］（名）大船の舳（モト）に張る帆。——ばしら［彌帆柱］（名）大船の舳のやほをかくる柱。

や-ほ（ヤオ）［八百］（數）百の八倍。

や-ほ（ヤオ）［八百］（名）數の多きこと。

〜や-ぼ［野暮］（名）世情に通ぜざること。人情を解せざること。風流心のなきこと。ぶいき。ぶこつ。下品。

＋やほ-あひ（ヤオアイ）［八百會］（名）多くのもゝのあつまりあふ處。「潮の—に」。

＋や-ほこ［八矛］（名）矛の數多きこと。

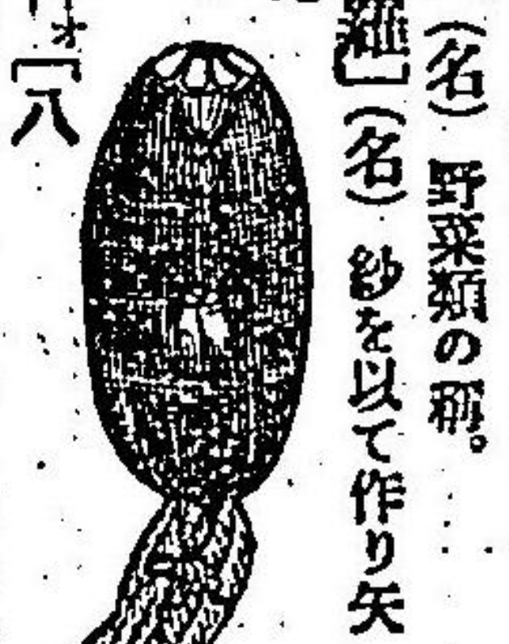
＋や-ほち［夜發］（名）よたか。つじぎみ。（辻君）。

＋や-ほ-ぢ（ヤオジ）［八百路］（名）遼隔なる地。「潮の—」。

〜や-ほ-ちやう（ヤオチョウ）［八百長］（名）雙方かねて打合せおきてとる相撲。

や-ほ-や（ヤオヤ）［八百屋］（名）㊀野菜物を賣る人又は家。㊁〜雜駁なる學問をなしたる人。——もの［八百屋物］（名）野菜類の稱。

やぼろ［矢母羅］（名）紗を以て作り矢の數の敵に見えざるために被（オ）ふ母衣。



［やぼろ］

やほ-よろづ（ヤオヨロズ）［八百萬］（名）數のいと多きこと。「—の神」。

やま［山］（名）㊀平地より高く大きく隆起せるもの。さんがく。㊁時、比叡山の特稱。「—法師」。㊂堆（ウヅタカ）く盛りたるもの。㊃確かなる見込なければ、萬一を僥倖してなすこと。「—を張る」。㊄〜「やまぼこ」。（京都地方の方言）。

やま-あざみ［山薊］（名）【植】あざみの一種、山野に自生す、葉は大形にして刺あり、花は淡紫色にして穗狀に排列す。おにあざみ。

やま-あひ（ヤマアイ）［山間］（名）山と山とのあひ。たにま。

やま-あらし［山嵐］（名）山より起るあらし。

やま-あらし［山狁］（名）【動】嚙齒類に屬する獸、「インド」「アフリカ」などに產す、大いさ兎の如く、脊上に長大なる棘毛を生ず。（豪猪、山豕）。

やま-あららぎ［山蘭］（名）【植】「こぶし」の一名。

やま-ある［山藍］（名）【植】大戟科に屬する草、山中に自生す、葉は對生し一種の液汁を有す、昔時はこの液汁を採（ト）りて青色の染料としたり。

やま-いぬ［山犬］（名）【動】食肉類中犬科に屬する獸、形犬に類し體痩（ヤ）す、性猛惡なり。

やま-いぬ［病犬］（名）狂犬。

（や-まう）（ヤモウ）［夜盲］（名）とりめ。

やま-うつぎ［山空木］（名）【植】虎耳草科に屬する灌木、高さ三四尺、葉は圓狀にして尖（トガ）り鋸齒を有す、花は淡紫紅色又は白色若しくは紅色を呈し圓錐花序に排列す、果實は黑褐色にして內に種子あり、木材は「パイプ」に製せられ、又、製紙の糊料に供せらる。

やま-うば［山姥］（名）山にゐるといふ女性の怪物。（山姑、野婆）。

やま-うばら［藜蘆］（名）【植】「しゆろさう」（棕櫚草）に同じ。

〜やま-うり［山賣］（名）萬一の僥倖を期してものを賣ること。

やま-うるし［山漆］（名）【植】（い）山中に自生する漆樹の稱。（ろ）「つたうるし」の一名。

やま-おくり［山送］（名）のべのおくり。

やま-おろし［山颪］（名）㊀山より吹き下（オ）ろす風。㊁山おろしの音に似たる鳴物。

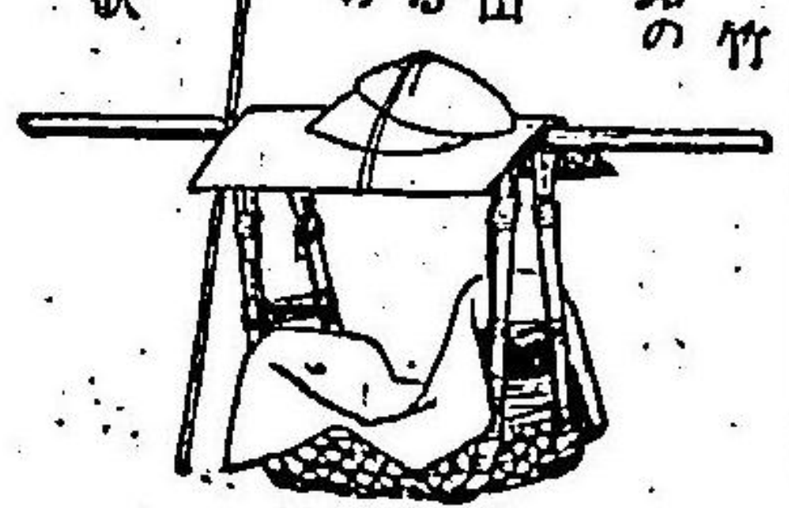
やま-が［山家］（名）山中にある家。山里の家。

やま-かがし［赤棟蛇］（名）【動】蛇の一種、山林又は深澗に棲息す、全身に紅黑色の斑文あり、舉動敏捷にして性質猛惡なり、劇毒を有し人これに咬（カ）まるゝときは生命を失ふに至る。

＋やま-かがち［蟒蛇］（名）【動】をろち。うはゞみ。

やまかけ-どうふ［山掛豆腐］（名）山のいもの汁をかけたる八杯豆腐。

やま-かご[山駕籠](名) 竹て編みたる手輕の駕籠、山路のに用に供するもの。


［やまかご］

やま-かぜ[山風](名) ㊀山より吹き來る風、山中に起る風。㊁【地】夜間山頂附近の部は山嶺に比してはやく地面熱を輻射するた山め、頂より溪谷に沿ひて吹き下る風。

やま-かせぎ[山稼](名) 山に稼ぎに行くと。

やま-が-そだち[山家育](名) 山家にて生長せると。

やま-かた[山形](名) ㊀卄射場の的の後方に引きたる幕。㊁中高くして兩邊の斜に下(サガ)り山の形をなせるもの。

卄**やま-かたな**[山刀](名) なたの類、樵夫の用ふるもの。

卄**やま-がつ**[山賤](名) 山中に住む賤人、即ちきこり、そまびとなどの稱。(山兒)。

やま-がに[山蟹](名)【動】蟹の一種、山谷・溪間又は河堤に穴居す、大さ二寸許、螯(ハサミ)赤し。いしがに、あかゞに。(石蟹、溪蟹)。

やま-がはワーガ[山川](名) 山間をながるゝ川。——**ざけ**[山川酒](名) 白酒。

やま-がへるエールガ[山蛙](名)【動】「あかゞへる」に同じ。(山蛤、黄蛤)。

やま-がら[山雀](名)【動】燕雀類中やまがら科に屬する鳥、頭部は黄色にして赤色を帶び眼邊に黑條あり、背部は灰赤色にして腹部は淡赤色、他はすべて黑色なり、山林に飛翔し昆蟲を捕食す、性、怜悧にして敎ふれば種々の藝をなす。(山陵鳥、山迦)。

やま-がらす[山鴉](名)【動】(い)「はしぶとがらす」の一名。(ろ)「みやまがらす」の一名。

やまが-りう[山鹿流](名) 兵法の一派、山鹿素行を祖とするもの。

やま-かんむり[山冠](名) 漢字の冠の名、即ち岩・嶺等の上にある山の字の稱。

やま-き[山木](名) 山に生ふる木。

〔**やま-き**[山氣](名) 冒險又は投機の心あると。

やま-きず[山疵](名) 陶器の製造せるときの疵。

やま-ぎり[山桐](名)【植】「あぶらぎり」に同じ。

やま-くす[山楠](名)【植】「いぬくす」に同じ。

やま-くぢら[山鯨](名) 猪肉の異稱。

やま-くづれ[山崩](名)【地】地下水の作用により岩石の組織ゆるみて山壁の崩るゝと。やまつなみ。

やま-ぐはワーグ[山桑](名)【植】山茱萸科に屬する木、葉は山茱萸に似、白色花瓣様の四個の苞よりなる總苞を有す、木材は種々の用に供せらる。いつき。(雞桑、檿)。

やま-こ[山子](名) 猿の老いたるもの。(玃)。

〔**やま-こ**[山子](名) やま氣のある人。

やま-ごばうワーボ[山牛蒡](名)【植】商陸科に屬する草、莖は直立し高さ三四尺、葉は大形にして楕圓狀をなし互生す。夏の頃、三四寸の花梗を出だし五瓣淡紅白色の花開く、根は塊狀をなし横に延(ノ)ぶ、藥用に供せられ、又、葉と共に灰汁にて煮れば食するを得。いをすき。(商陸)。

やま-ざくら[山櫻](名)【植】櫻の一種、葉は廣披針狀若しくは長楕圓形をなし緣邊に鋸齒を有す、萼は圓筒形なり、花は單瓣白色にして他種の櫻にさきだちてはやく開く、觀賞用として栽培せられ、木材樹皮は種々の用に供せらる。

やま-ざと[山里](名) 山中の人里。

やま-し[山師](名) ㊀鑛物を掘り出す業の人。かねほり。㊁山木を賣買する業の人。㊂確かなる目的なく萬一を僥倖して事を行ふ人。投機者。行險者。㊃詐欺師。

やま-し（しく しけれ しき）[疾、疚](形、二) 心中安からず。心なやまし。うしろぐらし。はづかし。

やま-した[山下](名) 山のふもと。

卄**やま-じほ**オージ[山鹽](名) 山より出づる鹽、即ち岩鹽。

卄**やま-すげ**[山菅](名)【植】「やぶらん」に同じ。

〔**やま-せ**[山背](名) 東風。(津輕地方の方言)。

やま-ぜり[山芹](名)【植】(い)「たうき」(當歸)の一名。(ろ)「ばうふう」(防風)の一名。

やま-だし[山出](名) ㊀山より出すと。㊁始めて都會に來たるゐなかもの。ぽっとで。

やま-だち[山立](名) 山賊。

やま-たちばな[山橘](名)【植】「やぶかうじ」の一名。

卄**やま-たづ**[山鐇](名) 木を以て造れる斧。

やま-ぢ[山路](名) 山中のみち。

卄**やま-つ-いも**[山芋](名)【植】「やまのいも」に同じ。

やま-づたひタイーヅ[山傳](名) ㊀山より山へと傳ひゆくと。㊁【植】「いはがねさう」の一名。

やま-つなみ[山津浪](名) やまくづれ。

卄**やま-つみ**[山祇](名) 山の神。

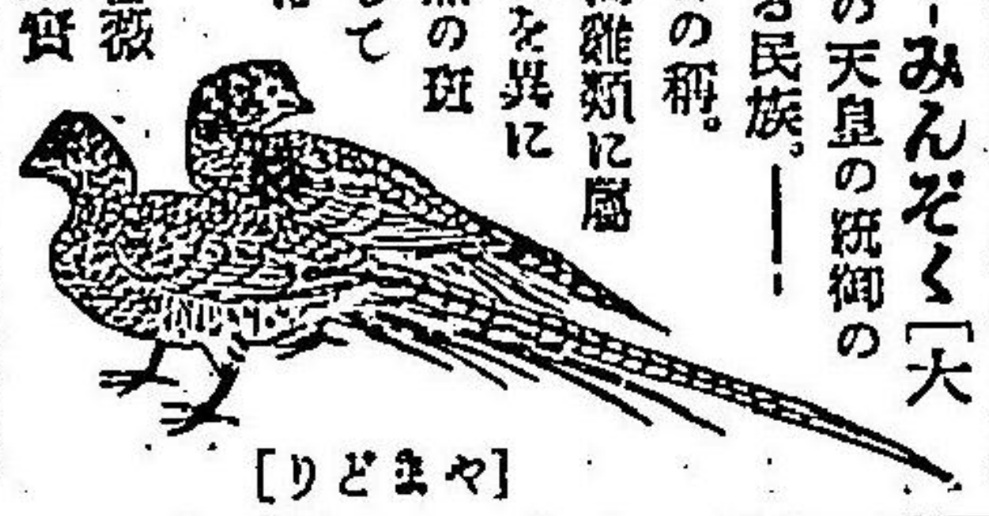
やま-て[山手](名) 山に近き方。やまのて

やま-デラ[山寺](名) 山中にある寺院。

やま-と[大和](名) 畿内の一國の名なれど、京都奠都の以前世々の天子の都せられしより轉ずて我日本國の稱。(日本)。——**うた**[大和歌](名) 上代より我國に行はるゝ三十一文字の歌の稱。和歌。(日本歌)。——**がな**[大和假名](名) かたかな。

——**ごころ**[大和心](名) ㊀我國の學問、即ち我國の古典などの研究。㊁やまとだましひ。——**ごたつ**[大和炬燵](名) おきごたつ。——**ごと**[大和琴](名) あづまごと。(倭琴)。——**ことのは**[大和言葉](名) やまとうた。和歌。——**ことば**[大和詞](名) ㊀我國の言語。(和語)。㊁和歌。㊂雅言。——**しまね**[大和島根](名) 我日本國の一名。——**だましひ**[大和魂](名) ㊀大和民族の固有せる忠孝節義を重んずる獻身的精神。日本人固有の精神。㊁卄才能のあると。「あたらしき智を見るにもくらからじ、よみ開ぬる—」。——**とぢ**[大和綴](名) ㊀書物の開く折目の邊に孔を穿ち其孔に絲を通して綴(ト)づる綴方。又、其綴方の書物。㊁紙を中央より折りたる折目に孔を穿ち、其孔に絲をとほして綴づる綴方、又、其綴方のもの。てってふぼん。——**ぶえ**[大和笛](名) 六孔ある笛、神樂に用ふるもの。——**まひ**イーマ[大和舞](名) 一種のまひ、八人の少女が榊を持ちて行ふもの。——**みんぞく**[大和民族](名) 古來萬世一系の天皇の統御の下にありて我日本國を組織せる民族。——**もじ**[大和文字](名) 假名の稱。

やま-どり[山鷄](名)【動】鶉雞類に屬する鳥、形、雉子に似、雌雄毛色を異にす、雄は全身赤黄色にして赤黑の斑を有して尾長し、雌は黑色にして稍や赤色を帶び尾短し、山野に棲む。(山雉、鵫)。


［やまどり］

やま-なし[山梨](名)【植】薔薇科に屬する木、枝に刺多し、果實は棗(ナツメ)に似、味酸(ス)く澁(シブ)し。いぬなし。(鹿梨)。

やま-なみ[山列](名) 山の立ちならべると、連山。

やま-ぬけ[山拔](名) 山くづれ。

やま-の[山野](名) やまとのはらと。

やま-の-いも[山芋](名)【植】薯蕷科に屬する植物、纏繞莖を有し、初めは紫色にして後に綠色に變ず、朝顏に似たる網脉葉を有す、秋の頃、淡紅色の花を開き實を結ぶ、根莖は長さ數尺に達するものあり、澱粉質に富み食用に供せらる。(薯蕷)。

やま-の-かみ[山神](名) ㊀やまつみ。㊁妻をあざけりていふ語。

やま-の-すそ[山裾](名) 山のふもと。

やま-の-て[山手](名) やまて。

やま-の-ゐ[山井](名) 山中に水のたまりて自然に井戸の狀をなすもの。

やま-の-は[山端](名) やまのはし。

やま-ばち[山蜂](名)【動】「くまばち」に同じ。

やま-ばと[山鳩](名)【動】「きじばと」の一名。又、「あをばと」の一名。——**いろ**[山鳩色](名) 濃き黄色、麴塵(キクヂン)の御袍などの染色。

やま-ばん[山番](名) 山の番人

やま-はん-の-き[山榛](名)【植】「ヤシャブシ」の一名。

やま-ひイヤマ[病、疾](名) ㊀身體の健全ならぬ所ありてなやむと。病毒におかさるゝと。いたづき。わづらひ。(疢)。㊁よからぬ性癖。

やま-びこ[山彥](名) ㊀山の神。㊁山谷などにて、聲音の返響するを。こだま。(山響、反響)。

やま-ひ-だれイヤマ[疾垂](名) 漢字の冠の名、病・痛等の字の上にある疒の字の稱。

やま-びと[山人](名) ㊀山里に居住する人。㊁山にすみて仙術を得たる人。せんにん。(仙人)。

やま-ひめ[山姬](名) 山を守る神女。(山神)。

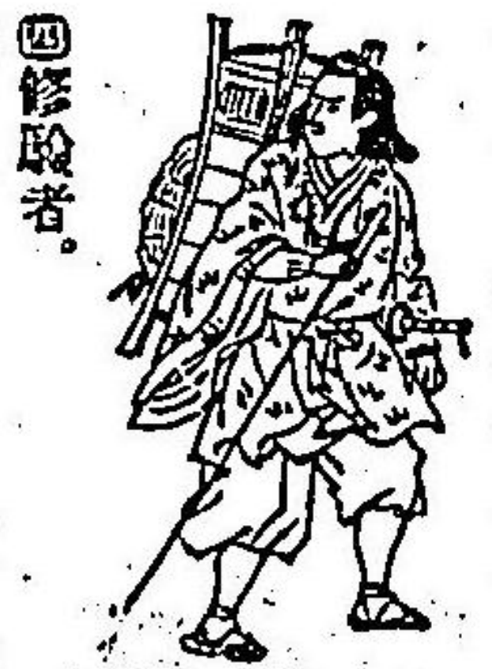
やま-びる[山蛭](名)【動】蛭の一種、深山の濕地に生ず、大形にして、人畜に吸ひ着き血液を吸ふ、其吸痕は痛痒となり易し。かさびる。

やま-ふウヤマ[ふはひふ][病](自、は四)「やむ」の延言。

卄**やま-ふき**[山蕗](名)【植】山中に自生する蕗の稱。やまふゝき。

やま-ぶき[山吹](名)【植】薔薇科に屬する灌木、莖は背綠色にして細く叢生す、中心柔かにして白色なり、葉は單葉にして桃に似る、初夏の頃、黄金色の花開く。(棣棠花、荼蘼)。——**いろ**[山吹色](名) (い)こがねいろ。黄色。(ろ)黄金。——**にほひ**オイニ[山吹匂](名) かされの色目、表裏共に黄色なるもの。

やま-ぶし[山伏](名) ㊀山中にやどると。㊁山中の住家。㊂山野に起臥して行をなす僧侶。㊃修驗者。


［やまぶし］

やま-ふところ[山懷](名) 山中の恰も懷の如くこもりたる地。

卄**やま-ふふき**[山蕗](名)【植】「つはぶき」に同じ。

やま-べ[山邊](名) 山のほとり。

やま-ぼこ[山鉾](名) だんじりの一種、上に鉾・薙刀などを立つるもの。

やま-ほととぎす[山時鳥](名)【動】山に棲むほとゝぎす。

やま-ほふしウーホ[山法師](名) 叡山延曆寺の僧徒。

やま-まゆ[山繭](名)【動】山繭蛾の幼蟲、形蠶に似、蠶より稍短かし、櫟・櫪などの葉を食ひ黄色の繭を結ぶ、繭より絹絲を採取すべし、其絲は甚だ強し。——**おり**[山繭織](名) 山繭の繭より

採取したる絲を以て織れる絹布。――つむぎ［山繭紬］(名) 前條に同じ。――のてふ（ヨウチ）［山繭蛾］(名)【動】鱗翅類中蛾類に屬する昆蟲、翅は深黄色にして褐色の横線を有し、各一個の透明なる斑紋あり、其幼蟲は卽ち山繭なり。

やま‐みち［山路］(名) 山中の路。

やま‐みづ［山水］(名) 山中にある水。

やま‐め［水蠆］(名)【動】「たいこむし」の一名。

やま‐もと［山下］(名) 山のふもと。やまのすそ。

やま‐もも［山桃］(名)【植】(い)楊梅科に屬する木、葉は革質平滑にして長楕圓狀をなし、常綠なり、春の頃黄白色の花開く、果實は球形にして多數の小突起を有し熟すれば紅色を呈し、食用に供せられ、樹皮は藥用又は染料に供せらる。(楊梅)　(ろ)梅の一種、支那より渡來す、葉は柔軟にして尖る、果實は外皮粗にして中に種子あり。(聚梅)。

やま‐もり［山守］(名) 山を守るもの。山の番人。

やま‐もり［山盛］(名) 器に高くものを盛ること。

やま‐やま［山山］(名) ㊀おほくの山。㊁分量の多きをいふ。「―積れる話」。

やま‐わけ［山分］(名) 兩分すること。二つに分くること。

卄**やま‐わけ‐ごろも**［山分衣］(名) 山路を分け行く時に着る衣。

やま‐をとこ［山男］(名) 深山にすみ猿に似たりといふ怪物。(山丈)。

やみ［闇］(名) ㊀夜の暗きこと。㊁道理の辨別なきこと。「子を思ふ心の―」。㊂亂れてをさまらざること。――**にくる** 心亂れて分別にまどふ。――**にまどふ** 前條に同じ。

やみ［病］(名) やまひ。

やみ［止］(名) やむこと。

やみ‐あがり［病後］(名) 疾病なほりて、未だほどへぬこと。

やみ‐あげく［病揚句］(名) 前條に同じ。

やみ‐うち［闇討］(名) ㊀闇にまぎれて人の不意を襲ふこと。㊁轉じて人の不意を驚かすこと。

やみ‐かへし（エシ カ）［病返］(名) 一旦なほりたる疾病の再びあともどりすること。ぶりかへし。

〔**やみ‐くも**［闇雲］(副) 前後の思慮なく。わいだめなく。みだりに。

やみ‐ぢ［闇路］(名) ㊀やみのよに行く路。㊁行くへのわからぬこと。分別のつかぬこと。「戀の―」。

やみ‐つき［病附］(名) やみつくこと。

やみ‐つ・く（かくく くけけ）［病附］(自、か四) やまひにかゝりそむ。

やみ‐の‐うつつ［闇現］(名) ㊀やみの中の物事。㊁心亂れたるときの現象。

やみ‐の‐にしき［闇錦］(名) 「よるのにしき」に同じ。

やみ‐の‐よ［闇夜］(名) くらき夜。

やみ‐やみ［闇闇］(副) 知らずに。不意に。

やみ‐よ［闇夜］(名) 「やみのよ」に同じ。

や・む（まみむむめめ）［止］(自、ま四) 其もの事行はれず。其もの事用ひられず。とゞまる。とまる。をはる。はつ。

や・む（めめむむるるれめよ）［止］(他、ま下二) 其もの事を行はず。其もの事を用ひず。とむ。とゞむ。たつ。廢す。

や・む（まみむむめめ）［病］(自、ま四) 病氣にかゝる。わづらふ。なやむ。

や・む（まみむむめめ）［病］(他、ま四) やましく思ふ。うれはしく思ふ。

や‐め［矢目］(名) 矢の立ちたる孔。

やめ［止］(名) やむること。中止。

やも‐め［孀］(名) 夫の無き婦人。(寡婦)。――**だふし**（オ―シ）［孀倒］(名) 「いなこき」の異稱。昔こき箸とて篠竹を並べて、寡婦などの稻をこくを業としたりしが、いなこき發明せられ、ために寡婦職を失ひたりといふ義なり。

やも‐め［鰥］(名) 妻なき男子。をとこやもめ。

や‐もり［家守］(名) 人の家を守る者。(屋守)。

や‐もり［守宮］(名)【動】蜥蜴類に屬する爬蟲、形とかげに似て、暗灰色なり、趾端は平濶にして下面に細微なる横襞を有し、よく他物に附着す、墻壁などに攀ぢて昆蟲を捕食す。(壁虎)。

やも‐を［鰥夫］(名) をとこやもめ。

や‐や［稍］(副) ㊀だんだん。やうやう。(漸)。㊁よほど。いと。㊂すこしく。わづか。暫時。「―ありて」。

やや(感) ㊀呼びかくる發聲。㊁驚きたる時の發聲。

やや‐さ‐も‐すれ‐ば［動］(副) 「ややもすれば」に同じ。(輙)。

卄**やや‐ま・し**（しくしくしきしけれ）［疾、疚］(形、二) こゝろやまし。なやまし。

やや‐も‐すれ‐ば［動］(副) 物事につけて。よく。ともすれば。(輙)。

卄**やや‐む**（まみむむめめ）［疾、疚］(自、ま四) やましく思ふ。

卄**やや‐も‐せ‐ば**［動］(副) 前條に同じ。

(**や‐ゆ**［揶揄］(名) あなどりもてあそぶこと。からかふこと。

や‐よ(感) 他を呼びかくるにいふ感歎詞。やあ。

卄**やよ‐ひ**（イ―ヨ）［彌生］(名) 陰暦三月の異稱。

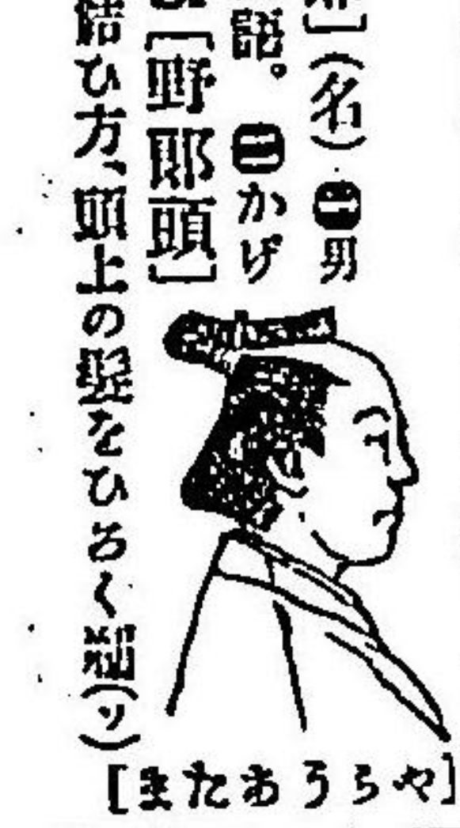
卄**や‐よろづ**［八萬］(名) 數多きこと。

〔**やら**(助) ㊀「やらむ」の略言。㊁二つ以上の物事をならべ說くときに用ふる語。「蹴る―打つ―」。

やらい［矢來］(名) (遣(ヤラ)ひの誤)竹などを縱横に粗(アラ)く組みたる境界の垣(カキ)。

(**や‐らい**［夜來］(副) ㊀數夜このかた。㊁夜になりてより。

(**や‐らう**（ウ―ロ）［野郎］(名) ㊀男子を罵りていふ語。㊁かげま。――**あたま**［野郎頭］(名) 男子の髮の結ひ方、頭上の髮をひろく剃(ソ)りたるもの。



［やらうあたま］

〔**やらか・す**（さしすすせせ）(他、さ四) おこなふ。なす。

〔**やら・ふ**（ウヤラ）（はひふふへへ）［遣］(他、は四) 「やる」の延音。

やら‐む(助) 助詞の「や」と「あらむ」とを合せたる語、確かならざる意にいふ語。「何―」。

やり［槍］(名) ㊀人又は獸などを突くための武器、細長き刃を穗とし、これに細長き柄をつけたるもの、刃の形によりて種々の名稱あり。㊁將棋の駒、香車に同じ。――**がんな**［槍鉋］(名) かんなの一種、槍の穗に似て曲(マガ)りたるもの、さをがんな。

〔**やり‐あふ**（ウ―ア）（はひふふへへ）［遣合］(自、は四) あらそふ。たゝかふ。

(**や‐りう**［野流］(名)【地】傾斜緩慢なる地盤を流るゝ河。

〔**やり‐くり**［遣繰］(名) やりくること。――**さんだん**［遣繰算段］(名) やりくりの工夫。

〔**やり‐く・る**（らりるるれれ）［遣繰］(自、ら四) 物事を種々に振りかへてなす。いろいろにして都合をつくりあはす。(經營、拮据)。

やり‐こ・む（めめむむむるむれめよ）［遣込］(他、ま下二) 議論していひこむ。論破す。

〔**やりこめる**［遣込］(他) 「やりこむ」の訛。

やり‐じるし［槍標］(名) 槍につくる目標。

やり‐だし［遣出］(名) 船の舳に突出したる帆桁。(頭桿、艏嘴)。

やり‐だま［槍玉］(名) 槍にて突く目的物。「―に擧ぐ」。

やり‐つかひ（イ―カ）［槍遣］(名) 槍術を學ぶ人。又、槍術に達したる人。

〔**やり‐つ・ける**（けけけるけるけれけよ）［遣附］(他、か下二) やりこむ。やっつける。

〔**やりっ‐ぱなし**［遣放］(名) 「やりばなし」に同じ。

やり‐て［遣手］(名) ㊀行ふ人。する人。㊁物を與ふる人。くるゝ人。㊂手腕ある人。器量ある人。㊃遊郭の花車(クワシヤ)の稱。

やり‐ど［遣戶］(名) 「ひきど」(引戶)に同じ。

やり‐ばなし［遣放］(名) 事をなし始末をつけず其まゝすておくこと。(跌放)。

やり‐ぶすま［槍衾］(名) 槍を多く立て並ぶること。

やり‐みづ［遣水］(名) 庭などへながしやる水。ながしみづ。

やり‐もち［槍持］(名) 昔時、武家にて主人の槍を持ちて從ひし者。

や・る（らりるるれれ）［遣］(他、ら四) ㊀ゆかす。㊁つかはす。㊂與ふ。

や・る（らりるるれれ）［行］(他、ら四) ㊀行ふ。なす。㊁操縱す。はたらかす。「車を―」。㊂つゞり作る。「文を―」。

卄**や・る**（らりるるれれ）［破］(他、ら四) やぶる。

や・る（れれるるるるれれれよ）［破］(自、ら下二) やぶる。

やる‐かた‐な・し（くしくしきけれ）［遣方無］(形、一) ㊀いたしかたなし。㊁心を慰むる術なし。

やる‐せ［遣瀨］(名) おもひをはらすべきすべ。心の安まるところ。――**な・し**（くしくしきけれ）(形、一) 思をはらすべきすべなし。心のやりどなし。

やれ［破］(名) やるゝこと。やぶれ。やぶれたるもの。

やれ‐がき［破垣］(名) 破れたるかき。

やれ‐がさ［破笠］(名) 破れたる笠。

やれ‐ま［破間］(名) 破れたる間隙。

やれ(感) ㊀「やよ」に同じ。㊁ねぎらひいたはるときの發聲。㊂よわりくじけたるときの發聲。――**やれ**(感) (「やれ」を重ねたる語) 前條㊁㊂に同じ。

(**や‐ろう**［藥籠］(名) 印籠に似て圓き器、藥を入るるもの。――**ぶた**［藥籠蓋］(名) 「いんろうぶた」(印籠蓋)に同じ。

(**や‐わ**［夜話］(名) 夜集りて話すること。

やをら(副) しづかに。そろそろ。

卄**やん‐ごと‐な・し**（くしくしきけれ）［止事無］(形、二) ㊀捨て置かれず。㊁普通ならず。㊂極めて貴し。

〔**やんま**(名)【動】(い)「とんぼう」に同じ。(ろ)とんぼうの一種、大形にして青綠色なるもの。ゑむば。

やん‐や(感) 褒めはやす發聲。(喝采)。

ゆ

ゆ 母音「い」を從音とし母音「う」を主音としたる綴音。

ゆ［湯］(名) ㊀水を煮えたゝしたるもの。水をわかしたるもの。㊁いでゆ。溫泉。㊂ふろ。洗湯。㊃卄煎茶。㊄苗代の水。

ゆ［涖］(名) 船に溜りたる水。あか。(淦)。

ゆ［柚］(名)【植】「ゆず」に同じ。

卄**ゆ**［搖］(名) 琴を彈ずるに絃をゆすること。「―し按ず」。

卄**ゆ**(助) 「る」(被)に同じ。「ねのみし泣か―」。

卄**ゆ**［從］(助) より。から。「田子の浦ゆ打出てみれば、眞白にぞ」。(自)。

ゆ‐あか［湯垢］(名) 鐵瓶などの內部に著く垢のご

ときもの、水にとけたる石灰、石脂など瓦斯より分れて附着するなり。

ゆ-あがり[湯上](名) 湯より出でたる時。

ゆ-あみ[浴](名) 湯にかゝりて身體をあらふこと。

ゆう[柚](名) 【植】「ゆず」に同じ。

(ゆう[雄](名) ㊀をす。を。㊁をゝしきこと。たけきこと。又、其もの。㊂すぐるゝこと。ひいづること。又、其もの。「韓信是—」。

(ゆう[勇](名) 膂力のすぐれて強きこと。氣力のすぐれてたけきこと。つよきこと。たけきこと。いさましきこと。

(ゆう-かい[融解](名) 固體が液體となること。とくること。——**てん**[融解點](名) 【理】物體が融解するときの溫度、氷にては攝氏零度なり。

(ゆう-がふ（ウーゴ）[融合](名) とけて一つになること。

(ゆう-かん[勇悍](名) たけくしてすばやきこと。

(ゆう-かん[勇敢](名) たけくして物事をおしきりてなすこと。

(ゆう-き[勇氣](名) いさましき意氣。臆せざる氣概。

(ゆう-くわ[雄花](名) 【植】單性花にて雄蕊のみを有する花。

(ゆう-けつ[雄傑](名) すぐれひいでたるもの。

(ゆう-けん[勇健](名) いさましくすこやかなること。

(ゆう-こん[雄渾](名) 言論又は文章のをゝしく品よくして且つよどみなきさまにいふ語。

(ゆう-さう（ウーソ）[勇壯](名) いさましくさかんなること。

(ゆう-し[勇士](名) たけき人。つよき人。

(ゆう-し[雄姿](名) をゝしきすがた。いさましきすがた。

(ゆう-しやう（ヨーシ）[勇將](名) つよき大將。

(ゆう-しやう（ヨーシ）[熊掌](名) くまの手のひら、古昔、支那にては美味のものとせり。

(ゆう-しん[雄心](名) をゝしき心。たけき心。

(ゆう-ずゐ[雄蘂](名) 【植】花の生殖機關の一、花絲及葯より成りたるもの。

(ゆう-せん[勇戰](名) いさましくたゝかふこと。

(ゆう-たい[勇退](名) 未練なく官職などより身をひくこと。「—高蹈」。

(ゆう-だい[雄大](名) をゝしくして大いなること。

(ゆう-たん[熊膽](名) くまのい。

(ゆう-だん[勇斷](名) 勇氣を以て決斷すること。いさましきけつだん。

(ゆう-づう[融通](名) ㊀とゞこほりなくとほること。㊁さはりなく通ずること。(流通)。㊂物を彼此に通はして用ふること。「金錢の—」。㊃頓才。「—がきく」。

ゆうづう-ねんブツ[融通念佛](名) 【佛】(い)自稱身のふる念佛を衆生に回向すれば其功德また自身に融通すといふこと。(ろ)「ゆうづうねんブツしゆう」の略言。——**しゆう**[融通念佛宗](名) 【佛】佛敎の一派、融通念佛を敎義とす、大治年中僧良忍これを創(ハジ)め、元亨年中僧法明これを再興せしもの。

(ゆう-てん[融點](名) 【理】「ゆうかいてん」(融解點)に同じ。

(ゆう-と[雄圖](名) をゝしきくはだて、大いなる計畫。

(ゆう-ひ[雄飛](名) 他を威服して巾をきかすこと。

(ゆう-ふう[雄風](名) すさまじきいきほひ。

(ゆう-ふく[裕福](名) 生活のゆたかなること。とめること。(富有)。

ゆうべ[昨夜](名) 「よべ」の延言。

(ゆう-へん[雄篇](名) すぐれて出來のよき篇章。「—大作」。

(ゆう-べん[雄辯](名) 辯舌の勢よくよどみなきこと。口前のいとすぐれたること。——**か**[雄辯家](名) 雄辯なる人。

(ゆう-まう（ウーモ）[勇猛](名) ㊀勇氣ありて猛烈なること。㊁物事に動せずたゆまざること。

(ゆう-りき[勇力](名) いさましき力量、すぐれたる力。

(ゆう-りよく[勇力](名) 「ゆうりき」に同じ。

(ゆう-わう（ウーヲ）[雄黃](名) 【化】天然に產する砒素の硫化物、黃色の鑛物にして顏料に用ひらる。

(ゆ-えん[油煙](名) 油或は樹脂等を空氣の供給不十分なる所にて燃やすとき生ずる甚だ微細なる炭、墨の製造に用ふ。

(ゆ-えん[由緣](名) ゆかり。緣故。

卄**ゆ-おも**[湯母](名) 乳母の類。

ゆか[牀](名) ㊀家の內に一段高くかまへたる寐床。㊁家の內に地より離れて根太板を亙(ワタ)し其上に板などを張りたるもの。

卄**ゆ-か**[瓮](名) 祭事に用ふる瓶の類。

ゆか-いた[床板](名) ゆかに敷きたる板。

ゆ-かう（ウーユ）[柚柑](名) 【植】ゆずの一種、果實大きくして香氣高し。

卄**ゆ-かう**（ウーコ）[衣桁](名) 「いかう」の訛。

ゆ-がく（かきくくけけ）[湯搔](他、か四) 熱湯に浸(ヒタ)しおく。(淪)。

ゆ-がけ[弓懸](名) 弓を射る時、右の手の指にかけて、弦を持つもの、革にてつくる。

ゆか-し（しくしきしけれ）[懷](形、二) ㊀何となく慕はし。㊁何となく知りたし。

ゆか-した[床下](名) 床の下。

ゆ-かた[浴衣](名) ㊀入浴する際着用する衣服。㊁綿布にて仕立て、浴後などに着る單衣。㊂ひとへもの。(仙臺方言)。

ゆ-かたびら[湯帷子](名) 麻布にて仕立て、浴後などに着る單衣。

(ゆ-がふ（ウーゴ）[癒合](名) 離れたりし皮膚、筋肉などが互に附着すること。

ゆ-がみ[歪](名) ゆがむこと。ゆがみたるさま。

ゆ-がむ（まみむむめめ）[歪](自、ま四) 形正しからず。まがる。ひずむ。

ゆ-がむ（めめむむるむるれめよ）[歪](他、ま下二) ゆがましむ。

卄**ゆか-もの**[由加物](名) 神前にさゝぐるいろいろの物。

ゆかり[緣](名) よすが。よる。えん。しるべ。(緣故)。——**の-いろ**[緣色](名) 紫色の稱。

(ゆか-る（らりるるれれ）[緣](他、ら四) ゆかりとす。たよる。

卄**ゆか-をけ**(名) 大いなる桶。

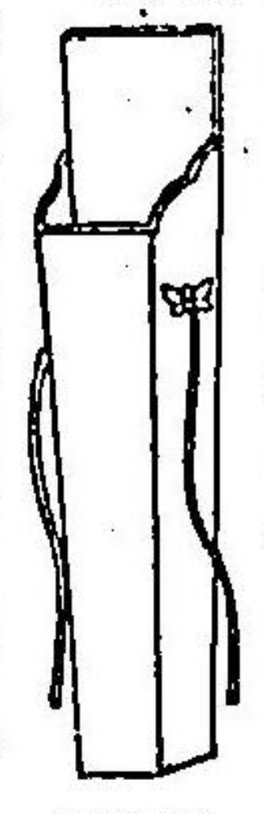
ゆき[雪](名) ㊀空中に遊離せる蒸氣の溫度氷點以下となりたるとき凝結して、地上に降る純白なるもの、六面の結晶をなす。(六花、六出)。㊁白髮。「かしらの—」。㊂髓の異稱。

卄**ゆき**[由基](名) 古昔、大嘗會の時、新穀を奉るべき國の一。又、其祭場の左なるもの。(大嘗會の條を見よ)。(悠紀)。

ゆき[裄](名) 衣服の脊縫(セヌヒ)より袖口までの長さ。

ゆき[行](名) ゆくこと。「—のまに〳〵」。

卄**ゆ-ぎ**[靫](名) 矢を盛る器、箙の類。(矢箙)。



[ゆぎ]

ゆき-あかり[雪明](名) 闇夜の雪のひかり。

ゆき-あそび[雪遊](名) 雪中にて、兒童などのさま〴〵の遊戲をなすこと。

ゆき-あひ（イーア）[行合](名) ㊀ゆきあふこと。㊁卄夏秋の交に稻などのみのること。㊂卄しげく降ること。㊃亡魂などにおどろかさるゝこと。——**きやうだい**（ウーキョ）[行合兄弟](名) 異父同母の兄弟。たねちがひの兄弟。

ゆき-あ-ふ（ウーア）（はひふふへへ）[行合](自、は四) 雙方より行きて出合ふ。

ゆき-いた-る（らりるるれれ）[行到](自、ら四) 行きて其處にいたる。

ゆき-うち[雪打](名) 雪をまろめて、互に打ち合ふこと。ゆきなげ。(雪合戰)。

ゆき-おろし[雪下](名) ㊀山風の雪を吹きおろすもの。㊁芝居の鳴物、綿を入れたる袋を枹(バチ)のさきに附けて、太鼓を叩く。

ゆき-がけ[行掛](名) 行くついで。

ゆき-がた[行方](名) 行きたる方。ゆくへ。

ゆき-かひ（イーカ）[行交](名) ゆきかふこと。

ゆき-か-ふ（ウーコ）（はひふふへへ）[行交](自、は四) ㊀ゆききをなす。㊁彼來りこれ行く。

ゆき-き[往來](名) 彼方に行き此方に來ること。わうらい。(往還、往復、往返)。

ゆき-ぐも[雪雲](名) 雪もやうのくも。

ゆき-くら-す（さしすすせせ）[行暮](他、さ四) 日暮まで行く。

ゆき-く-る（れれるるるれれよ）[行暮](自、ら下二) 道を行く中に日暮る。

ゆき-げ[雪消](名) ゆきのとくること、ゆきどけ。

ゆき-げ[雪氣](名) 雪の降らんとするけはひ。

ゆき-ころがし[雪轉](名) 雪をまろめて轉がすこと。ゆきまろばし。

ゆき-しな[行乍](名) ゆくとき。行きがけ。みちすがら。

ゆき-すぎ[行過](名) ㊀行きすぐること。㊁分に過ぎたる行爲。

ゆき-す-ぐ（ぎぎぐぐるぐれぎよ）[行過](自、か上二) 目的の處より先へ行く。

卄**ゆき-ずり**[行摩](名) 道をゆきつゝ、物にふるゝこと。「なごの海やとわたる船の—に」。

ゆき-ぞら[雪空](名) 雪氣の空模樣。

ゆき-た-つ（たちつつてて）[行立](自、た四) ㊀進みはかどる。成功す。㊁生活立つ。くらし得。

ゆき-だふれ（オーレ）[行倒](名) 路傍に倒れ死すること。又、其人。

ゆき-ダルマ[雪達磨](名) 雪をかためて造りたる達磨の像。

ゆき-ちがひ（ガーイ）[行違](名) ゆきちがふこと。

ゆき-ちが-ふ（ガーウ）（はひふふへへ）[行違](自、は四) ㊀彼來り此行く。ゆきかふ。㊁物事齟齬す。くひちがふ。

ゆき-つ-く（かきくくけけ）[行着](自、か四) 目的地に到着す。いたる。つく。

ゆき-づまり[行詰](名) ゆきづまること。又、ゆきづまる處。「廊下の—」。

ゆき-づま-る（らりるるれれ）[行詰](自、ら四) ㊀路きはまりて行くべき方なくなる。㊁答辯に窮す。語ふさがる。

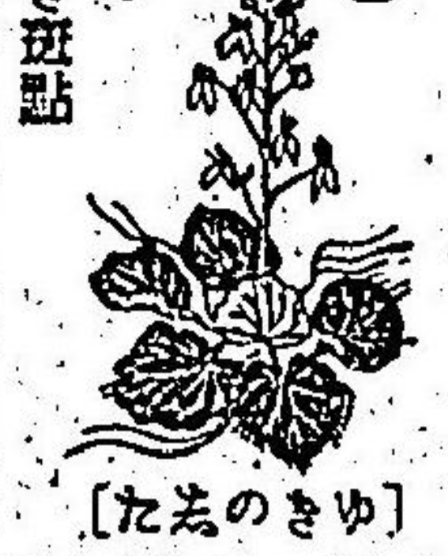
ゆき-どけ[雪解](名) 雪のとくること。ゆきげ。

ゆき-とど-く（かきくくけけ）[行屆](自、か四) ゆきわたる。

ゆき-なだれ[雪頽](名) 山などの積雪の崩れおつるもの。

ゆき-なり[行也](名、副) ㊀事物のなりゆきにまかすること。(放任)。㊁だしぬけ、突然。㊂ぢか、直接。——**さんばう**（ウーボ）[行也三寶](名) ゆきなりに事をなして顧ざること。

ゆき-の-した[雪下](名) ㊀【植】虎耳草科に屬する草、葉は心臟形をなし開(ヒラ)き毛を有す、花瓣は大小不等にして小さき瓣には小さき斑點



[ゆきのした]

あり、觀賞用として栽培せらる。（虎耳草）。㊁【植】林檎の一種、（奥羽地方の方言）。㊂かさねの色目、表は白くして裏の紅なるもの。

ゆき-の-はだへ【雪肌】（名）いと白き肌。

ゆき-の-ホトケ【雪佛】（名）雪をかためてつくりたる佛像。

‡**ゆき-の-まくら**【雪枕】（名）雪ふりの夜にねむると。

ゆき-ひら【雪片】（名）ふる雪の各片。

ゆきひら【行平】（名）「ゆきひらなべ」の略言。

――**なべ**【行平鍋】（名）白き陶製の平鍋、把手・蓋（クフ）・注口（ツギ）あるもの。

〔**ゆき-ぶっつけ**【雪打附】（名）「ゆきうち」に同じ。

ゆき-ふり【雪降】（名）雪のふると。雪のふれる時。

ゆき-ぶれ【行觸】（名）いきぶれ。

〔**ゆき-へ**【靫負】（名）「ゆげひ」の訛。

ゆき-ボトケ【雪佛】（名）「ゆきのホトケ」に同じ。

ゆき-ま【雪間】（名）㊀ふる雪のやみたる間。㊁積れる雪の處々とけたるひま。

‡**ゆき-まつ-つき**【雪待月】（名）陰暦十一月の異稱。

ゆき-まね【往眞似】（名）ゆきたるさまに見すると。

ゆき-まる【雪丸】（名）「ゆきまるひバチ」の略言。

――**ひバチ**【雪丸火鉢】（名）背と白との釉（クスリ）をかけたる陶製の火鉢。

ゆき-まろがせ【雪轉】（名）次條に同じ。

ゆき-まろばし【雪轉】（名）雪の塊を積れる雪の上にまろばして大きくする遊戲。

ゆき-み【雪見】（名）酒宴などして雪の景色を眺むると。「――の酒」。

ゆき-みち【行道】（名）㊀行くべきみち。㊁習したるみち。

ゆき-みづ【雪水】（名）雪どけの水。

ゆき-み-づき【雪見月】（名）陰暦十一月の異稱。

ゆき-み-どうろう【雪見燈籠】（名）石燈籠の一種、丈低く笠大きくして、三個の脚の外へひろがりたるもの。

（**ゆきみ-ぶね**【雪見船】（名）雪見の爲にのる船。

ゆき-もどり【行戻】（名）㊀ゆきともどりと。往復。㊁ゆきてあとへかへると。㊂一旦人の妻となりたれど離縁となりて生家にかへりたると。又、其人。出もどり。

ゆき-もやう【雪模樣】（名）雪のふらんとする空合。

（**ゆ-ぎやう**【遊行】（名）僧侶の諸國をめぐりあるくと。アンギヤ。――**は**【遊行派】（名）【佛】時宗の別稱。

ゆき-やけ【雪燒】（名）寒氣に中りて、皮膚の糜爛すると。志もやけ。

ゆき-わか・る【行別】（自、ら下二）互に別々の方へわかれ行く。

〔**ゆきわかれる**（自）前條の訛。

ゆき-わた・る【行渡】（自、ら四）。もれなく屆く。おちなく到る。ゆきとゞく。

ゆき-をれ【雪折】（名）雪の積もりたる重みによりて木の枝などの折るゝと。

ゆき-をんな【雪女】（名）雪中に出づるといふ怪物、「――五枚羽子板」。

ゆ・く【行】（自、か四）㊀志す方へ赴く。おもむく。（往、征、之）。㊁あるく。あゆむ。㊂進む。㊃過ぐ。㊄去りて歸らず。㊅死ぬ。（逝）。㊆とつぐ。嫁す。（適）。㊇成長す。たく。㊈行はる。

ゆ-ぐ【湯具】（名）ゆかた・ゆもじなどの總稱。

ゆく-さき【行先】（名）㊀行きむかふ方。㊁將來。前途。

‡**ゆくさ-きるさ**【往來】（副）ゆきさに、ゆきもどりに。

‡**ゆくさ-くさ**【往來】（副）前條に同じ。

‡**ゆくさ・も・くさ・も**【往來】（副）前條に同じ。

ゆく-すがら（副）みちすがら。

ゆく-すゑ【行末】（名）未來のなりゆき。

ゆ-ぐち【湯口】（名）㊀溫泉の湯の流れ出る口。㊁苗代用の水の出る口。

ゆく-て【行手】（名）ゆくさき。ゆくへ。前途。

ゆく-へ【行方】（名）行くべき方。又、行きたる方。

ゆく-ゆく【行行】（副）㊀行きながら。「――思ふ」。㊁終には。後には。

‡**ゆく-らか-に**（副）ゆるやかに。いそがずに。

‡**ゆくら-ゆくら-に**（副）前條に同じ。

‡**ゆくり-か-に**（副）不意に。思ひがけなく。

ゆくり-な・し【不意】（形、一）不意なり。思ひがけなし。

（**ゆ-くわい**【愉快】（名）こゝろよきと。おもしろきと。たのしきと。

ゆ-くわん【湯灌】（名）佛葬にて、死體を棺にをさむる前に沐浴せさすると。

‡**ゆけ**（名）氣なぐさみ。こゝろやり。

ゆ-げ【湯氣】（名）湯の蒸發氣。蒸氣。

ゆ-げた【湯桁】（名）湯槽の周圍に設けあるけた。

‡**ゆげ-ひ**【靫負】（名）（「ゆぎおひ」の轉）近衞・兵衞・衞門などのつかさ。

（**ゆ-げん**【諛言】（名）へつらひおもねることば。

（**ゆ-こく**【諭告】（名）さとしつぐると。諭し示すと。

ゆ-ごて【射韝】（名）弓を射る時、左の臂（ヒヂ）につくるもの、革にて製す。

‡**ゆさ-はり**【鞦韆】（名）古昔の遊戲、今のぶらんこに同じ。

ゆさぶ・る【動搖】（他、ら四）ゆりうごかす。ゆすぶる。ゆする。

ゆ-ざめ【湯冷】（名）入浴後に、身體の却てつめたくなると。

ゆさ-ゆさ（名、副）動搖するさまにいふ語。

（**ゆ-さん**【遊山】（名）㊀山に遊ぶと。㊁あそびに行くと。（遊觀、行樂）。――**ぶね**【遊山船】（名）あそびあるきにのる船。

‡**ゆし**【柞子】（名）【植】「ゆす」の古言。

（**ゆ-し**【諭示】（名）さとし示すと。

（**ゆ-し**【諭旨】（名）㊀むねをいひきかすると。㊁「ゆしめんくわん」の略言。――**めんくわん**【諭旨免官】（名）上よりいひきかせて辭職を申出さすると。

（**ゆ-じ**【諛辭】（名）へつらひのことば。

（**ゆ-しゆつ**【輸出】（名）「しゆしゆつ」に同じ。

（**ゆ-しゆつ-にふ**【輸出入】（名）「しゆしゆつにふ」に同じ。

ユ-ジユン【由旬】（名）（梵語 Yojnaa）里程の名、九「マイル」弱、十六里ともいふ。

（**ゆ-しよく**【愉色】（名）よろこばしきかほいろ。

ゆす【柞】（名）【植】「ひよんのき」の一名。

‡**ゆ-す・ず**（他、さ變）琴を彈（ヒ）くに、左手にて絃（イト）をあつかふにいふ。「ゆし按ず」。

ゆ-ず【柚子】（名）【植】芸香科に屬する木、蜜柑に似たれど枝幹に刺多し、花は小形白色にして初夏に開く、果實は帶白色の酸味多き肉を有し、果皮は香氣多く食用に供せらる。

ゆす・ぐ【滌】（他、か四）汚れたるものを水にて洗ひきよむ。すゝぐ。

ゆすぶ・る【動搖】（他、ら四）ゆさぶる。

ゆず-ミソ【柚味噌】（名）味噌に柚子の果實の汁を和したるもの、これに胡麻の種子などを雜（マ）ずるもあり、普通これをなかごをとりたる柚子の果皮に盛る。

ゆす-ゆす（名、副）「ゆさゆさ」に同じ。

‡**ゆすら**【櫻桃】（名）【植】次條に同じ。

ゆすら-うめ【櫻桃】（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は廣楕圓形にして不整齊の鋸齒を有す、嫩（カワ）き莖及葉の下面は密生毛を具す、春夏の交、梅に似たる白色小形の花開く、果實は小毬形をなし熟すれば紅色となる、食ふべし、又、觀賞用として栽培せらる。（梨梅）。

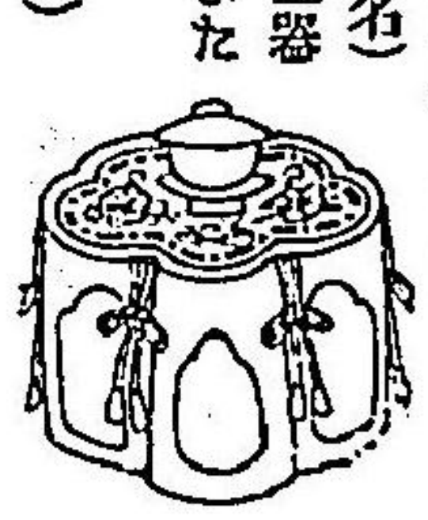
〔**ゆすり**【搖】（名）おどし又はあざむきて、金錢を強ひ取ると。又、其人。

‡**ゆする**【泔】（名）毛髮を洗ふと。又、其用水。

〔**ゆす・る**【搖】（他、ら四）㊀ゆりうごかす。㊁おどし又はあざむきて、金錢を強ひとる。

‡**ゆす・る**【搖】（自、ら四）どよめく。

‡**ゆする-つき**【泔坏】（名）ゆするを盛る器、もとは土器を用ひ、後には漆器を用ひたり。



［ゆするつき］

ゆずる-ばち【土蜂】（名）【動】「つちばち」の一名。

ゆ-ずゑ【弓末】（名）弓のはし。「――ふりたて」。

（**ゆ-ぜつ**【愉絶】（名）いとも愉快なると。

ゆ-せん【湯煎】（名）湯氣にて、物を煮ると。

ゆ-せん【湯錢】（名）洗湯に入る料。

（**ゆ-そつ**【輸卒】（名）輜重の運搬に從事する兵卒。

ゆ-たか【豐饒】（名）㊀たりとゝのひて、十分なるさま。不足なきさま。㊁ゆるやか。やすらか。（豁）。

‡**ゆたけ・し**【豐】（形、一）ゆたかなり。

‡**ゆたけ-に**【豐】（副）ゆたかに。

‡**ゆ-たち**（名）衣服の腋（キワ）。

‡**ゆ-だち**（名）弓を射るときにものいみすると。

（**ゆ-たつ**【諭達】（名）官よりふれさとすと。

ゆ-だて【湯立】（名）神佛にて熱湯を立て、これを笹の葉に浸（ヒタ）してわが身にそゝぎて神に祈ると、心身つかるゝに及びて神託を得といふ。

‡**ゆた-に**（副）ゆたかに、ゆるやかに。「その夜は――あらましものを」。

‡**ゆた-に-た-ゆた-に**（副）たゆたひて。躊躇して。「我心――浮きぬなは」。

ゆだ・ぬ【委】（他、な下二）まかす。

‡**ゆ-だね**（名）苗代にまく種子。

〔**ゆだねる**（他）「ゆだぬ」の訛。

‡**ゆた-の-た-ゆた-に**（副）「ゆたにたゆたに」に同じ。

〔**ゆ-だま**【湯玉】（名）煮え立つ湯に浮きあがる泡。

‡**ゆ-だめ**【弓矯】（名）弓の材のゆがめるをため直す器。（弓檠、排檠）。

ユダヤ-けう【猶太教＝Judaism】（名）「ユダヤ」人の奉ずる一神教、「モーセ」の法を基礎とするもの。

ゆた-ゆた（名、副）「ゆらゆら」に同じ。

（**ゆ-たん**【油單】（名）㊀器具の敷物。㊁櫃又は長持などに被ふ布。

（**ゆ-だん**【油斷】（名）（古昔、印度の暴王一臣に油鉢を持たせて行かしめ、其一滴をこぼさば首を斷つべしといひし故事に出づ）心をゆるして注意を怠ると。――**たいてき**【油斷大敵】（名）すべて、物事は自分の油斷よりわざはひを生ずといふと。

ゆ-タンボ[湯婆](名)「タンポ」に同じ。

ゆ・づ（でづでづる、づれでよ）[煠、茹](他、た下二) ㊀熱湯にて煮る。㊁湯にて流す。

（**ゆ-づう**[融通](名)「ゆうづう」に同じ。――**ねんブツしゆう**[融通念佛宗](名)【佛】「ゆうづうねんブツしゆう」に同じ。

ゆ-づか[弓束](名) 弓の手に握る部分。ゆみづか。

ゆっくり[緩](名、副) いそがざるさまにいふ語。

ゆ-づけ[湯漬](名) 飯に湯をかくること。

ゆったり[寛](名、副) ゆるやかにして迫らざるさまにいふ語。

廿**ゆつ-つまぐし**[湯津爪櫛](名) 齒の志げき櫛。

廿**ゆつ-のつまぐし**[湯津爪櫛](名) 前條に同じ。

ゆづら・ふ（ウ-ロ）（はひふへ）[讓](他、は四)「ゆづる」の延音。

ゆづり[讓](名) ゆづること。――**う・く**（けけくくるくれけよ）[讓受](他、か下二) 他よりゆづられて受く。――**うけ**[讓受](名) 他人のゆづるを受くること。――**じやう**（ヨウ）[讓狀](名) ゆづることを證して與ふる文書。――**つ・く**（けけくくるくれけよ）[讓附](他、か下二) ゆづりて他へ移す。――**は**[讓葉](名)【植】大戟科に屬する木、葉は長楕圓形にて厚く上面深綠色にして下面は背色なり、柄赤し、花は小形白色にして總狀花序に排列し、雄蕊は通常十個ありて帶紫色の葯を有す、新葉の出づるをまちて舊葉凋落するが故に父子相讓るの義に取りて、此名あり。(靑楪、交讓木)。――**わたし**[讓渡](名) 他人へゆづりて渡すこと。――**わた・す**（さしすすせせ）[讓渡](他、さ四) ゆづりて他へわたす。

ゆ-づる[弓弦](名) ゆみづる。――**うち**[弓弦打](名) つるうち。鳴弦(ゲン)。

ゆづ・る（らりるるれれ）[讓](他、ら四) ㊀ものを他に與ふ。㊁へりくだりて他を先にす。(遜)。㊂退きて他を代はりとす。㊃位を他に與ふ。(禪)。

ゆづる-は[讓葉](名)【植】「ゆづりは」に同じ。

ゆ-づゑ[弓杖](名) 弓を杖につくこと。(弓臂)。

ゆで-あづき[茹小豆](名) 小豆を煠てたるもの、砂糖をかけて食ふ。(金時)。

（**ゆで-こぼ・す**（さしすすせせ）[茹溢](他、さ四) ゆでゝ、其汁を去る。

ゆで-たまご[茹玉子](名) 鷄卵を煠て固まりたるもの、鹽をつけて食ふ。ぬきみたまご。

（**ゆでる**(他)「ゆづ」の訛。

ゆ-とう[湯桶](名) 飲料の湯を入るゝ器、木製にて、多くは漆塗なり。――**よみ**[湯桶讀](名) 湯桶を「ゆとう」とよむが如く漢字の熟語を、上を訓に下を音によむこと。

ゆ-どうふ[湯豆腐](名) 豆腐を白湯にて煮(ニ)たるもの、醬油などをつけて食ふ。

ゆ-どの[湯殿](名) ㊀沐浴する室、風呂場、㊁飲食を調ふる室。(厨)。

ゆ-とり[淦取](名) 船中のあかを汲み取る器。

ゆ-とり[湯取](名) ㊀おもゆ。㊁ゆかた。

ゆとり[裕取](名) くつろぎあること。(餘裕)。

ゆとり-めし[湯取飯](名) おもゆ。

（**ゆ-トン**[油團](名) 紙を貼(ハ)り合はせて油をひきたるもの、多く夏の敷物に用ふ。(油布)。

（**ゆ-な**[湯女](名) ㊀溫泉宿の下婢。㊁昔時、江戸市中の湯屋に居たりし遊女。

廿**ゆな-ゆなは**(副) ゆく〳〵は。はては。終には。

ゆ-に[湯煮](名) 白湯にて、煮(ニ)ること。

ユニテリアン[Unitarian](名)「キリスト」敎の一派、三位一體說を排斥して惟一の神格を主張するもの、おもに「アメリカ」合衆國に行はる。

廿**ゆ-には**（ワ-ニ）[齋場](名) 祭事を行ふため、ゆまはり淸めたる場所。

ゆ-にふ（ウ-ニ）[輸入](名)「しゆにふ」に同じ。

廿**ゆ-の-あわ**[湯泡](名) 硫黃の古稱。

ゆ-のし[湯熨](名) 布帛などの皺(シワ)を湯にぬらして熨すこと。

ゆ-の-はな[湯花](名) ㊀硫黃を含有する湯泉の底などに沈澱固着する硫黃華。㊁湯の垢。

ゆ-のみ[湯吞](名) 湯を吞むに用ふる筒形の器。――**じよ**[湯吞所](名) 湯を吞むために構へたる別室。

ゆ-ば[弓場](名) 弓射る處。

ゆ-ば[湯場](名) 溫泉のある所。

ゆ-ば[湯葉](名) 一種の食品、豆腐の液に灰汁を加へて煮、其上皮を取りてほしかわかしたるもの。うば。(豆腐皮)。

ゆば-いろ[柚葉色](名) 濃き綠の染色、又、黑みばしりたる綠の染色。

ゆ-はじめ[湯始](名) ㊀湯をはじめにあぶること。㊁生兒に、うぶゆの後始めて湯をつかはすること。

ゆ-はず[弓筈](名) 弓の弦を懸くる部分、上なるを、うはゝずといひ、下なるを、もとはずといふ。(弓弭)。――**の-みつぎ**[弓筈調](名) 古昔、男子の獵したる禽獸の類を貢獻せしこと。たなすゑのみつぎの對。

廿**ゆ-はた**[結纈](名) しぼりぞめ。くゝりぞめ。(纈)。

ゆ-はた-おび（タ-ツ）[結肌帶](名)「いはたおび」に同じ。

ゆば-どの[弓殿](名) 古昔、禁中にて弓術を天覽ありし御殿。

ゆ-ばな[湯花](名)「ゆのはな」に同じ。

（**ゆはへる**[結](他)「ゆふ」の訛。

廿**ゆ-ばり**[尿](名) 小便。(溲、溺)。――**ぶくろ**[尿袋](名)「ばうくわう」(膀胱)に同じ。

廿**ゆひ**（イユ）[雇人](名) 傭ひいれたる人。やとひにん。

廿**ゆ-ひ**[遊牝](名) 畜類のつるむこと。

ゆび[指](名) 上肢下肢即ち手足の端に枝の如く分出したるもの、人類のは各五づゝあるを普通とし、手のは細長くして拇指は他の四指に對し屈伸自在にして物を握り又は摑むの用をなし、足のは短くして一列に排列し僅少の運動をなす。――**の-はら**[指腹](名) 指の內側。

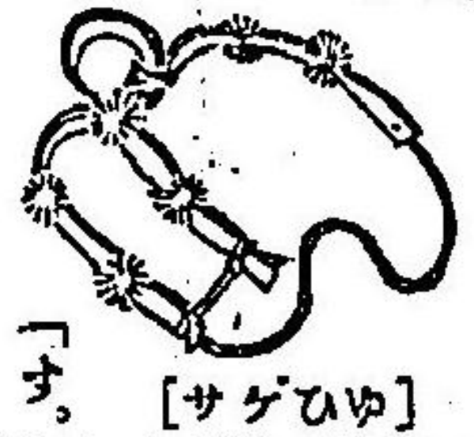
廿**ゆひ-いれ**（ユイ-）[結納](名) ゆひなふ。

ゆび-きり[指切](名) 小兒が約束をたがへざるしるしに互に、指を曲げてかけあふこと。

廿**ゆ-ひ・く**（かきくくけけ）[湯引](他、か四) ゆあみをなす。

ゆ-び・く（かきくくけけ）[湯引](他、か四) 少しく湯に煮る。

ゆひ-ケサ（ユイ-）[結袈裟](名) 袈裟の一種、菊綴(キクトヂ)の如きものを著く、山伏の用ふるもの。



[ゆひゲサ]

ゆび-さし[指差](名) ㊀ゆびさすこと。(指點)。㊁ゆびわ。(仙臺地方の方言)。

ゆび-さ・す（さしすすせせ）[指差](他、さ四) 指にて差し示す。

ゆ-ひしほ（-オシ）[柚醬](名) 柚子の果實を煮てとかしたるもの。

ゆび-ずまふ（モウ-ズ）[指相撲](名) 一種の遊戲、兩人互に右手又は左手の四指と四指とを組み合せ、大指をたて、押へあふもの、他の大指を押へたるを勝とす。

ゆひ-なふ（ユイ-ノウ）[結納](名) 結婚の契約のしるしに、婿聟の兩家より金帛酒肴などを取り交(カ)はすこと。又、其とりかはす品物。(納徵、結采)。

ゆび-ぬき[指貫](名) 裁縫する時に、針を押ふるため指に嵌(ハ)むる指環。(貫手鞜)。

ゆび-はめ[指嵌](名) ゆびわ。

廿**ゆび-まき**[指卷](名) 上代に、指に卷きつけて飾となしゝ環。

ゆひ-め（ユイ-）[結目](名) むすびめ。

ゆび-わ[指環](名) 金・銀其他の金屬又は寶石にてつくり、指に嵌(ハ)むる環。ゆびまき。ゆびはめ。

ゆび-をり[指折](名) 指を折りて、數ふべきほど有數の人。すぐれたる人。(屈指)。

ゆふ（ユウ）[夕](名) 日くれて夜とならんとするほどのとき。ゆふぐれ。ひぐれ。

廿**ゆふ**（ユウ）[木綿](名) 楮(カウゾ)のあまかはにて製したる紙又は布。「―の衣」。

ゆ・ふ（ユウ）（はひふふへへ）[結](他、は四) ㊀むすぶ。くゝる。㊁髮をむすぶ。㊂獸毛をつかねて筆をつくる。

廿**ゆふ-うら**（ユウ-）[夕占](名)「ゆふけ」に同じ。

廿**ゆふ-か・く**（ユウ）（けけくくるくれけよ）(自、か下二) ゆふべとなる。

ゆふ-かげ（ユウ-）[夕影](名) 夕日の影。(夕陰、暮陰)。廿――**ぐさ**[夕影草](名)【植】「あさがほ」の一名。廿――**どり**[夕影鳥](名)【動】「ほととぎす」の一名。

ゆふ-がすみ（ユウ-）[夕霞](名) 夕ぐれにたつ霞。

ゆふ-かぜ（ユウ-）[夕風](名) 夕方の風。

ゆふ-がた（ユウ-）[夕方](名) ゆふぐれ。ゆふ。

廿**ゆふ-かづら**（ユウ-）[木綿鬘](名) 木綿にてつくりたるかづら。

ゆふ-がほ（ユウ-ガオ）[夕顏](名)【植】葫蘆科に屬する蔓草、へうたんと同種にして細長き果實を生ず、果實はかんぺうを製すべく、容器とすべし、其花夕に開きて朝に萎(シボ)むにより此名あり。(壺盧、背瓢)。――**だな**[夕顏棚](名) 夕顏の蔓を這はするため竹木などを編(ア)みてつくれる棚。――**べったう**（-トウ）[夕顏別當](名)【動】鱗孔類中天蛾科に屬する昆蟲、體軀瘦せて褐色なり、腹部に赤色の輪紋ありて口吻頗る長し、多く夕顏に集まりて其花蜜を吸ふより此名あり、幼蟲は甘藷・朝顏などの葉を食ひて害ふ。

ゆふ-がみ（ユウ-）[木綿髮](名) 鬣髮の毛色の白き馬。

ゆふ-がり（ユウ-）[夕獵](名) 夕方の狩獵。

ゆふ-き（ユウ-）[結城](名)「ゆふきつむぎ」「ゆふきもめん」の略言。――**じま**[結城縞](名) 下總國結城地方より產出する縞織物。――**つむぎ**[結城紬](名) 下總國結城地方より產出する紬。――**もめん**[結城木綿](名) 下總國結城地方より產出する綿布。

ゆふ-ぎり（ユウ-）[夕霧](名) 夕方に立つきり。

ゆふ-ぐれ（ユウ-）[夕暮](名) 日のくれんとする時。たそがれどき。(黃昏、薄暮)。

ゆ-ぶくろ[弓袋](名) 弓を入るゝ袋。(韔)。――**ざし**[弓袋差](名) 昔時、武家にて主君の弓袋をもちて前驅せしもの。――**もち**[弓袋持](名) 前條に同じ。

廿**ゆふ-け**（ユウ-）[夕占](名) 古昔、夕暮に行ひし辻占の類。

廿**ゆふ-げ**（ユウ-）[夕飯](名) 夕暮の食事。ゆふめし。ばんめし。ばんさん。やしよく。

ゆふ-けい（ユウ-）[夕景](名) くれがた。くれどき。

ゆふ-げしき（ユウ-）[夕景色](名) 夕方の景色。

ゆふ-げむり（ユウ）「夕煙」（名）㊀夕食をとゝのふるために立つ煙。㊁夕方にたつ煙。

ゆふ-とく（ユウ）「夕刻」（名）くれがた。ゆふがた。

ゆふ-ごほり（ユウゴオリ）「夕氷」（名）夕方のこほり。

ゆふ-ざ（ユウ）「夕座」（名）夕方の說敎。

ゆふ-さり（ユウ）（名）くれがた。ゆふぐれ。（晩景）。

＋ゆふ-さり-つ-かた（ユウ）（名）ゆふぐれ。ゆふさり。

＋ゆふ-さ・り（ユウ）（ら、り、り、る、れ、れ）（自、ら變）夕方になる。「夕されば門田のいなば」。

＋ゆふ-され（ユウ）「夕」（名）「ゆふさり」の訛。

＋ゆふ-しで（ユウ）「木綿垂」（名）木綿にてつくりたるしで。

ゆふ-しほ（ユウシオ）「夕潮」（名）夕方にみちくる潮。（晩潮）。

ゆふ-しも（ユウ）「夕霜」（名）夕暮に草葉などにおく霜。

ゆふ-すずみ（ユウ）「夕涼」（名）夏の夕方に戶外に出てゝすゞむこと。

＋ゆふ-だすき（ユウ）「木綿襷」（名）ゆふにてつくりたるたすき。

ゆふ-だち（ユウ）「夕立」（名）㊀ゆふだつこと。㊁「ゆふだちのあめ」の略言。——のあめ「夕立雨」（名）夏の夕近くなりて俄にふり來る雨。（驟雨、白雨）。

＋ゆふ-だ・つ（ユウ）（た、ち、つ、つ、て、て）「夕立」（自、た四）㊀夕方にふり來。㊁夕方におこりたつ。「—雲」。

ゆふ-づき（ユウ）「夕月」（名）夕暮にしばし見ゆる月。

ゆふ-つ-かた（ユウ）「夕方」（名）ゆふがた。

——よ「夕月夜」（名）夕月の出でたるくれ方。

＋ゆふ-づく-ひ（ユウ）「夕附日」（名）ゆふひ。

＋ゆふ-づく-よ（ユウ）「夕月夜」（名）ゆふづきよ。

＋ゆふ-づけ-て（ユウ）「夕附」（副）夕方になりて。

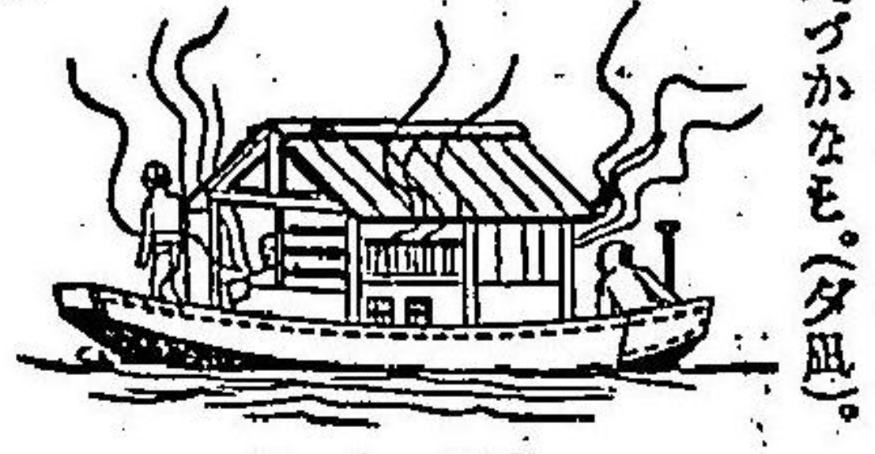
＋ゆふ-つけ-どり（ユウ）「木綿着鳥」（名）【動】雞の異稱、古昔、世の亂れしとき、四境の祭事にとて、雞に木綿を着けて、京の四方の關にて祭事を行はせられしよりいふ。

＋ゆふ-づつ（ユウ）「太白星」（名）金星の古稱。

ゆふ-なぎ（ユウ）「夕和」（名）㊀夕方に海面しづかに風のなぎたること。㊁【地】夕に海軟風と陸軟風と交迭するとき、一時風やみて波しづかなるを。（夕凪）。

ゆふ-なみ（ユウ）「夕波」（名）夕にたつ波浪。

ゆ-ぶね「湯船」（名）㊀沐浴する湯を湛（タヽ）へおく槽。（湯槽）。㊁昔時、湊などにて、内に浴場を設け料金をとり入浴せしめたる船。



[ゆぶね(二)]

ゆふ-ばえ（ユウ）「夕映」（名）ゆふやけ。（夕榮）。

＋ゆふ-ばな（ユウ）「木綿花」（名）古昔、婦人の頭髮の裝飾となし、木綿にて製したる造花。

ゆふ-はん（ユウ）「夕飯」（名）夕方になす食事。

ゆふ-ひ（ユウ）「夕日」（名）將に沒せんとするときの日影。いりひ。（夕暉、夕陽、落日、晩照）。——かくれ「夕日隱」（名）日影のまさに沒せんとするところ。

ゆふ-べ（ユウ）「夕」（名）㊀ゆふがた。㊁昨夜。

ゆふ-まぐれ（ユウ）「夕間暮」（名）ゆふぐれ。

＋ゆふ-まどひ（ユウマドイ）「夕惑」（名）夕方にまどろむこと。（夕睡）。

＋ゆふ-まよひ（ユウマヨイ）「夕迷」（名）夕方に道にまよふこと。

ゆふ-めし（ユウ）「夕飯」（名）ゆふげ。ばんさん。

ゆふ-やけ（ユウ）「夕燒」（名）日の入りぎはに日光の反射によりて西の空のあかく見ゆるもの。（晩霞）。

ゆふ-やみ（ユウ）「夕闇」（名）よひやみ。

ゆ-べし「柚餅子」（名）一種の菓子、味噌・米粉・砂糖・麪粉などを混じ、柚子（ユズ）の汁を加へて蒸したるもの。

＋ゆ-ほひ-か（ユオ）「寬」（名）ゆるやかなるさま又は打ち開けたるさまにいふ語。

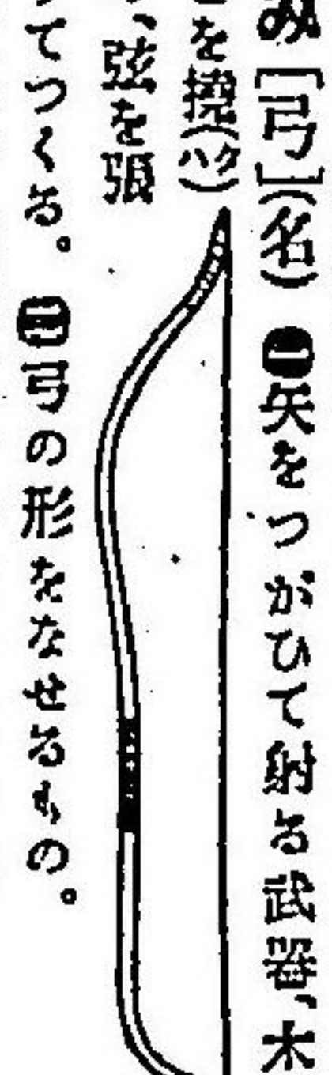
ゆ-まき「湯卷」（名）㊀＋古昔、貴人のゆあみに奉仕せる女の衣の上に着（キ）し服、白布にて製したり。㊁婦人の腰卷。ゆもじ。

＋ゆま-は・る（ユマワル）（ら、り、る、る、れ、れ）「齋」（自、ら四）ものいみす。齋戒す。「持ち—」。

＋ゆま-ふ（ユマウ）（は、ひ、ふ、ふ、へ、へ）「齋」（自、は四）前條に同じ。

＋ゆ-まり「尿」（名）ゆばり。せうべん。

ゆ-み「弓」（名）㊀矢をつがひて射る武器、木・竹などを撓（タワ）め、弦を張りてつくる。㊁弓の形をなせるもの。



[ゆみ(一)]

ゆみ-かけ「韘」（名）「ゆがけ」に同じ。

ゆみ-がた「弓形」（名）【數】圓の弦とこれに對する二つの共軛弧の中の一つとを以て圍みたる形。

ゆみ-し「弓師」（名）弓を造る職工。（弓人、弓工）。

ゆ-ミソ「柚味噌」（名）「ゆずミソ」に同じ。

ゆみ-ため「弓矯」（名）「ゆだめ」に同じ。

ゆみ-たらう（ロウ）「弓太郎」（名）第二番に出づる射手。

ゆ-みづ「湯水」（名）湯と水と。——のやうにつかふ　金錢をわけもなくつかひちらす。

ゆみ-づか「弓束」（名）「ゆづか」に同じ。

ゆみ-づる「弓弦」（名）弓にかけ張る絲、麻にて縒（ヨ）りあはせたる絲に藥を塗りたるもの。

ゆみ-づゑ「弓杖」（名）「ゆづゑ」に同じ。

ゆみ-とり「弓取」（名）ものゝふ。武士。

ゆみ-ならし「弓鳴」（名）「めいげん」（鳴弦）に同じ。

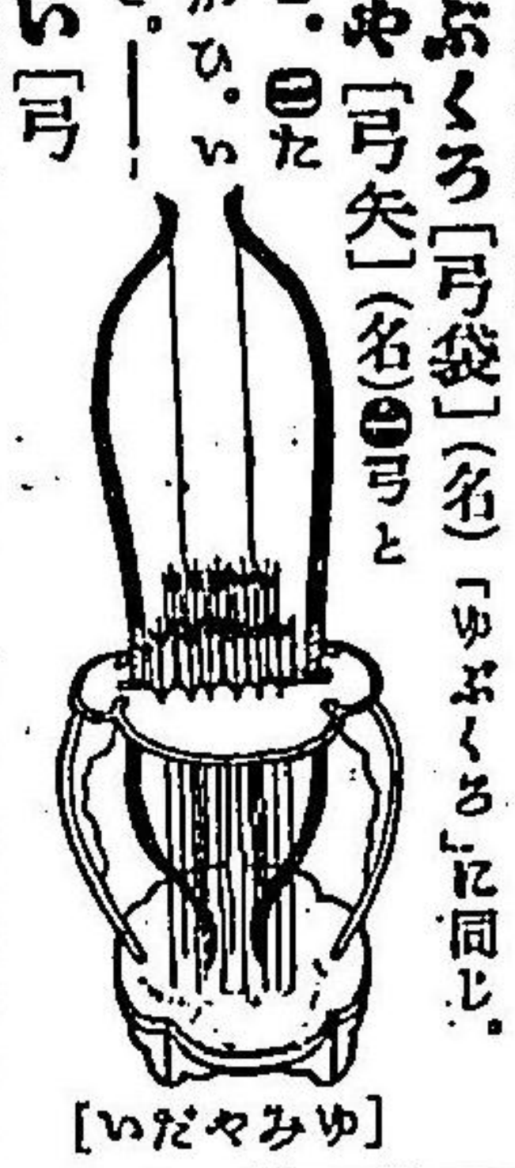
ゆみ-ば「弓場」（名）「ゆば」に同じ。

ゆみ-はず「弓筈」（名）「ゆはず」に同じ。

ゆみ-はり「弓張」（名）㊀「ゆみはりづき」の略言。㊁「ゆみはりヂヤウチン」の略言。——ヂヤウチン「弓張提燈」（名）提燈の一種、竹を弓のごとくに撓（タワ）め、其上下にかけ張りて開らくやうにつくれるもの。——づき「弓張月」（名）弓形をなせる月、即ち弦月。

ゆみ-ぶくろ「弓袋」（名）「ゆぶくろ」に同じ。

ゆみ-や「弓矢」（名）㊀弓と矢と。㊁たゝかひ。いくさ。——だい「弓矢臺」（名）弓矢をさしおく具、高さ三尺二寸なるを式とす。——とる-み「弓矢取身」（名）ものゝふ。武士。——のいへ「弓矢家」（名）武士の家。武家。——のみち「弓矢道」（名）㊀武士のみち。㊁弓射るわざ。——はちまん「弓矢八幡」（名）（弓矢に掛けて、八幡の御前にて誓ふ義）武士の誓ふ時にいふ語。



[ゆみやだい]

＋ゆみ-を「弓男」（名）ゆみとり。

ゆめ「夢」（名）㊀睡眠中に現（ウツ）のごとく見ゆる現象。㊁はかなきこと。——あはせ（ワセ）「夢合」（名）夢の吉凶の判斷。——うつつ「夢現」（名）たしかに意識せざること。おぼろげなること。——うら「夢占」（名）ゆめあはせ。——がたり「夢語」（名）夢に見たることを、めさめて後ものがたること。——さら「夢更」（副）すこしも。いさゝかも。

＋——たましひ（タマシイ）「夢魂」（名）古昔、夢の中に魂のさまよひ出づと思ひしもの。——ぢ「夢路」（名）夢見の中。「—をたどる心地」。——ちがへ（ガエ）「夢違」（名）惡夢をまじなひて、わざはひをまぬかるゝこと。——とき「夢解」（名）ゆめあはせ。——ともなく「夢無」（副）はかなくも。おぼつかなく。——に「夢」（副）すこしも。いさゝかも。——にも「夢」（副）すこしも。いさゝかも。「—人に遇はず」。——にゆめみるここち「夢夢見心地」（名）全く夢を見るが如き心地。物の確然とせぬこと。——のあと「夢跡」（名）㊀夢のさま。㊁はかなくきえたるあとかた。——のうきはし「夢浮橋」（名）㊀夢路。㊁世の中。——のかしは（カシワ）「夢柏」（名）夫婦共寢の枕。——のつげ「夢告」（名）神佛の夢枕にたちて告げたまふといふこと。——のなごり「夢名殘」（名）見果てぬ夢のこり。又、夢見の名殘をしきこと。——のよ「夢世」（名）はかなき斯世。無常の世。——ばかり「夢許」（名、副）すこし。いさゝか。——はんじ「夢判」（名）ゆめあはせ。——まくら「夢枕」（名）夢を見つゝある間の枕邊。——まぼろし「夢幻」（名）ゆめとまぼろしと。又、いとはかなき物事。——み「夢見」（名）夢を見ること。

ゆめ「努」（副）決して。つとめて。かならず。（禁止するにいふ語）。「—語るなかれ」。——ゆめ「努努」（副）決して決して。かならず〳〵。

ゆめ-む・る（み、み、む、むる、むれ、みよ）「夢」（自、ま上二）夢を見る。

ゆ-もじ「湯文字」（名）㊀ゆかた。㊁婦人の腰卷。

ゆ-もと「湯本」（名）溫泉の湧（ワ）き出づる土地。

＋ゆ-や「齋屋」（名）古昔、齋戒する時に籠（コ）もり居たる堂舍。

ゆ-や「湯屋」（名）㊀ゆどの。ふろば。㊁料金をとりて、人に入浴せさすることを業とする家。せんたう。

＋ゆ-ゆ・し（しく、し、しき、しけれ）「由由」（形、二）㊀いみはゞかるべし。いま〳〵し。㊁はなはだし。いみじ。甚大なり。「—き大事」。

（ゆ-らい）「由來」（名）其物事の來歷。（原由、來由）。

（ゆ-らい）「由來」（副）もとより。元來。

＋ゆら-が・す（さ、し、す、す、せ、せ）「搖」（他、さ四）ゆるがす。

ゆら-ぐ（が、ぎ、ぐ、ぐ、げ、げ）「搖」（自、か四）うごく。ゆるぐ。

ゆら・す（さ、し、す、す、せ、せ）「搖」（他、さ四）ゆりうごかす。ゆる。

＋ゆら-に「搖」（副）ゆら〳〵と。

ゆら-めか・す（さ、し、す、す、せ、せ）「搖」（他、さ四）ゆらめくやうにす。

ゆら-め・く（か、き、く、く、け、け）「搖」（自、か四）ゆら〳〵す。ゆらぐ。（搖蕩）。

（ゆら-ゆら）「搖搖」（名、副）彼方此方にゆるぐさまにいふ語。（飄然）。

＋ゆら-らに（副）ゆら〳〵と。

ゆらり「搖」（名、副）㊀「ゆらゆら」に同じ。㊁ゆるやかにせまらざるさまにいふ語。

ゆり「百合」（名）㊀【植】百合科に屬する草、山野に自生し又は栽培せらる、葉は通常莖に似、花は通常鐘狀をなし大形にして美麗なり、雄蕊は丁字狀の葯を有す、根莖は白色にして鱗狀の球形をなし食用に供せらる、種類多し。㊁かさねの色目、表赤く裏の朽葉なるもの。

＋ゆり「從」（助）「より」に同じ。（自）。

ゆり-うごか・す（さ、し、す、す、せ、せ）「搖動」（他、さ四）ゆら〳〵とうごかす。

ゆり-うご・く（か、き、く、く、け、け）「搖動」（自、か四）ゆら〳〵とうごく。

ゆり-おこ・す（さ、し、す、す、せ、せ）「搖起」（他、さ四）ゆりておこ

す。

ゆり-かたむ・く（くけけくくれ、けよ）[搖傾]（他、か下二）ゆるがし傾く。

ゆり-がね[淘金]（名）土石にまじりたる砂金を水にゆりてとりたるもの。

ゆり-かへし（エシ）[搖返]（名）ゆりかへすこと。「地震のー」。

ゆり-かへ・す（エス）（さしすせせ）[搖返]（自、さ四）ゆりたる反動にて再びゆる。

〔**ゆりる**〕[許]（自）「ゆるる」の訛。

ゆ・る（らりるるれれ）[搖]（他、ら四）㊀ふるひ動かす。ゆるがす。㊁水中にてゆるがして洗ふ。（淘）。

ゆ・る（らりるるれれ）[搖]（自、ら四）ふるひ動く。ゆるぐ。

ゆ・る（れれるるるれよ）[許]（自、ら下二）ゆるしを受く。ゆるさる。

ゆるが・す（さしすせせ）[搖]（他、さ四）ゆらぐやうにす。ゆるがしむ。

ゆるかせ[忽]（名）なほざり。おろそか。不注意。粗忽。いるかせ。

ゆる・ぐ（がぎぐぐげげ）[搖]（自、か四）ふるひ動く。ゆる。ゆらぐ。

ゆる・ぐ（がぎぐぐげげ）[緩]（自、か四）ゆるくなる。ゆるむ。

ゆる-げ・し（くしきけれ）[緩]（形、二）ゆるやかなり。

ゆる・し（くしきけれ）[緩]（形、二）㊀嚴重ならず。きびしからず。（寬）。㊁太づかなり。いそがず。㊂濃厚ならず。うすし。

ゆるし[許]（名）㊀ゆるすこと。許可。㊁師より弟子に藝術の奧儀を傳授する階級の最下。┼——**いろ**[許色]（名）古昔、衣服の紅色と紫色とのうすき色にして誰にても着用し得る色。禁色の對。

ゆる・す（さしすせせ）[許]（他、さ四）㊀ゆるやかにす。ゆるむ。（緩）。㊁束縛を解きて自由にせさす。（解、釋）。㊂よしと承知す。うべなふ。（聽、容）。㊃許可す。きゝとゞく。（允許、准許）。㊄刑罰を加へずしてかへしやる。とがめだてをせず。（赦、宥）。

ゆる・ぶ（ばびぶぶべべ）[緩]（自、は四）「ゆるむ」に同じ。

ゆる・ぶ（べべぶぶるぶれべよ）[緩]（他、は下二）「ゆるむ」に同じ。

〔**ゆるべる**〕（他）前條の訛。

ゆる・まる（らりるるれれ）[緩]（自、ら四）ゆるくなる。

ゆる・む（まみむむめめ）[緩]（自、ま四）ゆるくなる。

ゆる・む（めめむむるむれめよ）[緩]（他、ま下二）ゆるくなるやうにす。ゆるむやうにす。

〔**ゆるめる**〕（他）前條の訛。

ゆる-やか[緩]（名）ゆるきさまなること。きびしからざること。太づかなること。うすきさまなること。

ゆるゆる[緩]（副）㊀いそがざるさまにいふ語。㊁くつろぎたるさまにいふ語。㊂粘（ネ）りて柔かきさまにいふ語。

ゆる-らか[緩]（名）「ゆるやか」に同じ。

ゆるり[緩]（副）ゆる〳〵。ゆっくり。

ゆ-わう（ウーヲ）[硫黃]（名）㊀【化】火山地方に產する黃色の脆き非金屬、水に溶解せず、熱すれば漸々融解して黃色の液體となり、尙ほ熱するに從ひて漸く褐色を帶び粘質となる、更に熱すれば再び液體となり黑褐色を帶び、遂に沸騰して蒸氣となる、火を點ずれば青色の焰を舉げて燃ゆ。（油黃）。㊁「ゆわうぎ」の略言。——**ぎ**[硫黃木]（名）つけぎ。（發燭、焠兒）。——**くわ**[硫黃華]（名）【化】硫黃の蒸氣を急に冷（ヒ）やすとき生ずる粉末狀のもの。

ゆ-わかし[湯沸]（名）金屬にてつくりたる銚瓶のごとき器、早く湯をわかすに用ふるもの。

（**ゆゐ-いち**）[唯一]（名）㊀唯だ其もの一つなること。㊁「ゆゐいちしんたう」の略言。——**しんけう**（ヨーキ）[唯一神教]（名）一神教に同じ。又、「ユニテリアン」に同じ。——**しんたう**（ウート）[唯一神道]（名）神道の一派、兩部神道などに對して純粹なる我國從來の神道を主張せるもの、卜部兼俱を創首とす。

（**ゆゐ-かい**）[遺誡]（名）臨終の際、いましめの言を遺（ノコ）すこと。又、其言。「九條殿—」。（遺訓）。

（**ゆゐが-どくそん**）[唯我獨尊]（名）㊀天上天下の條を見よ。㊁自分ひとりすぐれたりとすること。

（**ゆゐが-ろん**）[唯我論＝Solipsism]（名）【哲】認識は吾人の心中にける主觀的作用に外ならず、吾人の認識は自我及自我の變形にして、其以外は認識し得ずといふ說。又、自己以外に何物も實在せずといふ說。

（**ゆゐ-ごん**）[遺言]（名）臨終に言ひ遺（ノコ）す言葉。ゆゐげん。

ゆゐ-しよ[由緒]（名）然るべき由來。——**がき**[由緒書]（名）由緒を記したる文書。

（**ゆゐ-しん**）[唯心]（名）たゞ心の作用のみなること。——**ろん**[唯心論＝Spiritualism]（名）【哲】自然の本質は精神にして、物質的現象も精神的作用に外ならずとふ說。唯物論の對。

（**ゆゐ-ぶつ-ろん**）[唯物論＝Materialism]（名）【哲】自然の本質は物質にして、精神的現象も物質的作用に外ならずといふ說。唯心論の對。

ユヰマ-ヱ[維摩會]（名）古昔、十月十日より十六日まで行はれし公事、興福寺にて維摩經を講ぜられたり。

（**ゆゐ-めい-ろん**）[唯名論＝Nominalism]（名）【哲】普遍なるものは存在せずたゞ便宜上の名目に過ぎず眞の實在は個物なりといふ說。（名目論）。

（**ゆゐ-もつ**）[遺物]（名）死したる人の遺（ノコ）しおきたる物品。かたみの物品。

ゆゑ[故]（名）もの事の起こるべき理由。すぢ。よし。

ゆゑ-あり-げ[故有氣]（名）故あるさま。曰くあり相。

┼**ゆゑ-さはり**（ワーサリ）[故障]（名）さしさはり。ことさやろ。

┼**ゆゑ-づ・く**（かきくくけけ）[故附]（自、か四）ゆゑありげなり。よしづく。

ゆゑ-に[故]（接）この理由によりて。かるがゆゑに。このゆゑに。

┼**ゆゑ-ゆゑ・し**（しくしきしけれ）[故故]（形、二）故あるさまなり。ゆゑありげなり。

ゆゑ-よし[故由]（名）いはれ。

ゆゑ-ん[所以]（名）「ゆゑ」の音便。

ゆん-せい[弓勢]（名）弓を張る力量。

ゆん-だけ[弓丈]（名）一張りの弓の長さ、七尺五寸なるを法とす。

ゆん-づゑ[弓杖]（名）㊀戰に拔（カツ）れたる時などに、弓を杖として、息（コイ）ふと、「—つく」。㊁ゆんだけ。

ゆん-で[弓手]（名）弓を持つ方の手、即ち左の手。馬（メ）手の對。（左手、雄手）。

〔**ゆんべ**〕[昨夜]（名）「よべ」の訛。（昨晚）。

よ

よ 母音「い」を從音とし母音「お」を主音としたる綴音。

よ[夜]（名）日沒より日出までの間。よる。——**に いる** よるとなる。——**に かくる** やみにまぎる。くらきために見あたらず。——**を こぼす** 夜あかしをなす。

┼**よ**[節]（名）竹又は葦などの節（フシ）と節との間。

よ[世]（名）㊀人類の社會。せけん。せかい。人間。㊁せけんのいきほひ。せかいのありさま。㊂くに。國家。「—を治む」。㊃一人の帝王の國家をしろしめす間。御宇。㊄同一系統の帝王が相つぎて國家ををさめらるゝ間。「周の—」。「漢の—」。㊅一人の家主が其家にありたる間。「父の—」。（代）。㊆同一系統の存續する間。㊇個人の生涯の間。㊈其ものの榮ゆる間。㊉父子相繼ぐこと。⑪なり。とき。⑫つきあひ。まじはり。⑬男女のなからひ。⑭俗事。⑮とし。よはひ。——**に あふ** 志を得。出世す。——**に いづ** 前條に同じ。又、生れ出づ。——**に つく**[卽世] 死ぬ。——**を さる** 前條に同じ。——**を はやらす** わかまにす。——**を わたる** くらしゆく。

（**よ**）[餘]（名）㊀あまり。のこり。「五年—」。㊁ほか。よそ。

（**よ**）[余、予]（名）自稱の代名詞。われ。

よ[四]（數）三と一との和。よつ。 1+3

┼**よ**[從]（名）より。ゆ。（自）。

よ（助）動詞に添（ソ）へて命令の意を表はす語。「見—」。

よ（感）㊀呼びかくる聲。「君—待て」。㊁意味を強めて言ひ切る語。「いけないー」。

ヨー-くわ-カリウム[沃化＝Kalium iodide]（名）【化】沃素と「カリウム」との化合物にして水に溶け易き白色立方體の結晶體、醫術又は寫眞術等に用ひらる。沃度加里。

ヨー-くわ-ぎん[沃化銀＝Silver iodide]（名）【化】沃素と銀との化合物、黃色の粉末にして水及酸に溶解せず、日光に當つれば變化して紫黑色に變ず、寫眞術に用ひらる。

ヨー-そ[沃素＝Iodine]（名）【化】性質鹽素に類似せる元素、灰黑色板狀の結晶體にして、稍や金屬光澤を有し、茶色の蒸氣を發して昇華す、水に溶（ト）け易からざれど「アルコール」に溶け易し、溶液を澱粉溶液に加ふれば濃藍色の沈澱を生ずるより澱粉の鑑識に用ひらる。

ヨード[沃度＝Iodine]（名）【化】「ヨーそ」（沃素）に同じ。——**カリ**[沃度加里]（名）【化】「ヨーくわカリウム」に同じ。——**チンキ**[沃度丁幾＝Iodo-tincture]（名）【化】沃素の「アルコール」溶液、醫藥に用ふ。

ヨードホルム[沃度仿謨＝Iodoform]（名）【化】沃度の「アルコール」溶液と水酸化「アルカリ」との反應によりて生ずる黃色の結晶體、防腐劑として醫藥に用ひらる。

（**よ-あう**）（ウオ）[餘殃]（名）惡事のむくいとして來る災難。

よ-あかし[夜明]（名）夜を明かすこと。徹夜。

よ-あきなひ（アキナイ）[夜商]（名）夜間にするあきなひ。

よ-あきんど[夜商人]（名）夜あきなひする商人。

よ-あけ[夜明]（名）夜の既に日出に近き時。よのあけがた。あかつき。（天明）。——**の-みやうじやう**（ヤウ ジヨウ）[夜明明星]（名）「あけのみやうじやう」に同じ。

よ-あそび[夜遊]（名）夜あそびあるくこと。

よ-あらし[夜嵐]（名）㊀夜吹くあらし。㊁盜賊の異稱。

よ-あるき[夜步]（名）夜出あるくこと。

よ-いくさ[夜軍]（名）夜間にするいくさ。

〔**よいや**〕（感）力を入れ、又は喝采する時の聲。

よい-よい（名）手足痲痺して自由ならず、步行よろ〳〵して仆れ易きもの「アルコール」又は「ニコチン」の中毒、房事又は手淫の過度、其他熱病・感冒・梅毒等に原因す。

（**よ-いん**）[餘音]（名）のこるこゑ。

（**よ-いん**）[餘蔭]（名）おかげ。

(やう[俑](名) 手足を動かす裝置ある人形、支那の古昔、これを殉死者のかはりに埋(ウ)めたりといふ。―をつくる[作俑]（論語に出づ）不善なる端緒をつくるにいふ。

(やう[用](名) ㊀用事。用向。㊁つかひみち。もちひ。㊂はたらき。作用。㊃つひえ。入費。「―を省く」。

(やう[癰](名) 一種の腫物、疔(チヤウ)の發生したるものにして其面に黃灰色の膿あつまり寄る、多くは頸・背・臀・脣などに發生す、顏面部に生ずるものは危險なり。

(やう[蛹](名) 【動】昆蟲の幼蟲が變態經過の際、運動を中止し營養物を取(ト)らざるときの稱。さなぎ。

(やう-い[用意](名) ㊀心を用ふること。注意すること。こゝろがけ。㊁前以て其物事に要するそれ〲のものを調へおくこと。支度。(準備、設備)。

(やう-い[庸醫](名) つたなき醫者。やぶいしや。

(やう-い[容易](名) たやすきこと。やさしきこと。難からざること。

(やう-えき[溶液](名) 或液體に他の物體の溶解したるもの。

(やう-えき[傭役](名) やとひてつかふこと。

(やう-かい[容喙](名) そばより口を出すこと。

(やう-かい[溶解](名) 或液體に他の物體を入るるとき其物體の分れて液中に均一に散ずること。分子の引力により、固體或は氣體の分子が液體の分子間に潛入すること。とくること。

(やう-かい[鎔解](名) 金屬の火のためにとけて液狀となること。とらくること。

(やう-かん[用間](名) 細間を放つこと。しのびのものをつかふこと。

(やう-がん[容顏](名) かはだち。かはつき。

(やう-がん[熔岩](名) 【鑛】火山の噴出物、岩石が地熱のためにやけたゞれたるものにして、非常の高熱を生じ灼々たる光輝を放ちて流出す。―トンネル[熔岩隧道](名) 流出したる溶岩の外部冷却し內部の液體流出するによりて生じたる洞穴、富士の人穴の如きこれなり。

(やう-き[容器](名) ものをいるゝうつは。

(やう-き[用器](名) 器具をつかふこと。又、つかふ器具。―ぐわ[用器畫](名) 「コンパス」・定規などを用ひてかく圖畫。

(やう-ぎ[容儀](名) なりふり。おしだし。容體。樣子。

(やう-きやく[用脚](名) 錢の異稱。(要脚)。

(やう-きん[用金](名) ㊀公用の金錢。㊁昔時、大名が臨時に領地の人民に賦課せし稅金。

(やう-くわ[熔化](名) 火にかけてとかすこと。

(やう-くわう[容光](名) 空隙に入るひかり。

(やう-けい[甕鷄](名) (莊子に出づ、かめの中の蛆(ジウ)の義)識見せまきものにいふ語。

(やう-げん[用件](名) ようむき。

(やう-げん[用言](名) 【文法】語尾の變化する語、即ち、動詞・形容詞・助動詞。

(やう-げん[庸言](名) 平凡なることば。

(やう-ご[用語](名) 用ふる語。つかふことば。

(やう-ご[擁護](名) かゝへまもること。又、とりまきまもること。

(やう-さい[庸才](名) なみ〲の才能。

(やう-ざい[用材](名) 使用する材。

(やう-ざい[溶劑](名) 物體を溶解するに用ふる液體。

(やう-さく[傭作](名) 人にやとはれてはたらくこと。

卄やう-さり[夜去](名) よる。よさり。―がた[夜去方](名) 前條に同じ。

(やう-し[容姿](名) みめかたち。すがた。

(やう-し[用紙](名) 其物事に用ふる紙。

(やう-じ[用事](名) なすべき事。つとむべき事。

(やう-しつ[溶質](名) 或液體に溶解する物質。

(やう-しや[容赦](名) ㊀堪忍すること。ゆるすこと。㊁ひかへめにすること。

(やう-しや[用捨](名) ㊀取ると捨つること。㊁善惡の差別。

(やう-しよ[用所](名) もちふる所。つかふ所。

(やう-しよく[容色](名) かほだち。かほばせ。みめかたち。

(やう-じん[庸人](名) なみの人。つねの人。

(やう-じん[用心](名) ㊀心を用ふること。注意すること。㊁いましめ。警戒。―きん[用心金](名) 萬一の場合にそなふる金錢。―つち[用心土](名) 火災のとき土藏の戶前又は窓を塗(ヌ)りふさぐためにそなへおく土。―ぼう[用心棒](名) ㊀戶をしむるために備へおく棒。㊁博徒の親方などの萬一に備ふるためにやとひ置く武藝者。

(やう-す[容子](名) ありさま。樣子。

(やう-すゐ[用水](名) ㊀水を使用すること。㊁使用のために引き又は備へたる水。㊂田畠に灌漑するために供ふる溝渠又は溜池。―をけ[用水桶] 用水を溜めおく桶、多く火災にそなふ。

(やう-せき[容積](名) ㊀中にものを入れ得る積。㊁立方體の積。

(やう-せう[鎔銷](名) とらくること。又、とらかすこと。

(やう-せん[涌泉](名) わき出づるいづみ。

(やう-せん[傭錢](名) やとひて使役する賃錢。やとひちん。

(やう-そく[壅塞](名) ふさぐこと。又、ふさがること。

(やう-だい[容體](名) ㊀なりかたち、なりふり、㊁重々しきさま。もったいらしきさま。㊂病氣の樣子。病狀。(容態)。―がき[容體書](名) 病狀をしるしたるかきつけ。―ぶ・る（ら、り、る、る、れ、れ）[容體振](自、ら四) おも〲しきをよそほふ。

(やう-だう[甬道](名) 兩側に墻をきづきたる道。

(やう-たく[容啄](名) 「ようかい」(容喙)に同じ。

やう-たし[用達](名) ㊀役所又は貴人の邸などに出入して、買物其他種々の用を足す商人。㊁用事を辨ずること。「―に行く」。

やう-だ・つ（た、ち、つ、つ、て、て）[用立](自、た四) 役に立つ。もちひになる。

やう-だ・つ（て、て、つ、つる、つれ、てよ）[用立](他、た下二) ㊀使用す。もちふ。㊁貸與す。かす。㊂たてかへおく。

(やう-だん[用談](名) 用事の談話。

(やう-だんす[用簞笥](名) 雜用の物を入るゝ小簞笥。

よ-うち[夜討](名) 夜に紛(マギ)れて敵陣を襲ふこと。(夜斫)。

(やう-ち[用地](名) 其物事に使用する土地。

(やう-ちゆう-の-かうかう[庸中佼佼](名) 衆人にぬきいでたるもの。

(やう-ちよう[膺懲](名) うちてこらすこと。

(やう-と[用途](名) つかひみち。もちひどころ。

(やう-ど[用度](名) いりめ。いりか。入費。

(やう-とう-の-もんじ[蠅頭文字] いと細かき文字。

やう-なし[用無](名) ㊀入用にあらざること。いらぬこと。㊁用事なきこと。ひまなること。

やう-な・し（く、し、き、けれ）[用無](形、二) かひなし。せんなし。

(やう-にふ[傭入](名) やとひいれ。

(やう-にん[傭人](名) やとひびと。やとひにん。

(やう-にん[用人](名) 貴族の家に事(カツ)へて雜事を處辨するもの。

やう-ば[用場](名) 大小便の場所。かはや。(厠)。

(やう-ばい[溶媒](名) 物質を溶解せさするもの。

(やう-ばう[容貌](名) かほかたち。みめかたち。(顏色)。

(やう-はふ[用法](名) もちひかた。

(やう-ひつ[用筆](名) ㊀つかふふで。㊁筆の用ひかた。(多く書道にいふ)。

(やう-ひん[用品](名) もちふる品。

(やう-ふ[傭夫](名) やとひをとこ。

(やう-ふ[傭婦](名) やとひをんな。

よう-べ[昨宵](名) よべ。(昨夜、昨夕)。

(やう-へい[用兵](名) 兵をつかふこと。軍隊をあやつること。

(やう-へい[壅蔽](名) ふさぎおほふこと。

(やう-へい[壅閉](名) ふさぎとづること。又、ふさがりとづること。

やう-べや[用部屋](名) 昔時、幕府の老中などの政治を取扱ひし所。又、大名の老臣などの事件を取扱ひし所。

(やう-べん[用辨](名) ようたし。

(やう-む[用務](名) つとめ。

(やう-むき[用向](名) ㊀用事のおもむき。㊁用事。

(やう-めん[容面](名) かほかたち。

(やう-や[鎔冶](名) 金屬をとかし鑄(イ)ること。

(やう-やう[溶漾](名、副) 水波のうごくさまにいふ語。

(やう-やく[踊躍](名) をどりあがること。とびたつこと。

(やう-よ[容與](名、副) ゆったりしたるさまにいふ語。

(やう-やう[洋洋](名、副) 水流などの廣大なるさまにいふ語。

(やう-りつ[擁立](名) たすけまもりて位につかすること。

(やう-りやう[容量](名) その中に納めたる物の量。

(やう-れい[用例](名) 使用せるためし。

(やう-れつ[庸劣](名) すぐれざること。おとれること。

(やう-ろ[鎔爐](名) 金屬をとかす爐。

(やう-ろ[用路](名) 「ようと」に同じ。

〔やう-わり[夜割](名) よなべ。(福島地方の方言)。

(よ-うん[餘蘊](名) あまれるたくはへ。

(よ-えい[餘榮](名) 死後のさかえ。死後の名譽。

(よ-えい[餘穎](名) あまり。のこり。

(よ-か[豫價](名) ㊀あらづもりのねだん。㊁かけね。

(よ-か[餘暇](名) いとま。ひま。

(よ-かい[豫戒](名) ㊀あらかじめ警戒すること。㊁【法】警視總監・北海道廳長官・府縣知事等が、公共の安寧秩序を保持するため、豫戒令により、浮浪の徒其他他人の自由權利を妨害せんとする者に對し、一定の期間內謹愼を命じ若しくは特別なる警察上の監督を受けしむること。

(よ-かう[餘香](名) のこるかをり。

(よ-かく[餘角](名) 【數】二つの角の和が一直角に等しきとき、その一つの角の他の一つの角に對する稱。

よ-かぜ[夜風](名) 夜のかぜ。

卄よ-がたり[世語](名) せけんばなし。(世談)。

(よ-かつ[餘割](名) 【數】三角函數の條を見よ。

よが-な-よっぴて(副) 夜どほし、

よ-かは[夜川](名) ㊀夜中の川。㊁夜中の川獵。

よ-がら[世柄](名) 世のありさま。(時勢)。

卄よ-か・る（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）[夜離](自、ら下二) 每夜通ひしを絕ゆ。男女の間の仲絕ゆ。

〜よ-が・る（ら、り、る、る、れ、れ）(自、ら四) こゝろよしと感ず。得意になる。

廿よ-がれ［夜離］（名）よがるゝこと。

〔よかれ-あしかれ（副）よしあしにかゝはらず。如何にありとも。

（よ-かん［餘寒］（名）大寒後の寒さ。

よき（名）小さき斧。

（よ-き［豫期］（名）かねて期すること。

よ-ぎ［夜着］（名）形、衣の如くにして、厚く綿を入れたる衾（フスマ）。（夜具）。

よ-ぎしや［夜汽車］（名）夜間乘る汽車。夜行列車。

よぎ-な-し［餘儀無］（形、一）止むを得ず。ぜひなし。よんどころなし。

（よ-きやう［餘響］（名）のこりのひゞき。

（よ-きよう［餘興］（名）宴席などの後に興を添ふる演藝などの稱。

よぎ・る［過］（自、ら下四）立ち寄らずに行く。すぐ。通りすぐ。

（よ-きん［預金］（名）直接又は間接に利殖の方便として金錢をあづけ、これをあづかりたるものは、これに規定の利息を附與するもの。

（よく［慾］（名）望み貪（ムサボ）る情。ねがひもとむる心。——とふたりづれ　慾のためにいとはずに往來すること。

（よく［翼］（名）㊀つばさ。㊁たすけ。輔佐。㊂中軍の左右の軍。「右—」、「左—」㊃【天】二十八宿の一。

（よく［翌］（名）あくるひ。

廿よ・く［避］（他、か四）次條に同じ。

廿よ・く［避］（他、か上二）次條に同じ。

よ・く［避］（他、か下二）㊀あはぬやうにす。傍へ退く。さく。㊁防ぐ。除く。

よく［善］（副）㊀親切に。ねんごろに。（好）。㊁ともすれば。やゝもすれば。㊂巧（タク）に。うまく。（克）。㊃事に堪へて。難きをおして。（能）。

（よく［翌］（添）年月に冠して、次に來る歲を表はす語。「—年」、「—月」。

よく-あさ［翌朝］（名）あくるあさ。

（よく-あつ［抑壓］（名）おしつくること。おさへつくること。

（よく-あつ［抑遏］（名）おしてとゞむること。おさへとむること。

（よく-い［浴衣］（名）ゆかた。

（よく-い［薏苡］（名）【植】禾本科に屬する野草、高さ數尺、葉はずゞだまに似、果實は淡褐色にして稍や黑色を帶ぶ。——にん［薏苡仁］（名）よくいの果實、仁參に似て白色なり、藥用に供せらる。

（よく-かい［欲界］（名）【佛】三界の一、欲望を以て充されたる世界。

（よく-かく［浴客］（名）入浴に來る人。

（よく-きう［欲求］（名）或もの事をおひ求めて、これを得んと努力すること。ほしがりもとむること。

（よく-きやく［浴客］（名）「よくかく」に同じ。

（よく-くわ［欲火］（名）ほしがる情の火の如くおこりたつこと。

（よく-げう［翌曉］（名）あくるあさ。

（よく-げつ［翌月］（名）あくるつき。

（よく-ご［浴後］（名）ゆあみしたるあと。

（よく-さう［浴槽］（名）ゆあみするゆぶね。

（よく-さん［翼贊］（名）そばより力をそへてたすくること。

（よく-し［抑止］（名）おさへとゞむること。

（よく-しつ［浴室］（名）ゆどの。ふろば。

（よく-じつ［翌日］（名）次の日。

（よく-じやう［沃壤］（名）よくこえたる土地。

（よく-じやう［欲情］（名）ほしがるこゝろ。もとむるこゝろ。

（よく-しゆ-るゐ［翼手類］（名）【動】哺乳類の一、前肢・後肢及尾部との間に皮膜ありて伸長せる手指はこれを支持する骨となり、皮膜外の端に鈎爪ありて物に懸りとゞまる。かうもり等これに屬す。

（よく-しん［欲心］（名）「よくじやう」（欲情）に同じ。

（よく-せい［抑制］（名）おさへとゞむること。

（よく-ぜう［沃饒］（名）地味のよくこえたること。

〔よく-せき（名）已むを得ざること。堪へられざること。よく〳〵。

（よく-せき［翌夕］（名）あくるばん。

（よく-そん［抑損］（名）ひかへめにすること。

（よく-てう［翌朝］（名）あくる朝。

（よく-ど［沃土］（名）肥えたる土地。

（よく-とく［欲得］（名）ほしがる心と、とくにつくこと。

（よく-とし［翌年］（名）あくるとし。

（よく-ねん［欲念］（名）ほしがる念慮。もとむること。

（よく-ねん［翌年］（名）あくる年。

（よく-ばう［欲望］（名）不足を感じてこれを滿さんとすること。もとめのぞむこと。

よく-ばり［慾張］（名）よくばること。又、其人。「—根性。

よく-ば・る［慾張］（自、ら四）欲心さかんなり。過度に貪る。

（よく-ばん［翌晩］（名）あくるばん。

（よく-ばん［浴盤］（名）ゆあみするたらひ。

〔よく-ふか［慾深］（名）慾のふかきこと。

よくブツ-せち［浴佛節］（名）「くわんブツゑ」（灌佛會）に同じ。

よく-め［慾目］（名）贔負（ヒイキ）の心よりよく見ゆること。好める情におぼれすぐれて見ゆること。

（よく-や［翌夜］（名）あくるばん。

（よく-や［沃野］（名）地味の肥えたる平地。

（よく-やう［抑揚］（名）㊀あげおろし。あげさげ。㊁勢を或は低くし或は高くすること。調を或はさげ或はあぐること。

（よく-よく［翼翼］（名、副）㊀とゝのひて正しきさまにいふ語。㊁いとうや〳〵しきさまにいふ語。

（よく-よく［抑抑］（名、副）おちつきてつゝしみたるさまにいふ語。

よく-よく（名）已むを得ざること。よくせき。

よく-よく［能能］（副）ねんごろの上にもねんごろに。念を入るゝ上にも念をいれて。

（よく-りう［抑留］（名）おさへとゞむること。

（よ-くわ［豫科］（名）本科に入るための豫備の科程。

（よ-くわう［餘光］（名）㊀あまりのひかり。㊁おかげ。

（よ-けい［餘計］（名）㊀物のあまりあること。（餘分）。㊁役にたゝぬこと。無益。「—の世話」。

（よ-けい［餘慶］（名）功德のむくいに來る吉事。

廿よけく［善］（名、副）よいことの意。又「よく」に同じ。「いつしかも、人となりいでゝ、あしけくも、—けくも見むと」。

（よ-げつ［餘孽］（名）滅亡せる家の子孫ののこれるもの。

よ-げに［好氣］（副）よささうに。

（よ-げふ［餘業］（名）㊀のこりの業。㊁本業外の業。

よけ-みち［避路］（名）さくるみち。

〔よける（他）「よく」の訛。

（よ-げん［餘弦］（名）【數】三角函數の條を見よ。

（よ-げん［豫言］（名）未來の事を豫じめ推測して言ふこと。——しや［豫言者］（名）未來を豫言する人。

よこ［横］（名）㊀左右へ廣がれる向き。㊁左右。㊂東西。㊃立體の側面より反對側面までの距離、又、平面形の短かき徑の稱。㊄かたはら。側面。㊅正しからぬこと。よこしま。㊆「よこいと」の略言。（緯）。

（よ-ご［豫後］（名）醫師が診斷したる以後の經過。

よこ-あひ［横間］（名）㊀横の方面。横むきの處。㊁局外。

よこ-あめ［横雨］（名）風にさそはれて横にふり來る雨。

よこ-いと［横絲］（名）布帛の横に織る絲。（緯絲）。

よこ-がく［横額］（名）横に長く表裝したる額。

よこ-がほ［横顔］（名）よこむきのかほ。

廿よこ-がみ［輔］（名）車の軸。

よこ-がみ［横紙］（名）㊀漉（ス）き目を横にしたる紙。㊁すき目を横にして用ふる紙。——やぶり［横紙破］（名）是でも非でも押しとほすこと。強ひて行ふこと、又、其性質の人。——をやぶる　よこがみやぶりをなす。

よこ-ぎ［横木］（名）㊀すべて横にわたしたる木。㊁車の後ろに横にわたせる木。（軫）。

よこ-ぎり［横切］（名）「よこぎりじま」の略言。——じま［横切縞］（名）よこにきれたるすぢある縞。

よこ-ぎ・る［横切］（他、ら四）よこさまに通過す。よこにとほる。

（よ-こく［與國］（名）同盟の國。

（よ-こく［豫告］（名）かねて告ぐること。

よこ-ぐも［横雲］（名）たなびく雲。

廿よこ-ごと［横言］（名）「ざんげん」（讒言）に同じ。

よ-ごころ［世情］（名）男女間の愛情。（春心）。

よこ-さ［横］（名）よこのはば。「—竪さ」。

よこ-ざき［横裂］（名）よこさまにさくこと。

よこ-さま［横方］（名）㊀横の方。㊁よこしま。（邪）。

よこざま-の-しに［横樣死］（名）つまらぬしにかた。犬死。

よこ-ざん［横産］（名）胎兒の横になりて出產のむづかしきこと。

廿よこし［脾］（名）「ひ」の古稱。

よこし（名）【動】「さうだがつを」の一名。

よ-ごし［夜越］（名）㊀夜をこすこと。㊁夜をこえゆくこと。

よこ-しぶき［横吹雨］（名）よこあめ。

よこ-しま［邪］（名）㊀よこさま。横の方。㊁正しからざること。ねぢけたること。まがれること。

よこ-しま［横縞］（名）横にすぢのある縞。

廿よこ・す［讒］（他、さ四）しこづ。ざんげんす。譏す。「ひとごとの、—をきゝて」。

〔よこ・す［遣］（他、さ四）おくりきたす。おこす。

よご・す［汚］（他、さ四）きたなくす。けがす。

よこ-すぢ［横筋］（名）㊀よこのすぢ。㊁よこみち。

よこ-たて［横縦］（名）よことたてと。

よこ-たは・る［横］（自、ら四）よこになる。よこにふす。

よこ-た・ふ［横］（他、は下二）㊀よこになす。よこにおく。㊁横に腰に佩（オ）ぶ。

よこ-たふし［横倒］（名）無法なる職階。

〔よこ-たへる（他）「よこたふ」の訛。

よこ-ちやう［横町］（名）横にきれたる路。

よこ-づけ［横附］（名）よこさまにつくること。

よこ-づな［横綱］（名）㊀しでを垂れたる白麻の綱、行司のつかさ吉田追風より力士の大關中の拔群の者に許して腰に纏はしむるもの。㊁横綱のゆるしを受け、これを腰にまとふ大關。㊂轉じて、其社會にて最も拔群なるもの。

よこ-つら［横面］（名）㊀よこがほ。㊁よこあひ。

よこ-て［横手］（名）㊀横にあたる方。㊁横に兩手を打つこと。——をうつ　思ひあたる事などあ

るとき、横に兩の岑をうちあはすること。

＋よ-ごと[壽詞](名) いはふ語。賀詞。

よ-ごと[夜每](名、副) まいや。まいばん。

よこ-とぢ[横綴](名) 横に長く綴づること。又、其冊子。

〔よこ-どり[横取](名) かたはらよりうばひ取ること。(横奪)。

〔よこ-どる[横取](他、ら四) かたはらよりうばひ取る。

よこ-なぐり[横投](名) ㊀よこさまになぐること。㊁無法なる議論をいひかくること。

＋よこ-なまり[横訛](名) 言語の甚しく訛ること。

よこ-なまる[横訛](自、ら四) ことば甚しくなまる。

よこ-ね[横寐](名) よこさまにふすこと。

よこ-ね[横根](名) ㊀横にはひのびたる根。㊁黴毒のため、もゝのつけねに硬(カタ)き腫物の生ずるもの。(横痃、便毒、魚口瘡)。

＋よこ-ばしる[横走](自、ら四) ㊀よこにはしる。㊁岐路に入る。

よこ-ばひ[横這](名) よこにはふこと。「蟹の—」。

よこ-ぶえ[横笛](名) 横に持ちて吹く笛、歌口の外に七孔あり、其名を干・五・上・夕・中・六・下といふ。わうてき。

よこ-ぶぎやう[横奉行](名) 昔時、奉行の傍にありて裁決の是非を監察せし役名。

よこ-ぶり[横降](名) 雨又は雪などの風にさそはれて斜にふること。

＋よこほ-る[横](自、ら四) よこたはる。

よこ-ほん[横本](名) 横に綴ぢたる本。

よこ-まち[横町](名) よこちやう。

よこ-み[横見](名) ㊀わきみ。㊁側面より見ること。

よこ-みち[横路](名) ㊀左右へ通ふ路。㊁わきみち。㊂正しからぬ方向。ねぢけたるむき。㊃よこしまなる理窟。正しからぬ議論。「—に走る」。

よこ-むき[横向](名) ㊀横へ向くこと。㊁側面。

よこ-め[横目](名) ㊀わきみ。そばめ。㊁いろめ。(秋波)。㊂「よこめつけ」の略言。

よこ-めつけ[横目附](名) 昔時、政務のよしあし又は士人の擧動などを監督せし武家の役名。

よこ-もじ[横文字](名) ㊀横に書く文字、即ち、梵字又は西洋文字の類。㊁ローマ字。㊂歐文。

よこ-もの[横物](名) 横額又は卷物の總稱。(横披、横軸)。

よ-ごもり[夜籠](名) よごもること。

よ-ごもる[夜籠](自、ら四) ㊀夜深くあり。夜のうちとなる。㊁神社佛閣に參籠して夜をあかすこと。

＋よ-ごもる[世籠](自、ら四) 年若くあり。

よこ-や[横矢](名) 側面より來る矢。側面より射る矢。

よこやま-ずみ[横山炭](名) 和泉國横山地方より產出する枝炭、石灰の粉をかけて白くす。

よこ-やり[横槍](名) ㊀相戰ふもの、横あひより槍を突き入るゝこと。㊁傍より口出しすること。

よご-る[汚](自、ら下二) ㊀きたなくなる。けがる。㊁月經にかゝる。(婦人の語)。

よごれ[汚](名) よごるゝこと。又、よごれたる痕。—め[汚目](名) よごれたるさま。—もの[汚物](名) よごれたるもの、けがれたる衣服の類。

よこ-れんぼ[横戀慕](名) 他人の夫若しくは妻などに對して、他のもの、戀慕すること。

よ-ごろ[夜頃](副) 數夜このかた。

＋よ-ごゑ[夜聲](名) 夜中の聲、さえて聞こゆるもの。

(よ-ざい)[餘罪](名) あまれるつみ。ほかのつみ。

(よ-ざい)[餘財](名) ㊀のこれる財物。餘れる財產。㊁外の財物。

(よ-さう)[豫想](名) あらかじめの推量。かねての想像。—ぐわい[豫想外](名) おもひのほか。意外。

＋よ-さ-す[寄](他、さ四) 「よす」の敬語。

＋よ-ざま[好樣](名) 好きさま。

よ-さむ[夜寒](名) ㊀夜の寒きこと。㊁夜の追々寒さを感ずる時候。(秋に言ふ語)。

よ-さり[夜](名) よる。

(よ-さん)[豫算](名) ㊀あらかじめの計算。㊁國家又は地方團體が、次の一會計年度間の收入支出を豫じめ計算したるもの、國家の豫算は、各省大臣の提出する各概算書に基きて大藏大臣これが總概算書を作成して內閣に提出す、內閣はこれを審議して帝國議會に提出す、議會これを議決し裁可を經て公布せられ成立す、斯くて行政官府は其範圍內に於て會計法の規定に從ひ收支をなすもの、地方團體のは執行機關これを調製し議決機關の議決を經て成立し、其範圍內に於て收支をなすべきは國家の豫算と異なることなし。—あん[豫算案](名) 議會に提出して未だ議決を經ざる豫算。—ぐわい[豫算外](名) 豫算に揭げざる事項。「—の支出」「—の收入」。—てうくわ[豫算超過](名) 收入又は支出が豫算の額より超過せること。—ふせいりつ[豫算不成立](名) 帝國議會に提出したる豫算案が、議會の解散又は否決等によりて裁可を請ふに至らざる場合の稱、其場合

には前年度の豫算によるべきものとす。—ゐん[豫算委員](名) 帝國議會にて豫算の審査を附托せられたる常任委員。

よし[由](名) ㊀ゆゑ。いはれ。わけ。由來。㊁よるべ。よすが。ちなみ。因緣。

よし[葦、蘆](名) 【植】「あし」に同じ。(東國の方言)。

(よ-し)[餘矢](名) 【數】三角函數の條を見よ。

(よ-し)[餘師](名) 十分に師となすべきもの。

(よ-し)[餘資](名) あまれる資金。

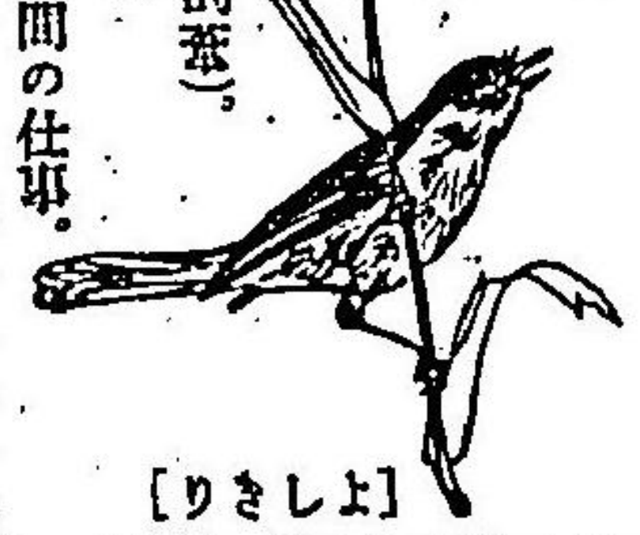
よ-し(形、一) ㊀このまし。よみすべし。(好)。㊁すぐれたり。はむべし。(良)。㊂程にかなへり。よろし。(宜)。㊃理にかなへり。惡ならず。(善)。㊄うるはし。うつくし。(美)。㊅よろこぶべし。いはふべし。(吉、瑞)。㊆たふとし。たかし。(貴)。㊇けだかし。みやびたり。(雅)。㊈許すべし。可なり。(佳)。㊉難からず。やすし。(易)。

よし[縱](副) ㊀さもあらばあれ。まゝよ。㊁たとひ。よしや。

(よ-じ)[餘事](名) 他の事。

(よ-しう)[豫修](名) 豫備としてをさめならふこと。

よし-きり[葦切](名) 【動】葦雀類中うぐひす科に屬する鳥、形鶯に似、腹白く、尾稍や長く夏の頃、葦原の中に居て、喧しく鳴く。よしはらすゞめ。ぎやう〳〵し。(剖葦)。



[よしきり]

よし-ご[葭子](名) 葦の芽。

よ-しごと[夜仕事](名) 夜間の仕事。

〔よしこの[好此](名) 「よしこのぶし」の略言。—ぶし[好此節](名) (好此(ヨシコノ)は、拍子の掛聲)「どゞいつ」の一名、現時關西地方にて稱するは、

所謂どゞいつとは稍や其謠方を異にし後に引く聲の長きものをいふ。

よし-ず[葦簾](名) 葦にて編みたるすだれ。—ばり[葦簾張](名) よしずにて圍ひたる小屋、掛茶屋などに多し。

(よ-じつ)[餘日](名) 餘る日限。

＋よし-づく[由付](自、か四) 由ありげに見ゆ。「いと、よしづきて」。

よしつね-ばかま[義經袴](名) 裾に緣をつけたる袴。

よし-ど[葦戶](名) 葦簾を張りたる戶。

よし-なし-ごと[由無言](名) 何といふ理由もなき根なし言。冗談。

よし-なに(副) よきやうに。よろしきやうに。

よしの-がみ[吉野紙](名) 大和國吉野郡より產出する一種の紙、極めて薄く、典具帖(テングデフ)に類す。

よしの-ぐさ[吉野草](名) 【植】「あけぼのさう」の一名。

よしの-くず[吉野葛](名) 大和國吉野地方より產出する上品なる葛。

よしの-ごほり[吉野氷](名) 一種の菓子、吉野葛に砂糖を加へて固めたるもの。

よしの-ざくら[吉野櫻](名) 【植】櫻の一種、大和國吉野山に多きよりいふ、花は大形美麗にして芳し。

＋よし-ばむ[由](自、ま四) 由ありげに見ゆ。

よし-はら-すずめ[葦原雀](名) 【動】「よしきり」の一名。

よし-み[好](名) したしみ。まじはり。

よし-や[縱](副) たとひ。

(よ-じやう)[餘情](名) なごりの風情(フゼイ)。

(よ-じよう)[餘剩](名) あまり。のこり。

(よ-しよく)[餘色](名) 【理】甲の色にまじく地下に白となるべき乙色の甲色に對しての稱、例へば綠色は赤色の餘色なるが如し。補色。

＋よし-よし-し[由由](形、二) 由ありげなり。

(よ-しん)[豫審](名) 【法】重罪若しくは輕罪重大なる輕罪の刑事被告人に就き、これを公判に付すべきか若しくは免訴すべきかを決定するため、其犯罪を明確にするために一切の事實を審理するを、其結果により、免訴の言渡若しくは重罪公判・輕罪公判に付する言渡をなす、現行犯の外は檢事の請求によらざればこれを行ふを得ず。罪人の下しらべ。

(よ-しん)[餘震](名) 【地】大地震の後に小さき震動の續發するもの。

(よ-じん)[餘燼](名) もえのこりたる火。

(よ-じん)[餘人](名) 他の人。よそびと。

(よ-しん-てい)[豫審廷](名) 【法】罪人の豫審をなす法廷。

〔よしん-ば(副) よし然りとするも。

(よ-しん-はんじ)[豫審判事](名) 豫審の手續を行ふ判事。

よ-す[止](他、さ四) とゞむ。やむ。

よ-す[寄](他、さ下二) ㊀寄るやうにす。ちかづく。㊁ちなむ。かこつく。(託)。㊂むくる。つかはす。「心を—」。(贈)。㊃集めて一つにす。

よ-す[寄](自、さ下二) 寄る。「よする波」。

(よ-すう)[餘數](名) のこるかず。

よ-すが[緣、因、便](名) たより。よるべ。ゆかり。ちなみ。

＋よ-すがら[終夜](名、副) 夜中。よどほし。よつぴて。

よ-すぎ[世過](名) すぎはひ。くちすぎ。よわたり。

〔よ-す-ぎる(自、か上二) 過度によし。

よ-すて-びと[世捨人](名) ㊀僧侶の異稱。桑門。

㊁隱遁したる人。

よ-すみ［四隅］（名）方形なる物の四方の隅。

よせ［寄］（名）㊀よすること。ちなむこと。緣。㊁心をよすること。たのみとすること。㊂一つに染むること。㊃うしろみ。「―置く」。㊄「よせせき」の略言。

（よ-せい［餘生］（名）のこりのいのち。（餘命）。

（よ-せう［餘饒］（名）ありあまること。

よせ-か-く［寄掛］（他、か下二）㊀たてかく。もたせかく。㊁攻めかく。攻めうつ。

〔よせかける（他）「よせかく」の訛。

（よ-せき［礜石］（名）「ひせき」（砒石）に同じ。

よせ-き［寄木］（名）「よせきざいく」の略言。――**ざいく**［寄木細工］（名）種々の材をはぎて接（ツ）ぎ合せ、器物の表面に種々の形をつくる細工。

よせ-く［寄來］（自、か變）㊀よせきたる。㊁せまりきたる。

よせ-ざん［寄算］（名）【數】二個若しくは二個以上の數を加へ合はする算法。加算。

よせ-せき［寄席］（名）（ひとよせせきの略）落語・講談・講釋等をする小屋。

（よ-せつ［豫設］（名）かねて設けおくこと。

（よ-せつ［餘切］（名）【數】三角函數を見よ。

よせ-つぎ［寄接］（名）つぎきの一法、他の木の幹に木を寄せて接ぎ、後に斷（ク）ち伐（キ）ること。（合接）。

よせ-づな［寄綱］（名）ものを引きよするためのつな。

よせ-て［寄手］（名）攻め來る軍勢。

よせ-ば［寄場］（名）㊀ひとよせせき。㊁德川時代に、既決の囚人を集めて服役せしめたる處。

廿よせ-ばしら［寄柱］（名）馬などをつなぎおく柱。とつなぎ。（厩柳）。

廿よせ-ぶみ［寄文］（名）人に送る文書。寄書。

よせ-みや［寄宮］（名）小社を一つによせたる社。

よ-せめ［夜攻］（名）ようち。

（よ-せん［豫選］（名）あらかじめ選擧すること。

（よ-せん［餘喘］（名）「よせい」（餘生）に同じ。

よ-そ［餘所］（名）㊀ほか。他所。㊁遠き所。遠方。㊂うとんずること。たしくせざること。――**にす**　よそごとに取扱ふ。顧みず。

よ-そ［四十］（數）十の四倍。よそぢ。

〔よそ-いき［餘所行］（名）㊀餘所へ出行くこと。㊁餘所へ出行くとき着る衣服。

よそ-がたり［餘所語］（名）己れに直接の關係なきはなし。

よそ-がま-し［餘所］（形、二）よそ〳〵し。

よそ-ぎき［餘所聞］（名）ひとぎき。外聞。

（よ-そく［豫測］（名）豫めおしはかること。

（よ-ぞく［餘賊］（名）のこれる賊。

よそ-ごと［餘所事］（名）現在の事に關係なき事。又、自分に關係なき事。

よそ-ぢ［四十路］（數）「よそ」に同じ。

よそ-ながら［乍餘所］（副）うちつけならずに。間接に。

廿よそひ［裝］（名）よそふこと。よそほひ。――**ごと**［裝言］（名）つくりごと。

よそ-びと［餘所人］（名）ほかの人。他人。

よそ-ふ［裝］（他、は四）㊀よそほふ。㊁飲食物を分け盛る。

よそ-ふ［寄］（他、は下二）㊀「よす」の延言。㊁なぞらふ。くらぶ。

〔よそへる（他）「よそふ」の訛。

よそ-ほか［餘所外］（名）ほかの所。他所。

廿よそほ-し（形、二）よそほひ麗（ウル）はし。支度いかめし。

よそほひ［裝］（名）㊀よそほふこと。よそはふさま。裝束。㊁支度の荷物。「―を解く」。

よそほ-ふ［裝］（他、は四）㊀容儀をとゝのへかざる。㊁支度をとゝのへつくる。㊂つけかざる。飾りて美しくす。㊃中に入れつゝむ。つめこむ。

よそ-み［餘所見］（名）㊀傍を見ること。わきみ。㊁他人の見る所。

廿よそ-みみ［餘所耳］（名）餘所ながら聞くこと。

よそ-め［餘所目］（名）㊀傍にてみること。（傍觀）。㊁やぶにらみ。

よそ-よそ-し［餘所餘所］（形、二）㊀餘所事に見てかまひつけず。とりあはず。㊁疎みて志たしからず。へだてがまし。

よそ-よそ-に［餘所餘所］（副）㊀餘所事に見て。㊁うと〳〵しく。

廿よそ-る［寄］（他）なぞらふ。よそふ。

（よ-だい［輿臺］（名）こもの。志もべ。

（よ-たう［夜盜］（名）夜の盜賊。

（よ-たう［餘黨］（名）のこりの黨類。

よ-だか［夜鷹］（名）㊀【動】怪鴟類に屬する鳥、嘴は扁平にして裂開し、翼強く、よく飛翔すれど、脚は微弱にして歩行に適せず、晝は伏し、夜出でゝ昆蟲を捕食す。（怪鴟）。㊁夜間路傍にありて、往來の客をひき淫をひさぐもの。つじぎみ。やほち。――**そば**［夜鷹蕎麥］（名）夜間深更に至るまで街上をうりありく蕎麥切。

（よ-たく［餘澤］（名）後に殘し［illegible］洪大なる［illegible］澤。

廿よ-だけ-し［［illegible］

し。たいさうなり。

廿よ-ただ［終夜］（名、副）よどほし。よもすがら。――**どり**［終夜鳥］（名）【動】「ほととぎす」の異稱。

（よ-だち［夜立］（名）夜中に出立すること。

（よ-だつ［與奪］（名）㊀與ふると奪ふと。「生殺―の權」。㊁廿其取にかはること。

よ-だ-つ［彌立］（自、た四）「いよだつ」の約言。

〔よた-よた（名、副）足許の定まらざるさまにいふ語。

廿よ-だり［涎］（名）次條に同じ。

よ-だれ［涎］（名）口中より流れ垂るゝ唾液。――**かけ**［涎掛］（名）小兒の頤（オトガヒ）の下に掛けて涎のながるゝを受くる布。――**くり**（名）涎を垂るゝ人。――**をたる**　或物を欲しがり又は或人にほれて見とる。

（よ-だん［餘談］（名）ほかのはなし。雜談。

（よだん-くわつよう［四段活用］（名）【文法】動詞の語尾變化の一、「カ・サ・タ・ハ・マ・ラ」の六行に限り「ア・イ・ウ・エ」の四列に亙（ワタ）りて活用せらるゝもの。

（よ-ち［豫知］（名）前かたより知ること。

（よ-ち［輿地］（名）地球全體。全世界。大地。

（よ-ち［餘地］（名）あまれる場所。あきち。くつろぎ。隙。

廿よ-ち（名）同じ年頃の兒供の稱。

ヨヂウム（名）（「ラテン」語Iodium）「ヨヂウムチンキ」に同じ。――**チンキ**［Iodine tincture］（名）「ヨードチンキ」に同じ。

廿よ-ぢか-し［世近］（形、二）餘年短し。

〔よぢ-く-る［捩］（他、ら四）ひねりまはす。

（よち-づ［輿地圖］（名）全世界の圖。　「よづ。

よぢ-のぼ-る［攀登］（自、ら四）㊀とりつきのぼる。つかまりのぼる。㊁次第にのぼりあがる。へあがる。

よ-ぢゆう［夜中］（名）よもすがら。終夜。

よぢり-すぢり（名、副）身體をさま〴〵に曲ぐるさまにいふ語。

〔よぢ-る［捩］（他、ら四）もぢる。ねぢる。ひねる。

〔よぢ-る［捩］（自、ら下二）よぢりたるやうになる。

〔よぢ-る［攀］（自）「よづ」の訛。

よぢれ［捩］（名）【理】物體の兩端を反對の方向に回轉せしめたるときに生ずる歪（ヒズミ）。

〔よぢれる（自）「よぢる」の訛。

廿よぢ-をざし［颭］（名）魚を串に貫きしもの。

よ-つ［四］（數）三に一を加へたる數。

よ-つ［四］（名）昔時の時の名。今の午前午後の十時。

よ-づ［攀］（他、た上二）㊀とりつく。すがる。㊁よぢのぼる。のぼる。

よつ-あし［四足］（名）㊀足の四つあるもの。四足。㊁獸。――**もん**［四足門］（名）添柱を四本用ひたる門。

よっ-か［四日］（名）㊀月の第四の日。㊁日數四つ。

よつ-かど［四角］（名）㊀四隅のかど。㊁四辻。

廿よ-づかは-し［世附］（形、二）世づきたるさまなり。

よ-つぎ［世繼］（名）㊀家を繼ぐこと。相續。㊁相續する子。

よ-づ-く［世付］（自、か四）㊀世の交際に馴る。世に馴る。㊁よごゝろつく。いろごゝろつく。

よつ-じろ［四白］（名）馬の毛色。四つの足の毛の白きもの。

よつ-だけ［四竹］（名）㊀竹の片を兩手にて二枚づつ握り、打ち鳴らすもの。（相思板）。㊁「よつだけうち」の略言。――**うち**［四竹打］（名）歌に四竹を合して流し行く乞食。「秋毎に―のうたひ來て」。

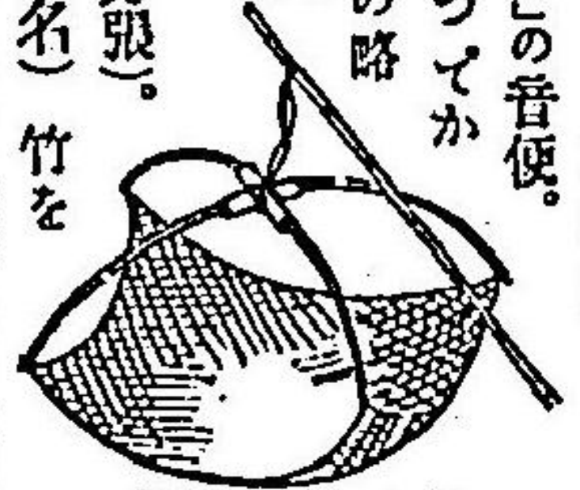
よったり［四人］（名）よにん。

よつ-ぢ［四乳］（名）猫の腹部の皮の乳の四つある部を三味線に張りたるものゝ稱。

よつ-つじ［四辻］（名）十字なりの街、即ち縱と橫との路のゆきあひたる處。よつじ。（十字街）。

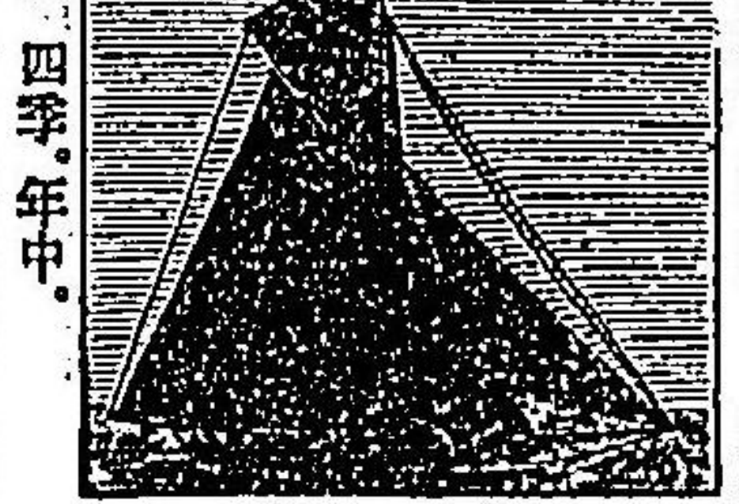
よっ-て［因、仍］（接）「よりて」の音便。

よつ-で［四手］（名）㊀「よってかご」の略言。㊁「よつであみ」の略言。――**あみ**［四手網］（名）四隅を竹にて張り、水底に沈めて魚を捕る網。（四方張）。――**かご**［四手駕籠］（名）竹を四隅の柱とし、竹にて編（ア）みたる粗末なる駕籠。（從輿）。



［よつであみ］

ヨット［Yacht］（名）輕快なる小船、遊航又は競走などに用ひらる、帆を用ふるものと蒸汽機關を備ふるものとあり。



［ヨット］

よつ-の-うみ［四海］（名）よものうみ。

廿よつ-の-とき［四時］（名）四季。年中。

廿よつ-の-ふね［四船］（名）古昔遣唐使のふねの稱、四艘に、大使・副使・判官・主典の分乘して渡航したるにおこる。

よつ-の-を［四絃］（名）琵琶の異稱。

よつ-ばひ［四這］（名）兩手兩足を地につけて這（ハ）ふこと。よつんばひ。

〔よっ-ぱらひ（名）よっぱらふこと。又、よっぱらひたる人。

よ-つ-ばり［夜小便］（名）《夜之尿（ヨツバリ）の義》いばり。

卄よっ-ぴい-て（副）《よくひきての轉》弓を十分にひきしぼりて。

〔よっぴて［夜夜］（名、副）よもすがら。よどほし。

〔よっ-ぽど［餘程］（名、副）「よほど」の音便。

よつ-み［四身］（名）衽（オク）を本裁（ホンダチ）のみごろよりとる衣服の裁方、七八歲より十三四歲までのものゝ著るもの。

よつ-め［四目］（名）㊀四個の目。㊁方形を四つ並べたる模。——がうし（ゴーシ）［四目格子］（名）方形の目あるやうにつくりたる格子。——がき［四目垣］（名）方形の目を立てゝ編（ア）みたる垣。——ぎり［四目錐］（名）刃に四稜ある錐。——にふだう（ニユウドウ）［四目入道］（名）四つ目ありといふ入道姿の怪物。——むすび［四目結］（名）紐の結方、四目あるやうに結ぶもの。

よ-づめ［夜詰］（名）夜の番。

よ-つゆ［夜露］（名）夜におく露。

卄よっ-て［因］（接）「よりて」の略言。

(よ-てい［豫定］（名）豫め定むると。かねてのきめ。

(よ-てい［豫程］（名）豫め定めたる仕事又は行程。

よ-てん［四天］（名）【佛】黃檗宗にて用ふる短かき服、腰の邊にて四つに裂けたるもの。

よ-ど［淀］（名）流水のよどみたる處。（澱）。

よ-とぎ［夜伽］（名）夜中の伽。（侍夜）。

(よ-とく［餘德］（名）のこれる恩德。宏大なる恩德。

(よ-とく［餘得］（名）のこれるまうけ。まうけ。

卄よ-どこ［夜床］（名）夜いぬる床。ふしど。

卄よ-どの［夜殿］（名）寢所。

よ-どほし（オシ）［夜通］（名、副）くれよりよあけまで。よもすがら。よひとよ。（通夜、徹夜）。

よどみ［淀、澱］（名）㊀よどむと。㊁よどみたる場所。よど。「—に浮ぶうたかた」。

よど-む（ま、み、む、む、め、め）［淀、澱］（自、ま四）㊀流水湛（タ）ひとゞまる。たゝふ。㊁水底にとゞまりたまる。㊂澁滯す。しぶる。

よ-なか［夜中］（名）夜のなかばごろ。（夜半）。

よ-なが［夜長］（名）夜の長きと。

よ-なき［夜啼］（名）小兒などの夜啼くと。

よ-な-ぐ（げ、げ、ぐ、ぐ、れ、げよ）［淘］（他、か下二）㊀米を水に淘（ユ）りてとぐ。㊁水に入れて細かき物を淘（ユ）り分く。㊂惡しきをすてゝ善きを取る。

〔よなげる（他）「よなぐ」の訛。

(よ-なふ（ノウ）［豫納］（名）以前にをさめおくと。

よ-なべ（名）《夜延の義》夜の仕事。（夜作）。

よ-なほし（オシ）［世直］（名）世のさまのあしくなりたるをよきさまに返すと。

よ-なみ［世並］（名）世の中のさま。

よ-ね-むし［米蟲］（名）米の蟲。

よ-な-よ-な［夜夜］（副）よる〳〵。毎晚。（每夜）。

よ-なら-ひ（イ）［世慣］（名）世の中のならひ。

よ-な-る（れ、れ、る、るゝ、るれ、れよ）［世馴］（自、ら下二）㊀世の中に馴る。㊁男女なれしたしむ。

〔よなれる（自）前條の訛。

(よ-なん［餘難］（名）主（オモ）なる難儀に隨伴して生じたるなんぎ。のこりのなんぎ。又、あとのなんぎ。

よ-にげ［夜逃］（名）夜中ひそかに逃亡すると。

卄よ-に（副）㊀ことの外に。實に。㊁かならず。きっと。

よ-に-なく［世無］（副）世に比すべきものなく。「—かしづき聞え給ふ」。

(よ-にん［餘人］（名）「よにん」に同じ。

よね［米］（名）㊀こめ。㊁遊女。（元祿頃の語）。「かくしー」。

よね-ざは（ワ-ザ）［米澤］（名）「よねざはつむぎ」の略言。——つむぎ［米澤紬］（名）羽前國米澤地方より產出する紬。

よね-マンヂユウ［米饅頭］（名）餡を包みたる米の餅、圓くして、兩端尖りたるもの。

(よ-ねん［餘年］（名）老いさき短きとし。

(よ-ねん［餘念］（名）ほかのおもひ。（他念）。

よ-の-おぼえ［世覺］（名）世間の評判。「—めでたく」。

よ-の-おもし［世鎭］（名）天下を治め安んずる地位。又其地位にある人。

よ-の-かため［世固］（名）前條に同じ。

よ-の-さが［世性］（名）世のならはし。

よ-の-ちり［世塵］（名）世の中のうるさき事。

よ-の-つね［世常］（名）世間なみ。尋常。普通。

よ-の-なか［世中］（名）㊀人類の社會。世間。㊁よごゝろ。

卄よ-の-ながびと（名）長命の人。

よ-の-ブトン［四幅布團］（名）布四幅にて仕立てたる布團。

よ-の-まぎれ-に［夜紛］（副）夜の暗くして物の區別のつかぬに乘じて。

よ-の-め-も-ねず［夜目不寐］（副）よどほし、いねずに。

(よ-は［餘波］（名）㊀とばしり。㊁なごり。

卄よ-は［夜半］（名）よる。よ。（夜）。

卄よ-は［世］（名）とし。よはひ。

(よ-はう（ウ-ホ）［豫報］（名）或物事の到來せざる以前の報知。「天氣—」。

卄よ-はう（ウ-ホ）［四方］（名）㊀東西南北。諸方。㊁四邊。

(よ-ばう（ウ-ボ）［豫防］（名）災[illegible]の到來せざる以前に防ぐと。「傳染病の—」。

(よ-ばう（ウ-ボ）［輿望］（名）世間の人望。

(よ-はく［餘白］（名）文字を書きたる紙の餘りのまだ書かずにある所。（空白）。

よ-ばな-る［世離］（自、ら下二）世間に遠ざかる。俗に遠ざかる。

〔よばなれる（自）前條の訛。

よ-ば-はる（ヨバワル）［喚］（自、ら四）「よばふ」の延言。

よ-はひ（ヨワイ）［齡］（名）㊀人生の年を經（ヘ）行く程。とし。年齡。（齒）。㊁くむと。ならぶと。「—せず」。

よ-ばひ（イ）［夜這］（名）夜間に男が女の寐間に忍び入ると。

卄よ-ばひ（イ）［婚］（名）男女の情を通ずると。よばふと。——ぶみ［婚文］（名）男女の情を通ずる文。——ぼし［婚星］（名）流星。

よ-ば-ふ（ウ）［喚］（他、は四）よぶ。さけぶ。

卄よ-ば-ふ（ウ）［婚］（自、は四）男女情を通ず。

よ-ばん［夜番］（名）よまはり。やばん。

よひ（ヨイ）［宵］（名）夜のいまだ更（フ）けざる頃。初夜。

〔よひ［醉］（名）「ゑひ」の訛。

よび［呼］（名）よぶと。

(よ-び［豫備］（名）㊀豫めのそなへ。かねての支度。㊁［法］犯罪に必要なる準備行爲。㊂「よびえき」又は「よびへい」の略言。

よび-いだ-す［呼出］（他、さ四）㊀めしだす。㊁まねき出す。

よび-い-る［呼入］（他、ら下二）呼びて內に入らしむ。內へまねき入る。

〔よびいれる（他）前條の訛。

(よび-えき［豫備役］（名）常備兵役の一、現役を終（ヲ）へたるもの丶服するものにして、陸軍にては四年四個月海軍にては三個年とす。

よび-か-く［呼掛］（他、か下二）聲をかけて呼ぶ。

〔よびかける（他）前條の訛。

よび-かへ-す（エス）［呼返］（他、さ四）まねきかへす。

(よび-きん［豫備金］（名）㊀臨時費用の豫備とする金。㊁第一豫備金・第二豫備金の稱。

(よび-ぐん［豫備軍］（名）豫備兵を以て組織したる軍隊。

よひ-ごし（ヨイ）［宵越］（名）一夜を經（フ）ると。「—の金」。

よび-こ-む［呼込］（他、ま下二）呼びて中に入らしむ。

よび-ごゑ［呼聲］（名）㊀呼ぶ聲。㊁きこえ。うはさ。評判。「—高し」。

よび-しはらひにん（イ-ハラ）［豫備支拂人］（名）［法］手形の支拂人が支拂又は引受を拒みたる場合に、これに代はりて支拂又は引受をなす人。

よび-すて［呼捨］（名）殿・樣・君などの敬語を添へず、姓名のみを呼ぶと。

よび-だし［呼出］（名）㊀よびだすと。㊁「よびだしやっこ」の略言。——じやう（ジヤウ）［呼出狀］（名）其人を呼出すための文書。めしじやう。——やっこ［呼出奴］（名）相撲場にて、東西の力士の名を呼びて土俵に上らしむるもの。

よび-た-つ［呼立］（他、た下二）大聲にて呼ぶ。

よび-たて［呼立］（名）㊀よびたつると。㊁わざ〳〵呼びよすると。

よひ-づき（ヨイ）［宵月］（名）よひの間のみ影見ゆる月。——よ［宵月夜］（名）宵月の夜。

よび-つぎ［呼接］（名）「よせつぎ」に同じ。

よび-つ-く［呼附］（他、か下二）㊀呼びて來らす。㊁常に呼び馴る。

よ-びつ-ぐ［呼次］（他、が四）[illegible]傳へて呼ぶ。

よび-つけ［呼附］（名）㊀よびつくると。㊁「よびすて」に同じ。

〔よひ-っぱり（ヨイ）［宵張］（名）夜ながく起き居る性質。

よ-ひ-と-よ［夜一夜］（名、副）よもすがら。よどほし。（終夜）。

よび-と-る［呼取］（他、ら四）よびよす。

よび-な［呼名］（名）つねにとなふる名。

よひ-ね（ヨイ）［宵寐］（名）宵よりねむると。又、宵の間だけねむると。

よひ-の-みやうじやう（ヨイ-ミヨウジヨウ）［宵明星］（名）［天］金星が日沒後西天に輝くときの稱、金星は太陽に近きが故に、其太陽より東にあるときは即ち宵明星となる。

(よび-ひ［豫備費］（名）豫備金に同じ。

(よび-へい［豫備兵］（名）豫備兵役の兵士。

卄よひ-まどひ（ヨイ-マドイ）［宵惑］（名）宵に、はやくまどろむと。

よび-むか-ふ［呼迎］（他、は下二）よびて迎へ入る。まねく。

〔よびむかへる（他）「よびむかふ」の訛。

よび-もの［呼物］（名）評判せらるゝもの。

(よ-びやう［餘病］（名）もとの病のほかの病氣。

よび-や［呼屋］（名）「あげや」に同じ。

よひ-やみ（ヨイ）［宵闇］（名）ゆふやみ。

よび-よ-す［呼寄］（他、さ下二）呼びて來らしむ。

よび-よせ［呼寄］（名）よびよすると。

よひ-よひ（ヨイ）［宵宵］（名、副）宵ごとに。每宵。

よび-りん［呼鈴］（名）人を呼びよすために鳴らす鈴。

廿よ-ひ-ゐ（ヨイ）[宵居]（名） 宵にながく起きて居ると。

〜よ・ふ（はひふふへへ）[醉]（自、は四） ゑふの訛。

よ・ぶ（ばびぶぶべべ）[呼]（他、ば四） ㊀聲を立つ。さけぶ。よばゝる。㊁聲をかけて來らす。㊂招待す。まねく。むかふ。㊃名づく。となふ。

よ-ふ-か[夜深]（名）「よふけ」に同じ。

よ-ふ-かし[夜深]（名） 夜をふかすと。夜久しく起きてゐると。

よ-ぶ-か・し（くしきけれ）[夜深]（形、一） 夜更けたり。

よ-ふ-け[夜更]（名） よのふけたるとき。深夜。

よ-ぶ-こ[呼子]（名）「よぶこのふえ」の略言。——どり[呼子鳥]（名）【動】攀木類中ほとゝぎす科に屬する鳥、深山に棲む、形はいだかに似、全身黑色にして黑斑あり、腹部は、淡黃色にして白黑の斑文あり、嘴尖り、趾は前後各二本あり。くわくこうどり。つゝどり。かんこどり。（布穀鳥、鳲鳩）。——のふえ[呼子笛]（名） 人を呼ぶ合圖に吹く笛。

よ-ふ-ね[夜船]（名） 夜中に行く船。

（よ-ふ-ん[餘憤]（名） あまりのいきどほり。

（よ-ぶ-ん[餘分]（名） あまりたる分、あまり。

よ-べ[昨夜]（名） 昨日の夜。ゆふべ。やぜん。昨晚。

（よ-へ-い[餘弊]（名） のこれる弊害。

よ-ほ-ど[餘程]（名、副） 度すこぶる進みて。だいぶ。

〜よぼ-よぼ（名、副） 老人のよろぼひありくさまにいふ語。

廿よぼろ[膕]（名） ひっかゞみ。

廿よぼろ[丁]（名） 古昔、男子二十一歳より六十歳まで朝廷の課役に出でしものゝ稱。（丁男）。

廿よ-まぜ[夜交]（名） 一夜づゝへだつると。かくばん。

よ-まつり[夜祭]（名） 夜間のまつり。

よ-まはり（ワリマ）[夜廻]（名） 夜の警戒をなすためにめぐりあるくと。又、其人。（夜番、夜行）。

よ-まひ-ごと（イゴマ）[迷言]（名） 不平をいふと。かこつと。又、其言。

廿よ-み[黃泉]（名） 死して魂の行くといふ所。よみのくに。よみぢ。「ーの國」。（冥途）。

よみ[讀]（名） ㊀よむと。㊁訓。㊂讀（トウ）。

よみ-あ・ぐ（げげぐぐるぐれげよ）[讀上]（他、か下二） ㊀聲高く讀立つ。㊁全文を讀みをはる。

〜よみあげる（他）「よみあぐ」の訛。

よみ-あは・す（ワースア）（せせすするすれせよ）[讀合]（他、さ下二） 互に別本となりたる同一の文書を讀みあひて誤謬をたゞす。

よみ-あは-せ（ワーセア）[讀合]（名） よみあはすると。けうがふ。

よみ-あやまり[讀誤]（名） よみあやまると。

よみ-あやま・る（らりるるれれ）[讀誤]（他、ら四） まちがへて讀む。

よみ-うた[讀歌]（名） ㊀つくりたる歌。㊁讀むための歌、謠などにかゝはらぬもの。

よみ-うり[讀賣]（名） 世上の事を刷物などにして、讀みて往來を賣り歩くと。又、其人。

よみ-かき[讀書]（名） 讀むと書くと。

よみ-かた[讀方]（名） 書物の讀みやう。書き方、綴り方の對。

よみ-がへ・る（エーガ）（らりるるれれ）[蘇]（自、ら四）（黃泉（ヨミ）より還る義）死して再び生く。いきかへる。蘇生す。復活す。（甦）。

よみ-きか・す（さしすすせせ）[讀聞]（他、さ四） 讀みて聞かす。

よみ-きり[讀切]（名） ㊀讀みをはると。㊁句讀。

よみ-き・る（らりるるれれ）[讀切]（他、ら四） 讀みをはる。

よみ-くせ[讀癖]（名） ㊀習慣より來たれる一種のかはりたる讀方、紫宸殿を「志ゝいでん」と讀む類。㊁ものを讀むにつきてのくせ。

よみ-ぐち[讀口]（名） ㊀廿和歌の名人。㊁詠（ヨ）みぶり。

よみ-ごゑ[讀聲]（名） ㊀ものを讀む聲。㊁漢字の訓讀。

よみ・す（さしすするすれせよ）[嘉]（他、さ變） めでたゝふ。可とす。ほむ。

よ-み-せ[夜見世]（名） 夜間街上にて物を賣る床見世。

よみ-た・つ（てててつつるつれてよ）[讀立]（他、た下二） 聲高らかに讀みつゞく。讀みあぐ。

〜よみたてる（他） 前條の訛。

よ-みち[夜路]（名） 夜中行く路。夜ゆくと。

よみ-ぢ[黃泉]（名） よみへ行く路。

〜よみ-つ・く（かきくくけけ）[讀附]（自、か四） よみ馴る。

よ-みて[讀手]（名） ㊀書物を讀みきかする人。㊁書物をよく讀む人。

廿よみ-ど[黃泉門]（名） よみに通ずる門。

よみ-ながし[讀流]（名） よみながすと。

よみ-なが・す（さしすすせせ）[讀流]（他、さ四） とゞこほりなくつゞけて讀む。

よみ-なら・ふ（ラウーナ）（はひふふへへ）[讀習]（他、は四） 讀みてなるゝやうにす。

よみ-な・る（れれるるるれれよ）[讀馴]（自、ら下二） 讀むとになる。

〜よみなれる（自） 前條の訛。

よみ-びと[讀人]（名） 其歌を詠（ヨ）みたる人。

よみ-ほん[讀本]（名） ㊀讀み習ふべき書物。とくほん。㊁漢字交（ジマ）りにて、插畫の少なき稗史。草雙紙の對。

よみ-もの[讀物]（名） ㊀讀むべき書物。㊁講談師などの演ずる標題。

よ-みや[夜宮]（名） 祭日の前夜に行ふ小祭。（宵宮）。

よみ-やぶ・る（らりるるれれ）[讀破]（他、ら四） 多くの書を悉く讀む。どくはす。

よみ-わた・す（さしすすせせ）[讀渡]（他、さ四） ㊀文書を讀みて聞かす、いひわたすの對。㊁ひろく讀む。

よ・む（まみむむめめ）[讀]（他、ま四） ㊀文字を聲を立てゝ唱（トナ）ふ。（誦）。㊁文字を追ひて解し行く。㊂すべて物事を見て其意を解するにいふ。㊃數を計ふ。（算）。㊄歌を作る。ながむ。（詠）。

よ-め[娵]（名） ㊀息子の妻。㊁結婚當時の女子の稱。（嫁）。

よ-め[夜目]（名） 夜見ると。「ーとは目」。

（よ-めい[餘命]（名） 生（オ）ひさき短かきいのち。あまるいのち。（殘年、餘年）。

よめ-いり[娵入]（名） 娵となりて夫の家へ行くと。とつぐと。又、其式。（嫁）。——ざかり[娵入盛]（名） 娵入するに最もよき年ごろ。——だうぐ（カーウド）[娵入道具]（名） 娵入するに持參する道具。

よめ-が-さら[娵皿]（名） ㊀【動】腹足類中舞鰓類に屬する軟體動物、介殼は皿狀又は陣笠狀をなし螺旋部なし、晝間は海岸の岩石に附着し、夜間出でゝ食を求む。ちどりがひ。㊁【植】一種の蔓草、溝の邊などに多く生ず、葉互生し、夏の頃、斑（ナツ）に似たる白花開く。（合子草）。

よめ-が-はぎ[娵萩]（名）【植】「よめな」に同じ。

よめ-が-ひ（イーガ）[娵貝]（名）【動】「あさひがひ」の一名。

よ-めぐり[夜巡]（名） 夜まはり。

よめ-ご[娵御]（名） 娵の敬稱。

よめ-とり[娵取]（名） 娵をとると。又、其式。

よめ-な[娵菜]（名）【植】菊科に屬する草、山野に自生す、嫩葉は食ふべし、初秋の頃淡紫色の花開く。よめがはぎ。うはぎ。おはぎ。（雞兒腸）。

よ-も[四方]（名） ㊀東西南北。㊁前後左右。㊂めぐり。まはり。（諸方）。

よ-も（副） よもや。まさかに。

よもぎ[艾]（名）【植】菊科に屬する草、山野に自生す、葉は菊に似る、秋の頃、黃色小形の花開く、嫩葉は餅又は團子に和し、成熟せる葉はもぐさに製す。

よもぎ[蓬]（名） ㊀【植】「やなぎよもぎ」の古稱。㊁かさねの色目、表裏共に萌黃色にして表は濃く裏は淡きもの。

廿よもぎ-が-しま[蓬島]（名） 蓬萊（ホウライ）に同じ。

廿よもぎ-が-そま[蓬杣]（名） よもぎの生（オ）ひ茂げれるところ。「ーをたづねてしがな」。

よもぎ-が-には（ワーニ）[蓬庭]（名） よもぎの生ひたる庭。又、いぶせき住居のには。

よもぎ-が-ねや[蓬閨]（名） あばらやのねや。

よもぎ-が-ほら[蓬洞]（名） 仙洞。

よもぎ-が-やど[蓬宿]（名） よもぎの生ふる住家。又、いぶせき住居。

廿よもぎ-の-あと[艾跡]（名） 灸のあと。

廿よもぎ-の-かど[蓬門]（名） よもぎの生ひたる門。又、あばらやの門。

廿よもぎ-の-かみ[蓬髮]（名） おどろなる髮。亂髮。

よもぎ-の-まど[蓬窓]（名） よもぎなどの生ひたる所に面したる窓。又、あばらやの窓。

廿よもぎ-の-まろね[蓬丸寐]（名） よもぎのやどのまろね。

よもぎ-の-やど[蓬宿]（名） よもぎがやど。

廿よもぎ-ふ[蓬生]（名） 蓬の茂げりたる地。草深き土地。

よもぎ-もち[艾餠]（名） よもぎの嫩葉を茹（ユ）でゝまぜ搗（ツ）きたる餠。

よも-すがら[終夜]（名、副） よどほし。「晝はひねもす夜はー」。（徹夜）。

廿よもつ-くに[黃泉國]（名） 死者の行きて住む[illegible]ありといふ國。よみ。

よも-や（副） まさかに。

よも-やま[四方山]（名、副） ㊀四方の山。㊁世上。世間。㊂種々雜多の事。㊃のこるくまなきと。

よも-やも[四面八面]（名） 四方八方。

（よ-やく[豫約]（名） ㊀まへもって約束すると。㊁書籍の出版などに就き、豫め其購買を申込み置きたる者には、發賣の時、一定の減價にて賣るべしと約すると。——きん[豫約金]（名） 豫約をするときに拂ひこむ金。

（よ-ゆう[餘裕]（名） ㊀あまりあると。のこりあると。㊁度量せまらざるほど。むねのうちのゆったりとしてあると。

よ-よ[代代]（名） ㊀だいだい。世々。㊁廿男女の間の仲絕ゆると。

よ-よ[夜夜]（名、副） よるよる。每夜。

廿よよ（名、副） 涎又は酒などの垂るゝさまにいふ語。

よよ（感） 泣く聲。「ーとなく」。

廿よよ・む（まみむむめめ）（自、ま四） 齒拔けて言葉漏る、やうになる。

より[寄]（名） ㊀よると。あつまると。㊁よりみち。

より[縒]（名） よると。よりたるもの。「絲のー」。〜——をもどす もとの關係にたす。

より（助） ㊀此より彼に移りわたる意を表はす語。から。（從、自）。㊁物事を比較する意を表はす語。「彼れー劣る」。（於）。㊂これと限る意を表はす語。「花ー外に知る人もなし」。

廿-より[度]（接尾） たび。「一ー二ー三ー」。

より-あつまり[寄集]（名） ㊀よりあつまると。又、よりあつまりたるもの。㊁節制なきあつまりもの。烏合の衆。

よりあつま・る（らりるるれれ）［寄集］（自、ら四）こゝかしこより來りあつまる。

よりあは・す（ワーアス）（せせすするすれせよ）［縒合］（他、さ下二）よりて合はす。

〔**よりあはせる**（他）前條の訛。

よりあひ（イーア）［寄合］（名）㊀よりあふこと。集會。㊁徳川時代に、三千石以上の旗下の士の稱。

よりあ・ふ（ウーア）（はひふふへへ）［寄合］（自、は四）よりあつまる。集會す。

よりうど［寄人］（名）古昔、記錄所などにて事を執りし職。現今、御歌所にて事を執る職。きにん。

よりかかり［凭掛］（名）㊀よりかゝること。又、よりかゝるもの。㊁きよくろく。

よりかか・る（らりるるれれ）［凭掛］（自、ら四）身體をもたせかく。もたれかゝる。

よりき［寄木］（名）流れ寄りたる材木。

（**よ-りき**［與力］（名）㊀加勢すること。助力。㊁助力のために附屬する兵士。㊂徳川時代に、奉行の配下にありし役人、同心を指揮せしもの。

よりくぢら［寄鯨］（名）死して海邊へ漂(ヒョウ)ひ寄りたる鯨。

よりくづ［擇屑］（名）よきものをよりてあとにのこれるくづ。

よりごのみ［擇好］（名）好む所をよること。

よりす［寄洲］（名）川口に風波のために寄せられて生じたる洲。

よりすが・る（らりるるれれ）［寄縋］（自、ら四）身をよせてすがる。

よりそ・ふ（ウーソ）（はひふふへへ）［寄添］（自、は四）そばへよる。

よりだうぐ（ウード）［寄道具］（名）人を捕縛するための具、即ち十手・刺股の類。

よりつき［寄付］（名）㊀よりつくこと。㊁取引所にて最初の手合。㊂庭園内に設くる腰掛。

よりつ・く（かきくくけけ）［寄着］（他、か四）よりそふ。

よりて［因、仍］（接）其ために。其ゆえに。

よりどころ［據］（名）本とする所。よる所。（根據）。

よりどり［擇取］（名）よりどること。（選拔）。

よりど・る（らりるるれれ）［擇取］（他、ら四）よりて取る。

よりぬき［擇拔］（名）よりぬくこと。又、よりぬきたるもの。

よりぬ・く（かきくくけけ）［擇拔］（他、か四）中よりよりて拔きとる。

よりば［寄場］（名）人のよりあつまる所。

よりみち［寄路］（名）わざわざ迂回して行く路。

（**よ-りよく**［餘力］（名）あまるちから。

よりより（副）時々。をりをり。

よりわ・く（けけくくくるくれけよ）［擇分］（他、か下二）よりて區別をつく。

〔**よりわける**（他）前條の訛。

よる［夜］（名）地球の自轉によりて表面の一部太陽に面せざる間。晝の對。

よ・る（らりるるれれ）［緣、由、因］（自、ら四）㊀もとづく。たのむ。㊁したがふ。たどる。（從、循）。㊂たよる。たのむ。（託、憑）。㊃もたる。かゝる。（凭、倚）。㊄たゝる。つく。（憑）。

よ・る（らりるるれれ）［據］（自、ら四）㊀根本とす。もとゐとす。もとづく。㊁所依とす。たのみとす。㊂拒守す。たてこもる。

よ・る（らりるるれれ）［寄］（自、ら四）㊀近づく。ちかよる。㊁かさなる。たゝまる。「皺が―」。㊂路すがら訪ふ。㊃あつまる。つどふ。

よ・る（らりるるれれ）［縒］（他、ら四）組みてからみつかす。ねぢて卷きまつはらす。「絲を―」。

よ・る（らりるるれれ）［擇］（他、ら四）えらぶ。える。えらむ。

廿**よるのおとど**［夜御殿］（名）古昔、禁中淸涼殿内の主上の御寢所の稱。

廿**よるのおまし**［夜御座］（名）前條に同じ。

よるひる［夜晝］（名）よるとひると。

よるひる［夜晝］（副）よるもひるも。たえず。

よるべ［寄方］（名）たよりとする所。たより。「―もなき荒磯」。

（**よ-るゐ**［餘類］（名）のこりの徒黨。

〔**よろ・ける**（けけけるけるけれけよ）［蹣跚］（自、か下二）よろめく。

（**よ-ろく**［餘祿］（名）㊀のこりのさいはひ。㊁除分のまうけ。

よろこば・し（しくしくしきしけれ）［喜、悅］（形、二）よろこぶべし。うれし。

よろこび［喜、悅］（名）㊀よろこぶこと。㊁よろこぶ意をのぶること。（賀）。㊂いはひ。ことほぎ。（慶、賀）。――**いさ・む**（まみむむめめ）［喜勇］（自、ま四）よろこびて勇みたつ。――**なき**［喜泣］（名）よろこび極まり泣くこと。うれしなき。

よろこ・ぶ（ばびぶぶべべ）［喜、悅］（自、は四）嬉しく思ふ。樂しく思ふ。こゝろよく感ず。

廿**よろこぼ・し**（しくしくしきしけれ）［喜、悅］（形、二）よろこばし。

廿**よろこぼ・ふ**（ヨロコボウ）（はひふふへへ）［喜、悅］（自、は四）「よろこぶ」の延言。

よろ・し（しくしくしきしけれ）［宜］（形、二）㊀可なり。よし。㊁其當を得たり。其度に適せり。

よろしく［宜］（副）㊀すべからく。まさに。（漢文にては「べし」と返し讀む）。㊁ほどよく。よく。

廿**よろづ**［針魚］（名）【動】「さより」の古言。

よろづ［萬］（名）數の多きこと。凡[illegible]し。物々

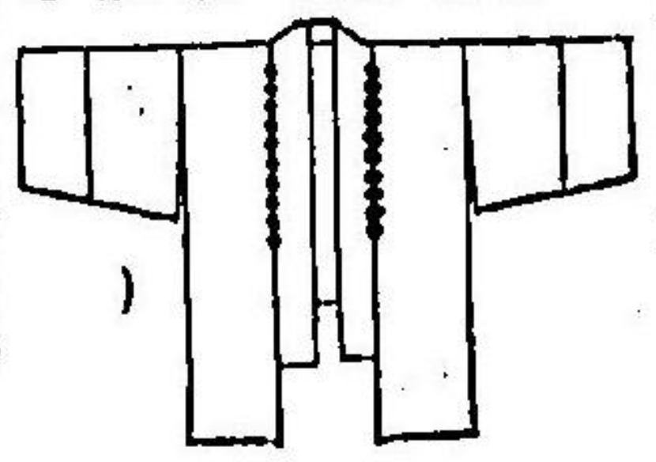
よろづ［萬］（副）ことごとく。すべて。

よろづ［萬］（數）千の十倍。

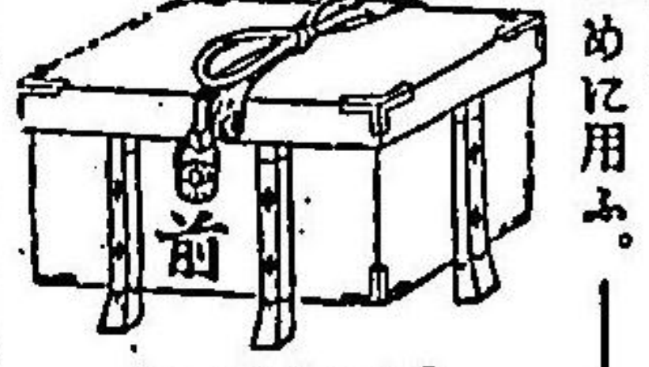
よろづよ［萬代］（名）永遠。永久。

廿**よろひ**（ヨロイ）［具］（名）よろふこと。そろひ。

よろひ（ヨロイ）［鎧］（名）昔時、戰爭にて着せし服、もとは革を用ひ後には薄き鐵片を絲にて縅(ドオ)して造れり。又、特に具足・腹卷などに對して、袖・籠手・佩楯等の備はりたる大將の用ふるものをいふ。（甲）。――**ぎぞめ**［鎧着初］（名）昔時、武家にて男子十四五歲に至りて、初めて鎧を着るときの式。――**ぐさ**［鎧草］（名）【植】牡丹の異稱。――**づき**［鎧突］（名）隙のなきやうに、鎧をゆりあぐること。――**づくり**［鎧作］（名）鎧をつくる職工。――**どほし**（オトーシ）［鎧通］（名）戰陣にて、太刀・脇差の外、別に佩(オ)ぶる短刀にして、敵と組みあひたるとき、これを刺すために用ふ。――**ひたたれ**［鎧直垂］（名）大將の鎧の下に着る直垂。――**びつ**［鎧櫃］（名）よろひを入れおく櫃。――**むし**［甲蟲］（名）脊に堅き甲殼ある蟲の總稱。――**むしや**［鎧武者］（名）甲冑を着(ツ)けたる武者。



［よろひひたたれ］



［よろひびつ］

廿**よろ・ふ**（ヨロウ）（はひふふへへ）［具］（自、は四）そなはる。そろふ。具足す。

よろ・ふ（ヨロウ）（はひふふへへ）［鎧］（他、は四）鎧を着る。（擐甲）。

よろぼ・ふ（ヨロボウ）（はひふふへへ）［蹣跚］（自、は四）よろよろして歩く。（蹌踉）。

よろめ・く（かきくくけけ）［蹣跚］（自、か四）足どり亂れてたぢろく。

よろよろ［蹣跚］（名、副）足どりのたしかならざるさまにいふ語。彼方により此方によりして歩むさまにいふ語。（蹌踉）。

（**よ-ろん**［輿論］（名）世上一般の論。

よわごし［弱腰］（名）腰の左右の細き處。むびあばり。

よわさ［弱］（名）よわきこと。又、よわきさま。

よわ・し（くくしきけれ）［弱］（形、二）破れ易し。切れ易し。保ち難し。すこやかならず。しつかりせず。強からず。

廿**よわたらひ**（ラーワイ）［世渡］（名）よわたり。

よわたり［世渡］（名）世をわたり行くこと。生活を立つること。くちすぎ。よすぎ。（生計、送生）。

廿**よわた・る**（らりるるれれ）［夜渡］（自、ら四）よるわたる。夜間に過ぎ行く。「―月」。

よわみ［弱］（名）㊀よわるとき。よわる所。㊁主張し得ざる點。弱點。

〔**よわミソ**［弱味噌］（名）弱きものをのゝしりていふ語。

よわ・む（めめむむるむれめよ）［弱］（他、ま下二）よわくす。よわらす。

〔**よわむし**［弱蟲］（名）よわき人をのゝしりていふ語。

よわめ［弱目］（名）「よわりめ」に同じ。

よわよわ・し（しくしくしきしけれ）［弱弱］（形、二）いとよわく見ゆ。

よわり［弱］（名）よわること。

よわりめ［弱目］（名）よわりたるとき。――**にたたりめ** 不運に不運を重ねて、仕合のいとあしきにいふ語。

よわ・る（らりるるれれ）［弱］（自、ら四）㊀よわくなる。おとろふ。㊁困却す。こまる。

廿**よゐ**［夜居］（名）夜起き居ること。

（**よ-ゐ**［餘威］（名）あまれる威光。

（**よ-ゐん**［餘韻］（名）㊀殘るひゞき。㊁のこるあぢはひ。

よをとめて（副）夜の未だ明けやらぬに。

よをひにつぎて［夜日繼］（副）晝夜の別なく繼行して。

廿**よをり**［節折］（名）古昔、六月十二月大祓のときに行はれし公事、命婦竹を以て主上の御長(タケ)其他處々の寸法をとり、宮主に切りあてがはせて御祓をつとめしめしこと。

〔**よをろ**［膕］（名）「よぼろ」に同じ。

〔**よんどころな・し**（くくしきけれ）［據無］（形、一）（「よりどころなし」の音便）止むを得ず。餘儀なし。

よんべ［昨夜］（名）（「よべ」の音便）さやく。

ら

ら 流音R、即ち舌頭を硬口蓋の前端上齒の背部に近づけ深き有聲の氣息を通じて發する音と、母音「あ」との綴音。

（**ら**［羅］（名）㊀うすぎぬ。うすもの。うすはた。㊁とりあみ。あみ。

（**ら**［騾］（名）【動】驢馬と馬との間(ヒア)の子、體軀小なれど體格強健にして効用馬に劣らず且つ粗食に堪(タ)ふる性あり。

―ら［等］（接尾）或語に添へて、其物事の複數を示す語。「我―」。

廿**―ら**（接尾）語末に添ふる意味無き語。「ものさびしー に」。「戀しーに」。

ラーケン（名）（「オランダ」語 Laken）羅紗の類。

(**らい**[雷](名) 空中電氣が放電するとき發する音。いかづち。かみなり。

(**らい**[癩](名) 癩病。

(**らい**[籟](名) ㊀吹き鳴らす樂器の音。㊁孔より生ずる音風などの鳴る音。「萬—」。

(**らい**[來](名) 未來。將來。のち。

(**らい**[蘿衣](名) 【植】地衣類の總稱。こけごろも。

(**らい**[羅衣](名) うすものゝ衣。

(**らい—**[來](接頭) 來るべき。來ん。「—春」。「—世」。

(**—らい**[來](接尾) このかた。以來。「去年—」。

(**らい-い**[來意](名) 來りたるむね。來りたるわけ。

(**らい-いう**[來遊](名) きたりあそぶヿ。

(**らい-う**[雷雨](名) 雷鳴り雨ふるヿ。

(**らい-が**[來駕](名) 來り訪ふヿの敬語。「御—」。

(**らい-かう**[來航](名) 外國より船にて來るヿ。

(**らい-がう**[來迎](名) 佛又は菩薩の靈の出現して來り迎ふといふヿ。

(**らい-かく**[來客](名) 來りたる客。來訪の客。

(**らい-ぎ**[來儀](名) ㊀來り到るヿ。㊁來るヿの敬語。

(**らい-きやく**[來客](名) 「らいかく」に同じ。

(**らい-くわ**[雷火](名) 落雷より出でたる火事。

(**らい-くわい**[來會](名) 來り會するヿ。

(**らい-くわう**[雷光](名) いなびかり。いなづま。

(**らい-くわん**[雷管](名) 銃砲に裝塡する彈藥を炸發せしむるために裝置するもの。

(**らい-ぐわん**[雷丸](名) 【植】竹林の土中に生ずる下等植物、栗又は無患子(ムクロジ)の實に似、皿くして堅く外黑くして內白し、藥用に供せらる。

(**らい-けい**[雷鷄](名) 【動】雷鳥。

(**らい-げつ**[來月](名) 此月の次ぎの月。

(**らい-こ**[雷鼓](名) ㊀雷神の持つといふ太鼓。㊁一種の太鼓、八個の面あるもの。

(**らい-こう**[來貢](名) 外國人の來朝して貢物を奉るヿ。

(**らい-こう**[來寇](名) きたりあだするヿ。

(**らい-こう**[雷公](名) いかづち。かみなり。

(**らい-こん**[來今](副) こののち。今後。以來。自今。

(**らい-さん**[禮讚](名) 禮拜して其功德をたゝふるヿ。

廿**らい-し**[櫑子](名) 菓子などを盛る器、高坏に似、緣高く、內は朱漆にて外は黑漆にて塗りて、蓋のあるもの。(櫑子)。

(**らい-し**[禮紙](名) 書狀の上を卷く白紙、更に其上に包紙を用ふ。かけがみ。

(**らい-し**[耒耜](名) すき。(鋤)。

(**らい-し**[賚賜](名) たまもの。

(**らい-し**[來示](名) 書狀にいひ來りたるヿの敬稱。

(**らい-じう**[雷獸](名) 【動】「きてん」に同じ。

(**らい-しふ**[來襲](名) きたりおそふヿ。

(**らい-しや**[來車](名) 訪(ト)ひ來るヿの敬語。

(**らい-しや**[癩者](名) 癩病にかゝれるもの。かったい。

(**らい-じやう**[來狀](名) 次條に同じ。

(**らい-しよ**[來書](名) 他より送り來りたる手紙。

(**らい-しん**[來信](名) 他より來りたる音信。

(**らい-じん**[雷神](名) かみなり。

(**らいしん-し**[賴信紙](名) 電報用紙。

ライス-カレー[Rice-curry](名) 西洋料理にて、「カレー」即ち胡椒・薑等を含有せる一種の醬油と肉とを煑(ニ)て、其汁を飯にかけたるもの。

ライス-ペーパー[Rice-paper](名) 或種の木髓を原料として製したる一種の紙、花瓣の辮などをつくるに用ひらる。

(**らい-せ**[來世](名) 【佛】三世の一、死にて生れかはる世、即ち未來の世。

(**らい-せき**[磊石](名) 砂利。

(**らい-せき**[雷石](名) 【鑛】砂地に落雷ありて砂粒の熔解せられて合成したる管狀をなすもの。

(**らい-だ**[懶惰](名) 「らんだ」の訛。

(**らい-だう**[禮堂](名) 寺院にて、禮拜又は讀經する所。

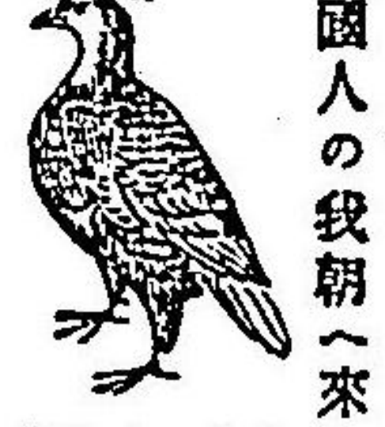
(**らい-だん**[來談](名) 來りて話(ハナ)すヿ。

(**らい-ちやく**[來着](名) 到着するヿ。つくヿ。

(**らい-てい**[雷霆](名) いかづち。かみなり。

(**らい-てう**[來朝](名) 外國人の我朝へ來るヿ。(來聘)。

(**らい-てう**[雷鳥](名) 【動】鶉雞類に屬する鳥、高山に棲み、形は雉に類す、夏と冬とによりて其羽毛を變ず。らいのとり。(松雞)。



[らいてう]

(**らい-でん**[雷電](名) かみなりといなづまと。

(**らい-でん**[來電](名) 到來したる電報。

ライデン-びん[—瓶=Leydenjar](名) 【理】「レイデンびん」に同じ。

(**らい-どう**[雷同](名) みだりに他の說に一致するヿ。わけもなく同意するヿ。

(**らい-どう**[來同](名) 來りあつまるヿ。

(**らい-ねん**[來年](名) 此年の次に來るべき年。來ん年。(明年、翌年)。

らい-の-とり[雷鳥](名) 【動】「らいてう」に同じ。

(**らい-はい**[禮拜](名) ㊀禮して拜(ヲガ)むヿ。㊁主に、佛門にて、兩肱兩膝を地に着けて低頭合掌するヿ。 **——かう**[禮拜講](名) 叡山にて、三月十二・十三の兩日に大宮の前にて同二十四・二十五の兩日に十禪師の前にて行はるゝ法華八講會の稱。

——だう[禮拜堂](名) 寺院の禮拜を行ふ堂。

(**らい-はう**[來訪](名) 來りおとづるゝヿ。

(**らい-はう**[來報](名) 到來したるしらせ。

(**らい-ばん**[禮盤](名) 本尊の前の高き壇。

(**らい-びやう**[癩病](名) 最も醜(ミニク)き皮膚病、其病菌は肺結核菌に類す、赤き斑點を生じて肌(ハ)れあがり、白き痂(カサブタ)を生じ毛髮脫落して、全身次第に潰れたゞるゝもの、遺傳性にして、又傳染病なり、かったゐ。ふくよし。ものよし。(天刑病)。

(**らい-ひん**[來賓](名) とひきたれる客。(來客)。 **——きやうそう**[來賓競走](名) 學校の運動會などにて、來賓の有志者がなす競走。

(**らい-ふ**[來附](名) 來りて附屬するヿ。

(**らい-ふく**[來服](名) 來りて服從するヿ。

(**らい-ふく**[禮服](名) 「れいふく」に同じ。

(**らい-ふ-せき**[雷斧石](名) 「かみなりのまさかり。

ライフル[Rifle](名) 旋條銃。

(**らい-へい**[來聘](名) 「らいこう」(來貢)に同じ。

(**らい-めい**[雷名](名) ㊀とゞろき聞こゆる名。㊁他人の名聲の敬稱。

(**らい-めい**[雷鳴](名) 雷の鳴るヿ。かみなり。

(**らい-やう**[來陽](名) 來年の春。

(**らい-ゆ**[來諭](名) 他人より申越したる言の敬稱。おほせ。

らい-よけ[雷除](名) ㊀かみなりをよくるためのまじなひ。㊁避雷針。

(**らい-らい**[磊磊](名、副) 石のあつまるさま又は石のうちあふ音のさまにいふ語。 **——らくらく**[磊磊落落](名、副) 磊落なるさまにいふ語。

(**らい-らく**[磊落](名) 擧動の明白活潑にして物邪にとゞこほらざるヿ。おほどかにして小節に拘泥せざるヿ。

(**らい-りん**[來臨](名) 來るヿの敬語。

(**らい-れき**[來歷](名) 經(ヘ)來りたる次第。ゆゐしよ。由來。(履歷)。

(**らい-わう**[來往](名) ゆきき。

ラ-ウ[羅宇](名) (初め「ラオ」(Lao)國より來たる竹を用ひしよりいふ)煙管の火皿と吸口との間を接ぐ竹管。ラオ。(煙管竹)。

(**らう**[廊](名) あゆみどの。ほそどの。わたどの。

(**らう**[老](名) としよりたるヿ。としよりたる人。としより。

(**らう**[郎](名) ㊀をとこ。男子。㊁良人。㊂僩夫。

(**らう**[勞](名) ㊀ほねをり。はたらき。㊁つかれ。いたづき。㊂いさを。てがら。㊃勞症の略。

(**らう**[牢](名) 罪人などをつなぎおきて出づるを得しめざる所。

(**らう-あう**[老嫗](名) 年とりたる女。

(**らう-あう**[老鶯](名) 春過ぎて尚は鳴く鶯。

(**らう-あん**[諒闇](名) 「りやうあん」に同じ。

(**らう-いう**[老友](名) としよりたるとも。

(**らう-いつ**[勞逸](名) ほねをるヿとあそぶヿ。又、つかれたるヿとつかれざるヿ。

らう-いり[牢入](名) 牢にはいるヿ。

(**らう-えい**[朗詠](名) 漢詩・漢文の秀句に節をつけ、朗(ヨ)にて歌ふヿ。又、和歌を歌ふヿをもいふ。

(**らう-えう**[老幼](名) としよりとこどもと。

(**らう-えき**[勞役](名) 骨をるはたらき。體をつかふわざ。

(**らう-えん**[狼煙](名) (支那の古昔、煙を黑くするため狼の糞を入れてもやしゝよりいふ)のろし、とぶひ。(烽火)。

(**らう-をう**[老翁](名) 年よりたる男子。おきな。

(**らう-か**[廊下](名) あゆみどの。ほそどの。わたどの。(廊)。

(**らう-がい**[勞咳](名) 「らうしやう」(勞症)に同じ。

(**らう-かう**[老巧](名) 久しく經驗を積みて巧(タク)なるヿ。

らう-がこひ[牢圍](名) 牢のかこひ。

(**らう-がさ**[牢瘡](名) 入牢して濕氣又は汚穢のために生じたるかさ。

(**らうか-とんび**[廊下鳶](名) 女郎屋にて、遊客が相方(アヒカタ)の女郎來らざるため、さびしさに堪へかね、廊下をあちこちらと行きかふヿ。

らうか-ばし[廊下橋](名) 家と家との間にかけ渡したる廊下。

廿**らう-がはし**[亂](形、二) みだりがはし。

(**らう-かん**[琅玕](名) 玉に次ぐ寶石、主に靑きものをいふ。

(**らう-かん**[牢檻](名) をり。ひとや。

(**らう-がん**[老眼](名) としよりて明視の距離の遠くなりたる眼。(衰眼)。 **——きやう**[老眼鏡](名) 「ゑんがんきやう」(遠眼鏡)に同じ。

(**らう-き**[老驥](名) おいたる駿馬。轉じて、おいたる豪傑。 **——れきにふしてこころざしせんりにあり**[老驥伏櫪志在千里] おいたる英雄は當に死なんとすとも、尚は遠大なる志をすてざるにいふ。

(**らう-き**[牢記](名) かたく心にとゞめおくヿ。

(**らう-ぎ**[老妓](名) としとりたる藝妓。

(**らう-きう**[老朽](名) としとりて役に立たぬ

と。又、其人。
(らう-ぎよ)ロウ［撈魚］(名) いさり。すなどり。
(らう-ぎん)ロウ［朗吟］(名) 聲ほがらかに吟ずること。
(らう-ぎん)ロウ［勞銀］(名) 勞働の賃錢。
(らう-く)ロウ［勞苦］(名) ほねをり。いたつき。
(らう-くわ)ロウ［浪華］(名) 浪のくだけて華(ハナ)の如く散るもの。
(らう-くわい)ロウ［老獪］(名) 久しく經驗を積みて狡猾なること。
(らう-くん)ロウ［郎君］(名) ㊀わかとの。㊁妻又は情婦より良人又は情夫を稱する語。
＋らう-け ロウ［勞氣］(名) やまひ。いたつき。
(らう-げつ)ロウ［朗月］(名) ほがらかなるつきかげ。
(らう-げ-ぼう)ロウ［狼牙棒］(名) そでがらみ。
(らう-こ)ロウ［狼顧］(名) 狼の如く危惧して後をかへりみること。
(らう-こ)ロウ［牢固］(名) 堅っかりしてあること。かたきこと。
(らう-ご)ロウ［老後］(名) 年老いて後。
(らう-こう)ロウ［老功］(名) ㊀久しく經驗を積みて熟練すること。(老練)。㊁久しく勤務なしたるいさを。
(らう-ごく)ロウ［牢獄］(名) ひとや。をり。
(らう-ごし)ロウ［牢輿］(名) 囚人を送る輿。
(らう-さう)ロウソウ［老壯］(名) としよりとわかものと。
らう-さう-の-がく ロウソウ［老莊學］(名) 支那の老子と莊子とを祖述する學、虛無を以て宇宙の根源とし、無爲を以て道德の標準とするもの。虛無學。
(らう-さく)ロウ［勞作］(名) ㊀ほねをりわざ。㊁ほねをりはたらくこと。
(らう-し)ロウ［老師］(名) としよりたる師匠。
(らう-し)ロウ［牢死］(名) 入牢中に死去すること。
(らう-し)ロウ［老死］(名) 年おいて死ぬること。
(らう-し)ロウ［浪死］(名) 流浪して死ぬること。
(らう-し)ロウ［浪士］(名) 一定の事(ツカ)ふる主なき士。祿に離れたる士。(浪人)。
(らう-じつ)ロウ［老實］(名) 事になれてまめやかなること。
(らう-しや)ロウ［牢舍］(名) ひとや。牢屋。
(らう-しや)ロウ［老者］(名) としより。
(らう-しやう)ロウシヨウ［勞症］(名) 結核性の肺病、肺結核。勞咳。肺勞。
(らう-しやう)ロウシヨウ［老將］(名) としとりたる大將。又、經驗を積める大將。
(らう-じやく)ロウ［狼籍］(名) 滅門と同じく萬事に凶なりといふ日。
(らう-じやく)ロウ［老弱］(名) としよりとこどもと。
(らう-じゆ)ロウ［老手］(名) 老練せる人又は手なみ。
(らう-じゆ)ロウ［老樹］(名) おいき。
(らう-じゆ)ロウ［老儒］(名) としとりたる學者。又、老練の學者。
(らう-じゆく)ロウ［老熟］(名) 年久しく經驗を積みて、其物事に熟練すること。
(らう-しよく)ロウ［老職］(名) 幕府にて大老・中老などの稱。又、大名にて家老・中老などの職。
(らう-しん)ロウ［勞神］(名) 心をくるしむること。心配。
(らう-しん)ロウ［老身］(名) おいのみ。
(らう-しん)ロウ［老臣］(名) ㊀老功の臣。又、老年の臣。㊁家老。
(らう-じん)ロウ［老人］(名) としよりたる人。おきな。——せい［老人星］(名) 南極星。
らう・す ロウスル［勞］(せしすすれせよ)(自、さ變) 骨折る。はたらく。
らう・す ロウスル［勞］(せしすすれせよ)(他、さ變) ㊀骨折らす。わづらはす。「腳を—」。㊁ねぎらふ。
＋らう・ず ロウズル(ぜじずずれぜよ)［領］(自、さ變)「りやうず」の轉。
(らう-すゐ)ロウ［老衰］(名) 老い衰(オト)ふること。
(らう-せい)ロウ［老成］(名) ㊀おとなぶること。㊁經驗を積みて成りとゝのふこと。——じん［老成人］(名) 老成の人。
(らう-せい)ロウ［牢晴］(名) よくはれたる天氣。(朗晴)。
(らう-せい)ロウ［老生］(代) 老人の自稱。
(らう-せう)ロウシヨウ［老少］(名) としよりとわかものと。——ふぢやう ロウシヨウフヂヤウ［老少不定］(名) 老いも少きも死期は豫知すべからざることをいふ。
(らう-ぜき)ロウ［狼藉］(名) ㊀(狼の草を藉(シ)きて寐たるあとの非常に亂るゝよりいふ)道具などの散り亂れたること。とりちらかしてあること。「杯盤—」。㊁亂暴。暴行。——もの［狼藉者］(名) 亂暴もの。暴行するもの。
(らう-せんせい)ロウ［老先生］(名) としとりたる先生。
らう-ソウ ロウ［老僧］(名) としとりたる僧。
(らう-そく)ロウ［老足］(名) 老人のあゆみ。
(らう-たい)ロウ［老體］(名) 年よりの身。
(らう-だい)ロウ［老大］(名) 年とること。わかざかりをすぎておとろふること。
(らう-たいじん)ロウ［老大人］(名) ㊀としとりたる男子の敬稱。㊁他人の老いたる父の敬稱。
(らう-たいこく)ロウ［老大國］(名) 繁榮の時期は已に過去に屬して、目下は衰へたる大國。
(らう-だう)ロウドウ［郎黨］(名)「らうどう」(郎等)に同じ。
＋らう-た-が・る ロウ(らりるるれれ)(他、ら四) かはゆがる。
ラウ-だけ［羅宇竹］(名)「ラウ」に同じ。
＋らう-た・し ロウクシ(くしくしけれ)(形、一) いたはし。かはゆらし。愛らし。

(らう-ぢゆう)ロウ［老中］(名) 德川幕府の職名、將軍に直隸して幕政を總理す、譜第大名を以てこれに任じ、人員は大抵四五人なり。
(らう-ぢよ)ロウ［老女］(名) 武家の奧向の侍女の長。
(らう-てつ)ロウ［老耋］(名) おいぼるゝこと。
(らう-どう)ロウ［郎等］(名) 家の子。けらい。郎黨。
(らう-どう)ロウ［勞働］(名) ほねをりはたらくこと。體力を使用してはたらくこと。——くみあひ イア［勞働組合］(名) 勞働者が勞働者社會の改善又は利益を圖ることを目的として組織せる組合。——しや［勞働者］(名) 勞働して生活を立てゆくもの。骨折仕事を業とするもの。——もんだい［勞働問題］(名) 勞働者社會に關する問題、殊に勞働者と資本家若しくは企業家との間に起る勞働者の待遇に關する社會問題。
(らう-どく)ロウ［朗讀］(名) 聲高くよみあぐること。——えんぜつ［朗讀演說］(名) 草稿を朗讀する拙き演說。
らう-なぬし ロウ［牢名主］(名) 德川時代に、牢內の取締をなす囚人の長。
(らう-にやく)ロウ［老若］(名) ㊀としよりとわかきこと。㊁老中と若年寄と。
(らう-にん)ロウ［浪人］(名) ㊀浪士に同じ。㊁一定の勤先(ツトメサキ)なきもの。㊂流浪する人。
らう-ぬけ ロウ［牢脫］(名) 牢やぶり。(脫監)。
(らう-ねん)ロウ［老年］(名) 老いたる年。
(らう-のう)ロウ［老農］(名) 農業上の知識に富み且つ實際に熟練なる農民。
(らう-ば)ロウ［老婆］(名) 老いたる女。老女。——しん［老婆心］(名) 深切すぐる心。
(らう-はい)ロウ［老廢］(名) としとりて役に立たざるやうになること。
(らう-はい)ロウ［老輩］(名) としよりども。
(らう-ばい)ロウ［狼狽］(名) あわてふためくこと。うろたへさわぐこと。
らう-ば-の-ち ロウ［老馬智］(名) ㊀支那の古昔、齊の管仲が、山中にて道に迷ひたるとき、老馬を放ちて其後に從ひて道に出でたりといふ故事。㊁轉じて、夫々物事に久しくたづさはりたるもののすぐれたる智。
らう-ばらひ ロウバライ［牢拂］(名) 牢屋の罪人を殘らず解き放つこと。
(らう-ばん)ロウ［牢番］(名) 牢屋の番人。
(らう-ひ)ロウ［浪費］(名) ㊀みだりにつかひつひやすこと。㊁みだりに金錢をつひやすこと。——しや［浪費者］(名) みだりに資產を浪費するもの。
(らう-びやう)ロウビヨウ［老病］(名) 老衰より來たれる病氣。
(らう-ふ)ロウ［老父］(名) ㊀としとりたる父。㊁としより。老人。
(らう-ふ)ロウ［老夫］(名) としとりたる男子。おきな。
(らう-ふ)ロウ［老婦］(名) としとりたる女子。ばゞ。
らう-ぶち ロウ［牢扶持］(名) 牢內の囚人にあたふる食物。
らう-ブツ ロウ［老佛］(名) 老莊の敎と佛陀の敎と。
(らう-へい)ロウ［老兵］(名) としとりたる兵士。
(らう-べう)ロウビヨウ［廊廟］(名) 天下の大政の出づる所。朝廷。
(らう-ほ)ロウ［老舖］(名) 歷代つゞきし商家。しにせ。
(らう-ほ)ロウ［老圃］(名)「らうのう」(老農)に同じ。
(らう-ぼ)ロウ［老母］(名) 年寄りたる母。
(らう-ぼく)ロウ［老僕］(名) としよりのつかひをとこ。
(らう-ぼく)ロウ［老木］(名) おいき。
(らう-まう)ロウモウ［老耄］(名) おいぼるゝこと。又、おいぼれたる人。
(らう-や)ロウ［老爺］(名) としより。おやぢ。
らう-や ロウ［牢屋］(名) 囚人をつなぎとゞむる所。ひとや。(獄屋)。
(らう-やく-にん)ロウ［牢役人］(名) 獄屋をまもる役人。
らう-やぶり ロウ［牢破］(名) 囚人がひそかに牢をぬけ出づること。又、其ぬけ出でたる囚人。らうぬけ(脫檻、破獄)。
(らう-ゆう)ロウ［老雄］(名) としとりたる英雄。
(らう-らい)ロウ［老來］(副) としとりてこのかた。
(らう-らう)ロウロウ［浪浪］(名、副) さまよひありくさまにいふ語。
(らう-らう)ロウロウ［朗朗］(名、副) ほがらかなるさまにいふ語。「音吐—」。
＋らう-らう・し ロウロウシ(しくしくしけれ)［勞勞］(形、二) 物事に巧者なり。うまし。
(らう-らく)ロウ［牢落］(名) ㊀はるかなること。㊁まばらなること。
(らう-り)ロウ［老吏］(名) ㊀年とりたる官吏。㊁久しく經驗を積みて熟練せる官吏。
(らう-りよく)ロウ［勞力］(名) ㊀はたらくこと。ほねをり。㊁［經］財の生產を目的とする心力及體力の活動、見方によりてこれを精神的と肉體的とに、有形的と無形的とに、自由的と不自由的(奴隸の類)とに、獨立的と雇傭的とに、生產的と不生產的とに分類し、又、發明及發見・採取・粗製品の生產・製造工業・運搬及商業・勵勞に區別す。——しや［勞力者］(名) 勞力に從事するもの。——てき-きかい［勞力的機械］(名) 勞力者の熟練に代はる機械、例へば織物機械・紡績機械等これなり。

(**らうるゐ**（ロウ）[老羸](名) 年とりてよわりおとろふること。

(**らうれい**（ロウ）[狼戾](名) ㊀狼の如く慾ふかく理にもとること。㊁散りみだるゝこと。

(**らうれん**（ロウ）[老練](名) 久しく經驗を積みものごとになれてたくみなること。(老功、熟練)。——**か**[老練家](名) 老練せる人。

廿**らうろう**（ロウロウ）[牢籠](名) くるしみこまること。

ラオ[羅宇](名) 「ラウ」に同じ。

ラカン[臘乾](名) 燻(ス)べたる豚の股の肉。

ラカン[羅漢](名) 「アラカン」(阿羅漢)の略言。——**しよう**[羅漢松](名) 【植】「いぬまき」に同じ。——**はく**[羅漢柏](名) 【植】「あすはひのき」に同じ。——**まき**[羅漢槇](名) 【植】「いぬまき」に同じ。

(**らき**[邏騎](名) みまはりの騎兵。

(**らぎやうへんかく**（ギョウ）[良行變格](名) 【文法】語尾變化の變格の一、「ら・り・り・る・れ・れ」と活用するものにして、「あり」(有)・「をり」(居)・「はべり」(侍)・「いますかり」(在)の四語あるのみ。

(**らく**[酪](名) 牛・羊等の乳汁を製煉せるもの。「ミルク」にゆうのかゆ。

(**らく**[樂](名) ㊀心又は身に苦痛を感ぜざること、心身の平和。㊁おもしろきこと。たのしきこと。㊂容易なること。たやすきこと。㊃「らくやき」の略言。㊄芝居其他興行物の千秋樂。(東京の方言)。㊅死ぬること。

(**らくいん**[落胤](名) おとしだね。

(**らくいん**[烙印](名) やきいん。

(**らくいんきよ**[樂隱居](名) 安樂に隱居して世を送ること。又、其人。

(**らくえい**[落英](名) おちたるはなぶさ。

(**らくえき**[絡繹](名) 人馬などのつらなりつゞくこと。

(**らくえふ**（ヨウ）[落葉](名) 脫落したる木葉。おちば。——**ぼく**[落葉木](名) 【植】冬期に至りて落葉する木、即ち櫻・梅などの如きこれなり。

(**らくか**（ラッ）[落下](名) おちくだること。おつること。——**のていりつ**[落下の定律](名) 【理】物體の落下に關する定律、如何なる物體も眞空內にては同じ速度にて落下し、又、物體の落下する距離は其時間の平方に比例すること。

らくがき[落書](名) 門又は壁などに戲れにいたづら事をかくこと。又、其かきたる書畫。

(**らくがん**[落雁](名) ㊀空より地に下る雁の列。「堅田の—」。㊁一種の菓子、炒粉に砂糖を加へ、型に入れて種々の形に製したるもの。(炒米糕)。

(**らくき**（ラッ）[落暉](名) 入り日。ゆふ日。

(**らくきよ**（ラッ）[落居](名) ㊀おちつくこと。㊁裁判などの落著。

(**らくきやう**（ラッキョウ）[樂境](名) たのしき境遇。安樂なる地。

(**らくく**（ラッ）[落句](名) 漢詩の起句又は結句の稱。

(**らくくわ**（ラッ）[落花](名) 散る花。——**しやう**（ヨウ）[落花生](名) 【植】「なんきんまめ」(南京豆)に同じ。(落地生)。——**りうすゐ**[落花流水](名) 男女互に相思ふ情のあること。

(**らくぐわい**[洛外](名) 京都の市外。洛中の對。

(**らくくわん**（ラッ）[落款](名) 書畫に記入する筆者自筆の名を志るし若しくは雅號の印をおしたるもの。

(**らくくわん**（ラッ）[樂觀](名) ㊀快樂なりと觀ずること。又、容易なりと觀ずること。㊁樂天觀。

(**らくげつ**[落月](名) 西に入る月。

(**らくご**[落語](名) おとしばなし。——**か**[落語家](名) はなしか。

(**らくこう**（ラッ）[落紅](名) 紅なる落花。

(**らくさ**[落差](名) もの、落下する高さ。

(**らくさい**[樂歲](名) 豐年にしてたのしきとし。

(**らくさう**（ソウ）[落想](名) 「ちやくさう」(着想)に同じ。

(**らくさつ**[落札](名) 入札にて、其物事が手に入ること。札の落つること。

(**らくじ**[落字](名) ぬけ字。脫字。

(**らくじつ**[落日](名) いりひ。「孤城—」。

(**らくしやう**（ヨウシ）[落掌](名) 手に入ること。(おもに書翰にいふ)。(落手)。

(**らくしやう**（ヨウシ）[酪漿](名) 牛羊などの乳汁。

(**らくじやう**（ヨウシ）[落城](名) ㊀敵に城を攻めおとされたること。城の落つること。㊁自己の住居を維持し得ずして人手に渡すこと。

(**らくしゆ**[落首](名) 落書の一首の意。嘲弄又は諷刺の意を含める歌の落書。

(**らくしゆ**[落手](名) 手に受け取ること。落掌。

(**らくしよ**[落書](名) ㊀おとしぶみ。㊁嘲弄又は諷刺の意を書きて市の要所に立ておくふみ。㊂らくがき。

(**らくしよく**[落飾](名) 髮をそりおろして佛門に入ること。

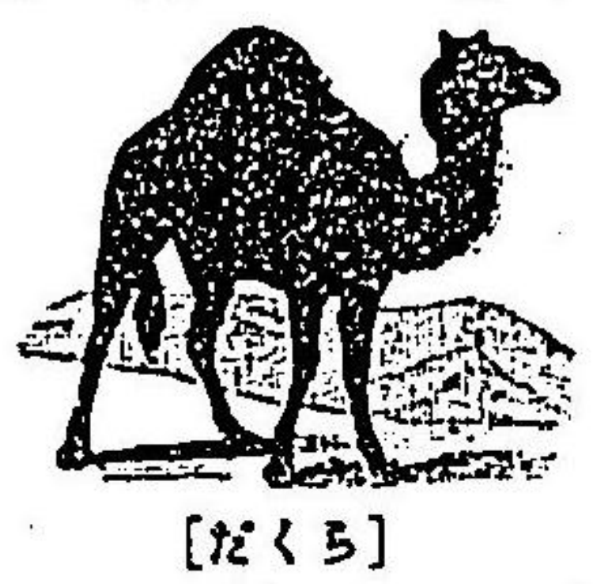
(**らくせい**[落成](名) 工事のできあがりたること。——**しき**[落成式](名) 工事のできあがりたるをいはふ式。

(**らくせう**（ヨウシ）[落照](名) いり日。

(**らくせき**[落籍](名) 名前を除き其仲間より身を引くこと。おもに妓女等の妓籍より去るにいふ。

(**らくせん**[落選](名) 選擧におつること。當選せざること。

(**らくだ**[駱駝](名) 【動】偶蹄類中反芻類に屬する獸、大形にして長頭長足なり、性溫順にして力強く使役に適し、又、よく數日の渴を忍び得るが故に、沙漠の旅行者には最も須要なり、二種あり、一は「アフリカ」及「アラビヤ」に產するものにして、脊上に一個の肉峰ありこれを獨峰駝といふ、一は中央「アジア」に產するものにして、脊上に二個の肉峰ありこれを兩峰駝といふ、又南「アメリカ」に產するものに肉峰の無きものありこれを無峰駝といふ。


[らくだ]

(**らくたい**[落體](名) 落下する物體。

(**らくだい**[落題](名) 題意に叶はぬ和歌。(傍題)。

(**らくだい**[落第](名) 試驗に合格せざること。試驗を志くじること。(下第)。

(**らくたく**[落托](名) さまよひ來りてとゞまりすむこと。

らくだずみ[駱駝炭](名) どがまずみ。

(**らくだつ**[落脫](名) もるること。ぬくること。「と。

(**らくたん**[落膽](名) 氣をおとすこと。力をおとすこと。

(**らくち**[樂地](名) 安樂なる場所。たのしきところ。「名敎の中自ら—あり」。

(**らくちやう**（チヨウ）[落丁](名) 書物の紙の脫(ヌ)けおちたるもの。(脫個、欠紙)。

(**らくちやく**[落着](名) 物事の決局つくこと。きまりてをさまること。決定。決着。(完結)。

(**らくちゆう**[洛中](名) 京都の市中、洛外の對。

(**らくつゐ**[落墜](名) ㊀おつること。㊁品行の退轉すること。だらく。

(**らくてつ**[烙鐵](名) やきごて。やきがね。

(**らくてん**[樂天](名) 自己の境遇に安んずること。物事に頓着せざること。——**か**[樂天家](名) 樂天なる人。——**くわん**[樂天觀=Optimism](名) 【哲】人生及世界は最も善なるものにして最も快樂なりとする見解。——**しゆぎ**[樂天主義](名) 前條に同じ。——**てき**[樂天的](形) 樂天なるにいふ。

(**らくど**[樂土](名) 「らくち」(樂地)に同じ。

らくね[樂寐](名) 樂々といぬること。

(**らくのう**[酪農](名) 獸類の乳汁をしぼることを業とする農。

(**らくば**[落馬](名) 馬上より落つること。

(**らくばい**[落梅](名) ふえの音。

(**らくはく**[落魄](名) おちぶるゝこと。(零落)。

(**らくはく**[落剝](名) おちはぐること。

(**らくばく**[落莫](名) さびしきこと。

(**らくはつ**[落髮](名) 髮をそり落とすこと。

(**らくめい**[落命](名) 命を落とすこと。死ぬこと(損「命」)。

(**らくやう**（ヨウ）[洛陽](名) (支那の唐の代の帝都即ち支那の河南省・河內府の古稱をかりていふ)みやこ。京都。

(**らくやう**（ヨウ）[落陽](名) 入り日。

(**らくやうくわ**（ヨウ）[落葉花](名) 【植】「かはらなでしこ」に同じ。

らくやき[樂燒](名) (豐太閤が京の聚樂第にて、朝鮮の陶工朝四郎に燒かせ、聚樂の二字を底に印せしめたるより起る)陶器の一種、手づくねの土燒なるもの、多くは茶碗にして色白く質脆し。

(**らくらい**[落雷](名) 空中の電氣と地上の電氣との放電、即ち多量に電氣を含蓄せる雲の下降して地面に近づくとき、感應作用によりて地面に異極の電氣生ずるによる、家屋又は樹木などの其打擊を被るは、其發電體に接近せるが故なり。

(**らくらく**[樂樂](名、副) 安樂なるさまにいふ語。

(**らくらく**[落落](名、副) ㊀相入れざるさまにいふ語。㊁まばらなるさまにいふ語。㊂ひろきさまにいふ語。㊃小節に拘はらぬさまにいふ語。

(**らくるゐ**[落淚](名) 淚をおとすこと。(流涕)。

(**らくわ**[裸花](名) 【植】萼及花冠を缺く花、はんげしやうなどの花はこれに屬す。

(**らくゑん**[樂園](名) 安樂なる所。

ラケット[Racket](名) 「ローンテニス」などにて球を打つ具、杓子狀をなし、綠は木にて枠をつくり、中は筋にて網を張れり。

(**らこく**[羅縠](名) うすもの、あやおり。

(**らこく**[羅國](名) 七種香の一、香あはせに用ふ。

らし（しく・しし・しき・しけれ）(接尾) 體言に添ひて、形容詞となし、其樣なりの意をそふる語。「男—」。

廿**らし**（しし・しき）(助動) 推測の意を示す語。「夏來たる—」。

(**らしき**[羅織](名) いろ〳〵にして罪におとしいるゝやうにつくりかまふること。

(**らしよくぶつ**[裸子植物](名) 【植】胚珠が子房內に存せずして裸出する植物の稱、其花粉は受粉の際直ちに胚珠の上に附着す、まつ・そてつ等これに屬す。

ラシヤ[羅紗](名) (「ホルトガル」語 Raxa)もと西洋より舶來したる毛織物、羊毛にて厚く密に織りたるもの。(哆羅絨)。——**めん**[羅紗綿]